THE CENTRAL REVIEW

中央公論

一年一回定期增刊

『世界平和と人類愛』號

第三十七年　第八號　第四百十一號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は
腦病良藥 健腦丸 を要求す

主効
腦充血 神經痛 頭痛 眩暈
腦膜炎 腦貧血 耳鳴 健忘
逆上症 卒中 中風 便秘

特長
逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を增進す。

改正價藥
五回分 參拾錢
四日分 六拾錢
一週分 壹圓
二週分 壹圓九拾錢
三週分 貳圓六拾錢
五週分 四圓
十週分 七圓

全國各藥店に取次す

本舗 大阪市順慶町 東京市箔屋町 丹平商會藥房

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



湖坐　　錢川帆反作

大正十一年

中央公論

七月十五日發行

一年一回定期増刊

「世界平和と人類愛」號

第卅七年第八號

第四百十一號

世界平和と人類愛

世界平和は久しい間空想家の夢とせられて居つた。何となれば人類の鬪爭的本能は結局何としても抑え難いから。また世界平和は久しい間人類の進步發達に好ましからずともせられて居つた。何となれば凡ての進步發達は彼此烈しく爭ふことに依てのみ遂げらるゝものだから。要するに世界平和は、或る人々の期待するが如く實現するとせば、そは死的靜寂の狀態で、活きた人間社會にあり得べきものではない。斯んな考を有つて居る人は今日でも幾らかはある。

鬪爭本能說の妄は今更論ずるまでもあるまい。進步は爭に依てのみ遂げらるゝといふは、進化論の淺薄なる解釋であると共に、競爭と鬪爭とを混同したるの譏を免れない。爭は進步の母だといふ事が必しも殺伐なる戰爭を推奬する意味でないことは、恰度人の軀が食べ物に依て養はるゝからとて何を喰つてもいゝと謂ふに非ると同じである。

さう理窟は分つても戰爭謳歌論は久しく地上より消え去らなかつた。世界大戰以前まで、此の考は色々の形に於て所謂列強の國家主義者から唱へられたのである。戰爭を以て國家的擴張の唯一の捷徑と信ずる連中は、自己の執る手段に理論の裏付けをする爲に如何に苦心したかは今更說くまでもなからう。而して今度の戰爭は、戰爭の原因は、人性の自然に在るのでなく又社會進步の必然に存するのでもなく、寧ろ之等少數の軍國主義者の禍心にあることを最も雄辯に證明した。今や我々は久しい間の謬妄から醒めて眞の人性の自然に復へり、世界平和の實現に依て進步と幸福とを圖るべきの新しき熱望に燃えて居る。

併し世界平和を策する者は、戰爭讚美論の旺なりし時代に於ても、既に少くはなかつた。唯時勢が時勢だけに其の聲は左まで高きを得なかつた。啻に其の聲の高からざりしのみならず、其の主張も孰れかといへば消極的たるを免れなかつた。即ち當時の所謂平和論策は、專ら如何にして戰爭を防止すべきや又如何にして戰爭の遂行に人道的精神を注入せしむべきやに集注されて居つたのである。前者の部類に在ては軍備制限・仲裁裁判が最も詳しく論究せられ、後者の部類では戰時國際法規が異常の發達を見た。あの軍國主義的競爭の猛烈を極めし時代に於て、消極的ながら此種の論策の熱心に究明せられしに觀ても、亦以て人間の本性の如何に平和を熱求せしかを想像する事が出來やう。

人類の平和的要求はこの消極的態度からやがて積極的平和實現の途に突進する樣になる。是亦考へて見れば自

然の成行だ。而して這般の積極的努力の目標は何かと云ふに、そはこの世界に有機的組織を與ふるといふことである。混沌なる弱肉強食の無政府的狀態を脫して秩序ある有機的社會に建て直すことである。力の支配を變じて道理の支配たらしむることである。此の考の最も雄辯なる代表者は蓋し國際聯盟の思想であらう。今日の國際聯盟の組織そのものは未だ甚だ不完全にして到底以上の期待に應じ得ぬものかも知れない。けれども國際聯盟の如きを全然不要とする考の殆んど絶無に近いことだけは疑はない。今の國際聯盟をいゝとする者も又之を不完全だと非難する者も、要するに世界に有機的組織を與へんと欲するの熱情に出づることは、聊か以て人意を强うするに足るものあるを覺へる。

以上の考は固より、戰爭以前にもあつた。併し戰爭後に於て之が世界全體の共同の熱望となつた事は吾人の看過し能はざる所である。併し退いて考ふるに、この世界的有機組織の確實なる實現は、只漠然たる熱望からばかりでは出て來ない。この熱望は固より新なる努力の原動力となり以て目的の進行を大に促すものではあるが、複雜なる人生に於て而かもその國際的生活の上に、其の實現を誤りなく期する爲には、なほ物的心的の兩面に於て相當の條件が成り立つて居なければならぬ。之等の點は詳細なる解說を要し單純には云へぬのだが、其の要點を約言すれば、一は現代人類の生活事實が順次其の運營の範圍を國際的に擴め、嫌でも應でも彼此相倚り合ふことの出來ぬ關係が出來上ることであり、もう一つは之を作つて世界の人々の間に互に自他を人として親み合ふといふ感情の實際に起つて來ることである。赤の他人よりも隣り同士の方が漫りに喧嘩の出來ぬものなるが如く、又同じ隣り同志でも互に敬愛し合ふ間柄には一時の誤解に依て喧嘩する様の憂なきが如く、實際的利害の一致と互の心の親しみと、兩つ乍ら兼ね備はるものであるに至つて、始めてこの兩者の作る社會生活は確實に有機的となるのである。而してこの見地から今日の世界を見れば如何。

大戰動揺の餘波を受けて世界の各方面に不安の波は今日なほ高い。併し今日の世界の人に、彼此限りなく相爭ふことは結局生活の事實之を許さない。現代人の物的生活が如何に國際的に錯綜して居るかは想像の外である。之等の關係は戰後の動揺が鎭靜に歸すると共に段々切實に現はれ來るだらう。然らば大體に於て物的關係の方面は所謂世界平和の實現に決して不適當ではないと謂はなければならぬ。故に若し吾人の今後大に努めねばならぬ方面ありとせば、そは心的方面の開拓でなければならぬ。世界の有機的組織の心的要素とは、取りも直さず人類愛の鼓吹並に訓育だ。本誌が玆に世界平和と人類愛とを說く所以は、私かに此の點に於て新時代の進運に貢献せんが爲に外ならぬ。

中央公論



第卅七卷第八號
「世界平和と人類愛」號
第四百十一號

世界平和の理想に因みて諸家の文化主義を檢討す

田中王堂

一、緒言

ウヰリヤム・ジエムスに一つの論文がある。其れの趣意は次のやうなものである。

或る夏、彼れは『シヨトウクワ運動』の招聘に應じて、シヨトウクワ湖邊に催ほされた夏期大學に講師として出席し、そこに數日滯在したことがあつた。各地よりこゝに集り來たる人々の殆ど總べては修養あり、品性高き者である。こ

の山紫水明の勝地に在つて、彼等は知力の糧として洗練された講義の聽聞に彼等の晝間を費やし、美感の及び社交欲の糧として美しき音樂と興深き談笑との享樂に彼等の夜間を過すのである。彼等がそこにさうして起臥する間、彼等の生活には、何等の誤解も、軋轢も、爭鬪も、苦痛もない。たゞ見出だされるところのものは、好感と、歡喜と、平和と、美だけである。彼等の生活は蜜の如く甘く、溪流の如く清く滑らかに流れて居る。然しジエムスはかゝるショトウクワ生活に滿足したか。わたくし共が遠き未來に期待する黄金世界のモデルとして共れの組織を肯定したか。否！　彼れは彼れの生活に意義と興味とを加へるに與かつて力ある彼れの活氣をはたらかせるには、共れが餘りに無難に、餘りに圓滑に、餘りに散文的たるのに對して、彼れは一種の懶さを感ずることを禁じ得なかつたのである。そして、若しわたくし共が生活改善の名の下に努力して居る一切の事が未來に於てかゝる組織を有つた生活を地球大に實現することにあるとしたならば、わたくし共の努力が果して正しき目的のために費やされて居るか、どうかを疑ひ始め、悄然自失せざるを得なかつたといふのである。

彼れはこの懷疑と失望とに襲はれながら、或る大都會に著した。彼れの眼は、ふと、今、建築の途中にあつた壯大なる一つの建物に向けられた。雲際に聳えたその足場の上には數多の職工が危險を冒して勇敢にはたらいて居た。彼れはこの光景を見て、まだ近世文明も全くヒロイズムを厭殺して了ふに至らなかつた、ヒロイズムは近世文明の下にも尙ほ依然として適當な形を取つて存續することを知つて、さきの懷疑と、失望とより、彼れは精神的に蘇生した。然し、近世文明の中に偶彼れが見出だしたヒロイズムは單に生計のためのものであつた。ヒロイズムが單に生計のためにはたらくだけでは、わたくし共に取つて好ましき生活を發展する動力として不十分である。若しわたくし共にして進んで共れをして理想のためにはたらくやうに爲向けたならば、そこに、始めて、近世文明の中にわたくし共に取つ

て意義ある生活が實現されるであらうとの希望を述べて、彼れはあの文章を結んで居るのである。

わたくしの理會よりすれば、こゝにジエムスが、俗人の意見に隨つて、無雜作に生計のためといふことと理想のためといふこととの間に本質的の差別を立てて居ることの中には、確かに大なる誤謬が含まれて居る。然し、今はそんな細論には立ち入らぬこととして、兎に角、わたくし共が國民的に、若しくは、國際的に、一層理會あり、一層協同ある生活を實現しようと努力して行くに方つて、わたくし共の計畫の誤算と、わたくし共の努力の誤用とのために、尠しでもヒロイズムのはたらく機會が狹められ、其れが向つて動く對象が減少することのあり得るのを、彼れが懸念して居るのには、わたくしも極めて同感である。

誤解や、爭鬪や、迫害は(尠なくとも現在の文化の程度よりすれば、)社會生活の疾患より生ずる徵候と見ねばならぬ。其等は恐く勢力の誤用と亂用とより生ずるのである。其等の行はれた後に見出だされるものはあらゆる種の消耗と破壞との外何物もない。此等のものは其れ自づからに惡であるに定まつて居る。されば、何人にしても生活改善の事業に携はる者は個人間に於いて、若しくは國民間において、誤解と、爭鬪と、迫害との生ずる原因を出來るだけ經濟的の方法を以て出來るだけ速やかに、除却することを志し、且つ、努めねばならぬ。然し、過去に於てヒロイズムが顯著にはたらいたのは、(積極的にと消極的にとの相違こそあれ、)概して誤解と、爭鬪と、迫害とに關聯した場合に於いてであつた。して見ると、生活改善の事業が成就される度合に隨つて、だんだんにヒロイズムのはたらく機會が狹められ、其れが向つて動く對象が減少して行つて、之れがために、わたくし共の生活はその活氣と光彩とを失ふことになるであらうとジエムスの懸念したのにも一分の理由はあるやうに思はれる。

世界平和は如何にも美しき、隨つて、わたくし共の力の及ぶ限り、出來るだけ經濟的に、出來るだけ速かに實現され

なければならない理想である。然しながら、若し其れがわたくし共の計畫次第、努力次第で、一つ以上の樣式に於て實現され得るものであるならば、其等の間に選擇の工夫を施すことが、わたくし共に取つて重大なる任務となる種の理想である。言ひ換へれば、世界平和は其れの輪廓だけ整へば、其れの內容はどうであつてもよいといふ種の理想ではない。之れが實現のためには、わたくし共の全心を注ぐの價値ありとわたくし共の信ずる種の世界平和は、どういふ意味からしても、一つの pax Romana であつてはならない。それは其れの支持と發展との申合せに入り來たる總べての國民が、各、他より目的として取り扱はれると同時に、他に對つては手段となり、又、手段となることを喜ぶ種のものでなければならない。嘗てスピノザは『この世の中で善と呼ばれるものは、或る一人が其れを多く有てば有つだけ、それだけ多く、總べての他人が其れに依つて利益するものでなければならぬ。斯くの如きものは唯善行だけである』と言つた。之れが實現のためにわたくし共の全心を注ぐの價値ありとわたくし共の信ずる種の世界平和は、其れの支持と發展との申合せに入り來たる總べての國民は、各、其れに固有の卓越性を發揮し得、相互に其れを發揮することに便宜を與へ合ふものでなければならぬ。斯かる道德の共和國に於ては、敵意より生ずる爭鬪はだんだんに減ずることになるが、好感より來たる矜持と競爭とはだんだんに熾んになるべき筈である。そこに行はれる世界平和はヒロイズムを失つた灰色の世界平和ではなくして、ますます其れのはたらく機會が擴められ、其れが向つて動く對象が加增された生氣潑溂たる綠色の其れである。

今日に於ける、及び、特に今後に來たる文化生活に在つては、如何なる個人も或る國民の一員となつて始めて彼れの個人の完成を期することが出來る如く、如何なる國民も世界共和國の一員となつて、始めて其れの國民性を修練することが出來るのである。この事實を逆に、そして一層切實に言ひ換へれば、世界共和國の性質は個々其れの獨自の特徵を

保ちながら國際化された各國民の國民性の交徹より構成され、或る國民の性質は個々彼れの獨自の特徴を保ちながら國民化された各個人の個性の錯綜より融成されて居るといふことになるのである。して見ると、正しき眞の個人主義の基礎の上に立たざる國民主義の誤謬であることは、正しき國民主義の上に立たざる國際主義の空虚であると同様である。徹底すれば、個人主義は世界主義にならなければならないし、溯源すれば、世界主義は個人主義であらねばならぬ。つまり、個人主義も、國民主義も、國際主義も、其れの志向よりすれば一つのものである。唯、其れが發動するに當つて其れの異なる側面が力説されるに隨つて、三つのものとして取られるのに過ぎない。

かういふ單純な理由からして、眞に文化の名に相當するほどの文化は必然に個人の生活を潤澤し、國民の生活を浸透し、延いて國際間の生活にまで横溢するものでなければならぬ。世界大戰の後を承けて、遽然、個人として、國民として、世界共和の市民として、おのれの聰明と德性との案外に低級であつた事實に目覺めた結果として、人類中のやゝ思慮深き部分に屬する人々が文化の改造と普及とを以て人類に取つての戰後の救濟と見得するに到つたのは極めて自然であると謂はねばならぬ。

こゝに、わたくしは世界平和の理想に因んで、我が國に於て最近一兩年に亘つて公表された諸家の文化主義に含まれた假定と論理とを檢討しようと企てた。そして、わたくしはこの企の世人に對つて決して突梯の觀を呈するものでないことを確く信ずる者である。

二、本論

上、豫設

一、天才の事業の特徴

嘗て、ジヨオジ・サンタヤナは興味津々たる『三哲學詩人』と題する一巻の書をものし、歐洲に於ける上古、中世、近代の各が産出した詩人の中より三人を選出し、彼等をして彼等が屬する時代の生活理想を代言せしめようと試みたのであつた。この目的より、彼れは（彼れの用語例に隨つて、）上古の生活理想たる自然主義の代言者としてリユウクレシヤスを採り、中世の生活理想たる超自然主義の代言者としてダンテを採り、最後に近代の生活理想たるロオマンテイシズムの代言者としてゲエテを採つたのであつた。サンタヤナの意見に據れば、（そして、其れは何人と雖も正しきものとして認容しなければならぬものであるが）自然主義も、超自然主義も、ロオマンテイシズムも、それぞれ、一つの時代の生活理想である以上は、そして、リウクレシヤスと、ダンテと、ゲエテとが、各、等しき程度に於いて、眞劍に、忠實に、且つ、美しく彼等の屬する時代の生活理想を代言して居る以上は、リウクレシヤスが自然主義の詩人であり、ダンテが超自然主義の詩人であり、ゲエテがロオマンテイシズムの詩人であるといふ單なる事實のために、彼等の間に價値の優劣を定めるわけに行かぬ。のみならず、彼等の志向に於ても、俗人が輕卒に判斷して了はうとする程度以上に、一層も、二層も、互に提撕し、啓沃し、補塡し、一致するところがあるといふのである。

人間の性情や、協同生活の構成が大分明瞭になつて來た今日に於ても、天才の特徴に關して大なる謬見の行はれて居

るのをわたくしは見るのである。それは他でもない。天才の事業の特徴は、其れが一般的であるところに在るといふ見解である。之れに反して、わたくしは、それは、其れが個性的であるところに在る、若し凡人と天才との間に確かに相異があるならば、それは後者が前者に比して遙かに個性的であるところに在ると理會する者である。大賢チルゴオは知識の發展する順序の、それが（當時の一般の信仰に反して、）抽象的より具體的に進むにあることの貴き眞理を發見し、そして、其れを宣言した最初の一人であつた。個人の性格の發展する順序も其れが一般的より個性的に進むにある。

各人は彼れが人間である限り、彼れの根本性情よりして、二重の意味に於て、即ち、內包的の意味に於てと等しく、外延的の意味に於て不可分體、In-dividuum である。わたくし共はこの事實を人間の不可分性（個性）と呼ぶのである。どんな二人の個人を取つて見ても、彼等は彼等の性格に於て、彼等の環境に於て、隨つて、彼等の理想と義務とに於て、お互から異なりながら、各、一次的に、一つの全體を形作つて居る。この事由よりして、彼等は、各、內包的に In-dividuum である。然し、かゝる個人の總べては補助的に助け合ふ目的を以て協同生活に入り來たることに依つて、始めて、彼等の各の生活の志向は完成されるのである。斯くして、異なる個人は和して二次的に更に大なる一つの全體を組織することになる。この事由よりして、彼等は、各、外延的に、In-dividuum である。

個人の性格が一般的より個性的に進むといふことは、彼れがだんだんに明晰におのれの置かれた環境の特質と、おのれの有てる才能の特質とを認識し、だんだんに精密に兩者の整齊を成就する力量を增して行くことに外ならない。そして、天才とはたゞ凡人に優れて、さういふことをなし得る力量を多分に惠まれた人々の謂であつて、天才の價値の一切はそこに見出されるのである。さうすると、天才の事業の意義は、それが如何に彼れの生れた時代の要求を充たし、彼れの屬する民族、若しくは、國民の理想を達するかに依つて判斷されるいである。

天才の從事する事業の性質には、彼等が置かれた環境の相違と、彼等が有てる才能の相違とに從つて、いろいろの相違は生ずるが、又、生ぜねばならぬが、其等の孰づれもは、彼等の個性の發動そのものであるから、必然に其等は彼等の屬する協同團體に對して補角的の作用をなすものでなければならぬ。其等が補角的の作用をなして、始めて、正しき意味に於て、其れの全體のはたらき振りを反映し、全體として其れの理想を代言し、若しくは、代表することが出來るのである。わたくしのこの考察は、天才の事業である限り、其れが政治や立法に關して眞理であると等しく、宗教や哲學に關しても眞理であらねばならぬ。わたくし共は當時に於ける雅典の生活を、猶太の生活を、支那の生活を、印度の生活を、乃至、英國と獨逸との生活を離れて、どうして、どういふ理由で、プレトオや、キリストや、孔子や、釋迦や、ロックやカントの思想が、信仰が、あゝいふ假定に立ち、若しくは、あゝいふ樣式を取つたかを理會することは到底出來ない。勿論、是等の孰づれにも天才の事業の特徴として、（若しわたくし共にして強いてさう觀、且つ、名付けたいならば）普遍性も、永遠性も確かに含まれて居る。そして、是等が含まれて居る限りに於て、わたくし共に取つて教訓とはならないまでも、參考とはなる。然し、是れは、わたくし共が彼等と、及び彼等が對つて說いた彼等の同時代人と共に、或る形に於て、人間性を分受して居る偶然の結果である。

總じて、過去に於て、若しくは、外國に於て完成された天才の事業は、其れが如何に偉大なものであつても、否、其れが偉大であればあるほど、其れの眞の價値の評定は、二つの觀點よりされることが肝要である。其れの一つは、それの出現した時代、若しくは社會の事情を背景としてすることである。其れの他の一つは、わたくし共の時代と社會との理想を標準としてすることである。此等の二つの觀點よりなされた評價を總合して、始めて、わたくし共に取つての其れの意義は正しき歸結を得るに至るといふものである。さうして、始めて、其れは、どういふ風に、どれだけの程度に、

わたくし共が自分の生活方針を工夫する上に參考となるかが判明されて來るといふものである。

最近兩三年に亘つて、わが國の識者に依つて、わが國の文化を改整することと、若しくは、改造することとの大切なることが氣付かれ、彼等の或る者に依つては文化主義なる新語までもが造られ、それぞれ見るところに隨つて、或は、文化の意義が講ぜられ、或は、將來に於てわが國の文化は如何に構成さるべきかが說かれて居る。かゝる企圖其れ自づからにしてわたくし共に取つて意義あり、賞讚すべきものであることとの分明なる以上は、當初、どういふ機會と動機とから影響されて、彼等が其れに著想したかをこゝに立ち入つて吟味する必要はない。然し、現に、其れを高調して居る人の主張とする所說の假定と、推理の方法とに到つては、篤と檢討を試みる必要がある。何故ならば、其等がわが同胞に依つて受け取らるゝ時に、さうされることが多ければ多いだけに、尠なければ尠ないだけに、彼等の理會と覺悟とを感化し薫染するところがなければならぬからである。

苟くもわたくし共の生活の改整、若しくは、改造のために文化主義といふものが唱道されるならば、其れが、最勝義、最廣義、而して、最深義に於て、國民的であることを其れの必須條件とせねばならぬとわたくしは考へる。換言すれば、到徹した理會と、十分なる知識とを以てなされるならば、其れがどんなに學的になさるゝと、どんなに實際的になさるゝとはわたくしの尠しも問ふところではないが、たゞ、其れはどこまでもわたくし共の置かれた環境と、わたくし共の有てる才能とに準據して、わたくし共に取つての特殊の問題の構成となり、其れの解決となされなければならぬと、わたくしは考へる。但しわたくしがかう述べたからといつて、輕卒に、わたくしは、一概に、過去に於て造られた學說を解釋したり、外國に於て行はれる制度を紹介したり、他國民に依つて養成された產業や藝術を輸入したりすることを以て、全然、無意義であるとして居ると取られては困る。眞意は正に反對である。其等をすることが、わたくし共の置かれた環

覺の特質と、わたくし共の有てる才能の特質とを明晰に認識し、兩者を緊密に整齊することに於てわたくし共の力量を增し、わたくし共に取つての特殊の問題を構成し、其れを解決することにわたくし共の知見に資するやうになされるならば、わたくしは其れが、どんなに多くなされても、決して、其れが多きに過ぐるといふことを畏れる者ではない。何故なれば、其れが正しく用ゐられさへすれば、天地の間に、わたくし共を賢くする素質を有たないものの一つとしてあらうとは信じられないから。たゞ、こゝにわたくしが疑問として居るのは、今日、文化主義を唱道して居る者の幾人かが、果して何がわたくし共に取つての特殊の問題であるかを理會して居るか、隨つて、如何なる覺悟の下に、若しくは、方針の下に、過去に於て造られた學說を解釋したり、外國に於て行はれる制度を紹介したり、他國民に依つて養成された藝術を輸入して居るかといふことだけである。

わたくしは、一個の哲學研究者として、是れまで、わたくし共に取つて特殊の解決を要する特殊の問題として、如何にわが國の文化を改整し、改造すべきかを考察することを、わが同胞に對するわたくしの義務の最も重大なる一部として來た者である。是れより先きも、さうして行くことに大した變はりはあるまい。わたくしとしては、わたくしに賦せられた貧弱な天分の許す限り、永くわたくしの感受性を柔軟に保ちながら、ますます、わたくしの品性を重厚にし、わたくしの學殖を雄深にし、わたくしの觀照を豐潤にして、わが同胞のために、出來るだけ親切に、剴切に、常に推移して暫らくも停まざる時代の要求に對應する忠言と助言とを提供するまでのことである。然しながら、わたくしにして一個の哲學研究者として存する限り、或る人々の言說がわが國の文化を改整し、若しくは、改造することを目的としながら、(無論、わたくしの見地よりして)其の目的に相當しないところのあることをわたくしが發見した時には、其等が文化主義の名に於てなされると、否とに拘はらず、わたくしは、わたくしの見地より、其等の偏頗するところを匡正し、其

等の缺陷するところを塡補するの苦しき役を勤めなければならない。

『自分は決して論戰はしない。若し自分の發表する意見に對して反對者があれば、自分は篤と彼れの議論を吟味し、其れが正しいにしても、誤つて居るにしても、自分は、たゞ、次の機會に於て、彼れの批評を參照して自分の文章を書くだけである。』といふ意味のことをマシウ・アアノルドは言つたさうである。兎角、論戰は往々、其れの當事者の感情の上に相方の豫期しない悲しむべき不幸な結果を齎らす危險を伴なふものであるのに、其れを償ふだけの効果を彼等の理智の上に齎らすことの案外に稀なる事實に照しても、アアノルドのこの措置には多分の智慧の含まれて居ることを否むわけにゆかぬ。然し、尙ほわたくしは世の中に論戰の存在の權利を認め、其れが絕大に必要である一つの場合のあることを知る者である。それでは、如何なる場合が其れであるか。其れは、それの題目が（例へば文化に關するものの如く、）主として民衆の叡智の啓發と、彼等の生活の改善とに關するものであるに拘はらず、公衆の側に於て、日夜、雜然、紛然として發表される殊なる意見を取り、其等の各のメリツトに隨つて、自づから、其等の間に一つの卓越性の統階を造り、其れに據りておのれの選擇し、適從するところを定める鑑識を缺いて居る場合である。かゝる場合に在つては、誰れにしても、卓越した思想を懷抱すると自信し得る者は、啻に自分の思想を正しとして其れの原理と組織とを開陳するに止まらず、進んで、彼れが見て以て誤まれるとする他人の思想の假定と、推理の方法とを暴露すべきである。さうすることに依つて、公衆をして、だんだんに獨立して生活の事實を正視し、其等の意義を正解することに嫻れしむべきである。さうすることは、性格の如何に依つては隨分面倒なことでもあり、嫌なことであるに相違ない。然し言論を以て公衆を指導しようとする者の決して等閑に附してはならぬ心懸けであらう。

して見ると、わたくしの友人として、若しくは、同學の士として、その人格に對し、學識に對して、平生、わたくし

が尊敬して措かざる諸家の文化主義に含まれた假定と推理の方法とに關して、之れが檢討を試みるのには洵に已むを得ざるものがあるからである。

二、文化我觀

この論文の主題は、諸家の文化主義の檢討にある。隨つて、わたくしの考察の主力もこの一事に向つて注がれねばならぬ。わたくしはこの種の文章の許す限りに於て、言ひ換へれば、餘りに專門的にならない限りに於て、そこには、諸家の遵奉する文化主義に含まれた假定と推理との批判を方便として、研究的に、檢索的に、わたくしの把持する文化主義の據つて立つ原理を開披して見たいと思ふ。そこには、それぞれ諸家の異なる立場と先入見とより、わたくしの見解と主張とに向けられ得べきいろいろの不滿と非難とに對して、相應に答へるところがあるであらう。たゞ、但し、こゝには、諸家の文化主義に關するわたくしの檢討が、一片のあら探しに墮しないために、若しくは、あら探しに墮し居るの外觀を呈しないために、わたくしは、先づ彼等の學說を念頭に置くことなく、文化主義の問題に關する範圍に於て、わたくしの思想の輪廓と骨子とを出來るだけ平明に、然し、出來るだけ系統的に、抒說するところが無ければならぬ。

『哲學者の有ち得る最高の襟期は、彼れの屬する種族の情操と判斷との代言者となることである。』此れが、哲學者の職分に關するサンタヤナの意見であつた。そして、わたくしはこの意見に大體同意する。哲學者と雖も、もともと、人の子であつて、人間の性情を享有し、人間の經驗に依つて制限せられ、その上、彼れが生れた時代の習慣と理想とを分受して、彼れの生活の内容となして居るからには、若し（一般の假定に隨つて）哲學者にして、一見したところ凡俗に優れた鑑智、若しくは、神覺といふやうなものを有つて居る者であるならば、其れは、彼れが彼等と共有する一般生活のはたら

き振りに關する解釋より來たるものであらねばならぬ。誰れに取つても、哲學者に取つてさへも、人間の生活に與へられたもの、人間の生活に依つて造り出されるものが、實在である、實在の一切である。其等を現象の世界として、其れの後ろに廻つて、本體の世界を見出だすことは彼れに許されて居らぬ。哲學者に依つて見出されたさういふ世界の顯著な標本として擧げられるプレトォの『理念の世界』にしても、やはりわたくし共の一般生活のはたらき振りを、彼れに特有な知力と想像力とに依つて解釋した所産に過ぎない。さうすると、『哲學者の有ち得る最高の襟期は、彼れの屬する種族の情操と判斷との代言者となることである。』としたサンタヤナの意見を以て哲學者の職分に關する正しき解釋であるとせねばならぬ。

それでは、人間の情操と判斷とを代言するとは、如何なることを意味するか、如何なることを意味せねばならぬか。一口に言つて見れば、一般人の生活の中にはたらく情操と判斷との趨歸を看得し、追窮することに依つて、其等の意義を發揮することとである。皮相に觀察すれば、情操も、判斷も、その數に於て殆と無限であつて、其等の多くは互に矛盾し、撞著しつゝ絕えず相續して居るやうである。然しながら、わたくし共にして愼密に諦察すれば、其等は悉く生活の機關であると云ふ極めて簡單なる事由よりして、表面、確執と排斥とを事としながら、內實、其等を方便として、終極には、互に協同し、融和して或る目的を實現して居るのを見出だすのである。代言するとは、かゝる經過の中にはたらく關係に卽しながら、其等を醇化し、整齊して、一層明晰に其等を理會し、一層完全に其等の統一を圖ることに他ならない。

哲學者の職分を解釋して、其れは、人間の情操と判斷との代言者であることであるとし、代言するといふことを解釋して、其れは、其等に卽しながら其等を醇化し、整齊して、一層明晰に其等を理會し、一層完全に其等の統一を圖ることであ

としたとしたところで、哲學者と雖も、尙ほ、個性を有つた個人であるがために、彼れに依つて構成される中へ彼れの氣分と理想とのおのづから織りこまれるのを避けることは出來ない。否、切言すれば、さういふものが織りこまれて、始めて、そこに嚴密な意味での事實が構成されるのである。さうすると、人間の情操と判斷とが哲學者に依つて代言された時に、其等の成果に至つては多少の、時としては、多大の相違はあるべき筈であるし、又、あつても決して差支へないことなのである。然しながら、一旦、かゝる解釋の下に哲學者の職分が理會されて來ると、一點の疑を挾む餘地なきまでに明白になる事がある。それは、哲學者は人間の生活を組織する一切の要素を認取し、そこにはたらく一切の要求の各々にそれぞれ相當の權利を頒賦した後、全體として、動的に、作用的に、其等の總べてを評價せねばならぬといふことである。さうして來ると、人間の性情の可成りに明瞭になつた今日に於ては、原理として、人間の生活を組織する要素の或るものを法外に誇張するがために、他の或るものを無視することより生ずる神秘主義や、そこにはたらく要求の或るものに對して故なく絕大の價値を附與する結果として、他の或るものに對して最小の價値をさへも拒否しようとする禁欲主義のやうなものは人生觀とし、生活方針として哲學者に依つて立せらるべきものでないこと、立せられ得べきものでないことは多言を要しない。

如何なる理由で、かういふ組織を有つた宇宙が存在するか、如何なる理由で、かういふ性情を有つた人間が其れの中に出現したか。この種の問題は、如何なる科學でも、如何なる哲學でも、はた、如何なる宗敎でさへも解決出來る問題ではない。が、又、科學や、哲學や、宗敎の志向が正しく理會された時に、この種の問題は未だ甞て一度でも其等のものに依つて眞劍に解決されようとしたものでないことをわたくし共は覺るのである。この種の問題は、名目に於ては兎に角として、實質に於ては、人間の叡智を超絕したものであるのみならず、又、彼れの興味と全然沒交涉のものであ

る。

それでは、是れまで實質に於て、人間に依つて唯一の問題とされ、是れから先も彼れに依つて唯一の問題とされて行くもの、行かなければならぬものは何んであるか。それは彼れに課せられた條件の內に於て、彼れに與へられた、若しくは、彼れの用ゐ得る材料と能力とを以て彼れの欲求を滿たし行くことである、彼れの理想を實現し行くことである、彼れの品性を完成して行くことである。(後に至つてわたくしが十分に說明し得ると信ずる如く、)畢竟するに、是等は一つの事件に對する三つの觀點より作られた三つの表現に過ぎないのであるから、わたくし共は其等を約して、其れは、だんだんに、生活に於て(形式の側よりすれば)、自由を、そして、(內容の側よりすれば、)幸福、若しくは、價値を增進して行くことであるとすることが出來る。わたくしの理會に隨へば、是れが、是の一事だけが、人間にして大體に於て今日彼れが有てる性情を有ち續ける限りは、永遠に亘つて彼れに取つての解決さるべき唯一の問題である。彼れは、之れが解決の方便として、過去に於て出現し、現在に於てはたらいて居るいろいろの道具を工夫した、一層正確に言へば、其等をして生活一般より分化せしめた。其等の中で殊に顯著なものは、神話や、魔法や、常識や、傳說や、宗教や、道德や、政治や、產業や、藝術や、科學などである。文明或は、文化とは(大處、高處より根本的に觀、徹底的に考へれば、俗學の徒の俗見に從つて、文明と文化とを區別して、文明を外的、物質的のものとし、文化を內的、精神的のものとすることには、何等の便宜も意義もないから、わたくしは是等の二つの言葉を同意義のものとして理會し、使用するのであるが、)人間が、個人的に、社會的に、是等の、及び、其の他の方便に依つておのれの自由と、幸福、若しくは、價値とを增進しようと努力して來た經過と、併せて、現にさうして居るはたらき振りとの全體の總稱である。

いつの時代に於ても、如何なる國民に取つても、其れに妥當なる文明、若しくは、文化を創造することが何故に問題

となるか、問題とされねばならぬか。それは、妥當に自由と幸福、若しくは、價値とを實現して行き得る生活、即ち、生活と呼ばれ得るほどの生活は、人間に取つては與料でなくして、時々刻々に彼れの反省に依つて解決されなければならぬ問題であるからである。

わたくし共にして、人間の生活を繹ねて、遠く其の源に溯れば、そこには何んの秩序も様式もなく、そこにあるものは、たゞ、混亂と矛盾とだけであつた時期があるやうに見える。そこには、總べてのものは、衝動として孤立して居るといふ意味に於て、自然的であつた時期があるやうに見える。然し、さういふ時期に在つても、人間の生活は、其れの中に、既におのれを組織する可能性を有つて居るといふ意味に於て、一面に於ては理性的であつたのである。當初、衝動の中に潜在したこの理性的の側面は彼れが衝動に依つて呼び起される刺激、詳しく言へば、知覺と感情とを體驗するに及んで、始めて、眠りの狀態より目覺めて現實力となつてはたらき出し、彼れは、彼れに內具する取捨と評價との標準に據りて、其等の刺激の性質に隨つて、其等の各に相當な意義を與へ、その意義に隨つて、其等の上に選擇と醇化との工夫を施し、其等を統一するのである。言ひ換へれば、不合理的であつた其等を化して、合理的のものとするのである。

衝動は自然的のものであり、理想は理性的のものである。又、知覺は自然的のものであり、實在は理性的のものである。理想は衝動と異なり、實在は知覺と異なる。然し、衝動を離れて理想は存在し得ず、知覺を外にして實在は成り立ち得ない。さうすると、理想と衝動と、若しくは、知覺と實在とは、其等の材料に關する限り、同一である。たゞ、其等の有つ意義に隨つて、隨時、或る衝動は衝動全體との協同に依りて一つの意義を得て理想となり、或る知覺は知覺全體の援助に依りて一つの意義を得て實在となるのである。かういふわけであるから、衝動と理想と、若しくは、知覺と實在とは、言ひ換へれば、自然的のものと理想的のものとは、もと〳〵、同性的のもの、同質的のものであつて、獨り、

作用的にのみ、さうして、さうする必要のある瞬間に於てのみ、對立するのである。この事實を無視して、若しくは、其れに逆らつて、自然的のものと理性的のものとを異生的のもの、異質的のものとし、其等をして本體的に永久に對立せしめようとするがために、人間の生活のはたらき振りに關して、いろいろ誤解が生ずるのである。

こゝには其等の誤解の代表と見做さるべき一つを簡單に考察することにする。

其れは、民衆の大多數が自分の反省に頼らず、一向に他人の命令に從ふことを彼等の生活の方針として居た、言ひ換へれば、絶對主義の行はれた時代に於て工夫された、若しくは、結晶したものである。其れの特徴を一口に言つて見れば、其れは不思議にも生活全體のはたらきに信を置かずして、纔かに、其れの一部に信を置かうとするところにあるのである。わたくし共が行爲する時に方つて、其れは、一度、反省、即ち、判斷の經過を取ることを常とする。この經過に於てそこに入り來たる新しい要素を受納して、一層大なる、一層汎い、一層深い方針を構成するために、生活の内容は一時分岐して作用的に對立し、其等の一方は支配する機能を取り、其等の他の一方は支配される機能を取る。然し、是れは生活全體がその時のエコノミイに依つて安排する役割であつて、何も支配する方と支配される方との間に實質的に價値の相違があるものでもなければ、本體的に反對があるのでもない。そんな對立の存在するのは、反省、若しくは、判斷が行はれて居る瞬間だけに限られてのことである。その行爲が一旦終結すれば、次の瞬間に於て、如何なる要素が支配する役を取り、如何なる要素が支配される役を取るかは、其の時に於ける生活全體のエコノミイより決定される事柄なのである。

是等の瞬間的に、作用的に構成される支配するものと支配されるものとが誤解され、若しくは、曲解された結果として、不思議な關係を有つた二つの對立的存在が出來る。其等に對しては時代、時代の生活樣式と生活理想との異なるに

隨つて、異なる解釋が、隨つて、異なる名稱が附せられたのである。神と人、世界と個人、natura naturans と natura naturata 法則と物質、原因と結果、天理と人欲、理性と感性、理想と欲望等のやうな對立的稱は、悉く或る興味と立場とから其等の對立的存在に對して附せられたものである。(學術語に隨へば)是等の或るものは形而上學的の對立的存在であり、其等の他の或るものは認識論的の對立的存在である。然し、孰づれにしても、瞬間的に作用として構成されるものを永久的に本體として存續するものと誤解され、曲解された結果であるか、其等の誤解や曲解の中に、(生活様式と生活理想との推移するに伴れて)破綻と矛盾とが見出だされて來た時に其等の破綻と矛盾とが彌縫され、補綴された結果であるに過ぎない。

こゝでは、序だから、一語、二語言及して置くが、今日、わが國に於てカント學徒、若しくは、新カント學徒(カント學派はたゞカントの思想を或る點に於て一層纖細にしただけであつて、其れの綱領に於て決してカントより一歩も出て居るものでないから、畢竟するに、カントもカント學派も一つものである。)が、奴隷的に受け取り、盲目的に主張し、宣傳して居る先驗的とか、價値とか、當爲とかいふものの概念も、絶對主義の行はれた時代に於て工夫された、若しくは、結晶した(さきにわたくしが擧げた)二つの對立的存在より其の系統を引いて居る思想の所産でないといふことを、誰れが否定し得るか。

人間の生活を組織し、維持するものは悉く人間的であらねばならぬ。是れだけは解かり切つた話である。人間的であるといふことは彼れの生活の材料として與へられたものを、彼れに取つて都合のよいやうに彼れに獨自の方法を以て其等を利用して行くといふことである。この目的のために、彼れは特殊の性質を具へた感性や情操を享有し、其等より彼れは更に特殊の構造と作用とを具へた知識を發展せしめたのである。總べて人間的たるもの、はたらきの特徴は其れが

創造的なあるといふことと、その創造が一歩、一歩に飛躍であるといふことである。この事實は知覺と知識との間にも認められるし、知識と行爲との間にも認められる。更に押しつめて考察すれば、知覺そのものの中にも、知識そのものの中にも、行爲そのものの中にも、認められるのである。カントは人間的たるものの獨自のはたらきを『先驗的に綜合的である』と呼んだのである。これは極めて愛でたき思想であり、言葉であつた。その意味は、一度人間の思想が或るものの上にはたらいた後は、その結果として、其れがその上にはたらいた前の原形には還元しきれない新らしい質と意味とがそこに生ずるといふのである。さうすると、人間のはたらきは、特に判斷を通して爲されるはたらきは悉く綜合的ではないか。カントが人間の判斷に綜合的であるものの外に分析的のもののあるやうに想像したのは偶、彼れがおのれの見地に十分に徹底して居らなかつたためである。

人間の生活の特徴が『先驗的に綜合的である』ことは、苟くも忠實に其れのはたらき振りを考察しようとした哲學者である限り、プレトオにしても、アリストオトルにしても、夙に明瞭に理會して居たことである。ヒユウムの如きに至るまで、事實としては、習慣の名稱の下に、其れを認め、そして、生活の統一力として十分に其れの價値を承知して居たのである。たゞ、彼れは改革時代の英國に生れた一個の個人主義者として、彼れの興味はロックの其れと等しく、傳統に基づける一切の信仰や、制度を一掃することにあつたから、人間の心のはたらき振りに關する彼れの分析もこの燥急な志向に禍ひされて、わたくし共が現に見る如き生活のはたらき振りをして可能ならしめるに大切な、否、必須な或るものを彼れの觀察より逸したのである。彼れの誤謬は淺薄なる獨逸の批評家等が月並に考へるやうに、彼れが心理主義者であつたところではなくして、反つて、彼れが餘りに論理主義者であつたところにあるのである。何故ならば、彼れが實際の生活を組み立てるのに彼れが用ゐた『印象』とか、『觀念』とか、『聯想』とかいふやうなあんな單純な、若しく

は、同質的のものは論理的抽象の結果としての外は、わたくし共の生活の何處にでも見出され得るものでないからである。それに拘はらず、彼れの論理的分析では因果の法則の存在に對して滿足な解決を與へることは出來なかつた彼れも、なほ、人間の心の中に『信ぜんとする傾向』のあることを無視するわけに行かなかつた。信ぜんとする傾向をカントの言葉に飜譯すれば、とりも直さず『先驗的に綜合的である』ことである。

今より三年ほど前に、チュウエイがラッセルの『哲學に於ける科學方法』を批評したことがあつた。その時に、ラッセルは彼れの答辯の中に、チュウエイが論理的與料と認めて居るものは、彼れからすれば心理的與料である。彼れに取つての心理的與料はチュウエイに取つての論理的與料であり、そして其等に加工して後に始めて生ずるのであるといふ風のことを言つた。是等兩人の學風よりすれば、是れは極めて自然のことであるが、これを見ても、何が心理的であるか、何が論理的であるかは、萬人が一齊に一致し得るやうに截然區別さるべきものでないことだけは解かる。一派の傳統や學說に捕へられず、自由な氣分と理會とを以て生活の事實を考察し、判斷し得るほどの者は、等しく分子主義の心理學に反對しながら、イマヌイル・カントは認識論（批判主義）の名の下に、ウヰリアム・ジエムスは心理學（實驗主義）の名の下に、（尠なくとも彼等の事業の積極的側面に於ては）殆ど同じ歸結に到達して居ることを承認せずばなるまい。

かういふわけであるから、狹量なる、そして、概して獨立して考へることの不得手な新カント派の人々に依つて勝手に立てられた心理主義、論理主義の區別の如きは、わたくしに取つて何等の意義をもなさぬものである。たゞ、わたくしの何よりも恐れるのは、心理主義の名の下に於てするも、論理主義の名の下に於てするも、それぞれ、其れに特有の傳統と考へ方の奴となつて、人間の生活全體のはたらき振りを說明するに足らざる見解を立て、其れを以て無理やりに其れの說明であるとこぢつけることである。そして、かゝる所爲の淺薄と、馬鹿氣さとに氣付かぬことである。

固より、價値でも、當爲でも、其れが正當な意味に解釋され、それの役目が正當な範圍に限られるならば、それは人間的である特徴の一部分を言ひ表はして居るのであるから、さうすることに大した效能はないにしても、至つて無害なものとして、或る人々が其れを認めることに對してわたくしは別に反對をしようと思はない。たゞ彼等が其れの性質を誤解し、若しくは、曲解する結果、其れの役目を正當な範圍の外にまで誇大し、之れがために、反つて、其れの當初の目的を裏切り、人間の生活の事實を等閑に付し、或は、其れのはたらきを不自然に拘束することになるのに對して、わたくしは反對する者である。例へば、『意味はあらゆる實在「以上に」又は「以前に」横はつてゐる。何ものかゞあるといふ認識には常に、其ものがあるといふ命題に附着した意味が前提せられてゐる。』(リツケルト山內氏譯『認識の對象』附錄『認識の二途』頁四四一)といふことは、其れの解釋の次第に依つては、わたくしとしても同意し得ない見解でもない。然し、同じリツケルトの意見であつても、『然しながら吾々は意味の世界があらゆる人間的の上に超越し、從つて判斷または是認の作用からも獨存することを知らねばならない。』(同上、頁四五七)といふに至つては、わたくしの反對せざるを得ざる者である。是れでは、意味を形式的であるに止めずして、實質的のものとし、其れは內在的のものであると宣言しながら、その實、其れを超絕的のものとして了つて居るからである。こんな間違つた原理に據りて、人間の文化が正しく觀察され、正しく評價され得ようなどとは、思ひもよらぬことである。

一體、西洋の哲學思想は、特に、獨乙の其れは、まだ現實生活そのものにまで十分に引き戻されて居らぬのである。不完全ながら、ソクラテイスに依つて志向された哲學はどこまでも現實生活に卽して、其れを統一しようとする論理學であつた。然し、其れの原理を受け取つたプレトオは、彼れの詩人的天才を縱にして、ソクラテイスの人間の生活內に發見した知覺と概念との區別を擴大して宇宙そのものの構造にまで應用し、其れの發生を、全然倫理的に解釋して、概

念より成り立つ本體の世界と、知覺より成り立つ現象の世界との二つを捏造して了つた。こゝに、形而上學は形造られたのである。この形而上學はアリストオトルに依つて散文的に完成され、基督教會に依つて半ばは迷信的に、半ばは政策的に、支持せられて、終に現代にまで至つたのである。近世人がおのれの生活の組織とはたらき振りとに關して、だんだんに自覺と理會とを有つて來るに隨つて、この數千年來の傳統であつた形而上學を改造して、其れの當初の志向であつた現實生活の批判の道具たる論理學にまで復歸させることの必要を感じて來た。わたくしの考へからすれば、認識論なるものは、形而上學が再びその正路に立ち還つて、論理學となる中間の產物に過ぎない。其れが形而上學の僭越を批判しながら、おのれ自づからが往々にして一種の形而上學に墮し、而かも一種の形而上學に墮して居る悲しむべき事實を意識しないのも寔に所以ありと言ふべきである。認識論の創始者と俗に見做されて居るカントにしてさへも、徹底的に形而上學の桎梏を脫することは出來なかつたのである。殊に、彼れの『實踐理性批判』に於ては、形而上學の偏見に捕はれながら、數學の原理に倣つて、間違つた考へに導かれ、無理に倫理的行爲に關して學的の樣式を與へようとしたのであつた。この結果として、驚嘆すべき詭辯の連鎖に終つて居る。

わたくしに取つては、文化に關する正しき研究は、嚴密に、(こゝに重ねて斷はつて置くが、認識論的のではなく、)論理學的の立場に立つて、一層正確に言へば、心理學的――論理學的(psychologico-logical)の立場に立ち、人間の生活に即して彼れの欲求の發動の方向と、其れの方便となつた諸の機關が過去に於て變遷し、現在に於てはたらいて居る樣式とを發展的に觀察し、論理的に其等の意義を究明することに限られるのである。さうすると、文化に關するわたくしの考察は、自然に二つの側面を取ることになる。其れの一つは、人間の欲求の發動の方向を取り扱かはうとするものであり、其れの他の一つは、其れの諸の機關の過去に於ける變遷と、現在に於けるはたらきとの樣式を取り扱かはうとす

るものである。

わたくしは第一の側面より始めることにする。

わたくしは、さきに、人間の目的を剖して、其れは彼れの欲求を滿たすことである、彼れの理想を實現することである、彼れの人格を完成することであるとした。そして、是等は一つ事件に關する三つの異なる觀點より成された三つの異なる表現に過ぎない。是等を約して、人間の目的は、彼れの自由を、若しくは、彼れの幸福を增進することの一つの概念に歸せしむることが出來るといふ意味のことを附け加へて置いた。このやうに欲求を滿たすことと、理想を實現することと、人格を完成することとを一とし、又、自由を增進することと、幸福を增進することとを同じとすることに對しては、一派の學說に囚はれて、端的に生活の事實を見ない、又、見ることの出來ない人々からは、猛烈な反對の起ることを、わたくしは十二分に豫期して居る。それで、順序として、わたくしは、わたくしをしてかういふ考へ方を取らしめる根柢に就いて、詳しく說明して置く必要のあることを認めるのである。勿論、かういふ考へ方の價値を決する標準は、彼等が彼等の學說に囚はれたまゝで、かういふ考へ方を取り入れるか、どうかといふことではなくして、彼等の奉じて居る考へ方と、かういふ考へ方とはどちらが一層素直に、一層適切に、現にわたくし共が見るやうに、生活のはたらき振りを理解するかといふことである。

自他の人格は其れが或る人に取つては神話的想像であり、或る人に取つては論理的構造であるの相違はあるが、孰づれにしても、生活のエコノミイより假設されたものである。そして、わたくし共の實行上、日夜の吟味に耐えるほどに便利な、隨つて、合理的なものであるから、其れはわたくし共の信賴出來るだけ十分に客觀性を具へたものであるとして、こゝには、其れの成立の經過に關しては別に考察を施さないことにする。

わたくし共が、自分に在つて體驗し、他人に於て觀察することの出來るものは、たゞ、欲望の發動だけである。然し、其の樣式に隨つて、其等の欲望の根源であると想像される人格の性質が歸納されることになつて、或る人格は高貴であるのに、或る人格は卑賤であるとされるのである。

一個の人格に屬する欲望の大多數は、其等が發動して、それぞれ、或る種の反動を經驗すると、この自然の結果として、其等の反動を惹起した欲望の間に、おのれ等の屬する人格の幸福を標準として、其等の反動の意義に隨つて、共存的に、相續的に、一つの共同作用が行はれるやうになつて來る。其等の一つ一つを取つて見れば、皆、おのれを無制限に實現することを要求して居る。然し、有限の資力しか有たぬ人格の機關たる欲望の協同團體に依つて、さうすることの許される筈はない。一つの欲望が、如何なる場合に、如何なる風に、如何なる程度に實現されなければならぬかは、そこに組織されて居る協同團體の利害を標準として、總べての欲望の合議に依つて決せられるのである。理想とは、かゝる手順を經て決せられた欲望のことである。欲望が單獨にはたらかうとすれば、それは情欲である。其れが他の欲望の協贊を得てはたらけば、それは理想である。わたくしは、理想の性質の解釋に關して、カントや、カント學派によりも、寧ろ、ゲエテや、シラアや、カアライルや、エマソンに與する者である。

理想は形式的のものであるか。實質的のものがあるか。わたくしは、其れが現實の中に與へたものでなくして、現實を或る形に造り變へて行かうとする潛在力であるといふ意味に於ては、其れは、無論、形式的のものであるとする。然し、同時に、現存する狀態と材料とに依つて、其れの方向は制限され、其れの內容は充たされて居るといふ意味に於て、其れは、又、實質的のものであるとするのである。理想は決して現實を超越して、其れに對して無責任のものではない。わたくしから見れば、カント學派の人々が間違つた意味に於て、其れを形式的一片のものとするのは、其れに如何なる

内容をも盛ることが出來ないほど遙かに現實より隔たつた處に其れを固定させて安置して了ふからである。然し、わたくしはこゝに言葉の意義を爭つて居るのではない。されば、わたくしは彼等が die Idee をどういふ風に解釋しようと、又、die Idee と das Ideal をどういふ風に區別しようと、强いてわたくしの問ふところではない。たゞわたくしの究明しなければならぬところのものは、そんな理念若しくは、理想が實際に於て、わたくし共の實際生活に對して、どんなはたらきを有ち得るかといふことである。そして、又、そんな理念、若しくは、理想がないとしたならば、わたくし共の生活に於て、どれだけの不足と缺陷とが生ずるかといふことだけである。

正しき意味に於て、欲望を滿たして行くといふことは、個々の欲望を滿たしながら、出來るだけ他のあらゆる欲望と矛盾しないやうに、即ち、生活全體の中に破綻を生じないやうに其れを滿たして行くといふことである。さうして、さういふ樣式に於てはたらく欲望は理想そのものに他ならぬから、欲望を滿たすといふことは、理想を實現するといふことと同じ事實であらねばならぬ。そして、(個人生活に限つて言へば、)この事實を外にして、人格を完成するといふことは何を意味し得るであらうか。

さきに、わたくしは幸福と價値とを同一視し、其れを增進するのが人間の最後の目的であると言つた。是れは果して支持され得る見解であらうか。

苦樂は人間に取つて最も一般的の經驗であつて、苦痛を避けて、快樂に就くといふことは、彼れに取つて最も根本的の欲求である。されば、ベンザムも、嘗て、善とは快樂のことであり、惡とは苦痛のことであるとし、前者を避けて、後者に就くのを以て、人間の最後の目的、否、唯一の目的としたのであつた。然し、彼れはこの思索に於て全然正しかつたか。尠しも間違つては居なかつたか。わたくしはさうは考へない。彼れの思想には二種の誤謬が含まれて居た。其

れの一つは心理的のものであり、其れの他の一つは倫理的のものである。苦樂は二次的の經驗であつて、決して一次的の欲求ではない。わたくし共には衝動をはたらかしたいとする一次的の欲求がある。これは、其れ自づからをはたらかすことを其れの對象とし、其れ以外に、其れ以上に、何等の對象を立しないといふ意味に於て、全然不合理的のものである。其れが首尾よく發動することが出來れば、その結果は快樂と感ぜられ、其れの發動が或る故障に依つて阻害されゝば、その結果は苦痛と感ぜられる。わたくし共は、ベンザムが想像したやうに、苦痛を避け、快樂を獲ることを目的として行動するのではなくして、たゞ、衝動をはたらかしたいために行動するのである。それであるから、衝動のはたらきと苦樂の經驗とには密接な關係はあるが、苦痛を避け、快樂を獲るためにわたくし共が行動を始めるのであるといふ見方は、諺にある『馬車を馬の前に繫』がうとする考へ方である。それから、又、異なる人々に依つて苦痛と快樂とが經驗された後に、其等の苦痛とされ、快樂とされるものが、恰も通用貨幣の如く、(嚴密に言へば、通用貨幣と雖も、その人、その人の財産や性格の異なるに隨つて、其れの價値や意義を異にするが、)何人に取つても、そのまゝ、全然同じ價値と意義とを以て通用出來ると想像したのである。總べての快樂の間に質の相違を認めないで、全然、量の相違だけに單化して了はうとしたのも、同じ假定から發して居るのである。

斯くの如く、ベンザムの意見には行狀に關する學說としては、どうしても許すことの出來ない二種の誤謬が含まれて居る。この顯著な缺陷あるに拘はらず『最大多數の最大幸福』を格言とした彼れの意見が社會改造の方針として、當時、多大の效果のあつたのは、其れが個人の嗜好や、性格や、教育の相違の如きは計算の中に入れないでも大して差支ない法律の改正に對つて主として應用されたからのことである。然し、法律理論としてその範圍に限つて正しいと言つて、其れが倫理學說として眞理であるといふことは出來ない。

かういふ理由で、幸福の性質の説明として、わたくしは在來の功利主義に反對する。然しながら、わたくしが功利主義に反對するのは、決して幸福をわたくし共の生活に於て見出だされる價値として、尠なくとも、價値の一種として否定するのではない。

ベンザムの誤謬は、幸福と快樂とを混同して居たところにあるのである。幸福は滿足であつて、能動的である。快樂は纔かに滿足を構成する一要素に過ぎない。わたくし共はわたくし共の根本性情より或る種の活動を追窮するところから、それの發揚がわたくし共に滿足を齎らし、それの阻害がわたくし共に苦痛を感ぜしめるのである。されば、何がわたくし共に取つて快樂であるかは、わたくし共の追窮するものに依つて定まるのであつて、何を追窮すべきかは快樂に依つて定まるのではない。快樂は何處までも二次的の經驗であつて、一次的の欲求ではない。然しながら、一次的の欲求が續いてはたらいて、其れが殆ど恒久的のものと見られ得る場合には、其れが何時も滿足、即ち、幸福の指標であるから、その指標が其れに附け加はることに依つて（恰も貨幣が富の一部となる如く）幸福の內包を增して來ることは疑はれない。又、快樂が幸福の指標であるために（是れも貨幣に於ける場合の如く）其れが一つの獨立した存在と見做されて來ることのあるのも自然である。例へば、多くの場合に於て、名譽が善行の反映であり、不評判が惡行、又は醜行の反映であるならば、名譽を善行の指標とし、不評判を惡行、若しくは、醜行の指標として、おのれの名譽を高め、不評判を減ずることを努めることに依つてでも善行を長じ、惡行、若しくは、醜行を避けることは出來るわけである。たゞ、實際の事實としては、名譽が必らずしも、正確に善行の指標とはなつて居らないし、不評判が惡行、若しくは、醜行の指標となつて居らないから、善行を長ずることを怠つて、惡行、若しくは、醜行を避けることを等閑に付しながら、一向におのれの名譽を高め、おのれの不評判を減ずることにのみ腐心して居るのは卑しき品性の所爲となるのであるが、然

し、さういふ風に、指標と其れに依つて指示される本體とを分離して了はないで、指標を本體の附添價値として、其れの本體を追窮する一つの刺激要素とするのに何んの不可があらう。是れはわたくし共の總べてが生活の方針として實踐して居ることではないか。

わたくしからすれば、價値も幸福も證明感情の上に立つて居るものである。然しながら、價値は幸福の豫件に關する證明感情に過ぎない。わたくし共が生活を續けて行くからには、十分に幸福を實現するために絕えず其れの豫件を準備して行かなければならぬが、この豫件は實際の幸福に依つて立證されて行かなければならぬものである。

超越的自由といふものに就いては、無論、書物の上に於てではなく、實際の生活に於て、わたくしは何物も知らぬ、又、知らうとも欲しない。わたくしの知つて居るものは、たゞ、實驗的の自由である。そして、わたくしの理會するところでは、實驗的の自由とは幸福を創造して行く力を指すのである。

人間は個性であるが、或は、個性であるがために、おのれの發展のために、彼れは社交を、若しくは、社會生活を要求する。本能よりして社交的であり、社會的である彼れは、社交と社會生活との實踐と鍊達とに依つて、彼れの欲望を滿たし、彼れの理想を實現し、彼れの人格を完成することが出來るのである。個性は協同生活に入つて始めて發達し、協同生活は個性を其れの成分として、始めて鞏固になり、豐富になるのであるから、個性の各は、既に、其れの本質に於て社會生活全體に對して補角的の關係にあるのである。實際の場合に於て、實際の問題の解決に方つては、同じ個人の生活の中でさへも、絕えず異なる欲求の間に、若しくは、一つの欲求を滿たす異なる方便の間に、葛藤が起るのであるから、まして、一つの協同生活を形造る異なる個人の間に、一層大なる、そして、一層長引く葛藤の起るのは自然である。然しながら、彼等の各は、既に、其れの本質に於て、補角的の關係にあるのであるから、どんな葛藤が起るにして

も、其れは或る方法に依つて調和されるものに定まつて居る。それでは、如何なる方法に依つてそれは調和されるか、現に調和されて居るか。それは代償の作用に依つてである。

代償の作用とは、同じ個人の生活の中に、若しくは、異なる個人の生活の間に於て、二つ、若しくは、二つ以上の欲求の間に利害の衝突が生じた場合に、其等の主張を取り入れながら、一層高き、若しくは、一層汎き理會よりして、其等相方の主張を批判することに依つて、新たに一つの見地を開拓し、この見地に基づいて其等の主張を振作し、融合することである。かういふ作用が可能であり、運用されなければ、個人の生活と雖も成り立つ筈はないが、特に、協同生活の成り立つ筈はない。されば、協同生活がこの作用を其れの精髓として居ることは、昔も今も、遠き未來に到るも變りはないと思はれる。が、それの發動する樣式に至つては、時代の異なるに隨つて、わたくし共はそこに多少の相違を認めるのである。通俗に專制時代と呼ばれる社會に於ては、葛藤を齎らす要求を融合する見地は彼れ自づから私に一つの要求を有つ第三者から與へられたのである、或は、暗示されたのである。さういふ時代に於ては、道理の外に道理を承認せしめる附添道具として武力の用ゐられることが往々であつた。通俗に討議時代と呼ばれる社會となるに隨つて、一つの新たなる見地は葛藤を齎らす要求を抱く各個人の相談と反省とに依つて見出だされることになつた。この場合に於ても、嚴密に考察すれば、道理だけが其等の融合の根柢を作り出して居るといふことは言へないが、あらゆる外的のものが次第にそこにはたらく餘地を失なつたことは事實である。

人間の智力と道德とがだんだんに發展する社會生活に於ては、其れが專制的より合議的となるに隨つて、其れの平和を維持することよりも、其れの分化を奬勵することがだんだんに眼目となつた。專制的の社會に於ては、各個人の活動はまだ十分に補角的になつて居らなかつたから、彼等の才能と職業とを調節して行くためには、其等の外に一つの統率

力を要したのである。然し、各個人の活動が一層特殊的となるにつれて、彼等の才能と職業とは、其等がはたらくまゝに、其等の内的關係に依つて社會生活の平和は自づから保障されることになる。専制的の社會に於ては、分化は動もすれば、乖離を意味することとなつたが、合議的の社會に於ては、其れは協同と依存とを意味することになる。斯くして、嘗て協同生活の機關として、國防と、刑罰と、收税との三つの役目を兼ねて、其れの重大さに於て絶對の位置を占めて居た政治は、だんだんに、其の絶對の位置を棄てて其れの他の機關たる道德や、産業や、藝術や、科學や、遊戯と同列となつて、相對の位置を取ることになる。かうなつて來ると、一つの社會生活の内に於て、人間の總べての興味を代表してそこにはたらくあらゆる種類の職業や、活動を中心として、その分野に於て互に交錯する異なる中心點を有つ幾つもの組合、若しくは、協會が組織されることになる。そして、どんな人でも一つの興味にだけ限られることはないから、總べての人々は、一人にして、同時にいろいろの組合、若しくは、協會のメンバアであることになる。一人にして或る學校の教師でもあり、或る教會の信者でもあり、或る學會にも籍を置くし、或る政黨にも籍を置く上、或る俱樂部にも出入するといふ風に。

わたくしは現在の社會生活は、大體、このやうになつて居ると思ふが、尠なくとも、このやうになりつゝあると思ふが、一層正確に其のはたらき振りを理會するのに、わたくし共の閑却してはならぬ事實が二つある。一つは、其れのメンバアとして入り來たる總べての個人の中に、賢愚の相違があるといふことであり、其れの他の一つは、才能の適應性の相違があるといふことである。才能の適應性の相違は、わたくし共がますます之れが分化を圖つて行かねばならぬものである。賢愚の相違は彼等の境遇を出來るだけ均等に近づかしめることに依つて、出來るだけ之れが減少を講じて行かなければならぬこと、若しくは、全然除去することを講じなければならぬことである。然しながら、是れは、わたく

しの推測し得る限り、謂ふところの極限概念であつて、永久に實現されることはあるまいと思はれる。兎に角、事實として、賢愚の相違と、才能の適應性との相違とが現存するからは、この事實に對して如何なる態度を取り、如何なる風に其れを利用すべきかといふことが文化を發達せしめる上に於て、わたくし共に取つて、愼重なる考慮を要する問題となる。

近世のデモクラシイの基調となつた『總べての人は平等に生る』といふあの有名なる宣言は、過去の階級制度に反抗する聲として發せられたものであるが、其れは一般的に解釋されては多大の誤謬を含むものとなる。其れが嚴密に法律的の意味に解釋されてのみ、始めて總べての人は法律の前には一であつて、一以上でも、以下でもあつてはならぬといふ羅馬法の正義の觀念に合するものとなるのであるが、それを近世のデモクラシイの鼓吹者が淺薄に說明するやうに、總べての人は彼れの叡智に於ても、才能に於ても、德性に於ても、全然平等であるとされる時に、この宣言ほど事實と齟齬し、事實を見誤らせるものはない。

或る論者の主張する如く、そして、わたくしが十分の批判と制限とを以てその主張の精神に響應する如く、今日わたくし共の有てる文化は貴族に依つて創始され、ブルジョアジイに依つて繼承され、そして、多くの點に於て惡化されたものであるから、それは全然新らしき基礎の上に社會生活の多數を占める民衆に依つて、もつと簡素な彼等の嗜好に合ひ、もつと素直に人間性を啓發し得るものにしなければならぬとする。宜しい。實を言ふと、わたくしは或る社會主義者が信ずるやうに、過去に養成されたものは、哲學でも、藝術でも、道德でも、悉くブルヂョアジイの嗜好に阿びて、彼等の特權を辯護するためにのみ著想され、完正されたものであるから、一旦、今日の民衆が世界の實權を握る主人公となつた場合には、其等のものは全然破壞されなければならぬとは考へない、考へることは出來ない。プレトオの哲學でも、

ミケランジエロの彫刻でも、ダンテの道徳でも、永久に價値のあるものを含んで居るとわたくしはおもへる。然し、わたくしが興味を有つて居ることは、たゞ一層優れた哲學や、藝術や、道德の將來に於て起り、民衆の總べてに依つて其等が鑑賞され、尊重されることであるから、一層優れたものが起りさへすれば、プルトオの哲學や、ミケランジエロの彫刻や、ダンテの道德のやうなものは明日この地上からその影を沒したつてわたくしは一向にそんなことには頓著しない。然しながら、たとひ民衆が世界の主人公となつて、彼等に適した文化を創造することになつても、矢張り賢愚の相違と才能の適應性の相違とは嚴たる事實であつて見れば、其等は正しく取り扱はなければなるまいといふことだけである。彼等にしてそれを正しく取り扱はないならば、彼等の欲求する文化と雖も、未來永劫、出現し、完成される時機は來まいといふことである。現に、現在の勞働運動に於ても、勞働者を指導する者は彼等に傑出する才能を有つた者であつて、又、其れが一つの組織を保つて居るのは、それぞれの協同と分業とに依つて、適材が適所に用ゐられて居るからではないか。

民衆の天下になつて、社會生活が如何に單純化されるとしても、苟も其れが人間に固有する人間性の要求を滿たし得るほどのものならば、そこには、或る種の政治や、産業や、藝術や、科學や、道德は或る形に於てなければならぬ。その時に、賢愚の相違と才能の適應性の相違とを無視して、どうして其等を適宜に持續し、改造して行くことが出來るか。將來に於ける社會生活は、其れを組織する總べての民衆の幸福と發展との外にいつでも他に目的を有つて居てはならない。されば、其れの大體の方角を決定する者は彼等總べてでなければならぬといふことをわたくしは信ずるが、同時に、其れに的確の樣式を附する者は、彼等の中の少數者でなければならぬといふことをも信ずる者である。

次に、豫定の順序に隨つて、わたくしは文化生活を組織する諸の機關に就いて、過去に於ける其等の經過と、現在に

於ける其等のはたらきとを考察しなければならない。

獨逸の理想主義者一派の思想に其の源を發する文化主義を祖述する人々は、人間には根本的の理想が四つある。之れは、眞と、善と、美と、聖との理想である。是等は悉くアプリオリのものであるから、一をして他に從屬せしめることも出來なければ、其等を更に或るものから引き出すことも出來ない、と言つて、たゞ論理的に是等をいゝ加減に配列するに過ぎない。然し、さういふやり方だけで、果して、生活の基本として是等のものの作用が、正しく、眞實に、そして、適切に理會出來るであらうか。

嚴密に考察すれば、人間の行爲は、隨つて、彼れの思索も鑑賞も當然人間的であるから、言ひ換へれば、(若しそんな表現を用ゐたいならば、)一歩一歩に飛躍しつゝ先驗的に綜合するのであるから、わたくし共にして、強いてアプリオリといふものを立てたいと望むならば、是等の四つのものに對してに限らず、殆ど無限に、いくつでも立てられるわけである。日常生活に於ても、一つ一つの行爲、一つ一つの思索、乃至、一つ一つの鑑賞は、見樣に依つては、それぞれ獨自のアプリオリに依つて立つて居ると言ふことも出來るのである。

何故ならば、飛躍した結果として出來るものの理由は、飛躍の起る前のものの理由からは決して説明出來ないものであるからである。然し、そんな考へ方が、どうして、どういふ意味で、わたくし共の生活のはたらき振りの説明として役に立つかは、わたくしの到底理會出來ないところのものである。

わたくし共が人間の生活の事件を考察するに方つて、その時の興味の決定する方角と範圍との性質によつては、(たとひ、其れをアプリオリと見ることが眞理であるにしても)たゞ、其れがアプリオリであると言つただけでは、説明として何んの役にも立たず、アプリオリであるといふことは受け取つて了つて、一向に其れの構造に含まれたいろいろの關

係を考察するだけで優れて役に立つ說明になる場合が確かにある。例へば幾何學者が空間の關係を研究する場合に於ては、空間をアプリオリのものとするか、或は、アポステイリオリとするかが直接に其れの性質に影響するところのない限りは、さういふことは問題とせず、超越的にではなく、經驗的に其れの關係そのものを研究することに依つて、十分の效果は擧げられるのである。

わたくしの文化の研究には別に方法がある。それは、眞と、善と、美と、聖とが、四つのアプリオリの理想であるなどと主張するだけに止まらず、わたくし共の生活の機關としてはたらいて居るものが、過去に於て、如何に出現し、發展したかの經路を發生的に考察し、現在に於て、其等が如何なる關係を以てはたらいて居るかの意義を論理的に評價することである。

人間に取つて、何が內具的の要求であり、根本的の活動であるかといつて、衝動をそのまゝ、衝動としてはたらかすることの他にはあるまい。是れは止むに止まれぬ活動である。其れは、おのれ自づからが目的であつて、おのれの外に目的を有たぬ活動である。ラッセルは創造の衝動と所有の欲望と言つて、衝動と欲望とを對立させたが、純粹の衝動は、まだ、何物をも創造するに至らず、又、さういふ事の出來ないものである。純粹の衝動とは、時到つて泣き、笑ひ、怒り、喜び、戀ひする如き類である。人間が或る物を創造するやうになれば、彼れは衝動に依つて其れを爲すのではなくして、衝動を欲望化して其れを爲すのである。

衝動は人間に取つて、最も內具的な、最も根本的なものであるが、其れは方便を工夫しないものである。ところが、人間の欲求の大多數は方便を俟たずしては實現されることの出來ない種のものである。飢えれば、彼れは食を取らねばならぬ。然し、食を得るには或る方便が要せられる。寒ければ暖を取るために彼れは衣を作らねばならぬ。然し、衣を

作るには或る方便が要せられる。さうして、欲求が高尚になればなるだけ、之れが實現のためには、其れだけ複雜なる方便が要せられるのである。

かういふわけで、人間の活動は、本來、衝動である。そして、なぜ人間にそんな欲求があるか、其等の欲求がなぜさう發動しなければならぬかといふことに對しては、何等の説明も與へられないといふ意味に於て、衝動は全然不合理的である。然し、其等の衝動の大多數は或る方便を借りて始めて、實現されることが出來るのであるから、其等の方便として、いろいろの機關が工夫されることになる、遊戯だけは一つの方便をも借りないで實現されるやうに考へられるが、その實、遊戯と雖も、方便を俟たずしては實現されることは出來ないのである。

通例、遊戯と仕事とは人間の根本的活動の自然に分れた二種類のやうに考へられて居る。然し、わたくしからすれば、遊戯と仕事との相違は、其等の本質にあるのではなくして、其等が用ゐる方便と、其等の方便の用ゐ方とにあるのである。どちらも等しく衝動の發動である。どちらもその發動のために方便を要する。たゞ、遊戯にあつては、方便は現在を美化するに用ゐられ、仕事にあつては、方便は未來に到つて生活を美化するために、現在に於て之れが準備をなすに用ゐられるのである。この結果として、遊戯にあつては、方便は目的の中に、吸收されて仕舞ふが、仕事にあつては、目的は常に方便から離れて其の先にあることになる。孰づれにしても、結局は衝動の滿足であることには變りはない。

人間は久しい間、『手より口へ』の生活を續けて行つたことは事實である。是れは、卽ち、漠然たる意味に於ての常識の生活である。この生活に於ても、彼れは經驗を積み、經驗に依つて敎へられるに隨つて、彼れの生活を持續する方法に於いて、尠しづゝでも、だんだんに賢くなつて行つたことは疑はれない。然しながら、彼れの興味は未來に到つて生活を美化する準備を造るよりも、現在に於て其れを美化することに集中されて居た。現在に於て生活を持續するためには、最小

限度の力が用ゐられ、さうすることに依つて剩された力は主として遊戯に對つて用ゐられた。

それにしても、人間は現在に於て生きるのみならず、未來に對つても生きて行く者であるから、彼れは本能よりして共存的に、相續的に、どういふ風にかして、彼れの數多き欲求の整頓を圖らねばならぬ。特に、彼れの豫期しない、若しくは、彼れの叡智で支配することの出來ない、彼れにまでは、神禍として現はれる天變地災に依つて彼れの欲求が打ち毀された時に、さうすることの必要を一層痛切に感じて來る。こゝに於て、常識と遊戯との外に、上に、彼れの恐怖と不安とを鎭めるために彼れは神話を捏造することになつた、更に事實に即して言へば、さうすることの必要はおのづから彼れの心の中に神話を沈澱することになつた。斯くして、原始人の生活は常識と、遊戯と、神話との三分野に依つて分割され、占領されることになつた。そして、是等の分野が、各、其の分野に據つて雄視して居たのが原始人の生活の特徴であるから、其れは、自づから、極めて平板であり、極めて放逸であると同時に、極めて空靈であつた。

平板なる常識と、放逸なる遊戯と、空靈なる神話とが、外觀上、どんなに獨立した分野を割據して居たとは言へ、其等の分野は本來、單一な目的を有つ人間の生活内に作られたものであるから、是等の活動はいつか互に交錯し始め、其の交錯は歳月を經るに隨つてだんだんに親密となり、其等の一つのはたらきは他の二つの實質を感化して行つたといふことは見易き道理である。しかのみならず、是等の三つのものは協同生活の中にあつて、其れのメンバアたる總べての個人に依つて實驗とし、創造とされてではなく、寧ろ、習慣とし、傳統とされて發達したのであるから、是等の總べてが社交的の、若しくは、社會的の性質を帶びて行つたといふことも見易き道理である。それで、神話より宗教が生じ、遊戯より藝術が生じ、常識より産業と科學とが生じたと見るならば、それは、大して事實を誤つては居らぬが、是等の孰づれの一つも他の二つのはたらきと、團體生活より來たるいろいろのはたらきとを其れの組織の中に反映しながら、其

れに特有の體系と役目とを取つて來たといふ大切な事實を閑却しては、わたくし共は到底、宗教の、藝術の、そして産業と科學との眞相を理會することは出來ない。

どう考へても、生きること、出來るだけ善く生きることの外に、人間に取つて他に一つでも目的があるとは考へ得られない。わたくしからすれば、或る人々に依つてそれぞれ人間の最上理想として說かれる德とか、義務とか、奉仕とかいふものは、畢竟するに、善く生きることの條件、若しくは、側面に過ぎない。この地球を彼れの活動の舞臺として、自然力を材料とし、其れを支配し、利用することに依つてのみ、始めて、彼れの生を繫いで行くことの出來る人間に在つては、何よりも先づ衣、食、住に對する材料を豐富にし、其等を改造する方法を自由にすることを圖らねばならぬ。そこで、彼れの文化は産業をそれの中心として始められ、そして、人間の組織が現在のやうである限りは、何時までも、産業がそれの中心であらねばならぬ。穴居、皮服、生食の狀態より、彼れがセント・ピイタア寺を築き、ゴブランの几帳を織り、パリの料理を調理するに至つたことは、文化の邪徑に彷徨した所産に過ぎずとしてわたくし共が取らないまでも、美觀と、廉價と、そして、健全とを兼ね有した、隨つて、萬人に適する家屋と、衣服と、食物とを、彼れがどれだけの苦心と、どういふ經路とに由つて工夫するに至つたかをわたくし共が忠實に追跡し、正確に叙述する時に、そこには、帝國の興亡や、政治の沿革や、戰爭の顚末やを追跡し、叙述して出來たものよりも、正しき意味に於て一部の文化史が出來ると思ふ。眞の意味の文化史は尠なくとも、其れの中核は、人間の欲望のはたらきを中心とした建築の歷史、什器の歷史、衣服の歷史、調理の歷史、交通の歷史等であらねばならぬ。

産業は、始め、家庭を單位として行はれたものである。そこで、人間の生活に必要なものは、衣服の材料でも、食物の材料でも、乃至は、燈火の材料でも、彼れの山林、若しくは、田畝より採られ、そこに住ふ親子、兄弟の手に依つて

其等の最後の形にまで作り上げられたのである。そして、さうすることが、又、當時の團體生活に必要なる諸德を養成したのである。何故ならば、さうすることに依つて、協同と、同情と、服從との情操がだんだんに發達することになつたのであつて、この家庭產業の仕事を外にしては、さういふものは、到底、發達する餘地は無かつたからである。

然し、一方に於て、個人が家庭の羈絆より解放されると同時に、他の一方に於て、產業が其れの質と量とに於て進步して來るにつれて、其れの製作の單位は家庭より一地方、若しくは、一國家に移されることになつた。こゝに、異なる個人の間に協同と交換とのはたらきが必要となり、隨つて、彼等の間に義務を奬勵し權利を保護することが必要となつた。（產業だけに卽して言へば）政治は協同の義務の遂行を奬勵する制度であり、法律は分取の權利の主張を保護する機關であつたのである。

宗敎が、神話を其れの前身として、原始人に特有であつた奔放なる想像力と制裁なき欲求との產物であることは明白である。神話も宗敎もその動機に於て、全然同一である。（學的の、卽ち、徹底した意味に於てのみならず、俗的、卽ち、淺薄な意味に於ても。）神話が功利的であつた如く、宗敎も功利的である。されば、歷史的に、いつ神話が宗敎となつたかといふことは判然言はれるものではない。たゞ、概念的には、神話と宗敎との差別が立てられないわけでもない。一體、神話の特徵は、客觀的に適當な方法を講ぜずして、一時、主觀的に快い氣分を挑發することに依つて、おのれの欲求を滿たし、おのれの生活を改善しようとしたところにあるのである。然しながら、人間はかゝる方法に依る生活の中に長く滿足し、安心して居られる者ではない。そこで、彼れは、表面上、無力な神話を紹繼し、信奉しながら、その實、生活の機關として一層適當なる產業や、藝術や、科學や、道德を完成して行つたのである。さうする結果として、神話が尙ほ、其れの分野を快い氣分の挑發に置いて居たことに大した變はりはないが、其れに依つて自然の狀態を改造しようと

することは企てないで、さういふことよりも、吉凶、禍福の根源と想像された性情の陶冶を努めることになつて來たのである。さうなつて來ると、概念的には、神話が宗教になつたと言へるのである。

宗教は實際的にも、理論的にも、わたくし共の生活を統一し、且つ、發展させて行くに十分な産業や、藝術や、科學が成立し、現に、其等が十分な役目を滿たして居るに拘はらず、尙ほ、神話の傳統を固守して、其等の間に一つの分野を占領して行かうとするのである。それが、時代、時代の政治や、藝術や、道德や、科學と交渉して來た結果、其等の感化に依つて、其れの態容も、精神も絶えず變はつて來ては居るが、既に其れの滿たすべき特定の役目がなくなつたのに、強いておのれの生存權を主張しようとすれば、其れは、どうしても俗人に依つて高尙とされ、尊貴とされる『內的』たるの一つの聖所に立て籠らねばならぬことになる。そこで、獨り、宗教だけが總べての正しき行爲と情操との源泉たる奉仕の心、敬虔の念、精神主義等を涵養する力のあるものであるとされることになる。今日に到つても、なほ、一派の學者に依つて、善の外に、上に、位するものとして想像されて居る聖の理想の如きもかゝる見地よりの沈澱に過ぎない。

何んと言つても、宗教の與へようとするものは、過道德的(hyper-ethical)の、若しくは、合理後的(post-rational)の道德である。其れの說く統一は特殊のものの統一でなくして、あらゆる特殊のものを超越した統一である。其れの說く合理性は、自然的のものの合理化ではなくして、總べての自然的のものを排斥した後、空想に依つて憧憬される合理性である。其れの說く道德が、動もすれば、禁欲主義となり、神祕主義となり、絶對主義となり、其等を辯護する詭辯となることに何んの不思議もない。

わたくしは未來に於ける文化の發達のために、宗教の成立と作用とに鑑みて、其れの分野がますます縮少され、其れの內容がますます稀薄となつて行くことを冀ひ、且つ、さうさせることに志す者である。

藝術はたゞ一つの目的しか有たぬ。それは、現在に於ける生活を美化することである。科學は同時に未來に於て其れを美化する準備をなすのに反して、藝術は直接に現在に於て其れを美化しようとする。こゝに、藝術の特徴がある。詳しく言へば、こゝに、藝術の長所があると同時に短所がある。

若し藝術の目的がわたくし共の生活に一層美しき樣式を與へて、わたくし共に取つてこの世界を一層住みよい世界としようとするにあるならば、是れはわたくし共の努力の一切であるから、わたくし共の一切の努力は、この一事に向つて集中されて居るといふ意味に於て、わたくし共の生活は、最勝義に於て、最廣義に於て、そして最深義に於て、藝術そのものであるといふことが言へる。この意味に於ける藝術は、現在に於ける生活を美化すると同時に、未來に於ける生活を美化する方法を準備しなければならぬ、生活に見出だされる色彩と形象との美を味ふために、其等の關係を改造するに止まらず、更に進んで、一層廣き、深き滿足を得るために、概念の關係や、道德の關係までをも改造しなければならぬ。然し、かういふことは普通の意味に於ける藝術の爲し得るところのものでもないし、又、なすことを欲せざるものでもある。

遊戲の衝動に胚胎した藝術は、享樂の相續を保障するために、其れの創造の條件の中に客觀的要素を織りこまなければならないことを夙に覺つた。そこで、藝術は其れの發動を恒久化する方法として、二重の便宜を有するものを工夫した。それは、物質を借りて發動の跡をその上に印刻することであつた。さうして來ると、藝術は或る形を取り、人間の環境の一部となつて永久に存するのみならず、後人は、其れを參考とし、若しくは、臨摹して、その業を繼承して行くことが出來る。されば、遊戲の衝動がこの方法を見付け出して來ると、そこに、嚴密なる意味での藝術は生じたのである。

藝術は生活を美化するに方つて、かういふ風に其れの方便を擇ぶがために、藝術に依つて美化されたものは永遠性を得ることになる。わたくし共がわたくし共の周圍を見廻して、現にわたくし共の有つて居る建築や、彫刻や、繪畫や、音樂や、詩がわたくし共のためにどのくらゐ自然に於て美を指摘してくれたか、どのくらゐ人生に於て美を創造してくれたかを考へる時、若し藝術といふものが絶對に無かつたならば、わたくし共の生活は果して生活するだけの價値があるか、どうかを疑はざるを得ないほどである。わたくし共は、現在、わたくし共が美を享樂して居ることに對して、過去の幾多の天才と、彼等を養成し、刺激と材料とを供給した更に多くの民衆に感謝したければならぬ。

然しながら、藝術がわたくし共の生活を美化するとか、改造するとか言つても、畢竟するに、其れの本質よりして、二元的の原理の上に其れを爲す外に道はない。この結果として、其れが美を發見するにしても、美を創造するにしても、纔かに、生活の最小部分に於て其れをするか、其れの最小部分より其れの暗示を得て、其等を勝手に醇化して獨立の存在とした後、再び其等を生活に送り返して其れの成分の一部とするに過ぎない。さうすると、今日藝術の用ゐて居る方法では、未來永劫、わたくし共の生活の中には藝術より其れの美化の滋雨に潤ふことの出來ない大部分の殘ることを知らねばならぬ。樣式と內容とを完全に融合するのが藝術の理想であると言はれて居るが、斯かる理想こそ、藝術が人間の生活を全體として醇化するのに不適當なものであるといふことを立證して居ると言はねばならぬ。何故ならば、こんなことは人間の生活全體に取つて決して永久に實現されるものでないからである。ミケランジエロのモオゼスがどれだけ實際に於て完全なる人體を作り出したか。ラファイルのマドンナが實際に於て美しき、優しき母を作り出すことのためにどれだけの貢獻をしたか。更に悲しむべきことは、是れまでに、其等の作品の美を味はふことの出來た者は、味はふ趣味と餘裕とを有つて居つたものは人類の最少部分に限られて居たと言ふことである。

眞の意味に於ける藝術は、言ひ換へれば、萬人の生活そのものを一つの藝術とする意味に於ての藝術は、さうしたものであつてはならない。其れは端的に、生活全體を一元的に美化して、そこに棲息する總べての人々をしてその美を味はしめる可能性を有つたものでなければならない。さうすると、文化の機關として、わたくし共は、わたくし共が現在に於て有てる藝術の價値を十分に認めなければならないが、同時に、今日に於ける其れの樣式と意義とがそれの最後のものであると考へてはならない。其等は其れが最後に達し得る樣式と意義とであるとされるのには、餘りに抽象的であり、高踏的であり、排他的である。將來の藝術として、わたくし共は、民衆劇とか、或る種の手工とかいふやうなものでは到底滿足出來ぬ。其れは、今日はたらいて居る政治とか、經濟とか、道德とか、產業とか、科學とか、人間の生活のあらゆる要素と勢力とを一種のヴイジヨンと想像力とに依つて、一元的に綜合し、醇化して、其れに一つの樣式と意義とを與へるものでなければならぬ。

さて、こゝに、人間の生活の機關として考察して見たいとわたくしが企てたものゝ一つが殘ることになつた、其れは科學である。科學は產業と共に常識より分化したものであるが、それが一つの獨立した機關として組織されたのは、產業よりずつと後れてのことである。宗教も藝術も、其れの効果は既に大抵試驗され盡したと見られる。獨り、科學の効果に至つては尙ほ全然、未知數である。されば、今日に於て其れに含まれた効果をかれこれ言ふのは、尠しく早計に失するの觀もある。然し、其れに依つて暗示されて居る片鱗に依つて、その全體が多少髣髴出來ないことはない。

科學が宗教や藝術と異なる特徵は、知覺を知覺のまゝ統一しようとしないで、一度、其れを概念のレベルに引き上げ、さうして、そこに其れを其れの成分にまで分析して、其等の中に就いて、一つ決定的のものを發見し、斯くして發見されたその決定的のものを再び知覺のレベルに引き戾し、其れをして汎く知覺と關係せしめることに依つて、其れの効果

を試驗するところにあるのである。重ねて言ふが、是れが科學の特徴であつて、又、わたくしの考へからすれば、是れが科學の强味である。

生活を改造するに方つて、科學ほど個體を尊重し、個性の要求を尊重するものはない。科學が生活を統一するに方つては、知覺より概念を見出だすために、無論歸納する。然し、科學の興味を置くのは機械的歸納でなくして、有機的歸納である。例へば、色の經驗を統一するのに、總べての異なる色から其れの共通性を求めて、單に色といふ概念に化して了ふのは機械的歸納であつて、この方法に依つては總べての異なる色に特有なる性質はなくなることになるから、直接經驗として其等に含まれた相互の關係を統一することは出來ない。然し、一度、其等をして分光鏡を通過せしめ、エイテルの振動にまで變形して、エイテルの振動の數の關係に依つて其等を按排することになれば、個々の色の特色を滅却せずして、總べての色は、それぞれ、其れの個性が保留されながら、一つの系列の中に包括されることになるのである。この方法は有機的歸納である。

又、更に進んで、科學はあらゆる事件を統一するために、其等の有てる意味を醇化し、其等の事件より其等を分離して、其等に暫らく獨立の存在を與へる。斯くして、H_2Oは科學に依つて水の意味として取り扱はれずに、あらゆる水を離れて一つの存在として取り扱はれるのである。わたくし共はH_2Oで手を洗ふことも出來ず、又、其れを飲むことも出來ないが、然し、H_2Oは總べての水を取り扱かふ總べての態度の表現であるから、あらゆる水とは比較にならぬほど便利な存在である。其れには、あらゆる水に織りこまれて居るよりも、遙かに多くの人間の興味と考慮とが織りこまれて居るといふ意味に於て、遙かに人間的であり、人格的である。其れは、人間が水を出來るだけ個性化する準備として、彼れに依つて出來るだけ普遍化された結果である。

科學は一時の必要に應ずるために、藝術の如き氣分の挑發を事としない。又、現在に見出される色彩や形象よりも飛び離れた色彩や形象を生活に與へようとはしない、孜々とし、兀々として、騒がず、焦らず、しかも懈らず、勇敢に醜き現實を取り、誠實に其れを醇化し、改造して、一歩、一歩、わたくし共の世界を一層住み善きものとして居るのである。

科學は欲望を整頓せずして、たゞ、其れを滿たす方便のみを整頓して居るといふことは、往々、科學に對つて發せらるる非難である。然し、これは果して事實であらうか。欲望そのものを整頓する動機が先づはたらかないで、どうして、其れを滿たす方便を整頓することが著想され得ようか。かういふ淺薄なる考へ方は、丁度、法律を借りて不徳の行爲を犯す者があるために、法律は人間の德性の發動ではなくして、其れとは關係のないものであるとか、沒分曉の甚だしきものに至ると、法律は道徳に反するものであるとか言ふのと同樣な考へ方である。若し人間にして、彼れの欲望の整頓に志さないならば、一體、科學などといふものの起りやうはないのである。成るほど、科學に依つて整頓された方便が欲望のために何時でも正用されて居るとは言はれない。それが亂用されることは多々ある。先頃の世界大戰の如きは、其れの最も顯著な一例である。然し、あれは決して科學の本來の志向に依つて爲されたのではなくして、其れに反して、若しくは、其れに逆行して爲されたのであるから、科學の罪ではない。科學の志向するところのものは、人類の幸福を增進することの外に何物もない。たゞ、其れが尚ほ萠芽の狀態にあり、隨つて、微力であるがために、早晩、科學に依つて取つて代はらるべき運命の下にあるもの、即ち、貪欲とか、嫉妬とか、權力欲とか、いふ反科學の精神に依つて、(恰も忠僕が惡主人に依つて惡用されるやうに)惡用されて居るだけのことである。科學が、當初、人間の欲望の整頓を其れの眼目として起り、其れの歸結として、其れを滿たす方便の整頓を圖ることになつたのは、其れの創始者と宣傳

者との意氣に照らしても明瞭ではないか。何人と雖も、公平に人間の欲求の性質と、其等が發展して來た徑路とを考察し得る者は、文化の機關として科學だけあれば十分であるといふやうなことを想像する者はあるまい。わたくしとしても、そんなことを想像して居ないことは、この文章に於てわたくしが勘しく開展しようと試みたわたくしの態度と精神とからしても推察することが出來るであらう。わたくしは政治と、道德と、産業と、藝術とに重大な價値を認める者である。宗敎にさへも、（現在のところ、）相當な價値を認めようとする者である。たゞ、わたくしは其等と協同して、世人が認める以上に、若しくは、認めまいとするに反して、科學の價値を認めようとし、又、認めるのをわたくしの人類一般に對する義務であると考へるだけである。

以上、ほんの輪廓だけに過ぎないが、文明、若しくは、文化といふことに依つて、わたくしは如何なることを意味するかを、樣式的にと、卽ち、生活の態容と、實質的にと、卽ち、其れの諸の機關のはたらき振りとから、一通りしたのである。わたくしは、この思想を基礎として、是れより進んで諸家に依つて主張され、宣傳される文化主義の假定と推理の方法とを檢討して見たいと思ふ。

諸家の文化主義に對する批判は（下、批判）として次號（八月號）に掲載せらるべし

世界平和と國家我

水野廣德

(一) 永久平和と繁殖制限

人類として其の行爲の最も殘忍なる、其の結果の最も悲慘なる戰爭を呪ひ、戰爭を惡むの聲は古來幾多の聖賢に依りて繰り返へし〳〵高く鋭く唱へ叫ばれて居る。夫にも拘はらず人類の歷史は腥き戰爭の血を以て殆んど其の各頁を彩られて居る。文明人最後の戰爭とさへ唱へられたる歐洲大戰終つて、戰死者の墓標は尙ほ新に、負傷者の瘡は未だ癒へざる今日に於てさへ、平和欲求の叫高き他の一面に於ては次の戰爭の囁きが、力強く多くの人々の心の奥に響いて居る。世界永久の平和は竟に哲人の空想に過ぎないであらうか。人類は永遠に凶惡なる戰爭の脅威より脫することが出來ないであらうか。然り、人間の第一本能が先づ生きることであるならば、又人間の增殖が無制限に放置せらるゝならば、人間が仙人の如く霞を吸ひ露を飲んで生き得ざる限り、人類の戰爭は或は否な恐く永遠に終滅せぬであらうと疑はれる。

地球の面積は永久に一定である。從ふて物資の生產には限りがある。然るに人間の繁殖は無限である。食足らざれば生きんが爲めの競爭を生ずるは智者を待つ迄もなく明らかである。此の競爭が即ち戰爭である。必ずしも大砲の打ち合と言はない。必ずしも軍艦の沈め合と言はない。他を殺して己を生きんと圖る團體的爭ひが即ち戰爭である。生物界に於ける生存競爭と優勝劣敗とは、其の語舊しと雖とも其の意は常に新たなる眞理を有する。併しながら此處に考慮すべき點は、人間が果して無限に繁殖增加するや否やの問題である。象や麒麟の如き少數の動物を除けば、總ての動物の繁殖力は遙かに人間以上である。然るに此等の動物の繁殖は他力的に或は自然的に制限せられて、著しく其の數を增すとはない。魚は年々數千乃至數萬の卵を產み、蝶は每年數百の卵を產む。若し此の卵の全部が孵化成長するとせば、十年にして海は魚を以て塡められ、空は蝶を以て滿

たされるであらう。併し古往今來未だ曾て海が魚に依つて塡められ、空が蝶に依つて滿たされた話を聞かない。是れ其の大多數は或は他動物の餌となつて食ひ殺され、或は食料不足等の爲め自滅するが爲めである。之に反し動物の最高位に在る人間は他動物に依つて其の繁殖を妨げらるゝことが無い。若し人間の繁殖を制限し得るものあるとすれば、其は唯人間自身の技工と食料の不足とあるのみである。凡そ萬有の生物中、意識的に並に技工的に繁殖を自制し得るものは唯獨り人間あるのみである。是れ造物の神が人間にのみ與へたる特種の恩惠的機能であるとも考へることが出來る。

人間の無制限繁殖と食料の有限的生産との衝突は唯時期の問題にして議論の問題ではない。此の明らかなる前途の衝突を無視して、産めよ、殖へよ、地に滿てよで猛進し、其の結果遂に人間互に相食むに至るは、神が折角人間に與へたる此の特種の恩惠を放棄するものとも云へる。併しながら他の一面に於ては生殖も亦人間の本能である。此の本能を滿たさんが爲めには、無心の草木すらも尙ほ且つ其の種を保護愛育するの機能を授けられて居る。況して人間には異性の愛と血肉の情とに依り繁殖本能が最も强烈である。是に於てか人間は今や繁殖本能を自制すべきか、放任すべきかの岐路に立つて居る。若し繁殖自制の途を進まば或は人類間に於ける生存競爭即ち戰爭を避けることも出來る。之に反して若し本能を恣にせば戰爭は到底防ぎ得ぬであらう。世間或は繁殖制限を以て神の攝理に反くものとして反對非難する者もある。併しながら繁殖制限が果して神の攝理に反するものであるか、或は無制限にひり散らし産みながして人間相食むが神の意志に副ふものであるかは、見樣に從ふて何れとも考へられる。唯繁殖制限反對者に對して質ねたきは、人間の繁殖ばかりが神の攝理にあらざることである。總ての生物の繁殖は悉く是れ神の攝理である。然るに人間は自己生存の爲めに他の生物の繁殖を破壞して顧みない。是れ亦神の攝理に反くものと謂はねばならぬ。繁殖制限是非の議論は別とし、實際問題として無制限繁殖の窮極が人間相食む戰爭にあることは爭ひ難き事實であると信ずる。

併しながら斯くの如き戰爭が若し起るとするも、其は尙ほ遠き未來のことに屬し今日當面の問題でない。加之人間が自ら信ずる如く、果して人間が神の最大寵兒であり、且つ繁殖制限が神の意志でないならば、永き將來に於て神は人間の爲めに此の問題を解決して與れるであらうと信ずる。萬一解決が出來ぬとするも、斯くの如き戰爭は人間の生存本能に基づくもので、到底道德や知識や教育や政治に依つて阻止し得るものでない。即ち

人意の戰爭にあらずして天意の戰爭である。然るに今日の軍國主義者や帝國主義者は此の遠き未來に屬する天意の戰爭を目標として、永世平和の保續と戰爭絶滅の不可能を說き、軍備充實の口實を作つて人意の侵畧戰爭を行はんとして居る。恰かも赤坊は必ず大人になるとの理由に依り、赤ん坊の爲めに大人の着物を縫ふと似たるものである。

（二）戰爭の變遷

天意の戰爭――戰爭と云ふよりも生存競爭――は或は避けることを得ないであらう。併し人意の戰爭は人間の意思に依つて之を防ぎ之を避くることが出來る。歷史家の統計に依れば過去二千年間、世界に干戈の閃き銃砲の轟きの絶へたるは僅に二百年に過ぎないと云ふことである。而かも其の獸革樹皮を鎧とし石斧石鏃を武器としたる人類の第一戰爭より、毒瓦斯漲り、タンクのたくり、飛行機翔り、潜水艇駛る現代の戰爭に至る迄、大小幾千萬戰は悉く是れ人意の戰爭である。或は支配者の野心の爲めに！、或は民族の侵畧慾の爲めに！。

大古混沌の時代は知らず、人類歷史ありて以來の戰爭は、外に對しては人間野性の發露たる侵畧征服戰であつた。内に對しては人間我慾の發現たる權勢爭奪戰であつた。攻者の側に於ては唯だ是れ忌むべき人間の野性と、惡むべき人間の我慾との滿足を得んが爲めに過ぎずして、そこに民族として或は國民としての生存と生活とに基礎せる何等の因由を認めない。西洋の歷史家が一は文化の開拓と稱へ、一は文明の破壞と罵る羅馬の蠻族征服も成吉思汗の歐洲侵畧も、其の性質と目的とに於ては何等の相違はない。共に等しく他國の土地を奪ひ、財產を掠め、異民族を奴隷として自己の快樂に供せんとしたるに過ぎない。唯異なる點は一は同人種であり、他は異人種たるのみである。

併しながら永き年月の經過に於て人心の向上と世態の進步に伴ひ、戰爭の形式と內容とは次第に變化して來た。國際觀念未だ發達せず、經濟意識尙ほ幼稚なりし往古帝王專政時代に於ては、異民族に對する侵畧征服を以て民族發展上正當の權利と認め唯一の手段と爲して居つた。而して此時代に在つては帝王の權力は絶對にして人民の生命財產を私有物と爲し、之が殺生與奪の全權を有して居つた。故に野心深く慾望大なる帝王は恣に侵畧の兵を起して人民を壕の埋め草と爲すを意とせず、人民も亦其の運命に甘んじて居つた。殊に勝者は敵の財產を分捕し敵の人民を奴隷と爲し得たるが爲め、勇敢なる民族は毫も戰爭を厭はなかつた。戰爭の頻發したるも當然である。而して當時に在つては攻防の武器未だ發達せず、弓一張刀一振あれば何人

も戰場に臨みたるのみならず、敗者は財産を奪はれ、妻子を奴隷とせられ、民族全滅の悲運に陷ゐりたるが爲め、老幼婦女も亦防戰に從事したのである。即ち擧國皆兵であつた。

然るに其の後社會組織の進歩と經濟組織の發達とは各種の分業を促がし、兵農も亦自ら二つに分れて各專門の職となり、此處に封建制度を誘成して戰爭は武士階級の專業となつた。而して經濟思想の進歩と道義觀念の向上とは、敵國人民を鏖殺或は奴隷とするよりも寧ろ彼等を其の業に生かしめて誅求搾取することの利益の大なるを覺るに至つた。之が爲め一般人民は單に戰費若くは償金の負擔者となり、縱令敗るにも殺戮或は虜掠せらるゝことなく、直接戰爭に參加することを免れた。是に於てか支配者は專ら自己直接の擁護者たる武士階級の訓練と優遇とに力め、一面に於ては彼等に社會的特權を與ふると共に、一面に於ては君主に對する彼等の忠誠を求むる爲め特種の道德的訓練を施した。英國の騎士道、我が國の武士道の如きが即ち夫である。左れば君主に依つて何等の恩澤を蒙らず唯單なる納稅機械に過ぎざる一般人民は、秦來り治むるも越來り治むるも我關せず焉であつた。即ち此の時代に於ける騎士道武士道なるものは唯君主に對する武士の忠節心に過ぎずして、國家對國民の愛國心ではなかつたのである。

其後更に武器の進歩就中小銃の出現は武士なる戰爭專業、特種階級の存在を不要ならしめ、其結果封建制度衰滅して新に徵兵制度の國民皆兵主義を樹立するに至つた。斯くて封建時代の少數精兵主義より國民皆兵の多兵主義となりたる結果、戰爭の規模自ら擴大して武器彈藥の製造並に其他軍需品の供給に多額の經費を要することゝなり戰爭は漸次資本化して來た。封建制度の沒落は又社會組織に一大變革を來し、從來の武士階級に屬したる多くは或は新時代の軍人となつて軍閥を形作り、或は保守的政治家となつた。而して曾て戰費の負擔者として戰爭の圏外に立ちたる農民は、今や專ら兵士供給者として戰爭の主體物となり、戰費の負擔は主として新興の商工業者に移つた。

(三) 國家我の養成

封建時代に於ては戰勝に依つて利する者は支配者と武士階級であつた。勝つても負けても戰爭の爲め苦しむ者は農民であつた。故に農民は決して戰爭の歡迎者では無かつた。新社會に於ては戰爭に依つて利する者は野心政治家と好戰軍閥と軍事關係の資本家とである。政治家と軍閥とは其の權勢を高め其の榮達を圖るが爲めに戰爭を希望した。資本家は兵器軍需の供給に依り暴富を得んが爲めに戰爭を歡迎した。而かも彼等は勝てば多

大の利益を得、敗くるも損する處はない。自ら戰爭を希望し、歡迎し、挑發し、教唆せざるを得ない。

然るに人智の進歩は、彼等と雖ども最早や國民の同意と支持とを得ずして猥りに戰爭を開始することを不可能ならしめた。一般國民は戰爭に依つて愛する子弟を奪はれ、重き負擔を課せられ、損あるも利する處はない。殊に國民の大多數を占めたる農民、兵士の供給元たる農民の如きは、君主に對する忠節心もなければ、國家に對する愛國心も尙ほ未だ起らない。是に於て戰爭の利を同じふせる彼等政治家軍閥資本家等は相結托して愛國心なる美名の下に國民の敵愾心と好戰心とを鼓吹激發するに力めた。即ち國家教育と社會教育とを利用して盛に國民的自負心、國家的虛榮心、排外的敵愾心、對外的猜忌心を挑發し、利己的自我的なる國權國利國光國威などの語に依つて國民の國家我を養成した。遲く國を開きたる日本も亦歐米先進國の顰みに倣ひ、維新以來朝野を擧げて愛國心ならぬ國家我の鼓吹に努力した。元來排外的敵愾心と國民的自負心とに於て天才的素質を有し、加ふるに眼前に歐米人の無遠慮なる國家我を見せ付けられたる我が國民は、短年月の間に能く長足の進歩を遂げて先師を凌ぐ出藍の譽を博し、獨逸敗れたる今日に於ては世界随一と稱せらるゝに至つた。

斯くの如く偏狹排他的なる愛國心否な國家我を鼓吹するに最も有效なる手段は國民教育殊に小學教育の利用である。其の目的に撰ばれたる教科書と、其の方針に養はれたる教師とに依つて純潔無垢而かも若葉の如く軟き頭腦の所有者たる小學兒童に對し、先づ自國を以て世界中最も正しき、最も善き、最も美しき、時としては又最も富める、最も強き國と教へ、國民的自負心と國民的虛榮心とを吹き込む。次には歷史に依つて修飾せられたる古今の名將勇士の言行を說いて好戰心と敵愾心とを唆り立てる。斯くて普通の兒童は小學校を卒業する頃には、國家我に捉はれたる立派な好戰的愛國者に仕立て上げられる。而して國民の大多數は小學校の義務教育を終はれば直に實務生活に入り、最早や知識と思想との修練を積む餘裕は無い。三つ子の心百までとかで、彼等は此の小學校思想を以て一生を終始するのである。

日本の教科書にも此の臭氣が相當強く鼻を打つて居る。一例を擧ぐれば歷史の教科書中、豐臣秀吉の人物を記せる部に彼は『兵を外國に出して大に國威を輝かせり』とある。吾人の見を以てすれば、秀吉の征韓は神功征韓以後我が國の取れる無名非理なる唯一の侵略戰である。之あるが爲めに我が國の歷史には一大汚點を印せられて居る。素より侵略御免の時代とて、此の點を以て秀吉を責めることは或は酷かも知れぬ。併しながら同

役たるや、師を外に黷すこと前後七年、國民の血と財とを絞り盡して而かも敗戰に等しき退却を據なくして居る。加之我が軍の殘忍なる殺戮と貪婪なる掠奪とは、三百年後の今日尚ほ朝鮮人をして日本を恨ましむるの大害を殘して居る。若し之をしも國威を輝やかしたと言はゞ、侵略の是認、敗戰の稱讃で、忽必烈の日本征討も亦大に彼の國威を輝やかしたものと言はねばならぬ。併し斯くの如きは獨り日本のみではない。歐洲戰爭以前に於ける佛國の教科書は獨逸に對する復仇精神を以て漲つて居たと云ふことである。軍國主義の本場と云はるゝ獨逸に於ては言ふ迄もないであらう。比較的自由主義平和主義と稱せらるゝ英國に於てすら、社會評論家として名聲高きエッチ・ジー・ウエルス氏は「自分をして英國の文部大臣たらしめば世界平和の爲め先づ英國の歷史教科書の改纂を行はん」と日本の某氏に語つたと云ふことである。以て各國の教育方針が平和主義にあらずして戰爭主義なることを窺ふことが出來る。旣に戰爭主義なる以上國家我の養成が必要なるは言ふ迄もない。

斯くの如く養成せられたる兒童も中學に入り高等學校に入り知識見聞の廣まるに從ひ、甞て受けたる小學教育に疑を生じ、最早や學校教師の教を無條件を以て絕對眞と受け入れなくなる。過去の歷史に對し、現在の事實に對し、之が正邪是非の自己判斷を下す樣になる。是等に對しては所謂秘密外交秘密政治の手段に依りて事の眞相を知らしめざると共に、官憲の威力と黃金の魅力とに依り言論機關を壓迫し買收して外國の驕慢不正を宣傳し、由て以て國民の排外的敵愾心を挑發して潜かに戰爭の機運を醸成する。是が從來の帝國主義的政治家、軍閥並に資本家に依りて率ゐられたる國家の執れる常套手段である。官僚式秘密外交を撤去して公開的國民外交と爲し、是非の判斷を國民と世界とに問ふにあらざれば世界の平和は望まれない。

（四）愛國心と國家我

世に似て非なるものは頗る多い。節儉と吝嗇、自信と己惚、謙讓と卑屈、隱忍と屈伏、協調と苟合、磊落と粗野、熟慮と遲疑、大膽と無謀の如きが夫である。一は人間の美點善德とせられ他は人間の缺點惡德とせらるゝも、其の間の區分は甚だ不明瞭にして唯其の人の心性に從つて判ずるの外はない。刺客朝日の刄に殪れたる安田氏の如きも、世人或は節儉と稱して其の德を讃め、或は吝嗇と罵つて其の罪を責めて居る。死後の三百五十萬圓だけでは之を判斷することは出來ない。華府會議に列した某全權に對しても、或人は彼を自信の强き人と評し、他の人は彼を己惚の烈しき人と嗤つて居る。其の他或は大慾は無慾に

似、大奸は忠に似たりと云ひ、或は大賢は愚なるが如く、大勇は怯なるが如しと云ふ語もある。國民的思想にして似て非なるものに愛國心と國家我とがある。愛國心と國家我とも亦之を明確に區別することと困難である。唯大體に於て愛國心は國際的正義觀念に立脚し、國家我は國家的利己主義に發足して居る。而して多くの國民は誤まれる教育の咎に依り愛國心と國家我とを混同し、否な寧ろ國家我の發揮を以て愛國心の流露と考へて居る。

抑も愛國心とは之を小にすれば家族に對する愛、鄕黨に對する愛となり、之を大にすれば世界に對する愛、人類に對する愛に迄發展し得べき性質のものである。之に反し國家我とは獨逸哲學に謂ふ所の「國家は最高の道德なり」との思想に出發せる國家至上主義に基礎せるを以て、最早や之を全世界的全人類的に伸展することが出來ない。國家は最高の道德なるが故に國家の名に依つて爲す處、命ずる處は、其の對內なると對外なるとを問はず總て悉く善であると思惟する。國家至上なるが故に自國の利益即ち正にして他國の利害を顧みる必要がない。秀吉の朝鮮侵略を以て國威發揚と認むる如きも國家至上主義の發露である。即ち愛國心は國際協調を保ち得るも國家我は國家以外に進めることは出來ない。自我主義が個人間に於て罪惡であるならば、國家我主義も亦國際間に於ける罪惡と謂はねばならぬ。故に自我の强き者が社會に容れられざると等しく、國家我の强き國民は國際間に容れられず、常に世界に孤立せねばならぬ。

教育低き國民が國家我の奴隷となるは政治教育の罪にして國民を責むるは酷である。彼等は之を以て衷心より純潔なる愛國心と信じて居るのである。併しながら高等の教育を受け國政樞要の地位に在る人にして尙ほ往々國家我に拘はれ國際協調の精神を缺如せるものが少なくない。我が國の政治家中にも、國內に於ては鼓を鳴らして政府外交の不當を論難攻擊しながら、事一たび對外交涉となるや忽ち態度一變、言を極めて政府を辯護し外國を非難する如きものがある。而して斯くの如きを以て愛國家として自らも任ぜば世人も許して居る。具體的の事例を擧ぐれば、對支廿一個條に對し國內に於ては其の撤廢を叫びながら、日支交涉となるや政府の爲めに之が存續の辯護を爲すが如きである。而して曰く、兄弟牆に鬩めぐも外侮を受けずと。世界の國は一二でない。斯くの如き國家我に依つて縱令相手國の小なる侮を防ぎ得るとするも、全世界の多くの國より不信不義の大なる侮を受くることを忘れたるものである。國家の體面上一旦言ひ出したる自國の主張は是が非でも突き通ふせ、國家の威信上一度握りたる利權は理が否でも放すなと云ふのが國家我

病者の思想である。

子が親の暴行を諫止するのは正しき行爲である。併しながら相手が親に對して正當の要求を爲すに當り、子が親の暴行を助けて相手を取りひしぐ如きは決して孝の道を盡せるものと云ふことは出來ない。國家我病者の愛國心なるものは、正に此の子の孝に類するものである。寛大なる裁判官と雖ども恐らく彼を孝子として情狀を酌量せぬであらう。國家の信用を損し、國家の名譽を傷け、國家を危險なる孤立の地位に陷ゐるゝものは、是等の誤まれる愛國主義者である。

(五) 勞働階級の非戰的覺醒

斯くの如き誤まれる似非愛國心即ち國家我の淸算が過般の歐洲大戰である。聯合側も、獨墺側も、共に罪を相手に歸して己を正しと謂ふて居る。外交の秘密と國家我の宣傳とに依りて眩まされたる双方の國民は恐らく自國を以て正と信じて居たであらう。此の盲目千人の中で戰爭の眞相を喝破したものは、英國のバーナード・ショウと獨逸のニコライ博士の二人位に過ぎないと思ふ。五年間に亘り一千萬の人間を殺したる慘ましき恐ろしき戰爭の禍害を目擊し體驗したる歐洲人は、勝ちたるも敗けたるも、等しく國家我の夢より覺め初めた。政治家も、軍閥も、帝國主義者も、資本家も、勝つて却つて苦しむの結果を見、初めて戰爭の無意義と無利益とを覺つて來た。是に於て彼等は從來執り來れる國家我教育が國家の爲め若くは自己の爲め何等益する處なきを知り國際協調主義の叫を擧ぐるに至つた。其果して眞に人道主義に目覺めたるか、或は又戰後の窮境を脫せんが爲めの方便かは知らねど、戰苦を甞め戰禍に惱める歐洲人の多くが今日平和を慾求し平和に憧憬せるとは、戰禍の中心を隔つること一萬海里、殊に戰爭成金の夢尚ほ醒め切らぬ日本國民の想像以上に眞劍且つ强烈であると思はれる。

就中、反戰爭主義の最も濃厚にして平和思想の最も强烈なるは勞働階級である。彼等勞働階級は軍閥資本家等に依つて叫ばれたる愛國心の假面を被れる國家我の聲に瞞まされて、世界平和の爲め、正義擁護の爲め、民族生存の爲めと信じ、最愛の父と夫と子とを冷き塹壕の埋草と爲して厭はなかつた。然るに戰爭の結果として現はれたる平和條約なるものは彼等の期待に背くこと遠く、平和の爲め、正義の爲め、民族の爲めと信じて戰ひたる戰爭は、唯政治家軍閥資本家、復讎の爲め、野心の爲め、利己の爲めの戰爭であつたことを覺つた。殊に勝ちて尚ほ得る處のものは唯失業と生活苦とあるのみであることを知つた。

元來勞働者並に貧民は戰爭に依つて、勝つも負くるも事實に於て甚だしき利害の影響を受けない。一日稼いで一日の食を得る彼等は、勝てばとて一日稼いで三日の食を得ることも出來ねば、敗くればとて直に産を失ふて餓死する虞もない。之に反し戰爭は彼等自身と彼等の骨肉の血と命とを、下水の如く、土石の如く、戰場に運び棄てる。歐洲戰爭の結果に照らせば勝てる英米に失業の叫び高くして、敗けた獨逸に於て却て失業が低い。敗けた獨逸國民が復活の希望に燃ゆるに反し、勝つた佛國々民は戰々兢々として獨逸の報復を唯是れ恐れ、坐ろに勝者の悲哀を感ぜしめるものがある。左れば勞働者や貧民に積極的に自發的に、戰爭を欲するものでもなく、又好むものでもない。唯彼等は歷史に依りて、人智未開、國際無法時代に於ける敗戰國の慘狀を例として、民族生存、國家獨立の爲め國防の必要を敎へられ、侵略御免、分捕勝手時代に於ける戰勝國の榮華を例として、民族繁榮、國家發展の爲め戰爭の有利を敎へられた。民族として其の生存と繁榮を望まざるものはない。國民として國家の獨立と國家の發展とを欲せざるものはない。彼等は此の敎訓に依りて國防の爲めには命稅を負ふを厭はせず、戰爭の爲めには血稅を拂ふを辭せなかつたのである。然るに歐洲戰爭は、左なくとも經濟上に自覺せんとせる彼等の眠の夢をば霹靂の如く呼び覺ました。而して彼等は叫んだ。曰く、我等に取りて何の爲めの戰爭ぞ、我等勞働者は四海兄弟である、兄弟互に殺傷して資本家の腹を肥やし野心家の欲を滿たす何等の愚ぞ、と。

(六) 戰爭の勞働化

封建制度の沒滅は制度的には武士廢れて國民皆兵となり、精神的には武士道變じて所謂愛國心となつた。而して國民皆兵は戰爭の資本化となり、資本家の同意と援助なくして戰爭は行はれなくなつた。即戰爭の鍵は資本家の掌中に握られたのである。然る處資本家の多くは戰爭に依りて利得を受くるが故に戰爭を歡迎した。政府に戰爭を好む軍閥及野心家あり、民間に戰爭を望む資本家あり、好機到來せば戰爭を開始することは誠に容易である。然るに歐洲戰爭の實驗は戰爭の性質に對して更に大なる一新紀元を劃した。即ち科學の進步は兵器の發達を促がし、交通の發達は輸送の便利を增した。之が爲め戰場に大兵を運ぶこと益容易に、彈藥軍需を要すること愈大となり、戰爭は最早や資本と兵力とのみでなく、工業の力を要するに至つた。戰爭の工業化である。工業の要素は資本と勞働とである。故に戰爭の勞働化とも云ふことが出來る。之を以て今後の戰爭は勞働者の同意なくして遂行することは出來なくなつた。故に若し列國の

勞働者が聯盟提携して戰爭に反對すれば、軍閥資本家等が如何に焦慮するも戰爭を開始することは出來ないのである。兩三年前英國が露國過激派征伐を企てたる際、英國勞働者は相聯合して露國出兵反對を決議し、海運勞働者は露國に向ふ一兵をだに運ぶことを拒んだ。流石に多才多智のロイド・ジョージも手の下し樣がなく遂に其の計畫を拋棄するの止むを得ざるに至つた實例もある

　されば世界の平和を確立する爲めに最も確實にして而かも最も捷き路は、戰爭に依つて害を被むるも利を受くることなき勞働者の平和聯盟である。彼の帝國主義的ブルジョア政治家の手に依つて作られたる國際聯盟や、華盛頓會議や、ゼノア會議の如きに對しては到底滿足なる成果を望むことは出來ない。世界勞働者の反戰爭思想は今や龍達の如く動きつゝある。併しながら我國に於ては軍器製造勞働者の失業を理由として軍備制限に反對する勞働指導者すらある今日、彼等が果して此の目的の下に鞏固なる世界的結合を遂げ得るや否やは尙ほ大なる疑問である。加之一方に於ては種々の宣傳と威壓とに依り、漸く覺めんとする此の勞働者の自覺を再び眠りに就けんが爲め催眠術を施して居る國もあると云ふ。

（七）平和に進むの途

　之を要するに獨り勞働者のみと云はず、世界文明國民の心裡には、其の人道的理想主義なると、現實的功利主義なるとの差別こそあれ、國際協調に依る平和の思潮は蔚然として蔓こりつゝある。其と同時に資本と權勢とを背景とせる反動思想も亦相當に動いて居る。故に世界の國民が眞に人類愛の爲めに平和を希望するならば、先づ此の似非愛國心なる國家我に執着せる反動思想を撲滅することが肝要である。而して之を爲すには國民教育の根本精神をば自國本位の自我主義より人類愛の國際協調主義に改むると共に、外交の秘密を徹廢して國際間の疑惑を除くことが必要である。一方に於ては愛國心の名の下に國家我を鼓吹しながら、他方に於ては世界平和の爲め國際協調を說く如きは矛盾撞着の甚しきものである。

　歷史は愛國心を養成すると稱するも、今の歷史は其の愛國心を養成するよりも寧ろ國家我を激發せしむるものである。眞の愛國心は人間天賦の性能である。凡そ人として愛の心を有せさるものはない。先づ自己を愛し、次に眷族を愛し、鄉黨を愛し、國を愛し、世界を愛し、人類を愛する。若し國家愛の爲めに自我を犧牲に供することが人間の道であるならば、同時に世界愛

の爲めに國家我を棄つべきである。若し國家の行爲にして正しければ何れの國民として其の國を愛せざるものはない。何等教へられざる阿弗利加の黒人と雖も國を愛する心はある。併しながら愛國心は或る程度に於て國家より受くる各人の恩惠に正比して其の强弱の度を異にするを免れない。恰かも偏頗の待遇や虐待を受くる子が、親に對する孝心の乏しきが如くである。故に國家にして國民の强き愛國心を養はんとせば、政道を公正にして國民をして其の生活に安んぜしむることが必要である。斯の如く自然にして且つ合理的に發達したる愛國心にして、初めて世界の公道を濶歩し得ると共に國家としての大事に處することが出來る。彼の權道と技工とに依つて作られたる似非愛國心即ち國家我の如きは、强ければ强き程、大なれば大なる程、國家を世界に孤立せしめ其の存立を危ふするものである。

世界の平和を說くことは易い。正面より之に反對を唱ふるものは殆んど無い。併し實際問題としては、現在各國政治の局に當れる人の多くは或は有意識に或は無意識に國家我に捉はれたる舊人物である。程度の差こそあれ獨り日本のみではない。最近聞く處に依れば日本の國際教育協會より國際聯盟に建議したる國際教育聯盟の如きも、各國委員間には時機尚早の意見が多かつたと云ふことである。世界の平和と云ふ如き大問題は今の舊式ブレジョア政治家に取つては餘りに高尚過ぎるかも知れぬ。殊に黨爭と漁利とに沒頭して、國家もなく、世界もなき日本の政治家に對しては、恐らく猫の小判の觀があるであらう。吾人の世界平和の達成に對する第一の期待は世界勞働者の非戰聯盟である。次は國際教育聯盟に依つて國家我教育の撤廢である。第三は外交を開放して是非の判斷を國民に聞くことである。但し第三に對しては言論機關の嚴正なる獨立と、言論の自由の確保とが先決問題であることは言ふ迄もない。

（附　記）

自分は嘗て「此一戰」及「次の一戰」の二書を著はし、前者は日本海々戰の戰況を、後者は日米戰爭の夢物語を著いた。素より兩書共に國民の好戰心を唆るが如き意志は毛頭有せざりしも、大に國防軍備の必要を說いた。今日より見れば有害無益の著述として非難を受くるかも知れない。併し當時の國際狀態に於ては此の種の書物を實際に必要としたのである。從ふて自分の行爲が過失であつたとは今日に於ても考へて居ない。唯同書の讀者にして今日尚ほ當時の如き思想と見解とに捉はれ居る人ありとせば、自分も亦其の責の幾分を免れない譯である。後書は出版後間もなく絶版とした。前書に

對しても亦之を絶版したき希望を有するも、出版者との關係上意の如くならざるを甚だ遺憾として居る。當時と今日とに於ける自分の意見若くは主義の相違に對し敢て一言を辨ずる次第である。

資本主義的經濟觀を改めざれば世界平和幷に人類愛の實現難し

法學博士　堀江歸一

戰爭の傷痍大なり

歐洲戰爭は之を經濟上から見ると、吾人の生活に大なる打撃を與へ、今や交戰諸國は容易に恢復するを得ない傷痍に苦んで居る。而して此打撃から全く恢復するには、數十年なり、又は百年なりの歳月を要するであらうと云ふことが一般に認められて居る。蓋し交戰諸國が戰爭の爲めに負担した直接戰費だけを計算しても、千八百六十二億三千三百六十三萬七千弗と爲る。間接戰費即ち人命財産に及ぼした損害や、生産の停止、減損の如きは、之を計算するに、甚だ困難であるが、其れも大凡そ千五百十六億一千二百五十五萬二千弗に上ると稱されて居る。而して右直接戰費に對する財源の大部分は交戰諸國の何れに於ても公債に仰いだことの結果、諸國には戰後の今日公債山積の狀態であつて、其利拂だけで、財政を壓迫し國民に苦痛を加へる。一方に此莫大なる公債は決して當時の國民貯蓄に依つて、應募されたものではない。公債の方が遙に國民貯蓄を超過することの結果自然の成行に任せたならば、之に對する應募を收めるのは、至難の業たらざるを得ない。斯くて交戰諸國の政府は公債應募を容易ならしめる爲めに、不換紙幣の過度に發行されたことは、通貨制度を破壞し、通貨價値の低落を惹起し、國民生活に大なる動揺を生ずるに至つた。此一事は今歐洲諸國の最も苦痛とする所であつて、現に最近ゼノア會議に於ける經濟財

政委員會の決議中通貨價値の安定を圖る必要、其爲めに各國の發券銀行を政治的壓迫から獨立させること、歳計の不足を補ふ爲め制令的通貨や、銀行信用を膨脹させては、到底通貨の安定を期し得られないことの諸點のあるのを見ても、如何に今日歐洲諸國が通貨價値の不安定に苦惱しつゝあるか、而して之に對する政策の實行に行き惱んで居るかの一斑を類推するに難しとしないのである。

斯る財政とか、金融とか云ふような限られた方面でなく、國民經濟の全體に戰爭の及ぼした影響を考へると、(一)資本並に勞働を生産業から奪つて、不生産若しくは生産破壞の用に就かせた結果、富の生産に減少を來し、(二)國際間に於ける交易並に交通の自由を束縛し、一國の經濟をして國と云ふ狹い領域の下に蹋蹐せしめ、戰後に於ても對外企業や、對外放資は戰前に比較して、不利益なる地位に居る、(三)戰時國際間の經濟的交通の不自由に爲つたことは、自然一國の經濟生活をして國内自給主義に傾かせ、自國に於て生産條件の不利であることの明瞭であるに拘はらず、尚ほ斯る事業に自國の資本を投入させ、(四)戰後外國との交通の恢復するように爲つた今日、斯る代用的事業が外國の競爭を受けて、存立上に困難を告げる場合に差迫ると、關税其他の保護的手段に依つて、斯る生産條件の不利なる事業を一國に存續せしめようとし、(五)戰時經濟社會に起つた不公正なる富の分配殊に一部階級の間に行はれた富の領有は社會に不健全なる消費を獎勵し、戰後の今日に至つて、尚ほ此種の流弊の杜絶されざることの諸點は戰爭の經濟的害惡として、今日に於ては何人と雖も、之を、承認せざるを得ないであらう。

戰爭に經濟上の利益なし

或は戰爭の經濟的利益を假想して、經濟上の見地から、戰爭を辯護しようとする試みは從來屢々行はれた。即ち(一)戰爭が國民に統一を重んずる精神を強くするとか、(二)外國に領土を擴張する方便を與へるとか、(三)償金の徴收に依つて、戰費を償還するに至るとか云ふのは、其れであつて、専ら獨逸經濟學者の主張する所と爲つた。然しながら斯の如きは一部の好戰論者が戰爭其ものに對して、經濟的承認を與へる目的の下に、理不盡にも作爲した僻論であつて、私は經濟學なり、經濟政策なりの見地に於て、全然一顧だも値せざるものとするに躊躇しない。戰爭は國民に統一的精神を與へると云ふ。然も其統一なるものは、上長が權力を挾んで、下僚に望む關係から生ずるものであつて、其間に強制の動かす可からざる事實ある以上は、斯る統一は却つて個人の創始力を傷ける嫌なきを得ない。戰爭に

依つて、戰捷國が領增を擴張すると云ふことは、其國に或る經濟的利益を與へるに相違ないが、同時に此利益は領土を略奪される戰敗國に加へる損害に依つて、相殺されるのみならず、從來國際間に領土の與奪が行はれたればこそ、或は軍國主義を誘致し、或は經濟的帝國主義を助成し、様々の方面から、國際間の平和維持に大なる妨害と爲つたことは、爭う可からざる事實に屬するのである。償金の授受も亦經濟的損害の著しきものである。如何にも償金を受領した國は濡手に粟を摑む位の利益を受けるようなもの丶、同時に國內に於ける投機熱を盛にし、國民をして不知不識の間に、奢侈や浪費に慣れしめたならば、功罪孰れに在るかを斷定することの出來ないばかりでなく、償金を支拂う國の購買的能力に減損を來し、償金領收の償金支拂國に對する輸出貿易を衰頽させるに至つたならば、償金の領收は之を領收する國に取つて、幾何の利益を與へるであらうか、吾人の判斷に苦む所である。現に今日償金の支拂に苦しめられつ丶ある獨逸は外國に物資を供給することも出來なければ、外國に就て、物資を需要することも出來ず、自他互に苦しみ、聯合諸國の間に償金輕減論の生じ來つたに徴しても、事の一斑を解するを得るであらう。

最後に戰爭の經濟的患害として、私の指摘する所のものは、經濟社會に無用無意義の波瀾を惹起すに至ることである。蓋し今日の戰爭に於ては、今回の歐洲戰爭に依つて、證明された如く、軍事費に對する財源の大部分を公債の募集に仰ぐのである。斯くて、戰爭の行はれつ丶ある時代の國民には何等の苦痛を與へず、又大した負担を及ぼさない、寧ろ政府が公債募集を通じて收め得た資金を以つて、國內に於ける物資や、勤勞に不時の需要を爲す爲めに、物價なり、賃銀なりに、著しき騰貴を來さしめる、斯くて齎された經濟社會の繁榮は一時の幻影の如きものであつて、戰爭が終熄し、物資勤勞に對する需要の消滅すると共に、其處に大なる反動を醸し、曩に人爲的繁榮の致されたのと反比例に於て、不景氣を誘うに至らざるを得ない。今日歐米諸國や、我國の經濟社會は正に此狀態にあるものであつて、斯る有樣を以つてしたならば曩日の利益と今日の損害と、孰れが大であるか、判斷に苦む、唯明瞭であるのは、戰爭なるものが經濟社會に波瀾を起して、傷痍を後日に貽す一事に外ならないのである。

平和論の起るは當然

斯の如き幾多の事情を考へたならば、今日經濟上の見地に於て、世界平和を重んずる思想の生ずることは、敢て異とするに

足らない。平和思想なり、平和運動なりに就ては、必ずしも今日に始まつたものとするを得ない。現に英國に於ては千八百十六年倫敦に平和協會なるものが組織され、基督教主義に據つて世界に永久的一般的平和を確保することの信條の下に、今日に至るまで行動を續けて居り、他の諸國に於ても、其れ〳〵同一種類の團體が設けられて、同一の目的に向つて、進んだ次第でり、更に公的性質のものとしては、千八百九十九年露國皇帝に依つて、千九百七年和蘭女皇に依つて、召集された平和會議の如き、最も著明なることを失はず、現に是等二個の會議に於ては、世界平和を維持する目的を以つて、種々の條約の成立を見たのであるが、斯る平和運動に幾何の程度まで實際的效果の認む可きものがあつたかと云へば、少しも之を認めるを得ない。斯る平和運動の行はれつゝある一面に於て、歐洲諸國は所謂武装的平和の下に、互に武備を嚴にし、然も假裝敵國なるものを設けて、之に讓らざる、又之を凌駕する程度に於て、軍備を維持し、一朝對手國に乘す可き際があつたならば、直に武力を以つて壓迫を加へ、斯くて自國の利益を謀らうとし、又軍備擴張に要する費用なり、又軍備維持に伴つて、經濟社會に及ばす負担なりを賠還する爲めに、軍備を經濟上に利用して、商品市場の擴張、放資範圍の保護、領土の獲得等を企て、所謂經濟的帝國主義の下に、經濟上の關係から、一國は互に他國と相拮抗し、戰爭の開始を已むを得ざるに至らしめた事實の顯然たるものがある。由來經濟は生產を目的とし、戰爭は破壞を手段とする、此位兩立す可からざるものは、他に其匹を求るを得ない次第であるのに、經濟的帝國主義は軍備に依り、又は戰爭に依り富を破壞しつゝ、尙ほ經濟の發展を謀らうとする、其間に偏私邪曲の潜むものゝあることは、論を俟たないであらう。

如何なる偏私如何なる邪曲が從來國際經濟の關係を律するに當つて、潜んで居つたかと云へば、世界全體に存在し、又世界全體の用に供され可き富を或る限られたる者の間に於て、利用するに止め、其限られた者を益々富まし、豐にしようとする考は偏私邪曲の最も大なるものであつた。即ち經濟的帝國主義に就て考へる。如何に此主義が未開國に適用されたかと云へば、資本の供給に豐富なる國は此資本を未開國に供給する、其供給する方法としては、自國の資本家をして未開國に於て、富源を開發するに資す可き企業を起させる、斯くて自國の國民や、資本が其企業の進むに隨つて、未開國の或る地點に集まつた曉に其地點にして海上交通の行はれる場所であれば、軍艦を派遣し其場所が陸上の奧地であれば、軍隊を駐屯させ斯くて武力の下に、經濟の發展を助け、而して其產出された富源は勉めて之を

自國に蒐集し、獨占し、以つて自國工業の發展を助けようとする、否當初から自國に有用なる富源に限つて、之を開發し、一方に未開國の富源開發に依つて、未開國民に購買的能力が生じ來つたならば、彼等に向つて、自國の物資を賣却する、否専ら自國の物資に對する獨占的市場たらしめようとする。是れが實に多年有力なる諸國の經濟政策を律する基調と爲つた經濟的帝國主義の一斑である。

右の如き、狀態の下に、經濟的帝國主義が發展し來つた結末は如何であるか。英獨兩國の經濟的爭覇は久しい間の問題であつて、阿弗利加に、南亞米利加に、中央亞細亞に、極東に、近東に、兩國は互に勢力を張ることに急であつた。世界未開地を以つて目され可き領域の茫漠たる間は、兩者の衝突を緩和する餘裕も求められたようであつたが、領土に自ら限りあつて、一方に經濟的慾望の赴く所に限りなき場合には、兩者が互に他を倒す目的の下に、武力を用ひようとするのは、已むを得ざる勢としなければならず、歐洲戰爭の原因を經濟上の方面に求めたならば、先づ指を英獨兩國の經濟的帝國主義に屈せざるを得ない。而して戰爭の終熄した今日、一方の對手であつて、而して戰捷國と稱される英國は眞に開戰の目的を達し、獨逸の倒れた後を承けて、世界到る所に横行濶歩し、其經濟的威力の發展を求め得るかと云へば、先づ眼前に獨逸に代る大敵として、北米合衆國が現はれ來つたばかりでなく、假に此敵手がなかつたとしても、數年間の戰爭に依つて、疲憊した國力を以つてしては戰前に懐抱した所志を果すが如きは、今日の英國に於て、何としても望む可からざる所に屬するのである。

諸國の非戰的感情

斯の如く觀察を下して來れば、歐洲戰爭を一段落として、交戰諸國の間に於ては勿論、戰爭を親しく實見した中立諸國の間に於ても、經濟上の見地から、平和論の湧起することを以つて、當然としなければならぬ。更に之に向つて勢を加へるものは、國民の非戰的感情である。歐米諸國には近年南阿戰爭とか、米西戰爭とか巴爾幹戰爭とか云ふような一局部に於ける小規模の戰爭は屢々行はれたが、其範圍の限られて居る結果、必ずしも大なる影響を民生に及ぼすに至らなかつた。戰爭は如何に人生に悲惨なるものであるかに就て、現代の歐米諸國民は何等體驗する所を持たなかつた。唯彼等は戰爭の生み出す悲惨事は斯うもあらうか、あゝもあらうかと想像して、平和運動に從つたのに止まるのであるから、其運動に一種の熱情伴はず、動もすれば閑散階級の鎖閑的仕事に化する趣の存することを免かれなか

つた。然も今日は決してさうでなく、歐米諸國民は盡く歐洲戰爭に依つて鐵火の洗禮を受けたのであつて、其或る者は四肢の一を失ひ、其或る者は最愛の近親に死別し、其或る者は生れも付かぬ不具者と爲り、癈疾者と爲つた子弟を家郷に迎へるなど、慘鼻の限りを實感し、戰後の今日尙ほ當時の憂愁を脫することが出來ないとすれば、彼等の感情が凝つて非戰論と爲り、平和論と化するのは、勢の然らしめる所であつて、今日諸國に平和論の旺盛であることに對しては、此民衆の勢力を閑却するを得ない。

平和運動に對する吾人の不滿

卽ち私は今日國際間に世界平和を重んずる思想の生じ來つたことを以つて、當然と考へる。思ふに今日に於ては、弱い者苛めを事とする國權擴張論者が、戰爭あるを知つて、他に何ものをも知らない職業的軍人の一團を除いては、平和思想の圈外に立つ者はなかる可き道理である。然るに實際平和運動なるものが如何なる狀態の下に、行はて居り、又如何に其れが進んで居るかを考へると、私は其處に大なる不滿足を感ぜざるを得ない。歐洲戰爭の終熄を告げて以來、國際間に幾多の會議が開催された。國際聯盟會議華聖頓其他に於ける國際勞働會議、ブラッセルの國際財政會議、華聖頓會議、最近のゼノア會議等其重なるものであり、而して國際聯盟會議に於ては、武力以外の方法を以つて、國際間の爭議を解決する原則が定まり、華聖頓會議に於ては、海軍國の間に、海軍力を制限する協定が行はれ、其他の會議に於ても、其れ〲或る決議が公表されて居る。是等の決議は如何にも其全然行はれない場合に比較したならば、行はれた方が世界平和の維持に資するかも知れないが、眞實世界平和を徹底させるだけの精神が充分に國際間に備はつて居ることは、今日までの處では、未だ之を認めるを得ない。私は左に世界平和を徹底させる點から考へて、諸國の未だ盡さゞる諸點を擧げようと思ふ。

第一海軍が華聖頓會議の決議に據つて、縮小され、續いて海軍休日の行はれる以上は、陸軍も亦當然縮小されなければならぬ譯である。經濟上の關係から云へば、海軍に於て、國民の勤勞を軍事上に收用し、又之を束縛する分量は必ずしも大でないに反し、陸軍に於ては年々幾十萬の壯丁を徵募し、生產上に致され可き勤勞を驅つて、不生產の用に就かしめる次第であつて之に整理を加へ、縮小を施すことは、大なる分量に於て勤勞を解放し、進んで資本を解放する所以と爲る。經濟上の見地から平和が尊重され、平和維持の手段として、軍備が縮小されるも

のである以上は、其縮小は結局軍備の撤廢まで、進まなければならぬ道理であり、又軍備の或るものをも、存して置いては、何時之を實際に試みる機會を與へるかも知れず、隨つて戰爭の禍機は今日に於て依然伏在しつゝあるものと考へなければならぬ。其れは今度の戰爭に際して、英米兩國が試みたように、平生國民に與へる訓練の如何に依つては、有事の際に急速に多數の兵員を得ることも、架空の望でない、隨つて陸軍の撤廢は絶對に戰爭の不可能と同一視するを得ないが、一國に職業的軍人があつて、其れが一ツの閥を作り、其閥內に於て、立身出世を謀つたり、又特殊の感情を養成することが從來諸國に於て好戰的氣風の下に軍備を盛にし、又斯く盛にされた軍備を實用に供するに至る有力なる原因と爲つた事實は、之を爭うを得ない。軍備撤廢の後に於ても、國家が國民に護國の任務を負はせることは必要であり、又此任務を全うする爲めに、軍事上の訓練に當らせることも必要であらう、唯吾人は職業的軍人の集團を置いて、好戰的氣風を養うことを不可なりとするのである。然るに今日列國の內に平和主義に就くと稱しながら逆に護國の必要に超越する程度の陸軍を擁して、平然たるものゝあるのは、吾人の奇怪とする所であつて、平和主義の徹底せざることも、亦甚だしとす可きである。

何故に經濟政策を一新せざる

第二既に列國が世界平和を理想とし、之を實現することに終始する以上は、經濟政策上にも大なる變化を生ず可き道理である。蓋し從來國際間に經濟政策を律する一ツの思想として、自由主義なるものがあり、此主義の下に於ては國として自他の差別を立てない、自國を解放して、廣く他國の國民、資本、商品船舶を迎へ何等の制限を設けないが如く、他國にも同じく自國の國民資本、商品、船舶を容れしめよう、斯くて國際間に分業の理法を擴張しようと云ふことが主張された。個人間に於て、國內間に於て、分業の理法を適用することが人の能率を高め、又生産を增殖する所以である以上は、國際間に同一の理法を適用するに憚る所ある可からざる道理であるのに、實際には斯る自由主義の經濟政策を實行する國は列國を通じて、一ツもなく或る程度まで上記の諸件に就て一國と他國との交涉が頻繁に爲らうとすると、必ず之に對して制限の加へられるのを常とした。其之を制限する理由は色々の關係に於て、說明されるが、其內の一ツとして、吾人の見逃す可からざるものは、戰爭に對する準備に藉口する議論である。即ち一國が國際間に分業の理法を擴充する考で、貿易其他の關係を密接にし、自他の間に餘

くまでも長短相補ひ、有無相通ずる方針を取るとする、平時に於ては、其間に何等支障を生ずることなしとしても、一旦戰爭と爲つて、國際間の關係の斷絶した際には、如何なる結果を生ずるであらうか。原料品を外國の供給に依賴したり、食料品を外國に就て求めて居つたりした國は産業維持の上に、將た又國民生活の上に、大なる攪亂を來さゞれば已まない、斯る危險の存する以上は、戰爭に對する準備として、或る程度まで國內自給の方針を以つて、經濟生活を律することは、已むを得ざる所と認められる。アダム、スミスが一方に貿易自由の利益を鼓吹しながら、他の一方に於て「國防は繁榮よりも、重要である」と云ふ原則を高唱し來り、國防を完成する爲めには、經濟上の繁榮も亦犧牲に供へなければならぬものであるとしたのも、以上の道理を認めた結果に外ならぬ。

此他國際間の金融國際間の運輸交通の如き、或る程度まで自由に行はれるように爲ると、外國から資本の供給を受けた國は戰時に臨んで、遽に資金を回收されることを虞れる、外國の海運業に依賴して、物資の輸送を行ひつゝある國は不意に船舶の引上げられることを掛念し、船舶や、資本の國內自給を計畫し如何なる不利の條件を忍んでも、其目的を達しようとする。是れ亦前途に戰爭の危險ありと認めた場合に、起る一ツの疑惑であつて、アダム、スミスが一般の信念に反きつゝ、航海條件を承認したのも、同巧異曲の趣なきを得ない。

以上の見地から從來諸國は經濟政策を律する上に於て、國際共通を旨とすることが出來ず、重要なる點に於て、制限を加へなければならなかつたものであるとすれば、歐洲戰後世界平和の維持が國際間の協約に依つて、保障されるに至つたこと、今日の如き場合には、列國は之に信用を拂つて、國際間の經濟的關係を密接にしなければならない。即ち戰爭に依つて、平和時代の關係の打破される虞れの絶無と爲つたからには、列國は互に自他の腹中に飛入つて、出來得る限り、相倚り、相助けて、其間に國際經濟共通の實を擧げ可き道理である。然も列國の爲す所又は爲さんとする所は今日斯の如く爲つて居るであらうか。爲つ　居つてこそ流石に世界平和確立の効果ありとするを得るのであるのに、實際は反對の方嚮に向つ　居り、多年自由貿易を以つて一貫して居つた英國ですら或は戰時新興の産業に對しては、關稅上の保護を加へ、或は殖民地から供給　れる貨物に對しては、特惠關稅を施して、其輸入を便にし、或は爲替相場が國內に於ける不換紙幣價値低落の結果として、外國に對し、國內の物資を輸出するに便に爲つて居るような國の物資には差別的輸入稅を重課するが如き方針を行ひ、着々貿易上の關

係の發展す可き自然の趨勢に制限を加へ、外國に對する經濟的關係の密接ならんとすることを妨碍して居る。自由主義の重んじられた英國にして斯の如しとしたならば、他は推して知る可しである。世界平和が唱へられて、一方に何故に貿易通商上の政策は開放を旨とするに至らないのであるか、私の不可解とする所である。

資本主義制限の必要

第三從來世界を通じて、强國の間に經濟的帝國主義の行はれて、已まなかつたのは、資本主義の跋扈、之を然らしめたのである。資本主義の下に、大資本家の利害を代表する者が一國の生産を管理する、彼等は資本家たる信用を通じて、世界到る所から、資本を醵集して、事業の規模を擴張し、大量生産法の下に、內外諸國に於ける需要を目標として、生産に從ひ、斯く生産された物資を外國に賣却するに就ては、其市場を自國權勢の下に置き、又國家の權勢に依つて、之を擴張しようとし、又斯る大規模産業に於て必要とする原料品の如きも、亦自國權勢の加へられる場所に於て、生産され、以つて其供給の安全を確保しようとする。卽ち資本主義は經濟的帝國主義の下に發達し、又此主義の適用に依つて、完成されるものであつて、隨つて從來國內に於て資本主義が跋扈したればこそ、經濟的帝國主義が其剌戟に依つて、實行されたとも云へる。殊に一旦一國が戰爭に干與したとして、今日の獨逸の如く、戰敗の憂目を見る場合は兎に角戰爭の順調に進行しつゝある場合に、利益する者の資本家に外ならざることは、明白の事實であり、更に戰爭準備の爲めに、國家が製鐵、造船其他戰爭の遂行に必要なる事業を保護奬勵する場合に、利益を受ける者も亦資本家に外ならない。資本主義の發達が經濟的帝國主義を刺戟して、戰爭の禍因を釀成し、資本家が自己の利益關係から、更に戰爭の誘發に力を致すことは、之を推すに難しとしないのである。誠に戰爭は資本家の爲めに、萬卒の骨を枯らすものと云はれよう。

然らば世界平和を永遠に維持しようとか、又は其確立を謀らうとかする場合には、吾人は其根本的政策として、資本主義を基礎とする從來の經濟組織に或る制限を加へることを以つて、急務であると考へざるを得ない。歐洲戰爭中各國共に勞働者の社會的地位が上進したことは驚く可きばかりであり、戰後に於ては彼等を生産者の一員として、産業の管理經營に干與せしめなければならぬ狀勢と爲り、或は社會秩序に著しき變更を見るか、又は私有財産權を基礎とする從來の經濟組織に革命を來すに至りはしないかと想像されたが、多くの國に於ては、資本

的生產制度は依然として舊の如き有様であり、若へ方の當否は姑く別として、此制度に依らなければ、今日の經濟的發達は維持されないものであると云ふ信念すら行はれて居る。果して然らば今日如何に世界平和の風潮が盛に爲つたとしても、其裏面には之を打破する趨勢が漂つて居るのであるまいか。固より經濟組織の根柢に斧鉞を下すことは、一朝夕の間に、之を期し得られないとしても、世界平和にして重んず可きことの理解された以上は、從來平和攪亂の原因と爲つた資本主義に掣肘を加へるが如き處置に出でられないものであらうか。資本主義の跋扈の依然として許容される平和思想の如き、所謂龍を畫いて、眼睛を點ぜざるの嫌を免かれないのである。

國別的殊遇の廢止

第四、列國が世界平和の維持されることを希望し、又各國協力して、其維持に資しようとする以上は、一方に世界の諸國を擧げて、一の經濟單位とする位に、經濟共通の道を開く他の一方には、國に依り、人種に依り、經濟上の關係に於て、一切の差別的待遇なからしむることを必要とする。私は之を具體的に論述して、日本と接觸する諸外國の意嚮を問はう。今日世界の諸方面を通じて、人口の分布される割合は何に依つて、定まれるかと云へば、多年來の因襲例へば祖先が此國に卜居し、自分も其處に生を享けたとか、其國の言語風俗に習熟し、今更ら他に移るを得ないとか、此國に居らなければ、能率を發揮するを得ない所の職業に就いて居るとか云ふような種々の事情に依るものと見なければならず、斯くて諸地方に於ける人口の分布に就て、大なる粗密の差を生ぜざるを得ないが、若しも國民の間に斯る因襲の行はれることが少なく、一方に各國の制度や、法制に依つて、人口の國際的移動に制限を加へることがなかつたとしたならば、人口は國の境界の如何を問はず、一の國に於ける富の多寡に準じて、集散することゝ爲るであらう。斯くて富と人口の分布とが世界を通じて、正しき割合を保つのであつて人は生を此世に享けて最も公正なる取扱の下に居るを得るのである。現に今日富源に豐であつて、一方に人口の分布の寡小なる地方に向つては、富源に乏しくして、人口の多い國から、一部人民の移住を促すことゝ爲るのは、即ち富と人口の分布とを正しきに就かしめる所以であるのに、今日國際間に存する關係に就て見ると、此種の人口移動は必ずしも自由に行はれない、一國は自國に現存する富源を自國民だけに獨占させる爲めに、嚴重なる外國人入國法を設けて、移住民の渡來を制限しようとするのである。若しも此種の制限が總ての外國に對して、同一

様に適用されるならば、或は恕す可しとするを得るが、今日の實際に於ては、實に人種差別に依る制限であつて、白皙人種に對する寛大なる制限が黄色人種に對して、頗る嚴峻なる制限と爲るを常とする。然らば日本の如き黄色人種であつて、繁殖力が强く年々人口の增殖を告げるが、其一部を富の集積して居る他國に向つて、移植する自由を持たない國に於ては、如何にして此增殖する人口に對して、衣食の方便を與へるであらうか。其方便は固より一にして止まらないが、外國に領土を擴張して人口の捌け口を求めようとし、時に武力に訴へても、其目的を達するに勉めるのは、斯る地位に居る國の爲さゞるを得ざる所である。即ち人種差別に依る黄色人種の排斥の如きは、黄色人種に對して、劣等なる生活條件の下に、國內に蹐踏することを强ゆるものであつて、其反動として他國民に向つて、反撥するに至らしめることを免かれない。

英國の印度統治に對しても、印度人が近年に至つて、之に反抗する徴候の歴然たるものあるやうに爲つたに就ては如何なる所に其原因を求め可きものであるか。統治される印度人の知識なり、思想なりの向上し來つて、彼等を統治する英國人と相拮抗するに至つたからには、印度の統治は英國に於て、其大本を左右するとしても、尙ほ出來るだけ、實際の運用は之を印度人に任せ、印度から生み出される利益は廣く之を印度人に頒つ方針に就かなければならぬ道理である。此道理に反して、印度人を虐遇し、印度の利益を本國に奪取することが英國統治の根本方針として、渝らない以上は、英國は印度に就て、常に或る脅威を感ずることを免かれない。英國が武力を以つて、印度を抑へ、印度人の愚なるに乘じて、飽くまでも之を愚にし、斯くて其統治を便にして、自國の利益を謀つたのは、誠に經濟的帝國主義の範を示したものであると共に、公明なる經濟的關係の國際間に發達する妨害と爲つたことを爭うを得ない。

白皙人種間に於ける不公正

白皙人種が有色人種に對して、橫暴なる處置を施し、後者の生存を脅かすことは、世界平和の維持を傷けるものと解されたが、今や同一白皙人種の間に於ても、國別に依つて、或る國が他の國に壓迫を加へる事實の頗る顯著なるものを生ずるに至つた。其一は聯合諸國の獨逸に對する償金問題の決定依つて、他の一つは聯合諸國の露西亞 對する態度に依つて、遺憾なく示されるのである。即ち聯合諸國が講和條約殊に賠償金の規定を厲行して、獨逸に苛重の義務を加へることは、結局獨逸將來の經濟的存立を脅かすものであつて、賠償金條項の改正されざ

る限り、獨逸六千萬の同胞は何としても共生を全うするを得ない道理であるのに、聯合諸國は飽くまでも償金に關する義務を獨逸に强要して已まない。獨逸に對して賦課する賠償金は獨逸の輸出超過に依つて、年々支拂ひ得る所に限り、一方に其輸出超過を大ならしめる爲めには、聯合諸國自ら獨逸の爲めに、生産業の振興に必要とする資金を融通する任に當らなければならぬ道理であるのに、斯の如き點には何等の配慮を致さず、獨逸人から衣食の資料までも奪ひ去つて、償金支拂の財源に充てしめやうとするに至つては、所詮獨逸を滅亡させるか然らずんば聯合諸國に對する獨逸人の怨恨を深くして、將來の平和維持を危うするものとせざるを得ない。

聯合諸國の露西亞に對する態度亦同樣である。露國に行はれつゝある政治の形式如何と云ふことは、純然たる內政の問題であつて、他國の干渉容喙す可き限りでない。然るに聯合諸國が露國に行はれる政治の形式を嫌忌し、之を理由として通商の開始を禁ずる、斯くて露國には富源は埋沒された儘、開發される見込がなく、國民をして飢餓に瀕せしめるが如きは、果して人道上の要求に適したものとす可きであらうか、固より露國がゼノア會議に於て、其代表者をして爲さしめた言動に對しては殊更に事を荒立て、關係諸國の感情を害した嫌のあることを免かれないとしても、一國が他國を餓死の狀態に陷らせて、而して政治の形式を改めしめようとするが如き、果して文明的手段とするを得るか、是れが世界平和を欲求する聲の高き今日に於て平然として行はれ得る所であらうか、共に一個の疑問とせざるを得ない。

人類愛を要す

斯る幾多の問題に對すると、私は從來多くの國に於て行はれ來つた經濟上の政策に大なる間違の存することを見逃すを得ない。固より是等の政策には其根柢に於て、一國々民の利益を增進しようとする意思の存することを疑ふを得ないが、國と云ふ境域を離れて、更に廣く人類を愛すると云ふ精神が缺けて居り又同時に人を人として見るよりは、有形的效用を擧げる方便と考へ、斯る有形的效用を擧げることが軈て人に幸福を與へる所以であると考へた趣きの著しかつたことは、何としても否定するを得ない所であらう。經濟學は十八世紀末に於て、其の形を造り、十九世紀に至つて、發達したものと稱されるが、其の發達の當初に於ては、所謂經濟人なるものを假想し、經濟人は總て自己の利益を追求して、行動するものとして、一切の經濟行爲を律しようとした。一方に經濟組織も亦自由競爭と私有財產

制度とを經緯として、織り出されて、今日に至つた。人と人との間に於ける競爭は自由に行はれて、各自の能力を練磨し、能力を發揮して、人の得た富は財產として之を私有するに憚らなかつた。斯の如き組織の下に、今日の國民經濟が進み來つたものとして、果して其間に國民に眞實の幸福を與へたであらうか。今日吾人の面前に展開された經濟組織は如何なるものであるか。私は今此點に就て、卒直に批判を下したい。元來經濟組織の良否は社會の全體に文明進步の利益を普及する限度の廣狹に依つて、判斷されさけなばならぬ。國富は增加するとしても其富が從來生活上に窮乏を覺へつゝある階級の生活標準を高めることに、利用されない限り、必ずしも望ましからざる所であると共に、有利なる事でもない。却つて國富の增加は社會階級間に置かれた溝渠を深くする結果と爲り、社會の根柢は爲めに薄弱と爲らざるを得ない。少數者の手に富の集中することは、現代經濟社會の特徵であるが、斯の如きは何等社會上の利益と爲るものでなく、却つて富裕なる階級は勞働者から其彼等の正當に享受す可きものを收用して居る事實を免かれない、而して富裕階級は其所得の幾何を有用なる物資や、勤勞に向つて費すかと云へば、極めて少額であつて、其大部分は勞力や勤勞を生產事業から驅逐して、奢侈的又は逸樂的方面に向はせる用に供される。此事實は近年我國に於て所謂成金時代を通じて、現はれた幾多の事相に依つて、之を知るを得るであらう。

然らば今日の經濟組織を從來の形態を以つて、進ませて行つたならば、人と人との間に、階級と階級との間に鬪爭は益々甚だしきに至らざるを得ない。而して此鬪爭は更に國際間の廣きに及び、一國は其國內に培養し來つた資本主義を他國に及ぼさうとし、他國も亦同一の主義を擁して、之に對抗するに至つたならば、世界平和の如き遂に企及す可からざる所と爲るであらう。人間的愛情を以つて、現在の經濟的關係を律することは、世界平和を永遠に維持する所以と爲るのであつて、此點に於て缺くる所があつたならば、世界平和を維持することの如き、遂に一片の空想に歸せざるを得ない。內に資本主義跋扈し、資本の力を以つて勞働を虐げる、外に經濟的帝國主義が行はれ、一國の資本的勢力は他國に迫つて、其國の國民を何處までも未開國民扱にして、其の勞働を奪取すると云ふが如き、何としても人類愛の精神に缺けた所業であつて、此點に顧みる所なかつたならば、國際間の條約や協定で維持される世界平和の如き、畢竟表面を飾る道具たるに過ぎず、何時其內部に大なる動亂を生ずるか、測り知るを得ない、吾人は斯る狀態を以つて、滿足するものではない。如何にして人類愛を以つて、經濟的關係を律するか、又如何にしたらならば、經濟上の方面から、人類愛を發揮せしめるに至るであらうか、此二點は今後吾人の深く思を致す可き所である。

人類鬪爭の進化と世界平和

長谷川如是閑

一 鬪爭の肯定と否定

鬪爭といふことは、一般に漠然と否定される傾を持つてゐる行動である。腕力の鬪爭は無論の事、もつと心的の鬪爭でさへ、滅多に無條件の肯定は與へられない。のみならず、道德的行爲とは、恰も鬪爭と對蹠的の關係にある行動の狀態そのものであるかの如く考へられ、爭はざる事その事が道德であるとして『不爭の德』などといふ言葉さへある。偶鬪爭を肯定する道德論は、それを否定する道德說に比して、低級にして一時的のものに過ぎないかの如く認定される傾きがあつた。

然かも亦他方では、人々は鬪爭を讃美することに於て決してヒケを取らなかつた。鬪爭そのものは人間的勇氣、智惠、道德、これを要するに人間そのものの最高表現として嘆美され、鬪爭の勝利者は、その最高表現が人間の形を取つたものとして尊崇された。敢て軍國的の意義に於てばかりでなく、社會的に、鬪爭が人間的進化の最も重大な過程であることは、所謂科學者の群によつて唱道され、社會的事實は、彼等の學說の實驗でもあるかの如く、それを證明したのであつた。『鬪爭による淘汰』は、優者の生存を可能ならしめる重大な過程であつて、それは科學的事實に於て然るのみならず、所謂精神的事實(サイキカルファクト)としても證明されてゐるといふことであつた。そこから、戰爭そのものをさへ、已を得ざる蠻行としてでなく、それ自身人間的最高表現と見るものが、敢て昔の軍國主義ばかりでなく、所謂科學的精神を喪はない近代人殊に科學者其人の間に鮮くはないのである。

然しそれこれに拘らず、鬪爭は、或る場合それに道德的肯定

を與へるに努力を要するだけ——偉大な思想家、熱烈な詩人、精細な科學者等が、或は思想的に、又詞藻的に乃至科學的に、その肯定について道具立てを要することを感じてゐるだけ——それだけ、鬪爭に關する漠然たる否定の如何に有力であるかを想はせるものがあるのである。所謂平和主義者といはれるやうなものが、侮蔑され、排斥され、無視され、壓迫されながら、何となしに——『空想的』といふ形容詞がついてゐるにせよ——一種の道德家であるが如くに一般に考へられ、又さういふ待遇をうけてゐるのを見ても、鬪爭といふことに對する一般の空漠たる意識が、何處に存するかを察するに足るのである。(鬪爭（ストラッグル）といふ語の意味は甚だ明確だとはいへない。元來肉體的の爭に關係してゐるらしいが、今ではもつと無形な心的の爭、又はその中間に位する爭をも包含し、戰爭、喧嘩のやうなものをも含むと共に、それとは自づから區別される。畢竟、相反する性質の行動又は心の接觸狀態を云ふのであるが、其接觸が、鬪爭たるは、その相反する性質の爲めではなく、その相反するものが、同一の目的を追求するに必要な協同を生ずるに至る過程が合理的理解によらずに、不合理的强制による爲めである。然かも此强制は、物理的の力であることもあり、信仰その他の心的威力であることもあり、又今日のやうに多數決といふやうなものであることもあり、そこで鬪爭の範圍は極めて廣くなつた譯であるが、此の意味では、二つの生物の接觸そのことは、直ちに鬪爭であるといへる。男女、親子、君臣、主從、法王と君主、武士と町人、村と村、國と國その他すべての社會的乃至國家的對立關係にあるものゝ接觸は鬪爭である。日本の古語で、『あふ』といふ語が『會する』といふことにも『爭ふ』といふことにも用ゐられたのは此の意味と相通ずる所があるのである。故に今日でも、相反的の意識又は無意識を以て接觸する場合は、その方法は可なり所謂鬪爭的でなくとも、倘ほ鬪爭と解されてゐる、さうしてそれは正しい解釋であらう。然し、こゝでは、鬪爭を、その接觸から生ずる撞擊の意味に用ゐる。)

二つの個性が接觸すれば、そこに當然鬪爭が豫想されるに拘らず、鬪爭といふことが、人間的意識に現はれる場合に罪惡らしい感じを持つてゐるのは奇妙な現象である。實際生活では、何人も鬪爭的態度を覺悟し、又そこで勝利を獲ることを本能的に慾求し、その快感が、あらゆる場合の感情にも增して顯著に感じられることになつてゐるに拘らず、鬪爭を嫌惡する意識を禁じ得ない。さうかと思ふとその反對に本能的に、——敢て戰爭讃美の哲學や詩や科學などの後援を借りるまでもなく、——鬪爭を嫌惡又は辭退することを不道德（羞耻を感ぜしめる）な

行動の一種と感じ、敢て鬪爭を辭せざる態度——又は少くとも、その態度を示すこと——が道德上の責任、又は人間的威信の維持に必要であると考へ、本能が反對を働いてゐる場合でさへ、虚勢を張つて、屢々、鬪爭を辭せざる旨を公言して憚らないのである。それほど強い肯定的意識を持つものに對して、それほど強い憎惡（否定）の意識を持ち、それほど強い否定の意識を持つものに對して、それほど強い肯定的意識を持つといふのは、何の理由によるのであらうか。このことは鬪爭の本質に關して或る重大な點を暗示してゐるのである。

二　鬪爭の原始的意義

元來鬪爭は、前に云つたやうに、協同行爲の一過程であるが、このことは、鬪爭が、同種族內のそれである場合と、異種族に對する場合とによつて趣が違ふのである。前者の場合は、協同は、同種族の保存といふ協同目的となつて現はれるが、後者の場合には、その何れか一方の種族の目的だけが殘存し、他方の目的は消滅するのである。然もこれは、相爭ふ種族が、同種でなくとも近い種であつた時には、大抵の場合起り得ないのである。卽ち、そんな場合の多くは種族の混合卽ち一種の協同に終るのである。此の意味から、鬪爭そのものは本來種族的行爲であるといふことが認められる。言ひ換へれば鬪爭に本來個體の爲めの目的に於ては起り得ない筈のものなのである。

が實際私達の見聞するところでは、個體が個體だけの目的で屢鬪爭してゐる。武士又は紳士の名譽の爲めに決鬪が行はれ、私慾の爲めに個人同士殺し合ひ雜鬧で足を踏まれたといつては毆り合ひ、勝負に敗けたといつて斬り合ふ類のことは、殆んど昔より今に至る日常事である。かういふ鬪爭も、これを發生學的に考へれば、矢張り種族的起原を持つものであることが證明されるのであるが、然し、發生に於ける意義を餘りに多く失つてゐるので、それは種族的繁榮の障碍となつてゐるのである。鬪爭が、個人意識に於て嫌惡され又道德的に罪惡視されるに至つたのは、畢竟、その種族的意義を失つた個體の鬪爭の發展の爲めである。だからさういふ鬪爭の起り得ない動物群に於ては、恐怖（敗北の無意識の豫感）による場合の外鬪爭の否定といふ事實がない。

動物の場合に鬪爭の否定がないのは、鬪爭が何時も、強い種の保存の爲めに、種族的利益として行はれるからである。例へば、交尾期に於ける彼等の猛烈な鬪爭も、畢竟それによつて種の強さが保障される譯で、何等かの形で弱者の排斥が行はれなければ、種の安全は種の墮落によつて脅かされること丶なる。

それは動物界に於ける一種の優生學に外ならないのである。人間社會に於ては、種族の保全と發展とは、さういふ原始的優生學に依賴するには餘りに複雜――文明的優勢學でさへその意味で非難される位――になつてゐるので、人類社會に於ける生存の競爭は、もつと非肉體的な、異常に複雜な方法で行はれることになつてゐるのである。そこでは、强者の勝利が、多くの場合所謂時局を決定せしめてゐるに拘らず、規範意識としてはさういふ動物的現象を否定し去らざるを得ないのである。故に人類社會に於ても、非常に原始的な時代に於ては、動物的撰擇が道德化されてゐたこともあるのである。然し人間の群生狀態は隨分古い。始めから、動物のそれに比して非常に複雜で、その社會的構成は、無論類人猿など、それに比べて餘程進化してゐたので、本質的には同じ行動も、行動それ自體としてはもつと複雜化した社會的色彩を持つてゐたのである。個人間の鬪爭が、人類の社會では、極めて早くから、何等かの程度の强制的抑壓を加へられてゐたといふことは、動物の社會に比して、人間の社會の進化の著しかつたことを示してゐるのである。而も鬪爭に對する原始時代の此種の制約は、實は、殆んどそのまゝ今日に傳へられてゐるといつて好い位なのである。言ひ換へれば、鬪爭に關する人類の意識は、今日の文明社會に於けるそれと、野蠻人の部落社會に於けるそれと、たいした相違のあるものではないのである。それは共に、或る範圍及び或る意味で、鬪爭が不道德と感ぜられて居り、從つて個人的鬪爭は、極めて嚴格に制限されてゐて、その反比例に集團的の鬪爭は、强烈に奬勵されてゐるのである。今日たゞ野蠻時代には無かつたらしい平和主義者と稱するものがあるといふだけの理由で、鬪爭に關する文明社會の意識が、野蠻時代のそれを甚しく下に見るほど進んだものであるとは誰れが云ひ得やう。

道德上の外觀に於て、野蠻人と文明人との間に非常の高低乃至差違があると思ふのは可いが、道德上本質的に、文明人は野蠻人に比して非常に隔絶した地位にあると考へるのは、假令間違ひではないとしても、確かに文明人を錯誤に導く處のある見解である。野蠻人の鬪爭に關する意識的規範は、無論今日の文明人のそれに比して幼稚なものであつたらうが、彼等が鬪爭を社會的秩序によつて制約した實際的制度は、本質的に、文明社會のそれから遠く離れたものでないばかりでなく、或る種の鬪爭に關して、今日の文明人間に見るやうな反社會的のそれが、野蠻社會に行はれたとは考へられないのである。彼等の社會の單純さと、人間的能力の幼稚さとの爲めに、彼等は、社會的生存の自然の約束に順從であることは、文明人以上であつた。從

つて闘爭のやうな行動は、單純な社會狀態の下では、直ちに全社會の安全を脅かす處があるので、生存の自然の約束として、甚だ厳重な制裁を受けたのである。或る社會に於ては、全く個人的闘爭を知らなかつたものさへあつたのである。エスキモーの或る部落では、普通の社會で闘爭を必要とするやうな場合に、そこでは歌を唱ひ太鼓を叩いて相手を非難するコンサートを催し、相手もこれに應じて反駁の歌を唱ひ、全部落はその聽衆となつて、互に同情者の側に應接するのである。今日の新聞、雜誌、演説による闘爭と同じ道徳的根柢に立つて、それに藝術的興味の加つたものであるだけ優等であると云へる。野蠻人は異種族の間に於てさへ、今日の文明人同士が行つてゐるやうな、又は文明人が野蠻人に對して行つてゐるやうな大規模の、猛烈な闘爭は行はなかつたのである。彼等が戰敗者を或は全部殺戮し、或はその強者を殺して弱者を奴隷にしたといふやうなことは、その生活狀態の必然であつて、今日の國際公法に於ける戰時法が、或る場合に、捕虜の殺戮を許してゐるのと同じ事情に根據してそれに原始的信仰の加つたるものに過ぎないのである。獨逸の學者 Ratzer も、原始民族の行つた最も血腥い最も破壞的な戰爭は、彼等の種族間のそれではなく、彼等とヨーロツパ人との間に行はれたそれである。殊に、貪婪な文明人の奴隸狩りに伴つて行はれたやうな殘虐な暴行は、嘗一彼等同士の間には見ることの出來なかつたものであると云つてゐる。闘爭に關して、野蠻人と文明人とが、非常に違つた根據に立ち又は非常に違つた行動に出てゐると思ふのは、大部分文明人の觀念的幻影である。野蠻人は、闘爭の讃美に於て、否定に於て、秩序に於て、外觀上文明人に比して及ばざること遠いやうであるが、實際は、決して外觀程相違してはゐないのである。

闘爭が一方で絶えず意識的に肯定されながら、他方で常に漠然と否定されてゐるについては、今日の文明人も原始時代の野蠻人と同じ立場に在ることは右に云つた通りであるが、此の意識的肯定と漠然たる否定との依つて來るところを考察すれば、闘爭の本來の性質は自から明かにされるのである。

三　闘爭の三種類＝種族間、氏間個人間の闘爭

闘爭が意識的に肯定されるのは、通常人間の有する闘爭本能によると考へられてゐるが、然らば、その漠然たる否定は、何うした理由であるか。人間には闘爭の本能があると同時に平和の本能があるからであると云つてしまへばそれまでゞあるが、假りに、その何れもを、本能といふ神秘的解釋に附することが

至當であるとして、然らば、その相反する本能が同時に人間に現はれるのは如何なる次第であるか。

前にも云つた如く、闘爭は發生的には、個體的現象ではないのである。ある生物の個體が他の個體に對して闘爭的態度を採るのは、自己を保存する意味に於てゞあることは無論であるが、その自己の保存は、多くの場合、決して孤立した自己だけの保存ではないのである。成る程自己の個體が危害に陷つた時に、それから脫れる爲めに採る闘爭的態度は、殆んど自己そのものゝ保存に局限されてゐるのであるが、かゝる場合の闘爭に於ても、彼れ等當事者が、往々自己の同類を捌ねのけて、自分だけの安全を計ることのある事實のみを過重視してはならない。その場合をも、同一危害に對して共同の防禦を企てる本能の强さの方が重大である。それは、その場合、同類を無視するものに對する共同の攻擊が起る事實を見てもわかる。發達した社會的動物の闘爭は、防禦にしろ攻擊にしろ、同類の爲めに起るものであるから、すべての闘爭に於て、自己（個體）の危害は殆んど問題にならない。普通の喧嘩に於て、當事者が、所謂『命知らず』の行動を演ずるのは、個體の命が、種の保存の爲めには問題とならないといふ發生的事實の亢進に外ならないのである。蟻の群が、大きい敵に對して一齊に襲ひかゝる時には、一個の蟻の生命は全く問題にされない。敵の一蠢動の爲めに數百の蟻が忽ち命を失ふことは覺悟の前である。それは畢竟全體の保存を可能にする條件だからである。闘爭に於て、個人が自己そのものの損害を顧みないといふ心理狀態になるのは、此原始的事實の延長に過ぎないのである。

凡そ闘爭は、その範圍の點から三種に區別される。一は種族と種族の間の闘爭、二は種族內に於ける闘爭、三は個人同士のそれである。第一は、その最も猛烈な場合には戰爭と云はれ、第二は氏又は黨派の爭即ち feud と稱せられ、第三は全く個人間の喧嘩口論の類である。

此三種の闘爭に於て、今日までの人類の歷史に於て、殆んどそれが歷史そのものであるかの如くに思惟され、且つ積極的に道德的肯定を經てゐるものは、第一の戰爭である。その次ぎに絕えず否定されながら、尙且つ絕え間なく實現されてゐるのは第二の氏の闘爭である。而して個人間のそれは、道德と法律とが、決して條件附きでなければ認めない——といふよりは、一般的に禁止して、特有の場合にだけ視逃してゐる。此闘爭に關する道德的の三階段は、その爭ひが集團的である程度に正比例してゐるのである。即ち最も全的の團結によつて行はれる戰爭は、最も强い肯定を受け、その次ぎの氏の爭ひはやゝ嚴格に批

判され、最後の個人的のは全く禁過されてゐるのである。此事は、場合によつて第一の性質の戰爭が否定されてゐることのあるのを考へると一層顯著になる。即ち戰爭を否定する立場は、必ず種族的集團の上に、人類的集團を豫想するそれである。此場合に於ては種族の戰爭が人類に對する關係は、丁度フユードが種族に對する關係と同じになる譯である。人類的見地に立つと、國家戰爭は、不必要な私鬪に過ぎないやうに思はれるのである。かくて鬪爭の當事者としての集團が大きくなればなるほど、鬪爭は肯定され、それが小さくなればなるほど、鬪爭當事者の双方を包含する集團によつて否定されるといふ順序になつてゐるのである。

此事は要するに、社會過程としての鬪爭の効果から發生した心理狀態に外ならないのである。鬪爭は、個人にとつては自己を損することであるといふ事實は、個人そのものゝ爲めの鬪爭の無意義を證明してゐる。尤も種族といふことは元來個體と同じ存在事實ではなく、一つの概念に過ぎないのだから、種族の保存となつても、個體を離れた種といふものが保存されるといふことではなく、個體保存の條件としての種族であるに過ぎないのだが、個體の生存が集團に於一するより外、途のない生物に於ては、その集團狀態の生活を維持するには、個體そのものゝ集合生活を可能ならしめる條件を確乎と把握してゐなければならない。それは即ち個體同士の協同である。此の協同に於て、個體は必らず犧牲を要求される。それは資金勞力の提供から、進んで生命の提供に至るのである。(然しこれは、後の文明人が往々誤つて思惟したやうに、生活を離れた目的に對してゞはなく、生活そのものに對しての犧牲である。生活を離れた高級又は低級の目的が、個人にさういふ犧牲を要求し、個人もそれを甘諾したことのあるのは、歷史の示す通りであるが、さういふ犧牲の要求が、次ぎにその種類の生活を如何なる生活に陷れたかも、亦歷史の示す通りである。さういふことは、國家の名で行はれ、階級の威力で行はれ、英雄の威壓で行はれ、哲學の名で行はれ、道德の名で行はれたが、然しそのすべてが生活そのものゝ崩壞又はその崩壞からの回復の爲めに否定されたことは、何遍も繰り返された歷史の段落がそれを示してゐる。ギリシヤのやうた高級文化國家の崩壞ローマのやうな大帝國の崩壞、フランス王朝の崩壞、最近ロシヤ、ドイツの君主制崩壞等は、何れも、個人に對する犧牲が、生活の爲めに要求されずに、生活を脅迫する階級的制度の維持の爲めに要求されたことに起因してゐると見ることが出來る。それに反して發生的の意義に於ける鬪爭が個人に要求する犧牲は、個人そのものゝ集團

生活の目的の爲めのものであつたのである。)

種族の目的の爲めの鬪爭が、生物進化に必然であることは、同じ目的の爲めの互助作用が必然であるのと變りはない。從つて、それは種族の保存の爲めであつて、決して種族の破壞の爲めではない。個人が種族の犧牲となることは、そこで始めて意義を有つのである。個人は、孤立的には生存し得ない、云ひ換へれば、種族の保存――といふ手續き――によつてのみ生存し得るものであるといふ事實のある爲めに、或る場合に於て、個人は、種族の保存の犧牲となることが生活維持の爲めに要求されるのである。爰に擧げた三種の鬪爭の第一種のもの即ち種族の目的の爲めの鬪爭が、常に道德的肯定を經てゐるのは即ち此の理由によるのである。

反之、個人が種族の目的よりも小さい氏又は黨派の目的の爲めに鬪爭することは、種族の意識又は潛意識の發動であるとはいへ――それは、自己の氏又は黨派の敵が種の保存に障碍であるといふことを、自己の氏又は黨派にとつて、その敵が障碍であるといふことを通じて感じるのである――種族の全的協同の缺乏した鬪爭である爲めに、第一種のそれに比して、やゝ酷しい禁制を受けてゐるのである。而して第三種の個人間の鬪爭に至つては、彼の敵が、個人の自己にとつて障碍であるといふことを通ほしてその敵を種族の敵であるかの如く感ずる場合のあることは、第二種のそれに似てゐるのであるが、然も、その意識の狀態の如何に拘らず、個人的の鬪爭そのことは、大抵、種族のソリダリテイーを脅かすことになるので、種族の意識は、此の個人的鬪爭に對し原則的に絕對禁止の態度に出るのである。

そこで、鬪爭に關して、始めに云つたやうに、一方で鬪爭の道德を確保しながら、他方でその不道德を感ずるといふ個人の意識狀態があり得る譯である。即ちそれは種族の立場による鬪爭と、個人の立場による鬪爭とが、別々に而かも同時に、個人意識に映じたのである。前者の道德的立場が即ち鬪爭の肯定となり、後者の反道德的立場が鬪爭の否定となつて意識的に現はれたのである。

(右にいふ種族、氏、個人、といふやうなことは、敢てそれらの三種の單位の間に輕重、高低を附した譯ではない。個人よりも氏が重いとか高いとか、氏より種族が重いとか高いとかいふことは、普通の解釋ではあるが、それは正確ではない。現實的解釋に從へば寧ろその反對で、種は氏よりも空漠且つ抽象的な單位で、氏は個人よりも空漠又抽象的の單位であるから、重いとか高いとかいふ語の普通の意義に從へば、個人が一番重く

して高いものでなければならないのである。形而上學的傾向の社會學者は、すべて此見地に反對し、實驗的社會學者のうちにも社會心を個人心よりも重大視するもの——例へばマクドウガル等——と然らざるもの——例へばホワブハウス等——とあるが、後者の見地が科學的方法に近かいことは拒まれない。(此點については、"The American Journal of Sociology Vol. XXVII No. 5-6 に出てゐるR. B. Perry の "Is There a Social Mind?" といふ論文參照。雜誌『我等』八月號に譯載の筈。)

四　種族的鬪爭の個人化

鬪爭が種族の目的に於て肯定され、個人の目的に於て否定されるといふ右の事情は、原始時代には極めて機械的に行はれ之に反したものは自滅するといふ作用も自然と行はれたことと動物界に於けるが如きであつたが、個人の意識の發達した人類の社會に於いては、一種特別の意識狀態が現はれ、然かも、それは人類の生活を、動物のそれよりも(生物學的の意味では)善くしたか惡くしたかゞ疑はれるのである。それは卽ち、第一に一方で種族の目的で起つた鬪爭が、次第に個人の目的に移轉されると同時に、第二に他方では、さう個人化した鬪爭が、種族の目的の爲めといふ虛僞の意識によつて肯定されるに至つたことである。

元來人間には、個人的になし得ざる事——然して所謂惡事についていふ——を、集團的には平氣で爲し遂げるといふことがある。それは政治家、群衆等に於いて特に顯著であるが、然し一般人の誰れでもさういふ傾向がある。異常に道德的であるらしい政治家が、外國に對しては、惡人でなければなし得ないやうな行動を、少しも彼れ自身の信仰と矛盾を感ぜずに爲し遂げるのが普通であり、又外國に對してゞなくとも、同國人に對しても、所謂公の資格に於ては常にそれをする。グラッドストンのやうな人格者といはれた人が、最も甚しい一人であつた。これは、個人的に否定されるものも、集團的(種族的)には肯定されるといふ、鬪爭の場合と同じ事實が、彼れの心理と行動とに反映した結果に外ならないのであるが、此種族又は公の爲めの行動が、多くの場合、個人的には否定される傾きを持つた性質のものであるといふ事は、他の意味に於ては、個人は、自己の意識では否定されることを、心的又行動的に常に繰返し實現させることを得るといふのである。これは本來、種族の保存の爲めに已むを得ないことであるが、然し、生活にとつて極めて危險な習慣を作り上げる結果となるのである。卽ち、個人の意識に否定的に映ずる心意や行動が、繰り返し個人に實踐さ

れるといふことは、假令その動機は何うであらうとも、その結果は必らず個人が、その心意、行動についての感覺を鈍らせることになるに違ひないのである。首斬り役人はその行動が如何に公の目的に動機するものであるにしても、首を斬るといふ行動の繰り返しの爲めに、その行爲それ自體としては忌はしく感ずべき行爲に對して無感覺になることを免れないのであつて、而もそのことは生活にとつて極めて危險な痲痺であるに相違ないのである。スパルタの市民が盜行爲に對して無感覺であつたのもその結果である。スパルタの國家的生存には、彼の武人國家の生存に殺人が必要であつた如く、盜行爲が必要であつた爲めに、スパルタ人は、武人が殺人に對して無感覺であつた如く、盜行爲に對して無感覺だつたのである。而かも、此種の無感覺が全く無かつた時代や社會があつたとは思はれない。如何なる社會若くは時代の人間も、何等かの程度でスパルタ人たるを脱れないのである。而して此のスパルタ的痲痺が、即ち種族の目的の爲めの行動を個人に移轉せしめる經過を持ち來す、のに外ならないのである。詳しく云へば、行動それ自體が、個人の意識に障碍と映ずるものを、種族の意識に於て個人的に行なふのは畢竟種族の爲めに個人が犧牲となることなのであるが、――例へばスパルタ人が國家の爲め盜賊となるのがそれである――此犧牲的行爲は、本來その行爲の性質上、個人が種族(社會)よつて加へられてゐる拘束から自由にされる意味をも含んでゐるのである。言ひ換へれば、それは個人の持つてゐる反社會的本能が、種族の名に於て解放されるのである。此解放は、個人の意識狀態の發達するに伴つて、個人的に濫用されることになるのは自然順序である。國家的目的の爲めに盜賊が奬勵されゝば、自づから國家目的に反する盜行爲も增殖する道理である。而して種族の目的のための行爲は、同類の繁榮を期するものであるに對し、個人的に轉化し種族的行爲が、同類壓迫の結果となるのは云ふを待たないことである。それは、種族の名に依る個人の跋扈に外ならないのである。鬪爭も亦かゝる關係に在る行動の一であつて、種族的(社會的)から個人的に轉化するに至るのである。(こゝに個人といふのは、個人及びその集團即ち家、氏、階級をさへ含んだものを指してゐるのである。種族に對して、それよりも小さい個體といふ意味である。從つて鬪爭が文字通りの個人的に轉化する前には、氏的に轉化した時期があり、又個人的といつても、それが階級的組織の下に存立することもある場合等を含んでゐるのである。)

かく個人化した鬪爭は、今度は逆に、その個人の目的による行動を、種族的に肯定する意識を產むに至るのである。それに

曩きに云つたやうに、個人間の鬪爭は、その敵を、自己の生活に對する障碍と感ずることに依つて、それが種族に對する敵であるといふ意識を産むに至るのである。何となれば、種族も畢竟は、自己の個人的生活を生かす爲めの生活組織なのであるから、個人を生さなければ無意義なのである。自己の生活の敵は、同時に種族の敵でなければならない。此の意味から、個人は、自己の敵を直ちに社會の敵と見るといふことが、常に個人間の鬪爭の當事者の心理狀態である。此の戰爭に於て、源氏も平氏も、その對手方を自分の敵であると同時に、國家の公敵であると考へるのである。此の意識は、多くの場合、虛僞の意識なのである。事實は、肯定否定の意識を超越した本能的行動で、その何れが種族の敵であるかは、決して當事者の意識による判斷で定めらるべきものではない。それにも拘らず、當事者双方は、互に相手方を種族の敵として、自己を種族そのものゝ代表と考へる。今日の政黨間の鬪爭も亦全くこれと同じ現象である。即ちそれは、自己の私的鬪爭に於ける立場を虛僞の種族的意識によつて道德的に肯定しやうといふ努力なのである。從つて此種の鬪爭の勝利者は、その虛僞の種族的意識によつて同胞を壓迫しても、少しも道德上疚しい感じを持たないのである。個人的乃至階級的支配者――英雄、貴族、官僚、富豪等――が自己の同胞を壓迫するを道德的なることを信じて疑はないのは即ち彼等が、此の虛僞の種族的意識に立脚してゐるからである。それは、ギリシャ市民が、多數人類を奴隷として壓迫することによつて成り立つてゐる生活組織を理想的のものと感じてゐたのと同じ系統の意識なのである。

五　種族鬪爭の道德化と絞取制度

社會的生活に於けるかやうな鬪爭の進化は、對內的に右のやうな同類壓迫の生活組織に進むと同時に、對外的に、自己の種族の生活要求の亢進に基く種々なる影響を他種族に及ぼすに至るのである。

それは即ち、種族的生活の要求が、同類壓迫の組織の上に立つことに依つて局部的に亢進するといふ社會病理學的現象の結果なのである。局部的に亢進するとは、階級的構成による社會に於ては、支配する階級は、支配される階級の生産果實を絞取することによつて、一方、被支配階級の生活要求を壓縮せしめると同時に、他方、その絞取した生産果實の豐富な供給によつて擴充された自己の階級的生活の生活慾求を異常に發展せしめることを得るのである。貴族と農民との對立した社會に於ても、前者は、後者の生活から絞取した材料によつて、貴族文化の異

常に見事なるものを產むことを出來たのであるが、それだけ多數農民の生活は壓迫され、從つて農民の文化は貴族のそれと反比例に低級に止まらざるを得なかつたのである。

此事が如何なる結果に立ち到るかといへば、即ち各國の歷史に現はれた通り、階級的支配者の意識に基く種族的意識の亢進である。それは、個人的に英雄に發生する意識がそれを代表し又は具體化したものと思はれてるが、實はそれは本質的には、もつと種族的のものなのである。言ひ換へれば、種族的意識の階級的に亢進したものが、個人（英雄）の意識に現はれたに過ぎない。太閤やナポレオンの壯圖も、要するに當時の軍人階級に發生した階級的文化要求の極度の現はれに過ぎないのである。それは即ち、階級的（局部的）發展を遂げた生活要求を、全種族的のそれとして意識したものなのである。而して、その當時の全種族が、その支配階級の亢進した慾求に共鳴したといふ事實は、決して彼等が階級的壓迫を生活の上に感じてゐなかつたといふ證據にはならない。それは、支配階級が下層階級民にある種族的感情を或る程度まで利用した爲めに建設された絞取制度に基いた生活組織なのであつて、被支配者にある種族的意識そのものを通して成立してゐる制度であるから、その絞取による階級的生活は、或る意味で、種族的公認を經たものであるとゅいへるのである。故に階級的支配者の壯圖は、此の被壓迫者の種族的意識の下に共鳴される道理なのであるが、然しそれは階級的支配者が、同類を壓迫して、種族の生活を局部的に亢進せしめる病理的現象を含んでゐることを否認する理由にはならない。

かくして局部約に亢進した種族的意識は、その種族の生活目的を、階級文化に特有な觀念的昂奮の下に理想化して、原始的には生活の生物學的道理を出でなかつた種族間の鬪爭を、原始人がそれを迷信化したと同じ過程で哲學化して、こゝに種族的侵略の道德が完成されるに至るのである。それはもう太古の侵略のやうに、神話的のものではなく、合理的な論理的な道德的意識となつて、決して種族的の盲目な意識などに支配されてゐるものではないといふ思惟が成り立つのであるが、然しその道德の根抵と出發點とは、依然として神話の領分を脫したものではないのである。云はゞ合理的神話といつたやうなものなのである。

此合理的神話が太古の不合理的神話と異るところは、太古のそれが生物學的動機の勝つてゐるに比し、これは經濟的動機の勝つてゐることである。それは丁度、同種族間に於ける鬪爭に於て、次第に經濟的動機が顯著となつて、絞取可能の條件の有

無によつて、支配が滅亡する事情の發生した如く、種族間の鬪爭の無意識的動機は、種族的に加ふるに次第に經濟的要素を含むに至つたのである。それは恰も、刑罰が『命に報ゆるに命』、『目に報ゆるに目』といふ物々交換から、『命に報ゆるに金』といふ制度にまで進んだ如く、種族の意識による鬪爭の效果を經濟的に收めることが種族鬪爭の一般的性質となつたのである。歷史上、軍國的侵略に於て經濟的動機が次第に顯著になりつゝある事情はこゝから出てゐるのである。

然も、かゝる狀態に於ける種族の接觸による鬪爭は尙ほ未だ軍國的であることを脫れない。それは對內的に軍人階級の支配が成立してゐると共に、對外的に軍國的侵略が橫行してゐる時代である。此の鬪爭が何う進化して行くかが次ぎに考察すべき點である。

六　軍國的鬪爭より經濟的鬪爭へ

既に述べたところにとつて暗示された如く、鬪爭は、次第に經濟的特徵を帶びて來るのであるが、何故にさういふ進化が起るかといへば、要するに種族の生活狀態の進化に依據したものに相違ないのである。軍國的支配の基礎は、決して單純な物理的武力ではないが、然しその主たる力が武力の物理作用に根據し、それに智力や迷信的信仰やの加つたものであることは拒まれない。又それは明かに互　作用と相並んで働いた支配であつて、決して單純に武力的壓迫のみの働いた支配でもないことも明かであるが、然も尙ほ、その根柢なり基調なりが武力的であつたことは、今日の軍國的支配のそれを見ても察しられることである。然かもさういふ支配が、漸次に或は急激にそれぞれその軍國的色彩を弱められたことは、總括的にいへば、種族の生活が、軍國的に管理されるには餘りに複雜化した爲めである。生產を、軍國的目的の爲めの稅源として管理する事や、敎育を、軍國的目的に役立つ人間の製造術とした事や、交通を、軍國的制限內の人間の運動と解釋することや、賣買を、軍國的制限の下に於ける、乃至は軍國的需給の範圍內に於ける物資の交換と見る事や、人身を軍國的機械として、鐵砲や軍馬と同じ資格で徵發、消費する事や、學問を軍國的理想建設の思惟と見ることや、科學を軍事の目的以外に於ては人心を惑はす妖術と見ることや、これらは皆軍國的階級政治に必然の支配方法だつたのであるが、さういふ支配　、種族の生活を管理し得ることは、それだけ種族の生活が、生物學的單純に近い時期に於て可能であつたことなのである。從つて生活の複雜化は、自づかゝ斯樣な單純な支配――その支配は强ち單純ではな

いのであるが、たゞその生活目的を軍事的行動又はそれと協同の關係にある前述のやうな範圍に限定した點で、それを單純といふことが出來るのである――を崩壞に導くのは寧ろ當然の順序なのである。

而して崩壞の順序は何う現はれたかといへば、即ち生活の行詰まりとなつて現はれたのであるが、生活の行詰りとは、云ふまでもなく、生活する個人そのもの〻、常識的の意味でいふ生活の窮厄である。生活の意味については、哲學者や宗教家やの觀念する如く、個人を離れた各種の機關の作用なり又個人の內にある各種の別々の機能の働きなりを生活と呼ぶのも差支ないのであるが、然しこゝで生活といふ意味は、常識的の意味に於ける個人の生活で、個人に於ける具體的生活の總稱をいふのである。即ちその生活の窮厄とは、食へない、考へられない、樂しめない、動かれない、働けない、つまらない、苦しい、悲しい、忌々しい、焦立たしい、憎い……などの狀態を擧げることによつて解釋のつく有樣なのである。軍國的支配が、複雜化した社會に臨んだ時に、かやうな生活の窮厄を來したことは、すべての軍國的支配の末期現象であつて、要するにそれは個人の現實の生活の壓迫だつたのである。

こゝに於て、此の生活崩壞に對する人間的防禦は、當然に、個人の囘復でなければならない。それは國家とか寺院とか家族とかいふ制度の完成、その制度の完成に必要な忠孝とか仁義とかいふ德目の完成等の爲めに無視され破壞された個人の取戾しである。故に軍國的な政治に反抗して起つた立場が個人主義であつたことに何の不思議も不道德もないのである。

而かも、最後に個人的傾向の起つたことは、前に述べた鬪爭の三種類の第一種族的、第二氏的、第三個人的いふ順序と共通してゐることは注意さるべき點なのである。何故さういふ順序になつたかといふことは、今述べた軍國的生活の進化と同じ理由なのであつて、種族的單純さが、その內容の複雜さを增すに從つて、氏の運動となり、個人の運動となつたのである。而して此進化は前述の如く、生活狀態の基調が、生物學的現象から經濟的現象の方へと轉向しつゝあることと相伴つてゐるのである。而して最後の個人の取戾し要求は、それが前にいつたやうな常識的生活の囘復の要求なのであるから、その根本條件は經濟的である筈である。即ちそれは第一次的の意味に於ける『生活』の要求である。第一次的とは、營養と生殖の生活を指すのであつて、生活の根本條件そのものなのである。(生活の根本條件をもつと精神的の生活であるとする見地は、私の考ふる所では、第二次的の生活、即ち第一次的生活を充たし上で發生

した所謂文化的意識から出立した觀念で、第一次的生活が充たされない環境の下では發生せぬ筈の觀念なのである。)窮厄した生活とは、此二つの根本の生活に重大な障害を受けた生活で、要するに動物的生活すら充たされない狀態なのである。そこで最も要求せられるものは經濟的生活の發展の自由である。

そこから近代に於ける自由主義經濟が起つたのである。それは即ち、軍國的鬪爭が經濟的鬪爭に代つたといふことである。此の轉化は、極めて廣汎に生活に影響し、その後の社會を、濃厚な現代的色彩を以て色どる基調を爲すものなのである。即ちその後の鬪爭は、個人的であり且つ經濟的であるといふことになつた。

七　經濟的鬪爭に伴ふ階級鬪爭

鬪爭が個人的且つ經濟的となれば、そこに今までの社會の種族的構成に對して甚だ異つた構成を持たねばならないことになるのである。

元來、社會的構成そのものはこれを或る角度から見れば、而して極端の言現し方が許されるならば、それは一種の戰鬪隊形であるともいへる。何となれば、種族の形成は、言語、動作、思考等に於て共通のものを持つことを必須の條件とすると云はれてゐるが、もと〳〵これらのものは、原始人の生活に伴つた戰鬪的動作に發程してゐるといふ說さへあるのである。此說は、私自からは、そのまゝ採用するものでないが、然し、種族的生活の後天的性質に鬪爭を條件としてゐる部分が極めて多いことは拒み難い事實である。だから、或る種族的構成は、その種族の當時の鬪爭狀態によつて條件づけられてゐるのであることも確かである。そこで、近代に於ける鬪爭狀態が、個人的となり經濟的となつたといふ事情は、當然社會の種族的構成に變化を來さなければならない。尤も此事は、決して物理的正確を以て言ひ得ることでも、又觀察し得ることでもないのは無論である。さうして本來精神的現象である種族の意識は、その物質的條件を失つたとて、物理的因果律のやうな正確さで結果が出て來るものではない。何等の生活共調に依據してゐないやうな種族的感情は、今日でも盛なのであるが、それは生活共調を持たないのではなく、生活の意識の精神現象的特徵とその複雜性との爲めに、科學的にその感情と生活條件との聯絡を見出し得ないのであると考へる方が妥當であらう。で鬪爭が種族的、軍國的から個人的、經濟的に變つたならば、種族的構成に於て戰鬪隊形の變化を來す道理であるが、此の道理は中々具體的には掴めないのである。

然しながら、確かな點だけについて言つても、始めのほどは極めて密接に種族的鬪爭と結びついてゐた經濟鬪的爭が、次第に、その種族的色彩を薄めて行つて、基點を個人に置くところの其の經濟作用の條件に一致して行かうとしつゝあることを見脱す譯に行かない。これは、個人主義經濟の發達が、所謂資本主義の完成に向つて進むに及んで充分顯著になつて來たことである。資本主義の初期に於て、經濟的鬪爭が、種族運動と結び付いた如く見えたのは、實は、資本主義の大量生産が國外に世界的得意先きを求める必要を感じた結果その需要地の爭奪戰を、昔の種族戰爭の形で演じたのである。尤も昔の種族戰爭も、この意味の經濟的必要を條件とした場合が多いのであるから、資本主義的軍國主義は、舊政治の若くはもつと原始的の軍國主義と性質を同じくするものであるとも考へられるが、何等種族間の憎怨なしに、資本主義的侵略の意識を以て行はれた爭奪戰は蓋し近代の産物たるに相違ないのである。然かも、漸次世界地圖の色彩の曖昧な部分が減少して、軍國的侵略の餘地に乏しくなるに從つて、資本主義は、自づから軍國的侵略と野合的の關係を絶つに至つたのである。(かゝる狀況の下でドイツが强ひて、軍國的にその資本主義政策を强行せんとして佛國の領土的侵略と衝突し、遂に世界的大亂を惹き起したのは、如何に今日では、資本主義に軍國的侵略を結びつける事が實際上困難となつたかを證據立てゝゐるのである。無論、今でも軍國主義が、世界の表面から拭ひ去られた譯ではなし、從つてそれと資本主義との野合は、種々なる濃度で行はれてゐると云つて好いのであるか、然し、軍國主義との協同が收支償はない形勢となり、より利益ある方法が、それに代つて實現されつゝある。)

地理學上、軍國主義が存在の餘地に乏しくなつた結果、資本主義は、『平和的侵略』又は『經濟的侵略』と唱へられてゐる方法に乘り代へたことが、近來資本家階級に於ける平和主義の根本原因なのである。而して、これは、本來資本主義の國際的性質とぴつたり一致した方針であつて、混沌の時代が去ればそこに資本主義的組織が基礎を据へるに定つたことなのである。日本の資本家が、最近に、日清、日露戰役前後の侵略的態度と打つて變つて、シベリア撤兵の主唱者たることを辭せざるに至つたのも、此の事情で説明が出來るのである。

鬪爭の進化がかゝる經過を採つて、遂に經濟的性質の特徴としての平和的鬪爭にまで進むに至つたとは右の通りであるが、その結果種族的意識は、對外的又種族的感情による鬪爭を惹起す餘地に乏しくなると同時に、對内的には、種族又は氏の意識による構成が崩壞して、個人の利害を基調とする新らたなる階級

的構成が完成した譯である。これは卽ち、資本主義組織が決定した生産狀態が、各人の生活に影響し、そこから發生した各人の地位に立脚してゐるものなのであつて、資本家と勞働者との對立關係がそれである。これは全く種族的意識を離れて、各自の生活の産んだ意識に立脚したものであるが、凡そ生活の産んだ意識ほど力强く、人間の心的態度に影響するものはない。種族的感情も、畢竟は、生活が産んだ或る精神現象であるとさへ云はれてゐる——種族的感情を、共同祖先に結びつけた解釋は成り立たなくなつた——のであるから、現在の資本家と勞働者との各の生活意識は、遂に双方に牢固な階級意識を醞釀せしむるに至つたのである。こゝに於て、鬪爭は、近時の流行語たる階級鬪爭にまで進化したのである。（階級鬪爭の事實は決して、近代の特有ではなく、太古からの事實と認むべきものであるが、あらゆる鬪爭形式の上に此の階級鬪爭なる鬪爭形式が君臨して、種族鬪爭、氏の鬪爭、黨派鬪爭の類が貧弱な鬪爭に化してしまつたことは確かに現代的事實である。）

八　世界的平和へ

資本家主義の平和的國際鬪爭の他の一面に發生した階級鬪爭は、これ亦鬪爭當事者双方の國際的性質を特徵としてゐるものである。云ひ換へれば、種族的單位による鬪爭と對蹠的の地位にある戰爭隊形なのである。卽ち、一方では萬國の資本主義者が團結し、他方では『萬國の勞働者團結せよ』の標語の下に無産階級の團結が企てられてゐるのである。（尤も此兩者とも、その團結の國際的構成は、目下の處未ださう重大視することは出來ない。理論的に、資本階級と勞働階級との抽象的の地位を定めることが出來ても、各國に於ける事情の相違と、今も相應有力である種族感情とは、理論上完成された階級的構成を、容易に、各國の人類の實踐的心意の裡に取り容れることを許さない。殊に勞働階級の本能的傾向の强さは、資本階級の比較的に理智的な態度とは違つて、猛烈に彼等自身の階級内にフユード式鬪爭を起しつゝある。フユード式鬪爭の特徵は、旣述の如く、互に相手方の存在を、全體の存在の爲めの障碍と感ずることであるが、勞働階級内に於けるフユードは、此點に於ても標本的である、卽ち彼等は、彼等の全體にとつての敵も惡むより以上に、彼等の仲間内の敵を惡み、斃すべき當の敵を何れかに在りとするかが、局外者には判斷のつきかねる位である。これは階級内の生活利害の相違から起る事であつて、萬國の勞働者は、標語又は理論によつて團結し得るものでないことを示してゐるのである。さういふ困難な事情は、勞働階級にも資本階級

にも存することは事實であるが、然し、この事がある爲めに、さういふ大勢が逆轉すると考へるのは、甚だ無根據な物の見方である。この中途の障碍は、如何なる新らしい現象にも伴ふところの進化の過程に於ける摩擦であつて、車輪が軌道の上を走る時にさへフリクションなしには走れないのと同じ道理なのである。況んや磊々なる石塊道を進んでゐる車輪のガタつくのは當り前で、寧ろそれは進行してゐる證據と云へるのである。)

此一般的形勢卽ち、鬪爭が種族を超越して、國際的に變化しつゝあるといふ事情は、既に、最も感じの鈍い、而して實行の遲い實際政治にさへ影響して、國際聯盟とか、國際會議とかが、多くは效果に乏しいながら、兎に角常に濫發されつゝあるといふ現象をすら産んだ位である。重大なのは會議それ自體よりは此の一般的形勢そのものなのである。

鬪爭の進化の、斯樣な現代的歸決について考察すれば、その傾向が戰鬪への進轉であるか平和への進轉であるかは深く問題とするに足りないことを知るであらう。種族の形成が、一種の戰鬪隊形であるとさへ觀察するものゝある位で、種族に拘泥する態度は結局、軍國的態度なのである。されば鬪爭が、種族的を超越した國際的階級戰に移るといふことは、一方で最近の大戰が示したやうな廣汎な範圍と猛烈な度合とを持つた鬪爭を發生せしめる可能性があると同時に、他方に、その階級的戰鬪隊形は、必然に、今日までの形式による戰鬪の發生を不可能にする階級的構成を持つたものであることを見るのである。それは一種の國際戰爭否定の社會構成であるともいへる。而して此の構成の下でも尙ほ發生の虞れのある所謂社會革命的戰爭なるものは、その殺戮狀態が古代式である爲め、殊に野蠻殘忍の感じを一般に與へるが、然し實質的には、大規模の國際戰爭の大殺戮に比べては云ふに足りないものに相違ないのである。露國革命の犧牲者の數を知ることは出來ないが、然し獨佛戰線の大殺戮とは比べものにならないことはいふまでもあるまい。——然し今こゝでは、そんなことを最終の問題としてゐるのではない。鬪爭が種族的から階級的になつたについて、その世界平和に對する効果について一考して此論文を結ばうと思ふ。

種族的から階級的となつた戰爭は、或る意味のフユードとも見られる。それは全人類を一單位とした世界的集團内のフユードである。而してその階級的構成が、人類學的單位によらずに、經濟的生活の單位による意識を基調とする點が違ふのである。これを言ひ換へると、鬪爭の基點を種族の意識から生活利害の意識に轉化せしめたのである。種族の本能は、發生的には

利害に關係した心理かも知れないが、然し本能としての種族的行動は、利害的でなく、時に利害を超越した鬪爭的態度である。それは鬪爭の本能と離るべからざる關係に於て存在してゐるともいへる作用である。階級鬪爭が種族的單位を離れたことは、本論の始めに云つた、絶對的平和主義者の心理的根據と一致することである。絶對的平和主義は、種族の單位の上に人類といふ單位を置くところから出立した意識である。此の人類の單位によれば、人類をブルジョアジーとプロレタリアートの二つに分ける階級的意識による鬪爭は確かにフユードであるが、然し、此の仲間戰爭は、フユードが全集團を保存する意識の基礎に立つてゐると同じく、人類の全的集團の保全を目安としてゐる點で、戰爭それ自體が、今までの種族戰爭に比して遙かに平和主義的心理に接近してゐるのである。故に此の階級鬪爭の一方たる、種族戰爭と決して野合しない側、卽無產者階級は、相手方の資本主義者が所謂平和主義者たる以上の意味で平和主義者なのである。――それは場合によつて武斷的平和主義ではあるが、何時も絶對的平和主義者なのである。――かくして多くのフリクションを生じつゝも、世界は平和の方へその緩慢な步みを進めつゝあるのである。

（完）

世界平和と人類愛の現代的方法

杉森孝次郎

十九世紀の最大福音は國民主義と產業主義であつた。兩主義ともに、二十世紀に入るに及んで行きづまつた。歐洲戰は、すくなくとも歐洲に於ける國民主義の晩鐘であつた。最近社會主義の進勢は、產業主義の轉向の必要を示す。

現存の歐洲人は、大體に於いて、民族的自覺を觀念的にも、實行的にもほゞ完全に理解した。十九世紀の歐洲人が最も缺乏して、隨つて最も要求した救助力の一は疑ひもなく民族的自覺であつた。もしも民族的自覺が、例へば人類的個性主義にも比

すべき、または全我主義にも比すべき本質的、永久的理想價をさながらに具備する一觀念であり、一實行であつなたら、二十世紀の歐洲人は、十九世紀の歐洲人にもまして、民族的自覺をなほ飽かず要求すべき位置にある。人の本質的理想は、人の自然的存在が可能である限りその必要を失はないからだ。人格的個性主義といふが如き最も根本的な理想は、人類深であるがゆゑに人類壽だ。それは時代と共に進步し、發達すべきではあるが、人類の成長行程に於けるある時期に及んで擡頭し、しばしさかえて再び凋落してよいものではない。それは人が生存する限り有用だ。

けれども民族的自覺は、一派生價だ。一現象價だ。それ自身人生の基礎價でもなければ、原則價でもない。それは實に十九世紀に及んで最高度に有用とされ、二十世紀に及んで廢用に當然次第に歸すべき、いはば一種の事情價であるのだ。事情そのものが暫存的性質のものであるがゆゑに、人生の根本理想にもとづいてその事情を支配する努力にほかならないその事情理想すなはちいはゆる事情價も、隨つて暫存的制限を內具する。民族性は、外延に於いてこそ個人性以上だが、內包に於いては個人性以下だ。しかし、人に於いては、理想的決定的要件は量でなく質だ。量は質の條件として有價だ。外延は量だ。內包は質だ。內包に於いて民族性以上である個人性は、文化的、人生的意義に於いて民族性以上であるのだ。以上とは比較的部分に對する比較的全體だ。個人性は、民族性を自身の一部的內容として有するのだ。一日本人に於ける血、ことば、風俗習慣、歷史、地理等の諸要素が、質に於いては日本民族性の完全存在だ。一日本人に所有されてゐるそれらの要素が、他のすべての日本人にも、例へば五千有餘萬の日本人にも同樣に所有されてゐる。この狀態の抽象名が日本民族性だ。

五千有餘萬は現存日本民族の人口だ。曾存及び將來存の日本民族の人口をこれに加へれば、ほとんど無限數にも近づかう。一人と五千有餘萬人との比較に於いて、ましてや古、今、來の日本民族總人口との比較に於いては、一人は至小の部分であり、民族は至大の全體であるとさへ觀ぜられよう。けれども、それは量のみを標準とし、條件とし、目的とした方法の結果だ。

質を標準とし、條件とし、目的とした方法を採用すれば、一人の日本人は、單なる民族性といふ特徵に從うて觀察され、認識される五千有餘萬人の日本人よりも、いな實にほとんど無限數にも近づかんばかりの人數の、古、今、來のすべての日本人よりさへも、斷々乎とし大だ。明白に、且つほとんど無限程度にも達せんばかりに大い。なぜかといふに、一人の日本人

は、民族性のほかに、なほ數限りもない種類の要素を本質的に所有する。そこには、例へばヤソの山上の垂訓に共鳴しうるやうな普遍妥當價ある道德的要素もあらう。『ジョーブの書』の詩心と詩才に逢讀されるやうな、同じく普遍妥當價ある詩的要素もあらう。數學的要素、自然科學的要素、乃至廣く科學的要素、世界の光りとしての哲學、思想、數へ立て行かば民族性以外の要素が、その一人の日本人に於いて無盡庫にも似たらん巨然たる存在をなしてゐる事實に逢着するほかなからう。民族性は、かれに於いて、かれの人格的個性に於いて、組織の全經緯ではなく、その一局位だ。質的特徴に從うて一人を觀察するときには、かれはかれの民族性以上ほとんど無限大であるのだ。

民族性は、それが最大發達を實現した場合を假定して觀察してさへも、なほ且つ本質的に個人性に內在する一部分だ。況んや、民族性は、人類が進化し、社會が成長するに從うて漸滅する。民族性は、人に於ける地理と氣候の感化影響を說明とする現象だからだ。この感化影響は、しかるに、交通手段の發達によつて機會を奪はれるからだ。民族性は、過去に於いてそれの全盛期を達成した。學藝復興以來十九世紀の中、末葉に至るまでの期間は、すくなくとも歐洲について見れば、民族性の發育期であつた。十九世紀は、實にその發育の完成期であつた。

民族的自覺を生命とする國民主義が、學藝復興期に當み、佛革命後及び殊に大那翁戰後の數十年間 百年間に開花爛漫し、二十世紀初頭の歐洲戰 合圖に或ひは落花狼藉の端に就き、或ひは委靡枯燥の兆を示すに及んだのは、石油時代を迎ふべく行燈時代が逝き、更らにまた電燈時代を迎ふべく石油時代が終焉を告げたにも比すべき進步現象だ。國民主義の誕生歌は、封建主義の廢用令であつた。いまや、二十世紀の四分の第一期も漸く盡きんとして、國民主義の廢用令が聽聞者の要求となつて來た。國民主義の廢用令は、新た聯主義誕生歌だ。

帝國主義は行きづまつた。一九一四年の夏以來、殊にまた一九一八年の秋以來の人類世界の歷史が明白にこれを示す。けだし帝國主義は、その第一難點を道德的不完全に有する。帝國主義の原則は、人格主義と兩立しない。本質的個性主義と相容れないのだ。しかるに、世に本質的個性主義以上の理想的權威ある主義はありえない。それ故に、もしも帝國主義と本質的個性主義とが相容れないならば、それは、帝國主義が引責辭任すべき理由を意味する。

史上の帝國主義の原則を見るに、それは意思及び實行に於ける專制主義だ。それは、帝國領以外の國土民族に對しては、意思に於いての專制主義であり、帝國領以內の地方住民に對して

は、實行に於いての專制主義であるを通例とする。意思と實行との差は、この場合に於いては、機會または能力の有無大小の差にすぎない。精神に於いては兩者とも專制だ。

ある一民族が、またはある一民族を中心とする數民族の團結が、力にまかせて他民族を征服し、立法、行政の樞要權をその征服民族の當代及び子孫の手に壟斷し、被征服民族の當代及び子孫は、意思に反して、ただ外力に從うてその立法、行政の支配下に生存する狀態が、帝國主義の一側面の光景だ。本質的個性主義の信仰は、この光景に反逆する必然性を持つ。その信仰の持ちぬしは、この光景を樂觀しえず、この光景內に安住することをばなほさらしえない。

帝國主義は行きづまらざるをえざる內外の事情に支配されて行きづまつた。二十世紀の人類の新活路は友聯主義だ、フェデラリズムだ。各人の本質價を目的とする友聯主義だ。

帝國主義は國民主義の必然的到達だ。國民主義そのものに帝國主義の種子が牢乎として存する。國民主義は、帝國主義に到達せずに、國際友聯主義に到達する約束を自身內具するにあらざれば、國民主義は、帝國主義の意思態、準備態として、早きにのぞんで禍根を斷つの智慧に從うて呪咀されべき理由がある。例へば支那の如き、國民主義未實現の人類にむかつてさへも、われらは、國民主義を勸奬し、翹望する良心的勇氣が汲めなくなる。けれども、國民主義が、帝國主義に到達せずに、國際友聯主義に到達する可能は、國民主義の衝動と理想が、本質的個性主義に存するならば安全だ。

國民主義を目的とする國民主義がわるいのだ。本質的個性主義を目的とする國民主義でさへあればよいのだ。無理想の國民主義がわるいのだ。たかが民族性の自覺にすぎないくらゐの國民主義を、人生の至寶とばかりに、自他人格の存在理由とばかりにありがたがるところが不明なのだ。多くの不德は無智にその原因を有するのだが、國民主義の不德も、甚だしばしばこの不明からくる。

帝國主義の原則がことごとく過失なわけではない。他のすべての事情が同じなら、大國は小國よりもよい。曾つてアリストートルは小國を主張した。人口が僅かに十であるほどの小國では、眞の國でないが、人口が十萬にも達するほどの大國は、また決して眞の國でないとかれはいうた。國家の領土は、一と目に見通ほしうる限度を超えてはならん。國家の公民全員が出席した集會に於いて、一人の聲が皆なの人に聽き取られえなくてはいかん。國家の役人は國民各員の顏と性質を記憶しえなくてはいかんといふやうな條件をかれは提說した。時代と社會事情

とが、アリストートルの場合に比して、大いに變革し進化した近代の十八世紀に生きて考へたルーソーも、同じくまた小國を主張した。かれらの主張は、曾つて實現されず、いふに足るほどの注意をもひかずに今日に及んだが、果してそんな無意味の主張であつたらうか。われらの答へは、かれらの主張には、未實現の深い眞理が藏されてゐるといふにある。その眞理が、二十世紀の殘餘に於いて、望むらくは實現されよう。

　アリストートルが現實に關係した國家は都市的國家であつた。近代の國家とは比較にならぬ小規模のものであつた。その小國家に生きてさへ、かれは國家の過大を痛感した。それ近代の國家は、民族的自覺の別名としての國民主義を精神的内容とする。斯くして近代の國家は、小さゝとも一民族大の人口を有する。大國は、數民族大の人口を有する。例へば英帝國民の一部は、印度全民族だ。近代に於いて能く民族的自覺を成しとげ、獨立の國家を形成するほどの氣力と聰明を有した民族は、人口に於いても、概ね數百萬はおろか、數千萬に達する。立憲代議制すなはち責任自治制がすくなくとも佛革命以來の顯著なる一意識的努力とはなつたけれども、それは、最も高く且つ好意的に解釋しても、目的、動機、意思に於いての現象であつて、方法に於いては、隨つて結果に於いては、なほ甚だしき程度に於いて專制だ。數千萬の人口が一々の國民的立法や國民的行政に自身直接に參與する便宜は無論缺けてゐるが、かりにその便宜があるとしても不十分だ。損失が遙かに獲得を凌ぐ。人民投票の如き方法がないではないが、これは、極めて單純なる國民的決意を必要とする場合に於いてのみ有價だ。多少複雜なる考慮を要する國民的政治問題の解決には、どうしても代表制が必要だ。立法、行政の代表者が近代國家の不可缺要件に屬するのだ。

　代表は、しかしながら、文字通りに代表であることを要する。一人が、立法、行政といふが如き大事に於いて他人を代表するためには、その代表者と被代表者との間に完全なる知識、理解が先づ準備されてあることが必要だ。病人を代表して醫者へ藥取りに行く人は、病人の要求と事情を知る人でなくては無責任だ。近代の國家に於いて、立法、行政の代表者たる位置を制度上、形式上、占有する人々は、すなはち議員と役人とは、然るにいかなる程度まで國民の責任ある代表者で事實上ありうるか。

　知識なき代表は不可能だ。代表は意思だけで出來る仕事ではない。けれども、近代の國家がほとんど致命的に缺乏するところの一事は、知識ある代表意思だ。近代國家の組織上、また廣くに近代社會の組織上、知識ある代表意思はまだ可能にされて

ゐない。なぜかといふに、知識ある代表意思が、近代國家の如き大人口、大領土、複雑分勞の社會に於いて可能にされるためには、地方を條件とし、また專門、職業、乃至更らに廣く問題を條件とし且つ內容とする非强制的、自發的組合が發達しなくてはならん。自發組合の發達は社會の內包的、質的增進だ。斯くの如き自發組合の發達は、代表を有責任すなはち有意義にする。各人のすべての目的のおの／＼は、先づ相當の自發組合とまで發達し、然るのちに全國的または國際的社會の意思目的に成熟する便宜がある。各人のすべての目的のおの／＼は、先づその特殊目的を共通に所有する、また所有しうる人人と相理解し、數量的に多くの人人が相理解しえた各種目的の全人的または全社會的組織がその基礎の上に築かれる。この組織に於いては、代表、被代表の關係が、地磐基底から一煉瓦石ごとに重力の關係を十分にして築き上げた摩天樓屋の如くに、全作に貫徹する。專制主義、中央集權主義の禍災をば、このやうな國家組織、社會組織に於いては、意思に於いてのみならず、方法に於いて、隨つて結果に於いても避けうるのだ。

立法、行政の代表者と被代表者との間の接觸が、隨つて知識が不十分なために落ち入る專制主義は、斯くして、近代國家の場合に於いては、自發組合の發達によつて救はれる。さすれば二十世紀の人類は、かならずしも民族的國家の大を持てあますには及ばない。そも／＼小國論は、すなはち小國主義は、小を目的とするところに價値を有するわけでは決してない。人々の完全自治を目的とするところに價値を有するのだ。完全自治の目的さへ達せられれば、團結すなはち協力範圍は大きいほど善だ。大團結が、それの構成各人員が完全自治者でありうるためには、代表、しかも責任ある代表が必要だ。そして、その責任ある代表は自發組合の地方別的、職業別的、及び問題別的發達によつて可能にされる望みがある。

帝國主義の弊は大量主義にある。優質を目的とせざる大量主義にある。一民族が、その文化能力の最高實現と、最大發達を現實にする方法は、文化に於いて現に優越である他民族の支配下に、屈服的に、すなはち自民族の意思にそむき、ただその他民族の强力に制せられて屬するには存しない。隸從は、專制者の文化價値を本質的に學得する方法でさへもない。例へば日本が幕末に於いて、或ひは明治、大正に於いて、西洋の先進强國に屈服隸從させられたならば、そして屬領としての位置を與へられたならば、日本人は、事實日本人が、自治獨立の民として獲得し、達成しえたよりも完全に、十分に、高度に西洋文明を自身實現しえただらうかと考へるに、答へは正反對だ。日本民

族が西洋の或る帝國主義の支配下に過去半世紀間に全然立ち來たつたならば、日本民族は、到底かれらが實現しえたほどの高い程度に西洋文化の精粋を發達し、身讀しえなかつたにきまつてゐる。帝國主義は、決して本質的文化主義とは兩立しないのだ。

質を目的とするといふ條件が確守されれば、大量主義は小量主義よりも善だ。帝國主義の弊は、內包主義を目的とせざる外延主義にあつた。もしも眞友聯主義と、眞代表主義との理想と實行によつて、近代國家、近代社會の內包を、その外延とあはせて保護し、發達させることが出來るならば、われらの選擇は大國家、大社會に、それ以上考へる必要なしに決定する。一民族と他民族との間の關係を眞の友聯主義に依賴して決し、各民族內の關係を眞の代表主義に依賴して決するところに、また全人類內の關係を且つ同時に眞の代表主義に依賴して決するところに、國民主義の二十世紀に於ける合理的餘命があらう。國民主義の近き將來は、新友聯主義と新代表主義の經緯でなくてはなるまい。

好んで小國家を形成すれば、他に、たとひ內的組織は不完全であつてさへも、なほ且つ數量的優越の大協力が現はれて、或ひは內的組織が完全な上に、數量的優越を所有する大協力が現はれて、その小國家は侵略され、壓倒される必然性が、現代に於いてはあきらかに看取される。國際聯盟、華府會議、ジエノア會議に於ける「大國」と小國との實權を比較して見ても、これは爭はれない事實だ。人類の團結本能と、爭鬪本能とは、いまだ頗る野蠻だ。民族的同一性を所有するにもかゝはらず、それを協力のための機會として利用しないやうでは、そのやうな民族は、大業がなせないのみならず、よその强者の惡の餌食とされる危險が代表的可能だ。歷史はこの可能を明視したが、すくなくとも近き將來は依然としてその可能を明示しつづけるだらう。

立法及び行政が無理なしにその人口的、領土的適用區域を擴大しうるならば、それは進んで實現の機會を與ふべき可能だ生活力の節約だからだ。人力經濟の目的にかなふ方法だからだ。帝國主義の原則は、この點に於いて廢棄されず、進化すべき餘地を示す。專制を友聯になほせばいいのだ。同時にそれを代表に改化すればいいのだ。

民族性そのものが、本質的でないと同時に、多少不定確だ。一民族がどこに盡き、他民族がどこに始まるかは、しばしば客觀的に明瞭を缺く。例へば北獨と南獨、北佛と南佛の定住民の間にもこの不明瞭はいちじるしい。民族際結婚が增すに隨うてこ

の不明瞭は高まる。帝國主義の反動として、民族主義が破折殊に歐洲戰以來高調されて來たけれども、われらは、民族主義の本質的、理想的制限を知らなくてはいかん。ひとへに民族主義を信奉せば、世界に、復活を要する言語が多からう。歐洲英國だけについて見ても、ウエールス、スコツトランド、及び愛蘭をはじめとして、いくつもの民族語、土語、方言が復活せねばならんことになる。人類文化の大目的から考へて、これは果たして歡迎すべき、持ち來たすべき狀態であらうか。決してさうでない。

帝國主義の現實的外延は小さすぎる。國家の範圍は、事實上、現存のいかなる帝國よりも大きくなる必要があるのだ。例へば南北兩米大陸が國際的一責任自治區となり、歐洲または歐阿兩洲が同じくまた國際的一責任自治區となり、亞細亞の大半乃至全部がまた國際的一責任自治區となり、そしてそれらすべての國際的責任自治區の間に、友聯と代表が徹底した狀態が希望される。

單なる國民主義と、それの一歸結としての帝國主義がいかに滿期廢用に近づいたかは、或ひはそれを通ほり越したかは、現在の歐洲諸國民にむかつて、國民主義を依然として、または從來以上に強く信ぜよと勸奨することが、いかに愚または惡であるかを一考してもわかる。英、佛、獨、露、伊、かれらはいづれも十九世紀に於いては、國民主義を信奉することによつて救はれた人類だ。しかし、かれらは、二十世紀に及んでもなほ惰性的に、且つ調子にのつて國民主義を固執しつづけたゆえに、歐洲戰爭の慘禍をなめさせられた。またその後の内紛になやまされつつある。もしも歐洲民にして、今後數十年の久しきにわたつて、依然として帝國主義的または排夷主義的國民主義の迷夢に沈醉しつづけるならば、舊世界の名を負ふ歐洲は、文字通りいわるい方の意味に隨つての廢滅國のむれとなり、新興アメリカの勢力や、その他の新興勢力さへもの浸潤橫溢の舞臺となるかも知れん。ジエノア會議の現象價は失敗に終はつても大事でないが、その兆候價は、成功しないならば歐洲の末路だ。ジエノア會議の兆候價は、友聯主義と代表主義の再設いな創設された歐洲だ。七十年前に、封建主義の日本は、ペリの來浦に遭うて、自衛の必要上、國民主義に跳躍し、進化した。百有餘年前に、抑壓的分立主義のドイツは、ナポレオンの侵寇に觸發されて國民主義者となつた。二十世紀の四分の第二期の歐洲民は、西や東や南からの多少の脅威に刺激されて、民族主義以上の新團結に悟入しないだらうか。

想像力の小は人間の世界に於ける實に多くの罪惡の原因だ。

民族際不安、國際不安、人種際不安は、階級別、性別、齡別等の方面に於ける多少の鬪爭的傾向及び現實と共に、想像力の小にその説明を有する。各民族と各人種とは、他民族と他人種の眞實と本質を容易に理解しない。人間らしい人間は自民族や自人種に限るやうにさへ多くの人人が多くの場合に考へる。無產勞働階級の人人の人間性をその以外の人人が容易に理解せず、をんなの人間性ををとこが理解せす、わかき人人の人間性を老いたる人人が理解しない如くに、各民族と各人種とは、他民族と他人種の人間性を信じない。無想像は無知だ。無知識だ。專制主義は、實にしばしば、相手の眞實と本質に對する無知識または無想像にその原因を有する。帝國主義及び攘夷主義は一種の專制主義だ。すくなくとも相手の言語に精通しないあひだは、それだけの缺陷からしても、人は帝國主義者となり、攘夷主義者となる可能が高い。帝國主義と攘夷主義とは同一本質だ。力の大と小とによつて、同じ民族的無想像が帝國主義と攘夷主義との二作用を呈する。

想像力低き人は、洞察力弱き人だ。直覺力と推理力との兼ね缺けた人だ。あたまのわるい人だ。不聰明な人だ。且つ實にまた小品性の人だ。知性の纖維のあらい人であると同時に、品性の纖維のあらい人だ。かれは、現象の人だ。知覺の人だ。原則の人、概念の人でない。このやうな人が諸民族に於ける人間性を知り信ずるためには、一面に於いて世界の交通手段を、頻繁、快速、安全、低廉を條件として、文字通りの蜘蛛の網の如くに、實に網布の如くにさへも設備する必要がある。各民族間の個人的直接接觸の機會を增大する必要があるのだ。そして、他面に於いて、比較的早や目に友聯主義、代表主義の具備した大國家または大社會を制度的に實施する必要がある。制度は、過去の事實としては、少數識者の理想の結果であつたが、多數者の理想の原因であり、形成力であつた。將來に於いても、殊に近き將來に於いては、この原則がなほ多分に支配するにちがひない。輿論の熟するを待つて制度を設備するのみが社會經營の學術ではない。先づ制度を英斷的に設備して輿論を教育し、訓練する要が同時に常に多少ある。廢藩置縣されて民衆は先づ錯愕し、しばらくにして不便を感ずる程度が減却し、便宜を感ずる程度が增進した例は、われらの父祖の經驗であつた。人類の無想像を補充する合理的直接行動の一は、疑ひもなく國際的責任自治區の改設と新設をむしろ急ぐにある。

人類間の情愛は世界平和の原動力だが、情愛は、すべての場合に於いて、本質的には發生する。製作されない。交通手段と、立法的、行政的制度との世界的設備は、實に、人類間の情

愛に發生の機會を與ふる方法であるのだ。犬でさへも、同棲しては人はこれに對して深い情愛を生ずる。人は、犬のやうに無自治的柔順でないから、知るに隨つていやになるといふ一側面の可能もある。けれども、この可能は、そのままに理想とされべき性質のものではなく、理想の力によつて、克服され、統治される必要ある事柄だ。人は、敵と賊から逃げてはいかんのだ。人は、かれのすべての敵と賊をば征服し、統治しなくてはいかんのだ。人の方法は、積極的であるを要する。人の目的が、のちに說くが如く、最も積極的な生産に存するからだ。

近代國家の通則は民族的團結だが、これは必らずしも將來永く固執されべき價値を有しない。今後の一希望としては、現在のアメリカ合衆國が不完全ながら例示したやうな、雜多民族の混成國の發達が考へられる。民族的異同のみを條件として國家を別に持ち、また共に持つべき本質的理由はない。民族的異同が、協力別の支配的勢力でありうる場合には、民族別に隨つて國家別を決定し、他の人間的事情の異同が協力別の支配的勢力でありうる場合には、その異同に隨つて國家別を決定するに不可思議はない。不條理もない。生物學的、歷史的、地理的共有內容を材料とし、これに立法、行政の加工を十分にしたかたちの組合が近代の國家だ。この組合の內包を進化的に分裂させ、またこの組合の外延を發達的に超越する民族性以外乃至以上の共有內容を材料とする組合が今後當然複雜多種に發生し、繁榮する。たとひ民族組合としての國家はおの／＼主權を標榜して相對立しても、各人の社會生活の內包と外延が他の組合のかたちに於いて、人類一族、地上一家に近づく。

理想的意義に解したる家庭の原則が、全人類社會に成長し、開發し、熟達し行くやうに、現代人の敎育的及び施設的努力が拂はれなくてはいかん。家庭は、それ自身にある大いなる價値を有すると同時に、その原則を國家乃至社會の全舞臺に擴充する目的の意識に於いて一層大いなる價値を要請する。眞正の家庭內に於いては、各個性間の差は、各個性間の愛と兩立しうる。そこでは、愛の要素が、他のいかなる要素よりも有力だ。優勢だ。家庭に於ける專制主義者が、國家、社會の大舞臺に於いて、ある最も正しき意味に於いては小舞臺に於いて、責任自治主義者であるならば、その責任自治主義者は製作だ。發生ではない。僞物だ。眞人ではない。中世のギルドの精神の現代的復活も決して無意義でない、大いに有用だと思ふが、今後の家庭の精神の社會的擴充は、一層疑ひすくなく時代的新福音の筆頭に立つ一項だ。

現代民族人がいかに無想像であるかは、かれは自己の民族異

には無感覺であつて、他の民族臭にだけ感覺が過敏なのを見てもわかる。かれは、他の民族臭に對しては、むしろ錯覺と幻覺を形成する。そして、自己の民族臭に對しては、中毒症狀に落ち入つてゐる。各民族は、他民族からの批評を靜聽する習慣を養成する要がある。家庭らしい家庭の各員間には、相互の自由批評も一要件だ。他民族の批評眼に映ずる自民族のすがたは、最も注視を値ひする。友和的精神を保有しうる範圍內於いて、諸民族間の相互批評の意思と機會を解放し、增設する要も考へられる。

　けれども世界平和は、單なる知識や情愛の鍵で開かれる寶庫ではない。それは、他のすべてのまじめな目的の達成に於いての如くに、人生觀上の深甚なる更生を要する。われらの人生觀が今日のままである限り、交通手段の發達や、立法、行政の完備は、要するに點睛の功を缺く畫龍同然だ。人生觀上の更生とはほかでもない。生產主義の新神學、新信仰の實現だ。

　各一人は生產と消費との二特徵に識別される。いはゆる物質的價値の生產と消費とではなく、いはゆる物質的價値及びいはゆる精神的價値の兩者を完全に含めたかたちの生產と消費とをここではさす。しかる時には、消費は生產を目的とする手段であり、生產はそれ自身を目的とする行爲だ。人は、生產者としての場合に於いて、最も十分にかれ自身だ。生產者としての場合に於いて、人はかれを最も完全に自覺する。すなはち實現する。自覺と實現とは、人の場合に於いては、一事の內的特徵と外的特徵だ。人が自覺する方法は自己實現にあるのだ。陽明が不完全ながらもこの事理の一端に着眼したことがある。人が自己を實現する方法は、しかしながら、正しき意味に於いての生產にある。生產に於いて、人はかれの個性をみづから知り、他に示すことができる。消費に於いては、人は、その消費されるものの個性を、または廣く本質を知るにすぎない。食ふこととは、その食はれるものの本質が實現されることだ。きることとは、そのきられるものの本質が實現されることだ。されば、人がなにを食ひ、なにをきるかに察して、かれの個性や本質を知ることはできない。寄宿舍の獻立表と、學校の制服とを見て、寄宿生や學生の個性を推想するわけにはゆかない。人は、一語を發し、一線をゑがき、一文を綴り、簡單なる卓上演說を試みてさへ、なほ且つかれ自身の獨特內容を鮮明に表露する。すべての受動は、それの內容としての能動力によつて顯著であり、すべての能動は、それ自身によつて顯著だ。けれども、能動中の能動　生產だ。

　生產が人生の目的だとわかれば、いな實に宇宙萬有の目的で

さへもあるとわかれは、モリスが暗示した通りに、仕事の質が優秀になる。同時に多量にもなる。事業の光景は、質に於いて一變し、且つ量に於いて增す。各人の奉仕や貨物が、他の使用と消費を待ちあぐむ形勢にも及ぶ。ニーチェのいはゆる、蜜を集めすぎた蜂のやうに、各人が、他人からの消費、使用の手が、さかんにさし伸んでくることを必要とするやうになる。

人生觀上の生產主義が蹶起すれば、民族際、人種際、乃至すべての團體際は、その絕對的構成單位としての更生人の支配を受けて、竊盜主義、掠奪主義、詐取主義の機會に於いて失ふ。そして、その反對に、寄與主義、貢献主義、要するに結果に於いての利他主義、愛他主義の機會に於いて得る。

愛の宗教と慈悲の宗教とは久しく生きた。愛の宗教も、慈悲の宗教も、しかしながら、民族戰と階級爭をどうすることもできなかつた。今後もできさうにない。既成信仰と現存道德とは、近代の立憲代議制の如くに、たとひ意思に於いては無僞だとしてさへも、方法に於いて、隨つて結果に於いて成功しない。他を愛せんと欲せば、その方法を實現しなくてはいかん。けれども、その方法は、生產をほかにしては絕對的に不可能だ。目的が生產にあれば、しひて人を愛しなくても、結果に於いて人を愛することになる。一人か他人を愛しうる唯一の方法は、その一人の自己實現にある。信仰の對象としての神をそとに見すぎた立ち場は、愛人類の對象としての人類をも同樣にそとに見すぎた。

そもそも社會は、それの絕對的構成單位としての各人の內にある。各人の行爲は、それの結果に於いて社會に屬する部分を多少有するがゆゑに、その程度に應じて、それの動機をも社會に屬させる用意が各人の內的一必要事でなくてはならん。一人が屬する社會は、その一人と協力關係にある人々の全部だ。現代に於いては、各人が屬する社會は、それゆゑに、全人類だ。家庭の一員としてのわれらは、その行爲の結果が、家庭の全員に切實に屬することを比較的明確に知るがゆゑに、その行爲の動機をも、かなり注意して全員大にする。各員が全員のためにも考へて行ふ。原則としての家庭を、現象としての世界人類に、われら民衆は、今後どのくらゐの速力をもつて進達させえるだらうか。

人類愛思想としての基督教とストア學派の倫理觀

林　癸未夫

一

全人類が相互に唯人間として、言ひかへれば國籍、人種、宗敎、階級の差別なく、單に人と人との關係に於てのみ、相愛することが「人類愛」なる語を以て言表はされるとするならば、それは過去に於て、思想としては存在したけれども、現實の世界に體驗された例は曾てなかつたと言つて差支ないと私は思ふ。

右に述べるやうな意味に於ての人類愛の思想が明確に人間の意識の中に捕捉されたのは、全く耶蘇の出現以來のことであつた。耶蘇出現以前の猶太の預言者等の敎訓も、希臘の哲學者等の說法も、唯自己と志を一にする者を愛せよと告ぐるに止まり、未だ曾て人類全體を抱擁する愛の思想には到達してゐなかつた。隣人の愛すべきを思ふも、敵の愛すべきを思はなかつた。善に味方することを知るも、惡を宥すべきを知らなかつた。人類が之を思ひ之を知つたのは、まさしく耶蘇の出現このかたである。トルストイが既に道破した如く、基督敎の眞髓は敵を愛し、惡を宥すことにある。耶蘇によつて點火された思想上の新光明こそは、正に徹底したる人類愛のそれであつた。

二

基督敎傳道の初期に於て、羅馬帝國は即ち世界の全體として考へられてゐた。あらゆる人種、言語、宗敎、學術、傳說、習慣が其中に在つた。從つて其等の全體を基督敎に改宗せしめるこ

とは、卽ち人類愛の思想を全世界に普及せしむる所以であつた。

基督敎の羅馬帝國征服こそは古往今來人類によつて經驗せられたる思想上の最大勝利として記憶さるべきものである。文化史上曾てこれ以上の偉觀はなかつた。羅馬の首都からすれば天さがる僻遠の一寒村に、大工の子として生れたる賤の男の耶蘇が、僅か三年間の流浪的生活の間に、低能無知なる俗衆の萎縮したる靈魂に點じた一片の熱火が、世界的大帝國を支へたる諸民族のあらゆる權威、思想、傳說を燒きつくして、其處に新に思想上の世界的大帝國を建設した經路は、寔に崇高なる一大戲曲で、これほど驚歎すべき人間の事業は未だなかつたと言つてよい。

併しながら吾等が基督敎傳道史を回顧するに當つて、第一に感ずることは、若し一個のパウロなかりしせば、基督敎は決して世界を征服する大宗敎たり得なかつたではあるまいかといふ疑ひである。パウロは異邦人に對する傳道を以て畢生の事業とした。クリスチヤンなる語が異邦人の信者に與へられた名前である如く、基督敎を世界に普及せしめたものは、其祖國人たる猶太人ではなくして、異邦人であつた。パウロの先輩として耶蘇に親灸したる他の使徒等は槪ね耶蘇を自國民のみの守本尊として之を獨占し、福音を普く異邦人に齎らさうとするパウロの志願には執拗に反對した、彼等は耶蘇を世界億兆のための救主たる地位から引下げて、唯僅に猶太民族のみの救主として、其光輝を羅馬屬領の一偏土に局限しやうと欲したのであつた。やかましかつた割禮問題の如きも畢竟之に原因して起つた枝葉の一論爭であつた。危いかな、若し當時パウロの敢然として群疑を排し、身を挺して異邦人の傳道に邁往するの勇氣と熱情とがなかつたならば、基督敎も地中海の一隅に蟄縮たる一小民族の間に數十年か數百年かの生命を保つたのみで、人類文化の主潮には毫も接觸することなしに、早くも滅亡すべき運命に在つたかも知れなかつた。何となれば元來猶太民族は政治的にも道德的にも組織的な實行的能力に缺けてゐたがために、當時の諸民族間の生存競爭に於て、到底永く其命脈を維持することは不可能であつたからである。基督敎は永く猶太民族の胎内に宿つてはゐたが、それは空漠たる救の信仰以外に、彼等の理智の上にも道德の上にも何等生きた力として働いてはゐなかつた。基督敎を生んだものは猶太民族であるといふよりも、寧ろ一個の耶蘇であつた。耶蘇なる一人格から基督敎が生れたといふ事實こそ、彼が處女の腹から生れたといふ傳說にも增した一大奇蹟であつた。聖書中の奇蹟といふよりも、文化史上に於ける至大の奇蹟であつた。

此基督教が單に猶太民族間の一時の思潮として消え失せなかつたのは、それが猶太民族の手を離れて異邦人の手に移されたからであつた。基督教を育上げることは猶太人には餘りに重い任務であつた。彼等は到底其任務に堪へない。何となれば其任務は彼等よりも、政治的にも道德的にも遙に卓越したる組織的實行力を有する民族でなければ、決して仕おふせることができない程、絕大なる困難を伴ふ所の任務であつたからである。パウロが果してさやうに考へてゐたかどうかは固より疑問である。併しながら彼の異邦傳道なくしては、基督教の羅馬帝國征服といふ事實が發生し得なかつたであらうと想像することは、決して誤りではないと私は信ずる。

三

基督教が羅馬帝國を征服したことによつて、人類愛の思想が世界に宣傳されたことは事實であるけれども、それが思想として宣傳されたことは、それが現實の上に躬行されたことを少しも意味するのではない、固より基督教の感化なかりせば、人間の道念も行爲も、それが實際あつたよりも更に醜惡であつたには相違ない。單に此意味からすれば基督教が人類の文化に與へた功績の偉大なことは更めて說くまでもない。併しながら基督教は本來思想運動ではなくして實行運動である。それは端的に現實の行爲を要求する所の宗教である。心の貧しきものにあらざれば神を見ることはできない。宗教を思想として賞翫するは智者賢者の遊戲である。唯赤兒の如き簡素なる精神の持主にのみ眞の信仰が宿り、眞の法悅が示現せられる。若し羅馬帝國の改宗によつて世界の億兆及其子孫たる生れながらの基督教徒が、思想としてゞなく、行爲として基督教の教條を遵奉してゐたならば、恐らく過去の世界歷史は、吾等の想像も及ばぬ程實際とは懸け離れた進展を遂げたであらう。何人が如何なる時代に於て眞に能く其隣人を愛し得たか。何の民族が其敵をいつくしみ得たか。何の國民が人類愛を實現し得たかを回顧する時に、吾等は唯々過去二千年間の基督教徒が如何に非基督教徒的であつたかに驚かさるゝばかりである。基督教が人類の道德的文化に寄與した所が如何に偉大であつたにせよ、それが然かあるべき筈の標準から測定されるならば、眞に九牛の一毛に過ぎなかつた。所詮基督教の羅馬帝國征服は思想の勝利であつて、行爲の勝利ではなかつたのである。

基督教思想に征服された羅馬帝國固有の思想は主としてストア學派の思想であつた。ストア學派の思想が篤信なる少數者の行爲を律し得たのみで民衆の行爲を支配するに無力であつたや

うに、基督教の思想も亦熱信なる少數者の行爲を律し得たのみで、民衆の行爲を支配するに無力であつた。思想は常に民衆に取つては謎である。彼等は自ら解き得ざる謎を解かうと試ることなしに、直に其答を與へられることを望む。而してそれに滿足する。併しながら彼等は唯それを壁に掲げて眺めるだけである。彼等の日常の行爲はすこしもそれによつて煩はされることを欲しない。彼等は常に彼等として殘る、それが民衆の特質である。吾等は基督教の羅馬帝國征服を、單に思想上の闘爭として觀ぜねばならぬことを知る時に、寧ろ幻滅の悲哀を感ずるものである。何となれば壯烈無比なる殉教者の物語も、單なる狂的妄想の發作としてより以上の價値を有せぬ、枝葉の一挿話に過ぎないことを念ふからである。

四

由來羅馬人に取つての最高の道德は羅馬を愛することとであつた。これは學問の研究から得た思想ではなくして、彼等が父祖から承繼いだ本能の中に藏する實感であつた。しかも此實感から生れた道德を、いやが上にも高調して羅馬士人の理想的典型を陶冶するために、ストア學派の倫理觀は最も適當な資料であつた。政治上に於ては稀有の天才を有つてゐた羅馬人も、思想上のオリヂナリチーに於ては、遠く希臘人に及ばなかつたがゆえに、彼等は基督教に征服される以前に、既に希臘哲學に征服されてゐた。しかも希臘哲學中、羅馬に於て最も確固たる根據を占めたのは、言ふまでもなくストア學派であつた。

元來ストア學派の倫理觀の根本思想は宇宙を支配する理法に順ふといふことであつた。しかも此理法を發見し得るものは人間の理性である。道德とは畢竟理性の導くがまゝに生活することである。富貴も卑賤も快樂も、苦痛も生も死も、人事一切のものは理性に順ふて之を享有すれば善であり、然らざれば惡である。從つて是等の人事自體は元來道德的に無價値であつて、之がために累せらるゝ煩惱の域を脫することが德に入るの門である。而して吾等を煩惱から解脫せしめるものは理性であつて理性を開くものは吾等の知見である。而して又知見を支持して克く其能を果さしめるものは吾等の意志である。知見によつて理性を拓き、斷ずるに意志を以てする時に吾等は道德圓滿の人となることができる。他人は我が身體を傷け又生命を奪ふこともできるが、聊かも我が理性を傷けることはできない。從つて吾等は己が理性に順ふて德を守ることによつてのみ安心立命を得べきものである。死といへども我が累をなすに足らない。約言すれば吾等若し己が主人たるを得ば、すべてのものゝ主人

たるを得るものであると。これがストア學派の根本教義であつた。彼等が自殺を是認し、理性に於て生存の理由なしと認めたる場合は、進んで死に就くを正當としたのも、彼等の教義からすれば寧ろ當然であつた。彼等は死後に就て恐怖の念を懷かざること、從つて死を怖れざることを以て品性の修養上最も肝要としたのであつた。

右の如きストア學派の教義からして、其道德鍛錬の方法が主として制慾に在つたことは自然の結果であつた。彼等は内心の情慾を抑へ、固有の惡癖を却け、あらゆる外來の誘惑に打克つて、ひたすら理性と意志の力を奮ひ起すことに專念した。彼等は一切の快樂を擧げて直に之を罪惡視するに至らなかつたけれども、エピキュラス學派が快樂を以て、人生の目的とし、其醇化を說きたる思想を峻拒し、快樂は人生の伴侶たり得るとするも其案内者であり得ない。從つて快樂のために德を行ふにあらずして、德を好むがゆゑに之を行ふのである。快樂が伴ふか否かは我に於て關せざる所であると說いた。

かくの如くストア學派の倫理觀は甚だ峻嚴ではあつたが、他方に於て其顯著なる特色と認められるのは、それがアリストートル以來希臘の倫理思想の一般的傾向となつてゐた個人主義から離れて、社會的方面に重きを措いたことであつた。彼等は個人の國家に對する義務、社會に對する公共心の尊重すべきことを高唱した。此點は確にストア學説が羅馬に歡迎された重な理由であつたに相違ない。彼等は理性を以て宇宙を貫通する普遍の法則としたるがゆゑに、理性に順ふ者即ち有德人は社會の上層に特殊の一階級を形造り、と同時に、無德人を教化指導し、全人類を向上して德に向はしむるの義務あるものとした。彼等の教訓によれば、人は只己れ一身のためにのみ生れたるにあらずして、全人類のために生れたるものである。從つて天然は各人に命ずるに全人類の善良ならんことを望むべきを以てする。この理由によつて各人は人間である。されば己れの屬する都府（希臘ではそれが國家であつた）にのみ義務あつて、他の都府には義務なしと思ふことは、普遍なる人類の社會を破壞する謬見である。全世界は神人共有の都府であるがゆゑに、各人は全世界のために其能を竭すべきである。かくの如き教義はストア學説が其固有の思想に於て、世界主義であり、四海同胞主義であつたことを證明するものであつて、此意味に於て彼等も亦人類愛の捧持者であつたと言へるのである。

五

ストア學説が羅馬人の思想に與へた影響は之を二段に別つて

觀察しなければならない。第一は羅馬の共和時代であり、第二はその帝政時代である。共和時代は即ち建國、自彊、征戰、侵略の時代であつて、國民は愛國心に燃え、敵愾心強く、羅馬人としての一致協力が何よりも貴重視せられた時代であつたがゆゑに、彼等によつて攝取せられたストア學說は、如上の國民精神を高調するに必要と認められた部分であり、又其趣旨に副はしめるやうな解說が試られた。然るに帝政時代は統一守成融和綏撫の時代であつて、愛國心よりも寧ろ四海同胞の觀念を尊重すべき時代であつたがゆゑに、彼等によつて宣傳せられたストア學說も亦、如上の時代思想を哺育するに適當と認められた部分であり、又其意味に適するやうな註釋が加へられた。

共和時代に於ける羅馬のストア學派を代表するものはパニチアス、シセロ及ケトー等であり、帝政時代に於けるそれはエピクテータス及皇帝マーカス・アウレリアス等であり、其間の過渡期を代表するものはセネカであつた。

ペロルツハイマーは『法律經濟哲學の文化的階段』に於て、初期の羅馬の法律の著しい特色は、それ以前のあらゆる民族に共通の慣例ともいふべき、法律觀念と道德觀念の曖昧なる接合がなくして、唯冷酷なる法理が些の假借もなく表現せられてゐる點に在ると說いてゐる。乃ち家長は家族に對して生殺與奪の絕對權を有し、債權者は債務者に對して無制限に峻嚴なる契約の履行を强要し得るが如き之であつた。併しながら私に言はせるならば、羅馬人がかくの如き嚴厲な法律を有した時代に於ては、やはりかゝる法律を必要とする道德的背景が必ず在つたに相違ない。而してそれは羅馬建國の理想と其實行としての軍國主義であつたと思はれる。熱烈なる愛國心と嚴正なる軍規とが、財力にも科學にも優りて勝利の第一要件であつた當時に在つては、征戰相繼いで殆ど寧日のなかつた羅馬國民が、其必要に順應する所の特種なる國民道德を形成し、更にそれを支持するに適當なる法律を造り上げたことは固より當然であつた。子に對する父の、妻に對する夫の、奴隷に對する主人の絕對無限なる權力は、畢竟戰場に於て養はれたる軍隊道德の反映に外ならない。畢竟愛國と戰勝の名譽とが、あらゆる國民道德の源泉であつた。この時代に於ては、凡そ一藝一能に秀づる者は、必ず政治家や軍人となつて軍國の要務に服すべき義務あるものとせられた。哲學者も詩人も固より其例に洩るゝことを許されなかつた。シセロが「國を愛するは家族を愛するよりも高尙にして且神聖である。國のために死するを躊躇する者は羅馬人でない。」と言ひ、又他のストア學者が「記憶せよ、各人は主の命ずる任務を盡すの本分あるを。その任務の輕重を問ふなかれ。只その名譽を

以て自己の本分を守れ。」と告げたのは、能く當時の思潮を代表するものであつた。

かゝる國民道德を鼓吹するがために、羅馬の政治家的學者がストア學說を高唱するに至つたとは毫も怪むに足らない。何となれば軍國に於ける最高の道德たる名譽と犧牲の觀念を强め、克己節制の德を磨き、熱誠剛毅なる氣象を養ひ、個人の利益も、欲望も棄て、且宗教的な來世の信仰もなくして、ひたすらに義務の一念のみから喜んで死地に突入せしむるためには、ストア學派の教義ほど當時の要求に適合するものはなかつたからである。

言ふまでもなく、かゝる祖國至上主義の下に在りては、世界主義や四海同胞主義は寧ろ禁物であつた。從つて敵に對する憐愍は叛逆であつたのみならず、總て自然の感情は病的精神徵候として貶せられた。蓋し人性に取つて最高のものは理性である。然るに感情に誘はれてなしたる行爲は理性の支配を脫したものであつて、精神上の迷蒙に原因するものである。愛憐とは惱める者を見て畏縮する怯懦なる精神狀態の謂であつて、婦女若しくは病者の感情である。凡そ他人の眼に浮ぶ涙を見て共に泣くは、他人の笑ふ時に笑ひ、他人の欠伸する時に欠伸すると同じく、眞の同情同感ではなくして、實は精神の萎縮したるためであるとはストア學徒の力說したる所であつた。從つて彼等は事實に於て殘忍冷酷を奬勵し、高慢自恃を推稱するの結果に陷つた。幸にして羅馬建國の諸英雄は必ずしもストア學說の忠實なる實行者ではなかつたけれども、併しシエクスピヤが『シーザー』の中に描いたカシアス型の人物は決して少くなかつたと想像される。

之を要するに共和時代の羅馬に移し植ゑられたストア學說は、克己制慾によつて心身を鍛錬することと、優美なる情緒や慈愛の感情を抑壓することによつて義務の履行を强要する方法論的方面のみが殊更に高張せられ、其學說に固有なる世界主義は國家主義に、四海同胞主義は羅馬人至上主義に換骨脫胎せられて、學問を經世の一具としてのみ取扱はうとする羅馬人の要求を滿したのであつた。

六

由來羅馬人は希臘人と異り、現世を超越したる哲學的思辯に興味を持たず、又詩人的情緒にも缺けてゐたがゆゑに、何物をも利用厚生の實際政策としてのみ考究しやうとする特質を有つてゐた。從つて彼等が征服時代から統一時代に入るに及んで、過去の國民道德の基本として提唱し來つたストイック倫理學說に對し、新時代の要求に應ずべき改訂を施したことは寧ろ當然

と言はなければならない。

世界的帝國の首都となりたる羅馬は、あらゆる信仰、智識、藝術、風習の競會場となつた。一切の善きもの、悪きもの、美なるもの、醜なるものが混然、雜然、紛然として其處に渦巻いて、さながら世界の模型たる觀を呈した。此首都に在つて、いかにせば人種、言語、習慣を異にする大版圖の諸民族を統治すべきかは、羅馬爲政家の最大問題であつたに相違ない。

元來愛國を以て最高の道德とし、異民族征服の欲望に燃えつゝあつた舊時代の倫理觀が、諸民族の統一同化を以て最要の國務とする新時代に於て、其儘維持されることの不可能なるはいふまでもなかつた。舊時代に尊まれたのは進取敢爲の氣象であり、新時代に重ぜられたのは守成融和の精神であつた。然るに舊時代の必要を充すがために重寶であつたストア學説は、新時代の必要に應ずるがためにも亦重寶であつた。何となれば曩に國家主義に換骨された世界主義を復活し、羅馬人至上主義に脱胎された四海同胞主義を再生せしむることによつて、直に新たなる形勢に順應することができたからであつた。由來ストイツク倫理は博愛同情の觀念と毫も相扞格するものではなかつた。その主張からすれば、人間に尊むべきは理性によつて指導せられる德のみである。而して人種、國籍、身分、職業の如きは人生に偶然の屬性で、人間の優劣には何等の關係もないものである。人間の價値は只其者の有する德の大小のみによつて定められる。此故に善人は全世界の善人と相伍して、互に友愛親誼を厚くすべきものである。かくの如き希臘のストア學派に固有の同胞主義は、羅馬の共和時代には故意に默過されたけれども、帝政時代に入るに及んで間もなく高唱されるやうになつた。過渡期を代表するセネカはかう言つた。一切の事物を包容する全宇宙は一つである。吾等は一大團體の一員である。自然は同一の元素から吾等を造り、同一の運命を吾等に與へて、吾等を同胞たらしめ、相互の友愛を吾等に賦與して、社會的生活を營むに適せしめると。

惟ふにケトー及シセロの時代に於ては、假令彼等の理論は希臘のストア哲學を祖述したにもせよ、その理想は全然羅馬的であつた。然るに羅馬が其國民的理想を達成したる以後に於ける政治上の變化と智識の向上とは、彼等の後繼者の頭腦を羅馬から解放して世界に向はしめたのであつた。人間味の豐かなる希臘情調の美は、次第に粗野なる羅馬人を感化した。希臘文化の勢力は漸々羅馬の智識階級に浸潤して、學者の著述は希臘語を以てせざれば其權威を認められない程になつた。かゝる事情もストア學説の發展に少からぬ影響を與へたに違ひない。かくて

帝政時代の倫理觀は次第に共和時代の嚴厲なる非人情的教義から遠ざかつて、自然の感情美と調和するやうになり、剛健よりも溫和、敵愾よりも同情、嚴格よりも仁慈が尊重されるやうになつた。

後期のストア學者の典型は皇帝マーカス・アウレリアスであつた。彼は羅馬帝國に君臨すること十有九年、其半は邊域の征戰に費されたにも拘らず、其性向は活動的な公生活よりも、瞑想獨善の私生活を愛し、深くストア哲學に傾倒し且其倫理を實踐躬行して、殆ど完全なる道德的人格を體現するに至つた。その著す所の『瞑想錄』は古今の思想文學中に最も優れたるものゝ一つとせられる。

特に吾等のマーカス・アウレリアスに就て注意すべきは、彼の倫理觀が過去のストア學說中最も基督教の人類愛思想に近接したことであつた。勿論彼が基督教文學に就て全く盲目であり、又基督教徒に對して何等の同情をも有たなかつたことは明かな事實である。否寧ろ彼が基督教徒の迫害者であつたことは、彼の治世中の最大の汚點であつた。併しながらそれは彼が基督教なるものが眞に何を意味するかを知るべき機會なくして一生を終つた不幸なる境遇の罪であつた。若し假に彼が基督教の眞諦に觸れる機會を有つてゐたとするならば、彼が學者特有の偏見に累せられざる限り、恐らく基督教に傾倒したか、少くも其同情者であつたに相違ないとさへ想像せられるのである。何となれば彼の思想は既に同胞に對する愛より敵に對する愛にまで及んで、基督教の人類愛の思想と殆ど其歸趨を一つにする所にまで進んでゐたからである。彼は曰く「他人に惡事あるも之を宥せ。彼之をなすにあらずして、無識之をなさしむるものなればなり。」又曰く「能ふべくんば正しからざる者を矯正せよ。然らざれば彼等のために耐え忍ぶべきなり。」更に又曰く「己れに害を加へたる者を愛するは正しきことなり。萬人は總て同胞にして罪惡は只無識より生ずる偶然の事に過ぎざるを念はゞ、皆わが敵をも愛すべきなり」と。言ふまでもなく彼がかくの如き人類愛の思想に到達した思辯上の徑路は全く耶蘇の教訓と異ることは疑ひないけれども、ともかくストイック學說が此點まで進展して來たことに就ては、それがやがて基督教に道を拓く準備であつたと認みて然るべきであらうと私は思ふ。

七

表面の史實としては、ストア學者が基督教の羅馬帝國征服の先驅であつたと認めることはできない。何となれば基督教の信仰に先づ下層階級の間に傳播して、拔くべからざる勢力を造つ

た後に、突如上層階級——即ち當時に於ける智識階級——を飛越えて、直にコンスタンチン帝の身邊に迫り、寧ろ奇蹟的ともいふべき迅速を以て帝國を改宗せしめたからである。

しかも當時のストア學者は悉く上層階級の出身で、最初から下層階級とは沒交渉でもあり、且基督教とは全く隔離されてゐたからである。しかのみならず基督教の羅馬帝國征服といふ文化史上の一大事實が表面に具體化されるまで、ストア學者にして此新宗教に對して格段の注意を拂つたと思はれる文献が絶無であることゝ、マーカス・アウレリアスの如き仁徳双びなきストア學者が基督教徒の熱心な迫害者であつたといふ事實が亦ストア學說の變遷が羅馬帝國改宗の直接動因と認められないことを裏書するものである。

それにも拘らず帝政時代のストア學說が、時を經るに從うてます〱基督教思想に接近して行つたことは寧ろ不思議な現象と言はなければならない。而して此接近は一言にして盡せばストア學說が漸次宗教的に傾いて來たことを意味する。言ひかへれば、神の存在に對する意識が次第に明白にされたことであつた。元來ストア學說は宇宙を貫通する理法の存在を其倫理觀の根源とした點に於て、一種の萬有神教的思想を懐いてゐたとは認められるけれども、その信念は宗教的であるよりも寧ろ哲學的であつた。然るに後期のストア學者の思想は次第に宗教的に傾いて、禮讃すべき人格的の神を認識するやうになつた。エピクテータスは曰く「人の第一に知るべきことは神の存在である。神の知覺は萬有に遍く、人間の行動のみならず思想感情にまで及ぶものである。神に喜ばれんと欲する者は神に似ることに努力しなければならない。即ち忠實、慈悲、寛大皆神の如くならなければならない。」若し此句が基督教神學書の中に見出されても、誰も之を怪まぬであらう。彼又曰く「汝等戸を閉ぢて其室が暗くなつた時、汝等のみ其處に在ると思つてはならない。神も亦常に其室の中におわす。神は汝等の行ひを見るに燭を必要とはしない。」吾等は容易に類似の句を聖書の中に發見することができる。彼更に又曰く「われは神を讃美する外に何をかなし得やうぞ。われ若し杜鵑ならば杜鵑の本分を盡すであらう。われ若し白鳥ならば白鳥のの天職を守るであらう。されどわれは人である。われの使命は神を讃美することに在る。希くは汝等も亦われと共に讃美の曲を奏でよ」と。何ぞ宗教的熱情のさかんなる。ダビデの詩篇も多く此上には出ないであらう。

恐らくマーカス・アウレリアスの如きも彼が自覺したであらうよりも一層宗教的人格であつたに相違ない。何となれば彼の著述は冷靜なる哲學的思索の産物としては、餘りに敬虔なる禮

讃の氣分に充ち滿ちてゐるからである。

八

之を要するに人類愛の思想に目ざめたるストア學者が宗教的氣分を體驗するに至れば、それは畢竟基督教に道を讓るべく運命づけられた時期に到達したものと言へるのである。たとへ彼等が基督教から直接何等の感化をも受けなかつたにせよ、宗教的思想としてはストア學說よりも一層徹底的であり、普遍的である所の耶蘇の教訓に屈服すべきは自然の勢であつた。而して又世界的帝國建設時代のストア學者が國民愛と現世道德の鼓吹に局限されてゐたに拘らず、世界統一後のストア學者が人類愛と宗教的禮讃の感情を喚起されるに至つたことも亦自然の推移であつた。何となれば人の慾望は常に必ず小なるものより大なものへ、有形なるものより無形なるものに進むに相違ないからである。

かくの如くにして人類愛思想としてのストイック倫理觀は、同じく人類愛思想としての基督教の前に、太陽の前の月の如くに光を失つた。そして基督教は約二千年間世界　類中最も優秀なる諸民族の間に信奉されて今日に及んだ。併しながらそれは唯思想としてゞあつて、行爲としてゞはなかつた。國家至上主義を標榜したる羅馬共和時代のストア學說が、國民の行爲の上に與へた實際上の感化力は確に之を認識することができる。けれども四海同胞主義に推移したる羅馬帝政時代のストア學說が、世界的帝國統治の上に果して幾何の實效を齎し得たか。而して又人類愛の教義を唱へたる過去十數世紀間の基督教が、果して世界平和の上に幾何の貢獻をなし得たかを回顧する時に、吾等は人類の過去の一切の歷史が將來に待望さるべき世界平和と人類愛の生活の、僅に前史に止まらんことを祈らざるを得ないのである。

生きんがための戰爭より生きんがための平和へ

永井柳太郎

(一)

今日の生活に於てはあらねばならぬ事、即ち(What ought to be)と、現在ある事、即ち(What is)とが餘りに隔絕して居る。凡そ人間として、多少の程度の差こそあれ、人道的觀念を持たぬ者はない。進步したる民族に至つては、何れも人類は同胞として親愛すべき者なる事を信じて居る。宗教がそれを敎へ、哲學もそれを說き、歌人もそれを歌ひ、政治家も亦それを理想とする。然るに現實の生活を顧れば國内的にも、國際的にも、それと正反對の事實が到る所に行はれて居る。其あらねばならぬ事と、現在ある事との相異が餘りに甚しき事が人類の深刻なる懊惱の原因である。

國内に於ては貴族對平民の軋轢が絕えない。資本家對勞働者の鬪爭が日々に激烈となりつゝある。國際間に於ても亦民族對民族、人種對人種の生存競爭が屢々砲火の間に行はれる。人類は昔も今も依然として戰ひつゝある。トルストイは斯くの如き人類の悲劇は二の原因に基くと考へた。第一は暴力の行使である。政治界に於ても、產業界に於ても、其他の諸方面に於ても最も强き支配力は暴力である。甲の國と乙の國との關係も亦暴力に依つて決せらる。然るに人類は尙未だ暴力を以て人間の生活を支配する事が良心の自由と矛盾する大罪惡である事に就いて深刻なる自覺を持たぬ。第二は他よりも卓越し自己の意思に他を服從せしめんとする欲求である。人類は個人的には他人を支配し、團體的には他團體を左右せんとする强き慾望があつて、或は富に依り、或は兵力に依り、或は權勢に依つて其慾望を遂げんとして、競爭する。之れが暴力の行使よりは更に根本

的なる罪惡であつて、此二大罪惡の結合は必ず人類の墮落となり、又自殺となる。故に人類は此二大罪惡から脫出し、無我愛の心境に向上するに非ればば國內的にも、國際的にも到底眞の生命に充實したる社會を建設する事は出來ぬと云ふて居る。併しトルストイの所謂無我愛が徹底し、人類が自己に對する愛を以て隣人を愛するに至るは何時の事であらうか。

（二）

千八百八十年モルトケ將軍は當時のハイデルベルヒ大學の國際法教授たりしブルンチュリーが戰爭を非難したるに對し、同教授に與へたる書中に於て「永遠の平和は夢なり、而も惡夢なり、戰爭は宇宙間に於ける萬物を支配する法則より出る所にして神の攝理なり、人間の最高の德性、即ち勇敢、忍耐、忠誠、犧牲等の發達は總て戰爭の賜物にして、戰爭なかりせば全世界は唯物主義の泥中に惑溺するを免れざりしらん」と云ふて居る。フオン・デン・ゴルツ將軍も亦其名著「武裝の國民に」（ダス・フォルク・イン・ワッフェン）に於て、モルトケ將軍と同じ思想より、戰爭は如何なる時代にも斷絕せざる事を論じ、「世界の各國民が各々其祖先より繼承せる政治的及び社會的理想を實現せんとし、又其子孫の爲めに自由且つ十分なる發展の餘地を確保し置かんと欲する限り、其間に衝突の起るは必然にして其結果戰爭は止むを得ざるなり、苟も人間の存する所必ず生存競爭のある所必ずや戰爭あらん。恒久的平和と云ふが如きは未來は知らず現世に於ては不可能の事なり。」と云ふた。此思想は啻に獨逸の軍人のみならず他國にも其共鳴者を有するのであるが、私は之等の人々に共鳴する程人類の道德及び能力に就いて悲觀的でない。

人類の生存する所に常に生存競爭あるは事實である。此事實を否認する事は出來ぬが、併し生存競爭の手段其物は文化の發達と共に次第に進化する事を忘れてはならない。譬へば奴隸賣買の如き十九世紀の中葉に至るまでは正當なる貿易として基督教國民の間にも之れを公認した。然るに文化の發達と共に、貿易の意義も亦變遷し、今や奴隸賣買は犯罪を以て目せらるゝに至つた。戰爭も亦之れと同じである。今日は國際間の利害及び感情の衝突を決する最後の手段として戰爭は已むを得ぬとせられて居るけれども、人類の德性及び智識の進步と共に戰爭以外の手段に依つて其衝突を解決するに至るは必然の順序であつて、戰爭を以て總ての時代と總ての人類に共通する生存競爭の唯一の手段なりと信ずるは、生存競爭あるを知つて進化あるを忘れたる者である。國際法學者にして又外交家なるデビッド・ジエーン・ヒルが其著「近代國家を基礎とする世界組織」（ウォルド・オルガニゼーション・エンド・エ・セーダン・ステート）

に於て「人間ともすれば平和の理想を一の空想に過ぎずと云ふ。然れども戦争のみ現實にして平和は空想なるや。歴史は過去に於ける戦争の時期は平和の時期に比して遙かに短かりし事を實證するに非ずや。然らば戦争と平和と孰れがより多く現實なる。今や全人類は戦争に依る事なく法律の觀念に基きて總ての國際爭議を解決せん事を希望し、其方法を案出するに苦心しつゝあり。何人か平和は絶望なりと豫言し得る者ぞ」と云ふたのは大に味ふべきである。

併し之れと同時に私は戦争が常に罪惡で、平和が如何なる場合にも尊重すべきであると信ぜぬ。近來平和論者の云ふ所を聞くに、平和を人生の最高目的なるかの如くに考へ、平和のためには何者をも犠牲とすべきやうに云ふ。併し平和は手段であつて、決して目的でない。平和と云ふ事は畢竟するに物の靜止の狀態を意味するのであるが、人生の最高目的は與へられたる生命の完成であつて、平和は其完成に必要なる環境の一種に過ぎない。凡そ人間の生命なるものは孤立したる存在ではない。宇宙の大生命と有機的に連絡したる實在であつて、其本源的生命を自覺する事が卽ち眞實なる自我の發見である。而て其眞實なる自我の自由にして且つ充實したる發展が、總て生命の完成となる。人類の生活に於ける幾多の問題も、結局は生命の完成に對する努力に歸するのであつて、哲學的に云へば「生命慾の満足」、宗教的に云へば「永遠の生命」が實に人生の總ゆる目的中の最高目的である。我々が平和を要求するのは平和其事が人生の最高目的であるからではない。平和が人間の生活の最高目的たる生命の完成に必要なる場合に於てのみ必要なのである。故に平和の必要、並びに其價値は、相對的であつて絶對的ではない。生命の保存と其自由なる發展のために平和が必要であると共に又戦争が必要の事もある。卽ち或國民又は或民族が人類生命の保存及び完成に必要なる道義を無視し、人類文明の大本を蹂躙するに於ては、之れと戦ふて其方法を防止する事が卽ち人生の最高目的に一致するのである。ワシントンの獨立戦爭、リンコルンの奴隷解放戦爭は此意味に於て孰れも人類生活の最高目的に一致したるものであつて、其道德的價値は平和のそれに何等讓る所がない。故に私共の要求する平和は常に國際正義の上に立脚したる平和でなくてはならぬ。國際的正義を基礎とせざる平和は假令それが實現するとしても弱國が強國のために壓伏せられたる場合の產物に過ぎぬのであるから、相互に對等の人格を認めたる國家間の平和と同一に論ずる事は出來ぬ。それは奴隷の主人に對する沈默と同一であつて斯くの如き平和の存在は人類の進歩に非ずして反つて墮落である。

(三)

ノルマン・エンゼルは千九百十年名著「大幻影(グレート・イリュージョン)」を公にした。彼は此書に於て侵略政策の反つて侵略國に有害なる事を論じ、次の四箇條を立證せんとした。第一は强國必しも一等國に非ずと云ふ事である。白耳義や和蘭や諾威は其海陸軍の强大なる事に於て到底獨逸や墺匈國や露國の敵でない。けれども其國内に於ける産業の發達せるため世界の經濟界に於ける信用は遙かに之等の諸强國を凌駕し、公債を募集するにしても其利廻りは常に低廉である。「ロンドンの市場に於て獨逸の三步利付公債が八十二磅なるに拘はらず、白耳義の三步利付公債は九十六磅を上下し、露國の三步半利付公債が八十一磅なるに反して諾威の三步半利付公債百二磅を越え、有名なる英國コンソル公債の如きも英國が南阿佛利加を征服し、世界に有數なる大金鑛を獲得したる時代より次第に下落し始め、英國戰鬪艦が未曾有の大多數に對したる今日に於て最も甚しく、遂に七十七八磅代となつた」と云ふて居る。第二に如何に莫大なる賠償金を取つてもそれは決して取つた國の利益にならぬと云ふ事である。「莫大な償金を取れば勢ひ取つた國の物價が暴騰する。物價が暴騰すれば貿易は逆調となり、其結果反つて産業界に動搖を惹起する。加ふるに敗戰國は一時に莫大なる償金を支拂ふ事に依りて自ら購買力は激減せざるを得ない。隣國の購買力が激減すればそれ丈けその國に對する輸出も亦激減するではないか」と云ふのである。第三は領土の獲得も亦之を獲得した國に何等の利益をも與へずと云ふ事である。「英國の殖民地の大部分は事實に於て英國と同盟を組織する獨立國に異らぬ。外國が通商上に於て英國を利益すると同一の意味に於て英國を利益するのみで、其他に何等の特別なる經濟的利益を與へない。故に經濟的に論ずれば英國は正式に殖民地との關係を絕つ事に依り國防費を減ずる丈けそれ丈け利益を受けるのである」と云ふて居る。第四に戰爭は富の破壞であるから勝敗孰れの場合にも常に損失を意味すると云ふである。「近代國家は相互に經濟關係が密接且つ複雜である。故に敵國の産業を破壞すれば自國の商人は結局貧民を相手に商賣をすることゝなるから自國の産業も亦直接及び間接に打擊を受けざるを得ぬ」と斯樣に云ふのである。

エンゼルの議論中には首肯する事能はざる點がないではない。(拙著「社會問題と殖民問題」二五五――二七一頁參照)けれども侵略が經濟上より見て到底收支償はぬ事業である事は、何人も之を承認せざるを得ぬ。殊に現代の戰爭が勝者及び敗者の双方にとつて富の大破壞を意味し、双方の國民生活に殆んど世

え難き苦痛を與ふる事は今度の世界戰爭がエンゼルの議論以上に明白に之れを立證した。だから國民自身が外交關係を支配し得る程度に民衆政治の發達したる國々にあつては今後侵略のため猥りに干戈を動かす事はあるまいけれど、併しそれのみで直ちに平和の時代が來ると早斷する事は出來ない、侵略の有害無益なる事が立證せられ、戰爭の慘害に對する自覺が發達しても、國際間に尙未だ利害及び感情の衝突が實在し、而かも其利害及び感情の衝突を解決すべき平和的手段が發見されない限り、戰爭の危險も亦實在する。

（四）

今日の日本には華府會議に於て軍備制限の行はれた事が世界平和に對する確實なる保障であるかの如く解して居る人が多い。軍備制限は各國民の負担を輕減する上に於て多少の貢獻はあつたに相違ないが、軍備を必要ならしむる原因其物を除去したのではない。軍備の存在は必しも戰爭の原因ではない。同樣に軍備の縮少は必しも永遠に亘る世界平和の保證とはならぬ。何となれば戰爭の主要なる原因は常に國際間に於ける經濟的衝突であつて、軍備も亦專ら之がために必要とせらるゝからである。今日までの實例に就いて見るも戰爭勃發の直接原因は多く經濟問題の國際爭議で其端を發して居る。フランク・サイモンド氏が最近の「レビュー・オブ・レビュース」紙上に於て「世界的に軍備の制限を協定すると云ふ事は決して惡い事でない。併しそれは世界平和と云ふ大なる理想より見れば枝葉の問題である。同時に太平洋上に於ける海軍力の制限も亦些末の問題である。眞の世界的の平和は之れらの軍備問題の背後に横つて居る經濟問題に係つて居る。即ち經濟問題が本質的な問題で、軍備問題は第二次的の意味を有するものである。」と云ふたのは確に卓見である。

世界戰爭後の國際的經濟競爭は世界戰爭前のそれに比して其激烈なる事に於て毫も異つては居らぬ。寧ろ各交戰國が戰爭のために受けたる疲弊から一日も早く恢復せんと焦つて居る丈けそれ丈け其競爭は激烈である。今回の華府會議にしても其使命は專ら世界各國の軍備制限に存するものとされて居るのであるが、之れは皮相の觀察であつて少しく其裏面に立入つて詮索するならば我々は其背景に極東、殊に支那に於ける各關係列強の富源開發及び販路擴張に對する大暗鬪の事實を認めざるを得ない。露國の一共產黨員が倫敦の「デーリー・ヘラルド」紙に寄書して華府會議の眞相を論評し「米國が米國のために選んだ二大市場は、支那と露西亞とである。米國は既に其敵手たる英國

及び佛蘭西を支那に於ける第二流の勢力に追ひ落す事に成功した。今や機會均等を高唱する事に依て日本をも同様の地位に陥れるやうとかゝつてゐる。日本は戰利品として支那の最も價値ある部分を贏ち得たが、此戰利品を米國の剝奪より防ぐためには英國の援助が唯一の賴みである。然し英國は實は其希望の焦點として一大アングロ・サクソン組合を作るべく華士頓に出掛けて行つたのである。」と云ふたのは此間の消息を描き得て妙である。

世界戰爭後の世界に於ける最强國たる米國が、今尙經濟的帝國主義の舊思想より脱し得ない事は、世界の一大不安である。武力的帝國主義は其本家たる帝政獨逸の滅亡と共に滅亡したとしても、經濟的帝國主義は屢々戰爭を排發する危險性を有する事に於て、多く武力的帝國主義に異なつて居ない。米國が最近ハイチ、サント・ドミンゴの兩共和國を占領した事は何を意味するであらうか。ウイルソン大統領が講和會議に臨みて民族自決主義を提唱しつゝありし間に、米國海軍はハイチ及びサント・ドミンゴ兩共和國を占領し、今日と雖も猶その軍隊を撤退しない。更に昨年十月十八日には阿弗利加のライベリア共和國に對しても亦五百萬弗を貸し付けたのであるが、之れは雜誌「ネーション」が本年五月三十日號に於て論評した通り、實はライベリア共和國の主權買收費である。此借款の結果ライベリアの支配權は事實に於て米國の大統領の指名したる財務委員の手に歸し、米國は啻にライベリアの豫算を左右し得るのみならず、又軍隊及び警察隊の編成を決定するの權を掌握したのである。米國は嘗てキューバやポルトリコを半屬國となし、メキシコ及びニカラガに於ける反米政府を顚覆し、今又之等の國々を占領するのは其背後に帝國主義の思想が實在する證據であつて、ハーデンク大統領が所謂「米國第一（アメリカ・フォルスト）」なる言葉は、其實質に於て、ウイルヘルム二世の所謂「獨逸最上（ドイツチランド・ユーバー・アルレス）」と同一意義である。

佛國首相ブリアンは華府會議に於て米國々務卿ヒユースの提出したる陸軍々備縮少の議に忍從する能はずとして、遂に脱退を言明したのであるが、彼は其言明中恆久平和の要諦は、軍備制限よりも世界に於ける不安の諸要素を除去するに在る事を痛論し「軍備制限と云ふ事は其本質に於て物質的であると同時に道德的であらねばならぬ。表面上相互に講和會議の條約を尊守して居るやうでも事實上復讐、憎惡、攻擊の精神に炎えて居ては軍備制限は無意義である。」と云ふたのは、流石に慧眼と云ふべく、眞に平和を愛する者の事業は、第一に戰爭の原因となるべき各種の國際的衝突を如何にして除去すべきや、第二に國際

的衝突の起れる場合、如何にして之を戦争に依らずして解決すべきやと云ふ事の研究であらねばならぬ。

(五)

嘗て歐洲人が世界統一を夢見た時代があつた。アレキサンダーは武力に依り、羅馬は基督教會の力に依り、各々其夢想を遂げんとした。アレキサンダーの夢想は彼自身の死に依つて消滅し、羅馬人の基督教帝國に對する憧憬は宗教改革に基く法王の權力の失墜と、封建制度の破壊に伴ふ國民的感情の勃興と、マキアベリズムの政治思想の普及との爲めに雲散霧消し、ヨーロツパは再び大小幾多の國家に分裂して十五世紀の末葉より約三世紀間に亙り慘憺たる戦亂の巷と化した。玆に於て宗教家や、思想家や、詩人の間には再び恒久平和の基礎を確立せんとする思想を生じ、大小幾多の國家の對立を認むると同時に、之れを連合して平和同盟を組織せしめん事を考ふるに至つた。之れが近世の所謂國際主義の運動となつたのであるが、此國際主義に立脚する平和思想は大體に於て次の三種の形式をとつて現れた。

第一は全ヨーロツパの中央に各國家の外交關係を管理すべき權能を有する機關を設け各國家をして其外交問題の解決に關しては其命令に服従せしむべしとする思想である。斯くの如き思想の代表者として最も顯著なるは、佛蘭西王アンリー四世の重臣スリー公であつた。彼はヨーロツパが一世紀以上殆ど継續的に中古時代に於て見るべからざる程大規模の戦爭に禍ひせられたるを悲み、再び其災害を繰り返す事なきやう新ヨーロツパの建設を計畫したのである。彼は一人の主權者が恣まゝに其意志に随つてヨーロツパを左右する事を危険なりとし、羅馬時代の世界帝國の思想に反對した。而て内政に關しては完全なる自治權を有する多數の獨立國家の自發的協同に依つて保障する平和に非れば眞の平和に非る事を信じた。彼は此信念に基きて露西亞及び土耳古の兩帝國を除外したる殘りのヨーロツパを六の國際團體に分ち、各團體に其所屬國家間の外交關係を統整すべき代表委員會を設置すると同時に、又毎年順次に各團體の首府に於て全ヨーロツパの代表委員總會を開き、専ら全ヨーロツパの平和及び進歩に必要なる各種の提案を審議する事とした。之れ一方に於て文明國家間の平和的協同を促進すると同時に他方に於て國民生活の獨特なる要求に適應せんとしたもので、當時主張せられた此種の計畫中最も進歩したものであつたけれども、不幸にして未だ其實驗の機會を得ずして死んだ。

スリー公の思想よりも更に進歩したものは、同じく佛蘭西の

サン・ピエルの國際聯盟案である。サン・ピエルは宗教家であると同時に千七百十三年のウトレヒト講和會議に際しては、佛國全權委員の随員として參列し、外交家たるの經歷をも兼ね有したのであるが、ウトレヒト會議より歸りて後、直ちに一書を公にして歐洲國際聯盟の必要を論じたのである。彼は歐洲諸國は其道德的基礎に於て全く單一の社會なる事を信じ、其共通せる道德的觀念に基きて制定せられたる法律は以て歐洲諸國の外交關係をも統整するに足ると考へたのであつた。玆に於て彼は歐洲諸國の主權者間に恒久的の平和同盟を締結すると同時に、其各主權者を代表する全權委員に依つて組織せられたる常設列國會議を開催し、其調停及び仲裁に依つて歐洲諸國間に發生する一切の重大なる外交問題を解決すべく、若し仲裁に際し其判決に服從する事を肯ぜざる國家ある時は、須く之れを平和同盟より除外し、殘りの諸國は共同して其除外せられたる國を平和の攪亂者として討伐すべしと云ふのである。此國際聯盟に關する意見は當時三十年戰爭、スペイン王位繼承戰爭の後を受けて平和に戀々たりし歐洲人に非常なる感動を與へた。ライプニッツは大に此計畫を賞揚して、歐洲諸國が直ちに其實現に努めん事を勸告し、後年ルッソー及びボルテールも亦之れに讃意を表した。只ルッソーは斯くの如き聯盟を實現して其効果を收むる前に各國は一度革命を經過して其人民の生活狀態を新になし置くの必要ある事を主張したるに於て異つて居るけれども、國際聯盟の思想其者に對しては、全然共鳴したのであつた。斯くの如くにしてサン・ピエルの意見は歐洲の平和運動に重大なる影響を與へたのであつたが、當時の各國政府は此卓越したる思想に對しても何等の注意を拂ふ事なく依然として慘憺たる戰爭を繰り返し、其極人民の生活は荒廢し、其不平不滿は遂に爆發して佛蘭西革命となつたのである。

第二の形式は國際法に依つて國際間の外交關係を整理し、以て戰爭を豫防すべしとの思想である。此思想は國際法學者の元祖として知らるゝユーゴー・グロシユースに初まる。彼は自ら三十年戰爭の慘狀を目擊し、國際間の諸問題を國内に於けると均しく、法理に基きて平和に解決するの必要を痛感し、千六百二十五年其名著「和戰法規（デ・ユーレ・ベリ・エト・パシス）」を公にして其國際法に關する思想を發表した。彼は曰く「今や基督教國を通じて野蠻人すら恥辱とする程慘忍なる戰爭を猥りに行ふて怪まず、凡そ人の生命及び自由を武器に依つて保持せんとするは大なる盾矛にして、人は武器をとつて立つや反つて生命及び自由を蹂躙する戰慄すべき傾向を有す」と。彼は人類を支配する一切の法律及び習慣を其國民に特有なる社會の必要に應じて發生したるもの

と、萬人の認容する共通なる道理の命令に基きて規定したるものとの二種に大別し、後者の前には各國は平等である事を信じた。而して此一般に認容せられたる道理の法則に依つて各國の外交關係を律する事が其理想であつた。此思想は當時の學者及び思想家の間に多大の共鳴者を生じ、獨逸に於てはハイデルベルヒ大學の國際法教授として又「自然法及び國際法」の著者として有名なるプーフエンドルフや、瑞西に於ては「人民法」の著者として有名なるヴアツテルの如きを初めとして多數の人々が其宣傳に努めたのであつた。

第三の形式は必要に應じて歐洲諸國の間に列國會議を開催し、隨時に起り來る外交問題を隨時に解決する事に依つて、歐洲の統一と其平和とを促進せんとする思想である。例へば千六百四十八年のウエストフアリア講和會議の如きは其思想の最も顯著なる發現である。ウエストフアリア條約に依り三十年戰爭の原因たりし歐洲の新教國の宗教的獨立は確認せられたのであるが、それと同時に羅馬帝國の皇帝と其諸侯と佛蘭西王との間に恒久平和の維持に關する條約が締結せられ、初めて獨立の主權者が互に平和のために共通の規約を遵守する事となつたのである。此種の列國會議は近代文明の特産物であつて、中世時代に於ては見る事を得なかつたのである。

斯くの如く十七、十八兩世紀には國際平和に對する熱望が種々なる形式に於て國際主義の思想となつて現れた。カントの「恒久平和論」を見ても當時第一流の人々が如何に此問題の解決に苦心したるかを推察する事が出來る。ラスカセスはセントヘレナに於けるナポレオンとの會話を公にしたるものゝ中で、ナポレオンも亦歐洲に於ける恒久平和の確立に苦心したる事を述べ「ナポレオン自身の談話に依るも彼の歐洲征服の眞目的は、十七八兩世紀に於ける無法なる戰爭のために崩壞したる歐洲大陸を、新に國民主義の基礎に立つ數箇の新國家に分割し、更に之れ等の新國家をして佛蘭西を中心とする聯邦を組織せしめ、佛蘭西に於て時々聯邦會議を開催し、以て歐洲に於ける恒久平和の基礎たらしめんとするに存したり」と云ふて居る。之れ等の事實に徴しても三十年戰爭、スペイン王位繼承戰爭、七年戰爭、等相次いで流血の慘事を演じた事が如何に歐洲人の平和思想を刺戟したるかを想像し得るのであるが、併し戰爭を豫防する具體的の方法に關する研究に至つては未だ幼稚なる狀態にあつた。

(六)

今日までの經驗では戰爭を豫防する目的を以て設立せられた

る同盟又は聯合にして其目的を達したるものは殆どない。千八百四十六年に羅馬皇帝、其諸侯及び佛蘭西王の間に締結せられたる國際聯盟、千七百十一年に英國と佛蘭西との間に締結したる平和條約、千八百十五年、英國、佛蘭西、普魯西、墺太利及び露西亞の間に構成せられたる國際聯盟、ヘーグに開催せられたる千八百九十九年と千九百七年と前後二回の平和會議、及び世界戰後三十二箇の對獨斷交、交戰國を中心として組織せられたる國際聯盟等が其重要なるものであるが、其內國際聯盟は最後のものを除き、聯盟各國が其運命を國際聯盟の保護に託するの誠意なく、各々絕對自由の主權を主張して止まざりしがために失敗に終つた。

千八百十八年エキス・ラ・シヤペルに於て英・佛・普・墺・露の五箇國間に締結せられたる國際聯盟は頗る重大なる意義を有したものであるが、併し此聯合も前述の各國際聯盟に共通なる原因の外、尙次の如き特殊の原因があつて其健全なる發達を妨げられた。それは第一に此條約が現狀維持に重きを置き過ぎ、當時既に獨逸國內に勃興しつゝありし如き國民主義の運動をまでも抑壓せんとした事である。第二に此種の聯盟は君主の聯合でなく、人民自身の聯合でなければ永久なる繼續を期し難きに拘はらず、此聯盟は君主のみの間に於て、主として君主の利益を擁護する目的を以て締結せられた事である。第三に聯盟に參加したる國々の內部に於て民權自由の運動が勃發した場合に、各聯盟國の君主が其國の內政に迄も干涉して之を鎭壓せんとした事である。

第一回及び第二回の平和會議が國際平和の進步に多大の貢獻ありし事は否認する事が出來ぬ。殊に其貢獻中最も重大なるものは仲裁々判所の設立である。併しヘーグ仲裁裁判所が司る所は、猶未だ條約の解釋上より生ずる權利の爭議を決するに止まり、國際間の利益上に於ける爭議に及ばぬのである。加ふるに其權利の爭議と雖も、之れが仲裁をヘーグ仲裁々判所に求むると否とは總て各國政府の隨意となつて居るから之れがために如何なる程度まで戰爭の危險を豫防し得べきかは疑問である。其後米國政府が英國及び佛蘭西等の政府を誘ふて總括的仲裁條約たるものを締結し小は條約上の爭議より大は國家獨立上の衝突に至るまで苟も外交手段を以て決し能はざるものは總て之れを仲裁々判の判決に待たんとしたのは、從來の仲裁々判に比して確に一步を進めたのもであつたけれども、遺憾ながら此條約は米國上院の批准を得る事が出來なかつたゝめに其効力を生ずるに至らずして消滅した。

最近國際聯盟は國際平和の保障と、國際紛爭との解決に就いて從來の如何なる計畫よりも遙かに進步したものであるに相

違ない。然し之れが如何なる程度まで將來の戰爭を豫防し得べきやは猶ほ試驗時代に屬する。國際聯盟は其目的たる戰爭豫防の手段として、一方に於ては聯盟各國に軍備制限の義務を課すると同時に、他方に於て國際紛爭を解決するため三の機關を設けた。第一は仲裁々判所である。第二は聯盟理事會、及び聯盟總會である。第三は常設國際司法裁判所である。仲裁々判所は一般に條約の解釋、國際法上の問題、國際義務の違反となるべき事實の存否、並びに右違反に對する賠償の範圍及び性質に關する紛爭の如き法律的性質を具備する問題を處理する事が目的である。聯盟理事會及び聯盟總會は聯盟各國間に國交斷絕に至る虞ある紛爭發生し、而も之れを仲裁々判に附し得ざる場合に於て紛爭當事國双方の間に立ちて其和解に努むる。常設國際司法裁判所は國際的性質を有する一切の紛爭にして、其紛爭當事國の附托に係るものゝ裁判をする權能を有すると同時に聯盟理事會又は聯盟總會の諮問する一切の紛爭又は問題に對して意見を提出するものとなつて居る。聯盟國の中で若し其規約に反し、國際紛爭發生の場合之れ等の機關に依りて規定の手續きを經る事なく、猥りに他の聯盟國に對して戰爭を開始するか、又は聯盟理事會若しくは聯盟總會に於ける全會一致の決議に從ふことを承認したる對手の國に對して、戰爭をなす場合は當然他の總ての聯盟國に對して、戰爭の行爲に出でたものと見做され、他の總ての聯合國は之れに對する第一段の制裁として、直ちに其國に對する總ゆる通商上、金融上の關係を斷絕し、又其國民と聯盟國民との一切の交通を禁止すると同時に、聯盟國たると否とを問はず他の總ての國々の國民と、其違約したる國民との間の金融上、通商上、及び個人的の交通をも出來得る限り妨害すべく、それで猶ほ効力なき場合は第二段の制裁として兵力に訴へ違約國を膺懲するのである。

けれども此國際聯盟の規約が如何なる程度迄世界の平和を保障し得べきかは猶大なる疑問である。第一に國際聯盟の發議者たる米國が、其主權を拘束せらるゝが如き義務を負ふを慾せず。既に國際聯盟より脫退した。第二に米國以外にも國際聯盟に加入せざる國家頗る多く、之等の諸國の間に於て又は之れ等の諸國と國際聯盟に屬する國家との間に於て國際的紛爭を生じたる場合に、國際聯盟は之れを解決すべき何等の權能を有しない。第三に國際聯盟が規定したる國際仲裁々判なるものは其實質に於て多く舊來の國際仲裁々判に異る所なく、各國は各々其獨立又は興廢に關すと認むべき重大問題は、譬へ仲裁々判所の判決を仰ぐも之れに服從せざるの自由を保留する事が出來る。第四に聯盟總會は聯盟國全部の代表者を以て組織せられるのである

が、聯盟總會の開催は稀であるに反し、頻繁に開催せられ、事實上國際聯盟の事務たる地位にある聯盟理事會は所謂五大國の代表者と聯盟總會より選出したる四ケ國の代表者とによつて組織せらるゝのであるから、勢ひ國際聯盟の意志は五大國の意志に左右せらるゝ事多く、國際法上多年の習慣たる各國平等の原則に反するので、五大國以外の國々の反感を挑發する危險がある。現にベルトランド・ラッセルの如きも此缺點を指摘して、「今日の如き國際聯盟は某々大軍國が其共同的帝國主義を遂行せんとする一種の機關に過ぎざるのみ」と痛罵して居る。第五に國際聯盟は人民の聯盟であつて其根柢は四民平等の理想に存するに拘はらず、人種差別撤廢案の如きものを否決すると共に、モンロー主義の如きものを認め、聯盟の理想と聯盟の實際との一致せざる事を既に暴露して居る。之れらの事實に依つて見ても國際聯盟は尚未だ試驗時代に屬するものであつて、之れに依つて世界不安の要素は、未だ一掃せられたりと云ふ事が出來ない。

(七)

レオン・ブルジョアは其國際聯盟論に於て「法の外交を以て力の外交に代らしめざるべからず」と論じたが、實に其言の通り世界が法律的に組織せられずんば世界平和は不可能である。世界を法律的に組織するには國際裁判の權威を確立する外はない。而て國際裁判の權威を確立するためには勢ひ各國家の主權を制限せざるを得ぬ。若し各國家が絶對自由の主權を固執し、如何なる場合に於ても其制限を受くる事を肯ぜざるに於ては世界は永久に無政府である。

如何なる國民と雖も今日は單に自國內の生產物のみにて生活する事は出來ない。輸出と同時に又必ず輸入を必要とする。故に經濟生活は其根柢に於て國際的であつて、譬へ外國の製造業なればとて管理の法宜しきを失すれば直ちに其惡影響を受くるのである。斯くの如く今日の國際生活は密接なる物質的連帶關係を有するのであるけれども、然し世界平和の眞の根柢となるべきものは單なる物質的の連帶關係でなく、平等にして自由なる各國民の友愛と協力とを基礎とする道德的結合でなくてはならぬ。國家間の道德的結合が鞏固となり、相互に他の自由を尊重し、其進歩を扶くる事になれば、物質的の連帶關係は愈々密接とならざるを得ない。隣國を自由に且つ十分に發展させればそれは自國にとつても必ず利益となる事は、少しく冷靜に國際生活の實狀を觀察するものゝ直ちに認識する所である。譬へば日本が支那の自由を尊重し、其文化の進歩を扶けた結果、支那が一層富裕に、一層人口が多く、而て生產力の一層盛大なる國

となれば、日本は支那からの輸入に依つても、又支那の市場への輸出によつても從來よりは一層大なる利益を得るに相違ない。殊に支那が啻に其生產業のみならず、其一般の文化に於て自由且つ高尚なる發展を遂ぐるに至れば其恩惠を受くる者は獨り日本に止まらず實に全世界に及ぶ。之れに對し支那の自由が蹂躙され、其文化の進歩が妨害せらるれば、支那人の精神は萎縮し、其生活は貧困となり。又病的となり、其隣邦たる日本は云ふまでもなく、全世界も亦害損を蒙らざるを得ぬ。國家の偉大は個人の場合に於けると同じく、其取り得る物に依らずして、與へ得る物に依つて定まるのである。此「受くる者より與ふる者は幸なり」と云ふ道德的信念が全人類を支配し、各國家が世界平和のために喜んで其絕對自由の主權を「生命の完成」の祭壇に捧ぐるに至るまで、全世界は戰爭の脅威より脱出する事が出來ない。

人生の眞の幸福は何かを諦思せよ

文學博士　三宅雪嶺

口

プラトーンは人間を以て三性質より成るとし、二頭立ての馬車の御者に譬へて云ふ、一頭は善い質であり、他の一頭は惡い質であり、之を御して安全に進むのは容易でない。御者の腕が利いて居れば、惡い方を善い方に化し、目的地に達するを得ると。之は比喩に過ぎず、善惡二元を立てたやうであるが、本來人間のみならず、一切の生物が矛盾を併せて居り、高等に進むに從ひ、矛盾が烈しく、强ひて之を併すに難く、その難いのを爲し遂げる所に、向上の現象を見る。

生物の主なる原素に、炭素及び窒素があり、炭素の堅い事はダイヤモンドを以つて知るに足り、窒素の破壞性を帶びる事はダイナマイトを以つて察するに足り、此の二つを合一するの必要がある。腦髓の發達するに伴ひ、ダイナマイトの更に烈しいものに譬ふべきであり、窒素分多き食料を從へよと云ふの

も、之に基く。

□

矛盾を合せて何を爲すかと云へば、生命ある平和を作り出さうとする。物質上は兎も角、意識上で死後に絶對平和を期すべきであつて、死に就いて何の解釋あるも、兎も角、普通に死ねば喜びも無く、憂も無く、平靜の極に達し、敵も味方も無いとするが、生命あつて活動し、十分に意識を備へつゝ、平和を、求める事が出來ぬか。石の如く動かずに靜かなのがあり、獨樂の如く、頻りに動いて靜かなのがある。獨樂は最も好く動いて居る時が、最も靜かであつて、動いて居るか動いて居らぬか、判らぬ位である。廻轉中の獨樂の靜かさは、唯廻轉に於いて見出す事が出來、同じく靜かでも、石の動かぬのと違ふ。

人間の精神上生前の平和と死後の平和と何の關係あるかは、今日の所、信仰問題に屬する所多く、人々各自の立場に任かせねばならぬ。生前の平和は誰でも望みつゝ、性格及び境遇で望み方が著しく違ふ。普通に考ふるが如き、死後の平和ならば、事が甚だ單純、寧ろ單純を窮めて壯嚴を覺えるが、生前の平和では、絶えず矛盾が爆發して居るとし、之を合はすに骨が折れ十分に之を爲し遂げるのは、唯理想に於いてする。

矛盾の烈しい所からして、人は平和を念とせず、寧ろ鬪爭を事とするのでないかと疑はれる。生存競爭は生物界の事實であつて、之を離れる事が出來ぬとする。實に何の方面にも生存競爭を見、中に頗る猛烈なのがあるが、それで平和を求めぬかと云へば左うでなく、競爭を押詰めて行けば、平和を欲するのである。平和の爲めに競爭し、奮鬪し、死をも厭はぬに至る。植物は無機物を破壞して生存し、動物は有機物を破壞して生存し、肉食動物は弱い動物を破壞して生存し、或るものを破壞せねば自ら生存し得なくなつて居るが、破壞しながら平和を求めるのが生物界で進化の絶頂を形作らうとする人類に於いて、最も著しく見出し得られる。

□

進化の解釋もさまざまながら、分化合化を併せたとするも矛盾の合一、有無轉化から見ても矛盾の合一を期し、其處に生物の存在する所以がある。矛盾無しに靜かなるは死に畢はる。一方で破壞して、他の一方で建設し、破壞しつゝ建設するのは生物の常であり、高等に進む程いよいよ烈しい。自ら生きるが爲め、或るものを殺さねばならず、動物を殺さなくても植物を殺さねばならず、人類は肉菜混食であり、或る動植物を殺さねば生存する事が出來ぬ。動植物を食ふが爲めに多少の力を費すを要し、食物に不自由せぬとは、何時でも食用動植物を殺し得

るを意味する。好い食物に或る種類の肉と云ふ事になり、力あれば人肉を食ひ得るでないかと想像する。實に時代によつて人肉を食つたのがある。自ら生存するが爲めに他を食はねばならぬとなつては、人々互に殺して食ひ合ふべきであり、其の事實もあるとし、啻に人類が減ぜざるのみならず、次第に増加し、現に十七億を數へ、尙ほいよいよ增加しようとするは何であるか。力が優れば弱いものを食ひ得れど、如何なる動物でも、同族互に相食む事極めて少く、今日生存するのは、互に相食まず、食めば例外に屬するによる。獅子や虎や、他の動物を食ふに止まる。彼等は特別に倫理觀念無くて、同族を殺さうとせぬ。食物たるべき動物を殺すの必要あるけれど、同族を殺して食はうとするに至らぬ。人類は機械の工風に長じ、食物たるべき動植物を獲るに最も長じて居るだけ、自ら同族を殺すの必要無きは勿論、之を食物とするを避け、偶之を食ふは、特殊の嗜好よりする。若し同族を殺して食ふの慣あれば、其種族は繁殖せず、絶滅せねば他の強い種族に支配せらる。

□

殺して食ふとか、食はぬとか云ふのは、力に強弱あるに起る。力が強ければ何事をも爲し得ると認め、殺して食はなくても、之を奴隷として使役し、自ら思ふ存分に愉快を盡くさうとするに傾き、昔から帝王の名ある者は、之を敢てするのであるが、いよいよ愉快を盡さうとし、何程の事を爲し得るかとなつて、聊か惑はずに居れぬ。一人天下で誰れも彼も叱り飛ばし、自分の欲しいものは何でも前に連なるのが、愉快かと云ふに、さうでなく、幾年かかゝる事に馴れては、何の愉快を感じなくなる。血氣盛りの頃或は人を押へ付けるのが愉快であつても、漸く年齢の長ずると共に、之を愉快と感ぜぬやうになる。加ふるに勝手な働きするものは、力衰へて復讐せられる例があり、力強くて勝てる事が出來ても、之を差控へるやうになる。

□

併し性格及び境遇で事が一定せず、力任かせに愉快を求めても、其れ程愉快でなく、殘忍の所爲を不愉快に感ずるにせよ、早く之を悟るのがあり、又容易に之を悟らぬのがある。力任かせに何でも出來るとあつては、既に經驗した者こそ、出來るだけの事をしても割合に愉快でなく却つて不愉快とすれ、經驗した事無い者は、力に任かせて出來るだけの事を爲さずに居れぬ。力に強弱なく、力任かせに勝手な事が出來ぬとすれば、その儘になるべき所、何でも出來ると心得ては、已れの欲する所を妨げる者を打ち滅さずに居れなくなる。幾多事變の起り、如何なる事が如何に終るべきかを知つて、濫りに我儘勝手をするを憚

り、勝手な事をしても、何の面白い事無いとするが、左もない間、何がな愉快な事をと求め、暴王の傳說の如き事を敢てする。

傳說は史實として頗る疑はしいけれど、傳說の如き事の可能性を認めて置いて宜く、桀紂とかネロとか、人を人と思はぬ振舞ひであつたと傳へられる。後に傳說程の事無くても、之に似た事は珍しくなく、多少力を得る所に、暴王の性分を現はさうとするの嫌ひがある。暴王とは自らに具はる力を濫用するの甚だしきを意味する。君主の力は社會の秩序を維持するに必要であり、その必要の爲めに君主と云ふ特別の位置の出來上つたが、其位置に居るものは、未だ人生の苦樂を經驗せず、力の强きに任かせ、思ふが儘に爲して見ようとする所がある。後に後悔するか、反抗に苦しめられるか、先きが判つて居つても、彼自ら判らず、出來るだけの事をせねば承知せぬ事になる。桀紂やネロや、結構な身分と云ふよりも、要らざる事を爲る愚物とも見べきであるが、當人は爲るだけの事を爲ずに居れぬ。ルイ十四世十五世の如き、矢張力のあるだけを振はずに居れぬ方であつて、振つた揚句、餘り面白くもなく、朕の後は洪水と嘆息し、子孫をしてブルボン朝滅亡の悲劇を見せしむるに終つた。今少しく勢が判りさうなものと云ふが、さう云ひながら、自ら似た事をするのがある。露國ロマノフ家の滅亡もさうである。あゝなつては仕樣が無いと云ふ者が、自らが類似の事を行ふに至つて、情ない次第とせねばならぬ。

□

當人は特別に惡い了簡なく、會つて見れば普通の人であつて、時に亂暴な事を敢てするのは、與へられた力で何事かを爲ずに居れなくなるのである。第一松方內閣で、首相も品川內相も溫厚な人、寧ろ好々爺であり、それで極力選擧干涉を敢てし、人斬り巡査を出したのは、干涉する力あつて、干涉せずに居れなんだのである。今少しく目が利いて居れば、力あつても差控へるのであるが、其處まで目が利かず、愚闇愚闇云ふ者は縛つてしまへと云ふ事になる。其力は害を及ぼすと限らず、利を擧げようとすれば大いに擧げられるのであり、實に安寧秩序を保つに必要であつて、唯用ひ方を誤るが爲めに事が間違ふ。

□

今日學校で幾圓かの月謝で授ける所の知識は、幾多經驗の爲めに巨大の代價を拂ひ來つた所であつて、學校で授けぬ知識は、更に代價を拂はねばならぬ。如何に權力を使用すべきか、如何に金力を使用すべきか、判つたやうでなかなか判らず、尙ほ幾代となく經驗に經驗を積み、少しづつ判らうとする。多少力あるを知ると共に、威張りたい氣分が起り、之を押へようとして

愉快あるか。餘り愉快でもない事に、人の怨みを買ひはせぬか。之を知り拔くのは甚だ難く、難きが爲めに何れ程爭が起るか判らぬ。昔の唐王が再び現はれぬまでになつたけれど、今日小さいのが多いのは、何とかせねばならぬ。

力に任せて弱者を威壓し、それで何が面白いか。一時面白いとし、後より顧みて愚にも付かぬやうに感じはせぬか。感ずる時は既に死に瀕するとあるので、何とも云ひ様が無い。威張りたい氣分の旺んな頃、威張つても仕方が無いと氣付くやうになれば、無益な騒ぎが減ずるが、之を悟るまでに、多くの經驗を積まねばならぬ。一國内で之を悟るやうになつても、他國から壓迫し來るので困る。人類が地理民族等で境を分ち、相爭ふのは切磋琢磨して文化を進めるのであつても、境に拘泥し、益も無い事に力を費すのが隨分ある。幾百年幾千年を通じて見れば、いくらかの經驗的知識を得て居り、久しきを經て、其僅かの利益を得るに止まる。

□

幾度戰つた經驗あるに拘らず、世界戰役の勃發し、後悔先に立たぬのを嘆ずる者が多い。此頃獨逸前皇太子が回顧錄を公にしたが、悉く後悔である。戰前に同樣の事を云ふても、獨逸國内

れども、米國に押へ付けられる所を見れば、戰勝の利が害を償ひ得るかを疑ふであらう。今は米國が最も羽振り好く、世界の盟主たる姿であるが、結局それで何の利益があるか。財源の盡きぬ限り、力を伸ばし得ても、それだけ力を伸ばすのが何の利益あるかを知つて居るか何うか。米國人と云ふ肩書が世界の何處でも鳴り響く事が愉快であるか。今いくらか愉快であらう。それだけで人生の幸福が定るとするか。人種で排斥に努むるの最も著しいのは、アングロ・サクソンであり、今は其力あるけれど、獨り自ら世界で愉快にする事が幸福か。他を排斥して畢竟何の愉快を感ずるか。

今はガンヂが印度で無抵抗主義を唱へつゝあり、三億の民が白人に抵抗せず、それで白人が滿足するか。白人がガンヂの無抵抗主義を恐れるのは何故であるか。文明で能率を增進し、生存競爭に勝を制し、以て進化の極意を得たとする所のものは、今尙ほさう信じて居るか。セシル・ローヅがガンヂと面談したならば如何であるか。ガンヂに先んじて露國のトルストイが既に之を唱へ、最も有力なる政府が根本より覆つた。陸海軍の稱すべきなく、それで戰勝國を手古摺らして居る。新に世界に生存する所以を發見したかと見れば、世界陸土の六分の一を占め、

他國人の妄りに入るを許さうとせぬ。何の理由に於いてするか。國境と云ふ世界の傳統的習慣を楯に取るのであつて、人類の幸福を考へるまでに餘程の距離がある。

□

何處でもいくらか力の頼むべきあれば、極度に之を振廻さうとする。之を振廻して畢竟何の利益あるか。利益とは何處の誰が何をする事か。靜かに考へれば判りさうで、靜かに考へようとせぬ。考へても解らぬ連中が多からう。慈悲忍辱の教訓が數千年前より擴まつて、現に見るが如きの外に出ない。勝ち誇らう、威張らう、利益を貪らうといふ群は、尚ほ幾多の經驗を積み、揉みに揉んで、少しづゝ滅ずべきである。いくらかの効果を見るに、多くの歳月を經ねばならぬが、それでも昔に較べ、多少進んだ所がある。無抵抗主義は多くの經驗にて知り得る所であり、歐米で足を踏まれた者が、御免下さいと云ふやうになつたのも之を示す。ラモツトが群集中で一青年の足を踏み、青年がいきなり拳を擧げて打つて掛るや、彼は曰ふ、盲目と知つたならば、眞逆さう云ふ事をすまい、と云ふた。それから見れば、踏まれた方が御免下さいと云ふのは、負け惜しみか、當てつけか、何れにしても進んで居る。足を踏んだのは、何の意あるのでなく、之に打つて掛り、謝まらせたとて何が面白いか。暇潰えでないか。默つて居られねば、御免下さいと云ふ位の方が手輕である。さういふ所で喧嘩するのは、勝つて何の利益あるかを知らぬによる。

□

人は自ら生存すると共に、他と競爭するやうに出來上つて居る。左うでなくては今日程人類が繁殖する譯に行かぬ。繁殖は繁殖しても、數十萬年を經て十七億に止まるのは、僅かの知識を得るが爲めに多大の犧牲を拂ふからである。正直の必要を知るまでに、何れ程詐欺を行つたか知れず、今頃尚ほ詐欺の絶える事が無い。詐欺は愚劣の行爲であるを普く知るまでに、尚ほ多くの經驗を要するであらう。

人は他を愛する心があり、平和を求むるの念があつて、自ら生存するに必要なる力を濫用し、他人を害し平和を擾して憚らぬやうになり、或は之を誇らうとする。考へて見れば、何の益にも立たぬ事に心を焦立ち、勝つても害になるのに、一時でも勝つたと云ふ時を感じたくてならぬのである。素はと云へば、自ら支配するに必要なる力であるけれど、不必要に濫用する事は宜くない。鷄が籠の内で兩雄相爭ひ、勝つた方が一聲高く鬨を作くり、寔に得意の絶頂である。併し其の得意が幸福ならば、淺猿しい幸福でないか。人々力を具へ、悪を打ち、邪を仆

さねばならぬが、やゝ力の餘るのを知れば、之を活用し、人の譲るを見て得意を感じようとする。斯かる事で得意を感じ、一生を終へるのは、幸福なる生活ではなく、食頭痴の生涯である。生きて居る方が幸福か死んでしまふ方が幸福か、人生の幸福が何であるかが、今一層世界人類の頭に判り能くなれば、現在の狀態と異なる事が多い。學校の授業で直に容易に之を告げ知らす事が出來ぬ。教員自ら食頭痴に累せられて居る。幾代幾十代を經、少しづゝ悟るであらう。力を活用して、一人自ら得意がる者は、喜ぶべからざるを喜んで終るものである。

人類の國際心の目醒めを語る

國際語「エスペラント」に對する建部博士の誤解を駁す

（日本エスペラント協會委員）　井上萬壽藏

はしがき

昨今エスペラントの問題が重大視せられ社會の注目を惹くに至つたのは、エスペランテイストの熱心な努力に依るの外、世界戰後の新思想の動きが人類の生活を益々國際化し、從つて國際語の要求が尤も切實となつて來たからである。然るに我國の有識者にして尚往々此の問題を誤解し、その眞意義を掴み得ぬ人が少くないのは誠に遺憾に堪えない。

我國有數の社會學者として自他共に許せる建部遯吾博士の大著『敎政學』の各論第二部、第三篇、第二章第三節に『エスペラントの問題』として九〇一頁以下數頁に亘つて說く所も亦徹頭徹尾誤解に終始して居ることは昨今の情勢に照し殊に棄て置き難い事と云はねばならぬ。

然し乍ら豫め斷つて置くが、今玆に特に博士の論述に對して

駁撃を加へるのは決して博士その人に對して怨讎あるが爲ではなく唯博士の周到なる觀察が廣汎な範圍に亘つてゐる爲、その一々の論點に就て考察することが世間一般の誤解に對し遍く答ふる所以として最も便宜だからである。と云ふのは世のエスペラントに對する誤解の多くは博士のそれと同一轍を出でず、唯その一二點に論及せぬか、或は體を具へて微なるものに過ぎぬが故である。

尚博士の同著は昨年五月の出版に係り既に學者、學生、官吏、教育家等の多くの讀者を得た事と思ふが、今玆に敢て事新しく一文を草して社會の偏見なき批判に問ふ所以は、今正にその時期であることを思ふが爲である。

(一)

博士のエスペラントに關する根本的誤解は國際語と國民語(即ち國語)との概念の混同に基くものである事は明であり、博士がエスペラントを呼んで世界普通語と云ひ、又エスペラントの普及を以て各國語を輕蔑するものと考へてゐるのは亦右の誤解から出發してゐるのである。

エスペラントは固より國際語、詳しく云へば國際補助語であり、その目的とする所は決して既成國語を排斥して之に取つて代らうとする世界語たらんとするものではなく、各國民が第二語として學ぶべき國際間の意思通達手段に過ぎず、その國語を侵犯せぬ事は諸信號、音譜等の國際符牒と一般であり、その地位に於ては恰も支那の官話、印度のヒンドゥスタニー語が各地の方言に對して第二語であると相似てゐる。此の點に就てはエスペラント發案者たるザーメンホフ博士が屢繰返して述べてゐる所である。一九〇五年ブーローニュ・シル・メールに開かれた第一回エスペラント萬國大會に於ける『エスペラント主義に關する宣言』の一節に『エスペラント主義とは民族の內生活に干渉することなく又既成國語を排除せんとすることなくして異國人間に諒解を得せしめ(中畧)又之を以て凡ての國民に平等の利害を有する著述を公にし得べき中立的人類語の使用を全世界に普及するの努力なり云々』とあり、又一九〇七年英國ケンブリヂに於ける第三回萬國大會に於けるザ博士の演說の一節にも『まだ精密な形に整へた事こそないが誰しも明白に感じてゐる所の「理想的エスペランテストの綱領」は卽ち種々の民族が相互に自己の民族的特性を以て他を傷け合ふ事なしに平和に友誼的に思想通達をなし得べき中立的基礎を創造せんことを望むにあるのである』と述べてゐる。宜なるかな、獨逸の宣傳家は『自國人は獨逸語を語り、外國人にはエスペラントを語れ』と云ふ事をその標

當としてゐる。

建部博士は『世界語的價値』と云ふ標題下に『エスペラントは其の云ふ名稱の意味する如く世界普通語たらむことを期望するものなれども其の斯かる價値は實際的には甚だ貧弱なり』と述べてゐることが甚しき誤解であることは申す迄もない。殊に、『エスペラント』と云ふ語義は如何にも希望するものといふ事であるが決して世界普通語たらむ事を期望するものではなく、その起源は何ぞ知らん謙讓なるザ博士が一八八七年にエスペラントを國際補助語と名付けて世に公にするに當つて自分の名を匿しエスペラント博士の名に於て公表し、私に世界の恒久平和を希望するの意を寓した事に基くのである。

尚建部博士が國際語と國語とを混同せる事は、前に引用した文に續いて國語の有力なるが爲の要件として

(一)其國語を使用する主體、社會の勢力
(二)其國語を使用するより生ずる經濟上及び教化上の實效實益の顯著なるもの

の二者を擧げて、エスペラントが右の要件を缺いてゐるからその價値は覺束ないと論斷してゐることでも譯る。又『外國語關係』の條下に『(前畧)單純なる學習の難易を以て特定の外國語の勢力效用を卜定する標徵とするが如きは似ての外の事と謂はざるべからず。然るにエスペラントは其の背後に何等有力なる國、社會、民族を控へ居ることなく之を使用する人口も亦極めて少數にして世界最小の國に比すべきに過ぎず云々』とあるに依つて瞭明である。

此等の誤解に對しては唯、民族を背景としその歴史が生み且つ育んだ民族語と云ふものと國際間の意思交通手段たるエスペラントとは各別の範疇に屬するものであり、エスペラントには唯人類のあるが儘の背景あるを以て足る所以を答へれば十分である。民族心理學者等のエスペラントに對する反駁も亦多く此の種の誤解に外ならぬ。――エスペラント使用の實際に就ては後に述べる。

上述によりエスペラントは國語を排斥する世界語ではなくして、國語の外に立ち之と兩立する國際語であることは明であらうと思ふが、建部博士の誤解は更に徹底してゐるのである。『國語と國境』の題下に『國語の國境的價値はエスペラントを排斥するを原則とす。(中畧)國語と國體との關係、國境的價値の上よりしてエスペラントは斷じて國語政策上奬勵すべきものに非ず』とあるを見ては驚かざるを得ない。後述の如く博士の説によれば國際間の達意の爲にはエスペラントを用ゐるの要なく相手方に自由語を用ゐさせるか、自ら他國語を用ゐるか、若し二種以上の

異語國民が共通語を要する時は古典語を採用すべしと云ふのであつて見れば右の斷定は矛盾も甚だしいと云はねばならぬ。何なれば博士によれば二三の政治上經濟上の强大國の語を苦んでと學ばせられる事は何等の恥辱でなく、何國にも屬しない中立的のエスペラントを學ぶ事が國語の國境的價値と國體の尊嚴とを傷けることになるのである。是が矛盾でなくて何であらうか。

後述の如く大戰後祖國語尊重の聲は漸く喧しく、而もこの機運に際してエスペラントは單に各國語を排斥しないばかりでなく寧ろ國語の尊嚴維持をその使命の一として普及上一大進展を見たのであつた。『第六節羅馬字問題』の題下に於て我が國民の崇歐思潮を攻擊し『國語廢止、英語採用策』の自然消滅を喜べる博士が右のエスペラントに關する論斷に於て自ら事大主義に陷るの結果となつてゐるのは惟新主義を飽くまでも固執した爲の自家撞着ではないのだらうか。——坊間の店舖掲ぐる所の看板は率ね怪しげな英語であり、電車内の零細の時間を惜んで可憐なる中學生が苦辛して諳誦してゐるのは到底物になりさうにもない英語の不規則極る文法であるのを見る時、我々は日本は言語上英國の屬國ではないかと疑ふ。『國内には自國語、國際には國際語。』これ程明瞭なことが又とあらうか。エスペラントを速に普及せねば博士の患ふる所謂崇歐思潮は亡びる時はない。化粧品藥品や食料品や機械類の名は依然外國語もどきのものであらう。博士の『敎政學』九〇四頁六行目の『要求』の語にクレイムと振假名がしてあるが如き國語の國境的價値の侵犯は依然行はれるであらう。

要するにエスペラントを以て世界普通語なりとし國語の尊嚴を傷けるものと思ふのは、之れ全くエスペラントの何たるかを知らずして論ずるの致す所である。

(二)

次に博士と雖も國際間の意思交通の必要を否認する者ではないから、その通意手段に就ては別に一家の說があるのである。即ち『單に容易なる達意を旨とするか、何ぞ(中畧)エスペラントを須ひむ。同國人相互の爲には既存の國語の在るあり。異國人相互の間には甲者乙國語を話すか、若くは乙者甲國語を話すこと甲者乙者共に第三の丙普通語(エスペラントを指す)を話すに比して遙かに輕便なり。』とある。何たる獨斷であらう。玆に日本人と丁抹人とがあるとし、丁抹人が困難その者である所の日本語を話すことが、どうして容易その者である所のエスペラントを話すことより輕便であるか。又日本人に丁抹語を間に合せにでも話し得るものが何人あるか。而も歐羅巴丈ですら四十九種の國語が話されて居り國際聯盟に參加しゐる國だけ

でも二十五の別な國語を持つてゐるのである。此丈の國語を滿足に使ひ分けることは逆立ちしても出來るものではない。論者は或は二三の强國例へば英佛獨等の國語を各國人が習得して話せばよいではないかと强辯するであらうが、かくの如く二三國に言語上の優越を擔保し自ら屈辱を忍んで他國語を學び且つ語る事は、强き國民性に目醒めたる人々の到底肯しとせざる所であり、事實上弱小國の敵愾心嫉妬心を挑發すること疑ない。

現に大戰に前後して起つた鄕語自由の叫びは能く其の間の消息を物語るものである。白耳義に於けるフラマン語の問題を始とし、墺太利政府に對する伊太利人の舌の叛逆、舊露人政府より鄕語を封ぜられたる波蘭人芬蘭人等より、さてはウエルス人、プロペンサル人、チエツク人等何れも其國語解放に思ひを致さざるものなく、近くは愛蘭の獨立問題と共にゲリウク語の復興が論ぜらるゝを見たならば人間の至情は到底一二强國の國語を國際語として許さぬ事は火を睹るよりも明であらう。加ふるに既成自然語には何れも歷史上の遺物として習得困難にして且つ無意味なる文法規則多く、殊に語系を異にする國民にはその一、わたりの習得すら並大柢ではない。一方が自由に自國語を語り、他方が困難な他國語を强ひられる時に、そこに果して公平な對等關係と隔意なき親善關係とを見出すことが出來ようか。國際語が中立的にして且つ平易でなければならぬ事は云ふを待たない事である。

更に進んで博士が『甲乙丙丁等がその總てに共通する普通語を要する場合』の解決方法に二つありとし、一は古典語であり二は新普通語であるとしてゐる。而して『内容實質上の價値なき』後者よりも『内容淵博にして學習も多少行はるゝ』前者を採るべしと云ひ、その結論に於て『優尙は一に存し二に存せず』と云つてゐる。玆に至つて我々は竟に啞然たらざるを得ない。古典語例へば拉典、古代、希臘等の語は今や何國にも屬するものでなく、如何にも中立性を持つてゐ、而も拉典語の如きは中世に於ては科學上殆ど國際語の地位にあつたと云ふ歷史もある。然しその難易はどうであるか。又現代文化を盛ふに足る語彙があるだらうか。フレデリツク大王はその自叙傳に於て、その皇太子時代に多年拉典語を學んだが今以て名詞の二格の變化すら譯らぬと述懷してゐる。又獨逸廢帝ウヰルヘルムも嘗て其地の教育大會に臨席せる際の演説に於て、拉典語の難澁なることを强調し、自分は永年の學習に拘らず未だに同語で一つの文章すら誤なしには書けぬと云ひ、かゝる難しいものを全國の無數の學生に課するのは精力の無益なる消耗であると論じ、端なくも教育界の大問題を惹き起した。(因に云へば、それは教育家の

拉典語支持の主張が廢止論に對する挑戰であつて、その根據は古典語には近代語に見難き整然たる語原上の造語系統が豐富に表はれ、言語學の根本的觀念を養成するに缺く可からざるものだと云ふにあるのであるが、その目的の爲には嘗て有名なる言語學者マクス・ミユラー博士が『是れ二十世紀の一大奇蹟なり』と讃嘆したエスペラントこそ好適であると云ふことは、已に幾多の實驗が證明してゐる。)我々は此の點に關しては深く論ずる必要を認めぬが、只古典語を一般に行ふ事の不能な事に就ては、已に十七世紀に於て獨逸のヲルフガング・ラハティスたる人がアンハルト・ケーテン公國で獨逸語の代りに拉典語を行ふと言ふ理想を實際に試みて見事に失敗した先例のあることを附記して置く。

次にエスペラントの平易と云ふ事に就て更に一言を要すると思ふ。博士は『國語關係』の項にエスペラントは我國語には緣遠き所以を論じて『(前畧)是故にエスペラントは是等歐洲諸國語を使用する國民には學び易く入り易きも此以外の國民には何等特に學習の容易を謂ふべき理由もなく事實もなし。其然るは歐洲各國語の一種以上に通曉せる以上の人に於て之有るのみ云々』と云つてゐる。如何にもエスペラントは主として近代ローマンス語、ゲルマン語等印度歐羅巴語系に屬する諸國語より語彙の材料を取捨して整理したものであり、ウラル・アルタイ語系に屬する國語を有する日本人の如きは歐洲人に比してはエスペラントに外面上餘程緣遠い事は一應尤もである。然し乍ら國際語その物の合理的構成の爲には各國語に對し悉く公平の近接を保ち難い事は自明の理である。自然語との親疎の多少の如きは國際語の切實なる要求の前には何物でもない。殊に日本語は文字語原その他外形上はエスペラントとかなり逕庭があるが、實質上に於ては驚くべき近似點を持つてゐる、否、文法の根柢は全く日本語と同じであることは一度エスペラントの文法を窺つた者にして苟も日本語の構成に就て相當の考慮を費した事のある者の齊しく疑はぬ所である。その詳細に就ては遺憾乍ら此に述べる遑が無いが試に日本語とエスペラントとの近似點の項目を少しく擧げて見れば

一、發音の優美(母音多きこと)
二、動詞の變化(人稱數に關せざること)
三、非人稱動詞(形式的主格を要せざること)
四、語の結合による造語
五、疑問文の構成
六、數詞の體系
七、文中の語の配置

八、語幹に附する品詞語尾の變化
九、間接話法に於ける動詞の時の取扱

等少くない。博士は日本人に取つてはエスペラントもどの道他の自然語と難易に於て大差ないとするのであるが、文法規則は僅々十六箇條で事足り、トルストイは數分時で通覽し外國語の素養なき日本の勞働者でも三箇月の熱心なる學習の後に立派に讀み書きの出來たと云ふ實例のあるエスペラントが、あの冠詞丈二十八に達する獨逸語や、文法規則と云はんよりは不規則その物と云ふべき英語や、初學入門者が多く動詞の變化で匙を投げて了ふ佛蘭西語や餘程の利根がなくては習得出來ぬ露西亜語支那語などに比して特に容易であると云ふことがどうして理由なき事であらうか。更に博士の唱道する古典語に比してその難易がどうであるかは云ふ迄もなからう。自然語をさし置いて特にエスペラントを我國語に緣遠しとする結論は如何なる前提に由て生ずるかを知らぬ。

嘗て日本の駐英大使某男が英京倫敦に於て得意の英語で就任演説をした處、翌朝のタイムス紙上には『某男は昨日日本語にて演説せるが、右に依れば日本語は頗る英語に酷似するが如し』との批評が表れたと云ひ、又シカゴの醫師大會に出席した日本の某博士が自信ある獨逸語で所懐を述べた時に居合せた一人が立つて握手を求め、その演説を稱へて曰く『幾つかの獨逸語などでした演説よりも君の本國語で爲た演説が氣に入つた』と。英語崇拜熱に浮かされてゐる日本人の得意の英語が右の始末であり、自信ありと號する獨逸語がこの悲喜劇を演じて居る。

顧つて我國に於けるエスペランティストの會合に於ては如何に中外の老若男女が自由に語り、相互の諒解を遂げてゐるかを見、而して尙且つエスペラントを日本人に適せざるものとして排斥せんとする者若しありとせば、所謂耳を掩うて鈴を盜むの類である。

(三)

博士は又エスペラントの實質上價値なき事を說いて『其文獻亦極めて少く、偶之有るも亦唯翻譯物たるに過ぎず、原著即ち其色彩聲調に於て數所完全なるものは幾千百倍の人口と幾千百年の史迹とを有力なる背景とせる既成國語に於て儼として實に存するをや。乃ち外國語の一種として之が學習を奬勵するの理由は全然闕如するものと謂はざるべからず』と謬れる記述を敢てしてゐる。此處にも例の國際語と國語との概念の混同が表れてゐるが、その點は既に述べたから、今は唯エスペラントの實質上の價値は博士の想像する程貧弱なものでなく、博士の斷案は

その偏見を通してや、粗末な觀察をしたのか、又は漫に事實を誣ひた虚構揑造の說たるに過ぎぬ事を明にしやう。

エスペラントの文獻は、同語の發表以來僅か三十五年の間に既に數千種に達し翻譯物の外エスペラントによる原著は各分野に亙つて頗る多く、殊にエスペラントならでは到底讀むことの出來ぬ價値豐富なものが少くない。博士は『色彩聲調に於て數層完全なるもの』は既に既成國語に儼として存してゐるからエスペラントの必要なしと云ふのであるが、然らばその各國の文獻を我々は如何にして享受咀嚼するか。一方各國語を凡て習得するとは到底困難であり、他方には二重譯三重譯に甚く誤譯に充ちた和譯によつては到底原著の『色彩聲調』を味ふことは出來ぬ。この媒介の役を演ずべきものこそエスペラントである。博士の輕蔑するエスペラントの翻譯物は、エスペラントがそれ自身無色透明で特定國の色調を帶びてゐない故、一國の原著の他國語譯に勝ること萬々であつて原著の俤を傳ふることも亦尤も正確である。嘗て『レヴユウ・オヴ・レヴユウ』の社長故ウキリアム・ステツド氏はザ博士の手になる沙翁の『ハムレツト』のエスペラント譯を推奨し英國人たる自身すら之によつて初めて同劇の眞意を味讀するを得たと云ひ、獨譯などの到底及ばぬ事を指摘してゐる。

博士は『幾千百年の史迹を有する既成國語』と云ふが現代の既成國語中數千年の歷史を有するものは決して多くなく、英語の歷史の如き五百年にも足らぬ。エスペラントの歷史が三十五年に過ぎぬ事を以てその價値を速斷するのは早計である。我國の舊時代に於て遊廓の稼業婦の共用語たる『里言葉』なるもの即ち國訛を蓋ふが爲に人造した意思通達具が僅の年月の間に自由なる進化を遂げた事實も歷史淺き人造語（實は自然語を基礎とせる整理語）は活力を有し得ぬとの獨斷を裏切るものと云はねばならぬ。

而も今やエスペラント學士院の學術語辭典課は堪能なる專門家の委員五十三名を擧げて專門語統一の業を急いでゐる。その完成の曉には專門の文獻が續々表れんことは期して待つべきである。

前に引用した博士の文中に『エスペラントを使用せる人口も亦極めて小數にして世界最小の國に比すべきに過ぎず云々』とある。揚足を拾ふ樣であるが我が締盟國中最小のエクアドルの人口に比すればエスペラント使用人口はその三倍以上あり、丁抹、ボリヴイア、諾威等のそれに比するも尙その二倍を遙かに超えてゐる。而もその員數は世界の各地に散在して互に有機的聯絡を保つてゐる。若し夫れエスペラント賛同者に至つては

遙に計數の外にある。

根據なき空論は雄辯なる事實の前に消えねばならぬ。人類の國際心の目醒めが如何にエスペラントに慕ひ寄るか、以下に極めて大界を述べよう。國際的會合の同語採用乃至普及奬勵の決議をなしたるもの極めて多く、到底その悉くを枚擧することは出來ぬ。一昨年ヂュネヴアに於て開かれた交戰員國際會議、ブラッセルに於ける國際團體萬國會議等はその著例であり、殊に後者と同時に同地に建設せられた國際大學にはエスペラント講座が設けられた。更に注目すべきは昨春四月七日ヂュネヴアに於ける赤十字同盟の第十回萬國大會が滿場一致を以てエスペラントの採用奬勵を各國の赤十字社に向つて慫慂すべき事を決議した事である。昨年九月一日より十日まで催された各國民權利擁護國際會議もエスペラント贊成決議をなし、更に昨冬ヂエネヴアに開かれた第三回國際勞働會議に於て佛國政府代表ナダール氏及び日本勞働代表松本圭一氏兩名の提案に係る『國際關係を容易ならしむる實行策としてエスペラント使用範圍を益々擴張すべき』旨の決議を十一月十九日滿場異議なく可決してゐる。

更に商業方面に就て一言すれば英國倫敦の商業會議所は既に三年前に世界各國の商業會議所に向つて『速にエスペラントを普及し以て世界の商業を容易ならしむる爲に協力すべき事を請ふ』旨の決議をなし、その管轄下の商業學校にエスペラントを課し、佛國巴里の商業會議所も昨年一月九日に同樣の決議をなしてゐる。獨逸のニュルンベルグ、佛國のリモーヂュ、瑞西のロカルノの各商業會議所亦然りである。尙巴里の商業會議所の右の決議に賛同加入した商業會議所の名を擧げれば佛國に於てグルノーブル、セントーメル、マーコン、ボーヴエ、トルボール、カレー、ムーラン、タラール、ベジエール等、伊太利に於てミラノ、トリノ等がある

自國語が商業上殆ど世界語の觀ある英國や、因襲的に自國語の優越を誇る佛國等すら、今や一既成語は到底全世界に强ゆべきのでない事を思ひ、率先して國際語を唱道するのを見て、尙國際語に反對し英、佛語あらば足れりとする日本人あらば、それは自己を知らざること太だしき者ではなからうか。

商業に關聯して附記すべきは世界に於ける定期見本市の多くが通信、廣告その他の取引事務にエスペラントを採用してゐることである。今その地名を少しく擧げて見れば獨逸のフランクフルト・アム・マイン、ライプツイヒ、ブレスラウ、佛蘭西の巴里、里昂、伊太利のパドヴア、トリエスト、ミラノ、トリノ、和蘭のユトレヒト、瑞西のバーゼル、西班牙のバルセロ

ナ、ヴアレンシア、匈牙利のブダペスト、チエツク・スロヴアキアのプラーハ、ライヘンベルヒ、伯剌西爾のリオ・デ・チアネイロ等を數へる事が出來る。

教育方面に於てはチエツク、勃牙利、伊太利、瑞西、勞農露國等では諸公立學校にエスペラントを必修科目として課してゐる。その他英、佛、獨を始め諸國に於て必修又は隨意科目として小學校、商業學校、中學校、女學校等の多くの公立學校にエスペラントを課してゐる。更に人意を强うするものは、昨秋國際聯盟第二回總會に於てロバート・セシル卿の提案により『全世界人民間の直接理解を容易ならしむる目的を以て國際補助語エスペラントを各國公立學校に於て敎授すること』に關し聯盟の常設事務局に『根本的調査をなし、完全且つ明細なる報告を作成すべきこと』を命じ、且つ本年秋の第三回總會の討議日程中に編入すべき旨の決議を通過し而して目下その調査報告の任に主として當つてゐるのは書記次長新渡戸博士である。右討議に呼應せんが爲め本年四月十八日より二十一日までヂエネヴアに於てジヤン・ジヤツク・ルソー學院主宰の下にエスペラント敎育國際會議が催された。我國に於て去る二月中百數十名の有志が帝國議會の兩院に請願書を提出したのも偏に國際聯盟の決議に呼應してエスペラント敎育に關する調査に着手せんことを政府に促さんが爲であつた。

因にエスペラントに對し國家的補助を與ふる政府は獨逸の邦、伊太利その他新興國に於て特に少くなく、殊に芬蘭議會が每年エスペラントに對する補助金の豫算案を議してゐるが如きは羨望に堪えない。我政府が眞劍に國際問題を考へて具れる事の近からんことを祈る。

序乍ら獨逸のドレスデンや、キースパーデンでは警察官のエスペラント會が出來てゐるさへあるに、我國に於ては最近まで警察官がエスペラントに一種異樣の眼を向けてゐたと云ふ事實は恥しい極である。

最後に一轉して學術關係に於けるエスペラントの問題を觀るに學術界に於ては政治家や實際家等よりも遙に早く、夙に國際語の必要を痛感し、エスペラントによる學術團體は少くなく、今後益增加の見込である。昨秋八月佛國科學促進協會はルーアンに於ける會議に於て多くの知名の學者の署名を以てエスペラント贊成普及の決議をしてゐる。英國及び伊太利の科學促進協會も引續いて九月中旬に於て相前後して同樣の決議をした。更に興味あることは『數學』に於てエスペラントを蛇蝎の如くに排斥する建部博士が往年學問の堂奧を探らんが爲に留つた佛國に於て、その學問の最高の府の隨一に數へらるゝ科學學士院

は已に昨年二月中にエスペラントに對して尤も有利なる決議をなして之を唱道してゐることである。最後に喜ぶべき事は我が帝國學士院も去る一月十二日の總會に於て、理學博士中村精男氏の推薦により我がエスペラント運動の功勞者小坂狷二郎氏を招いて『エスペラント及びエスペラント主義』なる一時間に亘る論文演言を聽取し、穗積、田中館、井上、櫻井、南條、井口の諸博士其他多數の學士院會員は熱心に贊意を表し、殊に學士院長穗積陳重博士は自ら進んで我が國の研究及び宣傳機關たる日本エスペラント學會に入會したと云ふ。

我々は玆に新文化の理想を目指す新機運の止めんとして止め難き偉力を認めざるを得ない。

エスペラントの實質的價値は愈々出でて愈々豐富ならんとしてゐる。

(四)

以上を以て建部博士のエスペラントその者に對する謬見を駁したのであるが、最後に博士が同問題に關聯して述べてゐる驚くべき國語政策に就て考察して見たい。

博士は『扶植の責任』の題下に曰く『エスペラントを扶植するは各國社會が其國語の重修整理及び普及に勤めて日も惟れ足らざるに際して實に不急の舉と云はざるべからず。若し此の如き言語政策の一種の實現に餘力あらば須く之を轉じて國語の國外普及に力め之を以て世界普通語と做すに力むべきのみ。一國がエスペラントに向うて力を致しつゝある間に世界の有力なる衆國が各其の國語の普及範圍をば自國の國際的社會事項と共に着々擴張侵蝕を計るに於て、エスペラントに力を竭すの國は國語と國運と共に滅亡に陷るに至らんのみ。』と。何と云ふ暴論であらう。前述の如く自國語を國際語となすには絕好の地位にある英佛兩國が、率先して國際語の唱道奬勵をなしてゐる時、日本人自身すらもその難かしさに懊惱してゐる所の日本語を國外に普及して世界普通語となさうとは何事であらう。思はざるも甚しいではないか。因に曰ふ、博士は國字問題、國語問題に(何れも純國內の問題であり、純國際の問題であるにエスペラントの問題と混同なからん事を望む)關しては羅馬字論假名論は愚か、漢字制限論にも反對で、それ等を單なる愛新主義として片付けてゐる。博士は『要約』の題下に『エスペラントは空想的世界主義の一幻影に過ぎず』と云つてゐるが、我々は博士の驚くべき國語政策を以て『言語上に於ける盲目的國家主義の一幻影に過ぎず』と云ひたい。外國語問題に常に惱んで來、本來率先して國際語を唱道すべかりし日本人が、日本語を世界語とせ

んと云ふに至つては、心ある英人佛人はその妄想に且つ驚き且つ憫笑し、且つ長太息するであらう。

『エスペラントに力を竭すの國は國語と國運と共に滅亡に陥るに至らんのみ』といふ論に至つては一撃にも値せぬ事は既に再三述ぶる所によつて明であらう。人類生活の基調は今や偏狭なる國家單位を脱して國際的、全人類的となり、强固なる國際生活を築かざる國はその國家生活も岌々乎として危く、國際心、全人類心を來るべき時代の爲に種播かぬ國は退歩それ自身であり、破産それ自身であり、滅亡それ自身である。而して國際教育、全人類心養成の問題は國際語の問題と切離して考へる事は到底不可能であると云はねばならぬ。

博士の結論に『世界普通語は渾一的世界社會の後に策すべきを本末顚倒して世界普通語を以て渾一的世界社會を致さんとするの陋見に出つ』と云つてゐることのエスペラント及エスペラント主義（前掲の博士の語參照）に對する甚しき誣罔であることは改めて論ずるまでもあるまい。

昔バベルの塔はエホヴアのたばかりに基く建築者達の言語の紛糾の爲にその竣功を妨げられたと云ふが、その後言語の相違は却つて民族間に打破り難い無形の障壁を築いて了つた。意思の齟齬は幾度か人と人とを嚙み合せ幾度か民と民とをして肉彈を擲たしめた。果は人類が五年間もかゝつて爲したよしなし事は九百萬の父を子から、子を父から、夫を妻から、兄や弟を同胞から奪ひ去り、又一千三百萬の無疵に生を受けた無辜い人々の未來を死よりも痛ましい癈疾を以て暗くした。心と物との飢ゑにより限りなき遣瀬なさは歐洲の凡ての家庭を襲つた。『祖國の爲め』である筈の戰爭の結果は戰勝國にとつてすら療し難い深い痛手であつた。最早人類は胸に手を當てゝ深く考へ直すべき時に臨んでゐる。『教政學』の序文に於て建部博士は『東西兩洋國を立つること幾十、其の號れるものを一等國と云ひ云々（中略）吁人類ありてより星霜茲に幾十萬、其猿猴と相距るの未だ太だ遠からざる固より遽に悲觀を須ひずと雖も近者の由る所、以ゐる所將た安んずる所何ぞ其れ低にして卑、醜にして陋なるの甚しきや云々』と慨嘆してゐる。然り、過去は正にその通りであつた。然し乍ら今や已に『低卑』より高尙に『醜陋』より公明に向上すべき時が來た。『猿猴』の域を蟬脫すべき時が來たのである。ザメンホフ博士の詩『希望』の劈頭に

世に新なる感激生れぬ。
强き叫びは世に漲りぬ。

とあるのは彼が三十年前に今日あるを豫想した自信の聲であり、歡喜の叫びである。』

建部博士の近什『感時十二章』の中に左の一詩がある。

茫々坤輿上。擾々事我執。
黄白果仇讎。赤黒徒疏離。
緇衣説博愛。未覩甲兵戢。
靑衿談玄理。莫補民生給。
肉食曾不知。國際風雲急。

人種問題に就て此丈の感慨ある博士が、眼を掩うて問題の淵源を見ようとせぬならばそれは、大なる矛盾であり、又人種問題を益紛糾せしむる樣な政策を肯定するならば、それは大なる不可解と云はねばならぬ。面前に大火の突發を目睹する人が一擧手の勞を以て手近にある火災警報器を引かなかつたならばどうであらう。感慨が單なる感慨に止れば博士自身の詩に云ふ靑衿の玄理を空談すると一般ではなからうか。

・　・　・

最早駁すべきを駁し説くべきを説いた。

之を要約すればエスペラントとは民族間の意思を通達せんが爲の國際語であつて、國語尊重を一主眼とする中立語であり、平易にして日本人の學習にも決して不適當な物でなく、その實質的價値は今や牢乎として拔くべからざるものであると云ふ事と、國語の國外普及の如きも無謀であつて、人類は今や中立的國際語により恒久平和的相互諒解に歩み寄らねばならぬと云ふ事とに歸着する。

若し『敎政學』により建部博士のエスペラントに關する誤解をその儘に受け容れた人々、並びに博士と同樣の誤解に陷つてゐる人々の爲に、此の一篇が何等かの參考になるならば筆者の目的は達せられるのである。

かゝる駁論の未だ必要なる事を悲みつゝ筆を擱く。

（大正十一年五月二十日稿）

國定教科書に現はれた 軍國主義を批評す

本間久雄

一

世界大戰以來世界の思潮なり傾向なりが非常な勢ひで變つて來た。從つてこの新しい思潮傾向に應じた新しい國民たるためには、わが國の普通教育は自らそれだけの準備をしなければならない。この意味で、文部省の國定教科書は果してどれだけの抱負の下に編纂されたものであらうか。

かういふ問ひを心の中に抱いて、虚心で、國定教科書を私は讀んで見た。そして先づ第一に氣のついたことは所謂軍國主義が昔しながらに色濃く出てゐることである。

改めて云ふまでもなく、軍國主義はいかなる國にあつても封建制度の遺物であり、又自我的國家主義の當然の産物である。そして後に述べる通り、戰爭否定の近代思潮は自らにしてそこに軍國主義の沒落崩壞を招いて來たのは否み得ない事實である。然るに幾十萬の兒童の精神的糧であるべき筈の國定教科書に軍國主義が昔しながらに今尚鼓吹されてゐるらしく見えるといふことは、文化的立場から見て遺憾至極のことゝ云はねばならぬ。左にその一端を擧げて當局者の反省を求めたいと思ふ。

二

封建的軍國主義の第一の特色は自國本位といふことである。自國の利害のためには他國のそれを平氣で度外視するといふことである。從つてその第二の特色は侵略的といふことである。即ち"Might is Right"をその標語としなければならぬ。そしてこの標語を實現するためには敵愾心が强烈でなければならぬ。そして自己の實現してゐること即ち力は權利なりといふ考へ方を是認するためには戰爭そのものを光榮とし光輝あるものとしなければならぬ。言葉を換へて云へば、戰爭を讃美しなければならぬ。封建的軍國主義はかくの如くして結局この戰爭讃美に迄至

らなければ止まないのは當然なことである。

わが國定敎科書に現はれた軍國主義は、表面から眞正面に、如上の理を振りかざしたものでは無論ない。いかなる軍國主義者も、恐らく今日の時代において眞正面から "Might is Right" を公然と高調力說するだけの勇氣はないであらう。表面は飽くまでもそれを否定し人類愛を高調し、世界平和を願求するであらう。それと同じやうにわが國定敎科書も表面は世界平和を高調してゐないことはない。「我等臣民は此の國に生れ今の時に逢ひたるの幸運を思ひ、東西文明の融和者として、世界平和の維持者として、益々邦家の隆盛を期し、國力の發展に盡すべきなり」（高等小學讀本卷四「明治の聖世」）と云ひ、又「氣宇闊大にして人を容るゝの量ある。能く他國民と親和し、又能くこれを同化す。」（同卷三「興國の民」）とも云つてある。又戰爭そのものを眞正面から讚美したやうなところは毫末もない。しかし、東西文明の融和者、世界平和の維持者たることを裏切るやうな軍國主義的感情が、隱約の間に鼓吹されてゐるのはたしかに疑ひを入れない事實である。例へば次に引く「出征兵士」と題した新體詩を見てもそのことがよく肯かれる。

一、行けや行けや、とく行け我が子、
老いたる父の望は一つ。
義勇の務御國に盡し、
孝子の譽我が家にあげよ。

二、さらば行くか、やよ待て、我が子。
老いたる母の願は一つ。
軍に行かば、からだをいとへ。
彈丸に死すとも、病に死ぬな。

三、うれしうれし、勇ましうれし。
出征兵士の弟ぞ我は。
兄君、我も後より行かん。
兄弟共に敵をば討たん。

四、親に事へ、弟を助け、
家を治めん、妹我は。
家の事をば心にかけず、
御國の爲めに行きませいさや。

五、さらばさらば、父母さらば。
弟さらば、妹さらば。
武勇のはたらき命さゝげて、
御國の敵を討ちなん我は。

六、勇み勇みて出で行く兵士。
はげましつゝも見送る一家。

勇氣は彼に、情は是に。
勇まし、やさし、をゝしの別。
(尋常小學讀本卷十一)

この詩は全體として、表面的には何等批難さるべきものではない。それどころか、見様によつては、他國と事を構へた場合に、これだけの感情がなければ恐らく戰ひに勝つことが出來ないといふ意味で、或ひは推賞さるべきものであるかも知れない。編者は、恐らくこの一文の意は、國家奉仕の犧牲的精神の喚起にあると云ふかも知れない。しかしそこに裏づけられた感情を何等の成心なく、謙虚に受け入れたと想像したらどうであらう。それは一種の敵愾心を喚起されること以外、果して何物であるであらうか。又、それは戰爭そのものを光榮とする誤られた意味のヒロイズムを喚起されること以外果して何物であるであらうか。自國に反對するものはすべて「敵」だと考へることは云ふまでもなく封建的な思想であり感情である。そしてさういふ思想なり、感情なりは、古い意味の愛國心の重要な要素ではあつても、後に述べる通り決して新しい意味の愛國心の要素ではあり得ない。國家奉仕の犧牲的精神は愛國心の重要な要素であつて、無論いつの時代にも高調力說さるべきものであるが、今日に於ては、それは往昔封建時代におけるやうに、徒らに敵愾心や好戰的ヒロイズムを喚起することの中において發露されることを力說されるのでなしに、正當な、平和的過程の中に發露されることを力說さるべきである。

更に「スパルタ武士」の記述に至つてはいかに編者がこれによつて封建的な舊式なミリタリズムの讃美を敢てしてゐるかは誰人にも容易に肯かれる。

尤も編者は、それはスパルタ武士を傳へようとするにあつて、讃美の意味ではないと云ふかも知れない。しかし「昔希臘にスパルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇の氣今尙高し。」と云ふ書き出しで書いてゐる「スパルタ武士」(高等小學讀本第一「スパルタ武士」)の一篇は全然、スパルタ武士の讃美である。その文章の一節を左に拔き書きして見よう。

筆者は、スパルタの靑年が、日常の學課として體操、武術、劍舞、軍樂等を修め、「讀み書きの如きは、餘力を以てこれを學ぶに過ぎざること、」及び「武藝の練習は終生これを怠るべからざること」を述べた後に、次のやうにスパルタ武士を描いてゐる。

公式、祭儀の席には、老若相會して武勇の歌を誦す。老人まづ聲を上げて、『我等は昔て武勇なる壯者たりき』と歌へば壯年これに次ぎて『我等こそ今はそれなれ。知らぬものはい

さ試みよ』と歌ふ・少年亦これに和して『我等はやがて更に武勇なる壯者たるべし』と結ぶ・

かくの如き尙武敎育に鍛はれたるスパルタ武士は、死を見ること歸するが如く、瓦となりて全からんよりも、玉となりて碎けんことを希ひ、祖國のために一命を捨つるを以て無上の名譽とせり・

筆者は、以上のやうに述べた後に更にスパルタ武士の面目を示す二三の「美談」として、次のやうに記述してゐる・

敵の軍勢山野に滿ち、大小の軍旗空をおほひて、天日見えずとの報に接し、大將自若として曰く、「然らば其の蔭に戰はん。」

敵勢雲霞の如く、其の數を知らずと言へば、一將喜んで曰く「敵勢大なれば、我等の名譽も亦隨つて大なり。」一將又曰く「我等は敵軍の數を知るの要なし、唯其の所在を知るべきのみ・」

敵軍將に寄せ來らんとすと報ずるものあり。將軍叱して曰く「敵我に寄するに非ず・我敵に寄するなり・」

スパルタの武士は實際かういふ好戰家であつたであらう・そしてかゝる好戰家がたしかに過去のある時代には、勇士としてヒーローとして、「美談」の材料とされた時もあつたであらう。

しかし、今日の世界的趨勢から見て、これらは果して「美談」として小學生徒に推賞し得ることであらうか・今日は、世界の各國が何れも軍備縮少を實行し、時としては縮少どころか、軍備の全然の撤廢をさへ唱へる先覺者さへある時である・戰爭を絕滅して、戰爭乃至軍備以外の何等かの方法で世界平和を確保しようとしてゐる時代である。「敵勢大なれば我等の名譽も亦隨つて大なり」とか「敵我に寄するに非ず、我、敵に寄するなり・」とかいふ言葉が現はす意義や氣分なりは、舊式な軍國主義者に取つてこそ大に喜ばるべきものではあらうが、今日の世界の大勢からは全く一種の時代錯誤である。

『スパルタ武士』の筆者は、更に言葉をつゞけて、上に述べたやうな好戰的美德――筆者は又これを「美德」と云つてゐる――は單にスパルタの男子ばかりでなく、婦人もこの美德を分前してゐると云ふことを次のやうに記してゐる・

「一婦人共の子の出陣に際し、自ら盾を取りて之に投げて曰く、「勝ちて持歸れ・然らずんば之に乘りて歸れ。」

「或時の戰に、一時に五子を失ひたる母あり。人あり來りて之を告ぐれば、先づ勝敗の如何を問ふ・我が軍勝てりと聞きいて、喜んで曰く、「我が子は祖國のために之を產めり・」

又或時の戰に討死したる勇士の母は、花冠を被りて街頭に[illegible]

り、互に其の子の名譽を祝し、敵の包圍に陷りたる將卒の母は、固く戸を閉ぢて出でず、私に其の子の武運拙くして、祖國の爲に死する能はざるを悲しめり。」

かういふスパルタ式の好戰的婦人は、果して今日尙推賞に値するであらうか。祖國のために死する能はざるを悲しむのが果して今日の婦人に取つて、美德であるであらうか。むしろ出來るだけその子供だちが、戰爭で死なぬことを願ひ、望み、祈るのが、婦人本來の人間的乃至人道的感情ではないか。前に擧げた「出征兵士」の母のやうに「彈丸に死すとも病に死すな」といふ誡めよりは、病に死ぬのは止むを得ないが、彈丸には死なずに歸つて與れ、そして國家の生産的事業のために更によい奉仕をして與れ、といふのが、今日の賢明な母の心ではないか。スパルタ式婦人は、今日に於ては到底時代錯誤のミリタリズムの權化たる舊式婦人であるを免れない。そしてさういふ時代錯誤のミリタリズムの權化たる男女を推賞した文章を兒童の教科書に收錄することは、とりも直さずミリタリズムを鼓吹するものでなくて何であらうか。これはいかに國定教科書の編者が强辯しようとも到底否定し得ないところである。

　而も上に擧げたのはその一例に過ぎない。如上のミリタリズムの精神は到るところに現はれてゐる。卽ちさういふ軍國主義の具體化たる人物讚美、軍國主義のあらはれである戰爭の讚美的記述が至るところに現はれてゐる。どうして早く一命をすてゝ功名手柄をあらはさないかと氏神に日參をして、出征中の子を勵まして來た「水兵の母」(尋常小學讀本卷九)や「勝ちほこりたる敵兵を一擧に破る賤が嶽、七本槍のずゐ一とほまれは高き虎之助。蛇の目の紋の陣羽織、十字の槍の武者振は後の世までの語りぐさ。」といふ調子で、勇ましい武者振りをたゝへた『加藤淸正』(同上)や、囚へられて尙、武士の意地を捨てない源平時代の侍を描いた『古武士の意氣』(高等小學讀本卷三)や、日頃貧に窶れながら、良き軍馬を買ふ金を貯蓄して置いて、夫に武士道を立てさせたのを推賞的口吻で書いた『山内一豐(かずとよ)の妻』(尋常小學讀本卷七)や、源平の戰ひを描いて、惡源太義平の猛勇振りをたゝへた「待賢門の戰」(高等小學讀本卷二)や、日露戰爭で、露軍が大敗して、日軍が大勝したことをいかにも血狂ひ肉踊るといふやうな筆致で書くことによつて好戰的感情を刺戟してゐる『奉天附近の大會戰』(同上)や、などは明かに如上の例に擧げらるべきである。

　尤も國定教科書には、かういふ軍國主義的記事以外、政治上、工業上、産業上その他兒童の知識啓發の上にも、感情養成の上にも必要な、重大な記事のあるのは云ふまでもない。しかし軍國主義を讚美した記事の多い割りに、世界主義、平和主義に關

した記事の、殆んどないと云つてもよい位少ないのは事實である。私がこの稿の冒頭で、國定教科書が、一方において、わが國の兒童に、東西文明の融和者、世界平和の維持者たることをすゝめてゐながら、それを他方に於て烈しく裏切る思想感情を喚起してゐると云つたのはこのためである。

三

世間には或ひは說をなすものがあつて、戰爭は人類進化の上の避くべからざる過程である。從つて好戰的感情を兒童の心に植ゑつけることは、國民としての生存競爭上必要なことであるといふかも知れない。この考へは又常に戰爭の煽動家戰爭の讃美家によつて主張されるところである。しかしこれは明かにダーウィンの進化論を戰爭に誤り適應した誤謬である。このことを痛論して、ドイツのパウル・カムメレルは次のやうに云つてゐる。

政治上の戰爭と自然界の生存競爭との間には何等共通したものがないばかりでなく、時としては兩者は相反する。戰爭が生存競爭裡で避くべからざるものであり、又必要なものであるといふ戰爭の煽動者は、戰爭を以て、不適者を驅逐し、適者をしてこれに堪へしめることによつて一層よく健全なる自然淘汰を實現するものであると主張する。しかし事實はこの反對である。確かに戰爭は小麥から糠を篩ひ分ける。しかしながら潰し殺されるものは小麥である。即ち戰爭は反對の意味で自然淘汰を行つてゐる。といふのはそれは劣等な人々を生き殘らせるからである。戰場で命を助かるものは屢々怯懦者であり、奸譎者である。又戰場の後方に安全に助つてゐるものは弱者か弱者かである。

カムメレルはつゞけて云ふ。各個人の自然淘汰を戰爭の原理に應用するものは各國民の自然淘汰がそれによつて行はれるといふ。そして最も強い、望みある國民が勝利を得て、その創造的精力を恣まゝにすると云つてゐる。しかし戰爭に勝つのは、たとへ、最も強い愛國的國民や、最も多くの人口を持つてゐる國であるとしても、その戰勝國が必ずしも文明の分野で最も價値ある寄與者であると云ふ證據にはならない。寧しろその反對に戰爭の能率と文化の能率とは屢々分離されてゐると。

イギリスの種族衞生學の泰斗サリービー博士も亦、ローマの衰亡した重大な原因は、ローマが不斷の戰爭で、男子の花とも云ふべき若者が死んだところにあると云つたドイツの碩學モンセンの說を引いて、戰爭が一國の選ばれた、立派な體格の所有者である壯者——生活に最も適するそれらの壯者を殺して、寧

ろ生活に適しない人間を生き殘らせるのを通例とするといふことを論じ、種族衛生の立場から戰爭を否定してゐる。實際その通りで、種族衛生を國家的立場から見た場合には戰爭が全然否定さるべきものであることは贅するまでもないのである。

更に別な方面から見ても、戰爭はやがて滅絶さるべき運命にある。といふのは今日はある意味でインタナショナリズムの時代であるからである。往昔のやうな封建時代には、商工業その他あらゆる利害關係において、極端な鎖國主義も成立しないことはなかつたが、今日の世界主義は、あらゆる國民をして、物質的產物を生產し、又交換するために、他のあらゆる國民と協同的勞作の方法を採らざるを得ざらしめてゐる。であるから戰爭は、戰敗國に取つては勿論、戰勝國に取つてさへも、生活上の障害となるわけである。マリー・フォン・エブネル・エッセンバッへの歌つた

「自國と交渉なき外國の戰爭といふ勿れ！
いかなる戰爭も決して自國と交渉なきものたる能はず。」

といふ言葉はたしかに眞理である。世界のいかなる一隅に戰爭が起つても、それが到底、中立國である他の國にも決して無交渉であり得ないといふ狀態にあるほど今日は世界各國が世界主義的になつてゐるのである。

從つて、今日では或ひは種族衛生の立場から、或ひは自國の利害關係から、――人道的にはいふまでもない――戰爭否定の要求が世界各國におこつてゐる。この要求はこの稿の冒頭にも述べた通り、世界大戰後殊に世界の急激な叫びとなつて來て、一切の國際問題を、戰爭以外の他の平和的な手段や方法で解決しようとする傾向となつて來たのである。そしてかういふ世界的趨勢から見るとき、いかにひいき目に見てもミリタリズムは明かに一種の時代錯誤である。同時に、この意味から、わが國定教科書に現はれたミリタリズムを私は極力排斥することを禁じ得ないのである。

四

更に說をなすものは、ミリタリズムに裏づけられた愛國心を讃美するかも知れない。即ち、わが國定教科書に描かれた數多くの軍國主義的思想や挿話はとりも直さず、兒童に愛國心を喚起する所以のものであるといふ人があるかも知れない。これも一見理由があるやうで、而もやはり甚だしく時代錯誤的な考へであるといふのは愛國心（ペートリオチズム）といふ言葉そのものは同じでもその內容が、今日では往昔のそれとは甚だ異つて來てゐるからである。

云ふまでもなく健全な思想感情の所有者である限り、その生れた國を愛さないものはあるまい。たゞ時代の推移變化と共にそれを愛す愛しかたにも自らの變化が生ずる。封建時代には封建時代の愛しかたがあり、現代には現代の愛しかたがある。現代の愛しかたを採るべき現代において封建時代には適はしいが現代には適はしくないといふ愛しかたを採るならば、それは却つて愛さるべき當體——その國のために悪結果を齎らすのが多くの場合である。わが國定教科書に現はれた愛國心——少くもミリタリズムに裏づけられた愛國心は不幸にして、この場合であると私は信せざるを得ないのである。といふのはそのミリタリズムが前にも述べた通り、封建的な舊式な、頑冥固陋なものであるからである。

今日の愛國心は、自分の國さへよければ他の國はどうなつても構はないといふ自我的なセルフイツシな、偏狭な國家主義に基礎を置く封建的愛國心では斷じてあり得ない。オ、スタリーの社會學者ゴルドシヤイトは一切の國際關係をその所謂「目的(パーパス)合同(ユニオン)」によつて圓滑に、平和に處理すべきことを說き、そしてさうすることによつて、各國は何等他國の利害と幸福とを侵害することなく、而も各自の利益と伸長とを確保し得るといふことを說き、(拙文「覺え書き」參照)そして又かくすることを名づけて「愛國的世界主義(ペトリオテイツク・インタナシヨナリズム)」と云つてゐるが、今日の愛國心はたしかにこの種のものでなければならない。即ちこれは決して單に偏狭な國家主義の立場に立つたものでなくて、ひろい世界主義をそれに裏づけたものでなくてはならない。すべての觀念がさうである如く、愛國心の觀念も現代のそれは昔日のそれと全く別種のものとなつたのである。

フランスのロマン・ロオランは新しい愛國心について大體次のやうに云つてゐる。

愛國心とは、その國に對する純粹なる愛着の念であつて、他の國に屬するやうなどんな誘惑にもかへがたい愛着の念である。そしてこの愛着の念は極めて自然であり、且つ全體として一個健全な一念である。自分の國が、たとへいかなる國であらうとも、その國を愛するといふことは價値あることとである。

しかし單にそれだけでは不可ない。單に自國を愛する感情だけに始終してはならない。この單に自國を愛する偏狭な感情だけに始終した結果は先頃の世界大戰の慘禍を導き出したのだ。從つて人々は永久の世界平和のためには、さういふ自國を愛する感情と共に、一方に世界人類を愛する感情を持たなければならない。事實において今日は、社會的に、政治的にすべてが世界的に活動しつゝある時である。科學の天地において、工業の

天地において藝術の天地において一切が世界的になりつゝある。

ロマン・ロランは上のやうに一方、世界主義の必要を力說しながら更に次のやうに愛國心と世界主義との關係を論じてゐる。曰く

「しかしながら、私はこの愛國心と世界主義とが相並んで活動してわるいといふ理由を見出すことが出來ない。人間の身體の局部的なさまざまの機關の健康が全體の組織の健康と決して相入れないものではないと同じやうに人類といふ大きな地圖がさまざまの部分においてさまざまに彩どれるといふことは、それ自身のために遙かによいことであるといふことを理解すべきである」

イギリス現代の碩學バアナアド・ボサンケ氏も愛國心と世界主義との關係を論じてゐる。

愛國心は、爭ふべからざる自然力であり魔術力であるといふことを前提としたボサンケ氏は、しかしその愛國心が價値ある效果を齎らすか否かは一に如何やうにその國を愛すかといふ愛し方にあるといふことを委曲を盡して論じてゐる。

家族はある意味から云へば一切の道德及び文明の基礎であるが、又ある意味から云へば一切の偏狹と利己心の基礎である。家族は人類と文明との搖籃でもあれば又その墓場でもある。蓋しそれは家族に對して汝がいかなる愛をそゝぐかによつて分れる。換言すれば家族的愛情が、人生をして住むに値あらしめるに足る本當の標準によつて影響されたか否かによるのである。この家族對國家の關係は、移して以て直ちに國家對人類の關係とすることが出來る。即ち汝の愛國心が、生活をして住むに値あるものたらしめる正しき感情によつて貫徹されてゐるか否かによつて、汝の愛國心は利己的ともなり人類的ともなり、同時に汝の國家は或ひは人類と連結し又それから分離する。

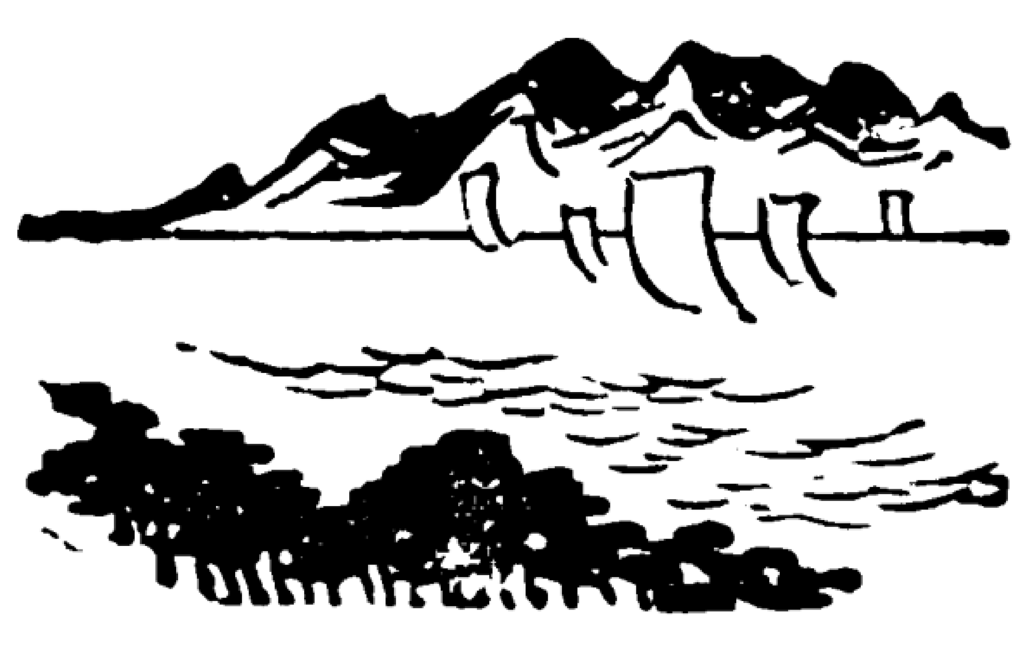
かやうに考へたボサンケ氏は軍備と愛國心との關係について說をなして曰く、國家として强いことは、個人の場合と同じく一個の義務である。不完全な、不確實なこの世界においては時として侵害された權利を守護するために軍備の必要がある。しかし問題は軍備に淫するか否かにある。人間としての正しき要求、國家としての權威と保險、それを守護するための軍備であるか、乃至は侵略的軍備であるか否かになる。それによつて、それは正しき愛國心から出た軍備か否かゞわかれる。

かやうに說いたボサンケ氏は、愛國心の眞の養成は、決してミリタリズム　らでなく、むしろ古代ギリシヤ人のやうに、本當に立法的精神と文化的精神とを基礎とした市民的生活の力說

から贏ち得られると論じてゐる。そしてボサンケ氏のこの見解はロマン・ロラン氏のと同じく世界主義を裏づけた國家主義を基調とした新しい愛國心の如何なるものであるかを説明したものと見ることが出來るのである。

以上は一例であるが、愛國心の觀念はかやうに變つて來た。從つて新しい若い國民、眞の愛國心が現代において如何なるものであるかをまづ十分に知らなければならない。それを知ることの如何によつて、その國家は世界人類に連結し又は分離するのである。この意味から見るとき、以上述べたやうに、わが國定教科書に現れたミリタリズムは不幸にして、わが第二の國民たる若い兒童たちに徒らに舊式な封建的愛國心を喚起し、その結果は、やがてはわが國をして世界人類から分離させるやうなことゝなりはしないかといふ怖れを吾々に抱かせるのである。眞の愛國的立場から見て、かくの如きは全く寒心すべき第一事でなくて何であらう？

私はこの點について、今更の如く、當事者の反省を望むの念に堪へない。



有島武郎著

童話

一房の葡萄

（装幀及挿畫四葉……著者）

定價 一圓二十錢
送料 書留十三錢

新刊

小供の欲念、秘密、悲しみ、喜びを子供と共にわかちたいといふのが望みだと著者はいつてゐる。小供の空想や、智識慾や、冒險的傾向に訴へた童話は多いが、この著の如く小供の實感を小供になり代つて書いたものは恐くはないだらう。

有島武郎著作集第十四輯

星座 第一巻

（二十版）

▽定價 壹圓參拾錢
▽送料 書留拾參錢

東京牛込神樂町二 **叢文閣** 振替東京四二八八九 電話番町四八一二

改訂

全譯詳註

ダンテ神曲

▼神曲三卷合册 ▼菊判天金布製壹千頁 ▼定價八圓五拾錢 郵税廿七錢

古今東西五千年に亘りて人類の創造せる一切の藝術的作品の中其最高最大なるものはダンテの神曲である。結構より云へば地の奥底より天の窮極まで卽ち全宇宙が其舞臺であり、內容より云へば藝術哲學宗教政治等人文の全體を攝收包括せる莊美なる一大繪卷である。人類文明の最も美しきもの高きもの純眞なるもの聖きものが玆に偉大なる靈魂の切實なる生活體驗として表現された。本書は伊太利亞語原詩一萬四千二百三十三行其儘の嚴密なる全譯であり其精到詳細なる詳解は廣く諸書を涉獵しダンテ學最近の研究結果を網羅し盡してゐる。曩に三部として出版せるもの既に通計十版を重ね今玆に改訂を加へ全一册として出版するに至つた。藝術家思想家宗教家改造家たるを問はず凡そ人生の眞實と理想とに活きんと欲する者は何人も本書より其靈感と力とを獲得せねばならぬ。

中山昌樹譯著

▼ダンテ新生 ▽價二、二〇

▼詩聖ダンテ ▽同六、〇〇

▼詩聖ゲエテ ▽同二、八〇

▼基督に倣ひて ▽價三、〇〇

アッシジの聖フランチェスコ ▽同四、五〇

聖アウグスチヌス懺悔錄 ▽同二、八〇

發兌元 東京市麹町區隼町廿番地 振替東京二〇一九一四 洛陽堂 （電話九段九六六番）

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す 中央公論社



丘博士の人類觀に對して我々が心に抱く疑念

小野俊一

述懷

我々はまだ我々人類の將來を全く絶望であるとは考へない。
勿論我々だとても、現に禍因の存在してをることをばよく知つてをり、
また不幸にして自身の心の醜さをも、自ら充分にしたゝめる。
けれども只我々は、其等の禍因をば、人類に取つて絶對に本質的なものとは考へず、
また自分等の心の醜さをも、永劫に不治の疾患であるとは思はない。
我等人類の前途には千難萬苦が横はり、
我々は今後も益々惱み煩ふであらう。
けれども我々にはなほ其の「前途」が、我々をば必ず滅亡に導く路のみであるとは、
だうしても、まだ思はれない。

はしがき

丘淺次郎博士は實に我が國動物學界の産みたる一異彩である。動物の中で、昔から、同氏が自分の專攻として選ばれてをるのは、主として海鞘(ほや)の類及び蛭類の形態學的方面であつて、其れ等の方面では、既にはやくより、それ〴〵世界に有數なる研究者として著しい名をば有つてをられる。

生來、多樣なる才能に富まれる氏のことであるから、苟も「生物學」の範圍に屬することであれば、一般に事の何たるを問はず、縱にも横にも通じて居らるゝと云ふことに勿論何等の不思議もないわけであるのだが、殊に同氏の特色とす可きは、氏が常に、其の豐富なる智識を使用し、廣き意味に於ける「生物學」を論據とし立脚地として、人間社會百般の事柄に對し實に徹底的なる解剖分析の妙技を振はるゝ點である。

丘博士は徹頭徹尾、ダーヰン主義の忠實なる主張者であつて、其の著『進化論講話』は明治三十七年はじめて梓に上されてより此の方、聞くところによれば、世に出でたる部數既に約六萬、單に進化論乃至生物學關係の書籍中に於てのみならず、一般に眞劒なる態度を以て書かれたる邦文科學書の間にあつて之よりも多く世の中に需められ、之よりも廣く人から讀まれたものは、恐らく一つも無からうと云ふことである。此の點に於て、實に丘博士は、石川千代松博士などゝ共に、云はゞ我が國のハックスリイであり、ヘッケルであり、ワイズマンであるとも稱す可き人物で、其の我が國に於ける進化論的智識並びに思想の普及宣傳に致された大なる功績は我等の決して忘るゝこと能はざる所である。

丘博士と筆者との間には年齡に二十と少しの差があり、筆者は中學時代に氏の著された人體生理や動物學の教科書で教へられて來た人間である。其の時分、筆者は既に、將來是非とも生物學をやらうと私かに心で考へて居たので、辭書と首引きしながら、曲りなりにも英語の原書を拾ひ讀みなどもして、實は學校で使はせられた其の教科書の方には一向に感心してゐなかつた。まうハッキリと覺えてもゐないが、今だつたらば、自分は必度其の少しの無駄もなく、さりとてまた少しの不足もなく丘式に書き整へられてをる教科書に感心したことであらうけれども、何分にも十五六の生意氣盛りの時代ではあつたし、「だうも丘さんの本は簡單過ぎてつまらない」などゝ僭越なことを考へてゐた。其の後、上野の圖書館あたりで、同氏の進化論講話を他の類書と共に讀んだりするに至つて、其の不遜なる子供も、追々と「丘淺次郎」なる名に尊敬を拂ふ樣になつては來たが、

然し、其の男が徹底的に驚異を感ずるに至つたのは、既に高等學校の時代、本誌の新年號に掲げられたる博士の論說を讀んでからのことである。

忘れもしない、其れは四十三年に發表された「人類の將來」と題する一編であつた。如何に自分が熱狂して、あの文を何度も何度も繰り返へして讀んだか！「是非讀んで見給へ」と云つて友達にもすゝめ、また自分の乏しい小遣錢の中から、高い新年號を餘分に買ひ込んで來て、一廉の孝行でもするつもりで、丁度其の當時ロンドンに住んでゐた父や、或ひは其の外の近親者に贈りなどまでした。古本屋を獵つて、其れより一年前の新年號をゝ探し、『所謂「文明の弊」の源一なる同氏の論文を讀んで愈々益々感激を深くした。其れから後に讀んだものはと云へば、何れも本誌の新年號で發表された『自然の復讐』（四十五年）と『觸らぬ神の祟り』（大正二年）との二つ限りで其れから昨年までの間に八年の歳月が經つた。

大正三年に筆者は本郷の理科を半途で退學し、ドイツの大學に行つてやはり續けて生物學を勉强するつもりで、日本を去つた。筆者が自分の兩親の切なる願ひをもきかず、また其の他の近親者の强い反對にも從はずして、其の時、敢てさういふ（向ふ見ず？の）擧に出たといふことはもとより、主として自分が生れ乍らのツムジ曲りであり、我儘者であり、生意氣な男であるによつたのであらうけれども、然しまた多少は、相當に是認し得る理由もなかつたわけではなかつたと思ふ――何故なれば、例へば大學の制度にしたところが、其の後、筆者が去つてからあとで、終ひに進取主義なる教授達の意見がとほつて、年級制の廢止となり、たとひ實効はまだ表はれぬまでも、制度としては極めて理想に近い、可成りに自由選擇の餘地を與へた今日見る如き科目制度の實現となつたのであるから。筆者の如きも、もし自分の在學當時既に今日の如き制度になつてゐたものとしたら、決してわざ〳〵國外にまで飛び出しなどはしなかつたであらうと思ふ。此の自由制度の精神といふものが、教職にある人々の間にも、また學生の間にも、まだ一般によく理解さるゝに至らぬ初めの間に於てこそは、或ひは在學生の教場内に於ける勉强振りが不規則亂雜になるとか、乃至は卒業生の所謂「學力」なるものが低下すとか……いろ〳〵と「弊害」や非難も一時は起ることであらうけれども、然し、結局之から二十年なり三十年なり經つた後で、自分は、日本の學界、また一般社會が、昔、我が邦の大學に劃一的年級制度を廢して、はじめて科目制度を確立してくれた人々の努力に對し、心から感謝する時の來る可きことを信ずる。其の「國外に飛び出す」擧を斷行す

るに付いて、其れは兎に角として、其の當時筆者が上記の如き丘博士の諸論著を耽讀してゐたといふことが、原因の一つであつたといふことは否まれない樣に思はれる。尤も、筆者が斯く思つたといつて、其れは決して、此の筆者の一身上のことに付いて、丘博士の責任を云々するなど〻云ふわけでは勿論ない。筆者は爾來其のことに對していつでも心で深く有難いと思つてをる者である。

或る時、三崎の臨海實驗所で高等師範の方から來た人と宿り合せたことがあつたが、其の時其の人が、高等師範の學生の一人で、丘博士の『進化と人生』を耽讀して、(「其の結果」)何の機會にだつたかに、日比谷あたりで大いに騷いで檢束された人があつたとか云ふことを話してゐた。もとより、この人のはなした原因結果の關係が果して正しいかだうかは大いに疑はしいのであるが、然し、筆者は其の時、さういふ事も恐らくプロバブルであらうと思ひながら他の人達と一緒にきいてゐたことであつた。

「我らの言ふ所は、哲學とか倫理學とか云ふもの〻樣な、あんな覺束なきア priori 的推理法のみによつて築き上げ、組み立て上げられた理屈ではなくて、實に一歩々々、實驗と觀察とにより愼重に吟味し確められたる最も誤りなき事實である……」

と云ふ銘を打たれてをるだけに丘博士の論說はそれだけ人を動かし恐扶せしめる力を持つてゐる。さうして實際、博士が其の該博なる智識をば自由自在に使ひこなし、所謂『生物學的の見地』より、或ひは堂々たる正面攻擊により、或ひは輕快なる比喩を用ゐて、人類社會百般の事柄に加へ行かる〻同氏獨特の評論といふものは、興味津々として盡きざるあひだに、讀む者をして、いつの間にか、羽化し登仙し、夢幻の境に遊ばしめずしては置かないのである。我々は或る時は遠く涯しもない天空の中を飛び翔つて、其れでも最も近いといふ恒星、アルフア・ケンタウリのあたりから我が太陽系の方を眺めさせられ、其處に淡く小さき點の如く輝く我々の太陽を指されて「此處からはまう眼にも見えないけれども、あの周圍に水星とか金星とか地球とか火星などの樣な遊星があるわけなのだ」と告げられたり、或ひはまた、バクテリア、アメーバ等より猿、猩々に至るまでの總ての生物をば悉く羅列して背景とした舞臺の上に、『人間』なる者が現れて演ずる種々なる『浮世の狂言』を棧敷の上から見物させられたり、また或る時は、其の『人間』なるものもまだ此の世の中に出現せず、生えて居る木や草なども今日とはまるで樣子の變つてをる太古の森林や原野の中を奇怪な形をした幾多の巨大なる動物の徘徊して居る處につれて行かれたり、更

らにまた或る時は、我等の身を罌粟粒の如くに小さくして、蟻や蜂の王國の中に伴はれ、其處に存在する社會の制度、其處に行はれてをる『道德』即ち『蟻道』『蜂道』とも云ふ可きものが缺陷の多い我々の所謂『人道』なるものに比べて如何に理想に近く完全なものであるかと云ふことを案內し示されるなど……恰かも『アリスの不思議國探險』に自ら出掛けたといふ樣な工合なのである。

　讀者は面白さに引きづられて、識らず識らざる間に、次ぎから次ぎへと其れ等夢幻世界の旅行を續けて行くのであるが、其處で我々は、日頃「人は萬物の靈長なり」などと自惚れ、或ひは、天地人の三つを同資格のものと考へて『三才』などゝ名付けて居る自分等の誇大妄想心をば徹底的に打ち碎かれ根こそぎにせられ終る。我々は上記の『浮世の狂言』なる芝居すらも、其れが役者たる『人間』の自由意志によつて演ぜられてをるのではなくして、一と度び舞臺の裏にかくされたるカラクリを覗かせてもらつて見れば、意外にもパンとか或ひは人體內に藏されてをる、精虫とか卵細胞とかゞ糸を操つて躍らせてをる人形芝居に過ぎぬといふ事を告げられる。また太古の原野を彷徨しては我々はまだ人類の出現以前此の地球上に全盛を極め覇横を持して居つた各種の動物即ち古生代に於ける魚類兩棲類或ひは海に陸に空に向ふ所敵なく横行し、其の中には今日をも最大の鯨より大きなものも數多くあつた中生代に於ける爬蟲類、乃至は頭骨だけでも長さが一間近くある象や、短刀程の牙を備へてゐた大きな虎、左右の角が二間以上にも擴がつた鹿などのゐた第三期の偉大なる獸類……等が、一時は他の動物の上に、恰かも今日の人類が占むる如き、絕對的優勢を占めて、到る處に跋扈してをり乍ら、如何にまた彼れ等が、最初他の者の上に優勢を占むるに到つた己が特性の極端に過度なる發達の爲めに、終ひには內因的に衰頽しはじめて、絕滅するの運命を免れる事が出來なかつたか。さうしてまた我々人類なるものも、器具を使ひ覺え、次第に腦力を發達せしめたといふ、他動物を征服し得た二大長所其れ自身の停止する事なき進步の爲めに、やはり結局は如何にしても滅亡の末路から免れることが出來ず、否其の前途が既に下り坂にあるといふことが、現に我々今日の世相に如何に著しく表はれて居るか、といふことを教へられる。分業と協力との主意により、相互扶助の精神に基いて組み立てられてをる蟻や蜂の社會制度を、丘氏もまた團體生活の理想的軌範として我々の前に示されるのであるが、然かも氏の考へによれば、我々人類の方は、智識が進み、器械を使ふ事が非常に發達し過ぎた爲め社會團體の單位が今日見る民族・國家といふものゝ如く餘り

に大きくなり、其の結果、團體間に働らく自然淘汰の効果はも早や急速に現はれず、各團體を作れる個人の間に、協力的性質が多いか少いか、また相互扶助的精神があるかないか……といふ様なことも、直ちに切實に其れ等團體の優勝劣敗的運命には關係を有たざるに到つた爲め、激烈なる生存競爭は寧ろ同じ社會團體に屬する個人間に行はるゝ様になり、さうして、其處では、(個體のみを單位としてをる他の生物界に見らるゝ如く)、最初から利己的の動機のみによつて、ズルク、ツヨク、而してスバヤク、立ち廻るものが、たとひ團體の爲めには非常なる害を及ぼさうとも、却つて生活に適せる優者として生き殘り榮えるプロパビリチイをより多く持ち得る事となると云ひ、だから人間の社會には今後も益々、私利私欲的なる個人主義が盛んになつて行き、一部の人々が考へ且つ夢みつゝある理想の社會などゝ云ふものは恰かも彼の蜃氣樓にも似たる單なる空想のみに過ぎずして、決して實現さる可き筈のものではなく、如何に理屈だけを捏ねまわして見たところが、結局、我々人類に彼の蟻や蜂に見る如き相互扶助的精神に基いた社會の實現が不可能であることは、恰かも、烏に孔雀の眞似の出來ざると同様であらう……といふ様な主意を傳へられる。

斯くて、丘博士の議論の面白さに誘はれて、讀者は時の過るをも忘れ次から次へと、博士の筆のまに〳〵夢幻の境を彷徨し、然かも其の何處に於ても、其れ等の夢の如き世界が決して夢には非ずして實は却つて世の眞相であり、之に反し日夜世人が動きなく誤なき人生の根本義なりなどゝ確信して少しも疑はざる所のものが、却つて多くは、人間の誇大狂的腦髓の產物であり妄想たるに過ぎぬといふ事をば最も赤裸々に表示し且つ數へられるのである。やがて眼をば其れ等の文字より離して再び四圍を顧みる時、讀者は己れ自身をば、博士から耳にさゝやかれたる如く、正しく幾多の虚僞、矛盾、醜惡……に滿ち〳〵たる現實界の中に見出す、――恰かも「神隱し」に遇つて再び家に歸り來つた人の如く茫然として周圍を眺め或はまた初めて所謂『智慧の果』を食ひたるエバとアダムとの如き心となつて己れら自身を省みる。今までに抱いて居つた人類としての自負心や理想などゝ云ふものは、千仭の高きより、一氣にして、深き谷底にまで突き落され、さうして然かも我らが終局の運命といふものは、如何に心を悩ませて見ても、其れよりも、更らに更らに下方なる暗黑滅亡の淵より、外にないのであると、明かに宣告されたることを心の中に思ひ浮べる時、悲觀せざらむと欲するも豈、得べけむやである。

或ひは曲りなりにもやはり丘博士と同じく生物學なるものを

自分自身の專門としてをる人間であるが爲めに筆者が氏の議論から受ける印象が殊更らに强いのであるのかも知れないが、然し、苟も最初から不眞面目なる茶かし氣分を以て讀む人でない限り、上記の如き氏の著書を讀み終へて心に此等のショックをも受けぬといふ様な人は恐らく一人もあるまいかと自分などには思はれる。彼の「人類の將來」とす題る一文（明治四十三年本誌新年號）の終りに當つて氏は次きの様な事を記して其の結びとし、

「我らは一昨年一月の中央公論誌上に「所謂文明の弊の源」と題する一篇を掲げたが其後或る人から斯様な論は讀者をして悲觀に陷らしめる患はないかとの注意を受けた。今此所に述べたことに對しても或は同様の懸念をする人が無いとも限らぬが、我らは斷じて左様な心配は無用であると考へるである。

人間には一定の壽命があつて早晩死なねばならぬことは、誰も承知して居らぬものはないが、其の爲めに悲觀に陷つたと云ふ人は曾て聞かぬ。また此地球は其始め火の塊であつたのが、漸々冷却して固形の地殻が生じ、凹んだ所へ水が溜り、其の後諸種の生物が生じて、今日の有様までに進み來つた。今後は更に冷却して今日の月に見る如く、水は凍つて氷となり、土は凍つて石となり、空氣も凍つて液體となり、更に固形體となるであらうが、斯くなつては生物は到底生活は出來ぬ故、今見る如き生物は其前に總べて消え失せて跡を留めぬであらうとは、地球を論じた書物には悉く明記してある所である。また太陽と、若干の稍々大きな遊星と無數の小遊星とより成る太陽系なるものも、其初めは今日望遠鏡で實際幾つも見える如き星雲であつたのが漸次凝固して今日の姿までに成つたのであるから、今後もなほ變化し續く可きものであり、且つ太陽はこれに附屬する無數の星と共にヘルクレス星座の方へ非常な速力で進みつゝあること故、終には如何に成り行くか分らぬ。年々歳々何の變化もない様に思ふのは、人の命が短かいために變化を知る可き時間がないからで、恰も大きな圓の周邊の一小部が直線と異ならぬのと同じ理である。我らが此所に述べたのは、たゞ人類は腦と手との働きの進んだ結果、今日既に滅亡の方向に進みつゝある故、地球が冷却して生物が全滅すべき時期を待たずそれより遙に前に滅び失せるであらうと豫言したのみである故、從來人の云ひ來つたことに比して期限の少しく違ふ外には餘り多く異つて居らぬ。盛者必滅とは常に人の唱へ來つたことで、始めあるもの必ず終りあるは、これ生滅の法である。「天長く地久しく」とか、「天壤無窮」とか、「終り無き世」とか云ふのは梨子を「有りの實」と呼び硯箱を「當り箱」と名づけるのと同じく縁喜を祝ふ假の言葉で、數日の後には必ず枯れるに定まつた松の切り枝を立てゝ常盤の榮を願ふ徴しとするのと同じ心持ちで唱へてをるに過ぎない。

總じて、來るか來ぬか分らぬ危害は、全く來ないものと見做し、來ることは確であつても、其の來る時の定まらぬ危害は當分は來ぬものと見做して、氣に掛けずに生活して居ることが健康な人の常態である。從來

に乘つて旅行すれば何時衝突して顚覆せぬとも限らぬが、乘つてから降りるまで絶えずこれを心配して居るものは一人もない。また人間は老少不定と云ふて何時死ぬか分らぬものであるが、毎日この事を考へて悲觀し續ける者は一人もない。斯樣ないことを常に憂ひて暮すのはただ幽鬱性の精神患者のみである。されば萬一この文を讀んで悲觀に傾く人があつたならば、其の人は已に現時流行の神經衰弱症に罹つて居ると診斷せざるを得ぬ故我らは其の人に向つて、病勢の募らぬ内に速に療養に取り掛ることを切に勸告する。』

といふ樣なことを述べられて居られるが、筆者などの見る所を以てすれば、要するにこれは讀む人々の心次第であつて、たとひ「現時流行の神經衰弱症」などにはまるで關係ない樣な人であつても、只單に讀み終へ、讀み捨てにしたばかりで濟ますわけにはゆかず、問題は決して衰弱したる神經の持ち主のみには限らない。

丘氏は增補されたる「進化と人生」の第四版のはしがきの中に自ら讃して、

『我らの著した書物の特徴は總べて其の獨創的なることである。說の當否は素より讀者の判斷に任すの外は無いが、何れにしても、他人の考へを其のまゝに受け繼いで述べた如き所は決して無い。即ち全篇が悉く著者の頭腦から生じた產物であるから、何人も未だ云はなかつた新な考へが到る所に說いてあるが、斯樣な獨創的の思想は恰も時期が到來したために樹木の梢に生じた果實の如きものである。之が後に成長して各一本の樹木と成るや否やは全く其の偶然落ちた地面の性質によつて定まる。同じ種子でも石の上に落ちたものは終に出芽するに至らず、たゞ肥えた土の上に落ちたものだけが芽を生ずる如くに、新な思想も、之を受け入れるだけの下地のある人間に出逢はなければ、其のまゝ凋び枯れるの外はない。されば有力な人々が力を協せて土地全面に石を敷き詰めた地方では、僅に敷石の隙間に落ちた種子だけが辛うじて生命を保ち得るに過ぎぬ。本書に述べた著者の思想の如きは、全部枯れ失せても決して惜む可き程のものではないが、それが將來根を張り枝を擴げ得るに至るか否かは、偏に之に適する沃土の露出した場所があるか無いかによつて定まるであらう。』

と記して居られるが、或る信念と共れをば受け入れ或ひは受け入れぬ人の心との關係をば果實と土壤との關係に比べられた此の喩へも、たゞ漫然と肯定してしまうわけには行かないのである。誰れもよく知つて居る如く、此れと同じ樣なる比喩は基督教のバイブルの中にも記されて居る。

この日イエス家を出て海邊に坐せしに、多くの人々彼れに集り來りければイエスは舟にのりて坐し、凡ての人々は岸に立てり。イエス譬へを以てさま〴〵の事を人々に語りぬ・・種まく者播きに出でしが、播ける時路の旁におちし種あり、そらの鳥來りて啄み盡せり。また土うすき磽地におちし種あり、直ちに萌出たれど、日の出しとき灼れしかば、根なきが故にかれたり。また棘の中におちし種あり、棘そだちて之を

蒔げり。また沃壤におちし種あり、實を結べること或ひは百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍せり。耳ありて聽ゆる者は聽くべし。（馬太傳十三章）

丘氏のはしがきの方には勿論何等の解釋も附いてをる筈がないから、氏の考へをば「受け入れるだけの下地」なるものが、抑々如何なる素質であるか、さうして「土地全面に石を敷き詰める樣に力を協せてをる有力の人々」といふのが、一體如何なる人達であるのか、よくハッキリとはわからないけれども、之に反し聖書にある比喩の方は、弟子達が、「何故に譬のみを以て語られるのであるか」などゝ質問をして置いてくれたお蔭で、「空の鳥」といふのは「惡魔」のことで、「路の傍におちた種」といふのは「天國の教へ」をきいてもそれをば悟らぬ間に「惡鬼來りて其の心に播れてたる種を奪つて行く」といふ意味をあらはし、「磽地に播かれた種」といふのは、教へをきいて直ちに喜で受け入れはするが、何分根を下すことをせぬためにたゞ僅か暫くの間だけで、「教への爲めに患難あるひは迫害の起る時は忽ち道に礙く者」の場合を云ひ、「棘」とは「世の思慮と貨財の惑ひ」を言ひまた「沃壤」とは「教へを聽きて悟る」心を意味するのであると記されてある。殊更らに所謂「宗教なるものに對して無關心なる丘博士の言葉と聖書のから云ふ部分とを一緒に引用して論ずるといふ事は可成りに當を得ぬはなしであるかも知れないが、便宜上さうすることをゆるしてもらふとして、上記の譬は、丘氏のでも、聖書のでも、一寸きいた所では如何にも尤もらしくきこえるけれども、其の實は、極めて漠然としたはなしである樣に此の筆者などには思はれる。或る一定の思想の「種子」に對して、「敷石」であるとか、「空の鳥」であるとか、乃至は「棘」であるとかゞ、抑々何を意味するであらうなどゝは強いて論ずるの必要もなく、また其の「石」の上に落ち、「鳥」の爲めに啄まれなどして、育ち得なかつた場合のことも茲では強いて考へることを要しない。筆者が茲で考へなければならぬと思ふのは其の「種子」が芽生へし、育つて自らも果實を結んだといふ場合である。

敷石と敷石との隙間に落ちたとか或ひは荊棘雜草の中に落されたとかいふ爲めに發育も惡く、辛ふじて貧弱なる果實の幾つかを付けるといふ樣なのもあれば、また所謂「沃土」の上に播かれた爲めに終ひに大木となつて夥しい果實を結ぶものもあり、同じく育つて實を結ぶにしても其の程度は勿論種々樣々であるだらうが、丘氏にしても、また聖書の中の言葉にしても、同一の種子を播いたとすれば、其れから萠生えて來る植物の種類や性質は全く同じものであるかの如く a priori に決めて居られる

様に感ぜられる。然し乍ら、之は可成り甚だしい獨斷であつて、事實は決して、さういふわけではない様に思はれる。

昔は男女相合して子をなすことをも、女の腹は單に借り物たるに過ぎず、恰かも畠の如きものであつて、男が其處に種をまくのであるといふ様に考へた。さうして筆者を以てすれば、上記「思想の種子」「心の土壌」の考へなども之れと同じ様な皮相の見であるとの非難を免れることが出來ず、或る一定の思想と其れをば受け入れ、或は受け入れぬ人々の心との關係は寧ろ或る雌性の生殖細胞と、其れをば受け入れて所謂「受精」を遂げ、或ひは受け入れずして子供を作り得ぬ雌性の生殖細胞との關係に事情が極めて似てをる様に思はれる。受精の現象が起り得ぬ場合、其の原因には内的の障害もあれば、また外的障害もある。雄性の生殖細胞を雌性の生殖細胞の處にまで達せしめて、もし首尾よく其れと接觸さすことさへ出來れば、兩者は直ちに結合して發生をはじむるといふ場合であつて、然かもなほ體の構造其の他種々なる外的の事情に障げられ其の接觸の遂げ得られぬこともあれば、或はまた、たとひ如何に工夫を凝して雌雄兩性の生殖細胞を接觸させてみても、少しも合一の起らぬこともある。例へば犢ほどの大いさある「セント・ベルナード」種の犬と、玩具代りに飼はれる「チリア」種の小犬との間などでは、ロシヤのイワノフ氏がやりはじめた如き特別なる人工孳尾術でも施さぬ限りは兩性細胞を合一せしめて子を得ることが不可能であるが、體の大いさなどによる障害でも、馬と驢馬位の程度であれば、地面に掘り下げを作つてやる位の御手傳で、よく知れてをるあの騾といふ雜種を生ませることが出來る。内的障害の爲めにたとひ接觸しても合一の起り得ぬネガチヴなる場合の例は、勿論枚擧するだけの必要もない。犬と猫、兎と鶏、蛙と金魚或ひは植物の方でも柳と櫻、瓜と茄子、などの間に如何程工夫を凝して交配を行はせ雜種を作らうと苦心して見たところが少くも今日のところでは到底なし遂げ得る見込みはない。比較的に縁の近い二種の獸類の間などに、自分が案出した人工孳尾の方法を施して雜種を作らうと苦心してもそれがどうしても不可能である場合とか、或ひはまた、馬と驢馬との場合の如く、容易に交雜を遂げしむることを得、然かも出來たる子供は親より却つて元氣旺盛なる素質を持つのであるが、只何故か、其の生殖力だけを侵されてをつて、多くは其の代限りで死絶えるといふ様な事實に對してはイワノフ氏其の他から種々なる理論的の説明が與へられて居る。今は勿論、さういふことの詳細にまで論及す可き場合ではないが、例へば雌の獸の交接器の内面に多くの喰細胞が配布されて居つて、已れの卵細胞と合一する

ことが好ましからぬ樣な種類の雄獸から精を受けたる際には直ちに活動を起して、侵入して來た其れ等の精虫をば悉く喰ひ盡してしまうといふ點などは幾分「路の旁に遺たる種」を「空の鳥」が來て啄み盡すといふにも似てをるし、或ひは國外から所謂「危險」思想とやらの宣傳され來ることを怖れて、國の出入口には、到る處、其の筋の御役人が眼を光らせて居るといふ場面などにも似て居る。かけ合されたる雌雄の動物が互ひに緣の遠いものであれば、たとひ上記の如き外的の豫防作用などが効を奏さずして精虫が卵の處にまで到達したとしても、恰も石の上に種が播かれたる時の如く、大抵の場合には互ひに無關心の態度を持して、精虫も卵に侵入せむとは試みず、卵も精虫をば攝り入れ樣とはせぬ。抑々生物の細胞を形成してをる『原形質』なるものは同じ"Protoplasm"なる名稱によつて一般的に呼ばるゝとは云へ、其の生物の種類の異なるに從つて必ず其の組成並びに構造をも異にしてをるものであるといふことは、微妙なる血清の反應を見ただけでもわかることであるのだが、其れ等原形質の組成並びに構造の異同に基いて雌雄の生殖細胞が、或ひは相反撥して合一せず、或ひは（たとひ同一の種類に屬さずとも其の類緣の遠い近いに從つて種々なる程度に力強き）合體を遂げて子孫を作り得るといふことは人間の心と心との關係、思想と思想との關係、乃至範圍をまう少し大きくして云へば、祖先以來各自に異なりたる風俗、習慣、偏見……等を傳統して來たことに起因する所謂特殊なる「民族性」と「民族性」との間の爭鬪並びに融和關係にも比す可き現象であると思ふ。

近來、遺傳學並びに實驗生物學の他の各方面より「かけ合せ」の研究は益々盛に行はるゝ樣になり、從つて面白い事實も次第に多くわかつて來つゝあるのだが、今、筆者の議論を進める爲めに直接に必要なる事情だけを少しく述べて見れば、交雜によつて、上記の如く全然子供を生じ得ざる場合を除き、兎にも角にも子供を生じ得る場合、今日までの研究の結果、其れ等の雜種をば次ぎの樣な種類に分けてゐる。先づ二つに大別して"Orthonothi"及び"Pseudonothi"の二群とする――「眞正なる合の子」及び「僞せの合の子」といふ意味である。前者がまた三つに分れて、(一)"Tokonothi"(二)"Steironothi"(三)"Dysnothi"といふ樣に名付けられるが、(一)は只單に健全なる常態の雜種であるといふばかりでく、其の雜種自身に更らに生殖して子孫を遺す能力のある場合であり、之れに反して(二)は身體のみは少しの申し分もなく立派に出來て居るが、只其の生殖力だけを消失して、先づ通常は其の代限りで死滅するものを云ひ、また(三)は交雜の結果が非常なる畸形兒となり、病的であつ

て、多くは無事に發生を終ることすらなし能はずして死ぬ樣なものを云ふのである。以上の三つの場合、即ち Orthonothiにあつては、兎にも角にも作られたる子供は父と母との生殖細胞の眞實なる合體によつて出來たものなのであるが、次ぎの Pseudonothi に於ては之に反して、父方の生殖細胞即ち精虫は、母方の生殖細胞即ち卵の中に、たとひ機械的に侵入し合體することだけはしても、眞の意味に於ける性的融合即ち核と核、染色體と染色體といふ緊密なる關係を形成するまでには立ち到らないので、恰かも種々なる試藥を用ゐ、或ひは單に機械的なる刺戟によつて卵細胞に人工的單爲生殖を起さしむる時の如く、父方よりの生殖細胞は只、發生を促す刺戟としてのみ作用したに過ぎず、母方の卵は卵そのものだけの內容を以て、(即ち無精的に)發生しはじめて終ひに子供となるのである。故に實際のところ之れ等は一見雜種の如くにして然かも雜種とは考ふること能はざるものである。此の第二の群がまた二つに分れて(專門外の讀者には說明無しでは理解さるゝことが困難かも知れないが)、出來上りたる子供の身體を形造る細胞內の核が、母親の體細胞の核が持つ染色體の數の半數を含んでをる場合、即ち "haploid" である場合と、然らずして、やはり母親と同じだけの數を保持して所謂 "diploid" である場合とがある。前者の場合は精子が卵にまで達したる時、まだ幾分かの親和力を感じ得る爲め、卵の方にては後に核と核との合一をも遂げ得ることゝ豫想して、兎も角も(一般に卵が受精を遂ぐる時には必ず起る豫備的現象である所の)所謂「減數分裂」を行つて自分の持つてゐた染色體の數を半減したわけなのであるが、後者の場合では、卵が精子に侵入し來ることだけは許しながらも、其れ以上には全然何等の親和力をも感じなかつたといふ次第なのである。

今日までに我々の知れる範圍內に於ては、一見したる所では種々なる差別があり乍らも總て Homo sapiens なる同一種の動物たるに過ぎぬ人類の間に於ては、異種間の雜婚によりて生れたる子供は一般に上記 Orthonothi中の(一)なる Tokonothiであつて、これは、相異なりたる白人種と白人種の場合であらうと、白人種と黑人種との間であらうと、或ひは白人種 黃人種との間であらうと、其の組み合せの如何によつて、子孫の身體 素質、竝びに繁殖力等に强弱優劣の差別こそあれ、全然同じことである。(二)の Steironothiの例は前述の騾などがそれであり、(三)の Dysnothi 並びに殘りの Pseudonothiの方の實例は、最も高等なる方の動物で、兩棲類あたりまでに見られ、例へばヒキガヘル、トノサマガヘル、アヲガヘル等各種異なつたカヘルの類を人工的にいろ〳〵かけ合せた場合などに出來る。

斯くの如く二種の相異なりたる動物（或は植物）細胞の結合によつて種々なるOrtho.或ひはPseudonothos を生ずるといふ原因は、父側並びに母側の生殖細胞が各自に有するEntwicklungstendenzen とも稱す可き持性の間の、調和の大小にあるのであつて、其れはまた、斯かる問題の研究に對し一方の泰斗たるオスカー・ヘルトヴイツヒの稱ふる如く、主としては其の場合に組み合はされたる兩性殖細胞の核中に存する所謂「生殖物質」（"Idioplasma"）間の Harmonie及び Disharmonie に基因すること勿論であるけれども、また其れ以外に、彼れの長子たるギユンテル・ヘルヴイツヒ等が自己の研究によりて確實に示したる如く、雄性の細胞核即ち精虫の頭と、雌性の細胞核との間にはたとひ大なる Harmonie が存在する如き場合にももし其の卵核を圍む細胞質の方に精子頭に對して Disharmonie をあらはす如き物質（例へば卵黄等）が含有されてをる場合には自然、核と核との合一は阻害せらるゝこととなるし、またたとひさういふ物質などは含まれずとも、卵細胞の表面が精子頭の穿入力に對して餘りに頑丈なる場合には單に機械的なる原因の爲めに受精が行はれ難き次第となる。Aの雄をばBの雌にかけて其の結果が不成功なるにも拘らずBの雄とAの雌とのかけ合せは好結果であるといふ如き場合は多く斯くの如き二次的原因の存在に基くのである。

岐路にはいつて、先づ此れだけの事實を述べて置いた後に、さて前にも記したるが如く、或る一定の「思想」といふものと、其れを受け入れ或ひは受け入れぬ「人々の心」との關係をば丘博士及び聖書の言葉などの如くに「種子」と「土壤」と云ふ樣に解釋せずして、試みに雄性の生殖細胞と雌性の生殖細胞との關係であると云ふ如く考へて見るに、人間の思想の問題と、生物の生殖の問題との間に存在するパラレリズムといふものは實に驚く可き程のものであつて、殆ど類似して居らぬ現象は一つもないと言つてもよい。然し、よく考へて見れば、之れは斯くある可きが當然であつて、「境界なき差別」といふことを萬事に唱へんとせらるゝ丘博士からは叱られるかも知れないが、人間の「思想」といふものは之れを「精神的」（語弊のある「靈魂的」といふ言葉などは使はない）の生殖素であると云ふ樣に考ふ可きものかと思ふ。

少々脱線的の例であるかも知れないが、後に到り、更めて傳統とか民族性とか云ふ樣なことを論ずる場合の下準備ともなるから例に引くが、吉田松陰といふ人は所謂「安政の大獄」の犠牲の一人として安政六年の秋幕府の爲めに江戸に於て首を刎ねられた。殺さるゝに當つて彼れの書き遺した留魂錄なるものゝ

最後に「身はたとひ武藏の野邊に朽ちるとも、とゞめ置まし大和魂」いふ歌を書きつけて死に、其の肉體は實際に朽ちて、武藏野の土となつてしまつたわけであるが、彼れは生涯娶らず、また外にも女といふものを全然知らずして終つた人の様であるから從つて子供といふものゝ有る可き筈なく即ち、吉田松陰なるあの個體によつて代表されて居つた生命なるものは ontogenetically に云ふも、また phylogenetically に云ふも彼れの刑死を以て完全に終りを告げた次第であつて、親族とか、養子とか云ふ人達によつて繼續されて行くことの出來るのは吉田松陰なるあの個體の生命とは直接に關係なき「吉田」といふ其の家の係統だけに過ぎない。

さて、吉田松陰なる人の肉體的生命が斯くの如く完全に死滅してしまつた事は、殆ど今更ら云ふ必要もない様の明白な事實であるとして、然らば彼れの魂は如何になつたかといふ問題になると、岡博士と同じく、やはり生物學上の事實を事實として自己の考への基礎としてをる筆者は、頭の中に二階造りの宇宙を畫いて、目に見える宇宙である下座敷の方にをつた吉田松陰が死んで身體だけは腐つたが然し其の靈魂は直ちに梯子を登つて靈魂の合宿所であり、目に見えぬ宇宙である所の二階座敷に行つたのであるといふ様に考へることは出來ないし、(丘氏の論文「我らの哲學」參照)、さうかと云つてまた、府下の世田ケ谷や、長州の萩にある松陰神社の神殿の中に、所謂「御神體」となり彼れが生前常用の硯や何かの中に籠つてをるのであると云ふ様に考へるわけにも行かない。

誤解のない様にと思つて少しく岐路ながら附記して置くが、筆者は普通人の間に『偉人』とか『英雄』とか云ふ様なものゝ存在を充分に認むる者であつて、丘氏が『所謂偉人』と題する一文の中に於て表明されてをる、偉人とか先覺者とか云ふものゝ全てを抹殺し去らむとする議論に對しては、去る二月の本誌に掲げた拙稿の中に於ても、一七乃至三〇頁に亘つて、自分の同意し兼ねる點を記述して置いた。『ロシヤの過去と現在とは我々に何を教へるか?』と題する其の稿の中に於て、筆者は聊か、ロシヤと日本との國體並びに國民性等に關する考察を試み、ロシヤ革命と、維新の革命との比較論をも試み、讀者と共に我等の今後、取つて行く可き道のことに就て幾らかでも考へ様と試みた。

さうしてまた維新の時の人物としては、越前の橋本景岳と長州の吉田松陰とを好み、分けても吉田松陰の方は或る年代の間殆ど彼れを神格視するまで崇拜し、ゐたし、また今でもなほ偉い人であつたとは思つてゐる。高等學校の時代に筆者はよ

く、學校をエスしては、終日、世田ヶ谷の松陰の墓場に行つて勝手な本を讀んだりしてゐたもので、實際其の頃の自分は日本に生れた人間の中で此の吉川松陰といふ人物以上に偉い人物は、まだ一人もなかつたもの丶如くに信じてゐたのだ。……」といふ樣なことをも書きつけて置いた。（同稿四二頁）

さう云ふ私事に亙ることを、自分は斯かる論說の中に於て、なる可く述べ度くないと心に希ふのではあるが、然し今日の自分の頭や考へ――（其の色彩をば黑と見るか、白と見るか、乃至綠と判じ赤と認めるかは、見る方々の心に委せて置くとして、）其れの――出つて來る所を出來るだけ明かにせむが爲めには、やはりさうする事が必要である樣に思はれる。明治四十三年の一月に國民新聞社が主催となつて上野の日本美術協會で、『維新志士遺墨展覽會』といふのを開いたことがあつたが、其の當時の自分に取つて、其れは「骨董」といふ意味を全く離れて眞に寶の山にも喩ふ可きものであつた。さういふ樣な頭と感じとを持つて自分は向陵生活の三年を過して大學に移つた。自己の專攻と定めた動物學と云ふものに對しても、其の當時の自分の趣味や理想は徃時　舊式なる『博物學』の範圍を少しも脫して居らず――自分自らはいろ〱なる蜘蛛の種類を聚めることに熱中してゐたが、動物學者として自分が理想として夢みてゐたことは、「少くも日本國內の動物とか植物とかいふもの丶調查研究といふことを從來の如く西洋人にやられてしまう事がない樣に、さうしてもし出來ることなら支那とか印度とか云ふ樣な東洋國々の動植物學的調査（Biological Survey）は却つて日本の學者の手によつてやり遂げる樣な時代の、一日も早く來る樣に、」といふ樣なことに過ぎなかつたのである。既に專攻の學問に對する態度がさういふ次第であつた以上、維新時代の所謂志士の遺著などに憧憬を感じて、よく讀賣新聞社の樓上などで催される古書展覽會等では、いつも一文なしになるまで財布の底をはたいたことに、別に何等の矛盾もなかつたと思ふ。

其れらの所謂『勤王の志士』間に於ては前に述べたるが如く、自分は吉田松陰に最も多くの興味を感じ、最も大なる尊敬を拂ひ、殊に彼の下田に於ける踏海の擧をば興味の中心として、書簡などをも集めたり讀んだりした。佐久間象山の著に省諐錄といふ本がある。下田の擧が破れた時其の計畫に參與したる故を以て松陰の師たりし象山もまた捕へられ、松陰と同じく江戶傳馬町の獄に投ぜられたことは人のよく知る所であるが、彼れが其の在獄約半ヶ年の間にものしたる雜說五十七條、賦一、文六篇、詩十二、和歌十首を集めたものが即ち其の省諐錄であつて、一說に傳ふる所によれば、當時獄中では筆紙を用ゆるの

自由を許されず、只纔かに獄卒の好意によりて、鼻紙の小片に密かに認めたるものをば其の都度門人等に傳へて成つたのであるとのことだが、兎に角、異常なる環境の中に於て書かれたものだけに、僅か本文四十五枚の冊子ではあるが、一言一句人の肺腑に徹き迫つて、象山の著書の中でも、彼れの精神を傳ふること斯くの如く深刻にして且つ豐富なるものは他に無いとまで思はれるものである。例によつて余の癖なる路草の樣に見え脱線の如くに思はるるであらうけれども、事はやはり人間の靈魂といふことに關係があるので遠慮なく書かせてもらふこととする、象山は嘉永七年の秋江戸の獄を出てから文化二年の十二月に至る九ケ年間を、濫地である信州松代に歸つて幽閉の裡に送り、後ち再び自由の身となつて京都に上り、大いに國事の爲めに奔走せむとしたが、不幸にして間もなく、木屋町の路上で刺客の爲めに殺されたのであつた。斯くして、上記の遺稿省諐錄は久しく筐底に藏されたまゝであつたが、息恪二郎が流離顚沛の間にもよく之れを守つて、終ひに明治四年に至り、はじめて象山の妹婿に當つた勝海舟翁の手によつて版に上されたのである。海舟の撰になつた序文の中には次の樣なことが書いてある。

「花之先於春者。爲殘霜所傷。說之先於時者。爲舊弊所厄。雖然不有先者。則後者何以警起乎。……中略……嗚呼說之魁于衆者。不必遭厄。今世人若以此書。爲平々無奇耶。則余將曰。子見識至此者。豈非遭厄者之賜耶。」

さて筆者は最初、友人から此の省諐錄を借りて讀み、そしてだうにかして自分でも一冊手に入れ樣として探してみたのであつたが、中々に見出すことが出來ず、只、其の樣にして探して居る間に偶然、にも同書の版木が未だに麴町の某古本屋に保存されてあるといふことを聞き知つて終ひに其れをば手に入れることが出來た。表の半分にはヱハガキや小供の繪ばなし等をも並べて居る樣な小さな本店で、美しい文字を裏表に彫つた二十五枚の版木は無造作に荒繩にからげられ埃に埋もれ、鼠の糞にまみれたまゝ其の家の二階にしまはれてあつた。其れは丁度大正二年のことであつて、信州松代の人である友人Oところで見せられた廻狀によれば、其の年が恰かも象山の五十年忌に當るといふので、一部の人達の間に祭禮を行ひ紀念事業をやる計劃があり、何でも可成りに大きな資金を募集して、松代に紀念の公園を作り、碑を設けるといふことが主な目的であつた樣に覺えるが、一方で筆者自身は、折角版木のありかを探ね當てさうして、二十五枚の版木を五十圓で讓つてもらふといふ約束だけは出來たものゝ、直ちに其れだけの金が工面出來ぬには閉口した

――から云ふ様な道業はすべて兩親には内々のことであつたから。市場にも相當の部數を供給し、また、第一に、版木の表面にこびり付いてゐる埃などを全部取除く必要もあつたので、前金として幾らかの金を渡し、また、三十部だけは自分も引き受けるからと云つて手刷りをする職工を頼んで來て百部だけを刷つて貰ふことゝした。勝さんの刷られた時の本は黄色い表紙であるが、自分が關係して此の時刷つてもらつたのには栗色の表紙を附けた。其の本も刷れ上り、さうして其の内に、五十圓の金も全部拂ふことが出來て、五月の末の或る晩事情を知つてゐた親友のS（其れは最初に省諐錄を自分に紹介してくれた男で今は建築技師となつて、九州大學の農學部の建物を立てゝゐる）と二人で版木をば受け取りに行き、荷が大きくて電車にも乘れないので二人共大きな風呂敷包みを背負ひ乍ら汗ダク／＼で麹町から小石川の家まで運んで來て誰にも家の者に見付けられぬ様に、其れをば自分の書齋に持ち込み、兼て用意して置いた茶箱の中に藏め終へた時には、實際に重荷を下した様な氣がしたが、然し其れまでに達するプローセスたるや人知れず人の屍體を運ぶ様な氣持もした。

さて、屍體といふ様な言葉も出て來たから、岐路のはなしはこゝらで打ち切つて以前の論題に立ち戻り、象山のことをも同時に考へ乍ら、吉田松陰の魂の行衛に就て再び論ずることゝする。

「身はたとひ」の辭世の歌の中にも自分自ら「留め置かまし大和魂」と斷じてをられる位であるから、松陰自身の魂を大和魂の一種であると認めることには誰れも異存ないものと假定すれば、問題は自然、吉田松陰なる一個體によつて表現されて居つた其の大和魂の、其の後に於ける運命如何と云ふことになり、「然らば抑々、大和魂とは何ぞや」といふことにもなつて來る。今更らに大和魂の定義などを云々しては、一部の方々から「日本人なら云はずともわかつてる筈ではないか」と詰られたり、或ひは「非國民」と罵られたりすること、わかり切つたるはなしであるが、然しさういふ様な早呑込みをし獨り合點で決め込んで居られる方々は別として、筆者の如く悟りの悪い人間となると同じく日本人ではあつても、果して何處が大和魂の特色なのであるか中々に心に會得することが出來ない。若しも、幸か不幸か、一部の人々が信じ且つ唱へつゝある如き所謂「大和魂」なるものだけが、實際にまた大和魂の本體なのであると假定するならば、我々は其の大和魂なるものは九分通りまで、"made in ancient China" の代物であることを認容しなければならない。或ひは『忠・孝』であるとか、或ひは『智・仁・勇』であるとか

何れも大和魂なるもの〻要素であるとに勿論相違ないとして、其れは然し、決して大和民族のみ專有に屬す可きものではない――何れの種族何れの國民の中に於ても、一般的に云へば、共れ等はやはり美德として從來認められ來つたものであり、さうして程度に於てこそ種々なる差あれ、世界何れの民族にも見出し得可き性質のものである。豈んや共れら諸德の最高なる軌範的實例として古來我が國人の口にし筆にする史實や人物は云へば、其の思想や精神や乃至は人名を表現する爲めの言辭や文字そのものと同樣に、大半、昔の支那から引用し來つた借物なるに於てをやである。此の明かなる事實に對して實例を擧げ證據を示すなどはまことに非常なる蛇足なのであるけれども、支那といひ、支那人といへば、頭から擯斥し、馬鹿にし、虐めることのみを心得只。自分等の國のみを特殊特別の國の樣に自惚れ切つて居る方々も多い今日のことであるから、一つ二つ記して從くことは萬更ら無駄でないかも知れない。國を擧げて支那に師事した古い昔のことなどは云はず、つひまだ此のあひだに過ぎぬ時代のことだけを考へても、例へば王政維新の主なる種蒔き役を勤めた淺見絅齋の靖獻遺言は、楚の屈原、漢の諸葛亮より、陶潛、顏眞卿、文天祥、謝枋得、劉因と云ふ順序を經て明の方孝孺に至るまで節義の士八人の文を集めて遺言となし、商書微子篇の「自靖人自獻于先王」といふ言葉から取つて其の題をつけたもので此れ等の人各々の略傳を揭げ、歷代の他の忠臣烈士の言行をも附記してをる 勿論、當時の『共の筋』に對して幾分遠慮した點もあつて、故意に支那のとだけを材料としたのであらうけれども、要するに Original である所の、支那に於ける御手本を示して、一向になつて居らなかつた當時の我が國に於ける大義名分を正し、abnormal だつた國の狀態を改造せんと努めたものである。また紀維貞の著なる國基といふ本は、乃木大將が自ら費を投じて刷り直させ知友の間に配られた程に「國粹」的なる物ではあるが、之も要するに支那に於ける聖賢の教や義烈の士の行動には心から大なる Authority を認めながら、然かも共行れだけでは愛國心といふ腹の虫が承知してをらず、また其の當時盛んであつた外尊內卑の思想を矯正するとも出來ぬので、其の水をば瑞穗の國の田に引いて來て、日本の國體に勿體をつけ樣としたものに過ぎない。「皇朝風‖俗、忠‖厚義‖烈、家々太‖伯、人々伯‖夷、故豈‖永義公中‖江‖子之外、爰不二具擧一」といふのが本文の終りであり、小泉康敬とか云ふ人の書いてをる序文の中に「孔子のをしへに備(スガタ)と用(ハタラキ)との二をわかち立て、天地そのこひのうらにゆきとほりつ〻いく千よろつ代をふるともかはるましきをしへを本體(モトツスガタ)とし、本より主定まらぬその國の

時にしたがひ處につけたるさとしを活用とせり、これをしもたゞ一つことにこゝろへて、かけまくもかしこき現神の千秋の長五百秋にしろしめす大御國の内に生まれなから、かのしつたまきいやしき人も時をえては忽にきみとなりて人をなつけ世をたもつ國の風俗をしも尊み崇むるは、まとへることの甚しきなり、孔子もこの大御國に生れいてたまはは、あにかゝらんやは、たゝかの正しき一すぢにこそは導たまはめ、云々」とあるのを見たゞけで大體見當がつくであらう。けれども此の時には、たとひ少々の毛前味噌こそはならべたれ、天地の大本である所の道は漢土に於ても、また神國たる日本に於ても一つにして變りないといふ信條を持ち得たゞけに度量や見解がまだ廣かつたのであつたが、倒幕といふことが、尊王といふ思想と結び付き、共れがまた攘夷といふ思想と錯雜するに到つては、まう共れだけの雅量を見ることも出來なかつた。もし一々吟味し、比較して見て公平に判ずるならば、「だから己れの國の方が……」などと云つて自ら大いに誇ると共に他を見下し得る理由となる様なことが殆ど全て消え去つてしまうと云ふことは、例へば文天祥の正氣歌と藤田東湖の其れとを對照して見たゞけでもわかることであらう。だから定義の付け様に困却して「朝日に匂ふ山櫻花」と云ふ様な禪坊主式の答へで自ら御茶を濁してゐたわけであるのだが、それにしても山陽の如きは、あの名高い「花より明くるみよし野の」といふ今樣の中で、たとひもろこし人でも高麗人でも、大和心になり得るであらう、と云つて、國民性の差別を環境の如何に基くとなし、まだ幾分か世界人としての雅量を示してをるではないか。年代に於て、ほんの僅かばかりの差であるが、下つて攘夷運動の急先鋒となつた時代の長州あたりに來ると、まう共の様な心の餘裕は藥にし度くもない――頭から凝り固り　る國家主義であり、排外主義であつて、例へば彼の村田淸風の思想の如きも、「來て見ればきくより低し富士の山」といふまでは壯とす可きであるが、「釋迦も孔子もかくやあるらむ」と續けて、只單に丘博士の偉人抹殺論の先驅となる様な意味ばかりでなく、幾分の排外思想をも同時に表はしてをり、「敷島の大和心を人とはゞ」と自問してももろ櫻などゝ云ふ優雅な答へは出さずして「蒙古の使斬りし時宗」と答へ、同じく櫻を詠むにしても、「西北の嵐をさけて幕をはれ、我が敷島の櫻見る人」といふ様な調子となつてをる。

我々が考へ樣として居つた吉田松陰の思想なども、兎に角、かういふ村田淸風の如き人物を先輩として長州藩に生れ、さういふ尊王攘夷的雰圍氣の中に育つた人物だけに、少くも或る時代の間は可なりに強き排外傾向を帶びてゐたものの樣である。

國の禁制を侵して下田踏海の擧にまで出た程の人間であるから、もしあの時、首尾よく米艦に便乘することを許されてアメリカに渡つてゐたとしたら、或ひはまた然らずとも三十歳などで刑死することとなく長く維新變革の後まで生き長らへて、直接國の大政に參與してゐたら、果して最後までさういふ傾向をば保持したかどうか、多少疑問とす可きではあるが、然し彼れが天保元年の生れで日清戰爭の時には六十五六才、日露戰爭の時には既に七十五六歳になつて居た筈の人間であることを思へば、恐らく德富蘇峰氏などゝも云はれてをる如く、生涯、帝國主義者として終始し、いはゞ大將乃木に公山縣の政治的智能だけを加へたといふ樣な意味の元動となつて世を終つたのではあるまいかなどゝ考へられぬわけでもない。

恰かも、神信心に凝り固りたる老婆が神棚にお札を貼り列ぶるが如く、部屋の壁一面に松陰などの書きものゝ木版刷り等を貼りつけた書齋の中に筆者が昔、入つてゐた時、今も朝鮮に行つてをる叔父が或る時やつて來て「お前は吉田松陰が好きなのか？　松陰もいゝが、然しあゝ云ふ連中はみな日本だけで偉かつた人間で、まだ世界的い大きさは少しも具備しておらなかつたのだから、あゝ云ふ人物だけに頭から心醉してしまつてはならぬ」と云ふ樣な意味のことを告げ、其の當時の筆者を一方ならず憤慨させたことがあつたが、今にして思へば、其の叔父の言葉にも確かに幾分の眞理はあるらしく、後に到つて、自分の腹を立てたことを心の中で後悔したことであつた。

二月の本誌に掲げたる拙稿の中に於て筆者は、全く自分の柄になきことではあるが、我が國に於ける自由民權思想の沿革といふことにも論及し、其の第一〇〇頁以下に於て、大體次ぎの樣なことを述べた。

「筆者に云はせるならば、此當時（即ち明治二十年山縣内相により保安條令の發布されたる前後より、二十五年の第二回總選擧に至る頃）の野黨、民黨なるものは、たとひ其れに參加してゐた個々の人々の動機目的は何であつたとしても、之れ即ち王政復古黨の意味を持つてゐたものであり、政府や官僚といふのは德川幕府に代つて現はれた薩長幕府の別名であり、さうして猛烈なる此れ等の選擧戰や、議場に於ける論爭は即ち維新革命戰の續きだつたのである（同稿四八頁參照）。然らば其の革命戰の結果は如何に片付いたかといへば、其れは筆者の見る所に從へば、大體、日清戰役の開始に際して開かれた第六の議會以來休戰期に入つて、さうして約三十年後の大正十一年の今日にまで到つてをるのである。自由民權の運動が鉾を收めて休戰したる原因の一部は戰士の内に直接、政府の懷柔策に動かされて變節したものゝ出たことにもよるだらうけれども、然し其の最も大なる原因は、實に國家に對して國外から斷えざる武力的脅威があつたことゝ、國内に工業が勃興して來るに從つて、漸次に資本主義が盛んになつて來たこととの爲であつた。實際今日になつてこそ、國際間の關係にも、正義である

とか人道であるとか云ふ言葉をきく樣なもの〻、我が國が支那と戰つた其の明治二十七八年頃の世界といふものは、實に弱肉强食の活舞臺だつたのであり、然かも一方に於て我々の腦裡はまだ「鎭遠」「定遠」といふ名稱すらも、ほんとうに「對抗し得る」といふ心强さを以ては、聞き得なかつた程の貧弱なる文明國、非工業國に住んでゐたわけであつたから、たとひ『自由平等』といふことは心に忘れなかつたまでも、やはり『富國强兵』といふ感じはだうしても强ならざるを得なかつた。幸にして戰ひは勝ち、支那の屬國ではないと云ふ事をハッキリ世界に示し得はしたもの〻、今後は直ちに例の三國干涉が來て全國民の敵愾心を極端にまで强めたわけであつたから、其れから後の所謂「臥薪嘗膽」の十年間には、まう世間は自由民權どころの騷ぎではなく、實に國民の大部分を擧げて『官僚樣』『軍閥樣』とも云ひ度き樣な氣持となつて生きてゐたのであつた。自分乍らも外と思はる〻までの大勝利を得、一躍して、一等國の班に入つたとか云ふこと〻なつては、一方ではロシヤの復讎戰などと云ふ處もあり、また他方では國民自身の帝國主義的野心も强まり、自然、民黨と官僚藩閥政府との妥協が何等怪しまる〻事もなく國民から默過される樣な事情になつて來たのであたつが、其れと同時に、國內に於ける工業の發達や、一般に商業の隆盛になつた事などによつて次第に確立されたる資本主義はまう其の頃に至つては政黨なるもの〻本質をも全く變化せしむるに至り、たとひ名のみは民黨であつたにしたところが、其れは只單に政府黨なる意味をあらはすに過ぎす、議員なる者の大半は自ら資本家であるか、乃至は資本家の代辯人であるといふことになり終つて、彼れ等が一般國民の代表者として、明治二十五六年までに於けるが如く、（たとひ本心は如何であつたにもせよ、兎も角も、曲りなりにも）自由民權といふことを絕叫して、官僚藩閥の徒に肉迫するといふ如き擧行は、全然まう持つことが出來なくなつたのである。

之れは彼のドイツが一八六〇年代などには國を擧げて自由、平和の思想に共鳴して居り乍ら、やはり地球上に存在した民族不平等の事實と周圍の國々の軍國主義とに影響されずに居ることは出來ず、一とたびビスマルクが現れて所謂『鐵と血と』の國是方針を高唱し、內には高壓專制的手段を講じ、外には軍閥　侵略主義を發揮して戰捷の榮冠をもたらすや、忽ち國を擧げて一つの武斷的侵略國と化し終はり、"Deutschland über Alles" を絕叫して、世界征服を夢みるに至つた事情なども幾らか似て居るし（昨年十月の本誌拙稿四一乃至四八頁参照）、或ひはまた、最近ロシヤのボルシエヴィキ達が、はじめは極端なる平和主義を主張し、戰鬪卽時中止といふことを唱へて、故らに無抵抗退却までを敢てし乍ら、一とたび平和的手段は只單に周圍の侵略國をして益々其の野心を逞しうせしむるのみなるを悟るや、決然として起ち、一氣呵成に盛んなる赤軍を編制し、到る處に軍國主義を發揮するに至つた事情など〻も、似てをると云へば似てゐる所がある。」

斯う云ふ理由に基いて、筆者は我が日本が軍國化せられ、さうしてまた工業主義、資本主義の發達を見たといふことに對し少くも日露戰爭終局の頃までは（たとひ理想論を以て評するならば何れも好ましいことではなかつたに相違ないが）實際に已むを得ざりし事情のあつたことをば認め、且つまた充分に其の功績をも（勿論、他方では罪過の多かつたことをも考へねばでは

ないが）、心から高く評價し、且つ感謝せむとする者であつて、罪過ありしが故に、いのちを投げ出して成し遂げられたる業蹟をすらも全く忘却せむとし、惡しきことは皆悉く所謂『軍閥』と資本家との罪に歸せしめむと努むる一部の人々の運動には決して無條件に與すること能はざる者である。筆者は決して『力は全てなり』といふことに同意するわけでもなく、また『目的は如何なる手段をも淨化するなど〻考へるわけでもない。然し乍ら、よく心を落ち付けて靜かに國の既往を顧みて見る時、さうして例へばあの日露戰爭の時、軍隊及び一般國民の精神的素質だけはあのまゝであつたとして、只、機械による所の軍備と戰鬪力、其れを後援する所の國の工業力や、富の力……等にもつと不足なる所が多かつたと假定し、さうして其の爲めに殘念乍らあの時、日本が戰敗の憂き目を見たと假定して見る時、我々は、少くもあの時代までは我が國の軍國化、工業資本主義化が實に緊急なる必要に迫られてゐたものであることをどうしても否むことが出來ぬのである。否、さういふ見地から冷靜に考へあの戰ひの結果から判斷して見る時、我々は寧ろ、あの當時日本の戰鬪力が何故もつと強大になつて居らなかつたのであるかを憾み、さうしてまた、國民も何故もつと更らに〳〵強い敵愾心を抱いてより徹底的に、よりネバリ強く戰はなかつたかと云ふことを却つて悲しむ者である。

日露戰爭當時のロシヤの國内の事情に就ては、昨年夏の本誌定期增刊に掲げた拙稿『ロシヤの都市とロシヤの田園』の中にも多少詳く記して置いた。要するに我々は、ロシヤに於けるインテリゲンツイアの殆ど全體が最初からしてあの戰爭に氣乘りせず、いよ〳〵開戰となりさうして露軍の成績の意外にも惡きことを知るに至るや、今度は却つて其の敗戰を利用して日頃より己れ等が國の害虫として憾み骨髓にまで徹してしてゐたる官僚軍閥の徒を除かむとして寧ろ日本に內應するの態度を取り、終ひに工場勞働者、兵卒及び農民を煽動して一九〇五年の革命を勃發せしむるに及んで、纔かに持久戰に入るの災厄を免れて戰捷を全うすることが出來たのであつて、もしも斯かる事情があちらの方になかつたとしたならば、如何に天祐は多からうともたとひ敗戰はせぬまでもが、南滿及朝鮮などを手に入れ樣と云ふロシヤ帝國主義者の素志を阻むことが果して日本に出來たかだうか、大なる疑問としなければならない。Rohrbach といふのはドイツで名高い植民政策の教授であつて、殊に小亞細亞及びロシヤの事情に精通した人ださうであるが、此の大戰中にも既に一九一五年に『ロシヤと我れら』("Russland und Wir.")といふ本を書いていろ〳〵とロシヤの國情を論じ、其の中の或

る場所に述べて云ふ樣、（今、其の原書を持たず、意味だけを自分のウロ覺えのまゝに書くのだから、文句には勿論間違ひがあるだらう。）「ロシヤと云ふ國には一つの大きな病氣がある。もし戰爭が長引いて、少しでも戰況のよくないことが續けば、必ず此の病氣が現れて來、――ロシヤには革命が勃發する。彼の日露戰爭の時にも實に其の通りであつた。さうして若しあのば、日本人がまう少しロシヤの内情によく精通して居つたなら時、さうして彼れ等がまう少し辛棒強く、まう只の一ケ月でも戰場に於てウン張ることを敢てなし得たならば、彼れ等は實際自分等の思ふ儘なる條件を指示して、もつと〳〵榮ある講和を決定し得たほどであらう。我等ドイツ人は決して日本人の踏みたる過ちを再びする樣なことがあつてはならない。云々。」

此の「過ちを踏んで。」ポーツマウスにあの講和條約を結んだことが、もしも時の當局者がロシヤの内情に通ずること不充分であつたが爲めであるとすれば、只殘念と云ふより外ないかも知れないが、今日樞要なる地位にある某々陸軍大將などがフインランド境あたりに戰爭中、ズツト潜んでゐて、其處でフインランドの獨立騒ぎを起させたり、或ひは今のレーニンあたりにも渡りをつけ、軍資金を供給して動亂を起させたりし、其の功によつて戰後特に高級な金鵄勳章までもらつたと云ふ事實なぞを考へるとさういふ方面には別に何等の抜かりもあつたわけではなく、然かも沙河の戰ひを終へたる頃にはまうこちら自身の方がへト〳〵に疲れて、もしまう一と合戰やれば、實際「七博士」などの要求通り或ひはバイカルまでも取れるかも知れぬなどと、假りに期待し得られた所で、まう、とても、再び準備を新にして戰ふだけの元氣はなくなつてゐた爲めであると見る方が正しい樣である。思へば實に、危いはなしであつた。出來たことか、出來なかつたことかはわからぬが、本來から云へば我々は日露戰爭などが起らぬ以前にもつと〳〵軍備を整へて置く可き筈であつたので、此の意味から云ふならば日露戰爭はたとひあちらから否應なしに掛けられた喧嘩であつたとは云へ、さうしてまた恐らく、對手の裏面に非常なる弱味があるといふことを參謀本部あたりでよく知り抜いてゐた結果、はじめて敢行したことではあらうけれども、やはり非常なる冒險だつたと云はぬわけには行かない。

『武』と云ふ字は元來『戈』と云ふ字と『止』といふ字とを組み合せたものであつて、未だ一指を動かさゞるに既に、戰鬪を豫防するの功德あり、一旦、已を得ずして起つに及べば、其れによつて立ちどころに鬪爭の禍因を退散せしめて、只單に己れと對手との間に於てのみならず、己れ等の周圍の人々の間にも平和の基礎を確立せしめ得る如きものを云ふのであるといふ樣

にきいた。山岡鐵舟といふ人は幕末に於ける劍客中の第一人者であつて、勿論、幾度びとなく生死の間に出沒した人であつたが、然し死に至るまで只の一度も劍によつて人を傷けたことはなかつた。要するに、善いとか惡いとか定まるのは之を用ゆる人の心一つによるのであつて、國民の全てを擧げて武を練り、兵器を調へたからと云つて其れが必ずしも平和の禍因となるわけでなく、寄り集つて相談の上、各々軍備を縮小させたからと云つて其れが直ちに平和の爲めに喜ぶ可きことであるとは限らぬ。武備を充實させた上でいつまでも無事太平が續けば、却つて寳の持ち腐れの樣に感ずるのが人間の心の弱點であつて、ともすれば武力を濫用して故らに亂を釀す惧れはあるが、さればと云つて、人の心が未だ今日の如き狀態である限り、眼に見ゆる表面のみの軍備を縮小して見たところが、其の效果は極めて疑はしいものゝ樣に思はれる。

此の稿の揭げらる可き號は、編輯者の方からの通告によれば『世界平和と人類愛。』――人間の本能より見たる平和と鬪爭、愛と憎しみの考察――なる特別表題の下に出さるゝものゝ由である。其の『平和』とか、『鬪爭』とか云ふことに關して、筆者が本稿に於て自己の疑點を述べて敎へを乞はむと欲する丘博士の御意見が如何なるものであるかは何れ後段に到つて參照する筈であるが、茲には先づ筆者の考への大綱を示さむが爲めに、既に昨年九、十兩月の本誌に揭げたる拙稿『ロシヤ全士をボルシエヴイキの天下たらしめた諸原因の歷史的考察』の中から次ぎの一段だけを引用させて頂くことゝする。（十月號、二九―三二頁參照）。

「上に述べたる如く一つの國家の内部のことは、大體、其の國家を立てゝをる所の民族自身の工夫や監督に委ねて、出來るだけ他からの干渉を避けることゝし、各民族は、自分等の歷史や國民性等を愼重に考慮した上、自分等一民族の間に於て、人間の獸性によつて起さるゝ諸々の不幸をば出來る丈完全に豫防し抑壓し得る樣な設備、制度の實現に努力することゝ定め、さうしていま假りに、今日此の地球上に於て、苟も一つの異民族として認められて居る多くの民族達が、各々其の主義を體して、非常なる努力を費した結果、實際、一種族、一民族の内部に於ては、今日普通見られる樣な階級的の憎惡の念なども消滅し、人の心と心との間に獸性の火花が飛び交はる事なども止んで、地上の到る處に、今よりも遙かに樂しく、人間の暖かみに滿ちた社會團體が現出し得た事と想像する。さうして然らば其の時に此の世界は全體としても極樂淨土の樣になるだらうかと自問して見るに、してまだ／＼簡單に、さう云うわけには行かない。此の世界の上にはまだ、我々人類が原人的の生活をして居た時以來の遺傳である所の他種族、他民族を極力排斥せうとする感情が可成りに强く漲つて居る。此の排外的の感情は、若し全ての民族の地上に於ける生存權が同一であり、彼等の受くる待遇が平等であつたならば、交通機關といふものが斯くの如く發達して來て居る二十世紀の今日、決していつまでも存

在し得可き性質のものではないのであるけれども、不幸にして此の地球上には、現在に於ける實際の價値や能力といふものと一致せぬ、異民族間の不合理なる不平等の事實が、恰かも彼の「一民族の內部に見られる、不自然なる階級制度の事實」と同じく今なほ我々の眼前に存在して居り、さうして、不幸にして不自然なる階級制度の維持されて行く限り、たとひ、一つ一つの種族や民族の內部に、如何程暖かへ柔かき、融和、協力が見られ、相互扶助の精神が横縱するに至るとも、人間の野獸性に基因する次の大慘禍から決して地球を免れしむることは出來ないのである。何となれば此の制度の維持は即ち異種族、異民族の間に發揮せらるゝ人間野獸性の是認であり、國際的良心、四海同胞的思想の上に依然として人間の獸性が覇權を持しつゝある事の證左であるから。

而して一種族、一民族なるものが其れ全體として外部に向ひ發現する人間の野獸性の威力的總量は、其一種族一民族の內部に不和があり、憎惡があり、爭鬪がある時よりも、其處に平和があり、親愛があり、一致協力の事實がある時、却つて遙かに大きく、且また辛辣であるといふことは、我等が歷史的經驗に基いて既によく熟知せる所である。東はシベリヤから中央アジヤにかけてのステツピの上に、家畜を逐ひつゝ互ひに部落的爭鬪を事として居つた間、蒙古民族の獸性たるや世界の民にとつて殆ど顧慮するに足らぬものであつたが、一度び成吉思汗の麾下に、彼等一大民族の融和團結を見るに至るや、彼等の獸性はアジヤの殆と全部を侵略したる後、なほ力餘つて終ひにヨーロツパの大部分にまでも及んだ（前篇六二頁以下參照）。また今度の世界大戰に先立つて、ドイツ帝國內に於ける文物制度が如何に他の國々に比して國家社會的に精化し整頓されて居たかは、皆よく人の知る所である。支那が今日の如く、日夜督軍間の內爭のみに耽つて居る間、其れは所謂「一老大國」たるに過ぎず、お愛想よくして然かも中々に拔目なき商人、低廉なる勞銀で必要とあらば幾らにても無數に傭入れ得る苦力、功みに賄賂を取つて私腹を肥し得る役人達、……と云ふ樣なものゝ集團であるといふ事以外に、世界の他の民族に對して、殆と何等の交渉をも持たぬのであるが、殊に近年になつて益々其の數を增して來た彼の國に於ける覺醒せる若き人々等が、他日其の志を遂げ、彼れ等の國の寄生虫たる現時の役人や軍人共を追ふて自ら天下を料理するとなり、さうして、少くも彼れ等の中の主なる者が、（前の革命に從事したる人物などゝは異ひ）一旦政權を握りたる後にも決して豹變などする事なく、書生時代に考へたる理想其のまゝの事を實現す可く努力するものと假定して、さて幾十年かの後に實際支那の再生が完成し、一つの文明的大共和國が東アヂアの大陸に出現したとすれば、人種不平等の事實がもし其の時までも存在する限り、其れは却つて世界の平和に對する一大恐惶であり、禍ひであるのだ。

此の大いなる矛盾、即ち全世界の「平和」の爲めには一つ一つの民族の內部に、平和には非ずして、憎惡、不信、爭鬪……等の狀態が續いた方が都合よく、各民族內部の親愛、協力、融合……などゝ云ふ事は却つて世界を戰亂に導くと云ふ一大矛盾は、どうしても今日我々が見る如き、異民族間に於ける、正當なる實力に相一致せぬ不平等と云ふ事が消滅し、地球の全表面がすべての人類の爲めに開放されて、彼れ等が銃劍によらず正當なる勤勞努力による所の自由競爭の舞臺、また對等なる人間の資格を以て互ひに相倚り相助け得る仕事場とされた後でなければ決して除くことが出來ない。此の一大禍根を其のまゝに生かして置く限り、たとひ千百の平和協會を設立して世界の隅々に運

るまで平和宣傳をやつて見たところが、また如何に寄り合つて會議を開き軍備縮小の申し合せをし、制艦…費等を削減して全部敎育の方に使はせて見たところが、其れ等の努力は秋草の枝や葉を切り拂つて土には肥しをかけて置く樣なもので一時は片がついた樣に思はれるかも知れぬが一度び春が來れば草はまた一齊に天をも衝く樣な勢ひで、延び出して來るに違ひないのである。最も大なる、人間獸性の産んだる、種々不平等の制度が固執されて居る間、世界に眞正なる平和といふものは來ることが出來ず、またほんとうの意味に於ける文明といふものの有り得ない。もし今日の所謂「不和」併びに「文明」なるものが萬一ほんとうの「平和」であり「文明」であるとして永遠に限りなく續けられて行くものとしたら、其れは卽ち我々人類の理想が既に自殺したことを證據立てるに過ぎない。

昨年七月二十九日、慶應の講堂で行つた「文明の再建」と題する講演の中に於て、ラッセルは先づ「文明とは一體何を意味するのであるか？」といふ問に自ら答へて、

「私の意味する文明とは、近代的進歩の物質的方面の事ではない。私が意味するものは其れ以上の或る物、卽ち人生の外面的設備よりも人の思想や感情の中に存在する　精神的、知識的な或る物のことである。私は藝術、科學、個人同士、團體同士の間の圓滿な關係、及び一切の人々に取つての、能ふ限り十分な、幸福な生活、といふ樣なものが　文明を構成する事柄だと考へるのである。」と云ひ（「改造」九月號より自由抄譯）提載

今日の物質的文明の弊害の方面を述べたる後、

「工業主義は實に世界を一變させた新しい力である。工業主義は實に世界を一變させた新しい力である。工業主義は害に對する無限の可能性を含蓄してゐる力ではあるが、其れが昔から二つの古い事柄と結合してゐる爲に、今では事實上、却つて無限の害惡を可能ならしめてゐるのである。そして私は、若し工業主義が吾々の召使となる可きであるならば、若し其れが人類の中のあらゆる良いものを增減する代りに人間の生活に奉仕すべきであるならば、吾々は全世界の大國民の間に於ける、私有財産と國民主義等を廢止することが絕對に必要であるといふことを、諸君に說得したいと思ふ。」と云つて一國内に於ける私有財産の廢止併びに階級打破といふ事と同時に彼れの所謂「國際的共産主義」といふ事を高唱し、

「其の國際的共産主義の社會に於ては、總ての人々が平等であり、世界の勞働の生産物が等しく分けられる爲めに、もはや競爭は存在しない。又其の社會に於ては世界の原料は國際的に管理せられ、各國民の間に必要に應じて割宛てられる、現在の害惡を生んだ競爭の精神は、正義の精神に依つて消されてしまうのである。過去から繼承した文明の中で吾々の總てが尊重してゐる所のものを保存することが出來る樣に現在の制度を變更する道は、唯だこれ一つあるのみである。」と說いてをる。

人類が終局に於て如何なる制度の社會を組織す可きか、といふ問題はしばらく之れを措き少くも人間の心理狀態が、まだ今日の如く濃厚に自己といふ色彩を帶びて居る時代に於て、直ちに絕對的なる共産制を普偏的に採用せしめむとする、性急なる態度は、ロシヤに於けるボルシエヴィキ中の理想家達が實際に行つて見て、はじめて其の末だ不可能なることを悟つた苦き經驗に鑑みても、切に終局の大成に心を希望する人々の取る可き賢き方法でないと筆者は信じてをる者であるが彼れラッセル氏が、「國際的共産主義」なる名の下に、力說して居る所

の、全ての人類に向つて、(其の民族及び國籍の異同を論ずる事なく)地球上の全ての門戸を開放し均等なる機會を與へるといふ主旨は、實に心ある人々の、みな、力を協せて實現に力を盡さねばならぬ緊急事項である。外部に於ける國際間の關係がさう云ふ風に變つて來たあとでなければ、如何程騒いで國內の事情だけを平和的の組織や制度を改造して見たところで、結局其れによつて生み出されて來るものは、やはり鳩ではなくて蛇である。其の適切なる實例を我々は矢張り今日のロシヤに見る。……後略」

日露戰爭なるものが起つたか起らなかつたか、乃至其れが愈々起りたる後に、勝利が日本に歸したかそれともロシヤに歸したかといふことは、其の後の世界の大勢、全人類の運命に對して持つた影響の大なること、決して「彼のクレオパトラの鼻がまう一分だけ高く、或ひは低く、ありしならば」といふ如き程度のものではない樣に思ふ。もしも蒙古民族の第十三世紀初頭に於けるヨーロッパ侵入を除外するならば、一九〇四―五年の彼の戰役に於て日本がロシヤに勝つたといふことは、實に白人が黄人の爲めに打ちのめされたる最初の實例であり、所謂『有色人種』が『白皙人種』に對して優者となり得ることを事實に於て示した古今未曾有の業蹟なのであつて、南北アメリカが發見せられて以來、濠洲が開拓せられて以來、而して大英國の領土に太陽の沈むことがなくなりし以來、斯くの如き事は未だ曾て只の一度もなかつたのである。もしも、「全ての動物及び植物は皆之れ我等人類に利用せられむが爲め神より造られ居るものなり」といふ人間の手前勝手なる迷信を打ち砕いたものがダーキン、ヴォーレスの進化論であつたとすれば、「全地球に白人の爲めに領有せらる可く、有色人種は全て我等に隷屬してのみ生存を許さる可き者なり」といふ白人の妄想をば打ち破つたものは、實に日露戰爭に於ける日本の勝利であつたと云つて差し支へないであらう。最初、新聞や雜誌の諷刺畫の中に於て、ロシヤをば荒熊に喩へ、日本をば小さき「geisha-girl」の姿に寫して我れに好意と聲援とを寄せたる他の白人の國々の如きも、戰の舞臺が意外に展開し行くを見るに從つて、たとひ一方に於ては種々なる自國本位の理由よりして、ロシヤの敗北し國力疲弊することを喜び且つ望みたる場合にも、恐らく他方に於ては、黄人國なる日本の次第に勢を得て勃興し來らむ事に對し少なからず內心に不安を感じて、決して以前ほど快く思はなかつたに違ひない。其れ等の事情は、別に口に言はず、筆にて記さずとも此の十數年來、我が國に對する歐米諸國の態度が如何に著しく變化して來たかと云ふことを考へて見れば、可成りによくわかるであらう。憎く思はれても、妬まれても、實際に何とも致し方はない、エポック、メーキングのことをやり遂げ、さうして

到る處で從來の優越者に對して恐畏の種を播いたのであるから。

斯くて筆者は、『有色人種』の名に於て、また上記六號活字の論旨によれる『世界平和』、『人類共存』、『四海みな同胞』、……『差別を重んじての平等』主義の名に於て、日露戰役に於ける日本の勝利をば祝福する。其れは決して己れ自らが日本人であり、有色人であるからではない。たとひ自分があの當時ロシヤの人間として生れてゐたとしても、自分はやはり、彼の國に於ける筆者の親しき友人等が其の頃實際になせし如く、敵側なる日本の手に出來得るだけ多くの勝利あれかしと希ひ、或ひはまた積極的に、ロシヤ國民の福祉の爲めには百害あつて一利なき官僚軍閥の政府を倒す可く、革命の運動に馳せ參じたことであらう。もしもあの時ロシヤの戰敗なく日本の戰捷なかりしならば、全人類の少くも八割に當る人間は、「己れ等もまた同じく人間なり」との自覺をば永久に起すことなく、自由に大氣を息し天日に浴して各々分に應じたるだけの向上を遂げむなど云ふ意志や望みをば心に萠出さすことなく、永久に他の二割以下のもの丶足下に踏みにぢられ終つたであらう。之は何も、單に有色人種のみに就て言ふのではなく、同じ白人の間に於てもまた、例へはロシヤに於ける農民の如きも、彼の戰ひに於て日本の武力が、ロシヤの官僚政府に對し一大打擊を與へ得たればこそ、其れを導火線として勃發したる一九〇五年の革命を、經而して（一時、欺かる丶ことによつて鎭靜はしたが、當然、其の延長と見る可き）今次の大革命によつて兎にも角にも、完全に奴隸制度の鐵鎖からは解放せらる丶ことを得たのである。凡て物事は原因結果相關聯せること環の如くにして、はてしなく、今日地球上の到る處に著しく起り來つた『自由解放』の運動の如きも畢竟するに互ひに相共通せるものであるに違ひないのであるが、他の國の事は暫く言はず、只、ロシヤのみに就て考へて見ても、筆者を以て云はしむれば、其れは確かに、（ロシヤといふ一國としても、また人類社會としても、）進化の道程をば一段高く昇つたものと見るのが至當であつて、我等は目前の狀態の渾沌とし且つ悽慘なるを見聞することだけによつて、大局の判斷を誤つてはならない。

（ロシヤが今日の如く所謂「赤化」するに到りたる諸原因、並びにボルシエヴイキ統治下にある其の現狀をば筆者が如何に觀じつ丶あるかと云ふことは、昨年八月以來、本誌に揭げたる四つの拙稿によつて、不充分ながらも相當に述べ盡した樣に思ふので、今さら爰では別に其の事に說き及ぼさないけれども。

國家をば一つのオルガニズムと考へ、其の制度、組織の發達し、轉化し、變遷し行く有樣をば、昆虫其の他、種々なる部類

の動物の個體發生中に見らるゝ『變態』の現象と比較し、對照して考へて見ることは、其の際後者の方に於ける組織知胞學的變化を或程度の顯微鏡を用ゐて詳細に檢べれば檢べる程、相類似し平行して居る所が多いので、非常に興味深い問題ないであるが其れはまた他の機會に於て論ずるとして、兎に角、例へば芋蟲が羽化して蝶となり蛾とならむが爲め、或る時機に達したる時、一旦、蛹といふ如きわけのわからぬ姿に化したからと云つて、其の眼の前の事實だけを見て直ちに之れを退化なりと云ひ、墮落なりと云ひ、滅亡なりと嘆ずる必要は少しもないのである。蠶を養つた經驗のある人ならば恐らく誰でも氣付かれてゐることだらう、繭に入つてから後六日目頃の虫を取り出して、試みに其の體を切り開いて見ると、其の内部は只、味噌汁の如き泥濁せる液によつて充されて居るばかりで、幼虫時代に持つて居つた美事に發達した内臓諸器官等は既に痕跡もなきまでに破壞し盡され、さりとてまた、後に成虫となり蛾となつた時に持つ所の種々なる器官は、一見したるところ未だ其の面影も認められず、要するに其の時の動物の身體は泥濁せる液を以て滿されたる嚢の如きものに過ぎないで、淺はかなる人間の眼にはたゞ極まりなき渾沌、非常なる無秩序といふより外に映らぬのであるが、もし、虫をば周圍からつゝき殺すと云ふ樣なことをせず其のまゝ靜かに打ち捨てゝ置くならば、或る一定の時間が經過したる時、其の中から美しい蝶が自然に現はれ出て來るのである。所謂『完全變態』を行ふ昆虫などの個體發生中、斯かる時期に際して、極めて短時日の間に起る此の體内の大變化といふものは、極微なる一つの精子によりて父が『自己』といふものを子に傳へることが出來、一粒の種子が終に大木となつて花を開き實を結ぶが如き現象などゝ同じく、（其れ等の事情だけは今後、詳しく究めれば究める程、勿論、益々精密に知ることが出來るであらうけれども、其の根柢に働く所の力其のものに至つては）只々神秘とでも云ふの外はない樣に思はれる。

斯くの如き見地に立つて眼の前の事實を眺める時、筆者は、小にしては、ボルシエヴイキ統治下に於けるロシヤ一國の現狀をも、また大にしては『煩悶と自由』なる五字にとつて丘博士が表徴せられむとした所の「一大轉化期」にある全人類の現狀をも、共に、心配であるには違ひないが、決して或る一部の人々の如く、悲觀し落膽するには當らないと思ふのである。若しも事情が許すならば、新たなる體の組織構造をつくり出さむが爲めに、從來存在せしもの殆ど全部をば先づ豫め破壞し盡す事を必要とする『變態』の方式の如きは動物に取りても好ましき筈はなく、一時に急激なる變化を起さず、徐々に、然し乍ら

不斷に最も低き處より最も高き處までの發達を完成し得るならば勿論それに越したことはないのであるが、不幸にして世の中の事情は、いつでもさう理想通りに行くものではなく、例へば人體を疾病より回復せしめんが爲めにも、時には内科的溫和なる方法を見限つて、外科的荒療治を必要とする場合も多い。決して故らに血を流し肉を削ることをば欲するのではないが、全體のいのちと將來との爲めには、悲しい哉、往々にして然かする事を避け得ないのである。

曾て、やはり自分の高等學校時代に、筆者は内村鑑三氏の書かれた『若し余をして外務大臣たらしめば』といふ一文を讀んだ。其の頃から既に同氏が經營して居られた「聖書の研究」といふ樣な雜誌の中に出て居たのであつたか、それともまた、外の著書の中に載せてあつたのだつたが、今少しも覺えてゐないが其れは確か、同氏が基督教徒としての立場と良心とから日露開戰に絕對的反對を唱へて、萬朝報社をも退かれた頃に書かれたものであつたらしく、前半は讀者に對し絕對的平和論者としての自分の信念を述べられたものであり、さうして後半は、「もし余をして外務大臣たらしめば」といふ前提の下に、鴨綠江上流の木材が如何に貴重なるにもせよ、また南滿及び朝鮮に對する優越權が、如何に望ましきものなるにもせよ、互ひに兵火に訴へて血を流し、殺し合ふといふことが、如何に嘆はしきことであるか！　さうして如何に日露兩國民の眞の幸福といふことは沒交涉なことであるか！と云ふことをば、基督教國たるロシヤの外務大臣に宛て諄々と陳べられたる手紙であり、且つまた「其の誠意が、もしも不幸にして顧みられなかつた時には」と云つて同じく、直接にロシヤの國民に「日本の一基督教徒から」として、「我れ等は協力して共に戰ひに反抗せざる可からず」といふことをば、赤心籠めて訴へられたる手紙であつた。此の頃出て居る『内村全集』でも搜してみたならば、確かな事がわかるであらうとは思ふのだが、今、其の機會を持たず、ウロ覺えのまゝを書いたのであるから、或ひは誤りを傳へることがないとも限らない。兎に角、此の文を讀んだ時、自分は内村先生の個性や精神が實に躍如として、遺憾なく此の一文の中に現れてゐるとは思つたが、然し其の述べて居られることの沒世間さ加減と、國を擧げてあれ程熱烈な好戰氣分になつてゐた際、假りにも、眞面目になつて、そんな手紙を書くつもりなどになられた沒常識さ、加減に對しては、實は少々馬鹿らしいとも感じたのであつた、然るに其の後、妙な運命で自分自身、ロシヤ及びロシヤ人なるものと特に親しき關係を結び、幾分精しく彼の國の事を知るに及んで、自分は意外にも、以前自分が沒常識なる企ての

如くに感じ、心私かに笑つた所の、内村先生の此の手紙が、其の實決して、笑ひごと所のはなしではないと云ふことを悟つたのだ。日露戰役の勃發當時、ロシヤに於ける一般國民が日本及び日本人なるものに就てどの樣に貧弱なる智識と概念より持つて居らなかつたか、また彼等がいよ〳〵開戰といふ事に對して如何に無關心なる態度をとつてゐたかとふ事などに關しては去年の夏、增刊號に幾分詳しく書いて置いたし（一二二頁以下參照）また其の時、あちらの政府とか外務大臣をしてをつた男などが如何に誠意に乏しき人間達であり、如何に國民をば欺いて日本に對する敵愾心を起すに努めたかなどゝ云ふ事も書いた。だから筆者は、たとひあの當時、假りに内村鑑三氏が日本の外務大臣であつてあの樣な手紙を向ふの外務大臣に送られたとしても、其れによつて日露の戰端が開かれずに濟んだものとはだうしても考へることが出來ないのであるが、然しもし、あの日露の國交が斷絕せむとしたる時に當つて、内村氏が、決して外務大臣などいふ肩書附でなく、只、裸一貫なる基督教徒として、（自分一人でゞも、或ひはまた他の同志と一緒にでも）、あゝ云ふ樣な赤心を披瀝した手紙をば適當なる方法によりはつきりとロシヤ國民に送達されることが出來たとしたら、其の効果は、開戰を避けしむるだけの力は素よりなかつたとしても、確かに幾分かでも戰鬪員の心に和らぎを與へて敵味方双方の死傷を少くし、ロシヤに於ては革命運動に一層の氣勢を添へ、而して平和の期を早むるに必ず役立つたであらうと云ふことを筆者は信ずる者である。

其れは兎も角もとし、筆者は既に前にも述べたるが如く、決して所謂『帝國主義者』としての主張からではなく、たゞ、上に掲げたる六號活字の論旨に基いて、少くも日露戰役の終りに到るまで、日本が武備を整へたることをば是認し賞讃し、其の事業に與つて功勞ありし人々に對しては、たとひ其等の人々に、幾多の過ちがあツた場合にも、なほ世界平和の名に於て衷心よりの深き感謝を捧げむとする者である。

恐らく一部の人々は、筆者の頭にある考へに、餘りにも矛盾の甚だしきことを指摘して其れをば非難さるゝことであらう。けれども筆者は其れでも一向にかまはない。若し其處に矛盾があるとすれば、實に其の矛盾こそは却つて人間の自然性に基いたものなのだとさへ思つてゐる。考へて見れば、まだ今日の人間の世は矛盾せることの集まりであつて、互ひに殺し合はむが爲めに多く生み、崩さむが爲に營々として築き、建てむが爲めに破壞し、與へむが爲めに奪ひ合ひ貪り合つてゐるので、其處に人生の悲哀もあるのだ。然し乍ら筆者は、さういふ矛盾が斷

えず繰り返されてゐる間に、其れ等矛盾の影はだん〲と淡らいで行き、其の色も褪せて行つて終ひには、生きむが爲めにのみ生み、建設せむが爲めにのみ建設し、而してもし「與ふる」と云ふことが必要なる場合には、も早や「奪ひ貪る」とてふことの不要となる樣な時機の來り得可き事を信じまた其の來ることの一日も早からむことを希ふ者である。

丘博士は『何處に矛盾ありや』と題する文の結論に於て、（同氏著『煩悶と自由』二五〇頁以下參照）

「然らば自然界に眞の矛盾が無いのに反し、人間の爲すことにのみ、斯樣な矛盾があるのは何故であるかと云ふに、我らの考へによれば、之は人間が今日已に進歩の下り坂にある故である。下り坂に在る動物には、上り坂の頃に發達した性質の殘りと、下り坂になつてから發達した性質とが同時に備はつてある故、其の爲すことには矛盾が無い譯には行かぬ。而して互に矛盾する働き、(例へば一方で、大砲や軍艦など人を殺す器械を盛に製造して居ると他方では敵の負傷兵までも親切に看護する設備に骨を折つて居る如きこと)は其の効果を打ち消し合ふ故、矛盾が多ければ多いほど、勢力が無駄になり能率が減ずる。されば生活に矛盾の多い生物は他と競爭する場合に勝つ見込みが少なく甚だしきに至れば敵が無くとも獨りで倒れるに至るやも知れぬ。一人の身體の內で各部の働きに矛盾があれば、其人は病人であり、一種族の生活の中に矛盾があれば、其の種族は退化の途に在るものと思はれる。盛になるには盛になるべき原因があり、衰へるには衰へるべき原因が有つて、此の規則に外れるものは決して無い樣であるが、衰へ亡ぶべき原因があると、其の其生物種族の生活には、次第に相矛盾する點が現はれ、矛盾が段々殖えて、遂には最早救ふべからざる狀態にまで達するのではなからうか。中生體の大きな蜥蜴類や第三期の大きな獸類なども、其の滅亡に近づいた頃の生活には、相矛盾する如き所行が定めて澤山に有つたことであらう。」

「以上の如くに考へると、同一生物の所行の中に眞の矛盾のあるのは榮枯盛衰の徑路の下り坂に向うた徵候とも見られる。前にも述べた通り、自然界に於ける矛盾と名づけられるものゝ中には、見る人の方で勝手に矛盾と定めただけで、實は矛盾でも何でも無いものが多いが、人間社會に於ける矛盾の方は、大抵は眞の矛盾である。即ち、其の事柄だけを見れば矛盾に相違ないが、更に、其の矛盾の生ずる原因まで考へを進めると實は、矛盾には必ず矛盾の起らざる可からざる理由の存することを發見する故、決して矛盾ではないとも論ぜられる、社會を造つて生活して居る人間の爲すことに、社會生活に適すること、社會生活に適せぬこととの矛盾があつて、此の矛盾の更らに激しく成り行くべき原因が、依然として存するものとすれば、人間の努力によつて、何所まで之を匡正することが出來るかは頗る疑問である。今日の人間は自然を征服し得たと云ふて大いに得意に成て居るが、自然に對しては實は甚だ微力なもので、特に人間自身の身體に關しても、社會生活に關しても、未だ曾て著しい改良を爲し得た例の無いことを思へば、人力によつて、人間生活に於ける矛盾を除き去ることは到底容易な業ではなからう。」

と云ふ樣に斷ぜられて居り、此の悲觀說は丘博士の樣な實に天才的にしてまた眞摯なる學者が、種々工夫を凝らし、心を苦

しめて、其の全生涯の間を、日夜、國家の爲めにも、社會の爲めにも、また學術界の爲めに、骨折らるゝ事に費されたる後、餘りにも其の結果の糠釘的にあつけなきに望みを失はれて、達せられた結論であるとして、勿論、筆者の如きも衷心よりの尊敬と同情とを拂ふものであるが、然し、一つの人生觀とし、人間觀として、筆者は博士の此の結論に同ずる事能ざる者である。

はじめて此の世に現れて以來、我等人類は少くも五十萬年の歴史を持つ。其の歴史の九分九厘以上は通常は『有史以前』"Prehistoric time"などと勝手な呼び方をされてゐるわけではあるが、其の人類歴史の全長に較ぶれば假りに其の內容に於て如何に豐富なりと云へ、三千年とか五千年とかの所謂『歴史』や『傳統』の如きは殆どまだ云ふにも足らぬ短日月たるに過ぎない。然るに既に其の短日月の間に於てすらも、人間の思想や行動の中から、矛盾して居り、不合理であると思はるることが、如何に多く改められ矯正せられて、別に難しき理窟などは云はず、今日普通一般文明人の平均的常識から判斷しただけでも、我れ等の祖先が昔し、抱いてをつた所の思想、正しいと信じて行ひゐたる道德、また今日蠻人の社會に見らるゝ、習慣や信仰などの間に、實に馬鹿らしさに堪へざる程のことが如何に數限りなくあることであるか!! また範圍をば過去の時代や未開の國々などに擴げず、今の世の所謂『文明國』だけに取つて考へても先覺者の頭腦によつて判ずれば、多數者が現に萬古不變の眞理であり道理であると確く信じて疑はざる所にも、習慣や惰性の爲めに支配せられ平氣で無意識的に行つてをる所にも、不合理であり、矛盾であり、無茶であり、出鱈目であることが片つ端から幾らでもあることに違ひない。さうして、其れ等少數の先覺者の頭にまで、幸にして、社會一般の多數者も追ひ付き得た時代には、また其の、以前には一歩進んでをつた頭の中にも、未だ含まれて居り殘つて居た所の不合理や迷信を、不合理であり迷信でありと感ずる樣な少數の人々が現れて來るに違ひない。

筆者はいま此の場に於て、丘博士の結論に對する反證の一つとして先づ同氏自身の『教育と迷信』と題する稿(同氏著『進化と人生』一九三―二一〇頁)と『觸らぬ神の祟り』と題する文(大正二年本誌新年號、及び同氏著『煩悶と自由』一八一―四三頁)を一度讀者諸氏の讀まれむことをお薦めし度く思ふ。其の前者の中に於て、同氏は記して曰く、

「歴史を見れば、多くの『眞理』なるものは初め異端の說として現はれ、暫時專ら行はれたる後、終には迷信として葬られるのが定例の如くであるから、今日の眞理も或ひは一時的の眞理かも知れぬが、これ

は止むを得ない。我等は時代相當の知識を標準として、迷信と見做すべきものを迷信として論ずるより外に途は無いのである。さて今日(明治四十四年の稿なり)我國の狀態を見ると、迷信と見做すべきものゝ行はれて居ることは極めて多い。これが卽ち我國に理科的精神の普及せぬ證據で、これを見ても理科教育を一層盛んにせねばならぬことが知れる。數日前の或る新聞に、或る地方の寺で和尙と小僧とが喧嘩して、小僧は鬱憤の餘り、刀を以て寺の本尊なる木製の佛像を切つた所が、佛像の眼に涙が出たとの噂が擴まつて、其のため日々數千人の參詣者があつて、寺は大繁昌であるとの記事があつたが、斯樣なことを信ずるに適した腦髓を有する人が我國には未だ中々多い。先年鶴見近在の御穴樣の繁昌したときには、參詣人を相手にする永久的建築の店家が五百軒も出來て、線香の煙りが遙かに隔つた所からもよく見えた。電車の中には占ひの廣告が竝んであり、每日の新聞紙上には九星運命の記事が掲げてある。何處の國でも全く迷信のない所は無いが二十世紀の一等國としては、我國は餘りに甚だしい樣に思ふ。斯樣な頭を持つた人間が大多數を占めて居る樣では、年々非常な速力で理科知識應用の進みつゝある他の一等國に敗けぬやうに競爭して行くことが果して出來るであらうか。」

「昔の迷信政治。今日の立憲政治國には決して無いことであるが、昔は隨分迷信に依つて民を治めやうとした所がある。主權者を神の代表者なりと信ぜしめ、主權者の意志は卽ち神の意志であるから絕對に服從すべきものであると敎へ、之に叛く者は神の代表者なる主權者に依つて嚴罰に處せらると云ふ仕組にして民を治めやうとしたが、之は治める側から見れば極めて都合の好い仕組で、もし完全に行はれさへすれば、何の困難もなく長く治めて行くことが出來る。また治められる側から見ても主權者が餘り無法な事をせず、民を愛憮して與れさへすれば喜んで長く治められ、泰平を謳歌して子々孫々無事を樂む事が出來るであらう。それ故、迷信に依つて民を治めると云ふ事は、其時だけの事を考へると、强ひて非難すべきものではなく、暫時なりとも、それに依つて國が治まり、民が安樂に暮せるならば、反つて賞讃すべき價があるかも知れぬが、世が進み隣國との交通も開け、人民の思想が廣く成つて來ると、何時までも昔の儘に迷信を保たして置くことが困難になり、治める側に立つ者は勢ひ、或は坊主を傭ひ入れたり、或は敎員に命令を下したりして、迷信の保存に力を盡さなければならぬ樣に立ち至る。斯くしてわざ／＼力を盡して迷信の保存を務めるやうになれば、自然の結果として、何事に對しても疑を起す如き傾向を防ぎ、人民の研究心を壓へることになるから理科的智識の發達は是非ともその爲に障害せられ、文明の進歩の極めて遲くなるは止むを得ない。世の中に國が一つより無い場合には單に國が治まり、民が幸福でありさへすれば善いのであるから、若し迷信に依つて此の目的が達せらるるならば、それで誠に結構であるが、地球上には澤山の國があつて、之が各々力を極めて互に劇しい競爭をして居る以上は、單に國内の平隱無事のみを目的として安心しては居られず、必ず他に敗けぬだけに進歩しなければならぬが、此の方面から考へると、迷信を以て民を治めると云ふ事には大なる害がある。」

爰に丘氏の述べられてをる所には筆者も一々同意であつて、此の論の實際的例證としての材料を讀者は、筆者の前稿、(本誌二月號掲載)「ロシヤの過去と現在とは我々に何を敎へるか?」の中にも可

成りに多く見出さるゝであらう。さうしてもしも只單に、一本調子なる斯樣な議論や、或ひは以下に拔き書きする「觸らぬ神の祟り」中の意見の如きもののみであるならば、筆者は、同意、不同意といふことは兎に角とし、決して丘博士の人生觀、人類未來觀に對し疑念を挿む者ではないのである。其の後者の中に於て博士は云はるゝ。

「自分は明治四十五年の本誌一月號に、『人類の征服に對する自然の復讐』と題して、人類が自然を征服し得たりとて、文明を勝ち誇つて居る間、自然は絶えず恐ろしい復讐をして居ることを述べたが、斯樣なことは單に物質的身體的の方面にのみ限られるものであらうか。精神的、思想的の方面にも、之と同樣なことが有るのでは無からうか。

假りに此所に一つの國があると想像して、其の國で最高の權力を握り得た少數の人等が、全國民に斯樣斯樣のことを信ぜしめるのが自分等のために都合が宜しいと考へたことを、有らゆる方法を用ひて、强制的に人民に信ぜしめ、少しでも之と異なつた考へを發表せんと試みる者があれば、直ちに之を刑に處して、其の思想を未發に防ぐことを務めたと假定したならば、其の國は如何なる狀態に陷り、將來如何に成り行くであらうか。兵權を有する者が兵力によつて壓さへ附ければ思想の發表を防ぐことは實に何でもない故、權力者の註文と異なる考へは無論全く現はれなくなり、たゞ强制的の信仰個條のみが全國内に隅々まで行き渡つて、一人の不信者も無きかの如き盛況を呈すべきは云ふまでもない、斯樣な有樣を見ると、恰も知識の進步、腦髓の發達に伴ふて、常に新なる思想を生ぜしめんとする自然の働きを、人爲によつて有効に防ぎ止め、全く自然を征服し得た如くに感ぜられ、權力者及び之に隸屬する手下の面々は、己が計畫の成就せるを悦び且つ誇るであらう、併しながら、自然は斯樣に征服せられても、誰おとなしく從ふのみで、決して之に對して復讐をせぬものであらうか。

以上假定した如きことは、素より今日の文明國に於ては決して有り得べからざることで、實際に於ても亦決して無い。併しながら、未だ文明の十分に進まなかつた時代には、斯樣なことは敢て珍しくはなかつた。特に三四百年前の耶蘇敎諸國には幾らでも例の有ることで、彼のガリレイが時の權力者の信仰個條と異なつた地動說を唱へたために、耶蘇敎の本山から非常なる迫害を受け、「それでも動く」と口の中で呟きながら地動說を撤回したと云ふ話のあるのも、僅かに其の一小例にぎぬ。」(一八—二〇頁)。

『觸らぬ神に祟り無し』と云ふ諺が昔から有るが、此の意味の文句が最も屢々應用せられたのは、恐らく權力者が暴威を以て或る言仰を强ひた國の思想界に於てであらう。斯樣な國では、强制信條に對して聊かでもの異存のあることを仄めかせば、忽ち禍が身に及ぶ故、心の中では各々自分の眞なりと信ずる所を信じながら、公には決して口へ出さぬ。されば權力者の指揮に從ふて、强制信條を傳へる僧侶、學者だけは、うるさく聲を發するが眞の思想家は沈默を守るの外に途は無い、發表を許された言論は、たゞ一種類に限られるから、思想界は極めて貧弱になつて、其の進步は全く止んで仕舞ふ。この事は、斯樣な時代の哲學や倫理學の狀況には著しく現はれて居る。卽ち哲學に於ても、根柢から自由に考へて、眞に眞理を探り求めんとすれば、時に權力者の選定した强制信條と矛盾する議論をも出さざるを得ぬ故、斯樣な時世に哲學で立つて行く利巧な學者等は、皆巧に人間の實際生活に直に觸

れる如き問題を避け、深遠なとか、玄幽なとか云ふ夢の如き理窟のみを微細に論じて居るか、さもなくば論理法を曲げたり誤つたりして、當時の強制信條と一致する樣な結論に達する別路への哲學系統を組み立てやうと努めた。倫理學の方では、此の事は更に甚だしく、少しでも強制信條と抵觸する議論は絶對に許されぬから、斯樣な時代の倫理學者は成る可く理論を避け實踐を重んずるといふ口實の下に、ひたすら強制信條を敷衍し註釋することにのみ力を盡した。されば哲學や倫理學に關して如何に多くの著述が出來、如何に厚い書物が印刷せられ製本せられても、何れも反古同樣のものばかりで、後世に遺るほどの價値あるものは、素より一冊なりとも現れる筈は無かつた。斯樣な時代にも、他の時代に於けると同じく、學者間には常に競爭や嫉妬が有つて、誰も他を追ひ越して、早く出世しやうと骨を折つたが、自由に考へることは全く禁ぜられてある故、其の努力は總べて、如何にすれば、當時の強制信條により手際よく一致する結論に達し得べきかと云ふ問題に向つて注がれ、此の技術の巧な學者ほど權力者から無論重く用ゐられたから、哲學でも倫理學でも、此の一方面のみには非常に發達して、殆ど一種の藝術と見做すべき程度に進んだが、之は思想の自由な所では到底見られぬことである。」(二一—二三頁)。

斯樣な國へ、他國から他の宗教を傳へ來つた時にも、また余程奇態な有樣が生じた。元來他國で起つた宗教は勿論此方の國の強制信條とは恐く一致する筈のものではない故、斯かる宗教を傳へる者は始めから大なる迫害を受け、權力者の御用を務める學者達からは、國家に有害なものとして盛に攻撃せられるので、如何に本國から補助せられても中々やつて行くことが六かしかつた。其の間に、內地人の利巧な傳道者は種々考案を廻らして、終には其國の強制信條と兩立の出來るやうに縫ひ直し、本國のものとは大分異なつた鵺的のものとして傳へたが、斯くては傳道者の口で說く所と、御經の文句に明記してあることとの間に矛盾が生じて結局餘り盛には成り得なかつた。

何れにしても一定の信仰を強ひて思想の自由を束縛する所では、哲學でも倫理でも、創作でも評論でも、極めて窮屈な範圍より一歩も外へ踏み出すことが出來ぬ故、全く進歩が止まつて仕舞ふ。祟りを恐れて人々が自己の思想を發表せねば、誰も特に罰を蒙る者が無い代りに何時まで經ても思想界が進歩せず、忽ちにして世の大勢に後れ、全國民が悉く自然の復讐を甘んじて受けねばならぬ時が來るのである。」(二四—二五頁)

「強制信條の多くは神と自分の國との間に一種特別の關係がある如くに說くを便利とする。即ち、神は自分らのみの神であつて、他國には之に類するものは無いとか、神の特別の恩惠を受ける者は自分の國民のみであるとか云ふて、自國を以て、總べての他國に優つたものと信ぜしめ、隨つて、強制信條の如きも、自國民のみは、其の精神を解し得るが、他國人には到底解し得ざるものであると教へ込み、之が即ち自分の國が他の國々に秀でる所以であるなどと己惚させる。之は權力者の選定した信仰箇條を普及せしめるに當つて、愚な人間の弱點を捕へる巧妙な策ではあるが、其ため國民は、他の國民からは不可思議な國民、解すべからざる國民として仲間以外のものと見做され、交際の上に非常な不利益を受けねばならぬ。子供の中から強制信條の下に教育せられた者は、自分らの特殊な精神狀態は到底他の國民等の了解し得べき所ではないと、教へられた通りに得意になつて居るが、民族の發展の上には之がどの位、大きな障害となるか知れぬ。何處の人間で

も己惚の無いものはないが、自分で最も優れたりと思ふて居るヨーロッパの諸國民は特に己惚れも烈しいから、互に他國民の文明の程度を測るには、自分が他國民を了解し得る程度を標準とし、了解の出來ぬ國民は、之を野蠻國と見做して盛に輕蔑する、彼の國は不思議な國なり、彼の國民の心理狀態は到底自分等の了解し得ざる所であると評するのは、即ち、彼の國民は野蠻である、到底自分等と伍すべきものではないと云ふのと同じ意味である。所で他國民には不可解なる信仰信條を國内に強制し普及せしめると、其の國民と他國民との間には思想の上に非常な距りが生じて、他國民は總べて其國を仲間以外のものと見做し、終には之を嫌い、其の發展を押さへ妨げやうと努めるに至る。斯様に成つては、其の國民の未來は頗る苦しいことに成らざるを得ない。

一體、何れの國民にも國自慢はあるが、子供の時から自分の國は特別の神様と特別の關係のある、他に比類なき國柄であると教へ込まれた國民は國自慢も其の極度に達して、他國人に自國の缺點を列擧せられ自己思想の幼稚なことを嘲られても、其の云ひ廻し方が婉曲であると、自國の長所を賞められて居る積りで喜んで居る。輕蔑せられながら尊敬せられて居ると思ふほどに己惚が強いと、先方と此方との間に意志が疎通する譯が無いから他國人も終には遠廻しに當て擦ることを止めて、直接法で明に短所を罵倒する様に成る。斯様に成つては外に向ふて民族の發展を圖ることは愈々六かしい。而して、其の源は何かと尋ねると、初めに常識と掛け離れた強制信條を國内に施したからである

（三五—三七頁）

筆者が何故に此の場に於ても、丘博士の原文を、斯くも念入りに引照する必要があるかは、後に至つてわかることゝ思ふ。上に於ても述べたるが如く、只、之だけの議論を議論として考ふるならば、「今日既に、確かに正しいと認め得らるる人間の智識や常識から判斷してすら、當然矛盾であり、不合理であり、馬鹿々々しくある所の事柄が、なほ如何に多く前時代からの遺物として、所謂一等國民、文明人達の間にも、廣く一般的に保存されて居るか」といふ筆者が上に記したる言葉の都合よき註釋として、一寸借用するといふ様な事以外に別に大した問題とするにも當らぬのであるが、之に反し、丘氏の述べられたる、如何なる論説をも、もし氏自身が『煩悶と自由』の『はしがき』中に記されて居る如く、『一篇毎に別々に書き綴つた爲に、たとひ、表題、内容ともに互ひに何等の連絡も無いやうに見えるものにしても、元來同一の頭腦から出たもので、基礎となる思想は何れも同一である故、同一の根本思想が折に觸れ機に臨み、たゞ姿を變へて現はれたものと考へてよい』とするならば、我々は幸か不幸か其の丘博士の根本思想其のものゝ中に大なる矛盾の含まれて居ることを認めないわけには行かない。

極めて不適當なる順序であるかも知れないが、其の事の議論に入るよりも前に、筆者は再び本稿のはじめ二頁の處にまで

立ち戻つて、一應丘氏と自分自身との其の後の私的關係のことに就ても少しく述べさせてもらつて置く必要がある樣に思ふ。本稿のはじめにも記したるが如く、中學で使はせられた同氏の動物學教科書に餘り感心してゐなかつた不遜なる少年の自分をば段々と感心させる樣にし、氏に對し敬意を持つ樣に到らしめたものは氏の『進化論講話』の樣な著書であり、さうして更らに欽仰するにまで到らしめたのは主として本誌の新年號等によつて發表せられた同氏の人生觀的諸論說を讀んでからのことであつたが、然し筆者は大正三年の春、本鄕の動物學教室を退學するまでは其れまでに東京動物學會の月次會といふ樣な時に度び〳〵顏だけは見てゐたもの〻同氏と親しく昵近となつて談しをする機會は只の一度も持たなかつた。隔週に一度開かれる『雜誌會』といふのがあつて、之れは大學構內の山上御殿のどこかの部屋で、動物學關係の專門家達が集つて、當番に當つた數人の人達が、何か最近に出た外國の雜誌や本の中から、各々自分が面白いと思つて讀んで來たものを紹介する會合なのであるが、然し其の當時、之に參加することを許されてゐたのは、教室の學生では三年と大學院の人達ばかりで、筆者の如き一年生や二年生は、隅の方に座つて聽くことさへ許されてゐなかつたわけであつたから、其處にいつでも出席せられて居つた丘氏ともやはり接近する機會を持ち得なかつたのである。けれども自分が愈々本鄕の大學を途中でやめて、ドイツ行きを決行することにきめた時、自分を子供の時から、まるで實のおやぢか何かの樣に親切にいつでも世話をしてゐて下さり、また其の時も『海外行き』斷行の一番熱心な主張者となつて下さつた石川(千代松)先生から、「丘さんも非常に贊成してをられた」といふ樣なことをきゝ、また、其の紹介を得たる後、はじめて高等師範の實驗室に丘先生をお訪ねして、親しく談し合ふ事が出來た時、自分の若い心は如何に喜びの爲めに躍つたことであつたらう。丘先生に自分がはじめて紹介されたのは、あの「獨和會」と云ふ會の席上であつて、その晩は丁度銀座のカフエー、ライヲンの階上で開かれたのであつたが、或ひはその時が日獨國交斷絕前最終の「獨和會」であつたかも知れぬなど〻思ふ。オストワルドといふ宣教師であり、同時に橫濱で" Deutsche Japan Post "(『獨和週報』)と云ふ新聞を經營してゐた人にも其の時石川先生が自分を紹介して下さつたのだつたが、其の人は實に親切に筆者のドイツ行きに就て世話をしてくれた。餘りにひどい餘談の樣に思はれるかも知れないが、實は自分は其の人のことなどをも、今其の當時のことを憶ひ出して見ると、どうしても書かずに居られぬわけがあるのだ。日英同盟の盟義とかによつて、日本が愈々獨墺

に對し戰端を開くに到るや、其のオストワルド氏は自分の新聞紙上で、隨分ひどいことまで書いて日本の攻撃をやり、「もしも昔、我が國がベルツの如き名醫を派遣して、專心、治療に從事せしめなかつたならば、現日本□□□の生命の如きも…………」といふ樣なことまで書いたので、多くの日本人が、口を極めて其の人格者であることを稱へてゐた樣な人物ではあつたが、終ひに當局者から國外へ退去を命ぜられた。筆者は其のことを當時ペトログラードで日本の新聞を受手して知つたわけであつたが、先頃きけば、氏は其の後間もなく、北京か何處かで死なれたとのことである。打ち見たる所、殺しても死にさうのない樣な頑丈造りの人であつた故、恐らくは、やはり精神上の苦痛の爲めに自然健康をもひどく害したのではないかなどゝも思はれるが果してさうであるか、どうだかは勿論何とも云ふことが出來ない。はじめての長い獨り旅だと云ふので、同氏が親切に紹介してくれた道伴れのJHといふ若い男とは、互ひに樂しく、無遠慮にやつて、一緒に旅行を續けたことであつたが、後に露都で同じ旅館に滯在してゐる間に國外から最近に入つて來たドイツ人だといふので其のまゝロシヤの官憲に引つぱられて、何年振りとかで故鄕の兩親に會ひに歸りつゝあつたのであつたが、再び遠くシベリヤのオーレンブルグの方に捕虜として送られて行つてしまつた。同じく道伴れになつたSといふ六十才近くの人は、當時筆者が勉強に行きつゝあつたマールブルグの大學を自分のおやぢが出たのだとか云つて、やはり露都の『ヨーロッパホテル』に投宿してゐた間特に、いろ〳〵と親切に世話をしてくれたのであつたが、イギリスが宣戰したといふ時になつても、思ひ切り惡くも、實はまだドイツ入りの望みを棄兼てゐた二十二才の筆者に、「まうかうなつた上は君の國も宣戰するといふことはわかり切つてゐるんだから、此の際無理してドイツに入るなどゝは實に途方もないことだ。」といつてその事をさとし、また失望してゐた筆者を慰めてもしてくれたがまた戲れに、銃劍で、筆者を突き殺す樣な身振りをして

「さあ、まう、あしたあたりからお互ひに仇敵だぞ、ウ、ウ、ウ」と大きな聲でうなつて見せたりしたあとで

「あゝ實に馬鹿々々しい事をおつぱじめたものぢやないか」

「ねえ君、そんなに喧嘩がし度いのなら、カイザーとか、ツアーとかキングとか云ふ連中ばかりが、御自分勝手にヒゲでも摑み合、互ひに鼻にでも喰ひ付いて、思ふ存分、取つ組み合つて見たらいゝ。何も何千萬人と云ふ人間、女子や小供にまで、敵愾心を煽り立てゝブルドッグの眞似や人殺しのきちがひ沙汰を習はせるには及ばないんだ」といふ樣なことを興奮して周圍の旅

客に遠慮し乍ら叫びもした。今、筆者が憶ひ出して書く此れ等の些細なるエピソードの内にも、人間の矛盾性、――其れは丘博士に言はせれば人類が既に下り坂にあり、滅亡の淵に向つて次第に進みつゝあると云ふ事實の證據であり徴候であるのだが此の筆者の心にはだうしても、其れとは正反對に、我々人間が今もなほ向上しつゝあり、今後も益々、進化を完成して行くといふ「月並み」の考へ方の證據とより考へられぬ事實――が現はれて居る様に思はれるのだ。

戰亂の爲めにドイツに入ることが出來ず、露都の大學に入つて勉強する様になつてから、筆者と丘博士とは、次第に心から打ち解けた友達になつて行つた。其れは只單に、丘博士が、我が國の動物學者中でロシヤ語に通じて居られる隨一人者であり自分が彼の地で親しくなつた友人の間にも、同じ部類の動物を專攻してをる關係などから、兼て丘氏と論文や手紙や、標本などの交換をしてゐた人々が若干あつて、時々傳言などを頼まれたからと云ふばかりではなく、やはり要するに、どことなく氣が合つたからだらうと思ふ。平生は極めて筆不精な男なのであるが、足掛け五年のロシヤ滯在中丘先生に宛てゝはそれ程に極端な御無沙汰もせず、丁度自分の原稿の様に、取り留めはないが、切りもなく長い、先生の所謂"Epistle"と稱せられたものを書いては先生に送り、其の中ではよく、先生の議論や人生觀とは一致せぬ、反對の議論や、自分の述懐をありのまゝに打ち明けて書きつけたものだつた。さうして先生の方からは活字の工合によつて、可成りに使ひ古されたものであることのわかるタイプライターで打たれたローマ字書きの手紙や（漢字と假名書きとを除く）其の外の國々の言葉で書かれた手紙をやはり何度となく受取つた。或る時、自分の出した其の"Epistle"に對する先生の返事の中には「私も亦、あなたと同じく、やはり一種の"Missbildung"（『畸形兒』『生れ損なひ』といふ意味だ）であるに相違はありませぬか、然し、私とあなたとは、たとひ同じgenusのMissbildungではあつても、恐らくSpeciesは異つてゐると思ひます。あなたは年若くして、大いに活躍せんとする種類に屬するし、私自身はもう年も取り、且つまた元來『無爲にして世より遁るゝに如かず』といふ様な種類に屬してゐるのです。だから、其の二人の、別種に屬するMissbildung達が、いくら談し合つて見たところが、恐らくは決して、お互ひにスツカリと心持ちを諒解し合ふ事は出來ないでせう。……云々」といふ様なことが書いてあつたが其れから一年かそこら經つて、大正七年の春、ボルシエヴイキの單獨講和の爲め在露大使館の引上げと同時に筆者も避難を餘儀なくされて歸朝

してから後といふものは、其の二人のMissbildung達は、年齡に父親と子供位の差はあり、且つまた別の種類に屬するものであるのかも知れないが、それにも拘らず、益々近しく、益々親しく、(筆者の方から云ふのは普通の習慣から云へば極めて禮を失して居る言葉なのであらうが)師弟と云ふよりも寧ろ友人として、兎に角いつも御世話になり、心配をかけてゐる。もしも先生が、筆者の奉職して居る東大、理學部の教授であつたら、(日本に歸朝後、晩蒔き乍ら、つい近頃になつて氣がついたことなのであるが)たとひ如何に尊敬す可き先輩であると思ひ、慕はしき先生であると思つたとしたところが、習慣と、周圍の人々の心の狀態の如何によつては、決して一本調子に、自分の本心の嚮くまゝに、親しい友達の樣な關係を持續することは出來ないかも知れないのだが、此のことの爲めには(若し筆者の自己本位に考へるならば)丘先生が此の三十年近き間日本に取つて猫に小判であり筆者の如き青二才にさへも「よく先生はあんな處に二十五年も默つて心棒されたものだ。自分などはとても二三年でも……」などゝ感ずる程までに貧弱な納屋の如き高師の動物學教室内に棄て置かれたといふことが幸となつて、他の國々の大學などに於けると同樣、年を忘れ、地位を忘れて、家族的に心措きなく交はることが出來るのだ。

家もまう三年半近く、互ひに二丁と距らぬ處に住んでゐる。無い暇を盜んで邪魔をしに行くことは度び〳〵出來ないまでも、例の動物學雜誌會で、本郷の方に來られた晩の歸りなどには、度び〳〵二人で、混み合ふ電車をば見限つて、小日向臺、まで歩いて來る。さういふ樣なことで、筆者には最近の四年間に、丘先生と、只單に直接に動物學に關係ある事柄ばかりに就てゞなく、凡ての世事人事に關しても、互ひに先生と考へを語り合ふ機會が可成りに多くあつた。筆者は自分と氣の合つた人に對しては饒舌であるから、何に就てゞも、自分が心で考へてゐるまゝの考へを、其のまゝ先生に述べる。先生の考へとは、はじめから反對とわかつてゐることでも、少しも言葉を婉曲にし樣などゝは試みないで、其のまゝに云ふが、先生は決して、こちらの意見に手きびしく反對される樣なことはない。頭から贊成せられるか、然らずんば、世の中の事實をいろ〳〵と指摘して、「斯樣斯樣のことのあるを見ると、然し中々覺束ない樣に私などには思はれる」といふやうな輕い注意を與へられるだけである。自分は時々、之れは先生がやはり、いつかロシヤにあてゝよこされた手紙の文句にあつた樣に、談して見たところで本來 Species が異つてはとてもお互ひにほんとうの諒解を持つことは不可能だから……と云ふ樣なつもりで居られる爲めかと

も疑つたのであるが、其の外の先生の行動に鑑みると、萬更らさうでもない様なのである。

例へば先生は早くから世界共通語採用の主張者であつて、若い時代に自分自身で一つの特殊なるシステムを考案せられたることすらあり、既に明治四十年頃の本誌にも、たしか「エスペラントに就て」といふ様な題で、一般に世界共通語なるものに關する自己の主張を述べられて居る。本來自身では『Ido』の方の會員となつて居られるのであるが、近頃は、「理想としては飽き足らぬ所があるが、實際問題の立場から見るならばやはり之が最も捷徑であるから」と云つて、漸次エスペラントの方にも熱心な後援者、宣傳者となつて、若い者共を勵ましてゐて下さるので、其の御盡力振りの眞摯にして掛値のないことは心先きばかりにて種を蒔くより外に殆ど何事をも爲し得ざる筆者の如きものを實に、慚愧に堪へさらしむるものがある。然るに、近來、我が國に於ても、エスペラント運動の俄かに勃興して來たことを聞して共に大いに喜んだ時、(今年の始め頃であつたか)先生は「然し、凡て何事にも熱し易く冷め易い國民のことだから、此の勢だつて一體、いつまで續くものやら、決して當てにはなりはしない。今迄にも何度も瞞された經驗のある私などには、何だか、エスペラントとか、ローマ字とか云ふものがたゞ單に好奇心に驅られた人達の間の流行でなく實際に此の國の中で有力な働きをするといふ様な時代は、殆ど永久に來ないものゝ様に思はれてならぬのです」と云ふ様な悲觀説をもらされたが、然し直ぐ其のあとから、「尤も私が永久と云ふのは、今から十五年か二十年の間のことを云ふのですけれども」と付け足れた――『靈魂の不滅』などゝ云ふことを、頭からまるで考へてをられぬ先生は、自分が死んでから後のことをも、また同様に殆ど計算に入れてをられぬ様子なのであるが、之などもまた、たとひ全ての意味に於て『靈魂の不滅』といふことを否定さるゝにしても、生物學者として、子孫を殘すことによつて肉體の永存し得ることを認めらるゝ以上、さうして一方に於て、自分の家庭にもエスペラント流の教育を實施されて今、一高と商大にをられる長男、次男兩君とも既に立派なるエスペランチストであり、其れより小さき令嬢に至るまで既にエス語にて南米あたりと手紙のやり取りをして居らるゝ事實のある以上、先生が、我が國に於けるエス語の將來に對して洩された上記の悲觀論は恰も人類の將來に對する其れと同じく、やはり一種の矛盾であると考へる。恐らく過去に於て(殊に維新の革命後、未だ根柢の落ち付かざる此の島國に於て)人間性の餘りにも醜惡であり冷酷であり、頼み効いなき事をば親しく經驗せられたる、絕望

斷念の言葉として、先生の悲觀論に耳を傾ける時、我々は、實際、同意同感に堪へぬのであるが、然し、其れは只單に現在の問題であつて、永劫の未來に對してまでも全然、望みを擲つてしまう必要は決してまだない様に思ふ。

筆者は或る時、動物學に關することで、或る一つの個人的計畫を述べて知友に相談したことがあつた。其の時、やはり、座に在られた丘先生は、其の計畫に對しては双手を擧げて賛成され、「是非ともさうあらねばならぬ」と斷言されたのではあつたが、然し「自分はまう、半分棺桶に足を入れた様な過去の人間であつて、既に今年はまう滿五十歳にも達し（大正八年五月一日のことであつた）社會に對し人間として一人前の御奉公は兎も角も濟ませたと思ふので、之からはまう何事にも關係せず、自分一人だけで靜かに世の中から隱れて住んでゐ度い（動物學なんぞと云ふものも實は世の中から自分の身を隱す洞窟の様なものに過ぎないのだと云ふ様な言葉は曾てロシヤにゐた頃筆者に下さつた先生の手紙の中にもあつた）、だから、だうか、自分などはまう死んだ人間であると思つて、全然當てにせず、計算に入れずに置き、だうか若い元氣のよい方々ばかりで大いにやつて頂き度いものだ」といふ様な答へを與へられ、「いのちの事などを云ふならば老人だとて、若いものだとて、一寸先きは闇なることに何等の變りはない、現に今年の冬の様にスペイン風でも流行して來たら……」などゝ云つて筆者の極力反駁するをきかるゝや「何分、自分は、富士山が見え、櫻の花が咲く場處には決して家を持つまいと決心して、年來その通り實行して來てゐる様な人間なのだから、今更らまう、旋毛を曲げまいなどゝしても時期既に晩いのだ」といふ様な述懷もせられた。然しさういふ言葉にも拘らず、其の實、先生は此の世に實に稀に見得る程、素直なる性質の人なのである。さう云ふ様に强硬なる態度で筆者などの懇願を峻拒せられて置きながら、其れから一日か二日後の朝、まだ、寢坊なる筆者などが起き出でぬ頃に、わざ／＼自分の方から訪ねて來られて、「先日はあんな御返事をしたけれども、自分も其の後いろ／＼と考へて見た結果、もしも若い方々が、さういふ心持ちで居られるならば、やはり自分をも其の仕事に參加させてもらひ度く思ふ、何も出來まいけれども、出來るだけのことは自分もやるつもりであるから。實は只其れだけのことを一言、お斷りに來たわけです」と云つて歸られた様な簡單さなのである。さういふ事があつてから、其の時考へ且つ計畫した仕事がまだ緒にもついてをらぬ間に、早くも既に三年の月日が過ぎ、其の頃、志を同じくした若い人達も半は散り去つて、筆者は只、先生に對し、其のことを云ひ出し

て餘計な心配をかけた責任に對し内心、實に濟まなく思つてゐるわけであるが。然し一方に於てはまた頼もしき新たなる「Ideal」の數も可成りに增加して居る次第であり、もし一度び其の機が熟し、また筆者の生活にも其の內に一轉機を劃することが出來たならば、必ずや其の仕事も實行の運びに達することを信じ、さうして、愈々さういふ場合になれば、丘先生からは何時でも必要なだけの御助力を受け得ることを筆者は少しも疑はぬである。

平生、『無爲』を口にせられて居るが、丘博士は決して無爲の人ではない。もしも實際に眞面目なる計畫であると考へられるならば、先生程、熱心に同情し、力を添へて下さる人は滅多に世の中にあるものではない。我々が省みて、自分の動機を眞劍なりと信じ得る限り、我々は如何なることをしても、先生からの快き助力を期待することが出來る。現に、もしも先生が、自分の知つて居る樣なあの丘先生でなかつたならば如何な此の筆者だとても、世の中の『禮儀』といふことを無視し、何等の豫告をもすることなく、斯くの如き稿を公にする程の亂暴は恐らく敢てしないであらう。此の事は何も只、『無爲』といふ一事のみには限らず、凡そ先生の實際と言論との間には、斯くの如き意味に於ての不一致が到る處にある樣に見える。談しにきく二―

チェのことなどでも、或ひは斯う云ふ事の極端に現れた場合なのではないかとさへ思ふ。先生の書かれたものだけを讀んで想像すれば、徹頭徹尾、「二匹の狼が牙を鳴して羊の屍體を爭つてゐる」といふ樣な弱肉强食の圖を旗印とし、人生の全てに處して行かうとする人なるかの如くに感ぜられるが然し一旦親しく先生の實生活に接する時、我々は直に、先生が家庭に於てもまた社會に於ても、私人としてもまた公人としても、全然、其の想像とは正反對なる、實に溫厚なる人物であることを認めないわけに行かないのである。一言を以て評すれば、先生は自分の議論の中に生存競爭の一面たる『弱肉强食』の血腥き圖をば故さらに歷々と人の眼前に畫き出し、また『人類滅亡』と云ふ如き悲しき終末の場面をも明かに揭げ、其れによつて却つて、他の一面たる『相互扶助』『協力共存』といふことをば、社會的動物なる人類の間により完全に實現させ度い、直ちに全人類にまでと云ふことが出來なくとも、せめて一國を形造る一國民の間に於てなりと出來るだけ完成させ度いと云ふ努力を試みられて居ること、恰も、彼の小乘の佛教に於て、忌はしく怖ろしき地獄の樣を畫き出し說き聽かせて、勸善懲惡の方便としたる如きものではなからうかと云ふ樣にさへ思はれる。斯くの如く見るが故に（其れは或ひは筆者が勝手極まる解釋の付け方であるかも知れ

ないが）多少なりと親しく丘先生の實生活を親ひ知れる筆者自身に取つては、たとひ、心の中に、先生の根本思想に關し、なほ未だ腑に落ちぬ所があつたとした所が、何もわざ〳〵公然と筆を執つて、其れに對し質問の矢を放つ様な行動には少しも出る必要がないのであるが、只筆者の一つ惧るゝ所は、先生の文筆が餘りに鮮かにして人を動かす力強きが故に、方便としての藥の效が多きに過ぎて、却つて思はぬ副作用を起す様なことはないかと云ふことである。

今日では同じく動物學と云つても、只單に各種の動物の形態をば記載して行くと云ふ様な昔の博物學的方面には餘り興味を有せず、丘先生自身が『誤解せられたる生物學』（『進化と人生』二一一―二二四頁）の一文によつて世人に紹介して居らるゝ如き眞の意味に於ける『生物學』の勉强を志す若き人々も可成りに多く、其れ等の若き動物學者等は自然、丘博士の人類觀的著述に對してもみな特殊の興味を持て居るわけであるが、其れを讀んで興奮する程度に於ては、曾て筆者が高等學校時代にはじめて先生の『人類の將來』等を讀んだ時と全く同じである場合にも、既に時勢の變移は其處にまでも及んで來て居るのか、其の時筆者の若い心が只まう譯もなく魅せられてしまつたとは異ひ今日のそれ等の人々は大體に於て博士の所論に對して疑問をさし挿み、乃至は世界思想、人類愛の立場から却つて憤慨の念をさへも抱いて居る様である。

筆者が此の度び此の稿に筆を執らむとした動機原因は主として二つある。一には、此れ等の若き友人等のすゝめに從つたのでもあるが、然し、其れは決して、其れ等の人々の若き心が發する反對意見に合槌を打つ爲めではなく、寧ろ、幸にして自分が年來、丘博士の友情に浴し、其の私的實際生活をも幾分知つて居る關係上、或ひは「贔負の引き倒し」なのかも知れないが、たとひ表面上、先生の言はれることが如何に軍國的色彩を帶びて居様とも、また例へばエスペラトンなるものをも、飛行機、無線電信、潜水艇……等と同じく、只、他の國及び民族に打ち勝ち、或ひは打ち負されぬ爲めの武器のつもりで採用することを考へつゝある様に見えるとしても、其れもまた畢竟するに、地上になる可く合理的、理想的なる人類社會がなる可く速かに現出し得る様に（たとひ其の爲めの一時的方便として武力を用ゆることを是認されるまで）と云ふ眞劍なる希望から出たことなのであつて、結局のところ、先生は眞の意味に於けるエスペラント主義といふことにも心から共鳴を感じ勿論一方に於て、

"Forte staras muroj de miljaroj
Inter la popoloj dividitaj,"

といふ事を認められはするが、然しまた其れと同時にみなと一緒に聲を合はせて

"Sed dissaltos la obstinaj baroj,
Per la sankta amo disbatitaj."

といふ句をも高唱し、力を協せて其の實現の爲めに努めて下さることの出來る人であることを若き友人達の前に明かにし樣と試みたのであり、また二つには、一方に於て先生自身が殆ど迷信であり妄想であるとまで論じて居らるゝ所の、(ほんとうの意味に於てゞはなく、低級なる)所謂『國粹保存主義』や、『武』といふ字の意味を履きちがへた所謂『武斷主義』などと、稍ともすれば、香しからぬ雜種を極めて容易に作り易い惧れのある、先生の言論に對して、決して其の先生の言論それ自身を攻擊するなどといふ目的からではなく、只、其の交配を出來るだけ妨げ度いといふ主意を以て、幾分、自分の思ふ所を述べ樣としたのである。

別に出版業者が廣告文の中に用ゆる讃辭を借りて來るまでもなく、實際、丘博士の人類觀的言論は今日の思想界に於ける一異彩であらう。其の內、數篇のものは既に英獨の言葉にも譯されて海外にも紹介されて居り、また、今年が、博士の東京高師教授となられてから丁度滿二十五年に當るといふので、博士によつて育てられたる同學者の一人、京大のK助教授は、門下生として其の報恩の念と祝意の情との萬分一をも表はさむが爲めと博士が論文集、『煩悶と自由』とを出されるに當つて其の卷末に追加として新たに執筆された(大正九年九月)『現代文明の批評』と題する一篇の英譯出版をば目下計畫して居られるとかきいた。要するに博士の筆になるものは、其の想も練れ、立論の秩序も整然たる事、實に論文として模範的とも稱す可く殊に"a priori"的机上の推理など云ふものは塵ほども交へず、一步々々一々嚴密なる實驗によつて、其の事實なることを確めたる正味正銘の眞理であると前置きして、實驗理學者以外の全ての人々をば、先づ高飛車的に畏れ入らせて置き、然る後、實に輕妙なる筆致を以て、極めて該博なる智識をば縱橫無盡に引き出し巧みなる比喩法を用ゐ、其れから其れへと論を進めて行かれる有樣は實に天下一品とも稱す可きものであるから、其れ等の論文集等が、(廣き讀者階級に對しては、少しく程度の難に過ぐる爲めか)たとひ今までにはまだ案外に多く讀まれて居らぬにしても、今後、月日の經つと共に、益々廣く、人々の間に讀まるる樣になり、さうして、其の結果は自然、博士の思想の直接間接に世の中に與へる影響といふものも、益々大きく、著しくなつて行くことであらう。

筆者は昨年の十月一日、丁度出されたばかりの『進化と人生』の增補第四版と、同じ年の二月に出された『煩悶と自由』とを、各々一冊づゝ、先生から贈られた。學校から家に歸つてみたら机の上に載せられてあつて、其の表紙の裏にはエスペラントで《Al s-ro Ogo, kun koraj salutoj de la skribisto》といふ文句が、先生一流の規帳面なる文字で三行に書かれてゐた。前の論文集の方は、卷末に附けられた三つの追加を除けば明治三十五年から四十四年に至る十ケ年の間になつた二十篇のものを含み、また後の方のものには、同じく只一つのものを除けば四十五年から大正九年に至る間にものされた十九篇のものを含んだものである。筆者は前にも記したる如く、昔、本誌の新年號誌上などで、博士の論説の若干のものを耽讀したことはあつたが、斯樣に都合よく系統を立てゝ前後二十ケ年に亘る間の、博士の思想的産物を味ひ得るの機會は未だ曾て持たなかつたので、其の後、今年の二三月に至る頃までに、或ひは電車の中で、或ひは寢床の中で、と云ふ樣な不規則にして、且つまた著者に對し幾分(常識的に云へば)失禮な讀み方であつたかも知れないが、兎に角、一二度は全てに亘つて眼を通した。

博士は其の『進化と人生』第四版のはしがきの中に於て、

「我らが今までに著した思想方面の書物は、最初から一冊づゝとして書き綴つた『進化論講話』と『生物學講話』と、及び、後に集めて一冊づゝとした『進化と人生』と『煩悶と自由』との四種だけである。今後は最早何も書かぬゆゑ、以上の四冊が我らの一生涯に著はした全部に當る。昔から、是非は棺を蓋うて定まると云うて、人の一生は死んだ後でなければ判斷を下し難いが、今後決して續篇も出なければ、增補せられることも無いと定まつた書物は最早過去の歴史に屬するものとして、終結的の批評を下されても少しも差支へはない。我らも今後は著者としてではなく、單に一人の傍觀者として此の書物の成り行きを眺めて居るつもりである。」

と言はれて居るが、筆者は念の爲め、上記四部作中の他の二つをも新たに繙き直して見たる以外、なほ、筆者を以て云はしむれば其れ等二冊のものと同じく博士の思想の重要なる産物であると云はねばならぬ、大正八年初版の『最新遺傳論』にも飛び讀み乍ら一通りは眼を通した。

『蟷螂の斧を以て龍車に向ふが如し』といふ諺もあるわけであるから、筆者は決して、丘博士が此等の五部作によつて築き上げられたる思想の大系統を、だうかうし樣など云ふ如き大それた意志を持つ者ではない。只、前記二つの主なる理由に基いて筆者は其れ等の五部作を通覽することによつて心に起した自己の感想や疑點を有りのまゝに記して見度いと思つたゞけに過ぎない。但し、それにしても、苟も、先生の書かれたものに關し

多少なりとも批評がましきことを言ふのであつてみれば、(さうして殊に、其れに對して、博士自身から、個人としてはだらか知らず、讀者と共に公には、何等の辯明をも期待出來ぬ事情であつてみれば)、勢ひ、精密なる上にも精密に注意を拂ひ、一々忠實に全五部作を通じたる原著者の意見を紹介したる上、はじめて其れに就ての自分の疑點なり、考へなりを附記す可きであつて、實は、筆者が最初の考へでは、もし事情が許すならば此の『はしがき』を終りたる後ち、さういふ方針によつて徹底的に『本論』の部に筆を執り、然る後ちに、簡單なる結論的部分を附して、此の稿を完結せしめ度き希望であつたのだが、兎に角、上記五冊の書を合算すれば殆ど三千頁にも近き大著であり、とてもさういふ餘裕は無いので、『はしがき』の部分は勿論之だけで切りを付けるとして、同時に、『本論』の部分をも此の度びは全然省略し、只、既に上に於て論ず可くして然かも未だ論じ遺したる若干の事柄と、また將來、もし機會を得ることもあらば其の時はじめて詳說す可き其の『本論』の內容目次とも見る可き諸點とを左に列記して、一と先づ此の稿の『結び』となす事にする。但し此の『結論』中には、此の稿の中に未だ論ぜられたことのない事柄も出て來るから、或ひは此等は凡て筆者自身の述懷をば羅列したものと考へられてもよい。

× × × × × × × × × ×

結論

一、

「總ての生物に通じたる性質は、他物を同化せずしては生きて居られぬといふことである。」斯くして生物は食物を攝取し、成長し、而して繁殖する。——『芽生』、『分裂』、『單爲生殖』などに依る繁殖は全て皆一種の成長たるに過ぎず、純粹に『自己』てふものゝみの增大であり延長である。

然し乍ら、少數の極めて下等なる部類のものは暫く除き、一般に其の他の生物にあつては、此等の成長の方法はいつまでも無限に續け得るものではない。既に、單一なる細胞より成る原虫の如きに於てすら、或る期間に亘り分裂生殖を續けたる後には、二つの個體が接合して互ひに核の一部を交換し、其れによつて更らに、生きむが爲めの新たなる活力を得るのであり、また高等植物中の竹の如きも、平素は地下莖のみによつて國の隅々まで限りもなく蔓り、繁殖することが出來るのであるが、數十年を一期として花を咲き果を結ぶと共に全國同時に枯れ果つ

ること人の知る所である。斯くて、形式に於てこそは實際に種々なる相違あれ、『有性生殖』なる現象は、藻類原虫類、の低きより、最高なる人類に至るまで全ての生物を通じて、其の生命の永續、種屬の保存の爲めには、必ず缺如し能はざる所のものである。

『有性生殖』の要は、互ひに相合して一つとなる可き二つの細胞(或ひは個體)が、自己の主要部分たる核質の一部を自ら棄て、然る後、相手の核質と互ひに融合する事實であつて、言葉を換へて云へば、己れの一部を犧牲とし、其の代りに他のものを取り入れるといふことになる。然し乍ら、此の場合、他のものを取り入れる事情は、食物を攝取して、己れの體に同化するとは全然其の趣を異にし、先づ豫め己れの細胞の魂とも云ふ可き核質の半を棄て去りたる後でなければ、相手の細胞の核を絶對に獲得することが出來ず、また一旦其れをば取り入れて、合一したる後は、其の相手の核質からの支配力をもまた否定するわけに行かないのだ。もし、飽くまでも『自己』といふ本位から考へるならば頗る殘念なことであつて、何處までも己れ獨りだけで他のものを併呑し、同化し、成長して、單爲的に繁殖するに越したことはないかも知れないが、遺憾乍ら、いつかは此の、己れの半を空しくする『有性生殖』の道程をも經ねば、活力が消滅して死ぬより外に途がないので、如何ともなし難い。而して、二つの細胞が接合し或ひは合一することによつて獲得する所の新たなる活力は、兩細胞の類縁が餘りに近くもなく、さりとてまた餘りに遠くもなき時に最も强大且つ優秀なのである。

二

二つの異なりたる種類の生物間に交配が行はれ、雜種の子孫を生ずる場合のことに就ては、既に上段十頁の部に說いた。さうして、或る人間の思想と、其れをば受け入れ或ひは受け入れぬ人々の心との關係は、決して、植物の種子と、其れをば育て、或ひは育て得ざる土壤との關係ではなくて、恰かも受精を起し或ひは起し得ざる雌雄兩性細胞間の關係の如きであるといふことをも說いた。

性細胞の核の内部に含まるゝ染色體の種類の異なるによつて更らにまた、其の染色體の間に所謂"Crossing-over"といふ如き現象の起ることによつて、全然同一なる父と母とより生れたる子供の間にも種々なる差異特質を生ずるが如く、人の思想はたとひ同一なる系統に屬する場合にも、個人々々によつて互ひに相異なる。此の意味に於て、丘博士が自らの思想の特徴をば「總べて其の獨創的なる點にある」と云はれることは正しいが

然し、もし他よりの精神を受け繼いでをる所は少しもないと稱へらるゝならば、それは全然當つて居らぬ。さうしてまた、所謂丘博士の思想の種子を受け入れて、其のまゝそれを、(少しも變化さすことなしに)育て得る沃土の樣な心の人間が(上段八頁參照)、一人だつて存在し得るものと思はれたら、それもやはり誤りである。博士の思想に全然興味を有せさる人の心には、恰かも蓮の花の中に松の花粉が舞ひ込んだといふ如く、何等の影響をも與へぬであらうが、苟も博士の思想の花粉によつて感興を起し得る人々の心には、(上段八頁に記したる如き種々なる種類程度の)受精作用を起して、其れ等の人々自身の思想を各々卵細胞としたる所の雜種を生ずる。故に一つの或る思想が一般社會に對し如何なる影響を及ぼすかといふ事は、全く、其れを受け入れる人々自身の思想狀態如何によつて定まるので如何に優秀なる素質に富んだ花粉を放散しても、相手次第で如何なる望ましからぬ結果を生まぬものとも限らぬ。もしも丘博士自身の言はるゝ如く、氏の思想の種子が沃地に落つれば氏の思想そのまゝの思想として大木の如く育ち、石の上に落ちたものは終に出芽せず、瘠地に落ちたものはやはり小さな丘式の思想として育つ、といふ樣なものであるならば全く何等の心配もないが、筆者の最も怖れるのは、前にも述べた如く、博士の一見『弱肉強食』を是認せらるゝ如き思想の精子が低級なる『國粹主義』思想の卵を受胎せしめて、方便としてゞはなく、目的としての軍國主義』を生みたる場合のことである。

三

如何なる生物でも、他物を食つて成長し、而して『單爲生殖』によつて繁殖しただけでは、永久に自己の生命を保持することが出來ず、或ひは保持することだけはなし得たとするも、更らに向上し活躍することが出來ぬと同樣に、一つの有機體である民族・國家なるものも、また其れ自身のみにてもし久しく排外、鎖國的狀態を續けてゐたとすれば、必ずや、沈滯或ひは衰亡の運命を免れることが出來ぬ

共に外よりの侵入者なる南からの『天孫』民族と恐らく朝鮮系統なる『出雲』民族とが、在來より土着しゐたる幾多の小民族を併せ、何時ともなく互ひに一つに混和融合して生じたる大和民族の母體は其れ自身としても既に賴もしきものなのであるが、後に至つて、更らに印度、支那、朝鮮よりして、佛教、儒教をはじめ、其の他の文化、制度、思想の精を受けて、其れと合體し旺盛なる發育を遂げたといふことは、我々日本民族に取つてまことに大なる幸福であつた。もし假りに、奈良朝以前に『國粹

保存」といふ樣な思想が盛んであつて、儒教を迎へ佛教を取り入れることなどを肯じなかつたとしたら、今日我々の持ち得たる「國粹」なるものは確かにもつと貧弱なものであつたに違ひない。思へば我か國に外から入り來つたもの丶中で、佛教ほど大なる感化影響を與へたるものはあるまじく、單に、或る時代に於て、歷代の天皇がみな剃髮して法體となられたといふ一事を考へたゞけでも、其の程度は察せられるのであるか、然し、たとひ國の全てを擧げて外來の文化、思想に心醉し耽溺する樣な場合にも、その現象たるや要するに一時的のものであつて、やはり其の國、其の民族在來の特性といふものは決して何時までも失はれるものでないといふことを、やはり我か國に於ける其の佛教の今日に到る變遷を見たゞけで我々は察し得るのである。動物や植物の交雜を行ふ時、外觀上父の特質が所謂優性(,,dominant")となつて現はれ、母の特徵が劣性(,,recessive")となつて現はれる場合もあるが、事實は母側の全ての特質も其の內部に潛在して居るのであつて、苟も有性生殖である限り、絕對に父と同じ子を作らうなど丶試みたつて出來るはなしではない。思想や、文化や、國民性などの交雜も、また全然同じ理屈である。

此の意味に於て、維新革命時代に於ける『大和魂』なるものが、例へば、儒教五分、神道三分、佛教二分位の割合より成る思想の雜種であつたからと云つて、それは決して日本の恥でも何でもない。勿論、思想のことであるから、個人々々によつて差異のあるのは當然であつて、前に話題に上した吉田松陰が、辭世の中に「留め置かまし」といつた大和魂の如きは恐らく神道五分、儒教四分、佛教一分位なるまだ純東洋的のものであつたらうが、佐久間象山の魂の方は、「予年二十以後。乃知匹夫有繫一國。三十以後。乃知有繫天下。四十以後。乃知有繫五世界。」など丶云ふ樣なことを云つてゐるのを見れば、既に幾分今日の世界思想をも含んでをつたものと認めてよかろう。

思想は時々、外より適當なるものを取り入れて、移り且つ變ず可きである。もし之れが如何なるものとも合し得ず、硬化し固定して進展し得ざるに到つたならば、それこそ だけておしまひである。時代と共に、さうして外界の環境が遷ると共に、其れは異りたる、現れ方をす可きがほんとである。松陰や象山のあの熱誠に高潮したる靈魂なども、勿論、神殿や公園の中など

にウロ付いてゐるわけではなくて、其れはやはりみな、現代人の心の中に依然として餘生を保つてゐるのだ。勿論、此の場合にも元の素質そのまゝで入つてをるのではなく、多少でも彼れ等の赤心をば心に追慕し得る樣な人々各自の思想と一緒に合體して、云はゞ『魂の雜種』となつて生きてゐるのだ。だから其の昔し、『七度びも生れかはりて、夷をば、攘はむこゝろ吾れ忘れめや』などゝ歌つた松陰の眞劍だつた魂が、日露開戰といふことに獨り決然と反對論を高唱したあの時の内村氏の心の中に寓一乘り移つてゐなかつたものと斷言するわけにも行かないのだ。

四

今日、地球上に棲息するあらゆる異種族の人間が如何なる二つのものを組み合はせても互ひに雜交して、生殖能力を保持する子孫を設け得るが如く、其の組み合せの結果には、優劣良否、樣々なる差異があらうけれども、結局人類の根本思想は、一つの共通なる基礎の上に導くことが出來る。一言を以ていへば、其の意は Homo Esperantista の、あの歌の句の中に盡きてゐる。

五

要するにエスペラントの理想が出來るだけ多く、地上に實現さるゝことによつてのみ、人類は向上し進化する。異なれる民族と民族との間の憎しみと敵意とは決して、一部の人々が固要的に考へつゝある如く、而して大戰後の英佛人等が獨墺人等に對して、今後當分のあひだ忘れ得ざる如く、一般に然かく、絕對的なるものではない。若し後世に一時でも、最も激しき鬪爭の時代が來るならば、其れは恐らく民族と民族との間の戰ひには非ずして、理想派と非理想派との間に起る一種の宗教戰爭の如きものではなからうかと思ふ。尤もそれまでの時代に、まだ從來もありたる如き國と國との間の小競合せが數回は見られるであらうけれども。

六

「地質時代の巨大なる動物が、最初地上に彼れ等が優勢を占めむるに預つた長所其のもの丶爲めに後には却つて絕滅した」

といふ丘博士の類例的解釋は藝術的面白さを持つてはゐるかも知れない。單に博士自身の所謂「模式推理法」によつて得られたものであつて、決して、純學術的に未だ斷定せられたものではない。詳しく論ずることは今敢てしないが、それはWorking Hypothesisとするにもだうかと思はれる程、まだ基礎の薄弱なる説であるかの如く考へられる。

人類の將來に對し博士の斷定さるゝ所も、亦それと同樣であつて、此の方は何分未來の問題であるから、たとひ如何なる説を何人が述べたとて、少くも千百年の後を待たねば、説の當否を判定することも出來ず、要するに人々の考へ樣次第であつて殆どはじめから議論する効もない事である。けれども、もし筆者等が、種々なる事實から推し考へて、「だらうもからうではないか」と感ずる所に從ふならば、我々人類は決して、道具を使ふことを覺え、さうして、腦髓と、智慧と、さうしてまた其れによつて次第に發明し來た處のより複雜なる道具や器械とを漸次今日の「過度」なる狀態まで發達させ來つたことによつて、既に下り坂に向つて居るものではなく、寧ろ却つて、今後もまだまだ大いに、智識をば發達せしめ、さうして文明の利器をも益々工夫し發明して行くことにより、ただに一層、其の進化を完成することが出來るのである。例へば若し、丘博士などが唱へらるゝ如く、各國に於て人口の增加の烈しいことが實際に食糧を奪ひ合ひ戰爭を惹起する原因となつてをるのならば、さうして其の自然の結果として、戰場に於て、各國民中の最も優良たる分子を時々互ひに殺し合ふ必要があるといふならば、我々は實際、軍備の縮小などを行ふ以前に、（今日の如く不完全にして有害なる方法によるのではなく、各醫學者、生理學者、解剖學者等の總掛りの智慧をしぼつて一日も早く完全なる方法を見出したる上）賢明なる判斷に訴へて、各國で適當に產兒の制限をやれば、既に其の一事だけでも、戰爭の禍因は餘程除かれ得るかも知れない。もしも「さういふ方法でも一般に用ゐらるる樣になつたら、それこそに直ちに其の法を濫用する者が多くなつて、人類は忽ち滅亡するであらう」などと云ふ人があつたら、其の人は、禍因が決して、さういふ方法の採用を考案した人類の智識の進步にあるのではなくてなさけなくも其れをば濫用せむとする我等の祖先たる原人時代よりの遺物なる獸慾性にあるのだといふ事を忘れてゐるのである。また例へば、從來文明生

活の爲めに起つた我等の肉體的缺陷の如きも、もしも、何等かの方法によつて今日の社會制度が次第に改善されて行き、人々がみな都會と田園、室內と野外との兩樣の生活、精神と肉體との兩方の、勞働を一方に遍することなく行ひ得る樣なことになし得たならば、少くも今日の文明人程度の頭腦を保持し乍ら、アフリカ乃至濠州の蕃人（即ち恐らく丘博士などが、未だ文明の弊、自然の復讐によつて退化せしめられざりし以前の人類の祖先に近似せる者と考へられつゝある所の人間）位に頑丈なる身體を作る位の事は、一代乞食の身體のことを考へただけでも實に易々たることではないかと思はれる。

時間も無いから別にまう、詳しくは論じない。けれども筆者は、今日文明の弊とし、禍因として、我々が頭を惱まさなければならぬことの十中八九までは、決して丘博士等の信ぜらるゝ如く、我々の智慧が進み過ぎ、また所謂『酋長への服從性、奴隷根性』が衰へ、『一種族とし、一部落としての團結心』が弱くなり、而して『異人種に對する敵愾心、憎惡心』が曖昧となり『人類愛』『四海同胞』などゝ「病的に退化し脫線した」ことではなくして、實は却つて、以上の如き丘博士などの「好ましからず」と考へられつゝある事實の色彩がまだそれ程充分に顯著とならず、之れに反し、人類がまだ半獸的原人生活を營みゐたる時からの、厄介なる獸性の遺物が今なほ可成りに根深く殘つてゐて、同じく器械を造るにしても、物を創造せむが爲めよりもつひ、大砲、砲彈、軍艦、ツェツペリンと云ふ如き破壞に用ゆるものゝ方を好むと云ふ樣な爲めであることを信ずる。

ハーレー彗星が、此の次ぎ何年何月何日に、再び地球と廻り會ふか、といふ樣なことは豫言が出來たとて不思議はない。我々が今日持つ智識だけで當然其れをば計算し出し得可き標準があるのだから。然し乍ら、此の地球上に人類なるものが生れて今日の樣な世の中を現實したといふことは、兎に角、大宇宙が始まつて以來、（我等の知れる限りに於ては）はじめの事なのであつて、例へば今、毎日の時事問題となつて居る、ロシヤ革命の落ち付き方と、其れが、人類全ての今後の運命に及ぼす影響といふ如きことなどでもほんとうには何と云つても、わからない筈である。もしも、芋蟲の時代ばかりより外に知らなかつた人があつたら、だうして、其の芋蟲が仕舞ひに蝶々の樣なものになつて空を自由に飛ぶなどと豫想することが出來やう？　だ

から我々は、未來に對しては或る程度以上、議論することをやむ可きである。さうして各自の信仰だけでもを頼りとし理想を目標として其の一日も早き實現の爲めに各自が現在の仕事に努力しやう。

七

人間が、男でも女でも、單爲的に子孫を生み出して自分の肉體を永遠に遺し得ざる限り、而して、既に現在に於ても、差別を重んじての平等なる双半一體のものとして、己れよりも他の半身を愛し、己れの欲する所の全てを空ふして之れを與ふることに絶大の幸福を感じ得る父と母との幾組かゞ事實、地上に存在せる以上たとひ今の世は如何に憎しみと爭ひとに滿ち充つとも愛は終ひに其れ等の全てに打ち勝つて、世を支配するに至ることを信ずる。人類愛は今なほ小さき揺籃の中にあれども、やがては必ず、全地に普く行き渡るであらうことを筆者は信ずる。終りに臨み、吾が親愛なる丘先生に對し、禮を知らざる筆者が一本調子にて書き記したる幾多の妄言に對し深く心からお詫び申上て置かねばならぬ。



二大社會革命戰亂の齎らせる德川時代三百年の平和と享樂

笹川臨風

一　舊文化の破壞と新文化の樹立

之を前にしては保元平治、之を後にしては應仁、猶遡れば大化の改新、下れば明治の維新もあらうが、姑く上世と最近世との後二者を除いて、中古と近古との間に劃せる渠溝、近古と近世との境界線なる前二者に就いて聊か史的觀察を下して見よう。

淺ましかりしは保元平治の亂であつた。皇室では鳥羽法皇と其の生みの御子なる崇德上皇との間が不和であつた。崇德の御母藤原璋子は醜聲外に聞ゆるほどの不しだらであつたが、崇德は決して白河法皇の私子でなかつた。けれども鳥羽法皇は內寵美福門院得子の生みの御子にして、崇德の皇弟なる近衞天皇を御寵愛なされて崇德に讓位を逼り、まだいたいけの御年三つの近衞天皇は御卽位なされた。攝關家では攝政關白なる藤原忠通と、其弟の賴長との間が頗る圓滑を缺いてゐた。此兄弟の父なる忠通は弟賴長を愛して兄忠通を疎んじ、藤原氏の重寶なる朱器臺盤を忠通より奪ひて、之を賴長に與へ、法皇に奏して賴長をして太政官の上書を內覽せしめた。近衞天皇が僅に十七歲にて御崩れなされると、皇位は崇德の皇子重仁に歸せずして、崇德の同母弟後白河に與へられた。之れには、美福門院が愛子の早世を崇德の呪咀に出づるとした怨嫉が最大の原因をなしゐる。鳥羽法皇の崩御に乘じて崇德は重祚を御計畫なされ、賴長は其野心を逞うせんことを欲して、白河殿の擧兵となつた。崇德の召に應じたのは、源爲義同爲朝平忠正などがあり、後白河

の爲に禁中の守護に當つたものには、源義朝平清盛があつたが、義朝は爲義の子で、爲朝の兄に當り、清盛は、忠正の姪であつた。父子兄弟叔姪は皇室の兄弟喧嘩攝關家の兄弟喧嘩に參加して、各〻一門の間に血を躁んだのである。

保元戰の結果は崇德方の失敗に歸し、崇德は左遷せられ、賴長は敗死し、爲義忠正は其子其姪の爲に斬られ、爲朝は流されて、一先づ其幕を鎖した。

しかし父子兄弟叔姪の倫常をさへ亂して私利私欲に殉じたものが、何で他族との間に平和を維持することが出來よう。義朝と清盛との間には權力爭ひあり、藤原信西と同信賴との間には威權の競爭があり、信西は清盛に結び、信賴は義朝と結托して、平治の亂を誘發した。才人信西は愚劣なる信賴の敵手でなく、偉器清盛は凡庸なる義朝に對して數段の懸隔がある。源氏が失脚して、平氏が得意の地歩を占めたのは、固より當然である。保元の亂は平治戰ありて、完全に其演奏を畢つたのである。

保元平治の亂は淺ましき人心の反映であつたが、當然斯くならねばならぬ歸趣であつた。藤原氏の四家中、互に盛衰ありて、北家最も顯はれ、橘氏大伴氏石上氏等は其の排擠する所となり、藤氏獨り威福を弄するに及んで、家門の裡に、扞格を生じ、兼通兼家に至りて其醜を極め、道隆道兼の猜に鬩ぐあり、道長伊周の軋轢ありて遺憾なく人間の暗黑面を暴露してゐたのである。云ひ換へれば門閥政治の弊は其極に達してゐたのである。頽廢し切つたる舊道德、陳腐となつたる舊文化は方に根本より破壞せられねばならぬ境に到達してゐたのである。保元平治の亂は即ち打破運動の實行であつて、藤原氏の門閥政治に最後の引導を渡したものである。新時代の幕は斯くして開かれた。

更に保元平治と對照すべきものには應仁の亂がある。保元平治の亂が家門の私慾爭を淵源として起つたが如く、應仁の亂も亦一家一門の爭ひから起つてゐる。家門の爭黨派の爭は常に舊時代の最後を彩つて、新時代を開く基をなしてゐる。保元平治の裏面に美福門院がありしが如く、應仁亂の背後には將軍義政の夫人日野氏富子があつた。義政の弟義視と、義政の子で、日野氏の出なる義尙との繼嗣問題、管領細川持國の子義就と、姪政長との相續爭ひ、富樫氏の內訌にかて、加へて、細川勝元と山名宗全との權力爭ひは、互に錯綜し、互に縺れ合ひて、應仁の大亂を生じた。しかし應仁亂の起つたのも、亦當然の成行きである。南北朝頃より既に現はれてゐた下剋上の風は、足利氏を通じて次第に著しくなつた。將軍家が尾大掉はざるに反して、到る處に將軍の令を用ひざる大諸侯の割據するありて、甚

町幕府は土崩瓦解すべき勢を養成してゐたのであつた。下剋上の風は門閥政治に於ける打破運動の第一歩である。下剋上の風は獨り將軍と管領、管領と執事、執事と家臣、諸侯と其權臣被官との間にのみ發生した現象ではない。治者と被治者との間に於ても盛んに流行して來たのである。德政の呼號土一揆の蜂起の如きは、自由解放を欲求する人民の社會運動であつたのであり、舊道德舊文化を破壞せんとする社會現象であつたのである。應仁の亂は舊と新との間に截然たる一區劃を作つてゐる。保元平治と應仁とは頗る類似した幾多の點を有してゐたのである。

しかし保元平治は、攝關家に代ふるに武家を以てしたるに止りて、秩序は根本より覆へされなかつた。平家時代も藤原時代の延長で、天下をして收拾すべからざるどん底に陷らしめるに至らなかつた。平氏と云ひ源氏と云ひ、何れも一方に長たる大族であつたから、此兩氏の間にこそ爭鬪はあつたれ、兩氏以外に他の氏族他の武家は逐鹿を計らなかつたので、兩氏の勝敗にて事は畢つた。しかし應仁の亂になると之に異る。門閥を離れ、傳統を離れ、因襲を離れ、人は赤裸々にて横行したのである。智を以て力を以て相雄長して、實力の競爭を開始したのである。伊勢の關氏の一族である名もなき一介の伊勢新九郎長氏は弓矢修行の爲に關東に下り、堀越御所を滅して、伊豆の韮山に據り、關東に雄視して、小田原北條の基を置いた。斯波氏の被官であつた尾張の一土豪なる織田信長は海道一の弓取駿遠の太守今川義元を殪して、疾風迅雷の如く京都に旗を樹てた。中國九州に覇を稱した大內氏が滅び、山陰に虎視眈々たりし尼子氏が衰へて、藝州吉田の城主毛利元就は之に代つた。大友氏が衰へて龍造寺氏が起り、龍造寺氏が微弱となりて鍋島氏が盛になつた。氏なく素生なき尾張の賤民から起つた、太閤秀吉が海內一統の大業を成し遂げたのは、最も雄辯に此事實を語るものである。保元平治は藤原氏なる門閥政治の破壞で、門閥外として蔑視された源平二氏の武家政治を開く端緒であつたが、應仁の亂は門閥階級を超越して、腕づく力づくの舞臺を公開したのである。

桓武天皇以來の帝都が時に修羅の巷となつたことのないではなかつた。山法師の御輿振保元平治の亂承久の亂には馬蹄の音が京の士女の夢を覺ましたけれど、それでも大したことではなかつた。戰爭區域は大內裏の附近若くは宇治勢多と云ふ洛外の地に限られてゐた。南北朝の頃になると、帝都は屢々兵馬の脅かす所となりて、山紫水明の地にも往々にして劫火の炎が燃え上がつたのである。しかしそれも洛中洛外の一部分に過ぎず、

足利氏の禪宗歸依は地を相して禪刹を建立し、五山十刹は堂舍の清淨と林泉の幽邃とで、前代に見得ざる異彩を現出した。然るに應仁の亂には細川勝元が催したる手勢は攝津丹波土佐讃岐其他諸國の被官等の馬廻衆六萬餘騎を初として、一族及他家の人々が率ゆる阿波・三河・備中・淡路・和泉・下野・紀伊・河内・越中・出雲・飛驒・近江・播磨・備前・美作・安藝・若狹等の勢を併せて總數十六萬一千餘騎、山名宗全の手勢は但馬播磨備後等の兵三萬餘騎、相摸・伯耆・備前・因幡・美作・石見・越前・尾張・遠江・大和・河内・熊野・能登・丹後・伊勢・土佐・美濃・近江・周防・長門・豐前・筑前・安藝・石見・伊豫等の勢を合せて、總勢十一萬六千餘騎と注せられた。此等の約三十萬人の荒くれた地方の軍人が山河も風氣も優にやさしい京の堂宇第宅民舍に充ち滿ちたことであるから、洛中の騷擾は云はん方もない。此等の兩軍は攻めつ攻められつ、追ひつ追はれつして、洛中洛外に日に鬨の聲を揚げ、矢叫びの音をしたのである。戰爭の結果は文化との交渉を惹起すことがあるにしても、戰それ自身は文化の破壞者である。血に渴した餓虎には何等の見境ひがない。宗教の力も歷史の權威も、藝術の美も彼等の前には塵芥と選ぶ所がない。輪奐の美を誇る寺院堂宇に放火し、紅の炎とともに其の燒け落ちる無殘のさまは彼等の眼に仕掛け花火よりも美しかつたに相違ない。軍略上已むを得ずして、燒き拂ふのでなくして、面白半分に火をつけるのである。定めし掠奪も行はれたらうし、罪なき人をあやめ、婦女子に對する侮辱も盛んに頻出したことであらう。名にし負ふ花洛も斯くなつては、滅亡と何の擇ぶ所がない。應仁元年五月二十六日には、革堂・百萬遍・雲文寺・淨菩提寺・新淨光寺・佛心寺・廣覺寺・圓興寺・廬山寺等の伽藍は炎上し、一條大宮裏向ひの酒屋・土倉・小家民屋殘る所なく燒け落ち、六月八日には、下は二條上は御靈辻、西は大舍人、東は室町を限り其間百餘町公家武家の第宅を始め三萬餘宇は烏有に歸し、同十一日には常葉井御所白雲寺大門姉小路第が燒亡し、八月十六日には梶井西坊が炎上し、九月二十日には南禪寺を燒き、十月三日には相國寺焦土となる。此他燒失した重なるものには、陽明第・鷹司第・一條第・二條第・西園寺・菊亭・洞院・德大寺・三條西・花山院・大炊の諸第を初め、公家の諸邸宅・仙洞御所・伏見殿御所等の金殿玉樓、仁和寺御室・相應院・大覺寺・上乘院・英光院の院々坊々、三寶院・地藏院・報恩院・理性院・勸修寺・妙法院・青蓮院・毘沙門堂・上乘院・聖護院・如意寺・實相院・若王子・住心院・清水寺・六波羅・清閑寺・東北院・以下の寺々、洛中は固より嵯峨・梅津・桂等、西山となく、東山となく、北山となく、概ね燒却せられた。劫火は蹤跡を絕たずして、應仁二年三月二十日には稻荷社燒失し、九

月七日には天龍寺臨川寺以下の在々所々燒亡し、文明元年四月二十二日には、西山の西芳寺を初め、峯堂・西福寺等燒かれ、二月廿六日には、珍皇寺火け、七月十八日には下醍醐山科燒失し、殆ど洛の内外をして荒凉たる原野と化せしめた。前代未聞の大變事と云はねばならぬ。桓武天皇の延暦十三年の奠都から此に至るまで六百七十四年、其間に建設せられ粉飾せられた文化は洗錬せられ爛熟せられたものであつた。よし鎌倉が實權の所在地であつても、京都は依然たる帝都で、文化の中心地であつたから不斷の花が咲き匂ふ美しい處であつた。然るに應仁の亂は、一擧にして花の都をして草離々たる曠原に變ぜしめたのである。舊文化は其根本と枝葉とを合せて一掃されたと稱してよい。

怖るべき戰爭は舊文化の遺物を破壞したのであるが、事實に於て舊文化は既に之より先に破壞されつゝあつたのである。公家の中に培養せられ育成せられた舊文化は、次第に其精神を失ひ、又其生命をも失つたのである。之に代らんとする新文化は、鎌倉時代にやゝ胚胎し初め、足利時代に入りて、盛に其樹立につとめ、東山時代の洗錬せられた藝術趣味に陶冶せられて高潮を示した。靡亂したる舊文化に踵を接して、新文化は興りつゝあつたのである。宗教にしても、藝術にしても、門閥なく、因襲なく、新に傳來したものを自由に取扱つたのである。應仁の亂は新舊文化を併せて破壞したのであるが、凋落せんとしつゝあつた舊文化は、之に依りて其殘骸をも留め得なかつた。しかし新文化は此打擊に遇つても更に萎む所なく、次の時代に向つて盛に開展の餘地を作りつゝあつたのである。

新舊文化の代謝を區劃せんが爲に應仁の亂の如きは大なり小なり到來せねばならなかつた。唯ゞ應仁の亂は餘りに無殘で餘りに慘虐であつた。幸にも新文化の種は既に播かれ、發育せんとした後であつたから、我が歷史は暗黑から脫却し得たのである。平和の克復を待ちゝ新文化は方に華さかんとしてゐた。

新文化の特色は、舊文化よりも廣汎的であつた。舊文化は貴族なる特殊階級に限られてゐた。其範圍は極めて狹く、京都と云ふ小天地の裡の宮殿館宅に限られてゐた。文化の先驅者である宗教家も朝廷若くは搢紳の後援を得て、宮廷内に於ける厭勝祈禱をなすを事としてゐた。其文學は宮殿生活の文學で、衣冠束帶の公家、紅紫重襲の宮媛の裏面情事を描き出せるもの、藝術は信仰の對象物を除いて此等貴族級の玩賞した繪卷物であつた。萬葉詩人の中には、間ゝ西國の防人、東國の賤の女がないでもないが、此等の感嘆詠嘆が偶々貴族級に物珍らしく風變り

として同情を寄せられ採用せられたに外ならない。文學藝術は特殊級の娛樂であつた。王朝文化の恩惠を蒙るものは、搢紳長袖者のみに限られてゐたのである。

保元平治の亂は、此特殊級の文化を破壞したので、鎌倉時代の文化は之を前代に比して其範圍が擴大せられた。宗教家は民衆に向つて、新主義を宣傳し始めた。日蓮然り、法然然り、一遍然り。文學は宮殿生活を離れて、其描寫の方面が廣くなり、藝術も佛畫佛像以外に於ては、合戰物、高僧傳の類を重なるものとすることゝなつた。民政に注意した鎌倉幕府の文化が王朝時代よりも多くの方面に沾つたことは云ふまでもない。

しかし鎌倉時代と云ひ、足利時代と云ひ、其文化に最も多く交涉のあつたのは、武家と五山の緇流とであつた。外來の宋元文化は、もとより禪理と共通してゐる所がある。直指人心見性成佛の禪宗は性理を尙び哲學的思索を本とする宋元文化と相似た所があつた。されば南北朝以後盛となり、爾時代に流行した禪宗は、五家七宗の法燈が支那全土を風靡するの勢ありて、未曾有の高潮に達してゐたのである。我が室町幕府に於ても亦同樣の奇觀を呈してゐた。

文學の權は、五山緇流の手に歸して、五山文學は足利時代を經て江戸に至る基礎を架してゐる。桃源瑞仙の史記抄、周易抄、太岳周崇の前漢書抄は以て其講學の邃きを知るべく、瑞溪周鳳の[illegible]說、中巖圓月の中正子等は以て其識見の高邁なるを察するに足りる。宋儒性理學の研究も、夙に五山叢林中に胚胎し、虎關師錬は其の著せる通衡中に於て晦庵語錄を批評し、周濂溪に私淑し、玄慧は延元帝に侍して、程朱の學を講じ、岐陽方秀は儒佛不二を說いて、宋學を批判し、了庵桂悟は王陽明と臂を把りて會談した。義堂周信の詩藻は支那人をして其妙に驚嘆せしめ、絕海中津は熊野峰前徐福祠、滿川藥草雨餘肥、只今海上波濤穩、萬里好風須早歸の絕唱を詠じて、明廷の感賞を博した。有明一代の儒宗宋濂は其文藻に跋して「其の史を出で經に入り、旁ら諸子百家に及ぶ、固より已に其博贍を嘉みす、辭を遣るに至りては、又能く舒徐にして迫らず、豐腴にして雅に近く、益々其賢を歎ず」とまでほめそやしてゐる。義堂の空華集絕海の蕉堅稿を初めとして、虎關の濟北集、中巖の東海一漚集、雪村友梅の岷峨集、竺仙梵仙の天柱集、夢巖祖應の旱霖集、江西龍派の翠雲稿、希世靈彥の村雲稿、天隱龍澤の默雲稿、桂庵玄樹の島陰漁唱集、橫川景三の京華集、景徐周麟の翰林葫蘆集、周興彥龍の半陶稿、萬里周九の梅花無盡藏等は、いづれも五山文學の精華であつた。當時の遣明使節及留學生は五山の緇徒であつたから、彼國の文化は一に其手に依りて將來された

のである。されば彼邦の吏員をして、外域の予が大明に朝貢するもの凡そ五百餘國なれど、唯々日本人のみ獨り書を讀むと歎服せしめたのは當然である。我が遣明使節は詩文を善くする五山の禪僧であつたのだ。此等の使節は國交を修むるが爲めと云はんよりも、寧ろ貿易し錢を求むるのが主眼であつた。しかし物質的の糧以外に、精神的の糧を輸入することをも忘れなかつた。寛正五年、天與清啓の入明するに際し、明國に索むる書籍は、北堂書鈔百七十三卷、虞世南撰兎園策十卷、同史韻四十九卷錢諷撰歌詩押韻五卷、揚咨編誠齋集百二十三卷、張浮休畫墁集百卷、遯齋閑覽十四卷、陳正敏撰石湖集百三十六卷、揮麈錄三卷、後錄十一卷、第三錄三卷、餘話一卷、類說五十卷、會稽編賓退錄、三感寶應錄、教藏法數十二卷、百川學海、老學筆記十卷等であつた。

菅家江家が學權を握つて、書籍を私し、學問の門閥を作つたが、それも王家とともに微々となつた。足利時代に於ける淸原業忠の如きは、門閥學者の最後の光輝を放つたものである。碧山日錄に、「本朝の諸儒。淸家(淸原)中家(中原)菅家(菅原)江家(大江)南家(藤原)式家(藤原)、善家(三善)の學を用ひ、經と紀傳と各々その業を異にす、凡そ七氏の家、先緒を墜さずして教授するものあり、又學を怠り術に反して其家傳を廢するものあり、又其家嗣なくして纔に名の存するものあり、而して今外史業公(業忠)精を積み思を深くし、其旨に通達す、頃日大に講肆を開き、論語尚書左氏傳及諸典を講說す、其辯は翻波の如く、天下の學者皆之を師とす、公出づるの故を以て淸家の學大に興るなり」とあるが如く、業忠は當世に重ぜられたが、要するに掉尾の異彩に過ぎなかつた。學問は門閥の壟斷を離れて、緇流の手に歸したのである。

藝術に於ても亦然り。巨勢氏の後はあるかなきかの如く、土佐派の名人巨匠は跡を絕つた、光信の如きは嘖々傳へられてゐるが、家法を傳承して、用筆の細かな、傅彩の美しいものを畫いたと云ふに過ぎず、絕えて生氣の潑溂たるものを見ない。云はゞ强弩の末勢魯縞を穿つ能はざるものであつた、新藝術の灝氣は禪僧の吸收する所となりて、可翁如拙周文を出し、明兆を出し、玉畹妙澤を出し、入明の畫僧四明天童第一座の雪舟等揚を出し、祥啓を出し、畫壇の中心は門閥畫家以外に逸し去つたのである。應仁の亂は偶々舊時代の文化・制度・風俗・階級・門閥を破壞する近因となつたが、這般の新氣運は既に成熟してゐたのである。

當時此等の新しい文化と直接の交涉ありて、其文化を樹立し又其恩澤に與つたものは、ブルジョア級であつた武家と智識階

級の專有とであつた。之を王朝時代の獨り搢紳者流が文化を獨占したるに比すると、其領域は擴大せられたとは云へ、猶特殊級のものに過ぎなかつた。其の之を民衆的に普及するに與りて力あるものは茶道の流行であつた。

應仁の亂が打下したる大鐵槌は、門閥階級を微塵に碎いて、人々を赤裸々にした。新舊文化を挙げて兵火馬蹄の爲に打破し了つたが、現に樹立せられたる新文化は、超世遁俗の禪林中に在りたるが爲に絕對の破壞を免れたるとともに、茶道が戰亂の裡にも猶行はれたが爲に、一椀の苦茗中に新文化を包含して之を次の時代に引渡すことを得たのである。若し新文化が舊文化と同じく、唯に搢紳者流の手に育成せられたならば、應仁亂とともに敢なくも泯んだ世は全く暗黑時代を現出したであらう。足利季世の戰國亂離の世を目して、暗黑時代なりとするは、未だ當らない。暗黑と見た世の中にも新文化の光明は輝いてゐた。一は禪林の裡の一穗の寒燈から、一は松風の吟を發する茶鐺のほとりから。

保元平治の亂は時期の短かゝつたが爲に、暗黑の世を出さなかつた。人心は危く道心は微であつたが、文化が猶餘光を放つてゐたのは、舊より新への回轉期が早かつた故である。然るに應仁の亂は天下紛亂の幕を開いて、年一年其動亂は激甚となり久しい間恢復するを得なかつた。若し文化が禪刹の中と茶室の裡とに潜んでゐなかつたならば、舊文化と併せて新文化をも失つてしまつたであらう。

文化の破壞者であつた應仁の亂も、文化を地方に分布した功績だけは認めねばなるまい。京都が荒野となりたるが爲に公卿は流離する、文藝の士は地方に巡錫する。西の大內、東の今川は此等公卿文藝の士を歡迎して、いづれも小なる京都を現出せんとした。雪舟さへも歸朝して後京都に住まはずして、豐後に周防に天開圖畫樓を建て、雲谷庵を置き、九州の到る處に新藝術の種子を播いて、晚年を石見に送つた。小栗宗湛の子宗栗は若狹に住んだと稱せられ、曾我蛇足の後は飛騨の金森氏に仕へた。柴屋軒宗長は東路の津登に東國の連歌行脚を試み、道興准后は回國雜記に地方の巡回歌修行を企てゝゐた。文化は東西に分散し、南北に流飛してゐたのである。足利學校は上杉憲實の力に負ふ所はあつたが、足利季世に諸國の學徒を集めたのは、關左に文化が流れ入つたからなのである。京都に數學の處なくして、却つて足利學校、金澤文庫、上州白井の學校が亂離の世に燦然としてゐたのは、文運が東漸してゐたためである。應仁の亂は文化の地方分權を來してゐる。

應仁の亂は文化史上に截然たる區劃をしてゐるものゝ、民生

は聊ずるところなく、何人も文化の恩惠に霑ほふ遑がなかつた。平和の克復を待ちて新文化は開展せねばならず、そこに至りて始めて文化上の享樂に到達せねばならない。安土時代はまだ克復に向はんとする初頭であつた。桃山時代は一時平和の克復を見たのであつたが、外征の事起りて、慌しいうちに歳月は經過し、波瀾は猶其名殘を留めず、關ヶ原大阪の二役となり、元和偃武に至りて、始めて太平を謳歌し得たのである。此後島原の亂の如きはあつたが、固より天下の形勢とは沒交渉である。應仁の大亂も關ヶ原大阪二役で完全に結了し、平和は久しい間の蟄伏から始めて其頭を擡げたのである。新文化の開展は此時に於て行はれねばならなかつた。

二　文藝復興の黎明期

足利將軍義政の治世中、寛正元年には天下飢饉で、疾病餓死病死人は其數を知らず、人種其三分の二を失ふと當時の記錄に歌はれてゐる。此飢饉は翌年の春にまで及んで、洛中洛外の人民餓死するもの、日に二三百より五六百に上つた。そこで勸進聖勸阿彌に命ぜられて、六角堂の前で日々に施行をしたが、餓死の輩は猶已まない。死骸は之を四條五條の橋下に埋めたが、一穴に千人二千人に及びて、猶取埋められぬものは無數であつた。幕府は五山に沙汰ありて、四條五條の橋上で大施餓鬼を行はせられたが、費用は各寺の負擔であつたから、寺々の迷惑は一通りでなく、相國寺だけでも一二百貫文に及んだ。當時は諸國の旱魃に加へて、河内・紀伊・越中・越前等兵亂の爲に國々を流離して京洛の地に寄寓したものに餓死するものが多かつたから、京都の慘狀は目も當てられなかつた。

碧山日錄、寛正二年二月晦日の條に、「事を以て京に入り、四條坊の橋上よりして其上流を見るに、流屍無數、塊石の磊落たるが如く、流水壅塞し、其腐臭當るべからざるなり、東去西來之が爲に流涕寒心す。或人曰く正月より是月に至るまで城中、の死するもの八萬二千人なりと。余曰く、何を以て此を知れるや。曰く、城北に一僧あり、小片木を以て八萬四千の率堵を造り、一々之を尸骸の上に置くに、今二千を餘すと云ふ、大槪此を以て記するなり。城中と雖も見るに及ばざる所あり、又郊外原野溝壑の屍は之を置くを得ずと云ふ」とあり、又三月三日の條に「清水寺に淨僧あり、是日、五條橋下に於て死尸を聚めて家を作る、其數一千二百餘形と云ふ」とあるにて、其慘狀も推知される。

土一揆の中でも最も規模の大であつた、蓮田兵衛の率ゐた暴動は其翌年に起つてゐる。寛正三年九月、此土一揆は洛中に亂

入し、質屋を掠め、酒屋を奪ひ、手當り次第に分捕りし、剰へ處々に放火し、上は錦小路より下は綾小路、西は東洞院まで三十餘町を燒失した。幕府は諸大名に命じて之を拂はしめたるに、大名の家人どもが土一揆と號して處々に亂入する始末で、殆んど手のつけ樣もなかつたのである。

德政の呼號は猶言論戰であるが、それが、一變すると土一揆の直接行動となる。元來德政の名義は仁政と同じ意味で、王朝時代には朝廷から特に人民の疲弊を救はんが爲に租庸調を免ずるを爾か唱へたので、鎌倉時代にも軍役の困憊を救濟せんが爲に貸借の約を破棄せしめたことが間々あつた。然るに足利時代になると、此にも下剋上の風は現はれ、民衆より幕府に迫つて貸借破棄の令を發せしめたのであつた。其の聽かれざるに及びては、直に變じて土一揆の打毀し運動となつたのである。禁闕が其の德政篇に、「今一細民の紛起、一富の竭乏は、小故に似たりと雖も、其弊は大に畏るべきものあり、實は其の下にして上を犯すの兆、上にして制を下に受くるの漸なり、幸にして陳呉の伍が手に唾して天を睨するものなきのみ」と云ふが如く、下剋上の弊は此に現はれて、民衆の社會運動は既に天下紛離の兆を示してゐる。

斯る凶荒があつた上に、將軍義政時代の賦税は苛斂であつたブルジョア級に侈り、奢侈の事は熾然とし起つてゐた。應仁記に此等の情を述べて、「公家武家共に大に侈り、都鄙遠境の人民迄花麗を好み、諸家大營、萬民の弊言語道斷なり、之に依りて萬民憂悲苦惱して、夏の世の民が桀王の妄惡を恨んで、此日いつか亡びん我れ儕と倶に亡びんと謳ひしが如し。若し此時忠臣あらば、などか之を諫め奉らざらんや、然れども只天下は破れば破れよ、世間は滅べば滅びよ、人はともあれ、我身さへ富貴ならば、他より一段瑩美樣に振舞はんと成り行きけり、されば若し五六年の間、一度の晴儀さへ由々敷諸家の大儀なるに、此間打續き九ケ度まで執行はれける。先づ一番に將軍家の大將の御拜賀結構、二番に寛正五年三月、觀世が河原猿樂、三番に同年七月、後土御門院の御即位、四番に同六年三月、花頂若王子大原野の花見の會、五番に同八月、八幡の上卿、六番に同年九月、春日御社參、七番に同十二月、大嘗會、八番に文正元年三月、伊勢御參宮、九番に花之御幸也、されば花御覽の結構は、百味百菓を以てつくり、御前の御相伴衆の筋をば金を以て之を展べ、御伴衆の筋をば沈を以て之を削り、金を以て逆鰐口をかく、此の如く面々粧をのみ刷んと奔走せしまゝ、皆所領を質に置き、財寶を沽却して之を勤め、諸國の土民に課役をかけ、段錢棟別を譴責すれば、國々の名主百姓は耕作をしえず田

畠を捨てゝ乞食し、足手に任せて悶え行く。萬邦の郷里村縣は大半は郊原となりにけり。嗚呼鹿苑院殿（義滿）御代に倉役四季にかゝり、普廣院殿義教の御代になり、一年に十二度かゝりける。當御代（義政）臨時の倉役とて、大嘗會のありし十一月は九ヶ度、十二月八ヶ度なり、又彼借錢を破らんとて、前代未聞徳政と云ふ事を、此時代に十三ヶ度まで行はれければ、倉方も地下方も皆絶はてけり」と痛嘆してゐるが、段錢棟別錢、土倉役の他にも關税などがあつた。碧山日錄、長祿三年九月七日の條に「近歳諸州の路、國俗の强豪なるもの關を置いて之を征す、往來悉く難しとす。相公諸吏に命じて之を破り、因りて伊勢の大廟を改造するが爲に、安城の七路（諸州より入京の路、其數七なり）に於て、前月二十一日、各々一關を置きて之を征するのみ、往來みな之を喜ぶなり」とあるが、入京税を課されては、果して往來のものが之を喜んだかどうか。又幕令が善く行はれて諸國の關税が果して徹廢されたかどうか。諸國の關税の上に更に幕府の入京税が重なつたやうなことはあるまいかどうか。とにかく人民の負擔は輕からずあつた。

土一揆の破壞行動は此後猶頻々に行はれた。之に次ぐに應仁の大亂を以てしてから、民衆が平和を樂むの遑は全く無かつたのである。木葉實み落ちて秋風の蕭々たる境涯から、やがて霜零ち雪降りて落莫たる天地から、再び一陽來復の春に回へさればならぬ。天は先づ撥亂反正の大任を織田信長に下して、前途の荊棘を刈り除かしめた。つゞいて不世出の英雄豐太閤を起たしめて其功を成さしめたのである。民衆政治家で、門閥階級を超越して、腕一本で身代を作り上げた豐太閤は、應仁以後の紛亂を鎭定するに最も恰好な時代の代表者であつた。北野大茶會のやうな民衆的會合を試みるほどに能く時代精神を發揮してゐた。若し彼が夢幻的理想なる亞細亞大陸統一策を劃さないで、民衆の爲に平和の事業を試みたならば、桃山時代の文化は永續して、更により以上に其特色を發揮し得たであらうに、彼は餘りに大きく個人の力なるものを買ひ被り過ぎてゐた。とん〳〵拍子に順調の出世をしたのに馴れて、何事をも彼一個の力にて成し遂げ得ると信じてゐた。彼れ自身は個人の力を權化したものであるが、個人の力の窮ることを知らなかつた。外に向ける力を内に向けて、民衆文化の爲に力を盡すことが、やがて彼の力を永遠に繼續すべきものであることを忘れてゐた。之れ彼が創業に成功して、守成に失敗した所以である。

德川家康は齊楚の間に介在せる小國に生れ、國歩艱難の際に人となり或は尾張に流寓し、或は駿河に人質となり、あらゆる辛苦を嘗め來つたのである。門閥階級を超越した時代精神が秀

吉に權化されたりとすれば、民衆の困難せる時代相は家康に依りて象徴されてゐる。其質素も其儉約も、其堅實も其の花を棄てて實を取る筆法も、皆此艱難が生みなした賜物であつた。まことや碎玉話に、「御幼年の時より御本國を離れ、駿河尾張の國々に寄寓し給ひ、凡世間の辛苦艱困の事ども、つぶさに嘗め盡し給ひ、あくまで人情世態にも御通達ありしかば、すべて天地の間に生ずる所のもの、一物として容易ならざる理を知しめされけれは、後々までも專ら儉素をもて主とし、浮費を省き、實功をつとめられ、御身の御奉養はさらなり、御家人までも常々是をもて御教諭有りしかばいづれも皆其風儀をまなび、京樣の如く華奢風流の習氣はなく、いと質實にてありしとか」とあるが如く、家康は極めてぢみな性格で、極めて几帳面に世を渡つた。洗錬せられた趣味生活で天下を經營せんとして、土崩瓦解した足利氏の後を受くるには、豪華な太閤振りよりも、堅實な家康の方が適してゐた。天下の創痍を癒やして、身代を立直すのであるから、はでよりも勤儉實行が第一であつた。太閤秀吉はどこまでも俄分限者であつたが、家康は石橋を叩いて渡る苦勞人であつた。

　足利氏の時に播かれた五山緇流の文教は安土桃山時代に於ても全く其跡を潜めずして、武人上りの諸大名中にも往々好學の士があつた。小早川隆景の如き、前田利家の如き、淺野幸長の如き、加藤清正の如き、學校を建て、若くは論語を講じ、孟子を聽き、或は託孤寄命の章に共鳴し、或は盡忠に生れて安樂に死するの說に感憤した。家康の如き躬行實踐の人に對して、四書は東道の主人たるべきものである。其の天下を掌握するに及びて、政治家の教科書に親んだのは、彼の如き頭腦緻密なる、思慮周到なる人としては洵に當然である。板坂卜齋覺書に、「君御若年の程より軍陣の間に人と成らせ給ひ、櫛風沐雨の勞をかさね、大小の戰ひ幾度と云ふ事を知らされば、讀書講文の暇などおはしますべきにあらず、たま／＼馬上をもて天下を得給ひし事もとより生知神聖の御性質なれは、馬上をもて治むべからざるの道理を夙くより御會得ましまして、常に聖賢の道を御尊信ありて、おほよそ天下國家を治め、人の人たる道を行はんとならば、此外に道あるべからずと英斷有て、御治世のはじめより屢々文道の御世話共ありけるゆへ、其比世上にて、好文の主にて、文雅風流の筋にふけらせ給ふ樣に思ひあやまりしも少からず、既に島津義久入道龍伯なども、わざ／＼詩歌の會を催し、大駕を迎へ奉りし事ありしが、實はさる用なき浮華の事は御好更にましまさず、常に四子の書、史記、漢書、貞觀政要等をくり返し／＼侍講せしめられ、また六韜三略、和書にては、延

喜式、東鑑、建武式目などをいつも御覧ぜられ云々」とある如く、家康は治世の必訣を講學にありと看破したのであつた。儒教の教義は修身齊家治國平天下を説くにある。仁は諸徳の上に位して、個人道徳の廣く他に治及するものである。孔子曰く、如し王者あらば、必ず世にして後、仁ならん。顔淵仁を問ふ。子曰く、己に克ち禮に復るを仁となすなり、一日己に克ち禮に復へれば、天下仁に歸す。仁をなすは己に由りて、人に由らんかな。顔淵曰く、其目を請ひ問ふ。子曰く非禮視る勿れ、非禮聽く勿れ、非禮言ふ勿れ、非禮動く勿れと。孔子が理想人物として極力推稱したものは堯舜である。堯や舜やは事實上に孔子の爲に理想美化された。しかし堯舜は個人としての理想人物と云はんよりも帝王としての理想人物である。固より個人としても神に近いほどの圓滿具足せるものではあつたが、孔子が之を推稱するのは、寧ろ帝王としての理想標準であつた。春秋紛離の際に王者の起らんことは孔子が希求して已まなかつた。其の東奔西走して、席暖まるに遑のなかつたは、王者を輔佐して仁政を布き、人類愛護の大本願を達せんが爲めであつた。孟子に至りては更に具體的に王道を説き、王道の根本は仁政にあるを唱へ、盛んに民本主義を鼓吹し、覇道の謳歌され時代に當り、獨り敢然として帝王の仁者道を主張したのであつた。家康は儒教の理に通ぜんと欲し、文祿二年、藤原惺窩を江戸に招いて、親しく貞觀政要の講説を聽き、其後慶長五年伏見に於ても亦其講を聽いた。時に家康便服して講席にあり、惺窩之を呵して曰く、大學は孔子の遺書にして、身を修むるを以て本となす。身修らずんば、いかでか國家を治むることを得ん。禮なきものは道を教ふるとも益なきなりと。家康乃ち服を改めて之を聽いたと云はれてゐる。此年、又惺窩を延いて、漢書及呂東萊の十七史詳節を講説せしめた。家康嘗て云ふ、われ儒生をして經籍を讀ましめて之を聞けるに、凡そ天下の主たらんものは、四書の理に通ぜねばかなはぬ事なり、若し全部知る事かなはずば、よく〳〵孟子の一齊を味ひ知るべきなりと。家康が文化政策に興味を持つたことは、應仁以後の聊ぜざる民生を保護克復するに於て極めて適當であつたと云はねばならぬ。惺窩の高弟林羅山は又家康の招聘する所となり、文化政策に參畫して寄與する所が多かつた。「一年京都にて道春（羅山）、諸生を集め新註の論語を講説せしかば、聽衆四方より集りて門前市をなす、清原極臈秀賢禁中へ奏しけるは、我朝古へより經書を講ずるは、勅許なくては、つかふまつらざる事なり、然るに道春私に閭巷に講帷を下し、且漢唐の注疏に遵はず、宋儒の新説を用ゆる事、その罪輕からさる由なれば、朝議もまち〳〵にして一定せず、武家の

御旨をうかがはれしに、君聞しめして、衆人の道は即ち人の學ばずしてかなはざる道なり、古注新注は各其好に應じて、博く世上に教諭すべき事なり、これをさへぎりさゝへむとするは、全く秀賢が褊狹心より猜忌するものなり、尤拙陋といふべしとの御旨なりしかば、其訴も遂に行はれずしてやみしとなり」（羅山行狀）とあるが如く、家康は物議を排して新注を講ずるを停めなかつた。羅山の丙辰紀行に、「元和元年八月、御上洛のかへさ、水口の驛に駐まらせ給ひ、折しも雨降り出でて、三日ばかり、御滯留まし〳〵、夜深るまで、道春を御前に召して、論語學而の篇を講說せしめて、聽せらる。御みづからも能竭二其力一、能致二其身一といふ所を讀ましめ、能と云ふ字によく心付くべきなり、誰も君親の爲に己が力を盡さぬものはなけれども、いかゞするがよきあしきと、我が心もて分別取捨するをもて肝要とすと仰せありしかば、道春も趙苞が故事を引て御答せしが、後々まで、此事を云ひ出で、畏こさの餘り、そゞろに袖を濡らしけるとなん」とあるにても、相當に、家康は儒學を講究してゐたのである。慶長六年九月には、伏見に學校を建て、僧三要を以て其教授とした。又慶長五年の冬より廣く海内に貞觀政要孔子家語武經七書等を頒たんとて、十萬餘の活字を新に刻して之を三要に給はりて印刷せしめた。三要は常に家康の側に侍して

學教の事を掌り、釆邑百石を賜はり、關原の戰役には、白綃に朱の丸を畫き、其中に家康自ら學の一字を書し、指物に賜はりて供奉せしめた。又足利學校を再建し、略ぼ舊觀に復し、孟子注七冊・孟子古注二冊・續資治通鑑綱目十三冊・貞觀政要八冊・六韜三略三冊・柳文二冊・韓文宗二冊・唐詩正聲四冊・古注蒙求一冊・長恨歌一冊・禪儀外文二冊を寄附した。應仁戰後下書の散佚したものが少くなかつたから、之を搜求し諸家をして舊籍を獻ぜしめた。もと金澤文庫に藏したる律令は、關白豐臣秀次より徵發し、其後、菊亭右大臣晴季に贈りたるを、晴季から獻上した。日野前大納言輝資は古寫本の侍中群要抄及故實抄を、飛鳥井中納言雅庸は家の系圖及歌道宗匠の日記、所歌仙を、冷泉中納言爲滿は大比叡歌合を獻じた。伊豆の般若院快運は續日本紀を獻上したが闕本であつたのを、五山の緇徒に補寫せしめ、金地院崇傳は甲州身延山にありたる本朝文粹二部を獻じたるに第一卷闕けたりしを、羅山之を京都に求めて完備した。相國寺の良西堂は春秋左氏傳二十冊齊民要術十卷を奉り、圓光寺の閑室の遺物として、其寺から黄氏日鈔三十冊を獻じ、神龍院梵舜は武家御傳代代記、源氏系圖等を搜索して、獻上した。梵舜は博學を以て聞えたれば、常に召して之を顧問として、珍籍搜求の事を掌らしめられた。慶長七年には江戸城内に文庫を創建

し、金澤文庫に傳へたる古書を多く聚めて之を收藏した。即ち紅葉山文庫である。又院の御所を初め、公卿の諸家に傳ふる古記錄を寫さしめんとて、五山緇流中の能筆家を選び、日毎に卯刻より酉刻まで京の南禪寺に聚りて謄寫の勞に服さしめ、林羅山金地院崇傳を以て其總裁に任じた。當時書寫したるものは、舊事記・古事記・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄・國史・類聚國史・律令・弘仁格・弘仁式・貞觀格・貞觀式・延喜格・延喜式・延式・類聚三代格・古練鈔・江家次第・新儀式・北山鈔・西宮鈔・令義解・政事要略・柱下類林・法曹類林・本朝月令・新撰姓氏錄・除目鈔・江談鈔・會分類聚・古語拾遺・李部王記・明月記・西宮記・山槐記・釋日本紀・名法要集・神皇系圖・本朝續文粹・菅家文草等であつた。家康は獨り政法道德の書に興味を持つたのみならず、文藝の書にも多少其指を染めたことのないではない。日野前大納言輝資入道唯心、舟橋式部少輔秀賢、圓光寺閑室、金地院崇傳等御談伴として每度伺公する比は、和漢古今の事跡、又は京都寺社の事ども、御物語り絕えずおはしけり、其比冷泉中納言爲滿卿江戸へまかり拜謁ありしかへさ、駿府へまかり見え奉りし時、御藏の定家卿自筆の歌書を見せ給ひ、歌道の御物語あり、また其後中納言其秘本ありとて、廿六人の歌を一人毎に十首づゝ選み、定家卿の自ら書かれしを持ち出でゝ御覽に備へ、爲家卿自筆の假名遣等も御覽ぜさせらる。其頃江戸より土井大炊頭利勝御使として、定家卿眞蹟の伊勢物語を進らせらる。之は後土御門院の御物なりしを、能登の畠山義統入道へ賜はり、後に三好修理大夫長慶に傳へ、三好亡びて後、和泉の堺の商人の藏となりしを、細川玄旨法印購求して秘藏せしが、後に下野守忠吉朝臣懇望して其藏となされ、朝臣亡せられて後、江戸の御物とはなりしなり、こは殊更御感ありて日野・冷泉・飛鳥井等の人々を初め、公武の徒にも見せしめ給ふ。又山崎宗鑑が書きし廿一代集、貞應准后、飛鳥井榮雅兩人の奥書せし定家卿眞蹟の今古集、逍遙院、稱名院兩筆の三代集及伊勢物語、又高野大師眞蹟の般若心經、佐理行成の眞蹟なども、同じく珍らかなるものなりとて、例の人々に見せしめ給ひしとなり」。(駿府記)「飛鳥井中納言雅庸卿駿府へ參りし時、俄に源氏物語を講談すべしとのことにて、御茶室にて進講あり、後に又此卿より源語の內にて、秘說とする所三箇の大事を御相傳あり、又大阪の戰畢て後、中院中納言通勝卿を二條の御城に召し、數寄屋にて源氏物語箒木の卷を講ぜしめて御聽聞あり、侍女どもに聞しめさる。又高野の檢校法性院政遍といへる老僧謁見せし時、林道春信勝もて徒然草に載する所の招魂の事を尋ね給ひしに、政遍申は、密宗にて招魂の法行ひて加持する事は

侍れど、喚子鳥の鳴時に修法する事は心得ず、たゞ魂を呼ぶといふにより、かゝる事云ひ出しならんと申ば、道春そのよし申あげけるとぞ」（同書）とあるが如く和歌物語なんどにも多少の嗜はあつたが、しかし寧ろ希有の例に屬する。家康は飽くまで實用經濟の學を喜びて詩歌文章に鏤心彫意するが如きは望まなかつた。されば試文の時にも、「爲レ政以レ德、譬如ニ北辰居ニ其所一而衆星共レ之」のやうな題を課し、五山の緇徒が之に對して、今まさに天下靜謐して北辰の其所にあるが如く、動きなき御代は萬々年も限りあるべからずなど、いづれも同樣な答案を呈したるを慊ずとなし、是は十分ならざる書き方なり、北辰の動かずして萬民之を迎ふが如く、德をもて天下を治るといへる其德はいか樣にして身に得るものならむと云ふ趣きを述ぶべきなりと云ひしなど、流石に一隻眼を備へてゐた。信長は幸若舞を喜びで小唄を愛したが、文藝を嗜むに至らず、又其餘裕もなかつたのである、彼自らは「人間五十年、化轉の中を較ぶれば、夢幻しの如くなり」（幸若舞敦盛の曲）と人生夢幻觀を抱き、其の五十年に一つ足らぬ四十九年にて詩的生涯の幕を閉したが、文藝には縁遠く、文藝を復興するには至らなかつた。秀吉は茶道を好んだだけに流石に文藝をも愛して、歌をも詠じ、新作謡曲を作らしむるほどに文藝を理解してゐた。唯其の桃山時代が餘りに短かつたために、文藝復興とまで行かなかつた。家康に至ると、根が實用向きに出來てゐるだけに、詩歌を詠ずるほどの趣味嗜好はなかつた。間々詠歌も傳はつてゐるが、極めて希有の例でどこまでも人の一生は重荷流の實際的道德に歸依する人であつた。猶二宮金次郎翁の如き、安田善次郎翁の如き勤儉の實行家であつた。此くの如き人に對して文藝趣味を希望するは無理ではあつたが、彼の文化政策は儒學の講說となり、古書の搜索傳寫となり、複刻印行となり、貞觀政要・孔子家語・武經七書の印刷に止らず、群書治要・大藏一覽・東鑑等の刊行となり、文運興起の基を開いた。一たび家康にに依りて奬勵された學問研究は時代の氣運を作り、遂に文藝の復興となつたのに當然である。

顧みるに、足利尊氏歷代の將軍はいづれも文藝の趣味が深かつた。歌を詠じ、畫を描くことは世々の將軍が長じてゐたのである。將軍義政の如きは殊に風流潤達にして、彼の生命は其の趣味生活を營んだところにある。恰も宋の微宗皇帝と酷似して東山時代の文化を作つたのである。此新時代の文化は家康の好學に依りて、焦土荒烟の間から蔚然として育成して來た。時代は元和偃武後の開業創始の世である、澎湃として元氣横溢し絕えて萎靡凋落の氣風がない。自然の熱と光とは之を化育せずんば已まなかつたのである。

戰國時代に東の今川と西の大内とは、京樣に倣ひて文化を境内に布いた。しかしいづれも久しからぬ倒潰の運に遭遇したのである。武功未だ成らざる裡に文弱に流れた結果でありしのみならず、其文化は舊文化の繼承であり、其文なるものは、詞華の虛を趁うたもので、實學の有用なるものでなかつた。德川氏に至ると、武功既に成りて文事の急は目前に迫つてゐた。家康は先づ實學を奬勵し、程朱の新說を注入し、樸實に新文化を取り入れたのである。應仁以來の紛亂は斯人に依りて始めて平定し、四海民衆は眞の平和に逢遇し得たのである。假りに秀吉をして、長壽ならしむとも、石田三成をして關ヶ原の戰勝者たらしむとも、大阪をして勝利の月桂冠を戴かしむとも、かほどの鞏固なる平和は齎らし來たらなかつたであらう。家康をして海內安定の任務を完了せしめたのは、日本文化の爲に、四海民衆の爲にまことに幸福であつた。

然し一面よりして云へば、家康の學問獎勵は又一種の政策であつた。忠孝を鼓吹し上下の分を正し禮を嚴にすることは、江戶幕府の爲に長久の術であつたのである。けれど忠と云ひ孝と云ひ、上下の別と云ひ、禮と云ふものは、いづれも德教である。よしや政策を混じたとするも、德敎の美なるは云ふまでもない。況んや之に刺戟せられて文藝の復興したるに於てをや。

三 町人階級の勢力

家康は其子秀忠に教訓して、我れ若年の時は軍務繁くして學ぶ暇なく、之に依りて生涯不學にして今此頽齡に及べり。さりながら老子がいひし詞なりと人に聞置しは、足る事を知りて足る者は常に足ると云ふ詞と、仇をば恩をもて報ずるといふ二語は、若きほどより常に心にとめて受用せしなりと云つたさうだ。家康の一生に就いて之を見ると、必ずしも此二語を拳々服膺したものと思はれない。しかし足ることを知つたが故に、彼は勤儉 あり、大阪の寡婦孤兒に對する仕打は酷薄を極めてゐるが、此他の場合に於ては他の戰國諸雄が人類同胞に對して殘酷であつたほどに、家康は甚しくなかつた。播州三木城の別所氏一族の如き、關白秀次の妻妾の如きは殆んど鏖殺して餘す所がなかつた。叡山の如きは、老少の別なく、信長の慘殺する所となつたのである。此間に於て家康は割合に殘虐の行爲が少かつた。大阪籠城の浪人どもも諸家へ仕官勝手たるべく、諸家にても召抱自由たるべき旨沙汰してゐた。大阪落城の後秀頼の小姓十餘人、京の妙心寺に逃げ隱れ、海山和尚を以て檢使賜はらば自殺せんと言上した。家康曰く、首謀のものは重科あれば宥すべからず、關ヶ原戰役に一たび助命したるものが今度籠城し

たるは其罪免し難し、其他は何方へなりと退轉苦しからずとて、更に問ふ所がなかつた。徳川氏の治世を通じて、最も殘虐なりしは、切支丹宗徒に對しての處分であつたが、過激思想者に對する現時の政策と相對照すると、必ずしも江戸幕府が酷に失するものとも云へぬ

家康が足るを知りて勤儉なりし經濟策は府庫の上に現れて、徳川氏の初政は甚だ富裕であつた。家康は百萬兩を所藏し、其子秀忠に大判十五萬枚と銀一萬三千貫を傳へ、秀忠は諸侯に二十餘萬兩、大判一萬七千四百枚、銀十八萬二千萬枚、旗下の士に四百萬兩を分與したと云ふ。此府庫の充實は三代家光四代家綱にまで及んで、極めて豐富であつた。戰國時代に於て、往來の不便なりしものは、統一政策に依りて彼此相往來し、有無相通じ、大道路も開かれて、交通は之を前代に比すると頗る便利となつた。春風の吹く東海道も、秋雨の霽れる中山道も、鈴懸馬の蹄輕く、長持唄の悠揚なる節に世の太平を思はせることゝなつた。産業は發達し、商業は進歩し、從ひて都市の發展を來し、政權の所在地たる江戸と、名の存在せる京都と、堺に接して遂に其株を奪つた商業地の大阪とは、鼎足の勢を成して各々特殊なる文化の中心を形づくりつゝあつた。九州の長崎、東海道の名古屋、駿府の如きも、亦種々なる意義に於て發達したのである。

應仁の亂で門閥階級が打破せられたが、平和が克復されると又自づと門閥階級を生じて來た。將軍家と云ふ世襲的門閥が出來れば、諸大名と云ふ世襲的門閥も出來る。封建制度であるから、門閥階級制度が社會百般の上に現はれて來るのは當然である。武家時代のことであるから、武士が階級の上層に位し、農工商が之に次いだ。農工商と排列して、商が最下位に置かれたのは、儒教思想に養はれた結果に外ならぬ。周書に曰く、農出でざれば其食に乏しく、工出でざれば其事に乏しく、商出でざれば三寶絶ゆと。けれど事實に於て商人は社會上重要なる地位を占めて、經濟上の實力を握つてゐた。農工階級を以て公家の階級の如しとすれば、商人階級はさしづめ武家階級であつた。公家は武家を賤んで視たが、實權ある彼等に對しては其頭を抑へつけられてゐたのである。農工階級は商人階級より上位にあつても、經濟上の實權は常に商人に左右されてゐたのである。獨り農工階級のみではない、武士階級すらも、往々商人に對しては頭が上らなかつた。大部分は商とその他に工を加へたものが卽ち町人である。江戸時代は此町人階級が最も幅を利かし、民衆的勢力が旺然として興起した世の中である。卽ち平和が齎らした産物の階級であつた。

町人階級の勢力が發展し來れるは、其反映たる風俗の奢侈が之を證明する。風俗が奢り始めたのは、四代家綱の寛文頃からである。我衣に「寛永十六年迄は、武家は格別、町人百姓ともに衣服甚麁相なり。女も町人も百姓の妻なれば、順レ之、正保慶安頃迄年々キシニテ輕き賃家の妻娘、武家へ奉公に出る、次第に立身し、上つ方の御服をも拜領し、我家へ歸て嫁すにも右の拜領物を着し、見物遊山祝儀などにも一つ二つ有るものを着したり、故に自ら世上の女子目を奢せ、有徳家の妻子等は手前金にて拜領物の如くこしらへ着し、右の麁服を忘れたり、然れども數多くはなし、宜き所なれども、下女は夏冬木綿のはれ着なり。既に明暦三酉年、大火事江戸御城燒失す、此時嚴有院殿（將軍家綱）十七歳の御年、日本橋にて三日施行の御粥を被下けり、歷々町人の妻娘爲ニ其加ニ此粥を拜領せり、賃家の妻女は申に不レ及拜領せり、寛文年中より男女の衣服そろ〳〵をごる、歌に、馬ならばいくつかはねん丑の年、扨ても〳〵はねたり寛文元年、寛文年中に至ては、惣鹿子の小袖を着す、地、白綸子或は紺緋紫の結鹿子惣地にせり、尤結構なり」とありて、町人の富が漸く增加して來たことを裏書してゐる。此時代の小袖模樣は大膽な圖案で、自由奔放に奇拔を以て優り、其特色は大柄であつた。そこに時代の反映が見える。此趨勢は、寛文の引きつゞきで、同じ將軍家綱の治世であつた延寶年間に至りて、更に甚しくなつた。江戸の石川六兵衛の妻と京の難波屋十右衛門の妻とが東山にて衣裳競べをしたと云ふ高名な話は此年間の事に屬する。難波屋の妻は緋綸子に洛中の景を縫はせたるを着し、六兵衛の妻は黒羽二重に立木の南天の染小袖を着した。しかも其南天の實は珊瑚珠を碎いて縫ひつけたる豪奢に、京の人はあつと感嘆の聲を絕たず、六兵衛の方に團扇が揚つたと云ふが、今ならば半襟に寶石を縫はせると同じ低級の趣味である。趣味は低級でも贅澤さ加減が思ひやられて、世は町人全盛であつた。此六兵衛は小舟町三丁目に堂々たる邸宅を有した有徳なる町人であつたが、派手好きな虛榮心の強い妻は、平生にもさや縮緬綸子の類を着し、晴れがましき處へは、紗子綸子金入等の小袖を着した。四代將軍薨じて、五代將軍綱吉の始めて上野寛永寺へ御成の時、六兵衛の妻は黒門前に棧敷をかけさせ、翠簾を垂れ、幕を廻らし、左右に切禿兩人に緋縮緬の大振袖を着せ、其中央に坐し、名香を薫して、將軍通行の際には簾を揭げて之を拜した。恰も綱吉襲職の當時で、鋭意弊政を矯めようとした際であるから、何でう此奢りの沙汰を看過すべき。夫妻は遠島に流され、家屋敷は闕所となつた。六兵衛妻の贅澤振りが動機となりて、天和三年二月五日、「金紗・縫物・惣鹿子、今より後、婦

女の衣服に用ゐる事を許さず、すべき新奇の染織を停止すべし
小袖の表一端價二百目限りたるべし」と令し、此後にも屢々奢
侈禁止の發布はあつたが人爲の力で時代の風潮を杜絶すること
は難くあつた。天和三年から六年目の元祿二年には、「女の衣類
御禁制被仰出候得共、元來の儀に候間、向後共結構に無之
やうに代銀二百五十限り縫の衣類商買可仕候、尤もすぬひの
類の美麗なる儀仕るまじく候」と、緩和の令が布かれた。

天和法度の結果は、一方に縫模様が抑へられたとともに染模様の流行を來し、他方に於て縞物が全盛となつた。貞享頃(天和四年が貞享元年、貞享五年が元祿元年)の染には種々なる名稱があつた。卽ち御所染・江戸染・正平染・友禪染・菅原染・千種染・伊達染・吉長染・沙室(シヤム)染・唐人染・更紗染・吉岡染(又の名憲法染)・遠川染・梅がら染・檳榔子染・加賀染・細染・茶屋染・じゆんさい染・一ちん染・燒刄染・鬱金染・ふすべ染・ゆかた染・玉子色染・太夫染・茜染の類である。此他にも百品染・小鼠染・今様染・山の端染・虹染・段染・染分・曙染・梅がへし・紺染・露草色・ぎんすすだけ・柳すすだけ・椎染・きはだ染・紅梅・卯の花・惣傳茶・檜皮色・空色・玉蟲色・玉子色・瑠璃紺・櫻色・萠黄色・花色・菊川摺・紅葛のふたへ染・桑染等の名が諸書に散見してゐる。縞物では桟留縞、郡内縞・八丈縞・丹後縞・りきん縞などが當時の流行物であつた。

延寶天和頃の花見小袖に江戸町人の奢りを見せて、時代の風流を盡くしたものであつた。花見小袖は小袖幕となりて、花と其美を競つて、萩花のひら〳〵さへも模様と見られた。「本町通町を始め、有德なるも、さもなきも、町方にては女房娘、正月の小袖と云ふは仕立てず、花見小袖と成ほど手をこめ結構に伊達する物好きに好みたるを着て出づるなり、花より尙美出なり花の頃は空曇りて、やゝもすれば驚過より雨降る、然れども傘をもさゝず、よき小袖をすきと濡らして歸るを遊山にも又手柄にもするなり」(紫の一本)とあるにて、當時の風流潤澤を偲ぶに足りる。地色は繻子・縮緬さや・りんず・羽二重・絹・紬、色は紫・樺・うこん・紅・黑・淺黄・茶・薄鼠・藍鼠、模様は吉野の春色・龍田の秋景、淀の川瀬の水車、鞠かゞり・扇盡し、幕づくし、散らし草紙、花に蝴蝶の狂へる、ませ垣に瓢箪の生へる、墨繪の源氏、竹に虎、秋の七草、熊笹、石竹、草盡し、桐に鳳凰、浪に兎の走れる、柴船の流に泛べる、富士見西行うしろ向き、雲にかけはし、霞に千鳥、八橋の杜若、沖の鷗、貝盡し、蟲盡し、川竹の流に添へる、松にかゝれる藤波、花を捌はん櫻川、梅に鶯、紅葉に鹿、菊のませがき、牡丹に唐獅子、名所舊蹟のかず〳〵、古歌の心、故事來歴、はやり歌、はやり文字、はやり言葉の類、「五

色の鹿子を所々に加へ、其品ことなる伊達染に、一尺五寸の大振袖、ゆき短く褄高く、當世やうのみせばに仕立て、二つ三つ四つ重ね着て、雪の肌をちらと見せ、襟ぎは少し押覚げ」(天和笑委集)たる當世の時代粧は、まことに艶であつたに相違ない。此一尺五寸の大振袖は其後、二尺四五寸の長きにまで及んだのである。

江戸と京とは流行に相違あるが、貞享三年版の五人女にある姿の關守は天和二年の暦と見え、「下に白ぬめのひつかへし、中に淺黄ぬめの引つかへし、上に樺つめのひつかへし、本繪に描かせて、左の袖に吉田の法師が面影獨り燈の下に古き文なら見てのもんだん、さりとは仔細らしき物好み、帯は敷瓦の折天鵞絨、御所かづきの取まはし、薄色の絹足袋、三筋緒の雪踏」とあるは三十四五の女、「下に黄無垢、中に紫の地なし鹿子、上は鼠繻子に百羽雀の切付け、八段染の一幅帯むねあけ掛けて身ぶりよく、縫笠にとら打て千筋ごよりの緒をつけ」たるは十五六の娘、「三つ重ねたる小袖皆黒羽二重に裾取の紅絹裏、金のかくし紋、帯は唐織、寄島の大幅前に結びて、髪は投島田に平元結、懸けて、對のさし櫛、はきかけの置手拭、吉彌笠に四つかはりのくけ紐つけ」たるは二十七八の年増、「髪すき流し、先きをすこし折戻し、紅の絹たゝみて結び、前髪若衆のすなるやうにわけさせ、金元結にて結はせ、五分櫛の清どかなるさし掛まづはうつくしさ、ひとつ一つ云ふまでもなし、白繻子に墨形の肌着、上は玉蟲色の繻子に孔雀の切付け見へ透くやうに、其上に唐糸の網を掛け、さてもたくみし小袖に十二色のたゝみ帯、素足に紙緒のはき物、浮世笠跡より持たせて、藤の八房つらなりしをかざし」たるは、十三四の艶女の風俗であつた。

天和の禁令も一時的功果はあつたにしろ、容赦なく、向上する町人の經濟状態は、風俗に僭分限者の贅澤振りを現はしてゐる。元祿時代が華車世相の代表たるが如く云はれるのも、畢竟著しく此現象が社會上に見えてゐるからである。翁草にある中村内藏助なる上方の僭分限者の妻女の服装の如きは、其一例である「或時内藏助、畫師光琳に謂て云、來る幾日、東山に於て諸家の妻室參會の事あり、定めて綺羅びやかなる出會なるべし、右につき何ぞよき物ずきあらむ、其趣向如何と問ふ。光琳暫らく考へて、爾々と教ゆ、内藏助諾して、これに隨ふ。當日に至り、家々の妻室、花を粧ひ、錦を襲ね、彌が上に飾り、乘物を手ぐりにして奥へ舁入る、あまたの侍女前後を取卷き、靜に乘物を出たるさま、天人影向の如し。内藏助妻女のなど遲きと、各々待ち煩ふ處に、少し程あつて、中村の乘物あないして舁入る。みな／＼あはやと其出を立見れば、打か　帯付ともに黒羽

二重の無地、兩面の下には、雪の如くなる無地を幾つも重ね着し、するりと乘物を出て靜かに座につけば、人々案の外にぞありたりける。さて其外の妻室も我も／＼と間もなく介戸へ立て、前にまされる結構なる衣裳を着ること度々なり。內藏助妻女も共たび／＼着替るに、幾度も同じやうなる黑羽二重白無垢あり。一通りに見る時は何とやらん座中を非に見たるやうなれども、羽二重は衣服の絶品、晴の會故、是を多く用意せしは獨錦にまさるよき物ずきなり。其外の侍女ら隨分美はしく飾りしかど、侍女相應の服なり、內藏助かたの侍女は外の內室が出立にまさりて結構なり。是れ光琳が物ずきにて、中村の出立拔群にて、一座けをされたりと、其 世上の美談なり」とある物數寄は同じ物數寄なれども、洗錬せられたる趣味から來た贅澤の物數寄であつた。內藏助は大阪銀座の年寄であつたが、其の沒落して家産を入札したときは、正德四年六月二十八日のことであるから、元祿年間が彼の全盛期であつた。落札した品々の銀高は、浚明極墨跡、三貫百五十一匁五分、雪舟布袋畫、六貫七百九十匁、千代能文、三貫一匁七分、印月江一行物、五貫二百匁南堂墨跡、五貫五百十五匁、大春慶茶入、三貫六百八十二匁、古瀬戸茶入、四貫五百七十匁、宮島市場茶入、四貫六百七十八匁、なまこ茶入、三貫百二十匁、井戸小服、二貫五百五十匁、赤繪鉢子、四貫五百八匁、井戸赤ぼらやき、八貫八百五十五匁熊川茶碗、三貫五百目、時代蒔繪硯箱、三貫二百十七匁七分光悅乘船硯箱、二貫二百五十匁、同松竹硯箱、四貫六百九十七匁六分、文字釜（茶堂、寶山、大德寺文字あり）、三貫二百七十七匁、珊瑚珠七つ（かけめ十匁五分）、一貫三百匁、若狹內朱盆八貫七百匁、土佐四季屏風、二貫八百卅九匁、同松屏風、五貫八百廿七匁、雪舟山水屏風、十貫五百卅匁、梨地大牡丹印金、六貫三百卅五匁、眞龍齋墨跡、四十一貫三百卅匁、蒔繪文臺、六貫九百六十一匁、片輪車手箱、廿八貫七百九十九匁七分五厘大磽墨跡、廿一貫百卅八匁、定家文、十二貫七百九十七匁九分兼好文十三貫七十匁、がんひ繪、十八貫八百五十匁、茂古林、廿貫百目、牧溪、十七貫三百匁、宗祇文、六貫七百廿五匁、一休色紙、四貫百六十匁、古今集、五貫三百八十八匁、玉柏茶入、十二貫匁、伯庵茶碗、十五貫三百七十七匁、井戸、十八貫五百七十匁、坂部井戸、三十五貫百匁、香合九貫三十三匁、千歲硯箱三十貫五十匁八分で、茶器總數八百六十九點、此落札銀高總〆千二百八十九貫目餘、缺所屋敷十六ヶ所の落札銀高六百六十一貫目餘、總計千九百五十貫目餘であつた。寶永七年の令にて乾字金の鑄造があつたが、其品質は慶長金に對して大差はなかつたけれど、其重量は殆んど半分であつた。乾字金百二十兩は慶

長金百兩に當り、乾字金百二兩二分は品質の劣惡なる元祿金百兩に相當すべく、其歩合を定めたが、畢竟經濟界の混亂を起すに止りて、物價は俄然暴騰し、正德元年米一石につき銀約七十匁であつたものが、正德四年には二百一匁餘即ち殆んど三倍に騰貴し、同五年に至りては二百三十匁にまで上つてゐる。內藏助の入札は恰も此米價暴騰に際してゐたのである。寶永二年十一月闕所となつた淀屋家の財產目錄、

一、唐より渡り候ゐんすの鷄一羽、
一、ゐんすの銚子十四
一、金長持
一、金雀十六
一、金銀鳩五十一、
一、千二百兩餘茶碗、但茶 三十七、
一、珊瑚珠竹に成り、其外珠類等數不知、
一、琥珀瑪瑙、此類二百七十二、
一、徽宗皇帝鷹の繪、其外雪舟・雪村・牧溪唐繪、凡名ある掛物二百三十幅、其外五百幅、
一、腰物大小銘有七百腰
一、金の竹流し三十本
一、水銀壹萬五千斤
一、朝鮮人參三十八斤
一、辰砂壹萬七千斤
一、羅紗(但八間より十五間迄)十三反
一、厚さ三寸之毛氈四十八枚
一、唐渡硯石三尺四方
一、びいどろせうじ四十五枚
一、錦・金襴類壹萬兩計
一、唐渡手水石、金銀のほり切有之
一、買置之藥種數不知
一、有金八萬五千貫目
一、家屋敷大阪表一町四方之家十二個所
一、八幡知行貳百石、田地五十町
一、淀に家五個所、田地十二町
一、伏見家三個所、田地七町
一、京に家五個所
一、大和に田地十二町
一、堺に家五間口二軒
一、泉州に田地八町
一、河內田地五町
一、阿波に田地四十八町

一、用意材木廿五貫目程之物

一、大名貸金壹億程

とあるのは、果して事實であつたかどうかは詳かではないが、之れを中村内藏介に比すると、又更に數倍の豪富であつたらしい。

されば「殊に近年は何方も女房家ぬし奢りて衣類に事もかゝぬ身の、其時の浮世模樣の正月小袖をたゝみ、羽二重半疋四十五匁の地絹よりは、千種の細染百色がはりの染賃は高く、金子一兩づゝ出して、是れさのみ人の目立たぬ事にあたら金銀を捨てける、帶とても昔渡の本繻子、一幅に一丈二尺、一筋につき銀二枚が物を腰に纒ひ、小判二兩のさし櫛、今の直段の米にしては本俵三石、天窓に戴き、湯具も本紅の二枚がさね、白ぬめの足袋はくなど、昔は大名の御前方にもあそばさぬ事、思へば町人の女房の分として、冥加恐しき事ぞかし」(胸算用)とあるは、町人女房の奢り沙汰にして、「銀一貫目ある時、山崎の親の跡を捨置き京に上り、大名貸の銀親へ賴みて是を預け置きしに元一貫目の銀を一分の利にして、三十年其儘に貸し置けるに、元利合せて二十九貫九百五十九匁八分四厘一毛になりぬ、此丁銀箱入にして請取り、是より次第に貸掛けて、程なく千貫目持となり、それより一代のうちに七千貫目慥に有り銀、廣き都に三十六人の歌仙分限の内に入りぬ」(永代藏)とあるに、町人のオ覺にして、如何に俄分限者の多かつたかを知るに足りる。

政治の權力も、兵馬の權力も、富の權力に對しては一步を讓らなければならなかつた。若し戰亂の世であつたなら富も兵馬の爲に蹂躙されるであらうが、平和の世に於て、富は萬能の力を有してゐた。富の權力を背景とする町人階級は陽に武士階級に屈服してゐたが、陰には昂然として之に對抗してゐたのである。旗本奴に對する町奴の如きも、其一現象に外ならない。助六劇に於ける戀の勝利者が助六であるところに町人の氣焰が炎と吐かれてゐる。助六本名を曾我五郎時致とあるのは、曾我物語流行の餘勢であつて、强ち此荒唐夢幻劇の本旨ではない。助六劇は江戸の町人が思ふさま啖呵を吐いて、其溜飲を下げた時代精神の表現である。

長い間蟲けら同然に虐がれた町人は、平和克復して、世が太平となるとともに次第に富を把握して、實力を手にすることになつた。彼等は其地位を自覺するとともに、社會上大切なる役者となつたのである。貴族や武士や、僧侶の爲めのみであつた文化現象も爭つて彼等の前に提供されることゝなつた。源氏物語の光源氏や、薫大將、頭中將などの好色者は、いづれも王朝貴族の墮落せる趣味を代表してゐるが、江戸時代には其衣冠束

帶を脱いで、縞物丸腰の町人となり、三都・長崎を初め、色の港花の廓を漁りありくことゝなつた。名も通俗的に世之助と云ふ。

町人藝術である錦繪には見立某々と云ふものがある。見立淸盛・見立文殊普賢・見立寒山拾得等の類である。淸盛も大相國の淸盛でなくして、大商人の隱居なりすまして、祇王祇女の當世美人を狩り集めてのだゞら遊び、文殊は若衆となりて、獅子に腰を打掛ければ、遊女の普賢は象の上で艶書をひろげる。當世流の寒山拾得、いづれも艶にして、之れ山中の人に非ず。莊子も浮世莊子となれば、老子も辻講釋をつとめる。釋迦も孔子も遊廓に出入し給ふ自由開放の天地は町人國でなくては見られぬ圖であつた。

「門の戸けわしく明けてお宿より御狀が參りましたと、隣の床の客へ屆けるに、何事かと云ふ聲して、是は日出たや、金銀抓取りの內證、江戶の手代より申越した關東筋風吹きて、米俄にあがりなれば、是より大阪に下りて、西國米大分買込あがり請けたらば、太夫を根引にして、我等が奥樣にする事ぞと、此たびの仕合を祈れ、夜が明け次第に爰を立つぞと、今すこしの別れ惜み床を離れかねける、時に伊丹の人此事を聞耳立て、未だ帶も解かぬに起き別れ、面白き最中を思ひ捨て、我里に失念したる事ありとて、首尾かまはず立歸り、早駕籠急がせ伏見より飛脚船かりて、其日の四つ前に大阪の北濱へ着きて、問屋をひそかに語らひ、米大分買ひこみけるに、はや晝よりあがりて、唯一時のうちに三十八貫目丁銀にてもうけ込み、此思ひ入れに油買込み、又四十四貫目あがりを請けて機嫌よく伊丹に歸り、親仁に小判の山を見すれば、世間に金の珍らしき時分なれば、是れ長者の心なり」(織留)とある町人の機敏なる戰術は、桶挾間戰役に於ける信長の疾風迅雷的行動、賤ヶ岳合戰に於ける秀吉の萬事早速の掛引と同一手段で、「多くの石塔の樒、水疎く日に枯れて、見苦しきを方丈へ斷り、殘らず石塔に忌日彫付けてあれば、毎月樒を立てかへ、水を改め申し、掃除料各々より八錢づゝ御意に掛けらるべしといふ、是は一段なる事とて、早速旦那方へ觸れて埒明けぬ、偖其枯れたる樒を抹香にはたかせて、是を賣るに元手入らずに頭から三人口、心易く次第に、寺々多く請負、後は十人してはたき抹香を拵へ、上方へも登して、大分の利を得て、寺町の門際に、小錢店を出し、まづ布施の包み銀ありと、看板出し、金子百疋より白銀貳兩、壹兩三兩貳匁壹匁迄包み置き、壹匁に付、二錢づゝの包賃にて、封じ目に、我家の印判をして遣しぬ、常の所にて小玉拂底の時分、かけあはするに、面倒大かたならず、偖も氣散じな事と、皆此店に立寄て、

日毎の商ひ、京の三井が現銀店にもまけず、例令へば貳匁の包銀壹匁八分あつても、此家の印判を證據に、北寺々より、貳匁にして跡へ戻る事、いよ／＼出家衆と示し合せ、談義の參錢、時米を買込み、溜り銀を預り、又寺の入用を仕送り、十年經ぬうちに、三百貫目の身代、姫路寺町の花屋と云ふ兩替は是れなり」（新永代藏）とある手堅い遣口は、家康信玄の推步打算的兵法と軌を一にしてゐる。武器の戰爭は終を告げて世は牙籌の合戰となつた。武力の競爭が經濟戰となつては町人全盛の世となるのが當然である。町人全盛となりてより、文化はもう或特殊階級のものでなくなつた。平和の克復は町人の自覺自衒を促して、文化の光輝の下に、太平の歡樂を享受しつゝあつたのである。

四　新文化の普及

豆を嚙んで英雄を罵つた荻生徂徠は流石に活眼家であつた。享保十一年、台命に應じて政治を論じ、當代の弊を痛論して、太平策を起艸したが、其中に云ふ「在レ安レ民、在レ知レ人と云ふ二句は聖門の萬病圓なり、制度を立替る樣なる大儀も此二句に非ざれば行はれず、何の世何れの國にても、又雜覇の小道を行ふ人も此二句に非ざれば功をなすこと能はぬなり、（中略）安民と云ふは、世俗の所謂慈悲と云ふやうなることには非ず、民を安穩ならしむことなり。安穩ならしむると云ふは、飢寒盜賊の患もなく、隣里の間も頼もしく其國其世界に住よく覺えて、其家業を樂みて民の一生を暮すやうになすことなり、天命を受けて天子となり諸侯となれば、民を安くするは、天下諸侯の職分なり、（又略）後世の人君下に向ひて、已が才智を誇り、威勢を振ふは、民を安くする心に住せず、若輩なる心を離れぬ故、却りて下の爲に輕んぜらる。是れ皆小量の致すところなり、父母の子に向ひて才智を爭はん大人げたき業ならずや、殊に近來の風俗は上をば恐しきものゝやうに下に思はするを一つの術と覺ゆる人多し、これによりて臣は君を恐れ民は奉行をけすみてひたものにぬり隱すゆゑ、下情壅塞して上に達せず、上下隔絕して否の卦の勢になりゆく、皆安民の心に住せぬ故也。又在レ知レ人と云ふは智の德なり、（又略）人君は人を知るを以て智とす、是れ智の德なりと雖も全く仁の道なり、何ほど民を安くする心に住して明幹に其工夫をなすとも天下國家は我一人にて治められぬものなり、人の才智に限りあり、精力に限にあり、思慮の及ばぬ所なり、故に人君の智は我智を智とせず、よき人を知りて委任するを人君の大智とす」と安民知人の二つについて論じ、知人の道を細說しては、「唯其人を眺め居て其長所を知らんとするゆゑ一生眺めても見えぬなり、人は活物なり過し昔を見て、

其人を知り極むる事あるべからず、用ゐて見れば長處は顯はるゝ者なり、委任すれば長處は益々働きて今までなき才智も生ずるは活物なる故、人君の用ゐやうにて人才を養ひ成し、器量の人出來るなり、我と吾身にても吾才の長處を知らぬは用ゐて見ぬ故なり、まして人の才智を用ゐずして知らむとするは神通を得むと願ふに似たり、愚なるの甚しきに非ずや」と喝破し、人才の登庸を切論しては「今の諸侯を見るに、先祖正統の血脈は大形斷えて旁支より家を繼ぎたる類ひ十に七八なり、是を以て占ふに、元祖の澤漸く盡くるに似たり、されば上に愚庸の人多きも最早其時節と見えたれば、賢者を下に求むる時節なりと知るべきなり、此一句をよく受用して國家を治めば、たとへ制度を立替へずとも、中醫の療治には當るべきなり、」と急所を衝き、「今時の治めは鼻の先にて世話をやくを政に心を盡すと云ふ、天地の造化は移り行くものなり、人は活物なり、故に人事の變日を逐うて生ず、是れ生々不息の妙用なり、斯く生々不息なる物を手に捉へて作り直さんとするは強く抑ゆるほど先にて刎ね返ることを知らず、聖人の道は長養の道なり、造化に隨ひて養ひ育て、物のなり行きを能く知りてかくすれば先にてかくなると云ふ所を合點してわざの仕かけを以て直す時は目前には迂遠なるやうなれども、先へ行きて自然に心まゝになるなり」と時代政治家の鼻元思案を笑ひ、家康の政治を說いて「是れ悉く神祖の大道術なり、されども御代々の執政無學なる故、此大道術にひかへ綱を付ることを知らず、強き風に帆を十分に揚げて船を走らかして錨を引かさるが如し、今は止りなく覺え侍るなり」とまで極言してゐる。初は新時代の空氣を吸收してゐた江戸時代も、門閥政治で階級制度が牢固となつて來ると、總べてが型にはまつて、人才登庸の道は塞がれ、執政共が杓子定規の不融通千萬な政治振り。享保年間のやうに賢明の將軍が襲職すれば、政治に活氣が橫溢すれど、さもなくば、陳腐沈滯を極め、太平の餘澤で唯因循姑息な無事を裝つて往くのみである。此間に獨り自由の天地に活躍してゐたのは町人級であつた。中にはあるほどの伊達仕盡して、飽くまで現世的歡樂を貪るのもあり、國主執政の如き身分に憚る所もなければ、勝手氣儘の榮耀三昧に日を送るのもあつた。世襲政治の世に在りて町人級のみは有爲轉變が最も激しかつた。昨日の大盡は今日の紙子姿、此のみは實力競爭の運だめし、力だめし、一旦氣が緩めば、元の杢阿彌となることは珍らしくもない。町人考見錄の序に、「田舍の町人はそれ〲の國主地頭に憚り、其上目にさのみ美麗を見ざる故に、心自ら移る事なし、爰を以て多く代を累ねて業を勤む、京江戸大阪の町人は其先祖、或は田舍又は人の手代より次第に經上

り商賣をひろげ富を子孫に傳へんと其身一代身をつめ家業職方の外に心を道かず、艱難辛苦の行を積んで、其子家を繼ぎ其者は親のつましき事を見覺え、身は其家のさまで富まさる内に生たち習ふ故に、漸く其一代は守り勤むといへども、又其子孫の代に至りては、はや家の富貴より育立、物事の艱難、金銀を大切といふことを知らず、故に自然と世風を見習ひ、心高ぶり、家職を人任に仕置て、うか〳〵と月日を暮し、身體に物入多く成行くまゝに、其身も漸く年老い、物心つくと雖も、家業の道を知らず、物入の多くなるにまかせ、手廻しに人の金銀を請込、次第に利まどひに成、果は家を潰す者、世の習はしと成り、凡そ京師の名ある町人、二代三代にて家を潰し、跡方なく成行事、眼前に知る處なり」とあるがやうに、貧富は手のうらを翻へして、榮枯盛衰が定まらなかつた。

とにかく新陳代謝の氣運が熾んであり、門閥の世に非門閥であつたから、町人に依りて形づくられた文化生活は、活々として生氣の縱横するものであつた。昌平黌は林家の世襲で、昂然として學閥を建設してゐたが、町人相手の浮世草紙には學閥がなかつた、淨瑠璃作者にも門閥はなかつた。俳優藝人には門閥を生じたが、一人二人の獨占を許さずして、幾多の大小門閥家がありて、互に腕を磨いたのであるから、阿呆大名の世襲とは同じくない。ブルジョア級の鑑賞を目的とした狩野家に樣に依りて粉本を畫く狀態であつたが、町人に保護せられた光一蝶の徒は頻りに新意を出して盛かに清新の氣を鼓吹してゐた。

劇の全盛は、町人のお蔭であつた。そこには椎茸髱やぶつさき羽織の觀客もあつたが、大數は町人が見物人であつた。三都の廓岡場所には武士も通りん坊も出入したが、最もよき顧客は町人であつた。小說繪本の如きは種々なる階級者に愛讀されたとは云へ、其の最も多數の讀者は町人階級であつた。義太夫節と云ひ、河東・一中・富本と云ひ、清元・常磐津と云ひ、小唄端唄の類と云ひ、之に親んだものは多く町人階級であつた。錦繪の愛好者は又町人階級を重なるものとなさねばならぬ。江戸の文化生活は町人級の生活であつた。

しかし要するに其生活は現世的歡樂の生活で、深い道念の如きは、全然缺乏してゐた。西鶴の浮世草紙や八文字屋本に現はれたる觀念、黃表紙・洒落本に見えたる思想は町人階級の觀念思想であつて、本能滿足の現在主義に外ならなかつた。けれど本能滿足の現在主義は、獨り江戸時代の町人階級に限らない。天平時代の佛教全盛の世も現世安穩現世極樂淨土の現在主義を信奉してゐた。平安朝の貴族は本能滿足の現在主義を極端に發揮してゐたのであつた。陽氣な華やかな日本國土に於ては、自

づと斯る趨勢に向ふべきのであらう。修羅闘爭の世となりて、眼前に生死の一大事を見ること多くなつて、やゝ内面的省察に向つて來たが、禪宗の教理は、深い考察よりも、寧ろあきらめを誨へた。禪と一路相通ずる茶道の流行は趣味生活を鼓吹して國民をして之に趨かしめたのである。

茶道は文藝的であつて、哲學的でない。趣味であつて考察でない。茶道を取りて、道德に結びつけんとし、若しくは理智的解釋を施さうとするのは、茶道本來の主旨でない。茶道は飽くまでも文藝的であり、趣味である。しかも茶道は禪の出世間的なるが如くならずして、世間的であつた。

茶道は奢侈浮華と相容れるものでない。閑寂を喜び、わびを尙び、質素淡泊を重んずるものである。精神はそこにあつたが事實は必ずしも然らず。左には張思恭の彩色の釋迦圖、右には牧溪の墨繪の觀音圖を掲げ、卓には金襴を懸けて、胡銅の花瓶を置き、机には錦繡を敷いて、鍮石の香匙火箸を立て、障子の畫は日域の後素に非ずして、漢朝の丹青、香臺には堆朱堆紅の茶箱を並へ、茶壺には栂尾高雄の茶を入れ、西廂の前には一對の飾棚を置いて、種々の珍菓を積み、北壁には一雙の屏風を建てゝ、いろ〳〵の懸物を構へ、茶禮終れば美肴を調へて酒を勸め、或は歌ひ或は舞ひ管絃の興に夜の闌なるを知らぬとは、茶道興隆時代の茶會であつた。凝りに凝つた東山殿の茶會は名物名器の陳列であつたらう。信長も茶器の名物蒐集には少からず苦心をしてゐる。永祿十二年二月には大文字屋の初花、祐乘坊の富士茄子、法王寺の竹柄杓、池上如歴のかぶらなし等を召され、元龜元年三月には天下に隱れなき堺の名物、天王寺屋宗及の菓子の繪、藥師院の小松島、油屋常祐の柑子口、松永彈正の鐘の繪を召され、天正三年十月二十一日には三好笑岩より三日月の葉茶壺の献上あり、同十月廿八日には、京堺の數寄者十七人を招き妙光寺にて茶會あり、座敷の飾は床に晩鐘の畫、三日月の茶壺、違棚に置物七臺に、白天目内赤盆につくもがみ、下には合子しめきりを置き、おとごぜの釜、松島の壺の茶、宗匠は千利休であつた。天正六年正月朔には新築の安土城内にて中將信忠以下等を會して茶の湯の振舞あり、「御床に岸の御繪、東に松島、西に三日月、四方盆、萬歲大海、水さしかへり花、珠光茶碗、圍爐裏に御釜、うは口くさりにて、花入筒也、御茶道、宮内卿法印」とある。天正十三年十一月朔日、北野松原の大茶會に於て秀吉は、粉がしにても苦しからず、五郎八茶碗結構なりと、一般同好の民衆には沙汰してゐるが、秀吉の茶道具、千利休、天王寺宗及、納屋宗久等の道具はいづれも千金に替へ難い結構なものであつた。外國貿易の盛んな、茶道の流行した泉州

には、茶人少からず、名物が多く集中してゐた。就中、笠原道念の肩衝、萬代屋道安の投頭巾（茶入）・九重壺・珠光茶碗・竹円茶碗・筒・竹茶碗・灰被、茜屋吉松の木野邊肩衝・弦付茶入・牧溪鷄繪・斷江茶碗・寅申壺・船、小西道純の驢蹄茶入・肩衝・内赤盆、壁屋宗悅の末松山石・象潟（葉茶壺）・灰被天目、水引花繪・醋色合子・小野肩衝・肩衝、油屋常祐の細川晴元天目・臺・淺茅竹茶杓・舜擧筆芙蓉繪・臺・餌畚水指、小島屋道察の客來一味（唐畫）・枯木・時雨壺・藤瓢五德・船・臺、輕粉屋宗陽の肩衝・虛堂文字、茜屋宗佐の超昌花繪・鶴頸茶入・驢蹄茶入・柿茶入、淺路屋宗和の夕陽繪・太鼓茶入・餌畚茶入・赤松則祐肩衝、今井宗久の浪繪・臺・紹鷗天目・虛堂文字・志野茶碗・鍋釜・芋頭茶指・開山五德・林哲釜守德竹茶杓、今井宗春の蟲繪・飯銅・内赤盆、網干屋道琳の淺見天目・憑海栗繪、伊勢屋道滴の李忠筆瘦馬繪・圓座肩衝・唐茶碗・肩衝、太子屋宗宇の牧溪大根繪・臺、小島屋の肩衝・粒花花瓶、藥師院の肩衝・飯銅・子昂硯・葉室文琳、天目、石橋良叱の串指雀繪・釣瓶・坂東屋筒・蝸牛花生、松江隆仙の砧花生・觀物利墨跡・李安忠筆瘦馬繪、天王寺屋宗及の文琳茶入・天目・臺・牧溪筆虛堂贊船子繪・不破香爐・餌無花生・布袋香合・梁楷筆鷺丸繪・官王釜・志野茶碗・水指・合子・鍔口柄杓立、了無の貨狄船・黃天目、石津屋宗晏の雀繪・深山茶壺、錢屋宗納の無準文字・虛堂文字・須彌釜・筆筒・宗本の貝畫繪・玉礀筆夕照繪・東宗淵の翻・虛堂文字・千種茶入壺・内赤盆・圓悟文字、武野宗瓦の小茄子・漁父硯・少茶杓、正通の牧溪筆摩腹布袋・翁天目・月山筆稻繪・蒲公英繪、千宗易の惜張釜・鶴一聲花生・香爐・三好實休肩衝等は茶道名譽の品々であつた。其中には直接に外國舶載のものもあらうが、商業繁榮の結果として、堺の商人が富裕であつたから、東山以來の名物品が自づと流れ入つたことゝ思はれる。君臺觀左右帳記を見ても、御飾記を披いても、東山殿の床飾は中々に大したものであつた。茶道は簡素であるべき筈であるが、自づと名物名品の蒐輯に趨き走るは、畢竟數寄と云ふ趣味から來るべき當然の結果であらう。關東の富豪には茶の湯熱心の數寄者もなかつたが、上方の俄分限者は皆爭つて此道に向つたのである。淀屋、山村の入札に茶道具の多かつたのを見ても此風潮は察せられる。しかし特別なる數寄者でなくとも、茶の湯趣味は知らず識らずのうちに國民全體に普及されてゐたのである。よしや四疊半に立籠らずとも、松風と沸る釜の音を聞かずとも、一碗の苦茗を啜らずとも、茶道趣味は國民趣味となつてゐた。其建築も、其食物も其服裝も、日常坐臥の萬般は、すべて茶道趣味から出發してゐたのである。國民は敎へられずとも、命ぜられずとも、自然と茶の湯趣味に養成され、訓練されてゐたのである。現世的歡

樂を趁ふ社會が此趣味を背景として享樂しつゝあつた。

元和偃武以後の平和は、茶の湯趣味より出た文化生活を國民に營ませた。云ひ換へると、國民は茶の湯趣味に依り、文化生活を營み得たのである。猶細しく云ふと、茶の湯趣味は新文化を通俗的に普及的にしたもので、此趣味に訓練された國民は此趣味を通じて新文化を咀嚼し、玩味し、其恩澤に霑ひ得たのである。必ずしも俄分限者のみでなく、太平の餘澤に浴して享樂したばかりでなく、民衆が此趣味に依りて新文化の餘光を仰ぐことを得たのである

暫く舊文化を顧みるがよい。推古期に將來された外國文化も、天平時代に傳來した外國文化も、平安朝に樹立された日本文化も、或特殊階級のみ其恩惠を被つたものである。外來新文化は舊文化と其性質を異にする。漢唐訓詁の學が宋儒性理の學と其風を異にするが如くに違ふ。猶宋元の畫風が形似傳彩を超越して、精神氣韻を尚んだが如くである。六朝以來盛んであつた南方思潮は唐に入りて波瀾萬重の觀があつたが、宋に入りては千丈の洪波巨濤を起し風に開闔、積水滿天の狀となつた。殊に南方老莊の思潮は禪の直接頓悟と共通する所ありて、此兩思想は相聯結して、宋元の文化を作り上げた。鎌倉以後。足利時代に注ぎ入つた新文化は即ち是れである。しかし此新文化の餘惠を蒙つたものはと問へば、當時の權勢に與つた武士階級と、智識階級であつた五山緇流の徒とのみであつた。一般の民衆は生活難よりして、德政を呼號し、土一揆となりて、發動するほどに新文化の恩澤に均霑し得なかつたのである。宋元文化と云ひ、禪の教理と云ひ、彼等民衆の耳には餘りに難澁し過ぎたであらう、彼等の目には餘りに佶倔過ぎたであらう、彼等の智識には餘りに解し得られなかつたであらう。然るに宋元の新文化も禪の教理も、一碗の苦茗の裡に融解されると、よし其味は苦いにしても、難澁ではなかつた。佶倔解し難いものではなかつた。茶の湯は平易であり通俗である。其趣味は極めて通俗で普偏であつたから、或特殊階級の專屬でなくして民衆的になつたのである。

恰も應仁の亂で門閥階級が打破されて、實力の競爭となり、武士級の間に智力の雄長があるとともに、社會全般が解放され、平和の克復に依りて、經濟上の活動起り、其氣運に乘じて町人級の勃興するを見るに至つた。是に於て茶道趣味に融和せられた新文化は町人級に向つて注ぎ入つたのである。されば町人級 茶道を理解せずして、其洗錬せられた趣味を享受するを得たのである。彼等が耽つた現世的歡樂の背後には茶道趣味に融和せられた新文化が潜んでゐたのである。

江戸時代を通じての町人生活を見ると、煩瑣なる現世生活の

裡にも目づとのんびりした餘裕があつた。無學文盲なる熊公八公の社會にも何等かの趣味生活ゝりしを認むべきである。庄屋もすなる文學には川柳もあり、冠附もあり、狂歌もあつた。伊勢參宮、三十三所の札所參り、八十八ケ所の遍路、大和廻り、近いところでは六阿彌陀參り、恵方詣り、初卯詣で、妙見詣でなんどと、信心にかこつけての遊山保養であつた。巫山戲散らし、狂歌を讀み散らしての彌次喜多の旅行には太平の氣象が氤氳としてゐる。江戸時代の士女には暗い影なるものが殆んど見えない。陽氣で、はしやいで、のんきで、太平樂で、そこに趣味性が横溢してゐる。

京の祇園祭、大阪の天滿祭、江戸の山王、神田祭を初め、祭禮なるものは到る處にある。村々には鎭守の祭があり、大社と小社とを辨ぜず、大は都市より小は村落に至るまで時候〱に祭禮がある。多くは夏祭であるが、春祭秋祭のところもないではない。敬神崇祀の觀念から出てゐるのではあるが、江戸時代に在りては一般民衆の娛樂であつた。鉾山車の行列は固より、踊屋臺も出れば村芝居もある。酒飲み、赤飯祝うて、歌ひつ舞ひつ囃子しつゝする都鄙の娛樂は、太平此上なしである。正月七草までの遊興、三月五日等の節句は上下おしなべて祝ひ歡んだものである。近時生活の改便(敢て改善と云はず)を説くものゝ往々にして此等の娛樂を目して、國民惰弱の結果なるが如くけなして、國民生活より奪ひ去らんとする。斯くして生活は沒趣味となり、世智辛き世間には多くの神經衰弱症患者を生じ、各階級の闘爭を激烈にし、人生をして暗黑面を多からしめんとする。日本をして露西亞たらしめんと欲すれば、それもよし。現在の日本が頗る陰氣くさく、新聞に雜誌に、文學に其傾向の多からんするを見れば、國民趣味の漸く乏しからんとするを思はざるを得ない。

江戸時代の國民趣味を必ずしも許いとは云はぬ。其の悠長にして餘裕のありたるは、又必ずしも生活の緩なりしが故でもあるまい。畢竟するに新文化が將來したる趣味性に歸着すべきである。換言すれば、茶道趣味が產出したものであつた。日本に起れる幾多の問題が常に徹底せざるは、或は此趣味性の致す所であるやらも知れぬ。そこに短所もあれば、又長所もある。しかし生活問題の行詰つた足利時代は、門閥階級の打破となり、種々なる社會運動となりて、天下の大亂を釀した。幸にして茶道趣味の新文化建設ありて、平和の克復とともに文藝復興の曙光となり、文化運動の開始となり、町人階級の興起に依りて、國民趣味は普及し、江戸三百年の士民は太平を謳歌することゝなつた。其の鎖國政策を笑ひ、島國的根性を云々するものあれど

も、民衆の平和よりして云のば、鎖國政策は寧ろ上乘であつた。外國と交渉して事を起すが如きは、民衆の爲に極めて不幸である。武陵桃源はいつまでも武陵桃源たることが桃源人民の爲に幸福である。別に天地人間に非ざる所は永遠に人間との交渉なきを祝福せねばならぬ。江戸が鎖國であつたのは、江戸民衆の爲に此上ない仕合せで、之に依りて、太平の歡樂を十分に享受し得たのである。

日本の國民趣味は日に移り易らんとしてゐる。如何に變らうとも、趣味なるものは永遠に保存して行かねばならぬ。趣味なき國民は心の荒び行く國民である。如何に物質的文化が進まうとも、精神なき趣味なき文化は國民に何の寄與する所があらうか。心の糧なき野武士は曾て京都の文化に劫火を放つて盡く之を焦土としたのであつた。幸に元和偃武後の平和が國民に趣味ある文化を將來し、我が國民は此に救はれて三百年の太平を春の夜の夢の如くつゞけてゐたのである。まことにそれは過去の美しい夢であつた。我等の記憶よりは次第に遠からんとするお伽噺のやうな夢であらう。

人類愛と世界平和を基調とする
近代文藝の考察

千葉龜雄

理想郷か。地獄か。

この問題が、永遠に、不變に、あらゆる藝術家の前に提出されて居る。そして藝術は、近代に進むに從つて、人生の地獄相を描くことが、刻一刻に深刻になると見られて居る。さらば近代の藝術は、哲學として、人生の否定を示標とするものであらうか。大いに否。

たとへば、多くの場合、自然主義は、人生の醜悪面のみを描くと考へられる。また人生の無意義のみを眺めると見られる。けれどもその作家の意識に、人生の眞美に對する認識がなくて、又た人生を有意義と意志することがなくて、どうして醜悪と無意義との批判と認識が出來やう。だから、どんなに醜悪を描いたものでも、それが藝術である限りは、必ずその醜悪の裏に、隱された光明の理想を假定され得ないものはないのである。チエホフが、人生に絶望したと云つても、はじめから、裏ぎられるところの、希望を持つて居ればこその溜息であらう。モウパスサンが、いくら人生の醜悪を鋭どくあばき出したと云つても、なほそれを享樂する爲の彼れの生涯であつた。この二人は、悩み乍ら、悩みながら、なほ自分達の藝術的唯一表現を、その否定した　生から求めつゞける外はなかつた。その矛盾した執着は一體どこから生れたか。悩んでも、憎んでも、なほどんな形でも、人生を愛さずには居られなかつたからである、愛のないところには執着がない。

かくして藝術は、人生への愛を基調とする。

愛すること、知ること

そこで一つの疑問に逢着するであらう。すでに藝術が、溢れるやうな人生への愛を以て藝術家に眺められる。その眺められた近代藝術の現實相が、ますます醜悪になつて行くのはどう云ふ譯であらう。言をかへれば、どうしても救はれない人生が、より多く題材としてとり上げられるのは、どう云ふ譯であらう。無限の人生愛を懐いた藝術家によつてすらも、これほど情けない、みすぼらしい人生と眺められる現實ならば、こんな煩らはしい人生は、所詮は人類生活の、當來を否定するに値するだけのものではないかと。

この答へは複雜になる。第一は人生が醜悪であるとか、または光明であるとか云つても、それに客觀性の認識を與へる標準がどこにもないのだ、一體醜悪とは何であるか、光明とは何であるか。人間性の本質はどんなものであるか。近代文化は、信ぜんとするよりも、先づ疑はんとする意志を多く基調とする。理知の目覺めである。この目覺めは、藝術に於いても、あらゆる前代の權威を覆へした。先づ鋭尖な理知の光りによつて、人間性の何ものかを檢討し始めた。そこにはあらゆる醜悪が、ますます深刻に天日の下にさらけ出された。前代に類のない陰影の微妙さを以て、無限に複雜した人間性が藝術の上に織り出されて來た。そうも無慈悲に暴露された、深刻な人間心理の惡魔性について、現代人が、人類の將來を悲觀するのも一應はあり得る

理論である。けれどもよく考へて見れば、この人間性の暗黒な一方面は、必ずしも現代になつて始めて現はれたものではない。たゞ前代に發見しなかつたものを、近代になつて發見されただけのものである。

けれどもまた一面に、前時代には見られなくて、近代に於いて、始めて認められる人類性の罪惡もある。社會の共存、もしくは人類愛の意識を益す必要とする近代に、逆にそれに逆らはうとする人間心理のやうなのも共一つである。同じ戰爭であり乍ら、昔の一帝王の所有慾と、近代資本家の所有慾からの動機では、共戰爭の樣式が違ふ。また原始時代の人と人との戰闘と、機械と人間との戰闘とでは、各當事者の心理の深刻さが夥しく違ふやうなものである。

それは何にしても、人類心理の惡魔性が、近代の藝術に於いて、より深刻に、より幅ひろく暴白されて居ることは事實である。たゞそれが暴白する興味のために暴白するものではなくて、かへつてそれを修正する爲めに暴白するものであることを注意しなければならない。修正する信念が强ければ强いほど、ますます共の抉摘が深刻になるのである。このことは一見矛盾のやうに思へるであらう。けれども醫師が或る患部を治療する場合に一番必要なことは、一番よくその患部の本質を知りつくすことであることを考へたならば、そこに何等の撞着をも感ぜぬであらう。つまりは愛すればこその憎みである。何よりも「知る」ことを前提とする。そして愛することは、それをよりよくし、より幸福にする信念の前驅である。前代の理想主義と呼ばれる藝術が、我等をして、物足らなく、からつぽな幻想と思はする根據がそこにある。それが現實を醜いものと見て、それを修正しやうがために、ある理想の樣式を提出することは差支へない。たゞその現實を見据える理知の透視が鈍く、不完全であるために、その不透明な現實の上に築かれた理想が、必然性を缺いた空想の遊戯となるのは自然の結果でなければならない。それではいかない。

近代の藝術家が、如是に刻一刻に深刻になり行く人間現實の暗黒面を見つめれば見つめるほど、それを修正して行かうとする人類愛が、ますます熱烈に燃え、反撥され、刺激されて行く道程は、たしかに壯烈であり、ヒロイックである。尤も批評家によつては、この人類愛の誕生を、自然主義の物質觀に反撥することから生れたものと見るのであるが、それは寧ろそうではなく、あらゆる藝術に潜む人道的精神が、その暗黒面のかくば

かり深刻であることを知るにつけて、自然主義の中にさへも、反つて強く燃え上つたものではないか。つまり自然主義の底にすらも強い人道主義は生きて居たのではないか。ゾラが自然主義の巨匠であつて、同時に偉大な理想主義であつたことがそれを實證しては居ないか。この假説は、現代の世界文學の主潮を横斷するところの、新浪曼主義、もしくは廣くいふ現實主義、もしくは浪曼的現實主義の名の下にあつて、はつきりとそれを肯定されて居る。かう考へて來ることによつて、自然主義と現實主義は、決して有機的交渉のない無意味のつながりではなくて、寧ろ自然主義を通り越して來ない分には、現實主義の出生が見られなかつた事がわかる。現實主義とは、正確な科學的な觀照の中に、靈魂と唯心を求めやうとするものである。新浪曼主義も、浪曼的現實主義も、みなその中に包含される。そしてその二つの主義を通じて、ことに人道主義が強調されることは注意すべきである。

ジヨセフ・コンラウドが、「われわれ人類が生きる爲の一番強い信念は、現實よりもなほはつきりした、想像的生活の樣式を自分の上にとり上げることである」と云つたのもそれであれば、メレジコフスキイが、現實主義的であればあるほど、なほ理想主義的になると、ドストエフスキイを評して居るのも此の一點を指すのである。

人類愛の二形式
情緒と教條と

そこで近代藝術にあらはれた人類愛の精神と樣式を、大よそ二つに規定することが出來やう。それは人類愛と平和愛とである。人類愛の方は個人愛の總和である。或は隣人の愛である。個人が互に愛し合ふ場合に、すべての人類は平等に自由に抱擁し得る。平和愛は世界愛である。國際愛は、まだまだ國家を主力とする觀念からはなれ得ない。行政上の國家と國境を超越するところに、始めて世界愛の希望が開ける。世界愛は所詮個人愛の到達する最終の旅程でなければならない。

近代藝術にあらはれた人類愛には、また二つのちがつた規範がある。それは教條(ドクトリン)としての人類愛を説いた制作と、情緒(エモウシヨン)としての人類愛を描いた制作である。教條としての人類愛の制作でも、もとより作家自身に、溢れるやうな人類愛を持つて居る。しかし制作に對する場合に、それが人類の幸福であることを充分意識して、その教旨を宣傳しやうとするものである、處が第二の方は全くちがふ。それが人類愛であるか、また人類愛が、どんな效利を持つものであるかをあまり意識しない、また意識

してもそれに何ほどの重點も措かない。たゞ自己の表現として、どうしてもこれ以外の樣式がないからそれをその儘に表現するのである。ベンジヤミン・ウエルスがウヰクトル・ユウゴオの人道主義を評した中に、「ユウゴオが貧しい階級、虐たげられた階級を正しいものとし、統治者や有產階級を不正と見た場合に、それは理性よりも感情によつたものである」と言つて居るが、それにも拘はらず、ユウゴオは大體に於いて敎條派に屬する人道主義者である。またウヰルソン・フオレツトが「もし最近五十年間に、英國の小說が擔ふべき特殊な手柄があるならば、それは社會共存（ソリダリテイ）の感情と意義を强調したことであらう。それは現代の小說、――とりわけ英國と露國の小說に、きはだつた特質だ」と說いて居るが、トマス・セルツツアは、偶然にも外の本で、この見方を駁して居る。なるほど英國のチツケンスなどは、深い憐れみと理解をもつて無產階級を描いて居るがどこかよそよそしい氣分がある。それに取扱ひ方に馬鹿にしたやうなところがある。「見ろお前達社會の半分は、こんなみじめな生活をして居るのだぞ！」と彼等の苦しみを、いやに世間に見せびらかすいや味がある。所がロシヤの作家達はそんなことがない。彼等は貧しい人々の一人として、內面から貧しい人々を描くのだ。有產階級に對して、芝居的な身ぶりをする考へはないのだ。或る特殊な不正、不義などに抗議するのではない。そこでは貧しい者が、たゞ我々と同じ人間として在るが儘に表現されて居る。そこでは廣い人道精神を呼吸しながら、デモクラチツクの魂が、まことの宇宙をてり返して居る。その天眞爛熳な氣の好さも、「すべてを理解することは、凡てをゆるすことである」などと云ふ、悟性の上の信念から生れたものではない。それは天性の感情から出る。そしてその感情からは、「我々はたゞ觀て記錄すればよいのだ。我等は他人をさばく權利を持たないものだ」と云ふことを敎へられる。

セルツツアのこの見方は或る點までたしかに正しい。もとよりロシヤの作家も數が多いことであるから、一々を其例にあてはめる事は出來ぬが、ロシヤの作家には一般にかう云ふ特性がある。比較的多くがこの傾向を帶びて居る。私が先に敎條と情緖の作家として二つに分けた。その第二の方を代表する人々としてロシヤの作家をあげやうとする理由がそこにある。

ゴゴルその他

作篇をあぐるには限りがないが、何と云つてもその傾向を最もよく語るものは、ニコレイ・ゴゴルの「外套（ザ・クロアク）」でなければならない。これは或るロシヤの一作家が、「我々はすべてゴゴルの

「外套」から承けついで居るのだ」と語り、その十年後に現はれたドストエフスキイの「貧しい人々」は、單にゴゴルの短篇小說の擴大に過ぎないと云はれて居るほどすぐれたものである。

「外套」では貧乏で交際下手で、氣の毒なほど働らきのない安官吏のアカキイ・アカキイエウヰツチが主人公になつて居る。僅かばかりの給料で二階借りの一人ぐらしである。漸やく食つて居るばかりだから、新らしい靴足袋一足買ふ譯にも行かぬ。始終着て居る古外套も、外套と云ふ名ばかりで、ロシヤの寒さには何の足しにもならない。洋服屋へ持つて行くと、あまりひどく繕つて、もう繕ふがものはないと斷はられる。止むを得ず一枚新調するとする、夫からといふもの暫らくの間は、燈火も食物も極端にきりつめて金を溜める。それで拵へたのが愈々出來上つたので、得意になつて役所へ着て行く。平生なぶり者になつてるアカキイウヰツチが、新調の外套を着て來たと云ふので、同僚が寄つてたかつて冷かした。どうでも奢れとせめる。それを課長が引とつて、アカキイウヰツチの代りに自分が祝宴を開かうと云つて呉れる。其晩アカキイウヰツチも一同と御馳走になつて、好い機嫌で夜遲く淋しい往來を歸つて來る。其途中に追剝が出て、彼を半死半生にした上、新調の外套をさらつて逃げて了ふ。すつかり失望したアカキイウヰツチは、警察や何かへも捜索を願ひ出たが、劍もほろろの挨拶で相手にして呉れない。警察から歸る時風邪をひいて、其まゝ熱病になつて死んで了ふ。其後になり、彼が外套をとられた橋の近所に幽靈が出て、よく通る人の外套を追剝ぐ。彼に不親切であつた警察の長官も、深夜外姿の許へ行く途中でまた外套をとられた。幽靈は何でも死んだアカキイウヰツチだと云ふ噂であつたが、捕まらうとすると物を言つたのも妙だし、それに幽靈の顔を見たものは、姿もアカキイウヰツチとは違ふし、それに彼にない髭があつたと云ふ話であつた。

これだけの內容が、巧まない素的なユウモアと、あらゆるものを抱擁し、あらゆるものに透徹する人間的な憐れみで描かれて居る。此時代の上官と云ふものが、どれほど四角ばつた非人間で、官僚的な人類であつたかゞ、恐ろしい嘲りのペンであばき出されて居る。

レオ・トルストイが、序文を書いて、その農民生活を主題とした作物をほめたエス・テエ・セミヨノフの「下男」と云ふ短篇小說がある。職を探しにモスカウへやつて來た田舍の青年がある。同村から出た友達で、或る富商の御者をして居る男の傅手で、其家へ雇はれることになつた。それには今まで居て同じ仕

事をして居た老人を追出さねばならぬ。貧乏なその老人には女房があつて其上澤山の子供が居る。仕事を始めにやつて來た其若者が、歸る時何心なく其門番の前を通ると、老人夫婦の話が聞える。明日からの追出される自分達の運命を悲しんで泣いて居るのだ。靑年、それを聞くと氣の毒になつた。自分がやつて來た許りに、何の落度もない老夫婦の生活を暗く脅やかすのが良心にぐつと來た。どうしやうか。考へ拔いた揚句、思ひ切つて折角在りついた仕事から快よく手を引いて了ふ。明日から路頭に迷ふのを承知の上で。

こうした純な内容が純な技巧で語られてゐる。トルストイがそれを評して、この作家の感情が、そのまゝ自分へ通じて來る。私はこれを讀んで幸福に感ずる。それは丁度私が何か或る一つの善い事をしたか。若しくはしやうと準備して居るやうに思へるからだと喜んで居る。本とうに美くしい憐みの情緒の現はれである。

ドストエフスキイの「罪と罰」や、「貧しき人々」や、「辱かしめられ、傷けられた人々」は改めて擧げるにも及ぶまい。「正直な泥棒」は、私にとつて忘れられない印象を持つ作品であるばかりでなく、ドストエフスキイその人の人格を、その儘に語るロシヤ型の美くしい物語である「正直な泥棒だつて？ どうして泥棒が正直であり得ると云ふのか。」「其通りさ。泥棒が正直な人間だとは云へない。そんな話はどこにもない。唯だ私は、あの男が、正直な人間であつたと云はうとするのだ。私にはそう思へるのだ。たとへ彼の男が盗みをしてもさ。それが私があの男を氣の毒と思ふ譯なのさ。」と著者の影法師らしいイヷニッチが語る。のんだくれで、箸にも棒にもかゝらないなまけ者のエメリアンを拾ひ上げて、主人公のアスタフキ・イヷニッチと云ふ仕立屋が世話をする。エメリアンは至極の好人物で、正直な男だが、困つたことに恐ろしい怠け者だから金がない。それで居て咽喉から手が出るほど酒がのみたい。或る日イヷニッチの行李からよそから注文されたズボンを持出して賣つて了ふ。それを元手にぐてんぐてんに醉拂つて歸つて來る。果は下宿屋の女將の衣類まで盗む。が、佛のやうに情けに富んだイヷニッチは、それでも怒らずに深切に世話をして居る。エメリアンはどこまでも何も盗をないと主張する。しかしとうとうエメリアンが病氣で死ぬ刹那に、あれを盗んだのは俺だと白狀するが、どこまでも情深いイヷニッチは、憎むどころか、かへつて限りのないいたみに滿ちて、「そんな事を心配するな。神さまは御許しになる。氣の毒な不幸なエメリアンよ、安心して天國へ行け」と云ひ乍ら、氣の毒な此男の一生を考へて、涙が止め度なく落ち

る。エメリアンは、何か言はうとするが口を動かすだけだ。一寸紅くなつ　イヴニッチを見たが、それが最後で顔の色が段々と蒼白くなつて行く。やがてがつくりと頭を落して、一息引いて、神様の手に魂を御あづけしたのであつた。誰が涙なしに此の物語を讀み終り得やう。

どんな階級、どんなみじめな人類を眺めても、そこに自分と同等な人間性を求めて、暖たかく涙ぐましい感情で相手を抱擁しやうとする。此のヒユウメンな情緒は、ツルゲニエフの「ムヽ」にも味はれるが、アレキサンダア・クウプリンの「白痴（ザ・イディオット）」も一寸かはつて居て面白いと思ふ。それは「白痴には人間と動物の差別をするより高い衝動も、道義もない。又た理性も、言語も、意志もない。猫や犬の方が、それよりは澤山それらの本質を持つて居る」と云ふ議論を打ち消して、ジミナと云ふ學生が、白痴にも同情があり、理解の閃めきがある實例を説き、「此時以來、自分は自由な廣い人生を考へるやうになつた。そして將來といふものについて、充分な光明を認めるに至つた。自分はそれに對して一種の信仰を持つて居る」と、人生を肯定した明るい物語である。

レオ・トルストイの「長い追放（ザ・ロング・エキザイル）」も、多少の教訓めいた氣分が氣にな　が、やはり忘られない一つである。アキシオノフと云ふ若い商人が、はたご屋を朝立ちして、町へ行く途中、其はたごやで殺人をしたとて捕縛された。荷物の中に、彼の持ち物でない刄物が、血まみれの儘はいつて居たのが證據になつたのだ。證明がどうしても立たずにシベリヤへ送られる。もう二十六年以上も牢獄生活が過ぎた或る日、一人の囚徒が其牢へ入れられた。話しで察するとはたご屋の犯人は此男なのだが、男の方はアキシオノフが無罪なのを知つても何も言はない。或る　アキシオノフは、其男が脱獄しやうと土を掘つてその土を長靴の中から出して居るのを見付けた。牢屋の番人が脱獄をはかつた者のあるのに氣がついて、誰がしたのかと聞くが誰も答へない。最後に牢中で一番尊敬されて居るアキシオノフに尋ねるが、アキシオノフが斷じて答へない。それを見たその男が、始めて土に膝をついて泣き乍ら御わびすると、アキシオノフが「いや、神樣が御ゆるしになる。恐らく私は君などよりも百倍も惡いのだ」と言ふ。そして其男を許したにかゝわらず、男は良心に責められて自白をする。そこで赦免の命令が下つた刹那には、アキシオノフはもう死んで了つて居た。

マキシム・ゴルキイの「秋の一夜（ワン・オータム・ナイト）」は改めて言はない。

すべてこゝに拾ひ上げたいくつかの制作は、どれも人道的精

神に向ふところの、ロシヤの國民性と特質を、最もよく現はして居るものである。それは何がなしに親まずには居られない純な人類愛である。それが好いことか惡いことか。そんな功利的な理論は問題にならない。唯だ本能的に、反應的に、お互ひを暖かく抱擁せずに居られない奉仕の魂である。それによつて始めて救はれることを感ずる敬虔な信念は、その原始的な純朴さに於いても、殆んど宗教の境界にまで踏み込まずに止まない涙ぐましさがある。

佛國作家と人道愛

もつと昇華さ　た明るい理知を持ちながらに、その無意識な本能的な人道愛を同じ程度に示して居るものは、フランスのフランソワ・コッペエと、アルフオンス・ドオデエであらう。コッペエもドオデエも貧しい人々を好んで描いた。が、中でもコッペエの作物は、「下層生活の描寫」と割註をしてもよいほどに、貧しい階級の生活を捉へた。ドオデエも、コッペエも、不思議に子供の生活を愛し好んで描いた。その方は「笑ひと涙」の作家と見られるドオデエに、最も多くタッチングな傑作がある。貧しい階級を描いたものとして、コッペエからは、「大尉の惡習」(ザ・キャプテンス・ヴァイシス)を擇び、子供を描いたものとしてドオデエからは「最後の日課」(ザ・ラスト・クラス)を擇ぶべきであらう。「大尉の惡習」は、退役した、恩給で田舍に引込んだ獨身者の大尉がある。退屈しのぎに酒場へ出掛けて行つて、酒を呑んでは骨牌ばかりして居る。或る日片足のない八つ許りの女の兒が、みすぼらしい姿をして鵞鳥の番をして居るのに遭つた。聞けば養育院から其の酒場へよこされて、無慈悲につかはれて居る孤兒であつた。大尉がおかみに談判してその女の兒を貰ひ受け、自分が養育することにする。その費用の足しにするために、今までの惡習であつた酒や骨牌を段々と止めて行く。娘が毎日まめまめしく働らくので、男やもめの大尉の室内も目覺めるやうに綺麗になる。老いて行く大尉が、だんだんと娘立ちして行く此孤兒が實の娘のやうに世話して呉れる爲に、淋しい老境　淋しく思はず、淸い樂しい家庭生活を送つて行く。

「最後の日課」は、誰も知る有名な短篇である。いよいよドイツに占領された、明日からはこゝもドイツ領になる。そのアルザスの一小學校で、フランス語の教授はけふ限りだ。明日からは新らしいドイツの先生が來る。アンゼラスの鐘が鳴る。練兵から歸つて來る、ドイツ軍の喇叭の聲が窓の下に聞えて居る。先生のハメルが靑い顏をして椅子から立ち上つた。「君達よ、君達よ……私は……私は」と言ひかけたが、興奮して居るのでもうそ

れ以上話せない。いきなり白墨のきれを取り上げて、力一杯に黒板におしつけながら、素的に大きく書いたのが「佛蘭西萬歳」の一句であつた。そして壁に頭をおしつけながら、默つて手で合圖をする「これで放課だ」といふのだ。今まではそれほどにも思はなかつたフランスと云ふ郷土のなつかしみ、ハメル先生の强い愛、そうしたものがこの二度とない素晴らしい悲劇の現實の前に、颶風のやうににわかに小さな生徒の意識に目覺まされる。物心のだ分につかない一少年の胸に、何とも知れない悲哀がしみじみとしのび込んで來る、ほんとにやさしい、涙ぐましい小品である。

人生觀相の六種

前のは本能としての人類愛である。功利的な價値を見ない、やむに止まれない衝動の發現である。が、それと違つて、敎條としての、もしくは合理性の上からの人道主義を强調した無數の作品がある。原理としては、何人も人類相愛の觀念を、尊とい力として考へてゐる。それにかゝわらず、人生の面は依然として悲慘である。だから人生の相愛を實現するには、まづこの人生を悲慘にする禍の根がどこにあるかから檢討する必要がある。そこから出立して、始めてその理想が合理的に達成されるのだと見る。

まづ第一の作家は、人生を暗くする誘因をたづねて、それを社會と環境の作用に歸する。第二の作家は、それは社會や環境に掩ひかゝつて行くところの、人類相互の魂の罪惡にあると見る。この第二の思想は、更に細く分類される必要がある。何故なら、同じ唯心的に眼を向けるものでも、その見界にいろいろな差別があるからだ。即ちAの作家は、この人類相互の隔てない抱擁を妨げるものは、人類が原始的に秘めて居る偏執と憎惡の觀念によると說く。Bの作家は、いやそうではない。それは人類の無知から起ると說く。またCの作家が所有衝動、權勢慾の成果であると見る場合に、Dの作家は宗敎心の缺けて居ることに形付ける。更にEの作家は科學と人道の衝突に、迷つて、疑つて、いたんで居る、すべてそれらが人生に働きかける作用の本質をたしかめて、その禍の根をぬきとらうとする信念は同一でありながら、眺める斷面にはこれほどの種々相があるのである。

Aの作家

第一の人生現實の悲慘を、社會と環境から働らきかけられる禍と見る作家は、イギリス、フランス、アメリカの藝術に多く

見出される。(現代の國家主義と産業革命の方面は別問題とする) 先づアメリカのビイチヤア・ストオの「アンクル・トムの小屋」は事實に具現された結果の大きいことを見るが、とりわけフランスとイギリスの作家の大半は、認識した社會現象をとりはなす時に、その作物はほとんど成り立たないまでにそれほど社會と環境に執着をもつて居る。もし作家を云はゞ、エギリスでヂッケンスを擧げ、フランスでユウゴオとコツペエを擧げることが出來るであらう。たゞこゝに興味のある對照は、彼等がその主人公をめぐる社會と環境を、醜惡と考へることは同一であり乍ら、ヂッケンスは、その虐げられたもの、貧しいものの「美しさ」を現はす目的として環境を持つて來る。これはフランスのドオデエが、無産階級に對する眺め方に共通する。ところがフランスのヂッケンスと呼ばれるコツペエは、環境と社會にふみにじられ、虐たげられた人類の悲慘としての人生を描く。そしてそれがユウゴオになるとコツペエとヂッケンスの間を行くものである。おなじ人間的な美くしさを持ちながら、コツペエの作物が、其作物に淋しさと暗さを多分に浸す理由である。

それはヂッケンスの「クリスマス・カロル」と、コツペエの「罪人」を較べてもわかる。涙と笑の作家と呼ばれたドオデエは、ヂッケンスと同樣に、愛があつても憎みを持たない。だから誤まつた人間性を鞭うつよりも、むしろ隱れた人間性の美くしさを未知の世界から引き出して來ることに從事した。どんな穢らしい汚地にも、美くしい花は咲いて居る。彼等はこの愛すべき植物採集者であつたのだ。ヂッケンスの貧しい人々に對する哲學は單純である。下層階級は、上層階級よりもずつと神聖で、健全で、親切で、善良だ。だから社會の正義は、いつもピラミツトの基底にあるのだといふのだ、そこでは私有財産がどうであらうと、賃金勞働が何であらうと、それは未だ彼等の合理的結論にはなつて居ないのだ。たゞ罪惡と驕奢の憎みを富者の上に認めて、その罪惡から清められたところの貧しい階級を祝福する譯なのであつた。そういふ見方が現代に於いて、いかに正しいものでないと云つたところが、彼等の省察がそう云ふものであつたことを打消す材料にはならない。

ヂッケンスに比べれば、フランソア・コツペエこそは、もつと深刻に現實を見据えた作家であると云へる。フランス學士院の一會員、ヨセ・ド・ヘレヂアは、コツエペをもつて、何等のうそのない情緒をもつて、弱い者の悲しみ、いたみ、犧牲に對し、深い同情をもつて描く貧者の詩人であると評した。「罪人」は

高い地位の裁判官の子に生れた一人の青年が、さびしい家庭と無情な社會にもまれ、押しころがされて、浮浪漢となり、つひに押しも押されもしない犯罪人となるまでの經路をこまかに記述して居る。そして彼の所刑を宣告したものは誰であらう。それは此犯罪人と切つても切れない、子と父の緣に繫がれて居る父裁判官であつたのだ。彼の父たる裁判官は、法廷の前に立つて、すゝり泣きに滿ちた雄辯を揮つて、「自分こそは犯罪者である」と叫ぶ、彼れはこの恐ろしい現實の前におのゝき乍ら、社會の前に我子としての一人の罪人を提出した責任をわびる。「私が此の椅子を占める最後のこの刹那に於いて、諸君よ、私は決して人を審かうとしてこゝに坐るものではない。却つて諸君のあわれみを乞ふ爲にこゝに立つものである。不幸なこの青年に憐れみを垂れよ。いや私をあはれと思つて與れ玉へ。人類の幸福のために死なれた神、そしておそくか、早くか、この人間生のあらゆる悲しみを取のけるところの、神の思召の名で私はそれを皆樣にお願ひする。御ゆるしを敎へるところの、憐れみと愛の崇高な思想、我等があがめる正義(ジャスティス)の最高の相は即ちそのものを指すのではないか」

父たる裁判官は、其の日の其の刹那から法官たる職をすてた。そして子は法律の制裁から救はれた。救はれた青年は、同じやうに人生に難破した美くしい一人の婦人と共に、故國の海を遠くどこへか移住する。二人を乘せた小舟が、霧が晴れ上つた輝かしい日光の下をしづかに辷つて行く。波が青く、さゞ波が銀色に泡立つて居る。舟は生き生きした力で眞すぐに進んで行く。さも樂しげな望みの海を。

ウヰクトル・ユウゴオの作物を、改めて解說するのは無益の事業であらう。「ノオトルダム・ド・パリ」から「哀史(レミゼアブル)」へ、「九十三年(ナインテイ・スリイ)」から「海の働らく人(トイラアス・オブ・ザ・シイ)」への過程！あの身悚ひされるやうな、人道的精神を裏づける感激は果して何から生れるか。それは「哀史」と「海の働らく人」に現はれた、二つのはし書によつてもよくわかる。即ち「哀史」では曰ふ、「我等の法律と慣習の誤まりから、われ等の文明のたゞ中に、人爲の地獄をつくり出すやうな社會的非運を成り立たせたり、もしくは人間の運命論によつて、神の命數を面倒に入りくましたりする限りは、――またプロレタリエエトたるが爲の人類の退化、飢えの爲の女性の墮落、無知の爲めに拘束された子供の發達――そうした現世紀の三つの問題が解決されない限りは、そしてそれが爲めに、どんな所にも社會の窒息狀態が存在する限りは、――もつと廣い視野から見て、もつと別な言葉で言へば、即ちこの地上に無知と悲慘が存在する限りは、此の「哀史」のやうな書籍は

決して無用であるとは云はれない。」

「海の働らく人」になると、それが更に一歩を進めて居る。「ノオトルダム・ド・パリ」の「宗教」、「哀史」の「社會」には、「海の働らく人」になつて「自然」と云ふことが更に一つ加へられて居る。「宗教、社會、自然、およそこれ等は人間世界の三つの闘爭である。そしてこの三つの葛藤は、同時に三つの必要でなければならない。信ずる必要から寺院がある。創り出す必要から社會がある。生きる必要から犂があり、船がある。しかし此等の三つを解決するには、三つの衝突を豫想する。卽ち人類はそこで迷信と、偏見と、四大(エレメンツ)の形をもつた三つの抵抗につきあたる。獨斷の必要、法律の必要、事物の必要、この三つの必要が、一團になつて人類の上にのしかゝつて來る。自分は「ノオトルダム・ド・パリイ」で、先づ第一のものを摘發した。「哀史」では第二のものを暴露した。第三のものを指示するために、自分はこの制作を敢てしたのである。人類を進化さする此の三つの宿命の中に、更に內在の宿命が入りまじつて行く。それこそは最高の必要であるところの人類の心臟である」

だからユウゴオの作物では、憎まうとする意志よりも、愛さうとする意志がより多く働らいて居る。たとへば「九十三年」で、彼の有名な「女性は弱い、しかし母は强い」と云つた警句を、どんな風に事實に描いて居るかを讀む人は、その崇高なロマンチックな熱情と感激に醉はされざるを得まい。彼れがどの作物にも潜める人道的精神は、とり分け犧牲の美である。それと共に、彼の作物のどの主人公もは、その信ずる正しさの前に突進して、どんな抵抗にも挑むことを知らない。華ばなしい殉敎の戰士だけで滿ちて居る。內に堀下げて沈潜するよりも、外に向つて戰鬪する闘人である。

この外に、弱い女性が無慈悲で冷酷な社會の、そして殘酷な男性の壓迫に追ひまくられて、どんな淪落の底におち入るか、フランスのルネ・バサンの「尼(ザ・ナン)」と、ドイツのヘルマン・ズウデルマンの「雅歌(ザ・ソング・オブ・ソングス)」と。デンマアクのアンダアセン・ネキスウの「デツテイ」イタリイの、マチルダ・セラオ嬢の「一踊り子(ザ・バレツト・ダンサア)」などに其の種々相が痛ましく語られて居る。

Bの作家

問題は更に第二に移つて、AからDまでの第二類の作家を檢討する必要が感ぜられる。

Aの作家は、人類の暖かい抱擁を妨げるものは、人類の原始的にひめて居るところの偏執(プレヂユデイス)と憎惡の潜在性によると見る部類だと云つた。彼等は、それが最も痛い傷であるが爲に、社會がそ

れに觸れられることを好まないその罪惡に觸れて、その差誤を心の底から自覺さすることを、人道にわたる藝術の働らきだと見る。かうした傾向を持つた作物は非常に多い。ジャンバルジャンの罪惡や、コセットの母の墮落に對して、全力を擧げて抗辯したところのユウゴオの「哀史」が其一つである。スペインの作家ブラスコ・イバニエスの「小屋」では、「微笑する人生の美くしさを打ちこわすものが、人間自身であることを、これほど強く抗議した作品は少ない」と云はれる。そこではユウゴオの戲曲的な潑剌さと、ゾラの壯嚴な力を以て、かう云ふ論理が證明されて居る、「そこに殘酷な利己主義と、過去から傳へられた奇妙な偏見とを根深く植えられた社會がある。また不正きわまる群衆心理と、無慈悲にこりかたまつた社會がある。」この素朴で、勤勉で、まつ正直で、貧乏な「小屋」の主人公は、唯だ他所者たるが故に、たゞ勤勉であるが故に、この偏見で不正な環境と戰はねばならなかつた。「けれども個人が社會と戰ふ場合、個人の便りになる便宜は一つもない。結局かれは打負けて、絕對の落伍者にならねばならぬ」彼は何の故なしに、棲む小屋さへも燒かれた。田畑は荒されて棄てられた。あはれな主人公ピメントオよ、彼は絕望の底に沈んで旅から歸つて來た。受難のうちに家族も死に絕えた。誰一人彼に答へるものがない。「彼は沙漠よりも淋しい人の世に唯だ一人しよんぼりと立つのであつた。人間の憎惡から生れた孤獨こそは、自然の寂寥よりも千倍もわるい」あらゆる反抗が、悉く空虛に打ちこわされた今は、その最後の諦らめさへも、彼には何等の安心を持ち來すものではなかつたのである。

ドイツのヘルマン・ズウデルマンの「猫橋」も亦た、無意義な愛國主義の偏執から一生を苦しみぬいた、勇敢な獨逸の一靑年の悲劇である。彼の「憂愁夫人」などはとり分けそうであるが、ズウデルマンの作物の印象を暗くするものはいつでも其の宿命主義である。「猫橋」の主人公ボレスラウはやはり生れ乍ら動かせないこの暗い運命を持つて居た。父は貴族であり乍ら國を賣つた、佛軍の手引きをして、秘密の橋である猫橋から敵軍を通過さした。ボレスラウはこの賣國奴の兒として生れたのである。彼れ自身は心からの熱い祖國の愛を持ち、また其爲に命を忘れて奉仕したに拘はらず、社會の呪ひはその爲に何程でも取のけられない。わづかに自然兒であるところの下婢のレギナ、それは父たる賣國奴に弄ばれて居た娘のレギナの不思議な愛によつて、僞善と偏見の社會から、いわゆる第二義の道德を超越した「自然の道德」に救はれる。しかし二人の運命は所詮恐ろしい程悲慘なものであつた。そうした社會の迫害をうけることとす

ちも、宿命だと作家が考へる處に悲觀的な暗さはあるが、この作家はいわゆる世間の善惡を超絶して、もつと深いところに道徳の認識的價値があると見、結局道徳は相互的の性質を持つものである。人が棄てがたい自己をすてゝ人類がお互に心から環境と和諧するところのその幸福の爲に盡すことに最終の幸福がある。これが社會道徳の自然法則だと云ふことを發見した。ハウプトマンが「社會の精神的價値」を求めるのに對して、ズウデルマンは「社會の道徳的價値」を求める。また「ハウプトマンの劇曲が何一つ解決を與へない、與へるものは唯だいやしい悲慘であるが、ズウデルマンは、性格による環境の征伏を示す」と、ヘルプスが許したのも多少は妥當である。

ドイツのエルンスト・フオン・ウヰルデンブルッフの「嫉み」では、兄弟父子の間にすら潜む、憎みと反抗と嫉みの心理が、廣い社會に、また狹い家庭の中に、どんな思ひ掛けない悲慘を持來すかを、はつきりした、強い信念の下に描いて居る。自分のあさはかな憎惡から、その年若な弟を幼年の頃に殺した年をとつた役人が、陰棲の孤獨な部屋に自分と弟の幼ない頃の肖像をかけて、絶えず其下で過去の罪惡を思ひなやむ。思ひ出の惱みにやつれた陰鬱な其表情から、彼は憎人主義として誰からものけ者にされた。それを考へるにつけても、暖かい心の愛は一入強く彼の胸を搏つて來る。「決して人を嫉むな、人を嫉めば大國へ入れない」。その苦い懺悔をこの作者が描いたのが「嫉み」の一篇である。

ノオルエイの作家、ヨハン・ボオエルの「世界の面」もまた社會の偏執に對する強烈な反抗でなければならない。前科者といへば誰でも目をそむける、獨り人道の愛に燃える博士ハロルドだけが、あらゆる憎みの眼に逆らつて氣の毒なこの前科者イヴアを拾ひ上げた。そして彼を信用した。しかしイヴアの胸に蝕ばんだ失戀の惱みは、とうとう彼を狂人にして放火をさせる。「だから見ろ」といふ世間の嘲笑の前にも、ハロルドは何ほどの悔みもたじろぎも感じなかつた。安易な心で病院を再建する板を自分で運んで居る。そのくらく沈んだ瞳には、イヴアに對する傷みだけが一杯になつて居る。

人間の憎惡心を呪つた作物が、歐洲大戰にとりわけ多く生れたことは一向不思議でない。「文明、本とうの文明、私はそれを幾度か考へる。人々はいつも唱へて居る。お互に愛し合へと。そして惡に向つて善を酬いろと。けれども此二千年の間、このお題目を繰返しくり返す外に、人類は何をしたと云ふのだ。國王達や僧侶達は、このお題目を考へるには、あまりに時代時代

の興味に囚へられて居た。人類は善と幸福の觀念を間違つて居る」と結論した、フランスのジョルジ・ジュアメルの小說「文明」がある。深いシニシズムの叫びである。ロシヤの杜翁の第三子イリヤ・トルスイの「幻影」や、戰爭前の制作であるクウプリンの「カイン」もしくはその戰爭中の短篇「聖女の花園」では、世界人類の惱みがあまりに大きくて、少さい人間の力のどうともすることが出來ないのを考へた刹那の、人間への目覺めの呼びかけであり、それを呪はれた刑罰として見て、その刑罰から解放される日の、一日も早く來ることを神に祈る訴へでなければならない。ロシヤのアンドレエフの「國難の日の一凡人の告白」では、陰欝な、救ひのない世界の灰色が一層濃くなる。大戰の陰ににげまわる、無數の無產階級者のある一つの絕望の運命が、こゝで死の手によつて閉ぢられようとする。彼は最後の床に瘦せた手をさし伸べて「我等は一緒に手を握らうぢやないか。私は君達を愛するのだよ、愛するのだ」と叫ぶ。革命を捉へた「ソオ・イツト・ウオズ」と同じく、強く人間の殘忍性の盲目を否定して居るが、けれども利慾と權力に血みどろになつて居る修羅の世界に、一人だつてそれに耳を傾けるものがあつたらうか。ブラスコ・イバニエツの「默示錄の四騎士」もまた、そうした盲目な獸のやうな嚙み合の上に眼を投げて、血と鐵とがつかみ合ふ悽慘な場景の底に、いわれのない人間憎惡の昏迷を力強くあばき出して居る。

すべての人類の葛藤と悲慘が、無知から生れると考へる作家がCに屬する。ヨハン・ボオエルの作物に大體この傾向がある。ブラスコ・イバニエスの「僧院の陰」、「葡萄の實」「死者の統治」がまたそう云つた世界のなやみを眺めて、本當の人類の文化的自覺までに押しすゝめやうとする藝術的努力を盛つて居る。フランスのロマン・ロオランの論文集「戰を超越して」がまたそれである。トルストイも、ユウゴオも、勿論その同一線に屬する。

Cの作家

Cの作家は、近代の人類社會の禍が、所有衝動にあり或は權勢慾の成果であると見る。後の方は歐洲の二大官僚國と云はれたドイツとロシヤに、それをあばき出す文學が、最も多く現はれたことは在り得べき道理である。ロシヤからは、諷刺的な作物の取扱ひ方に於いて、二人の偉大な藝術家が發見される。ニコレエ・ゴオゴルとエム・ワイ・サルチコフである。前者の「檢閲官」や「外套」や、後者の「貴族の一家族」を讀む人は、いわゆるそのころの官僚なり、貴族なりが、いかに苦々しい權勢慾

と、滑稽な階級的形式によつて、一文の價値もない權威を無理にも持ちつゞけやうとしたかを痛快に味はうことが出來る。ドイツでは、ハインリヒ・マンの「愛國者」を近頃の興味あるものとして讀んだ。ロシヤの官僚治下の悲慘な國民生活は、古くはステプニヤツクの意義ある小說「一無政府主義者の閲歷」から以後、どの作家の頁をひるがへしても、政府人の非人道な心理がどこからでも自由に拾ひ上げられる。

所有衝動の罪惡を指摘するものとしての意味は、こゝでは階級鬪爭の作物であることを意義しない。それはたゞ在るがまゝの貧富の階級をその儘に見るもので、所有の根元にさかのぼつて、その芽を絶たうとするまで深刻なものではない。たゞ富む者が多く罪惡者である、何故なら人間心理の自然性に從つて居ては、到底富などは穫られるものでないから。さうした單純な論理から、それを人間的精神の行く途にひきあてて、其の過誤を指摘しやうとするものである。此の範疇に入る作物も中々多いが、作家としての興味から、フランスの猛虎といはれる、政事家ジョルジ・クレマンソオの小說「最强者」を其中に見出すことは面白い。「最强者」では一方に近代精神を代表した物質主義の富豪とその娘がある。他方に富豪の亡妻の友達で、人道主義者であり、本當は娘の實父に當る人道主義を持つた貴族と氣の弱い藝術に好みを持つ娘の求婚者とを對照して、結局、物質主義側が、勝利を占めたシインを描いて居る。が、クレマンソオが、どちらかと云へば、より多く人道主義者に同情を持つて居るのが注目される。それだけ彼の人生觀は懷疑と悲觀の色彩をふくんで居る。かつて熱烈な無政府主義であり、無神主義者であつた彼の思想はこゝでも半面をむき出して居る。それに拘はらず彼れは此作物において、溢れるやうな獻身の愛を說いて居る。「滿足された貪慾が、滿たされることを慾求する貪慾に對して防禦の地位に立つた。こゝに階級戰爭が始まつた」と說くかれは、他方で「最も尊とい夢は、愛の隅石の上に一つの家を建てることだ。私はこれまでその事を百度もくりかへして說かなかつたか。何故私は此の夢の中に棲むことが出來ないのか」と叫ぶ。その貪慾と愛とを結び付けることに破産したところに、此の制作の致命的な悲劇がある。

Dの作家

人間の魂を、人間の愛の觀念だけで救ふにはあまりに微弱である。そこで人間の宗教心理と信念を試煉する爲に、基督そのものの犧牲的精神を、二人の神の使徒にふきこんだ二人の作家がある。Dに屬する作物である。ロシヤのミハイル・アルチバ

アシエフの「イワン・ランデ」がその一つであり、ドイツのゲルハルト・ハウプトマンの「基督の愚者」が他の一つである。此の二作の主人公は共に自分を一人の基督だと信じて、一身をさゝげて人類の悩みを救はうとするが、あらゆる侮辱と受難の末が、野原にのたれ死にして了ふ。殊にハウプトマンの方は、そうした思想もそうだが、現代のやうな時代に現はれた基督が、どう云ふ視野から現代の人間に眺められるものだらうかと云ふ興味をより多く含んで居る。偽はりのない敬虔は「基督の愚者」のエンマニエル・クヰントにも、イヷン・ランデにも變りはないが、クヰントの意志の強さは、どこまでもしなやかに弱い心を持つランデにくらべて、ドイツとロシヤの國民性をも對照させて居る。ランデが數十里の彼方のヤルタに棲む、憐れな一學生を救はうとする。が、一錢の金も持たない。あるいて行かうとするのを無謀の企てだと友達のシシユマリオフが止めると、ランデが答へる「我等はお互に愛し合ねばならない。お互に憐れみを感ぜねばならない。其他の事は自然にどうにかなるだらう。あらゆるものは苦悩に洗はれてはじめて成就する。もし世の中に苦痛と云ふものが無かつたら、靈魂は停滯して死んで了ふ外はないのだ。」かう云つて途のないあら野を、一文の金も持たずに辿つて行く。そして目的地に達しない中に、深林の中で餓死して了ふ。同じ忍辱ではあり乍ら、エンマニエルの方は愛されるよりもより多く迫害された。その迫害に反抗する敬虔の強さに力強い感激を與へる。前者は弱さの愛である。後者は強さの愛である。

トルストイの宗教小説を、改めて説くには更に一部の書冊を必要とするであらう。

Ｅの作家

Ｅの作家の一人としては、ロシヤのヴイケンテイ・ヴエレセエイフの「一醫師の備忘錄」を忘れることが出來ない、これを嚴密な意味で創作と云つたら、或は抗議を申し込む人があるかも知れない。けれども一つの人生觀照が、すぐれた藝術家の意識をこして來た以上、それは自傳であれ、何であれ、藝術でないと云ふ抗議をだれが、何の理由から提出されよう。

「一醫師の備忘錄」は、いかに人間の肉體のもろくはかないものであるか。人間の病をなほす醫術、――そして科學の力の、いかに不完全で、無能力で、缺點の多いものであるか。はたまた此の醫學と稱する科學の技師、即ち醫師なるもののいかに無力で殘酷で、こけ脅かしなものであるか。そして人間はその脆い肉體を、此の無能力な科學と技師とに托して安心して居ること

の、いかに幻滅の狀態に居るものであるか等を、かつて其一技師たる醫者としての著者が、嚴肅な臨床的觀察から監査して居る。そして此の一技師は、科學を否定し、其技師を否定し、肉體の組織を否定して、かう云つて居る。「自分は時が進めば進むほど、猶ほ絶對的な醫學上の虛無主義を抱くやうになつた」と。

ヘンリイ・プレザントはこの本についてかう批評して居る。「良心が此著述の主眼である。それは科學の隱れ家の秘密戶を開いた、一哲學者の良心の反映である。彼は自分の發見したものを眺めて當惑して居る。彼の記述の或るものの中に、書く事の出來ないほど悲しい情緖の響くのは其爲である。人は其中から惱める魂の叫びを聞くであらう。それは其力の及ばぬ事業を成就しやうとして助けを呼ぶ其聲なのである」と。

彼は解剖臺上の女性について、まづ詩と科學の分れ道に立つた「醫薬が効能を見出すまでには、三千も四千もの靈魂を犧牲にした後でなければならぬ事」を感じた。「若い開業醫師」の一項は、殊に人道主義者としての彼をそのまゝに體現して居る。

ある夕方、とうとう彼はそのあばらやへ入つた。患者は卓子の上に横たはつて居た。萬事は休した。――苦しい好奇心とも云ふやうな、妙な感情に押し進められて、彼は死體の方へ近寄つて見た。入り日の光が蠟のやうに固まつた子供の姿を輝かして居た。その顔は悲しい幻想に耽つて居るやうな表情をして居た。その目蓋は閉されて居た。私――その小供を殺した彼は、ぢつと彼を見詰めて居た。

愛子に死にわかれた母親は、隅つこの方で啜り泣いて居た。塵にまぢつた蜘蛛の巣が、その見すぼらしい住居の裸かな壁を掩ふて居た。地べた其儘の汚れた床からは濕つぽい匂がする。凡てが冷たい。冷たくてがらんとして居る。「それも神樣の御心です、」自分が振返り乍ら小聲でかう言つた。すると彼女は「尊とい御心、ほんとに神樣が誰よりも御存じなのです」「おゝ御禮を申しますよ。ほんとうに御醫者樣、有難ふ御座いました。あんなに子供によく盡して下さいまして」、彼女はなほ泣き乍ら、自分の手に接吻しやうとした、私の親切と思ひ遣りとを感謝し乍ら……

あゝこれが神樣の思召か。いやそれはこの科學の一技師のあはれな知識のせいではなかつたか。彼はこの刹那にあらゆるものを抛げ棄てゝ、たとへ飢え死んでももう一度、都へ行つて更に深く醫術を硏究して來やうとさへ思つた。

彼はまた貧民が貧しくある爲に、醫術の前にあらゆる侮蔑をうける實例につよく公憤して居る。「あゝ此の苦痛は測ることの

出來ないものである。如何に多くの誤まられた生命が、あらゆる醫師の仕事の中に横はるであらう」、「我等の進歩は死體の山脈を踏んで進まねばならぬ」と、彼は「外科と其危險」の中に書いて居る。そこには科學に踏み躙られた悲慘な人道がある。そこには冷たい科學者としてではなく、暖かい人道主義者としての切ない涙がある。

力强い藝術

ヨハン・ボオエルの「大なる飢（グレエト・ハンガア）」も人類の魂の救濟を說く作物であるが、調子がなほセンチメンタルである。フランスのロマン・ロオランの「ジヤン・クリストフ」になると、これはステフアン・ツワイグが評したやうに「人生の全圓をつかまう爲に、最も深い人生の秘密を描いた稀有の藝術である。」クリストフもオリヴアも、受難の魂の權化である。苦しみによつてますます其魂を强められ、人生への愛を深めて行く、「ジヤン・クリストフ」の十卷ほどに、人生の希求と生き甲斐あることを、切實に力强く魂に刻んで行く偉大な人道的作物は他に多く見ることが出來ない。

反抗の使徒としての藝術

カアライルが佛蘭西革命の意義をかう解釋した。「それは人間性の權利と神性をとりかへしたものだ」と。それだけの範圍ではその言葉は正しい。なるほど革命は封建制度と血統の特權を滅ぼしたに相違ない。けれどもそれと同時に、一層手ごわい大敵を、鬪爭の相手として引き出して來たのだ。それは產業革命である。資本の暴力、機械の利用、さうしたものが社會全體を、組織的など云ふ美名の下に、機械制度の中へ一くるめに叩つ込んで了つた。この新しい暴君は、質でも量でも、前のそれほどとは較べられぬほど强大なものだ。だから凡ての人類は精神と肉體ばかりか、其想像力さへも、彼等の前には悉く奴隷にならねばならなかつた。これが我等の呼吸する現代の空氣なのである。これで心靈の自由を叫ぶ藝術家の堪へ得られる筈がない。勝ち誇つたブルジョアジイと、立ち上らうとするプロレタリヤの、命がけの戰ひが宣告された近代にあつて、藝術家が參戰するのはもとより至當の事實である。

この場合に於ける藝術家の旗じるしは、いつも心靈の自由である。心靈の獨立である。けれどもこれらの抗議の使徒は、物質よりも先づ心靈の獨立がよいと主張するものではない。物質の獨立によつて、始めて心靈の自由が求められるのを知つてるからである。されぱとて彼等はまた、物質が獨立するまで心靈を

打棄てて置く程どの空想家ではない。いな、物質を獨立さする機緣としても、何よりも先に、先づ心靈の獨立が同時に企だてられねばならぬことをも知つて居る。だからそれが少なくともそこに限られた藝術の範圍で、その主題がいつも心靈の問題に立歸るのは至當の論理である。どつちにしたところ、人類の自由と相愛を妨げるところの、あらゆる罪惡を徹底的に打ち破して、奪はれた人間性を完全に取戻さうとするのが現代藝術の目さす主眼である。かうした作物が、近來大へん多くなつたことは、喜ぶべきことであれ、少しも不思議ではない。すべての特權階級には、それは許し難い反逆に見えても、虐げられた民衆にあつては、それは生命の本流に歸らうとするところの生の陣痛の喘ぎでなければならないからだ。

それ等を主題とした現代作家の作物を擧げるならば、直ぐにでも二三十篇は數へられるであらう。けれども私は其中で、ロシヤのポタペンコの「特別の休日」(アン・オフイシヤル・ホリデイ)と、フランスのルネ・バザンの「來るべき收穫」(ザ・カンミング・ハアヴエスト)の二つを强く記憶して居る。「特別の休日」の方は、ロシヤの或る不幸な農民が殘酷な雇主から無理やりに暇をとつて、もつと賃銀の高い、自由な仕業に移つて了ふ。其後で、その貪慾な下男下女の缺乏と云ふひどい難義と取引きした牧師夫婦のみじめさが、ユウモアに富んだ眼で痛快にいためつけられて居る。私だけの考へでは、ロシヤの作家でポタペンコほど明るい、ユウモアに富んだ氣分を浸した作家は大へん稀れだ。「來るべき收穫」の方は、木挽き達を說き伏せて一つの勞働組合を作らせ、賃銀の値上げを雇主達に要求することを敎へた、ギルバアトと云ふ男を主題として居る。たゞ彼はその木挽き達の中の亂暴な人間共が組合の勢力を濫用して、だんだんと個人の自由を壓迫したり、あるまじい亂暴を働らくのに愛想をつかして、組合以外の仕事をして居る。組合は決議してそれを妨げやうとする。中での亂暴な手合が、とうとう組ぬけを口實にして、多勢でギルバアトを毆り倒しひどい負傷をさせる。それでもギルバアトは恐れない。しかし家庭の悲慘とさうした勞働組合のごたごたが、すつかり彼を零落さした。結局元の主人のところで使はれることになつて、寂寥たる獨り身ではあるが始めて落着いた安心を彼れは感ずる。「私も年をとつた。しかし今ほど仕合と思つたことがない」。此小說の全體は、寧ろフランスの或る地方が、手工業から機械工業に變つて行く流轉の相を描いて、その中に、この素朴な一人の木挽きの變轉の多い生活を浮き出させやうとしたものであらう。たゞし「特別の休日」にも、「來るべき收穫」にも、現代の產業制度に見られるやうな、攻擊的な勞働運動がない。どこまでも受動的ではあるが、

たゞそれをロシヤらしい、もしくはフランスらしい國民性と、暖かい人道的精神から眺めた原始的解放運動の一片影として見る時に、また捨てがたいしなやかな暖かい情緒を感ずることが出來る。

かつては忍從を美徳とした。虐たげられたものはそれを自己の運命だと考へて、諦らめに歸ることを普通の理法とした。しかし現代は虐たげられたものが、自己もしくは自分達の同胞の生命から奪はれたものを取かへさう爲に、正義の反逆をする時代である。フランスのアンリ・バルビュスの作物は、最もこの强烈な復讐の精神に燃えて居る。傷けられ、虐げられた弱者の爲にその暴君にむくひやうとする戰鬪的氣分といらだちが猛然として燃え上る。

屋敷地へ一匹の牡鹿が追ひ込まれた。小兒も、女も、男性も一緒くたになつて、この憐れな獲物に追ひすがつて居る。みんな血眼になつて、この柔和な獸の咽喉をきるか、腹をさすか。どうしてもつかまへて慘殺しなければ承知しない意氣込みである。そうした人間達の顔の醜くさを見よ、憎惡に燃える女達の顔は、男性のそれよりも猶ほと醜い。そんなに見苦しく取みだした群衆の、醜くい憎惡に比べれば、吠ついて居る狩犬の方が未だ無邪氣だ。何故なら犬どもは奴隸だから。彼等が牡鹿にふり向けて居る狂鳴は、要するに人間の憎惡心そのものの外にはないから。

とうとう牡鹿は、逃げ路のない袋小路へ追ひ込まれた。が、天性のやさしさを持つた此獸は、唯だ大きなその平和な眼を見開いて、おづおづしながら逃路を探して居るばかりだ。群衆はもう大丈夫こつちのものと見てわつと突進した。其刹那、自分の知つて居たことは、自分が突嗟に自分の身體を憐れな獸の前に投出したことだ。そして騎兵用短銃をつかむや否や人間の集まりへ滅茶々々に彈丸を打ち込んだ事だ——そして私はそれが正しい事をしたのだと云ふことを知つて居る。

これが「死」と云ふ短篇小說の輪廓である。「光」その他を游流する思想は、その一片をこゝにも現はして居る。

世界平和を主題に

世界大戰は、人類共存の理想を世界に强調させるよりも、むしろそれと反對の結果を齎らしたかに見える。ロマン・ロオランが「戰を超越せよ」の聲語は、それは國際聯盟の下に成り立たずに、世界主義を普遍することによつて始めて完成が望まれる。然るに大戰の結果は、かへつて國際的意識を無用に刺激し

た、そして横に擴がるべき人類の親愛が、かへつて縦に誇張した祖國愛の爲に沮まれて、個々にちかつた愛國魂の誕生は、ますます人類愛の進化の歩みを遲くし、煩はしくするやうになつた。各方面に現はれたところの獨立運動などが共の一例である。

トルストイが或る論文で、愛國主義の濫用を極端に非難した。「愛國主義は決してよいものではない。もし愛國主義がよいならば、何故利己主義をよいものだと云はないか。何故なら利己主義といふものは、自然であり、天性の感情であるので、愛國主義よりも樂に保持して居られるから。然るに愛國主義は不自然な感情である。そしてそれは人爲を以て人間に植え付けられたものだから。」

愛國主義が不自然な人爲であることはわかる。たゞトルストイのやうに人間の利己心を大成だと見たならば人類の相愛は容易に望めぬものであらう。私はさうは考へない。人類の理知が進めば進むほど、相愛するだけが人類の事實だと見る。その相愛しやうとする意識を遮ぎるところの、横の國家がある。縦の階級がある。さうした不可抗の外物があつて、始めて人間の心に、やむを得ず利己心を植えつけるものなのである。唯だ只管に愛しやうとするねがひ、それこそは人道の純眞な光りなのである。ブラジルのグラカ・アランハの「カナン」は、フランスのアナトオル・フランスが、「偉大な米國小説だ」と評したと否とに拘はらず、美くしい人道的な小説であることを認めざるを得ない。「人類の目的はソリダリチイの建設である。人間と人間との結び付けである。分離する動機を取除くことである。初めはそれが力であつた。しかし最後のものは愛である。」「人間のあらゆる活動は、自由に對する渇望をてりかへす。自由は社會の支持であり、刺激であり、また存在の理由である」「歐洲が人生の方式として我々に示すものは、單に昨日の暴力の、不調和極まる引き續きと、今日の危機そのものに過ぎない」、現在世界の道德的危機に絶望した獨逸の青年たる彼れミルカウは、遠く南アメリカのブラジルに「望みの國」たるカナンの樂土をつくらうとした。しかし、故郷に投げすてゝ來たと思つた人生の醜悪はこゝでもやはり歐洲に變らない。ある不幸な娘を牢から救ひ出した後で、飢と疲れの爲に彼は森の中で死んで了ふ。けれども死の刹那にすらも、彼は人類平和の理想世界を、光りのない隣に將來に描いて居た。「凡ての罪悪は力である。愛がひとり人間を導びく、私は君達に祈る。君等と、君等の無限の後裔達よ。我々をして我等を破滅に導く憎悪をなげすてゝ、死の來る前に、お互を仲好く抱擁せしめよ……人生を何よりも恍惚たらしむるものは全くこの永遠の思想である」

スエイデンのアオグスト・ストリンドベルの「獨逸中尉」（ザ・ジャアマン・リュウテナント）もまた世界平和の思想について、ある暗示を與へる作篇でなければならない。フォン・ベレエチロオデン中尉は、セダンの戰爭で頭部に負傷し、その爲に精神に異狀を來して、スヰスの精神病院へはいる。久しい後で病氣もなほつた。靜養の爲に夫人と共にスヰスの湖畔に居る。そこには各國の人々が集まつて來る。話し合ふ每に國籍と平和のことが問題になる。或る特殊な國、或る特殊な國民、そうした事があつて好いものか否かと段々と思索の問題になる。もうスヰスには二年半も居る。或る日ベルリンから呼び出し狀を受取つた。何でも戰爭があると云ふ噂がしきりなのだ。相手はロシヤだと云ふ。三年前にはフランスと戰ふ爲に、道德的助力を乞ふた其のロシヤとだと云ふのだ。彼れはその今までの友邦に向つて一向戰ふ氣になれない。何故なら、兩國民は決して戰ふことを好まないからだ。中尉は迷つた。一つ夫人に聞いて見よう、かうした場合、女性の意識は、男性よりも自然律に近いものであることを經驗の上で知つて居たから。

一寸考へて夫人が答へた。「プロシヤ人であるより、ドイツ人である方がづつと好い。ドイツ人であるよりも、ヨオロッパ人である方が遙かによい。けれどもヨオロッパ人であるよりも、一人の人間である方がずつと好いのです。貴方は國を取換へることが出來ない、何故ならどの國民も皆な敵だから。すると殘された問題は唯一つです。それは中立することです、此のスヰス人となることです。スヰツランドは國民でありませんから」かうして中立國民となつたフォン・ベレエチロオデン中尉は、極めて稀に良心に葛藤を感ずることはあつても、大抵前よりもずつと仕合せな月日をすごすのであつた。

イタリイのルイギ・モッタと云ふ作家はどれほどの地位を占める作家か知らない。其小說に「薔薇の里の王女」（ザ・プリンセス・オブ・ザ・ロオゼス）といふのがある。歐洲とアメリカが聯合して、土耳其を盟主とし、支那日本を加へた亞細亞軍隊と世界的大戰爭を始める。歐洲がひどく損害を受けた後に平和が克復した。その結果世界は一つの聯邦政府によつて統一されることになり、社會の生活は全たく理想的な人類の抱擁となつた。聯邦政府の主裁者は、勿論才能で選ばれるもので、血統で相續する昔の制度などはひどくいやがられた。貴族と云ふものも一つの神話として殘るだけで、凡ての人間の權利は平等である。一切の富はみな政府の支配に屬し、共通の利福の爲に最も賢しい方法でそれが使用される。知識者だけが唯だ認められた。この世界人の仕事は、形而上形而下の未知の世界をすべての方面にわたつて探討するところの、平和

の戰闘そのものだけであつた。地球は平和と、勞働と、しめやかな夕立によつて生き返り、其の運命に對するかたい信仰を以て、將來の方へ靜かに動いて行くのであつた。

ブラスコ・イバニエスの「女の敵（ザ・エネミイ・オブ・ウウメン）」もまた世界平和の信念についてつくづくと考へさせられる。歐洲大戰を世界の賭博場モナコに避けたルビモフ公爵がそこに居る。五年に亘る大戰の動いて行く影と、心理を、ぢつとこの美くしい海邊に沈潜して居る。明鏡のやうに、止水のやうに澄んだ公爵の省察に映る萬象は、凡ては戰爭の空虛であることとである。「世界はいつも同じではない。巨大な動亂が通つて行く時に、大地は決して元の姿を止めない。彼等の父親や祖父達がやつたからと云つて、我等の子供達もまたお互を殺し合ふであらうか。國境と呼ばれるところの、山や河や森の違つた側に居たからと云ふて、お互ひが敵意を以てにらみ合はねばならぬものだらうか。我々は二つの故郷を持つ、我等が生れた土地と、我等が屬する國家とである。人々は何故この觀念をおしひろげて、更に第三の故郷をその觀念の中に許す寬大を持たぬだらうか。生れ故郷と同じ深い愛を以て、同時に世界の市民を愛することが出來ぬだらうか」

老いたルビモフ公爵の長嘆は、何人にも深い思索を與ふべき警策でなければならない。

オランダの作家ルイ・クウペラスの「後の生涯（レエタア・ライフ）」は、世界平和の問題をもとして取扱つたものではないが、其中に出て來るマクス・ブラウスといふ紳士がある。夥しい讀書家で社會救濟のヒウマニチイの信念に燃えて居る。彼は富んだ工場主を父兄として生れ乍ら、「私は父兄が比較的に職工を好遇した事は知つて居る。然し職工達は依然として奴隸であるに過ぎなかつた、私は何事を犧牲としても、此世界に友情以外のもののあるのを好まない」と云ふ。そして夫のある女主人公に、始めての目覺めた戀を求められた刹那に、「戀は私共にとつてもう遲い」と女と別れる。「私は此秋平和の宣傳の爲に英國へ渡ります。又と歸るか歸れぬか。それは分りませぬ。——世界は重大な問題に充ち溢れて居ります。そして我々は——自分だけの小さな世界に棲んで居る。ほんの一寸法師のやうなものですからね」と、獨り淋しく無窮の旅に門立つた。淋しい幻影と戀を描いたのが此作物である。

しかし、世界主義の思想を最も力強く表現したものとして、ロマン・ロオランの「クルランボオ」こそは、一番強く讀む人の心象を動すものでなければならない。誰れがロオランを以て

現實からの逃避者であると云ふか。一國を擧げて祖國の運命にばかり心をいらだてた刹那に、唯だ一人戰爭に超越して、人類愛の危機にあることを叫んだのが彼である。あらゆる輿論の憎惡に反抗して、心靈の權威をしつかりと保持して居たのが彼れである。これが眞の勇氣を持たない人の成し得る業績ではない。クルランボオも始めはペチイな國民詩人の一人であつた。けれど一度愛子マキシムの戰死に自覺をかきさまされると、生れ變つた勇敢な世界主義者となつた。「しかし國民は、眞理にかたむける耳を持たなかつた。彼等は唯だ虚僞によつて滋養されて居る。何ものかを探して居ると思つたら、それは「自由」をではなくて、新らしい奴隷の方法を求めて居るのであつた。」彼の眞理に對する熱愛は、もうクルランボオをして、かれ自身を火のやうな慘酷な憎惡の淵にさらす危險を考へさせる餘地がなかつた。とうとうクレラムボオ事件と云ふものが起つた。彼のとつた態度が、法廷の前に正邪を爭はせることになつた。其事件がまだ進行中であつた。或る日クルラムボオが法廷から歸つて來る時に、一人の狂信者の爲に短銃で射殺された。犯人は戰場で子供を失つたところの、熱烈な愛國者であつた。

死なうとするクルラムボオが、自分を射た狂漢の顏を見た刹那に、かすかな微笑が脣の上に漂つた。狂漢は「私は相手を殺した。敵を……」と狂ひ乍ら叫ぶ。クルラムボオが考へる。「氣の毒な友よ。敵はお前自身の中にかくれて居るのだ……」、彼は眼を閉ぢた――數世紀が一寸の間にたつた樣に見える……「どこにも敵などは居ないのだ……」、かうしてクルラムボオは、來るべき世界の平和境に永遠に其の眼を閉ぢた。

けれどもクルラムボオの理想が、現實の上で達成されるのは果して何時の世の事か。

一九〇五年、オオスタリイの男爵夫人ベルサ・フオン・スツトナアは、小說「武器を棄てよ」を著はしてノオベル氏の平和賞を獲た。しかし世界の平和は、單に武器をすてただけではいかない。有形無形の武器をとらうとする、その心をかづ破滅する事から出立せねばならない。

闘爭本能を競爭競技の方向へ！
國際競技を世界平和の促進に！

飛田穂洲

一

現在に於ける運動界は宣傳普及の道程にあつて、未だ與へられたるが如き問題に對し、其の抱負や理想を述べ得る域に迄進んでゐないと云ふのが正直な告白であらうと思ふ。時に或はかゝる問題に絡らんで其の必要を説く事はあつたが、それは眞に云ふが如き歸結を得んと欲するよりも、所謂理解を求めんが爲めの一方便に過ぎなかつたと云ふのが本心に近いではないか。勿論吾人と雖も遠大の希望と抱負を有たぬわけではない、必ず將來にあつて運動精神が全人類の脈管に流動して勝利を告ぐる機運に到達すべきを夢見ないではない、或は信じないのでもないが、今はそれを唱道し、論議するの餘裕がないのである。只管普及發達に汲々たるに過ぎない、即ち創造より宣傳に移つて同士を糾合しつゝある途上にあり、薄力時代たるを免れないのである。

實際歐米先進國にあつては理解の範圍が稍廣汎に亘つてゐる事を道背し得ても、日本其他多數の後進國の狀態は無理解であり更らに無知である、最近に於ける日本の運動界は頗る目醒ましき發達を遂げたりと云はれて居り、しか信じてゐる者も尠なくはないやうであるが、それは、單に既往に比較してと云ふに過ぎず、決して文字通りのものでない事が明瞭に窺はれる、五千萬の同胞中眞に運動競技及其の精神の皮相たりとも理解せりと思はるゝ程度の人士、果して何パーセントあるであらうか、吾人は比較的趣味を解し、之れを宣傳せんと努力しつゝある關係上、可なり多くの理解者を得たるが如く信じてゐるが、一度之れに深き考察を與ふるならば聊か失望せざるを得ない、かの吾

人が目して理解者たり同志たりと信頼しつゝある者の多くは、僅かに類を以て集まれる狭少なる範圍の人々に出でないのである。吾人はあながち悲觀説を唱ふるものではないが、全國民の理解を得る迄に展開するのは前途尚遼遠たるを思はねばならない。實に十年後か二十年後か豫斷するを許さない、更らに全人類の理解とならば茫乎として捕捉する事が出來ない、或は遂に其の事なくして終るか、または反對の現象を呈して運動不必要説の跋扈に遭遇するか、吾人の凡下の眼力を以てしては殆んと霧中の裡にある。然れども現在に於ける地位より之れを想ふ時、あらゆるスポートが廢棄される世界となるべく運命づけられてゐやうとは思はれない。それは我々愛好者が囚はれたる見解とのみ云ふ事は出來ないであらう。吾人は尠なくとも運動そのものが全人類の間に廣通すべき使命の下に漸次發達し、歡迎されつゝ盛長するであらう事を豫測したい、自信を以て進みたい、而して人類社會の生活中樞に入つて動かすべからざるものとなるの秋來るあらば玆に初めて問題の解決が與へらるゝであらう。今は聲を大にして叫ぶべきの時ではない、吾人はしか謙遜したい、けれども、人間の闘爭的本能を競技競爭の方面に移し、國際競技を世界平和促進の楔子となす抱負の存在は蔽ふべくもない、果して實現の時機に至るべきや否やは別途の問題として、以下説話を進めたい、偉い人間の多い世の中、殊に密接し更らに有用なる事實の横はつて居る社會を他所にして、此の問題を提げて起つた運動狂の放漫なる説述、それは多分識者の嗤笑を買ふに充分ならむ事を豫知し、敢て公言する。

二

世界の建設された當時の狀況は知らない、少なく共歴史あつて以來の人間社會にあつては爭闘、即ち人間たるを免れない、事實を擧ぐるは愚である程確實にしか云へ得る。けれどもそれを以て闘爭性が本能なりと斷定する事が正しいかどうか吾人の論定すべき範圍ではない、假りに闘爭性本能を決定しても、更らに其の本能に就いて是非すべき場合、尊き本能として喜ぶべきか、忌はしき本能性として排斥すべきかに至らば全智全能にあらざる人間共は必ず迷ふに相違ない。現在の場合にあつては不必要な場合と、必要な場合との兩面があり、過去の歴史に徴すれば其の多くの場合に必要の場合のみであつた、尤も無理に必要とした場合も多々あるが。けれ共必要とした場合が多かつた故に、此の爭闘性を飽まで保護し助長せねばならぬと云ふ理由は毫もない。いづれかと云へば全人類から爭闘性の危險を除つて東西相抱擁し、赤き血をすゝり平和の風に吹かれて人類の幸福

を享樂し合ふ時代の促進を希ふ事は、人間の純性であるかも知れない。

闘爭本能を極度に現はしたものは、戰爭である、戰爭は同民族を目す事より起つて、他民族に及ぼす迄に發達したが、全ての結果が心地よきものではない、一將功成つて萬卒枯れたるはまだしも、一將も倒れ萬卒死すと云ふ悲慘事が必ず伴つて來た、淺猿しい人間の闘性は勝利に喜んで或る瞬間滿足を表するけれども、稍久しくして其の慘禍に戰慄し、泌々と其の不幸を味ふのが常である、これを以て見れば闘爭性は勿論絶對でなくして反省の餘地のあるを疑ふ事が出來ない。

畢竟こゝに論究すれば闘爭性は撲滅する事によつて意義を生ずる。血河屍山の戰爭は云はずもがな、日常微細な事にも發揮し易き闘爭的本能を全く驅逐して白羊の如き人間となるべきが理想であるらしい。店頭に陳列されたる商品は他人の持去るに任せ、交通機關はテツケツトなしに其の欲する場所迄利用して何等故障を持込まれぬと云ふ極致に進まなくてはならない。醇化の世界である。人間もこゝまで延び得るものとすれば遂に人間ではなくして、何んとか名命せねばならぬ事となり、それまで日輪が動いてゐるかどうか一大疑問である。

爭闘性の全滅を圖るには現在の想像は去勢より出まい、全世界の人間をすべて去勢する事が出來れば自然爭闘本能を奪ひ去り得るかも知れない、しかし今後偉大なる醫術の力が全世界を征服して、巧妙なる去勢術が行はれるとしても、其處までに至る經路に於てあらゆる爭闘が行はれるであらうし、宗教の力が全人類を惠んで爭闘性を滅却する時機が來る事があつても、波瀾重疊爭闘性の活躍は防止する事が出來ないと思ふ。

殊に宗教（今日の宗教を指す）の如く忍苦を主とし懺悔專門六根清淨とのみ唱ふる事に依つて、すべての人類を征服せんとする等の生溫るい事では、今日の如き人間は承知しないやうに思はれる、爭闘本性を奪ふには其の爭闘本能に入らねばならぬ、之れを抽象的に矯正せんとしては途尙遠くして巧を收むるには難い、無味乾燥なる說法は、難有味を感ずる事はあつても、體得する事が少ないのである。

今の教育がそれである。教育家の墮落もあらうが、一般には其の制度に禍されるものが多々ある事を否まれない、今の教育は皮相教育であつて答案紙に全部支配されてゐる、學生生徒を閻魔帳や試驗用紙の上に捉いて一歩も動すまいとする愚腦はやがて下良少年を出し、自殺學生を產出するのである。總ては興味中心とし、忍苦は興味愉快を得る前提として與へられなくてはならないのである、故に愉快にして効果多き教育法があれば

直ちに以て之れに趨かなくてはならない、しかも教室の中にのみ監禁して他を省みない愚劣教育が精神的に實收を得ないのは當然の歸結でなくてはなるまい。少年を教育せんとせば少年にならなくてはならない、少年の心になり得ないものが、倫理道德書の推積裡にあつて之を導かんすればとて、寸功なきは論を俟たないのである。運動教育等は今日最も新しき試みであるに拘はらず、因循して採る事を躊躇する今の教育家は、其の身中に入つて事を成す度量のないもの、共に語るに足らずと云へたい、痩身涸渇教壇を護衛して一生を終らんとする其の不憫を思ふ時、教育の眞諦と、生活の意義とを彼等に洗禮してやりたいと思ふ。

何事によらない、淨化し向上せんとする場合には其のものゝ中に入らねばならない、爭鬪性を奪はんとするには爭鬪性の中に浸入せねばならない、血を流して後ち太平の恩澤を知ると同時に戰爭は人類の交渉中から逸早く退去せしめねばならぬと思考するが戰後の重なる感想である。こゝが吾人の捉ふべき要點であつて、戰爭なくしては常に對人間の小競合は免れる機會がないかも知れない。而して戰爭の慘虐は呪はれ悼まれるが、時を經つに及んで再び擡頭する、其の間には純理からは問題になるまじき野心の存在があるにしても、爭鬪興味なるものが伴つて、兎に角優劣を爭はうと云ふ決心を誘ふ事も動し得ない。やがて大戰爭が開始され戰雲濛々として吾人の尊敬すべき人類の多くが消え去るのである。

千遍一律の經過が繰返へされ、爭鬪性本能は雲定まつて後ち、其の扱に困ずるけれども、之れを他に移すべき途がない爲めに、無限に放擲され、更らに野心に培はれて本性を發露すると云ふ事に歷史は明に語つてゐる。茲に於てか其の爭鬪本能を柔かなる土壤に轉植せねばならない、一鎚の下に潰滅する事が理想であつても鎚が延びなければ、漸次に目的地に到達せんとするより外にない。吾人は此の開拓に從事する爲めには前述の如く爭鬪性を生しつゝ純化するの道を求めて行かねばならぬのである、爭鬪性本能をも滿足せしめ、危險區域より解放されたるものは運動競技であつて、彼れは最も洗錬されたる爭鬪本能によつて行はれるものである。

三

世界の平和を促進するものは、詭策縱横なる外交術ではない、華盛頓會議でも勿論ない、彼等は戰爭の慘禍こそ誘起すれ、平和來の福音を齎らすには全く不用のものである、軍備縮少や軍備皆廢が行はれて世界が平和となり戰爭が絕滅すべしと想像するのは餘りに稚氣愛すべき見解である、戰爭は常備兵が

なくてもなし難い事ではなく、此の世の中に武器と云ふ武器が影をひそめても、必ず戰ふ事が出來る、空拳戰爭それは今日の戰爭より以上に凄慘を極むるかも知れない、況んや虚僞と體裁の軍備縮少にどの點まで信用が繋げるか。末葉に走り、多くは根本解決を度外視するところに現代の大なる欠陥は潜んでゐるが、總て華府會議も覆る秋のありはせぬかを危ぶまれる。

眞の平和は人類の愛にあり、赤裸々にある人間の汚色の混ずるところに平和の神の降臨はあるべき筈がない。平和を招致するものは國境のなきものに限られる。文學であり、美術であり、音樂であり、演劇であると云ふに遠矢はあるまい、之等は全人類が共通的に趣味を有し、愛好する念が熾烈であつて、此の埒内にけ恐らく人種差別の如き時代遲れのゝ純物はない、誰れもが胸を開き手を握つて集の中に無心の境地を行く、チンバリストもエルマンも梅蘭芳も等しく同胞たるの感を深くせずには居られないと云ふのが藝術の力である。世界の平和が此邊にスタートする事は疑ふべくもないが、恨むらくは美術音樂其の他に委ねて平和來を待ち、爭闘本能の緩和を圖らんとするには時日の延長が思はれる。此等はいづれも重要なるものに違ひないが女性的たるを免れない、餘りに弱々しく美しきに過ぎる、こゝに運動競技が配されなくてはならない。

運動競技には純正の意味に於て國境がない（過去及現在には之れを明言し得ざる暗影はあるが、他日必ず此の不純物は除去さるべきを堅く信ずる）、各人の愛に抱擁されて、赤裸々である、各國人が共通に持つ正道愛を基本として技を角する端正さがある。必勝は期するが汚れたる心情に依つて爭はんとするものがない、時に忌むべきものがあれば彼れは必ず公正なる制裁を受け、競技精神の汚辱者として除外される。競技は公衆の前に於て男性らしく行はれ、而も戰爭の如く如何なる手段を講じてもと云ふ勝利本意の不德はない。ピュアな氣持が始終閃めいて最後迄努力される點に充分の價値が存在する、しかして其の間爭闘性本能はよき意味に於て躍動してゐる、戰終つて後ち彼等は釋然として互に其の健闘を祝し或は勞り合ふ、爭闘性本能もこゝに至れば寧ろ愛すべくして驅逐するの必要がないかと迄思はれる。拳闘試合の如きは可なり酸鼻を極め、常に流血を見、婦女子にあらざるも見るを欲せざる程度のものなれども、佛人と米人とが對抗して何等禍根を殘さぬところに運動精神が立派に爭闘性を醇化せるを親はねばならない、拳闘に於て既に然りである以上、他の野庭球、蹴球陸上競技の類に至つては、其の競爭が餘りに美的に過ぎるとも云はれやうか。

運動は從來鍛體と精神修養とを目的として發生したものであ

る事は否されない、彼れが生れたる當時、オリンピヤの昔から平和の使徒として天降つたと怒號するものがあつても相手にするものはない、戰爭のある限りは精神修養の用具であり、錬體保健の友たるに過ぎない。運動が大きな使命の下に動かんとするのは今後の世界であつて、戰爭には飽きた、愛想は盡したがされぱと云つて先祖傳來の爭鬪性を手放す事が出來ない、持て餘して居ればもとの木阿彌になると云ふ危險な瀬戸に於て花々しく打つて出るにある。

假りに日米の間に風雲急なるものがあり、一騒動持上らんずる形勢を示したりとせよ、兩國の運動大臣の間に屢々交渉が取り換はされ結局國交斷絶となつた、昔ならば血醒い風が國民の頭上に吹くのであるが、かゝる野蠻時代の遠くに過ぎ去つた世の中は、早速飛檄が各運動選手の間に舞込んで、直ちに豫選競技が開かれる。やがて選出されたあらゆる運動の選手は艤裝商船に滿載されて横濱港を船出する、野球の選手、短艇の選手、蹴球の選手、角力の選手、庭球の選手、其他運動と云ふ運動の選手を網羅せる日本軍は太平洋上の樂園地たる布哇を指して乘込んで行く。一方米國に於ても日本運動軍を迎撃せんとして、桑港を出發し等しく布哇に上陸する、大戰の期日は豫定通り何月何日の某時刻より、何々グラウンドに火蓋を切られ、第一回の長距離競走にあつては日本選手の奮鬪目醒しく、米國選手を完膚なき迄に打破つて、戰勝の幸先よしと云ふ號外が街々辻々に撒り撒かれる、日本の上下は聲を涸らし亂舞狂喜して祝盃を擧げる、戰は刻々に變化し運動省並に各新聞社の入電は一喜一憂、今日は何點、明日は何點と胸を躍して待つ内、さしもの大戰爭も十數日を費して終りを告げ、僅かに數點の差を示して日本男兒は美事にヤンキーを破つた其れが爲め永く米國の領土であつた布哇は日本の領土として分與され芽出度戰爭の終結は告げられた、しかも一人の死者を出すなく僅かに野球其他に數名の負傷者を出したのみであつた。如何にも淡白で、米國は布哇を失つた不愉快はあつても、競技の上に於て敗北したのであるから諦めも早く、兩國民とも充分に爭鬪性を滿足させ萬歳を三唱し、握手を交換し次の機會を相約して袂を分つた。

一敗血に塗れた米國は復讐の念やみ難く、いづれ日本運動軍を粉碎せんと櫛風沐雨の練習に餘念なく、布哇奪還に腐心してゐた折柄こゝに突如として布哇に獨立戰爭が持上つた、米國の配下から日本の麾下に移された布哇土人は他人の統治の下にあるを快よしとせず、一隊の運動軍を起して日本に挑戰し來つた、戰勝の夢未だ醒めざる日本軍は遽に狼狽したが、たかゞ土人軍と侮つて對戰したるに、決死の獨立軍は無二無三に肉迫し遂に

十數點の差を以て美事世界最强の譽ある日本軍を一蹴し去り、カメハメハ王朝以來彼等は初めて自由の民となつた。これが爲め日本の運動大臣は失脚し、米國は折角の望を失つて茫然たりと云ふのが運動戰爭の一齣である。

此の空想は餘りに奇嬌に偏するの嫌はあるが、運動精神の全世界を風靡するの時、吾人は此れに近き現象を呈し、爭鬪性の本能が、競技運動に移植され、美化されて世界の大平和が全人類の上に輝き、此の世は樂土となり憂愁と悲哀と忍苦は全く霧消するまでに進み得るであらうと信じたい。

四

以上は吾人の運動に對する自負と理想を說述したるものであつて、多くは運動宗未入の人々に一蹴さるべき性質のもの、吾人もまた之れを固持主張せんとするものではないが、國際競技が如何に世界平和の促進に便するかの一例に就いては是非述べて置かねばならぬと思ふ。

先きに平和の第一義は親愛と赤裸々にあると云つた、しかして親和するの最も捷徑なるものを藝術、競技の二に求めたのであるが、此の考察は單に吾人のみに止まらず、我が外務省の如きにすら其の聲が昂つたらしい、昨年早稻田大學野球團が渡米を發表するや、若し日本の野球團にして渡米希望のものあらば、彼の地に於ける旅行の便宜を與ふるは云ふ迄もなく、或場合はより以上の盡力をもなさむとの意嚮ある由を傳へ聞いた。共れが省としての意嚮であつたか、或一人の希望であつたかは知らない。早稻田野球軍は外務省の後援を得ざるも尙充分に旅行が出來得るやうに準備が出來てゐたから、厚意を受くるに及ばなかつたけれども、米國各地の領事館や華盛頓の大使館から非常な厚遇をうけたところより推せば、外務省が在來の態度に大なる變化を生じ何にものかを感じた事は爭ふべならざるものである。

曾つて市俄古大學野球團が來朝するにあたり、種々斡旋した市俄古の領事代理姉齒氏は某國外交官に肩を叩かれ『君巧くやつたね』とニヤリと笑はれた事を紐育に於ける早大野球團歡迎會席上で語られた、此れは當時排日熱の高潮せる時であつたから、かの外交官先生は神經過敏に、日本の領事館が市俄古大學を招いだものと早合點したものであらう。勿論事實は非常に相違して、市俄古の來朝は外務省や領事館などの知つた事ではなく、兩大學の間には十數年前より五年毎に招聘交換をなす約があり、時たま〱市俄古方の渡日すべき年に相當したに過ぎなかつた。吾人は外務省の目醒めたる事を喜ぶに躊躇しない

が、野球團の渡米が外務省を煩はす程になる事には反對である、如何となれば外務省が介在するとが何等か其處にポリシイが含まれてゐないかと云ふ疑念を生ずる、運動競技には策略は禁物である、飽迄でも純でなければならない、純なればこそ米人の多くがスタンドから味方をそつちのけにして、聲援を吝まぬと云ふ美しい心を送るのであつて、此れが日本外務省派遣野球團と云ふ銘を打つたものであつたら、彼等の目は異様に輝き、いたる處敬して遠ざけられて仕舞ふであらう。餘事に亘つたが兎に角現下の形勢が、親和の楔子たるには運動競技最適なりとの信用を博したるは動すべからざるものであると思はれる。百の代議士千の實業家を送るよりも一野球團が益す好果の大なるべきを想つた外務省なども、稍後れては居るが醒めさるよりはましてである。

事實彼の一野球團はあらゆる歡迎と便宜とを米人より受け、長途の旅行に何等の支障を生ずるなく、盛り切れぬ好感を與へつ與へられつして歸朝した。バハロウ市に於ける彼の地米人の厚遇振りに就いては昨夏本誌上に公にした事があるから贅言を費さないが、一運動競技を挾んで彼我國人、それは限られたる少數の人々であつたにしても、融合し歡喜し合つた事は、兩國親和の上に何等かの影響がなくては已むまい。熊谷清水の兩庭球選手が米國人の間に盛名を馳せ、尊敬を拂はれた一事にあつても同様である。白耳義に開かれた國際競技に我が代表選手が現はれた事によつて、如何に各國人が快よく迎へたか、策略や手段を擇ばぬ外交術を守本尊とする人々には、それ等の消息を知るに苦しむであらうが、零敗した選手に一掬の同情を投げ、親しみ深く目送つた事を想像するに難くはないのである。これが外交上の會議に於て失敗し旗を捲いて歸る時と合せ考ふるならば其處に雲泥の差異を見出すであらう。

只玆に遺憾に堪えないのは、日本を初め支那其他が、此の親和の楔子に醒ざる點である、日支間の問題は常に絶ゆる時がなく、隣國相和すべきに拘はらず、全然相反目の態度である、同じ東洋人の血を享けたる人間共が睨合ひ、たばかし合ふ醜體は人間沙汰とは思はれないではないか、しかも兩國民の衝突を緩和すべく何等の方法も講じられてゐない、親和すべき機會が殆んど絶無なる兩者は只々國と國との折衝に任かせて人と人との交渉接觸に乏しい、老大支那は運動方面にあつては日本よりも以下に位してゐる、近年東洋オリンピックが開かれてから、端緒を得たが日支運動對抗などはまだ〳〵遠い。布哇の支那人野球團等に屢々接した吾人の經驗からすれば、まこと運動競技の上にあればこそと思つた事が再三ではなかつた、昨年早大が布哇

に上陸して連敗した時の如き、支那人チームの人々は意外の同情を寄せ、何にかと注意をして呉れた。

日清戰爭以來から疎隔した兩國民の感情もかくて運動競技の上に自然と融合するのであるが、如何せん支那の運動界は我國よりも後れて居る。けれども吾人は支那のそれを責むる前に日本の現狀を、も少し鞭韃せねばならぬ。本音を吐くならばまだ〳〵微々たるものである、吾人の云ふのは記錄の上ではない、記錄の如きは微小な問題で、大觀上は勘定に入いらない、吾人は國民の運動に對する冷酷さを悲しむのである、路傍に捨て顧みない其の態度を嘆ずるのである。

白耳義の世界競技に參加せる米國は一商船を艤して國民歡呼の中に船出した、日本は國も倭小であり、貧乏であるから、これに倣ふ事は望み得ないまでも、上下一致も富豪其の他物質に不自由なき連中が多少でも奮發したらむには、行を送るに相當なるものが出來た筈であつたらう、僅か選手は十數人に過ぎなかつた、それを送るに體育協會の幹部は四苦八苦し、さては新聞紙上に窮狀を公開して全般から喜捨を仰がんと迄したと云ふに至つては哀れ憫然たりと歎かざらんとするも得べけんやである。而して日本の代表選手は東洋汽船のコレア丸三等船室に押し籠められ、遙々米國に上陸したのであつた、貳等船客以下はBデッキには上れない規定になつてゐる、代表選手諸君は十七日間の長航路を如何にして暮したか、何等かの便宜を與へられてBデッキに其の脚力保持の方法をとり得たかどうか、いづれにせよ臭氣鼻を衝く下層船室に悲しくも敗戰の夢を結んだに相違ない。日本代表選手は三等船客として海を渡つてゐる時、米國選手は己れの城郭に等しい巨船に搭乘しつゝ安府に進んでゐた、貧富の懸隔はあらうが、國と國ではないか、此等を屈辱と云はずして何にをか屈辱と云ふであらうか。日本選手皆敗せりと云ふ外電に接した時、吾人は如何にも安心したやうにホット一息吐いた、敗けて呉れてよかつた、若し間違つて勝つて呉れたら何んと云つて此等勇士を迎へよう。しかも飽迄も冷酷氷の如き國民は何んと云つた、意氣地がないではないか、何にか一つ位勝てさうなものだ、大金を水に流したやうなもの、態々敗けに行くなら行かぬ方がいゝではないか。と、此等の徒輩は一文も出した連中ではないのであるが、敗れればいゝ氣持のしないのが人情である、送る時の無情を棚に上げて不足を並ぶる其の心事の陋劣、筆にするさへ不愉快千萬である。

更らに早慶野球戰が何時迄も復活せぬなども全く日本人の氣が知れない、外國人が之れを聞いたら日本人は運動競技にすら虛心坦懷になり得ない國民であると貶すであらう、三十九年の

中止當時にあつては多少理由も存したであらうが、今日それを根に持つて野球の發達を阻害するには當るまい。此んな吝な氣持が日本人の頭腦の一部に殘つてゐる以上日本運動界の曉鐘ゝ遠い哉と嘆じたい。尚一些事ではあるが、先頃の事東京府立第一中學の短距離競走選手平岡某なる一生徒は、學校當局より『本校より競走選手を出すなどは甚だ本校の面目に關するから絶對に出場を禁止する、若し命に服せなければ退校處分にすべし』との嚴命に接し、遂に平岡某は其後も大阪の大會に出場したので一中を退學したそうである。世の中には感ずべき先生もあるものでかうせねば教育が施せぬと云ふのか。我等にはとんと其心持が分らない。

かく列擧すれば吾人の平和促進も爭闘性の醇化も始んど絶望に思はれる、が、時代の要求は遂に吾人の意を滿さずには已むまい、現狀が直ちに平和促進の鍵とはならない迄も、發達すべき傾向にあるは否まれぬであらうから、五年、十年、十五年の後ち、盛んに國際競技が開かれ、人と人との交渉が密接するに從つて、人類愛の高潮となり、多くの人々は期せずして平和のヴエルに包まれ、爭闘本能に一大革命を起すであらう事を堅く信じ、併せて同志の士と共に益々運動精神を全世界人類の上に意義あらしむるやう努力したい。

與へられたる問題に對する答案としては或はマークの附けやうがないかも知れない、勿論余も之れに依つて及第しようとは思はないのであるから、取捨は讀者諸君の勝手である。只余は眞面目に運動宗を唱道し、人間生活の一部として、あらゆ階級に其の趣味を感受せしめたいと希望してゐる、其の點だけは人後に落ちない自信を有してゐる事を告げ、愚説の罪を陳謝しよう。――十一、六、三〇――

覺え書き

——婦人と世界平和其他——

本間久雄

世界平和の建設的方面としてはこれまでさま／＼のことが考案されて來た。少し古いところではヘーグの平和會議から最近のワシントン會議に至るまで、會議の内容なり條件なりについてはそれ／＼異つてはゐやうが、その根本目的はやはり、いかにすれば戰爭のない狀態に社會を改造し得るかといふことに外ならない。

しかしかういふ表面立つた條件やら規約やらが、本當に實現されるには、それらは單に條文としてゞはなく、又は單なる理屈としてゞはなく本當に人間の本能とか衝動と云ふ境地にまでそれらの條文や理由の精神が浸み込んだ後のことである。言葉を換へて云へば世界の人類が、心から、戰爭を否定し、人類愛に眼醒め相互扶助の精神を體得した後のことである。でなければいかに國際的條文が精細にならうが、眞の世界平和は到底實現されることがないであらう。

心から戰爭を否定し、人類愛に眼醒め、相互扶助の精神を體得することは、男たると女たるとを問はず現代の誰人に取つても當然すべきことの第一である。しかし特に婦人に取つてそれを勸說力說することが現代において、一層効果あるやうに思はれる。それにはざつと見て二つの理由がある。その一つは婦人自身が精神的肉體的に、男子に比して一層平和主義的であるからである。

ギリシヤのアリストフアーネスの言葉に婦人は愛するために生れたので憎むために生れたのでないといふ意味の言葉があるが、これはたしかに永久の眞理を語つた言葉である。尤も古來男と同じやうに好戰的で、戰鬪的で、血腥ぐさいことの好きな女もないではなかつたが、概して云へば婦人はアリストフアー

ネスの所謂愛するために生れたと見るのが至當である。だから戰爭をこの世界から絶滅して、人類愛を高唱し、世界平和の基礎を定めるには、婦人のその本來の平和主義的性情に待つことが一層必要であると云はなければならない。

婦人はまた、偏狹な國家主義や偏狹な愛國心に囚はれることも男に比して大低の場合一層少ないと云ひ得る。「男の造つた」この世界は、同時に偏狹な國家主義の世界である。そしてその國家主義が互ひに自國の優越を誇り、他國の權利を侵害しても自國のそれを伸長しようとしてゐる世界である。この世界にありては、御用學者がいかに言辭を巧みにしてその價値を說いても、その國家主義は、結局一種の蠻的な侵略主義である。かういふ侵略的國家主義のつゞくかぎり、戰爭絶滅や永久の世界平和といふことは到底空疎なる夢に過ぎないことは改めていふまでもないのである。

であるからかういふ偏狹な國家主義――男の造つた現世界の基調となつてゐるこの偏狹な國家主義を捨てゝ、國際關係を徹底的に改造して永久の世界平和を創造するには、その偏狹な國家主義が骨の髓まで滲み通つてゐる男よりは寧ろ本來が平和的であり而もさういふ國家主義に累されない婦人の力に待つのでなければ到底不可能なことである。事實近代の平和運動は、このことを自覺した婦人たちに依つて着々効績を擧げつゝあるのである。

婦人が平和運動に盡瘁することの一層適切な今一つの理由は、婦人は「靈魂の教育者」として新しい時代人を哺み育てる重大な任務を荷つてゐるものだからである。その新時代人の哺育者たる婦人が平和主義者であると軍國主義者であるとは、それに育て哺まれる新時代人の上に最も重大な影響を及ぼすことは誰人も容易に想像し得るところであらう。であるから婦人自らがまづ平和主義の眞の正しい意味に目醒め、人類愛を體得して、やがてその精神をその哺み育てるところの、次の時代の芽生へである、若い新しい魂に傳へるならば、世界平和は自らにして贏ち得られるに相違ないのである。

世界平和の精神なり感情なりを把握することが現代の男女何れにも必要であるが、とりわけ婦人に取つて一層それの必要であるのは上の理由からである。

○

『武器を捨てよ』の一書で、極端な非軍國主義を宣傳した故スットナー夫人やヘーグの婦人平和會議で議長をつとめたジエーン・アダムス夫人などが熱心な平和主義であることは皆人の知つてゐるところである。性道德の革命家として、又、個人主義

教育の先覺者として有名な例のエレン・ケイ女史なども、この點では前二者に劣らない平和主義者で、その著『戰爭・平和及び將來』はたゞに先頃の世界大戰の嚴正批判であるばかりでなく、婦人と世界平和との關係を說く上に委曲を盡してある點で最も注目さるべきものたるを失はない。

ケイはまづ、戰爭滅絕の方法として三つの方法を擧げてゐる。

その第一は、新時代の一切の教育をして掠奪的本能を絕滅することを目的とさせるやうにしなければならない。しかしさういふ教育は、小學教師や牧師等が、戰爭は、神樣のお思召の一つであるとか、基督教が戰爭的精神や戰爭的行爲と提携し得るなどゝいふことを人々に敎へてゐる間は到底望み得ることではない。

戰爭防止の第二の方法は、新聞紙の自由を尊重して、一國民の內に個人的又は團體的憎惡心を激成したり、又は國民と國民との間に國家的憎惡心を挑發したりするやうなことのないことである。

第三の方法は、時局が險惡になつたならば、政府は、現在のやうに宣戰の布告をした後に當の相手の國との談判の結果を公けにするといふやうなことではなく、宣戰の布告をする前に、それを公けにして、國民の輿論に耳を傾けることである。

ケイは戰爭防止の方法としてこの三つを擧げてゐる。尤もこれは時局が險惡になつた場合に採るべき方法で、本當の戰爭防止は、むしろさういふ事局の險惡を來さないやうに爲政家が、健全な國家主義の立場に立つて政治を行ふことが先決問題であると彼女は說いてゐる。

蓋し、彼女の所謂健全な國家主義といふことについては一言說明して置く必要がある。それはインタナショナリズムを裏づけたナショナリズムである。在來の國家主義はたゞ自國の利益を保護し擴張することを目的とし、その目的を實現するためには他國の利益を度外視し、他國の權利を侵害することを敢て辭しないのであるがさういふ國家主義は偏狹な舊式な國家主義である。新しい健全な國家主義は世界主義を裏づけた國家主義で、墺地利の社會學者ゴルドシヤイトの所謂「目的合同」(パーパス・ユニオン)——各國がその共通したある利益を助け合ふ目的の下に政治的に經濟的に合同するといふその「目的合同」といふことを根底とした國家主義であるといふのである。そして、さういふ健全な國家主義の立場に立つて、各國が相互に獨立してその利益と權利とを保護し、同時に他國のそれを助長するといふ國際關係にあつて

始めて永久の平和が可能であるといふのである。

　エレン・ケイはさういふ世界主義的な心持ちを裏づけた國家主義の樹立は將來婦人の力に待つことが一層大であるといふことを力說し、そのためにはまづ婦人は熱烈な戰爭否定の感情に燃えなければならないといふことを高調してゐる。

「婦人といふ婦人の、血汐の滴りといふ滴りが戰爭――婦人及び子供等に取つて常に最も酷價を課するところの戰爭――の憎惡で一ぱいになるほどでなければ、戰爭は止まないであらう。婦人が男と同じやうに、自國の權力と光榮といふことだけを信じてゐる間は、又婦人が男と同じやうに、戰爭が神意の一部分であつていかなる賢明な方法を以てしても避けることの出來ないものであるといふことを信じてゐる間は戰爭は絕えないであらう。

　婦人はまづ戰爭に對する憎惡で心が一ぱいにならなければならない、そしてあらゆる方法で戰爭の防止を講じなければならぬ。そしてその方法の一つは疑ひもなく婦人が戰爭の材料のために子供を生まないやうにすることである。

　ケイはこの意を次のやうに述べてゐる。

　いつの時代でもさうであるが、殊に戰後には一國の壯丁の多くが戰爭によつて失はれた結果それを補ふために、人口の增殖を謀ることが、國家の必要であるといふ國家主義的な考へから男は女に多產を强ひ、女も亦それを以て愛國的行爲でゝもあるやうに考へるのが常である。しかしこれは大きな間違ひで、婦人が子を生み、それを育てるのは、飽くまでもその子供等をして平和的の文化に貢せしめようためである。決して次の戰爭に役立たせるためではない。

「もしも婦人だちが、戰後において所謂「國家的生產」に對する希望に好んで承服し又は誤られた「愛國的觀念」から、それに努力するならば、今後二十年において彼等の息子たちが新しい戰壕を滿たすに至るといふこと以外には何等の效果もないであらう！どうか婦人だちはこんなことをしないで欲しい」

　又、人間の量の多いといふのことよりもその質の如何が將來の文化に取つて重大である。だから、婦人は、この點に留意して、徒らに多產に陷らず、質の優れた子を生んで、それを正しい人間たるべく、養育しなければならぬ。

「子供等が大きくなりかけた時に、母は彼等に各個人及び各國民の間の相互扶助は相互競爭と共に、自然の方則であるといふことを敎へなければならない。何よりも第一に、子供等を最も偉大な英雄は權力や光榮のために鬪ふ人ではなく、他

人を助けるために鬪ふ人であるといふことを感銘させなければならない。又戰勝は必ずしも戰はれた事柄が正しいものであるといふことを證明するものでないと共に、戰敗亦必ずしも非が戰敗者の方にあるといふことを證明するものでないといふことを子供等に敎へなければならない」

卽ち在來の偏狹な國家主義に容易に熱狂して、その結果は戰爭の殘虐を敢てするやうな人間ではなく、正しく國際關係を認めて理性的に事を處する平和的文化人たるべく子供を敎育しなければならない。こゝに世界平和に寄與する上の婦人の最も大きな責任がある。婦人の參政權運動の如きも、結局は、婦人が政權を得ることによつて、如上の平和運動に盡すといふためでないならば全く無意義である。

エレン・ケイは大體上のやうに考へてゐる。そして現代の婦人が如上の點について本當に自覺するかしないかによつて將來の世界平和が贏ち得られると考へてゐる。

しかし不幸にして現代の婦人はまだその點について十分な自覺を有てゐない。

『現代の婦人たちは、男子とおなじく、一國の幸福、敎化、及び名譽は、その國の人口や大きさの如何によるものではないといふことを殆んどまだ了解してゐない。世界における婦人の大多數がかのセルマ・ラゲルレフと共に

「私の舌が言葉を話し得るかぎり、血汐が私の血管に流れてゐるかぎり、私は平和のために働かねばならぬ。たとへそのために私の生命と幸福とを犧牲にしても。」

と云ひ得ない間は、人類に平和がまだ〱持ち來らされないのである。』

ケイはかう云つてゐるが、これは全く實際である。婦人がかういふ平和主義に身も心も浸潤するのでなければ、男の樹立した偏狹な國家主義や頑冥な愛國心や野蠻な軍國主義やを征服することが出來ないであらう。そしてそれを飽くまでも征服することの出來るやうにするところに婦人文化の特殊の意義があるのである。

○

エレン・ケイの平和主義から直ちに思ひおこされるのはトルストイの無抵抗主義的平和主義である。エレン・ケイのは現在の國家を是認した上の平和主義であるがトルストイのはそれを全然否定した上の平和主義である。この意味でトルストイのは極端なアナーキズムである。トルストイ主義をそのまゝに遵奉した例のヅホヾアの戰爭否定なども一個悼ましい平和主義の殉敎者として、平和主義を考へる上には興味ある暗示を與へる。

英國のトルストイ研究の權威アイルマー・モードの名著『トルストイ及び彼れの諸問題』の中からヅホヽアの悲劇を左に拔き書きして見る。

序でながらヅホヽアとは地上一切の××を退け、たゞ〳〵神の意志によつて生活しようとするのをその特色とする。ロシアの宗教上の一宗派である。從つて彼等は××を認めず、同時に徴兵制度を××し、××の命令に應じない。そのために一八九五年のヅホヽアの大虐殺が行はれたのは皆人の知つてゐる事實である。以下拔き書きする一節は一八九五年にヅホヽアの一人グラゴリエフといふ男が徴兵の籤引(くじびき)を拒んだために囚へられて審理された場合における判事との問答である。

判事、どうしてお前たちは兵役を拒むのか。

グラゴリエフ、××に這入ることを欲しないからです。××は私達の良心に反し、神の意志に反したものであるからです。私達は、私達の良心に從つて生活しようと思ひます。良心に逆つた生活はしたくありません。

判事、××の時間は短かい。お前だちはぢきにその期間を務め上げて家に歸ることが出來る。さうしたら、何もお前たちは法廷や、獄を引つ張り廻されなくても濟むぢやないか。

グラゴリエフ、判事さま。私たちは私たちの肉體の價値を計算しません。私たちに取りて唯一の最重大事は、良心が清くなければならないといふことです。私たちは神の意志に反したことを行つてはなりません。ですか××になるといふことは決して輕々しく出來ることではありません。神樣は嘗ては萬人の心の中に宿つておいでになつて、「爾曹(なんぢら)他人を殺すべからず」とお教へになつてゐたことがありました。苟も基督教徒は、どうして人を殺すかといふことを學んではならないばかりでなく、又神樣の創造物である人間を打つことさへ他人に許してはならないのです。

判事、でも兵隊や戰爭がなかつたなら、吾々はどうすることも出來ないぢやないか。吾々は僅かの財產しか持たないが、他の一方には澤山の財產を持つてゐるものもある。そして、もし軍隊や軍人がなかつたなら、惡い人間が自由に侵入して來て、奪掠を恣まゝにしても、吾々は吾々自身を防ぐことが出來ないぢやないか。

グリゴリエフ、判事樣、福音書に「地上の財寶を蓄積すること勿れ」と書いてあります。私達はこの戒律を守つて居りますから、何物をも守護する必要がありません。判事さま、考へて御覧なさい。私たちの同胞が、金が必要だといふ場合に、どうして私たちは金を保存して置くことが出來ませう。

私たちは私たちの隣人を扶助するやうに神様から命令けられてゐます。ですから彼等隣人たちが缺乏してゐるのを見ては、私たちは私たちの靈魂に安息を見出し得ないのです。

かういふ問答のあつたのち、判事は、國家の必要であることから、軍隊の必要であること、軍隊がなければいかに吾々は不安であるかなどいふことを諄々として說いた。するとグラゴリエフは次のやうに答へた。

判事様、しかし實際において××は私たちの利益を保護するためには存在して居りません。それどころか、私たちの貯金はいつも××のために費され、そしてその結果は慘めと殘虐と殺人とを引きおこす以外には何等世間に用のないものとなるに過ぎないのです。

このグリゴリエフの答へは、とりも直さずヅホベア全體の答へであり、又それはトルストイの口吻そのまゝでもある。彼等はかゝる見解から一切の地上生活の××を斥け、無抵抗主義を奉じて一切の暴擧と暴力とを斥け、かくすることによつてトルストイの「同胞主義」を實現しようとしたのである。

トルストイやヅホベアの無抵抗的平和主義にも無論考ふべき多くのものがある。しかし地上生活一切の××を認めまいとしたその根本態度がすでに／＼誤つてゐる。これに比べると、各國家の政治上經濟的の目的合同によつて、戰爭のない世界、暴力を用ゐるに及ばない世界——永久の世界平和を贏ち得ようとしたエレン・ケイ及びその他近代の平和派運動がどの位合理的であり、積極的 あり、且つ有效的であるかわからない。吾々の平和主義も亦この方であることいふまでもない。

愛の本質に就いて

―所謂人道主義者平和主義者及び其直反對者等のさまざまなる謬見を打破する爲めに―

生田長江

一

性慾病理學は我々にまで、寧ろ氣味惡きほどの興味深き思索題目として、サディズムス、マゾヒズムスと云ふ二大定型の對立を提供してゐる。

更めて說くまでもなく、性慾の相手を殘虐することに依つて自己の慾望を刺戟されたり滿足させたりすると云ふ、これが所謂サディズムスである。その正反對に、性慾の相手から殘虐されることに依つて、自己の慾望を刺戟されたり滿足させたりすると云ふ、これが所謂マゾヒズムスである。

この二の病的定型を通じて、殘虐が性慾を挑發するやうに見える場合と、性慾が殘虐を誘導するやうに見える場合とを分つことは出來ないでもない。

性慾を滿足させる普通の方法との關係を云へば、殘虐は普通の方法の準備もしくは補助として爲される場合もあり、普通の方法の代用として爲される場合もある。殊に後者の場合に於て普通の方法の全然無効になつてゐることの少くないのは注意すべきである。

殘虐の種類に至つては、追窮、難詰、叱責、威嚇、脅迫、監禁、緊縛、鞭打等の如く比較的輕微なる、時としては寧ろ滑稽なる程度の物から、流血、兇殺、屍體の細斷、內臟の剔抉、屍姦、喰肉(マゾヒズムスの場合に於ては、勿論兇殺以下の事はただ患者の空想裡にのみ起り得べきものであるが)等の如く戰慄すべきほどのものに至るまで、殆んど千態萬様である。

ところで此の千態萬様なる殘虐に就いて、それを實際に自ら實行する者にのみ範圍を限ることなく、他人の實行したる殘虐の見聞によつて、自らの性慾を刺戟されたり滿足させたりする者をも包容することにすれば、サディズムス、マゾヒズムスの患者は愈々多くなつて來る。單に實際の殘虐にのみ範圍を限ることとなく、空想の上に殘虐を加へたり加へられたりする者をも包容することにすれば、幾分のサディズムス的ならざる、もしくはマゾヒズムス的ならざる性慾的興奮といふものがあり得るかどうかを、恐らくは何人も疑ひたくなつて來るであらうと思ふ。

少くともこの病的二大定型の輕微なものになればなるほど、いよいよ普通人の正常なる性慾生活に近くなつて來るといふこと、換言すれば所謂病的なるものと然らざるものとの間に、截然たる限界が決定され得ないといふことは、病理學者の殆んど總てが、理論實例との兩面からして既に十分に證據立ててゐるところのものである。

二

一般に、野蠻の社會へ、動物の生活へ、特に下等動物の生活へさかのぼれば、個體と個體との交渉に於て、所謂殘虐が普通の事である如く、性的もしくは生殖的接觸の場合に於ける殘虐も亦普通の事である。

乃ち、サディズムス、マゾヒズムスは文明人の間に於ける野蠻性への、動物性への、殊に下等動物性への病的復歸として見るべきである。

三

相手の男性に殘虐を加へることに依つて、自らの性慾を刺戟されたり滿足させたりするところの、即ちサディズムス的傾向をもつた女性も往々にして見出されないことはない。

けれども、さうした女性が甚だ多數のマゾヒズムス的傾向をもつた女性に對する、極めて少數のものであるといふことの事實は何を語るか。

又、さうした少數の女性の見出されるのが、特に大都會——頽敗のどん底であるところの大都會に於てであるといふことの今一の事實は何を語るか。

更に、サディズムス的傾向をもつた女性が、相手の男性に女性的性質を見出し、見出さうとし、又は見出し得たと空想しながら、己自らは内面的にも外部的にも、むしろ男性的態度を取るといふことの第三の事實は何を語るか。

加之（しかのみならず）、マゾヒズムス的傾向をもつた男子が、サディズムス的

傾向をもつた男子より遙かに少いといふこと、又其の少數の男子の見出されるのが矢張り特に、大都會に於てであるといふこと更にマゾヒズムス的傾向をもつた男子が、男性的の女子を悅び、自らは寧ろ女性的態度を以てそれに對するといふこと、これらの事實はそも何を語るか。

最後に今一つ附け加へて云へば、一般にサディズムス的女子とマゾヒズムス的男子とが、いづれも皆一面に於て同性色情的傾向をもつてゐるといふことの重要なる事實は何を語るか。

曰く、男子にあつてはサディズムスが通例であり、マゾヒズムスが除外例である。女子にあつてはマゾヒズムスが通例であり、サディズムスが除外例である。

そして前述の如く、これらの病的定型を普通人の正常的性慾生活との間に、ただ程度上の相違があるのみであるとすれば、一般に男子の性慾はサディズムス的の傾向をもつて居り、女子の性慾はマゾヒズムス的の傾向をもつて居ると斷言して、何等の差支もなささうに思はれる。

四

何等かの程度にサディズムス的傾向をもつ、男子の性慾に於て、何等かの程度に殘虐的な行爲をなすのは、相手の女子を征服する爲めの手段である。或は征服その物である。

男子が女子を征服するのは何の爲めであるか。曰く、女子を所有せむが爲めである。

男子が女子を所有するのは何の爲めであるか。曰く、女子と結合して一の物にならむが爲めである。

男子が女子と結合して一の物になるのは何の爲めであるか。曰く、單にそれ自身だけでは生きて行くことの出來ない男子が相手の女子と補足的に結合して、新しく生きて行くことの出來る一個體をなし、或は一個體を創造せむが爲めである。

何等かの程度にマゾヒズムス的傾向をもつた女子の性慾に於て、何等かの程度に殘虐な行爲を加へられるのは、相手の男子から征服される爲めの手段である。或は被征服その物である。

女子が男子から征服されるのは何の爲めであるか。曰く、男子から所有せられむが爲めである。

女子が男子から所有されるのは何の爲めであるか。曰く、男子と結合して一の物にならむが爲めである。

女子が男子と結合して一の物になるのは何の爲めであるか。曰く、單にそれ自身だけでは生きて行くことの出來ない女子が相手の男子と補足的に結合して、新しく生きて行くことの出來

る一個體をなし、或は一個體を創造せむが爲めである。

かくの如く見て來れば、男子が女子を所有すると、女子が男子から所有されるとは、その形式を異にしつつも、その內容を同じうしてゐるものではないか。

卽ち、男子は所有の形に於て所有されて居り、女子は被所有の形に於て所有してゐるものではないか。

又男子が女子を征服すると、女子が男子から征服されるとは別々なる外觀の下に同樣の本質を包んでゐるものではないか。

卽ち、男子は征服するが如く見えながら征服されて居る、女子は征服されるが如く見えなから征服して居るものではないか。

一言にして云へば、何等かの程度にサディズムス的傾向をもつた男子の性慾は、直線的に征服的の征服を、所有的の所有をめざして居り、何等かの程度にマゾヒズムス的傾向をもつた女子の性慾は、婉曲に被征服的の征服を、被所有的の所有をめさして居る。

鐵片は磁石に向つて突進する。磁石は鐵片を牽引する。この二の物が男女の結合する如く結合した時、どちらがどちらを征服したのであるか、所有したのであるか。どちらがどちらから征服されないでしまつたか。所有されないでしまたつか。

五

性慾も亦、次第に發達して來たものの一であるとする。より粗惡なものから、更により粗惡なものへと遡り、より原始的なものから、更により原始的なものへと遡つて行くとき、少くとも雌雄生殖のあるところには、性慾の萠芽もまたあるべきは、改めて說くまでもないことであらう。

しかし乍ら、今日までの生物學に無性生殖を以て扱はれてゐるものが、果して實際に無性生殖であらうか。

『水戶黃門記』には、德川光圀が舟を太平洋に泛べて、世界の果てを見屆けて來たと記されてゐる。

今日の生物學者等は、彼等の顯微鏡を所謂無性生殖處女生殖の上に置いて、兩性對立の極限を見て來たのであらう。

我々の直觀と豫覺とは、生物學者等の硏究の既に到達し得てゐるところの物を越えて、遙かに遠く行く。

ゲデス・タムソンは受動的、靜止的潜勢的傾向を有する卵子細胞が同化作用への偏傾から生じ、發動的、活動的、顯勢的傾向を有する精子細胞が異化作用への偏傾から生じたと言つてゐ

る。又、フォザアギルは營養に於ける同化作用が生殖に於ける女性に相應し、營養に於ける異化作用が生殖に於ける男性に相應すると言つてゐる。

乃ち、所謂芽胞生殖、發芽生殖、分裂生殖をなすに止まつてゐる生物も、それが生きてゐる限り、少くとも新陳代謝をなしてゐるのであり、それが新陳代謝をなしてゐる限り、少くともフォザアギルの所謂男性に相應する異化作用と、女性に相應する同化作用と、これらの二の作用をなしてゐる。

そして所謂同化作用への何等かの偏向が、既に何等かの女性的なものを生ずるものであり、所謂異化作用への何等かの偏傾が、既に何等かの男性的なものを生ずるものであるとしたら、絶對に女性的なものをも、絶對に男性的なものをも生じないでゐるのは、同化作用と異化作用との二つが、完全に平衡を保つてゐ　場合にのみ限られる。

現實の世界に於　、現實の生物に於て、その組織内に於ける同化作用と異化作用とか、完全なる平衡を保つてゐる場合といふものを想像するのは、むしろ不可能の事と云はなければなるまい。

かくの如く見て來れば、苟くも新陳代謝の營まれてゐる處には、苟くも成長のある處には、苟くも生命のある處には、必ず何等かの程度に於て男性的なものと、女性的なものとの對立があると推定するのは、寧ろ極めて合理的な事ではあるまいか。

苟くも生命のある處にはと言つたが、苟くも存在してゐるところのものは、皆何等かの程度に生きてゐないであらうか。まことに『萬物は流轉してゐる』動かないでゐるところの何物もなく、變化しないでゐるところの何物もない。そして動いて居り、變化してゐるのは、單にそれだけでも既に、生きてゐることへの第一歩ではないか。

所謂無生物から生物への、より低き生物からより高き生物への推移は、生命の深き眠から淺き眠への、淺き眠から覺醒への推移ではないか。

所謂生物の最も原始的なものにまで遡つて、男性女性の對立を推定し得られるとしたら、更に所謂無生物のすべてにまで遡つて、その對立を推定することがどうして不可能であらうぞ。どうして理由なきものであらうぞ。

今日の科學に於ける、電氣磁氣の陰陽兩極や、電子群の兩極性や、陰電性元素と陽電性元素の對立なぞは、單なる比喩としてでない男性女性の對立が、所謂無生物界にもやがて見出され

るかも知れないことを、既に十分に暗示してゐるではないか。

六

男性女性の對立は、どこまで行つても私の所謂、征服者と被征服者との、所有者と被所有者との關係である。異化作用的と同化作用的との、顯勢的と潛勢的との、發動的と受動的との關係である。

古事記神話に、男神イザナギと女神イザナミとが『美斗能麻具波比』をされる時、女神からさきに『阿那邇夜志愛袁登古袁』と呼びかけられたのを、性的秩序を破つたものとして、そのやり直しには先づ男神の方から『阿那邇夜志愛袁登賣袁』と呼びかけられてゐる。

古事記がはじめの七柱の神を『獨神』にすると共に、御身を隱したまへる神にして、兩性對立の神から現實具體の世界が生み成されて來るやうに解釋して居るのは、並びに男性の發動的であり、女性の受動的であるべきことを喝破して居るのは、非常に有意義な事であると思ふ。

七

男性女性の對立が、どこまで行つても私の所謂征服者と被征服者との、所有者と被所有者との關係である云々は、單に所謂性慾を有するだけの人類から、動物へ、より低級な生物へと、下の方へ降つて行つて、限りなく通用するといふばかりでない。

それは單に所謂性慾を有するだけの人類からどんなに高級などんなに精錬された思想や感情の持主にまでのぼつて行つても依然として通用するところの事柄である。

換言すれば、總ての戀愛なるものが皆、男女兩性間の征服被征服の關係、所有被所有の關係にほかならないのである。

なぜと云つて、戀愛は性慾の成長し、進化したものであり、性慾はより粗悪な、より原始的な戀愛に過ぎないからである。

生殖と性慾とを一の物であるとは云へないであらう。けれども、生殖から、生殖の爲めに性慾の生れて來たことを、或は成長して來たことを誰が否定し得るか。

所謂性慾の發動を、所謂戀愛の全部であるとするのは穩かでないかも知れぬ。けれども、性慾から、性慾の爲めに、更にさかのぼれば生殖から、生殖の爲めに、戀愛の生れて來たことを或は目覺めて來たことを誰が否定し得るか。

寧ろ戀愛と名づくべきほどの精緻なるものと、寧ろ性慾名づくべきほどの粗大なるものと、この二類の物が同一の人間に於て見出されることは稀らしくない。否、同一の瞬間に、同一の人間に於てさへも見出されないことはない。

そして此性慾的なものが、往々にして此戀愛的なものと、互に斥け合ふことのあるのも事實である。

けれども斯うした一面の事實からして、性慾と戀愛との本質的差別を言はうとするのは、あまりにも近視眼的理想主義者の事である。

粗大なる戀愛としての性慾と、精緻なる性慾としての戀愛とは、必ずしも常に互に斥け合ふものでなく、時としては前者が後者をより生き生きとした、より力強いものにし、後者が前者をより高く、より美しいものにする。

所謂性慾と所謂戀愛との間に、少くとも精緻醇化の程度を異にしてゐるものがあると見る場合、戀愛に於ける征服被征服の所有被所有の關係が、性慾に於けるそれほどに精緻を缺いた、醇化を缺いだものでないのは言を須たない。

加之、私共の知り得たる限り於にても、戀愛の最高にして最善なるものは、日常の言葉遣ひに於ける征服被征服や、所有被所有などで言ひ表はし得べく、寧ろ文化的に、人間的に、『神聖』にすぎるところの交渉をさへ本質としてゐる。

乃ち、總ての事物を徹底的に考察し論究することの習慣と能力とを有しない、いたづらにセンティメンタルな常識的論客が所有被所有と云ひ、征服被征服と云ふやうな性慾上方式で以て戀愛を解釋し得られることに、遂に想ひ到らない所以である事は、さうした他人の解釋にたやすく同じたくないと思ふ所以である。

八

性慾的であつて、しかも性慾といふにも足りないほどの無限に原始的なものから、戀愛的であつて、しかも戀愛といふ言葉にも表白しきれないほどの、無限に精練され醇化されたものに至るまでを、その一切を包括して性愛または性的愛と命名することにする。

性的愛には、未だ征服し所有してゐないところの異性を、進んで取らうとするところの一面と、既に征服し所有してゐるところの異性を、保守して失ふまいとするところの他の一面とがある

斯うした二方面の存在が、直線的に征服し所有する男性の側

にも、婉曲に征服し所有する女性の側にも、いづれにも通じて言はるべきは勿論の事である。

そして特に保守的方面の性的愛は、性的愛その物の產み出した物の上へ對象を擴げて行つた。これが子に對する父母の愛の起源である。

父母の其子等に對する愛は、旣に自分自身の一部であるところの物を失ふまいとする保守愛である。斯うした保守愛が、其子等の產み出した物、卽ち孫等の方へも延長され、行き、其子等相互の間にも同樣の保守愛を目覺めさせて行き、斯くして次第に骨肉近親の愛を發達させて行く徑路は、むしろ想見するに難くないやうである。

骨肉近親の愛が、右の如き徑路を取つて發達して來たものである限り、それが大體に於てつねに、進取的であるよりも保守的であるのに何の不可思議もないであらう。

又、一般に、人愛なるものも、それが骨肉近親愛の延長擴大を意味してゐる限り、矢張り進取的であるよりも保守的であることの傾向を脫れないであらう。

善き意味にも惡しき意味にも、進取愛は若き愛であり、保守愛は老いたる愛である。

果然、若きものはより多く進取愛を悅び、老いたるものはより多く保守愛の味方である。

一般愛に比べれば槪してより進取的な性的愛に於ても、老衰的固定を來してゐる社會は、その持續的不變的關係に最高の德を認めようとする。そし、さうした社會が性的愛の最高なるものを、しかも其社會から見た最高なるものさへ、本來保守的な一般愛の中軸をなすところのもの、卽ち親子の愛より、つねに低位にあるものとして見るのは、けだし止むを得ない事柄であらう。

本來保守的であるところの一般愛に、起源をなし、中軸をなしてゐる親子の愛から、老衰的固定を來してゐる社會の僞善的空氣は、『親孝行』の道德を案出した。そして其同親子の愛から、より少く僞善的になつた現代人の常識は、より合理的な『子供孝行』の道德を築き上げようとしてゐる。

しかし乍ら、老熟と共に若々しさをも缺乏いてゐない、もつともつと健全なる社會にあつては、恐らく『子供孝行』を以て最高の道德とするに躊躇するであらう。

最高の道德は、少くとも保守愛にも進取愛にも偏傾したものであつてはならぬ。否、すべての道德と云はるゝほどの道德は

今日までの最も善き戀愛に於て、既に屢々暗示されてゐる如く、つねに進取愛　保守愛との兩面に、其基礎を置いてゐなければならないのである。

九

性慾から戀愛への向上を承認するに躊躇する人達が、戀愛の中に性慾の本質の立派に存在してゐることを否定したがる如く性的愛から一般愛への擴大を考へて見たことのない人達は、一般愛の中に性的愛の本質の嚴然として横つてゐると云ふ私の言葉を、どれだけが驚くべき事のやうに思つたり、良き趣味に反する事のやうに感じたりするかも分らない。

しかし乍ら一般愛も、むしろ進取的にであるより保守的にではあるけれど、やはり征服被征服の、所有被所有の方式にあてはまるところの愛である。換言すれば、何等か男性的な傾向をもつたものと、何等か女性的な傾向をもつたものとの、二類に分つことの出來るところの征服慾であり、所有慾である。更に精しくは、征服し所有することに依つて、直接に征服し所有しようとするところの男性的意慾の發現であるか、或は征服され所有されることに依つて、間接に征服し所有しようとするところの女性的意慾の發現であるか、二のものの中の一でなければならぬ。

試みに、一人の子供に對する、其父の愛と其母の愛とを比較して見よ。

父は其子供を失ふまひとする保守愛からして（否、時としては幾分の進取愛からして）、性的愛に於けるサディズムス的殘虐の手段に訴へることをすら辭しないではないか。

母は其子供を失ふまいとする保守愛からして（否、時としては幾分の進取愛からして）、性的愛に於けるマゾヒズムス的被殘虐の地位にすら、甘んじて立たうとするではないか。

更に『馬鹿な子供ほど可愛いい』といふ世俗の言葉を吟味して見るがよい。

愚かな子供をもつた父は、その子供を自分自身の一部分として繋ぎ留めて置く爲めに、或はより完全に自分自身の一部分として感じ得る爲めに、賢い子供をもつた父達より、どんなに多くの所有的征服的努力をしなければならないか。そして其事がどんなに彼を、より父らしき愛にまで推し進めねばならないか。

愚かな子供をもつた母は、その子供の愚かさから苦められ惱まされることに依つて、賢い子供をもつた母達より、どんなに

多くその子供を自分自身の一部分として感じ得たことぞ。そして其事がどんなに子供を彼女にまで、よい、より子供らしいもの、よい、り可愛いものにまでなし得たことぞ。

ナザレのイエスは、『天にましますわれ等の父よ』と呼びかけた。それにも係はらず、彼の示した神は人類の罪をさばき懲らすと共に自ら十字架の苦みを甘んじて受けてゐる、男性的な父の愛の限りを盡すと共に、女性的な母の愛の限りをも盡してゐる。

さればこそ、新約の神が再び舊約の神に逆戻りをして、單に男性愛をのみ有するものとして感じられるやうになつた時、基督教は女性愛の最高者聖母マリアに對する今一の信仰を生んだのである。

後代の基督教が如何なる愛を、また如何なる愛の反對物を說いたにもせよ、少くともイエスは、人類の今迄の歷史に現れた最も完全に近い道德家として、最も完全に近い男性愛と、また最も完全に近い女性愛とを我々にまで敎へた。

近代的世界の道德的頽敗に憤激して、女性愛の偏重に基礎を置いた道德を、熱情的に、殆んど病的に誇張しながら・呼號したところの人はレオ・トルストイであり、男性愛の偏重に基礎を置いた道德を、同じく熱情的に、殆んど病的に誇張しながら絕叫したところの人はフリイドリッヒ・ニイチエである。

トルストイの無抵抗主義をその儘に實行して、それよりほかに如何なる道德のあり得ることをも思はない人間があるならば、それは一般愛に於けるマゾヒズムス定型を、非常によく代表してゐるものと云ふべきであらう。

ニイチエの『權力への意志』に於ける『權力』を通例の意義通りに於て受取り、さうした權力の追求に文字通り直往邁進するところの男性者があるならば、それは一般愛に於けるサディズムス定型を、遺憾なく代表してゐるものと云ふべきであらう。

トルストイ自身の個人的實際生活は、ニイチエのそれにも遜色のないほどに、案外『權力への意志』的であつたかも知れない。

ニイチエ自身の個人的實際生活は、トルストイのそれにも劣らないほどに、案外無抵抗主義的なものであつたかも知れない。

ともあれ、近代の道德的世界に於ける、殆んど堪へがたきなまぬるさと、どうかし的中庸と、投げやり的穩健に激發して

彼等がそれぞれに高唱力説したところのものを見れば一方には明らかに女性愛の真義を病的に偏重誇大して居り、他の一方ははたしかに、男性愛の真義を病的に偏重誇大して居るのである。

斯く言へばとて、私共は勿論これらの偉人の人格と事業とを聊かも小さなものに見てしまはうとするのでない。

彼等の教説は現代人の道徳的生命に對し、大に滋養に富んだ食物でないまでも、奏効の甚だ確實なる解熱劑であつた。常時に用ひて神氣を涼爽ならしめる飲料でないまでも、危機一髪の際九死に一生を回復せしむるところの注射劑であつた。

加ふるに、彼等に於て最も我々の學ぶべきは、その思索から出て來た結論でなくして、寧ろその思索に對する彼等自身の態度である。すべての繋縛を截斷し、すべての壓抑を彈却し、すべての權威を蹂躙したらうとするところの彼等の勇猛心である。すべてを赤裸々にして蔽ふところなく欺くところなき彼等の誠實心である。

殘虐被殘虐の野蠻さに、思はず面を蔽ふほどのサディズムス的並びにマゾヒズムス的變態性慾者等からさへも、折々我々は非常に貴重なる道徳的暗示を與へられる。少くとも性的愛及び一般愛のすべてに通じて、改めて嚴重に考へて見なければならない問題を、目の前へ突き付けられたやうに感ずるのである。

乃ち、かりに私共がニイチエの男性道徳にサディズムス的野蠻性が作つて居り、トルストイの女性道徳にマゾヒズムス的原始性ふがく潜れて居ると言つたところで、その爲に私共は決して、此二大偉人に對する私共の絶大なる欽仰敬慕の、百分の一をも少くしてはゐないのである。

十

性的愛に於ける如く、一般愛に於ても、男性的な愛と女性的な愛と、二の定型のあるといふことは、以上反復述べ來つた通りであるが、さうした二の定型は勿論、實際の男子と婦人とによつて、それぞれに嚴正に分擔代表されてゐるのでない。

性的愛に於て、男子がマゾヒズムス的傾向を有ち、女子がサディズムス的傾向を有つことの屢々あり得る如く、一般愛に於ても、男子が『無抵抗主義』的女性愛的傾向を有ち、女子が『權力への意志』的男性愛的傾向を有つことは屢々あり得る。

かくの如　顚倒（もしくは頽敗）に、そもそも男子の中にも男性的要素と女性的要素とが混在して居り、婦人の中にも男性的要素と女性的要素とが混在して居り、其混在の割合如何によつて生じ得べき現象であると――例へばオットオ・ワイニンゲル風

に解釋することも出來さうである。

ただし一般的に云へば、婦人は特に女性愛的傾向を有つて居り、男子は特に男性愛的傾向を有つて居る。そして男性愛的傾向を有つた婦人は、その程度に於て性格全部を男性化されて居り、女性愛的傾向を有つた男子は、その程度に於て性格全部を女性化されて居ることは爭へない。

戀愛の當事者二人の間に於ても、婦人は彼女自身の取つてゐるやうな態度だけが、本當に愛する者の態度であると思つてゐる。男子は男子で、彼自身の愛してゐるやうに愛するよりほかより善き方法のあり得ないことを思つてゐる。

一般愛に於ても同じくさうである。或はより多くさうである。女性愛的傾向をもつた人々から見れば、男性愛は寧ろ呪ふべき冷酷無情に近いものをもつてゐる。男性愛的傾向をもつた人から見れば、女性愛は寧ろ唾きすべき柔弱卑屈を思はせるものがある。

しかし乍ら、道德的反省の鋭い人々は、自己本來の傾向に阿附し耽溺することの危險を思つて、むしろそれと正反對なる傾向を追求渇望して行くことに努力する。

少くとも道德的反省の超人的過敏さをもつてゐたフリイドリッヒ・ニイチェは、本來の性格に於て彼の所謂基督教的なる、女性愛的傾向を持てあましてゐたらしく見えるではないか。的同じく自己鞭撻を以て一生を終始したところのレオ・トルストイは、本來の性格に於て所謂異教的な、謂ふを得べくんばフランシス的であるよりもナポレオン的な、男性愛的傾向を持てあましてゐたらしく見えるではないか。

ここには私共は、この二大偉人よりして學ぶべき極めて重要なるものを有つてゐる。

十一

性的愛の場合に於ても、並びに一般愛の場合に於ても、征服する者と征服せられる者とは、所有する者と所有せられるものとは、何等かの形式及び程度に補足的結合をなし、新しき個體の如き何物かを創造する。

かくして創造せられたる個體と個體とが、大體に於てより精練されたる、より醇化されたる方法に於て、征服し合ひ所有し合ふべきは、より內面的な補足的結合をなすべきは、より高級なる新個體を創造すべきは、たやすく想見され得るところの事柄であらう。

乃ち、愛はより善き個體を生み出し、より善き個體によりより善き愛を導き、より善き愛は再びより善き個體を生み出し、かくの如くして愛その物と愛の創造とは、限りなく向上し進化し行くものと考へられなければならぬ。

ところで性的愛と一般愛とを通じて、苟くも愛なるものの本質が、征服の、所有の方式を以て闡明せられるならば、そして其征服や所有が、自己の生存を保持し、もしくは延長充實する爲めの仕事であるならば、愛は徹頭徹尾自愛であると見、所謂自愛に對する所謂他愛は、より低級な自愛に對するより高級な自愛であると見て、何等の不理もなさうに思はれる。

加之、利己の衝動も亦自愛と同様に、低級な物から高級なものへの限りなき向上進化を容るすものならば、より粗惡なる利己と云ひ、より精練せられたる利己と云つて、利己と云ひ利他と云ふことの代りになし、更に利己と自愛とをも同じ物として取扱つた上、一切の愛の進化過程は、畢竟利己の進化過程にほかならないと言ひ切つて、格別の不都合もなささうである。

近頃テオドオル・リップスの『倫理學上の根本問題』といふ書物を、殆んど飛び飛びのやうにではあるが讀んで見た。そんな讀みかたをし乍らも私の見たところでは、彼が社會的使命と努力との倫理的意義を說いてゐる邊は、今日の普通の『教授』學者等の中にかなり異彩を放つてゐることを思はせないでもなかつたが、彼の倫理說に理論上の根柢をなしてゐる、利己衝動と利他衝動との本質的對立は、甚だしく非科學的であると共に、より甚だしく反體験的である。

彼曰く『利他的性癖は――而して其存在は何人も之を疑はず――如何にしても利己より導き出すこと能はず。利他的性癖は假裝せる利己にあらず。即ち如何にしてか利己より生れ出でたるものに非ず。利己的性癖は環境、傳說、習慣及び何等か他人の作用によりて、吾人の上に植え付けられたものに非ず。否々利他的性向は其自身の根蔕を有す』と。

成程、彼の所謂利他的性癖の存在してゐることは、何人も疑はないところである。しかし乍ら、常識的な言葉遣ひが十分に事實の眞相を表白し得ないものであることを知悉してゐる我々は、一の衝動または行爲を利他的であるといふ場合、ただ單に比較的に利他的であるといふのであつて、絕對的に利他であるといふ意味を含めることをしない。それは丁度、他の一の衝動または行爲を利己的であるいふ場合、ただ單に比較的に利己的であるといふのであつて、絕對的に利己的であるといふ意味を

含めることをしないのと同様である。

されば、リップスの考へてゐるやうな意味で、利他的性癖の存在を疑はないのは、常識的にのみ淺薄にのみ物を考へる人々に限られてゐる。

所謂利他的性癖を假裝せる利己として說明するのは、全然思索能力を缺いでゐる、最も粗惡な功利主義者と唯物史觀倫理派との事である。『假裝せる利己』の說を否定し得るとしても、『進化せる利己』の說を否定し得なければ、利己と利他との本質的差別を肯定することは出來ない。

リップスといへども、恐らくは利他の衝動が文明人の間に於てのみ、或は人類以上のものに於てのみ存在するものとは見なかつたであらう。しからば彼の所謂利他的性向の根幹は、そもそも生物の如何なる階級にまで遡ることを許すものであるか。

少くとも鳥獸の類が、彼等自らを愛するのみならずして、彼等の生み育てたところのものをも愛するといふことの事實は、リップスからも承認され得たではなからうか。

さらば、鳥獸が他の鳥獸の生み育ててゐるものの利益を犧牲にしてまでも、彼等自らの生み育ててゐるものを愛しようとするところの行爲は、その現實具體の行爲は、リップスの言葉遣ひに於て何であるか。利己であるか。利他であるか。

これをしも利己であつて利他でないといふならば、それは畢竟利他の存在を、少くとも人類以下のものの間に承認せざらむとするのである。

これをしも既に利他であるとしたならば、文明の社會に於ける人々が、他人の兒女の利益を蹂躪してまでも、彼等自らの兒女を幸福にしようとするところの行爲は、その現實具體の行爲は、リップスの言葉遣ひに於て何であるか。利己であるか。利他であるか。

彼自ら文明の社會に於ける一人として、リップスは恐らくは此の如き行爲を利他と云ふに躊躇するであらう。そして此の如き行爲が利他でなくして利己であるとしたならば、同一の行爲が鳥獸の場合に於て利他であり、文明人の場合に於て利己であるのは何故であるか。

これに對して、利他の進化、もしくは利他衝動の進化といふことを容認するのほか、そもそも解釋の方法があり得るであらうか。即ち、利他もしくは利他衝動の進化し來つた爲めに、依然として從然の情態に止まつてゐるところのものが、利己もしくは利己的衝動と見えるに至つたと解釋しない限り、此の如き概念顚倒の理由を明らかにすることが出來ないではないか。

そして、今日利他の衝動と言はれてゐるものが、更に非常な

る進化をとげた暁、尙ほ今日の情態に止まつてゐるところのものを、利己的と見えしむるまでに至つたとせよ（それ、固よりあまりにもあり得べき事である）。さらば、あらゆる利他を利己にまで突き落して置いて、限りなく向上し行くところの進化の過程は、より低き利他からより高き利他への成長であると共に、より低き利己からより高き利己への成長でなくして何であらう。又この過程が嚴密に同一線上のものとして考へ得られる限り、利己と云ひ利他と云ふものの、畢竟進化の程度を比較的に區別するに止まり、その間に何等の本質上の區別を有しないといふことは、極めて明白に知り得べきではないか。

常識以上のものを有し得ない人々が、利己と利他とを本質的に異つた物のやうに考へてゐようとも、私共は勿論深く咎め立てしようとは思はない。しかし乍ら此の如き考へ方を私共自身に受け容れるのは、前述の如く不可能であるのみならず、更に聊かの實際的利便をも招致しないのである。

なぜと云つて、我々が色々の衝動や行爲を取捨する場合、我々はただその中の最も精錬された、最も醇化された、ニイチェ等の言葉遣ひにおける最も貴族的なものを、最初に選び取らうとするだけで、換言すれば、最も粗惡な、最も醇化されない、同じくニイチェ等の言葉遣ひに於ける最も賤民的なものを、最後に選び取らうとするだけで、それらの衝動や行爲の中に、絶對に是認すべきものは何であるか、絶對に排斥すべきものは何であるかといふやうなことを、殆んと問題にしようとしないからである。

序ながらリップスが、あとで物的價値感情と人格價値感情との對立を持ち出すことの必要に迫られたのは、はじめに利己衝動と利他衝動とを本質的に差別するといふやうな無理を冒してゐたからである。そして彼のさうした無理が、所謂新カント派的センティメンタリズムからの『精神主義』からの『人格主義』からの必然的な流出であることは、少からず私共の興味を惹く。

すべての愛を通じて、その本質が常に相互的所有であり相互的征服であることは、私の反復述べ來つた通りである。

ところで、總ての相互的所有もしくは征服が、何等かの形式と程度とに於ける攻撃と應戰とを前提に置いてゐる以上、爭鬪は愛の必要なる手續でなければならぬ。或は愛その物の一面の要でなければならぬ。

乃ち、爭鬪のないところに愛はあり得ない。少くとも爭鬪を經てでなければ、愛の和合は成立し得ない。

そして此場合私共の注意すべきは、善き爭鬪のある處にのみ善き愛のあり得るといふこと、善く且つ美しき爭鬪を經てでなければ、善く且つ美しき愛の和合の成立し得ないといふ事である。

今日、少くとも個人と個人との間には、かなりに立派な、人間的な、文化的な（近頃の流行語を藉りて云へば）愛の見出されることもめづらしくない。そしてさうした愛は、かなり立派な、人間的な、文化的な爭鬪その物であり、もしくは其所産である。

けれども、個人と團體との間には、同じ程度に精練され醇化されたる愛を並びに爭鬪を見出すことが困難である。

一言にして云へば、今日最高度の文明をもつた人類の社會に於ても、個人と團體とが、腕力を以て、武力を以てさへも爭鬪するのを、甚だしく耻づべき事のやうに考へてゐないではないか。

團體と團體との間に於ける爭鬪は、更に野蠻的なものであり更に原始的なものであること改めて云ふまでもない。

しかし乍ら、此の如き低級なる爭鬪も亦、それに相應したる愛の前提であることを、否、それに相應したる愛その物であることを、私共は十分に觀念しなければならぬ。加之（みならず）、かくの如き低級なる爭鬪と愛とからして、少し宛でもより高級なる爭鬪と愛との方へ向上して行かせるやう、努力し且つ祈願すべきである。

人種戰爭、宗教戰爭が既に十分に過去の物となつてゐる如く國際間の戰爭も亦今や漸く文明社會の關心を繫ぎかたくなつて來てゐるといふこと、其動機から見ても、其手段から見ても、今日の所謂階級戰の方がまだしも、國際戰よりは合理的なものであり、それだけより多く倫理價値をもつてゐるといふことなどについては、私は曾つて『國際戰の將來』、『階級鬪爭の倫理的批判』（『徹底人道主義』の中に收められてゐる）等の諸論文に細說詳論して置いた。

要するに私は、愛と鬪爭との限りなき進化を信じてゐる。

所謂平和が、單に所謂爭鬪がないと云ふだけでなくて、むしろ何物かのあることであるとしたならば、その何物かは所詮愛でなければならぬ。愛の和合でなければならぬ。

乃ち、爭鬪のないところに平和はあり得ない。少くとも爭鬪を經た後にでなければ、如何なる平和もあり得ない。

そして爭鬪の進化が平和の進化である。

すべての物が停滞してゐることを許されない。それは不斷の精進をつゞけて行かなければならぬ。

すべての愛と平和とを、人間の所有慾から、征服慾から、爭鬪から解釋せむとした以上の言說が、それぞれの人々のもつてゐる、或は行つてゐるところの現實を、その儘に承認し肯定し、それらのものに對する總ての理想主義的要求を、輕視し無視してゐると見るのは、改めて言ふまでもなく、私の思想生活に對する無理解であるより以上に悪意である。

——一九二二年七月一日——

平和主義の思想家と人道主義の政治家

内ヶ崎作三郎

(上)東西の二大平和主義者
——墨子とグロテウス——

一　平和の炬火の把持者

古へより今に至る迄、聖者、思想家と稱せらるゝ人々のうち地上に絶對平和を實現したき理想を懷いたもの少くない。否かゝる大理想と大信念とを把持した人々でなければ聖者の名を辱かしむるものである。佛陀も基督も共に慈悲と愛とを高調した。佛陀の理想し體驗した涅槃は情慾を斷ち、煩悩を鎭めたる、靜寂にして神聖なる平和の一境であつた。基督の惝怳し、宣傳した神の國(むしろ「神の支配」と譯すを正當とすべきであらう)は愛の國、精神の國、相愛協同の新天地であつた。彼は「平和の君」と渴仰せらるゝは當然の事である。

さばれ、平和と愛と慈悲との理想を現實の社會に體現するは、容易なる業でない。殊にこの理想を人種間、もしくは國家間に實現せんとするは並大抵の事でない。その原則の樹立は昭々として古代人類の暗黒の裡に輝いたが、之を複雑なる國際的人種的問題に適用するには一種の創思と勇氣と工夫とを要した。この事のために働いた思想家や、政治家や、帝王の貢獻は誠に大なるものである。つまり、平和の炬火の把持者の永い傳統の努力と貢獻とに負ふ所が多い。私は平和主義のために思索し、努力し、劃策し、實行した思想家を東西の史的人物中に探りて、私自身に對する刺戟となし、あはせて、この大理想の實現を企とする同志の參考に供したい。

二　墨子の兼愛說

私は古代東洋の平和主義者として第一に墨子を擧げたい。墨子は多分周の敬王の二十年乃至三十年代に生れ、周威烈王の元年乃至十年代に死んだと認められる。即ち紀元前五〇〇年乃至四九〇年より、同四二五年乃至四一六年の間である。墨子が生れた時は孔子は五六十歳であつたらふ。これは北京大學教授胡適君の說に從ふ。

周室の衰微ほと／＼その極に達し、戰國の七雄、各々土地を開拓し、兵馬を養成して、虎視眈々として、互に隙に乘ぜんとした。天下蒼生は漸く戰亂に倦いて、平和を渴望した。墨子の平和論がり旱の雲霓を望むやうに歡迎されたのは怪むを須ゐない。

墨子は魯に生れて、孔門の正盛時代を知つたから、儒學の感化を受けたに違ひない。しかし孔子の死後、門弟等先師の根本思想を繼承することをえせずして、末節に拘泥し、喪葬に沒頭したので、彼はむしろ儒門に反抗する氣になつたかもしれぬ。彼が勤儉、節葬、反音樂を力說したは時代の弊風を矯めんとする意氣が加つたのであらう。

墨子の思想の根本は天志である。天の意志である。その所謂天とは主宰の天で、基督教その他の一神教の說く神と略々同一なるものである。所謂天志は神の御旨とか御心とか稱すべきものである。

墨子の信ずる所に從へば、天下の亂るゝは世人が鬼神の有無に疑惑を生じ、その能く賢を賞して暴を罰することを明かにせざるがためである。若し天下の人が鬼神の嚴として存在するを知らば亂るゝ道理はない。

人は天志を奉體して兼愛を實行せねばならぬ。兼愛とは汎博愛といふが如く、己に兼ねて他を愛することをいふ。墨子自ら

をしてこの理を明にせしめよ。

『嘗に亂、何に自りて起るかを察するに、相愛せざるに起る。臣子の君父に孝ならざるは、所謂亂なり。子自ら愛して父を愛せず、故に父を虧きて自利す。弟自ら愛して兄を愛せず、故に兄を虧きて自ら利す。臣自ら愛して君を愛せず、故に君を虧きて自利す。此れ所謂亂なり。父の子を愛せず、兄の弟を慈せず、君の臣を慈せざると雖も、此れ亦天下の所謂亂なり。父自ら愛して、子を愛せず、故に子を虧きて自利す。兄自ら愛して弟を愛せず、故に弟を虧きて自利す。君自ら愛して臣を愛せず、故に臣を虧きて自利す。此れ何ぞや皆相愛せざるより起る。天下の盜賊を爲すものに至ると雖も、亦然り。盜は其室(自分の家)を愛して、其異室(他人の家)を愛せず。故に異室に竊みて、以て其室を利す。賊は其身を愛して、人を愛せず。故に人を賊して、以て其身を利す。此れ何ぞや。皆相愛せざるより起る。丈夫の家を相亂し、諸侯の國を相攻むるものに至ると雖も、亦然り。丈夫各々家を愛して、異家を愛せず、故に異家を亂して、以て(其)家を利す。諸侯各々其國を愛して、異國を愛せず、故に異國を攻めて、以て其國を利す。天下の亂物、此に具るのみ。此れ何に自りて起るかを察するに、皆相愛せざるより起る。

若し天下をして兼ねて、人を相愛すること、其身を愛するが若くならしめば、惡ぞ不孝を施さん。猶ほ不慈の者あらんや。子弟と臣とを視ること其身の若くならば、惡ぞ不慈を施さん。不孝あることなし。猶盜賊あらんや。故に人の室を視ること、其室の若くならば、誰か竊まん。人の身を視ること、其身の若くならば、誰か賊せん。故に盜賊あること亡し。猶ほ丈夫の家を相亂し、諸侯の國を相攻むる者あらんや。人の國を視ること、其國の若くならば、誰か攻めん。故に丈夫の家を相亂し、諸侯の國を相攻むる者あること亡し。

若し天下をして兼ねて相愛せしめば、國と國と相攻めず、家と家と相亂さず、盜賊有ることなく、君臣父子皆能く孝慈ならん。此の若くならば、天下治まる。故に聖人の天下を治むるを以て事と爲す者は、惡んぞ惡を禁じ愛を勸めざることを得んや。故に天下を兼ねて相愛すれば治まり、相惡めば亂る。故に子墨子曰く、人を愛することを勸めざるべからざるものは、此れが(爲め)なりと。』(兼愛篇)

墨子の兼愛主義は博愛主義、汎愛主義、差別階級を撤廢したる平等觀である。儒教の階級的仁愛との間に多大の逕庭がある。要は墨子は徹底的に儒教の仁愛を擴張し普及せしめたのである。一時兼愛說が天下を風靡したも故がある。當時の戰國社會

に對する治療法としてこの無差別的兼愛論が大なる意義があつたのであらふ。

然れども、墨子は空想家たるを以て甘ぜんず實際的に社會を救濟せんとする雄大なる精神に燃えた。墨子は理想主義的功利論者であつた。

『天の行は廣くして私無し。其施厚くして德とせず。其明久しくして衰へず、故に聖王は之を法とす。既に天を以て法と爲せば、動作爲すあるときは、必ず天に度る。天の欲する所は之を爲し、天の欲せざる所は則ち止む。然而れども、天は何を欲し、何をか惡む者ぞや。天は必ず人の相愛し、相利することを欲して、人の相惡み、相賊することを欲せざるを知るや。其兼ねて之を愛し、兼ねて之を利するを以てなり。奚を以て天の兼ねて之を愛し、兼ねて之を利することを知るや。其兼ねて之を有し、兼ねて之を養ふを以てなり。』(法儀篇)

されば墨子の理想の君主は堯舜の如く無爲にして化したる聖王にあらずして、實際的活動に始終した禹、湯、文、武であつた。

『昔の聖王、禹、湯、文、武は天下の百姓を兼愛し、率ゐて以て、天を尊び、鬼に事へ、其の人を利すること多し。故に天之に福し、立てて天子たらしむ。天下の諸侯皆之に賓事す。暴王桀、紂、幽、厲は天下の百姓を兼惡し、率ゐて以て、天を詬り、鬼を侮り、其人を賊すること多し。故に天之に禍し、遂に其國家を失ひ、身死して天下に僇(刑戮の人)とならしめ、後世子孫之を毀り、今に至るまで息まず。故に不善を爲して、以て禍を得たるものは桀、紂、幽、厲是れなり。人を愛し、人を利して以て福を得たる者は、禹、湯、文、武、是なり。人を愛し、人を利して、以て福を得る者有り、人を惡み、人を賊して、以て禍を得る者有り。』(法儀篇)

兼愛を實行すればその功德は大なるものがある。

『然らば則ち、兼ねて相愛し、交〻相利するの法將に奈何とするか。子墨子言ふ。人の國を視ること、其國を視るが若く、人の家を視ること、其家を視るが若く、人の身を視ること、其身を見るが若くせよ。是故に諸侯相愛すれば野戰せず。家主相愛すれば相簒はず。人と人と相愛すれば相賊はず。君臣相愛すれば強は弱を執へず、衆は寡を劫さず。富は貧を侮らず。貴は賤に敖らず、詐は愚を欺かず。凡そ天下の禍簒怨恨起る毋らしむ可きもの　相愛するを以て生ずるなり。是を以て仁者は之を譽む。』(兼愛中篇)

さて兼愛相利の理想及び功果はしかく威大なるものがありと

して、その實現の方法如何。墨子は極めて容易なることの如く考ふる。彼は晉の文公は士の惡衣を好んだので、其の臣惡衣を纏ひ、楚の靈王は士の細腰を好んだので、その臣皆節食を實行した。君の說ぶものは臣之を能くするといふ議論である。

『是故に子墨子言つて曰く、乃ち夫の少食惡衣、身を殺して名を爲すが若きは、此れ天下百姓の皆難んずる所なるも、若し苟も君之を說ぶときは、則ち衆能く之を爲す、況んや兼ねて相愛し、交々相利するは、此と異なるをや。夫れ人を愛する者は、人亦從うて之を愛し、人を利する者は、人亦從うて之を利し、人を惡む者は、人も亦從うて之を惡み、人を害する者は、人、亦從うて之を害す。此れ何の難きことか之れ有らん。特に上以て政を爲さずして、士以て行を爲さざるが故なり。』（兼愛中篇）

墨子は兼愛相利の實行者として禹、文、武、三王の事績を列擧して、明君一度範を示さば、この理想の實現は日常茶飯事といふやうに論斷する。しかし是等の三王は王者としての天才である。凡庸の君主に之を嘱望することが出來ぬ。基督敎の愛は神より進んで人を求め、人は之に感激して互に愛するといふ順序である。基督敎の愛は墨子の愛に一段の熱が加はつてゐる。されど墨子の言ふ所、もし之を實現し得べくんば誠之に過ぎない。たゞ兼愛相利の容易に實現し得ざるは人間性中に傳統の久しい低い動物性が附着するためである。墨子が之に言及せざるはやゝ樂觀に傾き過ぎてゐるやうに思はれる。しかし墨子の斷案には我等は何等の異議はない。誠に堂々たるものである。

『是故に子墨子言つて曰く、今天下の君子、忠實に天下の富を欲して、其貧を惡み、天下の治を欲して、其亂を惡まば、當に兼て相愛し、交々相利すべし。此れ聖王の法、天下の治道なり。務めて爲さざるべからず』（兼愛中篇）

三　墨子の非戰論

前述の如く墨子は人類の福祉を念として、その安寧幸福を保持するを力說した。從つて彼は非戰論を唱道した。彼の意に日く、人の國を攻むるは大盜の類のみ。小盜罰せられて、大盜の免かれて恥なきは何ぞ。これ攻伐を非とする所以である。墨子自らをして雄辯に彼自らの議論を吐かしめよ。

『今一人の人の園圃に入りて、其桃李を竊むことあらば、衆聞きて之を非とし、上、政を爲す者得て之を罰せん。此れ何ぞや。人を虧きて自ら利するを以てなり。人の犬豕鷄豚を攘む者に至りては、其の不義、又人の園圃に入りて桃李を竊む

より甚し。是れ何の故ぞや。人を虧く愈々多きを以て、其不仁茲々甚しく。罪益々厚し。人の欄廐に入り、人の馬牛を取る者に至りては、其の不仁義たる、又人の犬豕雞豚を攘むより甚し。此れ何の故ぞや。其の人を虧くこと愈々多きを以てなり。苟くも人を虧くこと愈々多ければ、其の不仁茲々甚しく、罪益々厚し。不辜の人を殺し、其の衣裘を扡ひ、戈劍を取る者に至つては、其の不義又人の欄廐に入り、人の馬牛を取るより甚し。此れ何の故ぞや。其の人を虧くこと愈々多きを以てなり。苟くも人を虧く愈々多ければ、其の不仁茲々甚しく、罪益々厚し。此れに當つて天下の君子、皆知つて之を非とし、之を不義と謂ふ。

今大いに國を攻むるを爲すに至りては、非とする所を知らず。從つて之を譽め、之を義と謂ふ。此れ義と不義との別を知ると謂ふ可き乎。一人を殺す、之を不義と謂ふ、必ず一死罪あらん。若し此説を以て往かば、十人を殺さば不義を十重す。必ず十死罪あらん。百人を殺さば不義を百重す、必ず百死罪あらん。此れに當りて、天下の君　皆知つて之を非とし、之を不義と謂ふ。

今大に不義を爲して、國を攻むるに至りては、之を非とせず、從つて之を譽め、之を義と謂ふ。情に其不義を知らざればなり。故に其言を書して以て後世に遺す。若し其不義を知らば夫れ奚い説ありて、其不義を書して以て後世に遺さんや。

今此に人あり、少しく黑を見て黑と曰ひ、多く黑を見て白と曰はば、此人を以て白黑の辯を知らずとせん。少しく苦を嘗めて苦と曰ひ、多く苦を嘗めて甘と曰はば、必ず此の人を以て甘苦の辯を知らずと爲さん。今少しく非を爲せば、知つて之を非とし、大に非を爲し、國を攻むれば、非とする所を知らず。從つて之を譽め、之を義と謂ふ。(此れ)義と不義との辯を知ると爲すべき乎。是を以て天下の君子、義と不義とを辯ずることの亂るゝを知るなり。」(非攻上篇)

墨子の非戰論は極めて單純である。彼は近代政治家の如く、人口の增殖と資本の充實に伴ふ複雜なる問題に觸れず、又何故に甲の國は富強となり、乙の國は貧弱となりしかといふ先行の史的事實を考査する必要を感じなかつた。依つて彼の議論は何等の故障なく、坦々たる大道を走るが如く、その當然の歸結に向つて論斷した。しかし戰國七雄が眞に無意味の戰爭を行ひ、無意味の掠奪と殺生とを繰り返へしつゝあつた時に、墨子の所論は大に傾聽するに足るものがある

「子墨子言つ　曰く、今ヘ下の譽め善とする所の者は、其說將た何ぞや。其上は天の利に中り、中は鬼の利に中り、下は

人の利に中るが爲めの故に之を譽むる與。意々其上は天の利に中り、中は鬼の利に中り、下は人の利に中るが爲の故に之を譽むるに非ざる與。下愚の人ならしむと雖も、必ず曰はん。將に其上は天の利に中り、中は鬼の利に中り、下は人の利に中るが爲の故に之を譽むと。今天下の同じく義とする所の者は、聖王の法なり。今天下の諸侯、將に猶ほ多くは皆攻伐幷兼を勉むるときは、是れ義を譽むるの名ありて、其實を察せざるなり。此れ譬へば猶ほ盲者の人と同じく白黑の名を命じて、其物を分つ能はざるがごとし。豈別ありと謂はんや。

是故に古の知者の天下の爲に度るや、必ず其義を順慮して、而して後之が行を爲す。是を以て動けば疑はず、速通其欲する所を得て、天鬼百姓の利に順ふ。知者の道なり。是故に、古の仁人、天下を有つ者は、必ず國を大にするの說に反し、天下の利を一にし、四海の內を總べ、天下の百姓を率ゐて、以て農めて上帝、山川、鬼神に臣事し、人を利すること多し。功故に又大なり。是を以て天之を賞し、鬼之を富まし、人之を譽め、貴きこと天子となり、富天下を有ち、名天地に參し、今に至りて廢せざらしむ。此れ知者の道なり。先王の天下を有す所以の者なり。

今、王公大人、天下の諸侯は然らず。將に必ず其爪牙の士を差論し(撰擇の意)其舟車の卒伍を比列し、此に於て堅甲利兵を爲り、以て往きて無罪の國を攻伐し、其國家の邊境に入り、其禾稼を芟刈し、其樹木を斬り、其城郭を墮ち、以て其溝池を湮ぎ、其牲牷(牛羊豕のこと)を攘殺し、其祖廟を燔潰し、其萬民を勁殺し、其老弱を覆へし、其重器を遷し、卒に進みて、鬪を極め、曰く、命に死するを上と爲し、多殺之に次ぎ、身傷くを下と爲す。又況んや、失列北撓(列を失ひ敗北すること)するをや。罪死して赦すこと無けんと。以て其衆を譚す。夫れ國を兼ね、軍を覆し、萬民を賊虐して、以て聖人の緒(遺業のこと)を亂す。意々將に以て天を利すると爲すか。夫れ天の人を取りて以て、天の邑を攻む。此れ天民を剌殺し、神の位を剝振し、社稷を傾覆し、其犧牲を攘殺するものにして、此れ上は天の利に中らず。意々將に以て鬼を利すると爲すか。夫れ之の人を殺し、鬼神主を滅し、先王を廢滅し、萬民を賊虐し、百姓離散するときは、此れ中は鬼の利に中らず。意々將に人を利すると爲すか。夫れ之の人を殺す時は人を利すると爲すや薄し。又其費を計るに、此れ生の本を害することを爲し、天下百姓の財用を竭すこと勝げて數ふべからず。此れ下は人の利に中らず。」(非攻下篇)

墨子は戰爭を以て、天、鬼、人共に容さゞる大罪惡なりと論斷する所、其主張の熱烈なるを見るべしである。彼は更に筆鋒を轉じて戰爭の事實上不利なる點を擧げて、無名の師を起す者に警告を與へてゐる。

「今夫れ師なる者は不利を相爲す者なり。曰く、將勇ならず、士奮はず、兵利あらず、教習はず、師衆からず、卒和せず、威固からず、之を圍むこと久しからず、之を爭ふこと疾からず、之を係ぐこと（敵を捉へ置くこと）强からず、心を植つること（心を固くして飽くまで戰ふこと）堅からざれば、與國の諸侯疑ふ。與國の諸侯疑へば、敵慮を生じて、意羸るとせん。偏く此物を具へて、事に從ふことを致さば、是れ國家率（統率力のこと）を失ひて、百姓務を易ふる（百姓はたゞ戰國の人となるべしといふこと）なり。今嘗て其說を觀ざるか。攻伐を好むの國、若し中に師を興さしむるときは、君子庶人は、必ず且に數千、徒（徒卒）は倍すること十萬ならん。然る後に以て師を動かすに足り、久しきは數歲、速なるも數月なれば、是れ上は治を聽くに暇あらず、士は其官府を治むるに暇あらず、農夫は稼穡に暇あらず、婦人は紡績織紝に暇あらず。是れ國家率を失ひて百姓務めを易ふるなり。然して、又與び其車馬罷弊、幔幕帷蓋、三軍の用、甲兵の備五分して其一を得れば、猶ほ厚餘となす（まだしも多き分）。然して又與び其の道路に散亡し、道路遼遠にして粮食繼援せず、食飲時ならず、廝役此れを以て、飢寒凍餒疾病して、溝壑の中に轉死する者、勝げて計るべからず。此れ其の人に不利たるや、天下の害厚し。而るに王公大人樂しみて之を行ふは、此れ天下の萬民を賊滅することを樂しむなり。豈悖らずや。」（非攻下篇）

戰爭の費する所多く、得る所少く、國家民生共に苦み艱むの事實一々擧げ來りて、心膽を寒からしむるものがある。

四　平和主義者としての墨子の位置

然れども墨子を以て消極的思索家、怯懦逡巡して、無條件に平和主義を高調したもの、無抵抗主義の宣傳者と思はゞ是れ大なる誤謬である。禹の有苗を征し、湯の桀を伐ち、武王の紂を伐ちたるは攻に非ずして誅であると論じてゐる。天に代りて惡を平げたものであると稱してゐる。

昔者楚　越人と揚子江に舟戰して、楚人常に敗れた。公輸子なるもの、魯より楚に遊び、舟戰の器を作り、鉤拒の備を爲つた。退く者は鉤して退きえざらしめ、進む者は距いで進む能はざら

しめて、兵に節度あらしめた。楚人果して越人に勝つた。公輸子之を誇り、墨子に向つて、『我舟戰鉤距あり、知らず、子の義も亦鉤距あるか』と問いた。墨子の答へが面白い。

『我が義の鉤距は子が舟戰の鉤距に賢れり。我が鉤距は我之を鉤するに愛を以てし、之を拒ぐに恭を以てす。鉤するに愛を以てせざれば、親しまず。拒ぐに恭を以てせざれば速かに狎る。狎れて親まざれば速かに離る。故に交々相愛し、交々相恭す。猶ほ若の相利するがごときなり。今子鉤し、交々相距す。猶ほ若の相害するごときなり。故に我が義の鉤距は子が舟戰の鉤距に賢れりと。』(魯問篇)

軍人に對する墨子の態度はかくの如く峻烈なるものであつた。優柔不斷の所謂道學者でないことは想見するに餘りある。

公輸子また竹林を以て鵲を爲り、之を空に飛ばしたに三日間地に下らなかつた。公輸子得意滿々であつた。墨子之を冷かして曰く、『君の腕前は車轄を作る大工に及ばない。大工は一寸の間に三寸の木を削りて五十石の重さに堪えしむ。その功人を利するが故に巧といふべきだが、君のは人を利せざるから拙といふべきである。』

墨子は中々の皮肉家であつた。

公輸盤なるものあり、楚のために雲梯の器械を造り、將に之を以て宋を攻めんとした。當時墨子は齊にゐたが、十日十夜兼行し、楚の都の郢に至りて、公輸盤ゝ訪ねた。して質問を發した。『君は何のために宋を攻めるのか。楚は國大にして人が足りない。足りない人を戰爭で殺すのは智でない。罪のない宋を攻むるは仁でないではないか。』公輸盤屈して、もう既に楚王に申上げたから仕方がないと逃れた。墨子は更に楚王に見えて宋を攻むることを中止すべきを力說し、王も動いた。しかし王もどつち附かずの態度で、公輸盤が折角雲梯を造つたのだから止める譯にもゆくまいと申された。そこで墨子は公輸盤と會し、一つ擬戰をやらうぢやないかと持ちかけた。先づ墨子は帶を解いて城となし、木片をとりて雲梯と見なした。公輸盤は九度城を攻むる機變を設けたが、墨子は九度之を距いだ。流石の公輸盤の攻道具も力盡きて降參した。これから墨守といふ語が生じたのである。

要するに墨子の平和主義と非戰論は空論家机上の議論でなく、いざとなれば戰爭をもやつてゆける實際家の實際論たる所に大なる興味がある。

一體、支那には平和論が極めて珍しい。平原國として統一せられんとする傾向があつたから、協力作用が十分に働かない。そこで天下を征服して、一帝國を建設したいといふ野心家が多

かつたので、平和論の出現は六ケしかつたらしい。市村、瀧川兩氏合著の支那史に春秋滅國表といふのがある。平王四十九年より敬王三十九年に至る二百四十二年間に、滅ぼしたる側の國々は十三で、滅ぼされた側の國々は六十五もある。この六十五は結局戰國七雄となり、七雄は遂に秦のために統一せられた。近代世界の如く、互に滅ぼすことは不可能となれば、國際聯盟も成立し得るのである。が、古代支那の戰國狀態を目擊して平和主義と非戰論を唱道するは大なる識見と信念とを要したのである。墨子は此意味に於て大に珍とすべきである。

墨子は眞面目に研究せらるべき思想家であるに拘らず、儒門のために壓迫せられて、比較的に冷遇されて今日に至つた。然るに喜ぶべきことは最近支那の少壯學者間にその研究熱が高まり來たつたことである。胡適君の中國哲學史大綱卷上に於て、孔子に約五十ページ、墨子に三十二ページを費してゐることは注目を値する。墨子の思想は基督教と共鳴する所が少くない。而して支那に於て基督教が益々盛ならんとするから、墨子の研究熱は少からざる刺戟を受けてゐるはいふ迄もない。

私は平和主義者としての墨子を有するは古代東洋文化の誇りであり、榮えであると考ふる。

五　歐洲に於ける平和思想の進化

東洋の墨子に對して私は和蘭のユーゴー・グロテウスを擧げたい。しかし彼を論ずるに先じて歐洲に於ける平和思想の歴史に一瞥を與ふる必要がある。

ヘブライ人はその隣人と相戰ふ時は當時既に道德上の金言となつてゐた行爲を無視して、いかにも殘酷に振舞ふことは當然の事と考へられた。異民族に對する暴行は大能の神の許し給ふ所とさへ考へられた。この思想は詩篇や預言者の書の中に各所に散見する。この暗黑時代にも條約に對する尊敬、外國の使節に對する保護、その他親切慈仁なる行爲に對する獎勵が與へらるゝやうに爲つた。

古代希臘人の間には幾分か平和思想が發達した。即ち國と國との間の休戰條約やその他の條約が締結せられ、捕虜を虐殺する代りに奴隸や賠償の制度が設けられ、公共的紀念碑を傷けず、戰使や使節の生命を保護することとなつた。然れども希臘人以外の他の民族に對してはこの法則は毫も適用せられなかつた。

羅馬共和國、あらゆる人種や民族との關係が極めて複雜であつたから、この人道主義的精神は殆んど顧みられなかつた。

羅馬帝國となりて組織と統一とが高調せられたから、人道主

義が高く頭を擡げて來た。先づ第一に市民法が制定せられ、次第に被征服者にもこの恩典が與へられるゝやうになつた。その法律は征服者が被征服者に與へたものであつたが、被征服者間には一種の國際法の觀があつた。諸國民に對する法律は往々にして諸國民間の法律のやうに思はれた。

羅馬帝國の崩壞と共に帝國的勢力の觀念は北歐の中世紀的帝國によつて繼承せられた。もしシャーレマンの後繼者が其志望を行ひ徒ならざりせば、「羅馬の平和」は「日耳曼の平和」に於て代理者を見出して、歐洲の平和を擁護したかも知れぬが、この理想を實現するに所謂「神聖羅馬帝國」は一種の虚器に過ぎなかつた。

羅馬敎會は殿として羅馬七丘に據りて、グレゴリーや、レオや、インノセントの如き名法王を戴いて、一時は「神の休戰」を血に渇いた歐洲の好戰民族に宣したことに流石に宗祖基督に忠實なるものであると讃仰せられた。されど土地に關する慾望は遂々羅馬敎會をして正道を外れしめた。卽ち異端邪宗の徒に對しては羅馬敎會は公明正大なる約束を守る必要なしと神學者は考へた。宗敎改革者ジョン・ハッスの燒殺の如きその一例である。要するに中世紀の終に近くに從ひて、羅馬敎會は國際的仲裁者としての信用を失ふに至つた。

かくして平和を維持するには羅馬敎會とそれと對立する新敎諸敎會の存する間は殆んど不可能となつた。かくして互に他の一方を滅亡するを目的とした。この方法を除いて平和と公安とを維持する方法がないと思惟せられた。異端を獄門に下す宗敎裁判所は已むをえざる結果として制定せられた。新敎徒の熱烈なる者は羅馬敎徒を以て偶像崇拜者と見做し、忠實に約束を守る必要なしと論じた者もあつた。

宗敎改革の時代に於て、舊敎徒も新敎徒も一切人類を愛せよと敎へた新約書をそつちのけにして、睚眦の恨み必ず報いよと說いた舊約書を金科玉條として爭うたのであつた。

この暗黑を照らした光明は無學な商人や船長等によりて制定せられた海上法の出現であつた。又西班牙にはヴィットリオ、ソートー、ヴァスケーズ、日耳曼にはコンラッド・ブルノー、和蘭にてはアヤラー、英國に於てはアルベーリカス・ゼンチリズの如き進歩的思想家があつて、暗黑を破る微かなる閃光であつた。彼等の聲はいと小くして、四周の混亂の裡に沒し、又その唱ふる所も甚だ不完全なる所があつたが、我等のユーゴー・グロチウスの如き大思想家を生み出すために、なくてならぬ先驅者であつた。

文藝復興期を通じて、一種の詭詐的外交が流行するに至つた。

それはマキアベリーの王侯論の影響であつた。虚言と陰謀と暗殺とが頻りに行はれた。カザリン、ド・メヂチ、フイリップ二世、ワーレンスタインの如き政治家はマキアベリズムを外交上の實典として尊敬し、その一言一行をも實際化することに努力した。

この混沌たる時代に於て、非戰鬪員の待遇は最も殘虐を極めた。戰亂半世紀に亙つた和蘭人は具に辛酸を嘗め盡した。獨逸に於ける三十年戰爭の殘虐無道は筆紙の述べ盡す能はざるものであつた。敵味方の將軍達は悪魔の如き殘酷性を發揮した。牧師にして死刑に處せらるゝ前に手足を切斷せられたもの多く、教會には非戰鬪員の死屍を以て蔽はれ、床には血の池を湛えた。或は家族全體、教會の柱に縛られて、薪の如く點火せられたのもあつた。刄に倒れざるものは悪疫の犠牲となつた。グローテウスの名著出版後、四年にして起つたマグデブルグの攻略には大寺院と數戶を殘して、全市灰燼となつた。二三萬人の市民が殺戮せられた。掠奪せられた他の都市は人口四分の一に減じたものもあつた。ミンステルの講和條約後二百五十年を經過して、獨逸は三十年戰爭以前の繁榮を回復することが出來なかつたとも論ずる史家がある位である。

かゝる混亂の世界よりユーゴー・グローテウスの平和の福音が鳴り渡つたのである。

六　ユーゴー・グロテウスとその思想

ユーゴー・グロテウスHugo Grotius の和蘭語は Huig van Groot である。彼は一五八三年四月十日、一法律家の子としてデルフトに生れた。幼にして穎悟人を驚かし、殊に古典文學の該博なる智識を有した。ライデン大學を經て、佛蘭西に遊學して、法律を修め、歸國して辯護士を開業したが、暫く羅甸の詩を作り、劇作に耽つた。

一六〇三年、彼は聯合州政府の修史官に任ぜられ、又多くの官職を授かつたが、政爭の渦中に投じて、やがて失意の人となつた。

彼は性來寛容の精神の人であつたから、和蘭に於ける新舊兩派の猛烈なる闘爭を緩和せんとしたが、遂に成功しなかつた。よりて彼は狂熱の度のやゝ少けきレモンストラント派に屬し、指導者バルンエヴエルトと行動を共にしたが、一六一八年七月、オレンジのモーリス公が俄かにこの一派を壓迫することゝなりて、翌年、グローテウスを合せて、此派に屬する人々は終身禁錮を宣告せられた。一六二〇年彼は牢獄を脫走して、巴里に赴いた。彼はしばらく貧と戰つた。やがて彼の開運の時が到來

し、一六三四年にスヰーデン政府に仕へ、巴里駐剳の公使に任ぜられた。一六四五年、八月二十八日ロストツクにて死んだ。

彼は巴里に流寓中、名著 De jure belli ac pacis「戰爭及平和に關する法律論」を著し、一六二五年、之を公にした。彼は外に多くの神學に關する著述をなした。彼の和蘭史は西班牙に對する反亂の歷史の尤なるものとして推奬せられる。

しかれども彼の名聲は全く「戰爭及平和に關する法律論」に基く。これは單に戰爭及平和に關する法律論にあらずして、國家の權力と義務とを攻究したもので、近代國際法の基礎を据えたことである。彼の主張は國際道德には一種の基礎ありて、そは國家の活動の標準となるべきものである。そしてその基礎は從來の學者の敎へた如く、狹義なる宗制上や、聖書上の訓言と何等の關係なくして存し得るといふことで、僅かに時を超越した大識見といはざるをえない。

グロテウスの思想に二大根源が存する。その第一根源は天賦道德說である。彼の主張する處によれば、これは人間の心情と心意とに神によつて書かれたる正義の命令である。この命令は正當なる理性によりて、卽ち神によりて與へられたる識別力によりて確定せらるべきものである。かくして彼の所謂「自然の法律」が成立する。

第二の根源は國民と賢人とが正當にして、必要にして、終局的のものとして一致したる制度、もしくは法令、もしくは觀念に存在する。かくして彼は國民間の法律、卽ち國際法を按出した。

天賦道德說に對しては宗敎家の反對と異論とあり、國際法に就いては法律家の批評が絕えない。グロテウスの如き博聞强記にして、古今の文學に通じ、かねて一絲亂れざる理路を辿る頭腦を有する人にあらざれば、國際法を組織することは不可能であつた。されどこの迷路を切拔けるに最も確實なる案內者は彼自身の熱心、無我、高尙なる精神と心情と心凝とであつた。

種々なる要素、相反し、相容れざる因子が彼の思索の坩堝に投げこまれた。やがて、不純の分子が溶解し、消滅して、燦然たる光輝を放つ新學說——然り人類の新しい寶珠明玉が現出した。

例へば宣戰の權利に關して、彼は揚言した、曰く『戰爭もし正當なれば合法的である』と。而して戰爭の正しくて合法の動機如何との問に題しては、『公正に對する眞摯なる欲望』と答へてゐる。或は「山上の垂訓」を以て彼に挑戰すれば、もし聖書より反對の材料を探し出さば、民法、刑法に對して同樣の批評を加ふることが出來る。要するに「山上の垂訓」の如きは理想

にして實際の法律として直譯せらるべきものでないと簡單に應じた。

グロテウスは宗教家よりは自然人に重きを置き過ぎると攻められ、反宗教家よりはあまりに多くの讓歩を聖書に對してなしたと責められた。要するに、グロテウスは自然その儘の人間を對象とせず、思考する人々の心情のうちに及ぼされたる神の支配の下に進化したる公正、人道、正義の感覺を對象としたのであつた。彼の對象は亂民にあらずして思考する人々であつた。思考そのものに重きを置いて、學校教育の有無や、宗派の相違の如きは餘りに彼の重要視する點でなかつた。

グロテウスは思考する人々の存在するを信じた。而して是等の人々に對する訴へは必聽ずかるゝ時來るべきを確信した。彼は人類の進歩發達を信じた。宗教の長所が保存せらるゝと共にその短所が芟除せられんことを希望し、何時かは實現せらるべきを疑はなかつた。かくして近代世界の一大福音たる國際法が發布せられたのである。

彼の名著が巴里で公にせられてもガスターヴス・アドルフスやリセリーの如き政治家を除いては之を讀んだ將軍がなかつたらしい。佛蘭西に於てはユーゲノー教徒に對する態度がやゝ緩和せられたのはこの名著の影響かも知れぬ。獨逸に於ては三十年戰爭がこの名著の公刊後二十年間長引いて、殘虐無道の行爲が日夜に繰り返へされた。されどウエスファリアの講和條約の際には、グロテウスの精神の幾分かは各國の使節によりて理解せらたらしかつた。

彼の門弟子プーヘルドルフやトマシウス等の努力によりて、彼の精神は歐洲の思想界に除々として反響を與ふるに至つた。國際法が三百年の間に長足の進歩をした。世界大戰亂は一時國際法を蹂躙したらしかつた。今や國際聯盟の成立となり、ワシントン、ゼネヴアの會議となりて、國際法は更に新しい發展を試みんとしてゐる。將來の國際法は從來のものより一層複雜となり、飛行機、潜水艇、戰爭地帶、公海に布設する水雷、封鎖法の改正、等種々の問題が生ずるであらう。しかも平和の促進に對して依然として何等かの貢獻があるのであらう。國際法は戰爭を絶對に禁ずることが出來ぬとしても、平和促進の一方法である。

華盛頓會議は太平洋上に十年の平和を將來した。これまた國際法の精神の一活現である。我等は大戰後の新しい時代に於て殊にグロテウスに對する感謝の念を新にせねばならぬ。

墨子は東洋的國際人ならば、グロテウスに比すれば、あまりに理論に偏してゐる。しかしその兼愛說と非戰論は現代に對す

る一大暗示である。我等は更にグロテウスのやうな公正なる精神を振興して、複雜紛糾したる國際問題を平和的に解決するを力めねばならない。

(下)人道主義の政治家
―アブラハム・リンコルン―

一　米國に於ける黒人問題の由來

アブラハム・リンコルンは身を微賤に起し、殆んどあらゆる人生の辛酸を嘗め、正直と勇氣と信念と努力とを以て、二回大統領に選ばれた人である。不思議なる運命は彼を驅りて、南北戰爭の當事者たらしめた。彼は平和主義者たるべくして、戰爭の責任者とならなければならなかつた。されば彼を目して平和主義の政治家と認むることは難いが、奴隷解放運動に熱中し、最後に解放宣言書を發布した大政治家として、即ち獻身的人道主義的政治家としての彼の位置は容易に動かすべからざるものがある。

そも〳〵黒奴が米國に於て使役せらるゝに至つたのは十七世紀の初め、ヴァージニア洲に於て黒奴が賣買せられたのを發端とする。奴隷は傭主の欲するまゝにこき使ふことが出來、又賃銀を仕拂ふ必要がないから、この位、安價にして有利なる勞力がない。白人は最も低廉なる勞力を得たので、有頂天となり、競ひて奴隷を使役したので、この忌むべき惡習慣は米國全部を風靡するに至つた。貨殖に拔目のない商人は奴隷を鐵鎖に繋いで、牛馬同樣に市場に賣買した。おまけに、英國の商人が亞弗利加より黒人を誘拐して、米國植民地に賣り飛ばし、莫大なる利益を獨占した。政府はこの不法行爲を默認した。北部地方は氣候が寒いので、黒人の勞働に適しないから、疾くにこの惡風を廢したが、暑熱の强い南部地方は白人の勞働に適しないから勢ひ、唯一の富源たる棉花の栽培には專ら黒奴を使役した。ワシントン大統領時代に棉繰器械が發明せられてから、棉花の收益は激增した。又當時英國の紡績業が非常の勢で進歩したので棉花の需要は益々膨脹したので、南部の耕作地は目覺むるばかりの發展をなし、經濟上の好景氣來となり、俄かに富の程度を高めた。されば米國聯邦が獨立を宣した時も、南部諸州は奴隷制度を禁止せず、たゞ二十年後は亞弗利加より新に黒奴を輸入せざるべしとの條件を附して、北部諸州と共に合衆國を組織して、自由と平等と四海同胞を根本義とする建國の憲法を承認した。

烈日の遠慮なく照りつくる棉花耕地に營々として働く黑人は實に氣の毒のものであつた。妻子骨肉東西に流離し、夫は此の耕地に苦み、妻は彼の農園に泣けども、之を憐れむ人もない。虐待に得堪えず、南部より逃亡して、北部の奴隷禁止州に身を潜むる黑人は尠くなかつた。然るに北部に於ても、脱走奴隷を保護する者はその所有者から要求があれば、いやくながら之を引渡さねばならぬ法律があつた。無情なる所有者は逃亡者あれば賞金を懸けて之を搜査した。北部諸州には多數の自由黑人があつたが奸智に長けた者は賞金をえんがために、不法にも無辜の黑人を捕へて逃亡者だと誣告して、否應なく、南部に送ることが珍しくなくなつた。この沒義道の不法行爲を公訴せんにも北部の裁判所は南部の物議を醸さんことを恐れて、表沙汰にすることを躊躇した。

この酸鼻極る奴隷虐待の非道不義を鳴らし、人道の炬火を點じたのは新英蘭に於ける禁奴黨であつた。その急先鋒のガリソンが「解放者」なる雜誌の秘密出版をなしたのは一八三〇年であつた。リンコルンは正に廿一歲の青年であつた。

彼はその翌年、オハヨー河の河商人として、二度目にニユー・オルレアンに航した。その折、奴隷市場で一人の年若き混血美人が衆目の辱を受けて、强慾なる商人連の手にて競賣されてゐる有様を見て、多情多感なる彼は同情の涙に咽んだ。彼は同行の從兄を顧みて、『俺はもしかゝる殘忍な制度を責めつける機會を得たならば、思ふ存分、敲き毀はして了はねば腹の虫が承知せぬぞ』と誓つて、思はず拳を固く握り緊めたといふ事である。

その後十年目に、ケンタッキーの旅行より鄕里に歸る途上、船中にて悲慘なる光景を目擊して、妹に書を送つた。『私は船中にて最も悲慘なる光景を見た。一奴隷商はケンタッキーの各地より十二人の黑人を買ひ集め、南部地方に送るのである。彼等は六人つゝ一繫ぎとなつて二團體をなしてゐる。彼等はこの世の光を奪はれ、樂しい幼年の記憶から離され、友達と別れ、父母兄妹と別れ、可愛い妻子と別れ、此世ながらの地獄に送らるゝのである』

彼はまた一友人に對して次の如く語つた。

『ケンタッキーでは今日我も我もと奴隷所有の競爭をしてゐる。如何なる富豪も奴隷ほど難有いものはないと信ずるに至つた。この悪傾向は白人の墮落を助長し、神聖なる勞働を賤しむに至つた。就中この悪風に感染し易いものは、思慮分別に乏しい青年である。國家の大黑柱となるべき青年が勤勞を輕蔑し、懦弱に流るゝことは實に寒心すべき事である。奴隷の

流行は言語に絶した非人道的なる惡風潮である。又國家的犯罪である。今後我等は人類史上に最も醜惡なる汚點を殘し、天人共に憎むべき罪惡に當然來るべき天罰を覺悟せねばならぬ」

彼はこの精神に基きて、イリノイ州會及び議會に於て、極力奴隷制度を攻撃して、毫も假借することがなかつた。一八五四年より六〇年までの七年間は最もこの方面の活動をなしたのである。

二　奴隷問題と南北の態度

さて米國が聯邦政府を組織するや、交讓妥協の精神を以て建國の根本義とした。黒人虐使の弊風も習慣となりて今更どうすることも出來ず、若し強いて禁奴主義を斷行すれば、徒に奴隷主義者の反抗を招いで、合衆國統一の偉業に障礙を招くが故にワシントンやジエフアソンの如き大政治家もこの惡制度の廢除を斷行しかねたのである。しかし建國の偉人等は漸次之を廢止する方針を採つたことは明白である。

しかし南北諸州利害を異にして、反目するが故に合衆國の統一は表面的に止りて、内心は眞の融和を缺いた。一七八七年、議會は法令に依りて、南部ミスシツピー沿岸河州の奴隷制度の維持擴張を承認したが、たゞ、オハヨー河よりミスシツピー上流の米國中部の地域にはこの制度を絶對に禁止した。然るに、その後佛蘭西からルイジアナの地域を買收せる當時、奴隷區域に關して、再び南北紛爭を醸し、容易に落着せぬ。萬事に折衷を重じた大統領クレーは南北の乖離を惧れて、得意の妥協案を建策して、やつと南北の權衡を保ち得たのは一八二〇年のことで有名なるミゾリー交讓法である。即ち新設せられたる同州の奴隷州たることを容認すると共に、南境北緯三十六度三十秒以北、ミスシツピー河とロツキー山脈との間に横たはれる廣袤千里の大平原には奴隷制度を布くことを永遠に禁止した。この妥協案によりて政治上、經濟上の利害及び人情を異にせる南北の分裂を防遏したのである。

一八四七年大統領ポークは南部の機嫌を取り、民主黨の勢力を擴張し、改選の際再選せんとの魂膽から、無名の師を起してテキサス曠土を墨西哥から略取した。南部は直ちに之に奴隷制を布き北部の自由州を壓倒せんとした。ために南北の確執漸く繁く、風雲暗澹たるものがあつたが、クレーの再度の調停に依つて、一八五〇年に改定交讓法が成立して南北の紛議も大事に至らずして無事に濟んだ。南部は當時砂金發掘によりて俄かに名高くなつたカリフォルニア州を自由州とすることに讓歩し、

北部は之に對して、同州以外の新設州は南部と協議して、自由地又は奴隷地と決することゝし、同時に自由州に亡命した奴隷は屹度逮捕して、南部の備モに送還すべきことを規定した亡命法を附加した。

程なくして、ネブラスカ及びカンサスの二州新設せられて、合衆國に加はるや、交讓法の制定した境界線の北に位して、當然自由州となるべきものにして、且つ州民も反對したに拘らず、南部は亂暴にも、二州を壓迫して奴隷制度を布いて、北部自由諸州に對抗せんとした。この係爭問題の委員長のダグラスは南部諸州に迎合して大統領たらんとして、奴隷制度の採否は州民の隨意として、議會は之に干渉せずといふ、有名なるネブラスカ、カンサス法案を提出して、一擧にして上院を通過せしめた。時に一八五四年三月にして、前後三十年の平和の連鎖となつたミゾリー交讓法は一朝にして破棄せられた。

從來リンコルンは國民黨に屬してゐたが、政策上の相違からこの黨派は幾多の小黨に分裂し、一八五六年遂に瓦解した。同年二月二十二日、各州の國民黨首領はペンシルヴァニア州、ヒッツバーグに會合して、新政黨の組織について協議した。然るに合衆國の前途を考慮し、人道主義に立脚して、國家民族を拯はんとする意見が中心思想となりて、北部國民黨と南部の奴隷反對黨が聯合して共和黨を組織した。リンコルンも之に加り、イリノイ州共和黨が成立した。

一八五六年五月二十九日、ブルーミングトンに開かれたるイリノイ州共和黨大會に於て、リンコルンは大演說を試みた。彼は政治的立場を超越して、純なる人道家となつて、敬神愛人を說き、奴隷制度の人倫の大道を無視する罪惡なるを獅子吼した。聽衆は無限の靈感に打たれ、恍惚として我を忘れ、何人もこの大演說を筆錄したものなく、「失はれたる演說」として記憶せらるゝのみである。而して大會委員はリンコルンの意見に從ひて、奴隷制度の反對の決議文を通過した。

翌六月フイラデルフイアに於て、共和黨大統領の豫選會が開かれ、ジョン・フレモントが大統領候補者に、リンコルンは副大統領の次點者となつた。これはリンコルンの全く意外とした所で、實はイリノイ州委員が「失はれたる演說」に感激して、極力リンコルンを推奬した爲に外ならなかつた。さて選擧の結果は民主黨の勝利に歸して、ブカナンが大統領に當選した。

三　禁奴運動の代表者

一八五八年はリンコルンの生涯に於て、又米國の政治史に於て永久に記憶せらるべき年であつた。即ちダグラスとリンコル

ンとが奴隷問題を提げて、イリノイ州選出上院議員を爭つた。リンコルンは聞達を天下に求めず、富貴を現代に願はず。民衆の伴侶を以て任ずる田舍辯護士に過ぎない。之に反して、ダグラスは政界の寵兒にして、閲歴あり、貨殖に長じ、富家の娘と結婚し、識度膽略をも相應に備へたる、人氣ある政治家として社交界の大立物であつた。

兩候補者の論戰は八月に始まり十月に終つた。選擧の結果はダグラスの勝利に歸したが、リンコルンの名聲は全米に響き渡つた。彼の至誠、人格、識見、ことに燃ゆるが如き人道的熱心は、一度彼の演説を聞いたものを感動せずしてやまなかつた。

リンコルンの演壇に立つ時は、初めはやゝ前屈みの態度にて、長き腕と脛との釣合があまりよろしくなかつた。開口一番すると、間が惡るそうな風に見ゆるが、十分二十分と經つと、演説に油が乘り、田舍漢らしい顔に漸く神來の光が輝き、一言一句生々として動き、興味と教訓に充ちた引例や諧謔と徹底したる意見と高遠なる理想とに全人格が躍り出でた。雄辯家としてリンコルンの名聲は遠く東部地方にまで響き渡つた。

ブカナン内閣は失政に失政を重ね、人心漸く去らんとする時、リンコルンはいつのか間に政界の一中心人物となつた。

一八六〇年五月、シカゴに開かれた共和黨大統領豫選會はリンコルンを大統領候補者に選擧した。正式の選擧は十一月六日に行はれ、田舍辯護士が一躍して白亞館の主人となつた。くすしき運命である。

四　南北戰爭の突發

かゝるうちに南北衝突の暗い影がます〳〵大きく擴がつた。南部は新大統領の奴隷制度反對政策を想見して早くも、獨立を標傍したから、戰爭は避くべからざるものとなつた。然るに北部諸州には統一がない。或は南北妥協論、或は南部討伐論等といふやうに紛々たるものであつた。南部は既に汲々として軍備を擴張し、大いに陣容を整へたるに反して、北部は軍備は不十分、財政は困難で、一般に戰爭の開始を好まなかつた。しかし之を放任すれば北部諸州中、南部に加盟しない迄も、打算的立場から獨立を唱ふる者が現れないと限らない。すると合衆國は土崩瓦解の運命に陷ゐらざるをえない。――然りとすれば歐洲列強は如何なる態度を以て同植民地に臨むかも知れない。實に國歩艱難の秋であつた。

リンコルンは國政大紊亂の後を受けて、よく施政を刷新し、政道を確立し、二百萬の大軍を組織し、有力なる海軍を起し、五十億弗の軍費を募り、不換紙幣を發行して窮迫した財政を整

理し、經濟上の信用を回復し、國家の威信を中外に宣揚し、やゝもすれば內輪揉めの內閣を率ゐて、ともかくも調和を保持し外交の難問題を處理し、四百萬の黑人奴隷の解放を斷行し、人道と正義の光を永遠に輝かして、建國の理想を維持し、四ケ年に亙つた大戰爭を終へて、平和を克復し、南北の和合と團結とを一層鞏固ならしめた。その功績は眞に大なるものである。されば佛蘭西の學者ラブレーが『リンコルンはシーザーよりも偉大である』と賞讚したのは必ずしも不當でない。

一八六一年一月、今や敵地となつた南カロナイ州のチヤールストン港を扼せるサンターの要塞が南軍に包圍せられ、死力を盡して防守したが、其甲斐なく、遂に四月十三日に落城した。これが慘風悲雨四ケ年に亙る大內亂の火蓋を切つたものである。

最初北軍の旗色は餘り振はず、連戰連敗の有樣であつた。この間リンコルンは北部諸州を激勵し、將士をいたはり、悲哀と失望との間に、一縷の光明を認めながら、軍國の指導者として活動した。

しかしリンコルンの事業中最も異彩を放つものは奴隷解放の宣言である。本來彼は解放論者である。しかも反對派からは漸進主義者の如く思はれた。政府反對派の新聞は筆を揃へて當局の緩慢なる態度を攻擊し就中『ニユーヨーク・トリビユーン紙』主筆グリーリーは最も峻辣にして矯激なる筆を揮つて、政府に肉薄し、社會は大なる刺戟を受けて、人心は動搖し、處々に不穩の行動が現れた。

されどリンコルンは奴隷の解放に先立ちて、正に崩壞の緣にある合衆國を統一することが、焦眉の危務であると確信した。合衆國の統一に成功せずしては根本的に奴隷制度を一掃することが不可能である。少くとも北軍が捷利を博して、南軍を壓迫する形勢にあらざれば、奴隷解放の宣言は毫も權威を持たない。北軍利あらずして、北部合衆國が危機に迫る時にあはてゝ宣言を出せば、世界は之を以て北部の絕望的窮策と批評するであらふ。而して形勢觀望の中立諸州は南軍に加擔して、その威勢がます／＼盛大を致すであらふ。故に當局者は胸中十分の成算がなければ容易に手を下すことが出來なかつた。

然るに戰爭の延引と、戰線の擴大に伴うて、南部は兵員の缺乏を痛切に感じ、百計窮りて、黑奴を戰時作業に從はしめ、遂に軍事行動を執らしめた。かくして黑奴は明かに南軍の一大勢力となつた。かくて奴隷制度維持のために戰端を開いた南軍は自ら奴隷制度を打破することゝなつた。されば北軍からみれば奴隷問題は軍略上の問題となつた。リンコルンは夙に此形勢

を看取し、秘密に奴隷解放の宣言書を起草しつゝあつた。閣員といへども之を知らなかつた。

五　奴隷解放の宣言

一八六二年七月末日に至りて、リンコルンは奴隷解放宣言書の草案を提出し、閣議は之に賛成したが、北軍勝利の機會に乘じて之を發布することに内定し、絶對的秘密に附した。政黨も新聞も之を知らなかつた。

然るに北軍は依然として不振にして、大統領の憂悶苦痛は全く想像の外であつた。然るに勝に乘じた南軍はワシントン府の防禦線に殺到して、一擧に之を攻略せんとした。激戰三日の後北軍は最後の勝利を奏して、南軍は退却した。ワシントン市民は狂喜し、經濟界の危機も一掃せられ、株式市場は活氣を呈し軍事公債は騰貴し、義勇兵の應募者も増加した。

リンコルンはこの機會を逸すべからずとして、九月二十二日閣議を召集して一應審議を遂げて、この宣言書を發布した。宣言の内容は翌年一月一日から實施せらるべきものであつた。其時以後、合衆國に對して反旗を飜へす州にある奴隷は永遠に自由たるべし、政府は彼等の人權を保障し、實際的自由を伸張せんとする如何なる努力に對しても、彼等に抑壓を加へざることを宣言した。

其後戰局の進展と共に形勢の變化に應じて、再び解放の宣言書を公布せねばならぬ必要が生じ、一八六三年一月一日之を斷行した。その大要は次の如きものである。

「亞米利加合衆國大統領にして、其陸海軍の大元帥たるアブラハム・リンコルンは現戰爭は合衆國とその諸州との憲法上の關聯を恢復し、國民的結合を鞏固にする目的を以て、遂行しつゝあることを聲明す。

而してこの目的を遂せんが爲に、政府は次期の議會に於て、凡ての奴隷州に對して、以後絶對に合衆國に反抗せず、又は合衆國の統一と平和とを紊亂するが如き行動を敢てせざるべしとの條件の下に、各州管内の奴隷を廢止する爲めに、適度と認むる財政の援助を與ふべきことを提議す。一八六三年、一月一日以後は合衆國の如何なる州に於ても、奴隷となりしもの、又は合衆國政府に對して、叛逆を敢てせる州内の奴隷は永遠に自由たるべし。而して解放せられたる黒人は國内の住居の自由を有す。政府は永遠に黒人の自由を認め、又彼等の如何なるものに對しても、その自由を得んとする正當なる努力を防壓する行動を採らざるべし。

政府は合衆國の統一が達成せられたる時、適當と認むる時期

に於て、政府に忠誠なる合衆國民が政府の奴隷解放政策に依つて蒙りたる損害に對して、適當なる辨償をなすものとす。各州は正當に選出し、且つ合衆國に忠誠なる代表者を本年十二月一日に召集すべき議會に送りて、國家の保全に必要なる一切の議事を遂げしむべし。而して明年一月一日以後、政府の命令に服從せざる州及び州民をば政府は叛逆者と認定すべし。』

ついで二月、前記の宣言に據りて解放せられたる黑人を軍隊に召集する宣言を發表した。支部政府は大に狼狽した。南軍も亦自衞手段として黑人を完全に解放して、黑人軍を組織して兵員を補充せねばならぬ破目に陷つた。依つて一八六四年十月に黑人解放の宣言を發して、之を兵役に服せしめた。

かくして合衆國建國以來の國家の禍根たりし奴隷は完全に解放せられた。しかし猛烈なる人種競爭や複雜なる社會問題を惹起せんことを惧れて、安全なる善後策として、黑人を中央阿非利加に送還する計劃も試みられたが、實行の運びに至らなかつた。故に彼等に米國々民たり得る充分の教育を與へ、國内に於て生活をなさしむるの可なるを知り着々、これが實現を期した。又兵役に服したる者、戰時作業に從へる者、智力の優秀なる者には選擧權を與ふる方針を採つた。政府は奴隷解放の賠償として一千萬弗を支出して、その根絶を期した。

六　人道主義政治の殉難者

リンコルンは單に理想を追求した政治家たるに止らず、智慧に充ちたる實際家で、出處進退、機會を逸せず、政策の運用また頗る機宜に適したものがあつた。もし彼に此才幹がなかつたならば彼の人道主義も體現するが機を逸したことであらふ。

一八六三年七月一日より四日に亙りて、ペンシルヴアニア州のゲッチスバーグに於て、南北兩軍の決戰が行はれて、北軍は最後の勝利を確保した。三萬五千の英靈は此戰場に葬られた。其年十一月九日、盛大なる紀念祭が執行せられた。此時にリンコルンの試みた演説は不朽の文字として後世に傳ふべきものであつた。彼は悄然として演壇に上り、僅かに五分間の演説を試みただけであつたが、實に信念と理想と愛に輝く金玉の文字であつた、一言一句肺腑より出でたる生命そのものであつた。

『八十七年前、我等の祖先はこの大陸に新世界を求め、聖き信念と尊き努力とに依りて自由の國土を建設し、萬民平等といふ人道的思想を以て立國の大本とした。而して今日の大戰亂はこの正義公道を内容とした自由なる國家が、壓制に勝ちて永遠に持續すべきや否やに就いて、悲慘なる鐵火の試練を

受けてゐる。我國はこの試錬のために既に莫大なる人命ゝ國帑とを蕩盡し、實に高價なる犧牲を拂つた。ゲッチスバーグの戰は光榮ある自由政治倒るゝか、或は暴虐なる壓制政治勝つかと云ふ國家の運命を決すべき激戰であつた。ゲッチスバーグの慘戰に於て、この試錬を受けて其尊き生命を捨てたる我が忠勇なる同胞の爲に、我等はこの地を聖別して、彼等勇士の墓とした。然れども我等の追悼式がこの地を神聖にし、崇嚴ならしむるのではない。即ちこの靈地を崇高にし、神聖ならしめたる者は、祖國の運命を双肩に擔ひ、自由と人道とのため、更に人類最高の理想の爲めに、此地に於て奮戰して斃れたる、我が忠勇なる彼等將卒自身である。世界民衆は我等が此地に於て述べつゝあることをさまで注意せず、又永遠に記憶に留むることもないであらふ。然れども、この地に於て奮戰し、自由のため、人類の理想のために斃れたる我が健兒の壯烈なる行爲は永遠に世界人類の記憶するところとなるであらふ。故に我等生存者の崇高なる義務は、彼等が自由平等の精神のために斃れたる大事業を完成し、彼等の英靈を永遠に安んぜしむることである。今回の戰亂の受難者は最も光輝ある自由及び民衆政の創造者、誘掖者となるであらふ。而して大難の殉死者よ、卿等の死は決して徒爾でない。光榮ある民主的文明は卿等の死骸の上に照らすであらう。荒寥たる戰場に立つ十字架より、世界の自由と人道の歡喜は生れ出づるであらう。危機に瀕せる自由政治、人民政治は卿等の殉難に依りて救はるゝであらふ。』

この森嚴莊重なる弔詞を述べたリンコルン自らもやがて、一刺客のために犧牲者の清き血を流さねばならなかつた。しかしながら人道主義の政治家としての彼の功績はゲッチスバーグの勇士のそれと共に後代に永く光被するであらう。



詞華

愛と平和に因める詩と歌

世紀の囁き

他六篇

白鳥省吾

遠い世紀の夢を
この明らかに年輪を表はした老いたる檜の根株に見る、
微妙なる織物のやうに鮮やかに示した八百九十四年の樹齢
おゝ何と驚くべきしかも正確な徑路。

おゝ汝
苔むせる古き九世紀を超え來れる巨人、
人跡未踏の亞里山の大森林に
蓊鬱として聳え立つその姿はいかに雄々しい美しさであつたらう。
しかも今玆に見る片影はたゞ不思議な車輪のごとく

また折られたる怪奇な翼のやうである。
汝の五十年間の密なる年輪を重ねても僅か一寸に足らない。
人々よこの成長の跡と時代とを結び付けたる短き暗示を瞥見せよ。

檜がなほ幼兒のごとく小さく夕日に梢を染めた時、
皇歴一八四五年、平氏檀の浦に滅亡し
檜がやうやく吾等の一抱へほどの幹で嵐に叫んだ時
皇歴一九四一年、蒙古襲來したといふ。

皇歴二一一七年、太田道灌、江戸城を築いた時も
皇歴二一五一年、コロンブス、亞米利加を發見した時も
皇歴二三六二年、赤穂義士、吉良上野介を討取つた時も
皇歴二四四三年、天明の大饑饉あり、また亞米利加合衆國の獨立した時も
皇歴二四四九年、佛蘭西革命の時も
皇歴二四七五年、ナポレオンがウオーターローで敗戰した時も
皇歴二五二〇年、井伊大老、櫻田門外に刺された時も
皇歴二五二八年、明治維新の時も
私の生れた時も
日露戰爭の時も
世界大戰の時も

この木の伐れたといふ皇暦二五七二年まで、
はた歴史に記錄せられざる
一切の人間の哀歡と運命とに風雨を共にしながら過去九世紀の間
殆んど同一の律(リズム)を持つて大地より滋味を吸ひ
その期間それ〳〵の成長にあつて
四季つねに豐かに薫る綠葉をそよがせて高く立てる姿よ
その微笑と無關心よ。

おゝ汝こそ
豐穰なる大地の觸手、
朽ちたる世紀の骨、
めぐりゆく日月の淚。
或はまた『永遠』が示す最も短い警句(エピグラム)であるか！。

――平和博覽會所見――

白帆をあげて

風なき正午の海を漕ぐ舟
大いなる粗い灰白の帆をあげると
遠い沖よりのあるなしの潮風をはらみ

聰き者のやうに吾等の目ざすかなたへと
松島灣内の滑らかな波の上を辷りゆく。

いま舟夫は擢を漕ぐ手を全く止めて
形おもしろき美しき島々の名を呼ぶ、
移りゆく世に類ひなきデリケートな島よ松よ、
影うつすそれ〴〵の島の肌を洗ふ波は
古き時代からのつぶやきを繰り返し、
吾等は滑らかな波に手をひたし喜べば
底より深くそよぐ海藻
刄のごとく光り跳ねる魚。

科學者はこの島々も
わづか二三百年後には波に陷沒し去ることを教へる、
げに今でも波に消えさうな島がたくさんある。
おゝこの一灣の風光も
永遠に取りすがる刹那の美しさであるか
もろき一つの死すべき生物のごときものであるか。
彼方に機關の音たてて人を滿載してゆく小蒸汽

艶やかに三味の音させて擦れちがふ舟
男ましくボートを漕いでゆく學生等。
この吾等の果敢ない生と共に
島々も明るい正午の海にゆるやかに挽歌を歌つてゐる、
凡ては深刻な自然の藝術の一瞬よ生よ、
しかも何といふ樂しい存在の輝き！。

日時計

日時計は
子供の寢床ほども大きい
粗い四角な部厚な石だ、
その上に弓形に渡された錆びた太い針金
全體がまるで大地のやうにがつしりしてゐる。

その石の上は十二に區分される、
羅馬字のⅠⅡⅢⅣⅤⅥⅦⅧⅨ　ⅪⅫ、
（その文字は封建の當時にあつていかに新しかつたか）
春の日かげは十時少しまへに淡く映つてゐる
ふところの金時計を出して見ると

やはり十時に十分前だ。

日時計は
日の匂ひ人の匂ひ地の匂ひに染まり
最も單純でしかも永遠な
歌はざる沈默の機械。

鹽竈神社の境內は春の日麗らかに
幽邃な老杉に櫻の花が照り映えて
淸淨な日本風な美しさを極め
どこかで遠く鶴が啼いてゐる。

監獄跡の盆踊

まんまるい月が中空にあるといふだけでも
この遊樂の夏の夜を完全なものにする、
美しい旅の愁ひに身をまかせよ
あゝ月の光を傳つて
盆踊の太鼓がほのかにきこえてくる。

盆踊は市外の監獄跡の廣場にある。

近寄つて見ると何といふ夥しい群衆であらう
それらの上げる埃は濛々と霧のやうに
新しい世紀の惱みや情慾の發散のやうに立ちこめ、
踊り手は五百人ちかい若い男に稀に女も交つて
亂雜に四五人づつ列び全體が大きい一つの輪になり、
眞中の囃子臺で歌ふ音頭と
やけに鳴らす太鼓と笛の音につれて
踊りながら彼等は練つて廻る。

彼等はこの附近の農民や市井の勞働者であり
みな假面舞踏の怪奇な喜びに醉つてゐる、
その多くは更紗やメリンスの大きい花模樣の長襦袢を着て
顏に白粉を塗り墨で髯を描き頰に紅で丸をつけてゐる、
中には辨慶や小野道風や角力や布袋や花魁や狐の嫁入りに假裝したのもある。

踊りながら打ち振る持物も
それぞれ彼等らしい嗜好を凝らして、
青い大きい夕顏に顏を描いたものや
銀紙を板に貼つた大庖丁や
障子ほども大きい團扇やを持ち、

女枕に紐をつけて鞄のやうに下げたのや
また本物の子供をおんぶして搖すぶり踊る四十男もある。
音頭とりも歌の數をたくさんは知らない
またこの人數には聲も徹らないので
太鼓と笛を根かぎり鳴らしてゐるが、
この大集團は思ひ〳〵の勝手な唄をうたひながら
思ひ〳〵に悠長に踊つてゐる。
建物を取り拂つたあとの粉のやうに乾いた地面を
足で擦つたり打つたりしながら
濛々と限りなく埃をあげて
踊りといふよりは少し曲折ある散歩で廻つてゐる。

埃をあびて踊るこの夥しい群衆の
雜然、單調、怪奇な蠢動は
たしかにこの世に於て歡樂と名づけられるものではない、
しかもこの淸らかな月の光の下で
彼等は部落の草原で小人數で踊るよりも
かくまでも彼等はこの大きい廣場の大集團を喜び、
つねに離れ〳〵に勞作してゐる見知らぬ人々の心が

全部が一つになり心ゆくばかり合唱し合ふことを喜び、
この一年中での惠まれた夜を
樂しく唄ひ囃し踊り明かさうとする。

南洋土人

おそらく炎天の下で
椰子や榕樹の樹蔭でするであらうところの踊を
埃くさい日本の建物のなかで彼等はする。

漆黒の身體、煤けたやうな顔
いま大蛇と誇らしげに掴み戲れた老人は
傍で皷めいた細長い太鼓を打ち、
頭髮に貝細工の尾をつけたやうな笛を鳴らした男は
口中から火を吹いて見せたり
玩具の白鳥を椀に水を注ぐたびに泳き廻らしたりする。

或者は鳥毛の帽をかぶり鼻に金環を嵌めて豹のやうに怒號し、
或者は不思議な經文のやうな唄をうなり
足にたくさんの鈴をつけて鳴らしながら踊り、

扁平な顔をした少女は微妙に尻をふつて踊る、
それら凡ての持つ哀調と風俗は
異様な悲哀と笑とを人に齎(もた)らすものだ。

しかも
私達もその國に生れたら
こういふ様子で
こんなことをして居たかも知れないのだ。

野の家族

春の日は麗(うら)らかに
麦五六寸
空に雲雀
微かに萬物の汗ばむころ
平野の畑中道を荷馬車がゆく。

がたごとと車輪は音たて
少しばかり埃あげゆく荷馬車の
米俵いくつか積む傍に

逞しき妻は胸もあらはに乳呑兒を抱いて乘り
强健なる夫は先だちて馬を御してゆく。

おゝ途上の一家族よ
みんなで春の日に焦け
みんなで微風に吹かれる。
唄もなく野を行く
この一家族に幸ひあれ。

山林頌歌

朝早く起きた私は
溫泉の湧き口を見るために
山中の溪谷に添うてゆく。
四月まだ木の芽ふかぬ土地、
樹々はみな枯木のごとく枝を寂しくはつきりと現はしながら
おのおのの肌は燻された光澤を放ち
聳ゆる山を掩ひ、谷より簇立ち
不思議な賑やかさを空間に描く。
山ふかく日の照らすことも遲く

湯は小流をなして路傍をせせらぎゆき
『河鹿とるべからず』の古びた立て札は
夏季の人々の逍遙を遠く思はせる。

しばし溯れば小流の源は
群青の苔むせる岩根のあたりに消え、
溫泉の湧き口らしいものは現はれ見えず
數々の溫泉宿にひく管は地底にあるらしく
底鳴りの音のけはひのみ岩根に響き聽こえる、
山間の湯の流れの錯綜する微妙な音は
いかにも人間への慰めの囁きの賑やかさだ。

疎林のかなたには遠く雪の連山が銀白に輝いてゐる、
山は思ひ〳〵に空を劃つてゐるが
みな力限りの荒削りで
在るが儘の最上の美と莊嚴とで
一線一劃をも變へることの出來ない靜止で
しかも波濤の力で逼る。

いまだ芽吹かぬ樹々は凝然として

沈默と禮拜のこの美に比べると
明るく若葉のそよぐのは優しい虎舌を思はせる
この今こそ樹々の最も美しい期節ではないか。
雪の連山と溪流の音と
これら凡て何といふいゝ薫りだ、
靜かさのうちに呼びかはす諧調
寂しさのうちの法悦！

――伊香保にて――

諷刺畫

——畫題「世界平和」——

畫論

川路柳虹

展覽會だ、
みさつしやれ。
この漫畫家は素人で
皮肉がすこしく舌たるい。
だが歪められた世界は
歪んで描くのが正當だ。
漫畫でなく正畫だ。
おれの畫は——
さう一人の畫家はいふ。
時代はまことに未來派の如く
立體派のごとく
分裂と誇張の線と三角だ、

エッセンスをしぼり出すために
思ひ切つて形をこわしたが
この畫家の畫論は
多少技巧とつり合はぬ。
批評家はこの缺點を
ちよつと批難したが
自我主義の强い畫家は
ナニ今に押し出すよと
大へんな氣焔だ。

奇術

政治家といふ手品使は
いつもコップのなかをはたいて
「平和」の鳩を出しますと
觀客衆を欺瞞する。
手に汗握つてみたところで
いつも手品さ。
そつと懷から
間に合せの白鳩を飛び立ゝし

みんなにやんやと喝采せしめ、
善良な田舎ものから
木戸銭を捲き上げる。
もうご免だ、　この手は
観客の知らない間に鳩は
ちやんと舞臺裏に舞ひもどり
身うごきならぬ牢の中へと
入られてゐる。

傳書鳩「平和號」

あの鳩は
ときどきへいきで
人間の頭に
糞をしかける。

鳥の飛ぶのは
あまり高いので
つい上を見あげる
人間の馬鹿な習慣だ。

地圖

學校の先生が
子供のかいた地圖を批評する、
――君の地圖は
この境界線が違つてる、
こゝの海はもつと圓るく
こゝの灣はもつと眞直で
こゝの山はもつと右にある。
――それから、　君のは
色の塗り方が少し惡い、
こちらの國なのか、
そちらの國なのか、
ちつとも區別がつかね。

子供がいふ
――先生、　いゝ地圖が出來ました、
これが世界の大地圖です、
見ると緯度と經度に從つて

世界は公平な區分のなかに
百いくつにか分けられて
みんな違つた色が塗つてある。
――滑稽だ！
おほぜいの子供が騒ぐ。
先生は默つて考へたが、
――よろしい、　君の地圖が正しいが、
これは人間の世界の地圖ではなささうだ。

「プラス　マイナス」

「平和」を捻出する
ゼノアの大賭博。
いづれ劣らぬ世界の大博奕打が
より集まつての腕づくだ。
みんな自分の持札に
夢中になるので
つい、うかと出る切り札に
ぎよつとする。

よくある手だが
そつと一枚相談づくで
匿しておいた奴が二人。
「獨露無斷同盟」と
賭場はやんやの總ぞめき。
(「國際信義」といふ奴は
いつも失はれる骨牌さ。)
そこで今日の場は總くづれ。
腹癒せにひつぱたかれた處で
明日はお馴染の居酒屋「海牙」へ、——
のろまな奴がまたついてゆく。

ゼノア會議へ飛び込んだ猿「ボルセヸキー」

痛快だ、
野猿が
窓から飛び込んだ。
一息に卓に
馳け上り、

卓の書類をめつちやくちやに
騒き亂す。

呆つ氣にとられて
大强國の紳士政治家諸君、
傍若無人の猿をみて
「獣め」といきり立つ。
お手前のお尻をさはれば
尻尾の二三本はありさうなものを。

軍鷄

いきり立つた軍鷄は
さかんに飛びあがり、
牢に入れられた鷲をめがけて
突つかゝる。
おまへの嘴に似た
鋼の兜をかむつた
ヒンデンブルグの顰め面は

もうへこたれたのに
劍突つ立ての
借金の居催促。

愛する佛蘭西よ、
軍鷄を牢へお入れ、
そうでないとおまへの嘴までが
だんだん鷲に似てくるよ。

ガンディに

岩窟から牢屋へと
その苦行を移した
聖雄ガンディ、
牢屋のなんと立派なことだ、
おまへを捕へた國の文明は
まことに人間を優待する、
しかし、なんと冷いことだ、
なんと倦いことだ、
青空をゆく雲の姿が

おまへの眼から遮られて
おまへは一層深林の大きさと、
あの氣高い空の熱と
あの氣儘な嵐とを
見えぬ壁のなかにあつて
心ゆくばかりその價をば
知つたことであらう。
「自由」は「力」の繼兒だ、いつも。
いぢめられるだけ、苛められゝば
空はきつとおまへを祝福する。
(嵐も「時」のなかにあるのだ。)
ガンデイよ、　それにしても
この牢屋のなんと立派なことだ。
そして、何と雅致のないことだ。

愛蘭

眼のなかに入つた逆睫毛は
擦ればこするほど突き刺す。
ジョンブルの太平樂も

永年の眼疾で大弱り。
愛蘭よ、シンフェインよ、
辛ぼう強い針鼠よ、

おまへの手荒な反逆が
あの大動物を苦しめる。——
その傷手のなかには
人間の獲得せねばならぬ教がある。
そのあたへる暴力のなかには
お互ひの心のなかに眠らぬ
「人間の怒り」があるのだ。
反逆を眞理によつてするものは
眞理を欺瞞して肥るものより
すこしくゑらい。

モンロウ主義

大におごつてやるといふので
時々の無理難題もご尤も
いゝお客さまとついてゆく。
あとで扉をぴつしやり。

呼び出しの使が扉を敲く、
――まだかね、　みんな待つてるよ、
扉のなかから聲がする。
――いま財布を勘定してゐるのでね、
すこし忙がしいよ。――
このお客さまの主義が
曰く、モンロウ主義。

文明の創造

いちばんいゝ創造は
なんといつても藝術だ。
文明も一つの藝術だ、
おまへ自らを創ることが
おまへの文明で
また、世界の文明だ。
人のことを考へるまへに
自分を考へ抜け、
それが一番いゝ藝術だ。
おまへが享くるものゝ豊かさが

あらゆる人々の所有だ。
おまへの表現は眞率一點、
その技巧は容易いことだ。
まづ、おまへの肖像をかけ、
おまへの手と口と頭と腹とをかけ、
そしておまへの大切な陰所を
そのまゝの裸體にかけ。
おまへの素描の出來上りは
先づおまへの好みを表はす。
おまへの好きなものが
どれだけ人が好きか
見るものに任せろ。
平明至極の眞理さ。
一つのデッサンを理解するやうに
人間を理解しろ、
他人のためにする償ひは無用だ。
己があやまり、己が償へ。
――この藝術家の心に
みんながならない以上は
とても世界は救はれまい。

握手

それはある日の夕がたであつた。
號外に華盛頓會議の
米海軍比率の横暴をつたへて
不安な雲ゆきを心におこさせた
ある日の夕がたであつた。
「君は英語を話すか？」
街をとほる水兵がいきなり
自分を眼がけて尋ねた、
「東京驛へはどうゆくか」
「横濱の軍艦へかへるのだが」
アメリカの水兵をひつぱつて
俺は東京驛へとおくりとゞけた。
發車するプラットフオームで
"Thank you very much, very very much"
赭ら顔に滿面の笑みを湛へて
水兵は固く俺の手を握つた。
そして俺の煙草へ

親しげに火を點けた。
兄弟（きやうだい）よ、　兄弟よ、
どこに「敵」といふ姿があるのだ。
憎みと疑ひとが
二つの國民を遠ざける？
それは何だ。
君の心と俺の心とは
この手輕い關係で
はやくも奥底を語つてゐる。
いつ迄もこれでよいではないか。
一人の今日（けふ）あることを
永遠にあらしめる力は
そも誰にある。
一人の間違ひが
そも何によつて膨脹する。
政治家よ、　心配するな、
おまへと俺との一つの中心へ
すべてを結びつけろ。
人間の愛の方程式は
いつも「一＋一＝一」（プラスイコール）だ。

それは密接な
男と女の間に於ても。
また、いがみ合ふ
世界の國民の間に於ても。

庭園觀

變にくねつた枝は
へし曲げ、
いやに飛び出た奴は
ひつこめ、
あんまり小さい奴には
うんと肥料を積みあげる、
それで木ぶりも
みんな美しになつてきたわい——
この園丁の考へどほりに
ゆかぬ庭なので
「世界」もちよつと困るて。

（これらの詩篇の中には外國の新聞雑誌に發表されたカルトンをそのまゝ題材となしたものもあることを附記しておく。）

生々諸相

島木赤彦

拳尾篇

人間四周平和ありて平和を知らず。

親雛の腹の下よりつぎつぎに顔現るるひよこらあはれ
靜まりて親の嘴をつつきゐるこれのひよこは遊び倦みにけり
親雛は知らぬに似たり居眠りてとづる眼蓋をつつくひよこら
おのもおのも親の腹毛にくぐり入るひよこの擧の心安げなる
腹の下にひよこを抱きて親雛のしづまり眠るその靜かさや

平和は平板にあらず。青春時に波瀾を喜ぶ。

親雛の背にのぼりたるひよこらは危うげにして喜ぶらしき
いとけなきふるま　愛し円が嘴にあまれる蟲を爭ふひよこら

「遊びをせむとや　まれけむ」の古謡夙く

人間の眞諦を道破せり。

親雛の翼のひまゆぬけ出づるこれのひよこは戯るらしき

何ものか天變地異を免れむ。

大空を鳥行きしかばひよこらの相いましむる諸聲あはれ

生物に絶對の自由なし。

鳥籠をいでしひよこら地に飛ぶと羽すりてとぶ見つつ愛しも

苦樂一如は愛の相也。

親雀しきりに啼きて自が子ろをはぐくむ聞けば歎くに似たり

身心を獻ずるは愛の至也。

さ庭べの石垣の巣に餌はこぶ小雀めの親は人を怖れず

六尺の布猶縫ふべし。

相依りて寢竝ぶものかはしけやし家鴨の雛に親はあらなくに

生の相一に非ず。

冬山に死にゐる小鳥餌なくてかかることありと聞くがかなしさ

雪の上に凍りつきたる小雀めの小さきむくろを手にとりて見つ

草木篇

萌えそめて緑に遠し落葉松の木ぬれほのかに見ゆる山々

朝々の光すがしも向山にひろがりおそき櫟のわか葉

萌えいでていくらもあらねば櫟山土肌明かく日はあたりつつ

朝ごとに山にぞ向ふから松の若芽は過ぎて櫟の若芽

山吹の花咲きいでてなほ寒し朝な〳〵に霜おく山かげ

山吹の花を久しみこの山の櫟の木むら萌ゆべくなりぬ

うち竝ぶ山の肌の白々しくぬぎ若葉に風吹きにつつ

このごろの山の清しさや幼子の初毛をなして伸びたつ櫟葉

あかねさす晝のあひだの月うすし風吹きわたる楢若葉山

人事篇一

齋藤茂吉洋行前病を養うて富士見にありき。

遙かにも隔てつるかも谿川の水を浴みゐし人を思へば

谷の水浴みつる人をかりそめの心なぐさと人見けむかも

生きむとし念はぬ人なし谷川の水を浴みけむ自が心あはれ

蠅捕器に蠅のかかるをおもしろと見つつありしは寂しかりけむ

草も木も緑ふけたる野にありて思ひしことは限りなからむ

野の草におく露しげくなりしころ薬を煮つつ籠り居にけむ

草の色すでに衰ふる野の家に糠の汁を煮てありにける

あげつらひ爭ひすぎしわが友を遠ちにやりて下思ひをり

人事篇 二

政黨者にありて珍品の如きは末端のみ。

法師らが食うべし鯛の骨は刺し腹のそこ痛み人に言はずあはれ

總裁の辯疏多く語るに落つ。

雪消えし背戸にひそかに居りけらしあやまちしごと鴉啼きたり

政友會近時

いづくにかこの日は暮れむ大空の風に逆らひて飛ぶ鴉あはれ

國民黨

猛き虎たけきを恃み森ふかく遂にこもりて老いゆくらむか

一二新進なきにあらず

後の世にのこさむと思ふ虎の子は數多は生まずあはれ虎の子

平和

與謝野晶子

人なべてものの哀れを悟りたる平和と聞けどまことしからず
こしかたの恨めしきこと忘れても忘れがひたき平和の一年
火の藥白刄に生命すてぬべき決心をまた拾はずもがな
猛きをば誇る男の子の日の去ると云ふことは皆うなづきぬべし
平和の日一切のこと己よりいづる證を得たり初めて
昨日の夢を今さへ見るものはいくさ司が繋ぐ馬のみ
世の中の平和の樂にとりぬべき竪琴なれどいまだ弾かず
假初の平和と云ふがあるべしや日も月もまた輝ける世に
露西亞饑う平和はとある人々のうまいの料に敷くむしろのみ
地の上の城もあとなく戰ぶね見がたき日まで生きんとぞ思ふ
いくさ船成り上りたる人よりも罪知る如くくだかれて死ぬ
世の底に行き詰りたる日の本の百姓のため平和の來る

唯いのちうら安きのみ幸ひと女人（にょにん）の思ふ平和にあらず

空仰ぎ平和のしるしありやとて日の面（おもて）をば見てあり子等は

わが心平和の御代のかたはしにあるを忘れず思ひ上れり

想華

人類愛について

武者小路實篤

人類愛と云ふ言葉の意味は自分には二つに解釋が出來る。一つは個人が人類を愛する意味で、他は人類が個人を愛する意味だ。太陽が地球を引きつける、しかし同時に地球が太陽を引きつける。處が人類と云ふものを、外部に存在してゐるものと許り見るのと、人類の意志を内部的に感じる人とで話がちがつてくる。自分は人類を外部的に認めるが、人類の本體は内面的に感じる。その感じ方の方が人類の本體がはつ切りわかるやうに思ふ。外部的に人類を見て人類の爲に生きるとか云つた處が、それは空なものになる。何をしたら一番人類の爲になるかわからなくなる。その時眞理よりも頭數を愛することになる。しかし人類を内面的に感じる時、人は正しき望みをもつものを愛して、不正な望をもつことをよろこばないことが人類を愛することになる。

このことがよくわからないと、人類の爲に働いたつもりで實は人類の爲にならないことがある。このことを本當に知らないものは、眞の學者の價値や、正しき人間の價値や、本當の宗教、道徳の價値がわからなくなる。そして人類の爲

にこつ／＼と働くもの、研究するもの、發明するもの、人類の眞のよろこびを創造するものの價値を本當に知ることが出來ない。ロシヤの革命もそのことを知つてゐる人が少なかつた爲に、隨分罰をうけた。しかし心ある人が居たいですぐそれに氣がついた。眞の學者、發見家、發明家、宗教家、藝術家、音樂家、實際家、それ等は人類愛によつてのみ、深い仕事をしてゐる。それは意識的でない時にも、その人が眞に尊敬すべき人なら其處までゆかなければおさまらない。かゝる人は人類愛を外部的には生かさない人でも內部的には實によく生かしてゐる。それは人類の進歩、生長、健康、喜びに役に立つ人である。かゝる人は人類に愛されてゐる人であり又人類を愛してゐる人である。

直接に外部的に人類を愛してゐる人も元より尊いが、內面的に人類に愛されてゐる人も尊い人である。そしてさう云ふ人にして始めて、それは精神的許りでなく、實際行動をとる時でも、この人類の愛をすなほにうけた人で始めて權威が生れ、自由を得られる。

人類はよく木にたとへられる。このたとへは人類の生長を語るのに適當なたとへである。木が健全に生長するには、各々の枝や葉が健全に成長しなければならない。それには先づ自己を健全に生かさなければならない。自己を生かすことに不忠實な人は人類愛に背いてゐる。しかし同時に他の枝や葉の生長を害してはならない。それを害することは人類に不忠實になる。だから我々はあらゆる枝や葉の健全に自然を讃美して生きることに反感をもつてはならない。健全に生きてくれる者は讃美しなければならない。たゞタンコブや、病氣や、生々してゐない枝や葉があつたら、その原因をのぞくことに骨折ることの出來るものは骨折らなければならない。しかしそれは健全に生きられない部分の枝や葉を健全に生かすためである。全體が生きることに少しでも役に立つ者は尊敬しなければならない。同時に全部が生きられることを望むものは、人類を愛するもので、又愛されるものである。

自分は不健全な、發育を害されてゐる枝や葉が、健全になり、喜び多くなることを元より望むものである。この點、社會主義者の目的とする處と自分の目的とする處は一致してゐる。そして自分はこの目的に反するものを征服したく思つてゐる。しかし同時に人間の役にたつ爲に一心に働いてゐる人々なら、どの人種、どの階級に屬さうと自分は尊敬するものである。同時に人類の爲に働くやうな顔してそのくせ人類の意志をまるで知らず、たゞ調子にのつてさわいでゐるものを喜ばない。人間のよしあし、人類の爲に役にたつかたゝないか、人類に歸すべきものを持つてゐるかゐないかで、自分は人間の價値をきめる。

自分は新しき村の仕事をしてなほ人間の赤裸々の値打を重ずることを知つた。

勞働者のうちにも實にいゝ人がある。同時に金のある人の子弟で實にいゝ人がある。同時にその反對の人もある。自分はその區別を無視するわけにはゆかない。そして新しい社會に眞に適應出來る資格のある人を尊敬する。その他の人の幸福も自分は望む。しかし人類の生長をさまたげるものに組みすることは出來ない。或る人達は或る階級の人達のために働く人だけが人類の爲に働く人だと思つてゐる。自分は彼等の内に人類の爲に働く人とさうでない人のあることを知ると共に、その階級以外の人にも同じ程度にいゝ人のゐることを自分は知るものだ。だから自分は或る階級の爲にだけ働くことに組しない。その爲に働く人もその範圍に於いては尊敬は拂へるが、人類の意志を無視して、眞面目に人類の爲に働き、又研究し又考へつゝある人を輕蔑することは出來ない。だから自分は以前、今より階級爭鬪意識の盛んでない時、自分はしいたげられてゐるもの、不合理にくるしむものゝ味方してゐた。しかし今、その方に無反省に味方して、その爲に人類が尊敬すべきものさへ尊敬せず、階級爭鬪意識を強めることが即ち人類の爲を働く唯一の道のやうに叫び出すことが流行しだすと、自分はそれに一致することは出來ない。彼等の内に半分の眞理のあることはすべて自分

はとり入れるが、彼等の云ふことを全部同感しろと云はれる時、自分は反對だ。自分は殊に個人の自由を認めない傾向のある社會主義にはあまり厚意はない。むしろ無政府主義の方が自分の趣味にちかい。しかしそれは無秩序を意味しない。個人の獨立性、及びその資格を意味する。そして全體としての大調和を暴力なしに獲得することを理想とする。

とにかく、自分の望む處は各個人が、人類の生命を尊敬すると同時に個人の生命を尊敬し、全體も部分も生きることである。そしてそれは各個人の正しき自覺、人類と自己、他の個人と自己の關係をはつ切り會得し、他人を生かす道で自己を生かすことである。實質をよくすることである。

新しき家をつくるには良材が非常にいる。それはたゞ空鳴りする人間が多いことを意味しない、眞劍に人類を愛し人類の生長の爲に役に立つことを一心に研究し、又それを實現出來るやう、自己を鍛へてゆく人間を意味する。さう云ふ人間を生み出し、又尊敬することによつて新しい社會は生れる。

元より不合理に苦しんでゐる人の存在を是認することは出來ない。しかし同時に人格の價値、人類にとつての一個人の價値のあるなしを問題にしないわけにはゆかない。價値のある人を多く有することが社會にとつても、人類にとつても大事なのである。正しい社會のためにはよろこんで働く、不正だけが我慢が出來ない。犧牲者が出來ることを欲しないと云ふことは、人類愛に叶ふ立派なことである。しかしそのために幸福な人を不幸にすることによろこびを感じてはならない。復讐心に燃えること、殊に憎惡や嫉妬の火をあほることは人類の愛に背く、同情しつゝ、喜ばしておきたいと云ふ氣をもちながら、しかもよろこばしておけないと言ふことはあり得る。今の社會にある多くのよろこびは正しい社會には存在出來ない所の類のものが多いから。しかしそれ以上に、こつ／＼働くもの、勤勉なもの、人類の爲に役立つ仕事をしてゐるものを尊敬することは、人類愛に叶ふことである。それは正しき社會にとつての良材だからである。又

良材をつくりあげる人達だからである。

このことを本當に知るものが、本當に人類愛を味はふことが出來る。その人は本當に人類を愛し、又愛される人だからである。

自分は野心家や、無責任ものは愛さない。だが不幸な人、不合理に苦しめられてゐる人の爲に本當に働き、それにセンチメンタルな同情で動かずに、人類の意志を知つて、人類の爲に最も役立つ方法で、本當に働く人を尊敬する。この人間の價値を無視することは出來ない。そして價値のある人間なら、いざと云ふ時が來て益々立派に自分のするべきことをすることの出來る人を自分は尊敬する。

自分は人類の意志を無視し、内に感じることの出來ない人の、大言壯語を讃美することは出來ない。元より、一つの運動には彌次馬のくつくのはやむを得ない、彌次馬を恐れて眞理に不忠實になることは出來ない。自分は正直な處、今社會主義の彌次馬も何か役に立つてゐると思ふ、馬鹿な人間を反省させ、恐怖させるのは彌次馬の方が有効なことがある。だから實際運動としては彼等も彼等相應のことをしてゐることになる。しかし眞理に忠實になり、人類の意志を感じるものにとつては、自分の一言一句に責任を感じるものには、まちがつたことを云ひたくないものは、彼等と五分か六分まで切り同感することは出來ない。その先がある。

人類は新しい世界に今や入らうとしてゐる、それは事實だが、それにはその用意が必要だ。土地をどう生かすか、一人の人はどうすればどの位いの土地で食つてゆけるか、どう云ふ器械をつかへば一人の人はどの位働けば人類は生存出來るか、どう云ふ仕事が人類にとつて必要な仕事であつて、その仕事はどう云ふ方法をとるのが一番いゝか、そして個人を幸福にし、人類の生命を豐富に出來るか。

それ等の問題を考へる人々を尊敬せずに、新しい世界は來ない、又新らしい世界を生みだす個人の覺悟、自覺、それ等も無視することは出來ない。更に全人類がたよることの出來る道徳律、死を肯定出來る宗教心の生かし方を會得することが必要である。それ等を不必要に思つてゐるものは、人類愛、人類の生長慾を感じてゐないものである。自分はそれ等の人に組することが出來ないのは、自分達の使命を知つてゐるからである。

自分達の内には人類的本能以外のものも多いが、人類的本能もちやんとある。

その本能を生かしてくれるものを愛するのを自分は人類愛と云ふ、そしてそれは又人類から愛される。それは同時に人類の爲に役に立つ仕事だからである。

人類の爲に役に立つ仕事は殘らず尊敬し、それを一つものこさずとり入れて進んでゆくのが人類の使命である、そして人類は何處まで進むことが出來るか、それが我々人間の解かねばならないなぞである。

人類の爲にもつと役に立つにきまつてゐる人間の生命を利慾心、その他社會の缺點で、無視する處に怒りを發することは人類愛に叶ふ。それは各個人に別たれた眞生命を尊敬することだ、同時にそれを安逸や憎惡心で穢すのはよくない、利慾心をもやすのもよくない。正義によつて立て、人類の名によつて立て、そして人類に役立つものすべてを尊重せよ。その人の前には自分は謹んで頭をさげる。さげないことを恥るものである。(一二、五、二五)

心に逼つて來る人々

有島武郎

A

Aは落ちてゆく。上の方に落ちてゆく。今の代の人はもの丶墜落に一定の方向を定めた。物體の墜ちるのにも、心の墜ちるのにも。Aは然し人の定めた方向に向つては墜ちない。彼れはその反對の方向に墜ちてゆく。彼れは段々聖者になつてゆく。彼れは燕返しの名人だ。彼れは人の定めた墜落の方向に向つて、手に汗を握らせるまでに落ちてゆく。而して再びその反對の方向に向つて更らに遠く落ちてゆく。

然し人は前者を認めて後者を認めない。だから彼れは日々に人から惡まれ、退けられ、罵られ、忘れられる。

Aは一人の友人を失つて始めて藝術に來た。大抵の人は友人を失ふといつの間にか忘れてしまふ。Aは友人を失つたが故に藝術に來た。彼れは友人から剝落することが出來ない。友人を亡くして詠歎するものはある。けれども失はれた友人と心中したのはAだつた。だから人はAの轉身を無意味な氣まぐれとして罵つた。彼れの墜落の方向が人の定めた原則とは違つてゐ　からだ。

Aは藝術を鑑賞する代りにそれを生きた。藝術を生きるといひながら實際はそれを鑑賞してゐるのが人の定めた落角

だ。だからAは馬鹿の骨頂だつた。彼れは酒を飲むのに金の缺乏を感じて、身近かなものゝ實印を僞造した。身近かなものが火のやうに怒つて監獄にたゝき込むといつた。Aはそれが恐ろしさに平あやまりにあやまつた。そこで彼れは人なみになつたか。人なみ以上になつた。人なみ以上になるのは紫外光線になるのに等しい。それは人の心の網膜には感じて來ない。

Aは言葉どほりの聖徒にならうとした。而してその瞬間に、彼れは魂を消すやうな崩壞の大音響に遇つた。絕對的に神がゐなくなつてしまつた。神がゐないと主張する人にも微細には神がゐる。けれどもAに於ては、神がゐないと知つた彼れ自身の外には神がゐなかつた。神がゐない——從つて森羅萬象はなかつた。

Aは孤獨な、然し神をすら撥無する力と抱き合つた。Aはその力に震はされて五體そのものまでが激しく震へた。彼れは眞直には步けなかつた。醉ひどれのやうに千鳥に步いた。實際土の上をさう步いた。而して彼れは妻と子とがゐない所からゐる所へと歸つて來た。

不幸なる超人よ。Aは餘りに烈しく涙もろかつた。彼れは涙もろいが故にその一人の友から剝脫することが出來なかつた。それをAは氣付くべきであつたかも知れない。然しながら、人てふ人にしてその最大の弱點に氣付き得る人があるだらうか。

この一つの點に間違はないことが必要である。それは彼れの涙もろさがセンティメンタル程度のものではなかつたといふことだ。又自分が好んで涙もろいといふのを知り拔き得るそんなものでもなかつたことだ。さういふAがその妻と子とを自分の中に全く取り入れることが出來たであらうか。若くは神を撥無せねばならなかつた彼れである故に、その妻と子とを撥無し得たであらうか。西行法師の涙もろさならそれが出來たかも知れない。撥無した妻子を詠歎の的とし

て不卽不離に保存し得る人にはそれが出來よう。然しながらAの涙もろさは愚かしきまでに頑固なのだ。Aはその妻子の故に自殺を思ひ立つことすら出來た。Aにあつては骨肉の執着は骨肉を越えてゐた。Aは妻子に於て彼れに背叛する彼れ自身を見た。或る時は彼れは妻子の方に落ちて行つた。而して或時は反噬して彼れ自身の方へと際どく攻め寄せていつた。それは聖なる地獄だ。そこには一つの品詞もあり得ない。名は或るものの質と量とを限る。名のないもの、それは渾沌に過ぎない。Aは酒と女とに行つた。妻であり得ぬところの凡てのものへと走つた。而して敵の胸に吸ひ寄せられる征矢のやうに妻に歸つた。その間にあつて、Aはたゞ一つの活路を詩に求めた。然しながら彼れは人の知るやうな日本語を知らない。又文人が專用する表現を知らない。なほ又、彼れには詩の要素とせられる詠歎がない。その詩は呪文のやうだつた。醉漢の囈言のやうだつた。ぽき〳〵とその詩は枯枝のやうに、どこでゝも折れた。その枯枝のやうな詩の一片は、その一言一句は、嘗てまがりかたなき水々しい枝であつて、根から養分を吸ひ取り、太陽と空氣とに親しい挨拶を送られたものであることを語るにしても、人は固より見も返らなかつた。制作が生きた幹から落ちた枯枝でないといひ得るものが何所にあらう。人は悉くそれを承知してゐる。然しながらそれが言の葉によつて生きたものゝ如く飾られなければ、卽ち人が知りつゝその詐術にあざむかれなければ、人はそれを取り上げようとはしないのだ。Aは人間なみに詩を作らうとした。而していつの間にか詩の女神を赤裸かにしてしまつた。恐らく女神はそれを恥ぢはしまい。然しながら人が笑ひ切れないやうにその迂愚を笑つた。彼れは詩に於ても上に向つて眞倒まに落ちて行つたのだ。

詩もまた重過ぎるとAはいひ出した。あらゆる方向に對しての價値の置きなほしが全く徒勞に終つた時、彼れは或る勇みを以て、無價値の世界をかすかに垣間見た。陶醉者の視野。苦しからぬ程度に醉つたものゝ涙と、笑ひと怒り。そこの世界にはありとあらゆる情景がある。それは醉はないものゝ經驗するところよりも更らに靈活だ。けれどもそこに

價値はない。前と後とがない。原因と結果とがない。計畫がない。報償がない。tangible mirage！。Aにあつては詩もまた重すぎた。

彼れは遂に妻と子との奴隷になり下つた。――これを讀む人は私の詐術に注意せねばならぬ。彼れは眞になり下つたらうか――。Aは知邊から妻子のために合力を求めた。而して彼れは帳場に坐つてゐる妻の爲めに、朝から晩まで市中を歩き資りをする。夜、Aは妻から惠まれる酒をその胸の奥へと流しこむ。彼れは丸太のやうに寢る。

彼れは落ちた。妻と子との丁稚になるまでに落ちた。人はAのかくまでの落ちかたに滿足してほくそ笑んでいゝ。彼れは然し同時に上の方へと落ちてゆく。どこまでも〳〵落ちて行かうとするその神經の圖太さよ。

A、彼れは私の心に逼つて來る。

B

Bに愛することを知らなかつた時に愛された。彼女に取つてのこよないに幸な幸福。

愛したものはBの理想通りに優れ秀でた異國の人だつた。愛することを知らなかつたBは、それ故にその人を退けた。何故ならその人を捕へることは、彼女の理想を捕へることだから。而して理想を現實に於て捕へる程自己を醜くする行爲は復とないだらうもの。

Bを愛したものは、斷末魔の叫びと、珍らしく大きな一顆の金剛石とをBに殘して、生死の程も覺束ない時間と空間との彼方へ消え失せた。無限を有限にかぎる不思議な魔術の輪がその時からBの身邊に投げられたのをBは知らなかつた。

Bには何事もなく凡てが去つた。さう少くとも彼女は思つた。

やがてBが愛することを知る時が來た。言葉を換れば、牢獄の門がBの爲めに廣く開かれた。始めて見たものには、地獄さへが天國かと思はれ得る。殊に女は巧みな網を張る蜘蛛であつて、同時に、その網に陷る盲目な胡蝶である。Bも亦危くも身自らに催眠術を行つた。而して彼女を引き止めようとする手をさへ振り拂つて、その門を潜つた。

誰れがそれを誤ちであるといひ得よう。縱へ誤ちであつたにしても、それは凡ての人が犯すところの誤ちにしか過ぎない。それ故にそれは畢竟誤ちではない。それ故にBは人なみに幸福だつた。

幸福だつた。然しBはその幸福の中に不幸を見出さねばならなかつた。最上の運命――さういふものは空想に等しい程この地上には罕れではあるが――を捕へたとしてもそれは不幸だらう。然しながらその不幸の中にこそ空虚のない幸福はある。最上の運命を捕へることは、前にもいつた通りに、自分の醜さを思ひ知ることだ。それは何んといつても人間としての最大の不幸だ。而して、それだからそれは幸福だ。捕へることを敢てする勇氣ある人にとつては。最上の運命を退けて、その一つ手前の運命に身を任ねるものは、現世の幸福の夥多を受け納めるだらう。而してそれ故にこそ不幸が芽ざす。

愛することを知る前に、愛すべかりしものに邂逅した、その奇怪な自然の惡戯によつてBは彼女が甘んじて受け入れた生活からはみ出した。その自然の惡戯がBを永遠の處女にした。彼女は處女そのものゝ無邪氣さを以て、謂はゞ前世に於て失つたやうな寶を求め歩く。地上は彼女の眼に百貨店の混雜を以てひしめいてゐる。凡ての人の眼は狂亂して火花を散らし、山と積み上げ、海とひろげられた商品の間から、最も敏速に、最も安價に、最も悧巧に、堀出しものを貪つてゐる。商品棚に沿ふて流れ行く貪慾の洪水。Bも亦その洪水の水となつて漂ひ流れる。百貨店の入口に脫がれた履

物は、出口からその主人を乘せて、何處にともなく走り去る。

けれどもBの履物は恐らく永遠に出口にあつてBを待たねばならぬだらう。その履物はBが出口に姿を現はす前に朽ち果てるだらう。何故ならBは、出口に押流されると忽ち眼に涙をためて、再び入口の方へと流れを溯るから。見よ、Bの手には、大きな金剛石の唯一つ輝くその手には、虚ろが淋しく抱かれてゐるではないか。

入口を潜る間もなく、力に餘るほどの荷物をかゝへて出口の端近く誇らしげに立つ顧客のいかに多いことよ。Bは處女らしい羞耻ともどかしさとを以てその人々を羨やみ眺める。けれどもそれらの人の購ひ得たものは不幸にしてBの購はうとするものではない。

Bは厯人波の間に巖の如く立ちすくむ。人々は奇怪な邪魔物に眦を反して、彼女の袖をひきちぎらんばかりに擦過する。百貨店に傭はれた、黒眼鏡の探偵は、こゝに去りもやらぬ空手の美しい顧客に對して、見ぬふりする鋭い瞳を射込む。Bは然しそれらの惡意にも注意せぬほどに命がけなのだが。

事業、劇場、良人と母とへの奉仕、美しい弟、冒險、誘惑、密會、慈悲、徹夜の舞踏、獨身者への接近、活動、若僧、強いて自らを陷れる疾病、而して、而して、而してそれらの凡て、……永遠の處女を讃美するものはこれを見よ。それが咀呪ではないか。苦難ではないか。地獄ではないか。Bは穢れをさへ我がものとして摑まうとする。然しそれさへが彼女の手に乘ると、なまぬるい淸さに早變りするのだ。永遠の處女を讃美するものは、女の本能を冒瀆するものだ。描かれたセンテイメンタリズムを剝ぎ去る勞を惜しみさへしなかつたら、彼れは女が處女から如何にして完全にのがれ出づべきかに悶えてゐるのを發見するだらうから。

然しながら、Bの場合にあつては殊にさうであるとしても、女が處女から完全にのがれ出る道は、なべての女自身が

想像する程そんなに容易なことではない。

而して遂に魔の手の働らく時が來た。Bは有限を目がけて無限に對して矢を放つた。彼女が愛することを知らなかつた時、彼女を愛した異邦の男に對して、心あてに一片の火のやうな戀文を書いた。世界は音を絕える。閑爾として死のやうだ。眼かくしされたBは、發矢と放たれた矢絃の音を聞くと共に、思はず地にひれ伏して、遠鳴りする矢ひゞきに耳傾ける。それのみに心のたけを集める。兎も角も矢は飛ぶ。何所に。萬には空しい空間に、一つにはその人の胸板に。彼女は地にひれ伏して耳傾ける。

B、彼女は私の心に逼つて來る。

闘爭を離れて正義なし

小川未明

これまで私達に、最も感激を與へるやうな事實は、信念によつて行動した人間の歩いて行つた、その路ではなかつたか。即ち、それが正義のためであり、人生のためであつた、闘爭によるからである。

正義といひ、人道と呼ぶものは、畢竟、闘爭を離れて、それを考へることが出來ない。理想に殉じて、多數の衆俗と爭つた事實を他にしてはないからである。强者と弱者の戰は常に階級闘爭であつた。最も勇敢なる階級闘爭の戰士を措いて、私達は、正義について、また人道について考へることが出來ない。

自己の悩みは、即ち自己の屬する階級的の悩みである。自己を桎梏の苦しみから救ふには、階級にまつはる鐵鎖を切斷しなければならない。自分より力の弱い者、または、同じ目的のために、犧牲となつた人々を思ふ時、熱い涙が自から湧くのである。しかし、人生は、この爭闘的精神によつて、淨化されて來た。この至高至烈の感激によつて、良心を鞭打たれ、勇氣付けられることによつて、僅かに奴隷化から脱れて來た。

私達の人生に對して抱く、愛も、正義も、同情も、すべては、肌が破れ、肉が切れて、其處から滴る鮮血の輝きである。

眞の藝術は、この血潮から芽を出した純潔の花でなければならぬ。

空虚な、言葉の上の、愛や、人道を說くことを止めよ。もう誰れもが、その哀れつぽい聲や、女々しいセンチメンタリズムに惑はされはしないだらう。職業的の宗教家や、巷間の藝術家によつて、人道と愛とが、いかに概念化されてしまつたか。そして、享樂階級擁護の務めをしたか。この時、その精神は滅びてしまつた。一種の裝飾となり、趣味となり、實感を失つて、全く墮落してしまつた。

★

この社會に、階級の存在することは、學者によつて、はじめて說明された分類でない。私達が、生活の上に、親しく感じつゝある事實である。所詮は、搾取する者と搾取される者との二つの階級に分たれる。そして、中間の階級といふものが無なつてしまふのである。

★

智識階級といふやうなものが存在し、また職能を果たし、それが許され得たのは、天下泰平の時に於てゞある。

今は、過渡期だ。思想上に、經濟上に、著るしい動搖期である。

★

智識階級の崩潰は近づいた。そして、彼等が、社會運動に對して、肯定か、否定か、其の態度と旗色を鮮明にしなければならなくなつた。階級鬪爭の激浪が上るたびに、中間の淺瀨は浚はれて行く。それは、寧ろ當然である。彼等は、資本家と共に、また勞働者と共に、同じ人間であるからである。人間として生きる上に信條を有しなくてはならない。人間同志が、しかも同じ社會を形造る、同じ責任を有する人間同志が鬪爭する時に、何人も、其のいづれかでないとは、言はれないからだ。舊文化の擁護か、新文化の建設か、舊社會組織の肯定か、新社會組織の否定か、いづれかでな

ければならぬ。彼等の遲疑逡巡を許さない時代が迫りつゝあるのは事實だ。

★

人道主義者や、文化主義者や、また批評家と稱する者は、元來は智識階級にあつた。ちやうど昔時、出家といふ者が、何の階級にも屬せずに超然として、しかも道を說いたことがあつたやうに、中では、其のことを寧ろ智識階級の職能の如くにさへ考へてゐる者がある。

しかし、さういふ人々は、もつと深く考へて見るがいゝ。この社會に、階級の存在する限りは、他の贅言を要しない。正義も、人道も、文明も、事實に於て存在してゐないといふことを考へるがいゝ。

迫害、橫暴、酷使、不平等を痛感する者に於てのみ、ほんたうの憤りがある。勇氣がある。兄弟、姉妹に對して、眞の同情がある。この感激からして、自己犠牲の至誠を致して、なほ階級鬪爭に身自からを委ねる者にこそ、獨り、正義と愛と人道とが存するのを認めることが出來る。

★

無產階級の生活を、生活として、眞に正しとして意識する者にのみ、正義と人道とがある。また藝術的の創造と至高の感激とが存してゐる。

第四階級の人々の前途にのみ、新しい道德と藝術と新しい世界とが拓けるのである。

★

しかし、斯の如く不斷に、熾烈な鬪爭的精神に燃える者は、この社會の多數の、無自覺な衆愚に比較して極めて少ないと言はなければならない。

多數が、即ち、享樂的で、妥協的で、利己的で、無節操である時に、獨り、是等の少數者は、理想のために、其の目的のために、反抗する。飢餓する。流離する。而して、尙は死を賭して運動をつゞけつゝある。しかるに、同じ境遇にあるにかゝはらず、衆愚は、無恥で、欲深かで、怯懦であるために、親義に反いて裏切りする。眞に親しい仲間であるべきを裏切りする。そして、是等の少數者は、あらゆる迫害と痛ましくも禁欲を强いられる。しかもたゞ自己のためといふよりは、同時に仲間のためであつたのである。この社會をより善くしなければ、決して、個人の生活はより善くならないと知るからであつたのである。

思ふに誰でも、同じ人間として生れて來た上は、この社會の文明を共浴すべく、要求する權利を有してゐる。そして、自からを資本主義の機械化から、奴隷的境遇から、あらゆる階級的、人爲的の差別壓迫から救ひ出す自由を有してゐる。勞働は、生產し、創造し、生活を豐富にするための勞働である。故に、勞働は、喜びでなければならない。それを誰が、こんなに苦しいものにしてしまつたのか。それをほんとうに知つたなら、妥協してはならない。奮然眞理のために戰はなくてはならない。

私達が、共同の幸福を得んがためには、また、みんなが互に犧牲的精神を有しなければならない。苦痛に對し、困難に對して忍耐しなければならない。そして、正直で、節操を固守しなければならない。それでなければ、自由、平等の光輝ある世界を創造するには至らない。

たゞ、この社會に、階級の存する限り、其處には、階級闘爭がある。今日、第四階級の擡頭は、必然の結果である。而して終には第四階級の勝利に歸することをも決して、疑はないが、それだけで、止むものではない。私達は因襲の長

きに依つて殆んど本能性たらんとする過去のいろ〳〵の習慣に囚はれてはならぬ。

それについて思ひ出されるのは、何等の深き、對社會の目的や、理想を有するのでなく、趣味のために、ブルジョア等が、文化村を造つたり、もしくは、社交倶樂部の如きものを設けてダンスを習ひ、生活の興味をはかる如きは、畢竟勝手ではあるが、彼等が日常の衣食に必要とするもの、若しくは其等の裝飾品となれるものまで、一つに生産者の手によつて供給されてゐる。其の生産勞働者や、また同じく社會の一員でありながら、生產のために社會の下敷となつてゐる人々が、現在いかなる生活をばなしつゝあるかを彼等は考へたことがあるのか。

其れに對して、何とも感じないといへば、それまでだ。また、かうすることが自分等の勝手だといへば、それまでだ。自己を滿足するためには、その人達のことを顧みる遑がないといへば、やはりそれまでだ。たゞ階級鬪爭の素因が、こんなところにも潜在してゐるといふことを知らなければならぬ。

彼等は、この社會の多數者の身の上に平和も幸福もない時に當たり、獨り、其の村だけに、平和があると考へ得るのか。この社會の多數者の家族が不安に襲はれつゝある時に、自分達だけは、笑つて濟まされると考へ得るのか。

階級鬪爭は、まさに新人が眞に生きんとするために避く能はざる道德的行動である。

——十一年六月十七日——

子と母の雑誌

オヒサマ

童劇童踊號

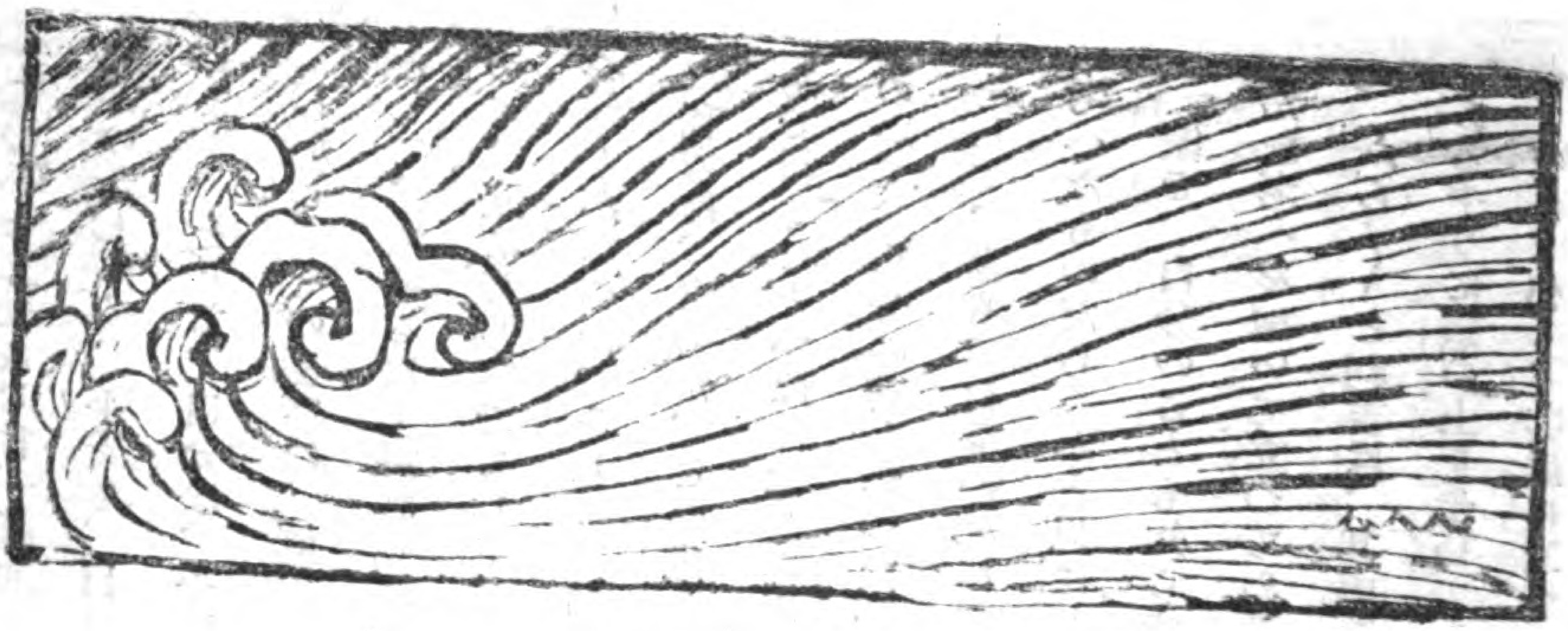
八月號要目

價四十錢　送料一錢五厘

東京銀座資生堂化粧品部編輯


夏の御旅行用品
松坂屋に澤山揃ひました。避暑の旅に
御出かけ前には是非御立寄下さいまし。
確實で廉價で便利でございます。
御旅行先で御入用の品は御葉書一本頂
きますれば迅速にお間に合せ致します。
東京上野
松坂屋いとう呉服店
（振替東京五八〇〇番）

中央公論第卅七年夏季増刊「世界平和と人類愛」號創作



地底へ歩るく

小川未明

どんなに怖しい考へを頭の中に持たうと、それは、道を歩いてゐる他の人々には分らなかつた。利吉は、いま、自分の思つてゐるやうな、暗い、そして怖しいことを思つてゐるやうな人は、かうして、自分の前を歩いてゐる人達の中には、あるまいと思はれた。そのことは、どんなに、自身をさびしく、頼りなく感じさせたか知れない。

たゞ、人間が、かうして當もなく歩いてゐて、食物が見付かるものなら、また自分の力でなされるやうな相當な仕事が、見付かるものなら、自分は、終日街の中をうろついてゐることを厭ひはしないとまで、彼は思つた。それ程、彼は、自分が當もなく首垂れて、物思ひに沈みながら歩きつゞけてゐる姿をみぢめに感じたのである。

彼は、目の前に、なみ〳〵と溢れて、ゆつたりと、また深かさうに流れてゐる河を見下しながら立つてゐた。

「生きてさへゐなければ、何もこんなに苦しい思ひをしなくてもすむのだ」と、さへ思はれた。

このふとした思ひは、瞬間、彼の心を明るくしたのであつた。いつでも決心さへすれば、こんなに執念深くつき纏ふ生活の苦しみも、不安も、自分を何うすることも出來ない。ぷつりと自分の體から、その忌はしい糸が斷ち切られてしまふ。そして、自分は、平和に安らかに、眠りに入ることができると知つたからである。

しかし、その喜びは、眞の喜びではなかつた。次に、頭を擡げて來た空想のために、微塵に碎かれた。このなみ〱として、惜氣もなく溢れるばかりに、水の流れてゐる河の對岸には、大厦高樓が、櫛の齒を並べたやうに、連なり合つて、互に背伸びでもしてるやうに家と家が重なり合つてゐる。その中には料理屋があつた。藝妓家があつた。また待合などがあつた。そして、品物や、金のある家などが澤山あつた。

利吉は、自分が、この誰も人の知らない場所で、睡れるやうに、自分だけが、この濁つた水の底へ、しかも永久に沈んで行くことがほんたうに馬鹿氣たやうに感じたのである。たとへ、自分が、さうして死んでも、後で、誰も大聲で叫めいて、自分の苦しかつた心の中を、何も知らぬ顏で、平氣で、暮らしてゐる世間の奴等に知らしてくれる者もない。そして、誰も、自分の死について何にも言はぬだらう。さう、考へると、なんといふ自分は、馬鹿げた、卑怯のことを考へたものだらうかと思はれた。彼は、かうして、ぼんやりとして、しばらく河淵に佇んでゐた。

家で、自分のことも知らずにゐる、妻と子供の樣子が、ぼんやりと浮んで來た。今頃まさか自分が、こんな處で、こんな考へを抱いて立つてゐるとは、彼女にも考へが付かないだらう。

ふら〱と利吉は、其處を立去つた。二たび、人や、車の通る間を、其等の人達が働いてゐる生活とはさも無關心であるやうに道の上を歩いてゐたが、いつの間にか、鐵橋の上に立つて、欄干に凭れてぢつとしてゐた。

彼は、何も、其處に立つて、あたりの景色を眺めてゐるのでなかつた。どうしたら、金を握ることが出來て、差し迫つ

た苦しみから脱れることができるか。もう一つは、たとへ、しばらくでも、この苦しみを忘れて、頭の中では何も考へないで、其の日を送ることが出來るだらうかと思つてゐたのである。

「ほんたうに、自分は意氣地なしだ。手足がありながら、仕事すらも見付からない。俺みたいな者は、生きてゐても仕様がないのだ。この手や、足が、捥ぎ取られても、それがために金が入つて、何うにか暮らして行ければ、まだ死ぬよりは、俺にとつては仕合せではないだらうか？」

彼は、自分を罵つた。自分を憎んだ。次に、自分が重い物體の下になつて、齒車で、手足を轢かれた後の悲慘な有様を眼に描いた。

凸凹の多い道の上には、昨夜降つた雨の水が處々に溜つてゐる。その中を自動車や俥が走つてゐた。濁つた水は、しばらくの間も落付いて、その面に憂欝な空の景色を映す隙がなかつた。

兩側の軒下には、いろ〳〵な看板がかゝつてゐて、其等は、赤や、青や、黄や、紫の顏をして、あるものは圓形に、あるものは長方形に、根氣よく、往來の光景を眺めてゐた。うね〳〵と曲がり、くねつて、町の中を走つてゐる二筋の軌道の上を電車は醉ぱらひのやうに跳りながら、しやがれた聲を立てたり、また、キイ〳〵鳴りながら走つてゐた。レールの上は、たえず磨かれてゐて、白光りに輝いてゐた。このうす氣味の惡い、神經質な鋼鐵の光りは、濕つた空氣の裡に冷笑ふやうな反射を見せてゐる。その他に、黒い四角張つた野獸のやうな自動車が、盲目的に唸りながら驅けてゐた。

生きる者の力が地上を征服する限り、動くものゝ影が、眼の前から絶えないであらう。街の中は、斯くして、しばしの間も同じ光景をそのまゝには呈してゐなかつた。それは、ちやうど活動寫眞のフイルムが變るやうであつた。けれ

ど、その時、眼を轉じてあちらを見ると、街と街の切れ目に、そこからは遠くの丘が見えたり、また、公園の一部が覗かれたのである。靑々とした木立は、靜かに、空に聳えてゐた。木々の梢には、風があつたけれど、そして、雫を滴らしてゐたけれど、それは、この巷の一切の動亂に較べて、夢のやうに、靜かな、なつかしい景色であつた。

まだ、雨は、降り足らないと見へて、柔かに、汚れた白い毛の塊りのやうな雲が音もなく、街の上を遙かに見下しながら、いつとはなしに流れて行くのであつた。

この時、けたゝましく、電車の運轉手が踏み鳴らした。ベルの音が聞えた。運轉手は、ほんたうに腹立たしまぎれに踏んだのである。(コノ頓馬め、命が惜くはないのか? お前が死ぬのは勝手だが、俺は、お蔭でトンだ馬鹿を見なけれやならぬ。氣を付けろ!)ベルの音は、かう叫んだのである。

無心で、道を歩いてゐた人々は、その方を振り返つて見た。そして、黃色な長い箱の中からは、白い幾つかの顏が、頸を伸ばして前方を見つめてゐた。頭の髮の伸びた、暗い顏付きをし大男が、もう少しで電車に轢かれやうとした。男は、僅かに三四寸の空間のために無難であつた。

男は。それがために、格別驚いたといふ風が見えなかつた。彼は、下を向いて、歩みをつゞけてゐた。そして、絕えず、幽靈のやうに軌道の上に足が喰付いたかと思ふと、また、離れて行つた。電車は、幾たびとなく、彼の影を轢いたか知れない。

嚴かめしい一臺の自動車は、歩いてゐる左右の人々に泥濘の沫きをかけながらやつて來たが、ふら〳〵と傍からよろめき出た男を、もう少しのことで刎ね飛ばさうとした。それは、男が、ほんたうに捨身になつて、不意に太い車輪の下に四つ這いになつたら、間違ひなく自動車は轢いて、男は死を遂げたであらうけれど、刹那、心の中で引き止めたもの

があつて、躊躇したために、もう少しのことで、車體に觸れなかつたのだ。

　この自動車の運轉手は、可なり熟練した技術を有してゐる者と見えて、直に車を止めてしまつた。

「危ぶねえ、なんで、わざ〳〵前へ出やがるんだ！」と、叫んだ。

　その黑光りのする車の內には、ふんぞり返つて、金緣の眼鏡をかけた、肥つた紳士が、びつくりした顏をしてゐた。

　運轉手は、車臺から飛び降りた。

「この野郎、俺の車で自殺する氣だつたな、それとも言ひがかりを付ける氣か？」

　人々は、其の周圍に集つて來た。運轉手は無理やりに、男を連れて、あちらの交番の方へ行つた。やがて運轉手は、其の男を巡査に渡して自動車のところへ戾つて來た。

「この間も子供を轢かさして、金を取つた奴がある位だから、ちつとも油斷がなりやしない」

　誰に言ふとなく、大きな聲で言つて、運轉手は、車臺に飛び乘ると靑い油煙と臭氣を吐き殘して去つてしまつた。其の間、車內の紳士は、河鹿のやうに、眼をぱつちくり、ぱちくりさしてゐた。

　この際、運轉手の言つたことを、集つた人々は聞いた。中では、一種の戰慄をすら感じた者があつた。この都會のある貧民窟では、其の日の生活に困ることから、子供を無理やりに自動車の通る前に突き出して、負傷をさせて、償金にあり付かうとするといふのであつた。そして、こんなことが、一度新聞に書いてあつたと、今更の如く、記憶に呼び出す者もあつた。

　交番に、連れて行かれた男は、やがて引いて行かれることもなく放免された。

「なんで自分から、死にたいと思ふ者があらう」

から誰にも考へられたからだ。そして、巡査にも、さう考へられたからだ。

この男は、利吉であつた。彼は、手や、足が、捥ぎ取られてもいゝから、金がほしいと思つてゐたのであつた。彼はこの異常な心理を實際に感じてゐたのであつた。

彼は、ほんたうに正直であつた。自分の手足を捥いでも生活といふことを眞面目に、正面から考へてゐた。今日のことを、もし彼の友達が聞いたら、何と言つて笑ふだらう。

「世の中といふものは、そんなに狹いものでない。考へ樣であり、また渡り樣である。馬鹿正直にしてゐたら、自分でしまひに頸を括るばかりだ」

利吉には、友達の言ふことが、ほゞ想像されるやうな氣がした。そして、自分を見て友達の笑ふ顏が、はつきりと見えるやうな氣がした。彼は、途方にくれて、せめて友達の智慧でも借りるべく、其の家の方に向つて歩るいて行つたのである。

利吉には、兄と妹があつた。しかし彼等の三人は、村で、他の家の子供等が父母の許で共の時分を樂しく遊びくらしたやうに、いつしよにゐることが出來なかつた。

其の家は貧しかつたのだ。兄は利吉が、まだ物心のつかないうちに旅へ出てしまつた。だから、彼は、その兄の顏をよく記憶してゐなかつた。たゞ思ひ出す時は、夢の中で見たやうに、ぼんやりとした氣がするばかりで、眼や、口付きすらよく分つてゐない。姉は、彼れが七つの時、遠くへ女工に賣られて行つた。

なんでも姉は、きかぬ氣の女であつたから、男の子などとも喧嘩をしたことがあつた。そして、負けてはゐなかつた。ある時、姉は學校から、顏に黑く墨を付けて來たことがある。そして、みんなが姉の顏を見て笑つたことがある。いろ

〳〵思ひ出される中で、それが一番はつきりと利吉の心の目に浮んで來るのであつた。

姉が、女工になつて行つた時は、十二か三であつたと思ふ。その朝自分達の知らない男が迎ひに來た。姉は泣いて、泣いて、父母の傍から離れて行くのを厭だと言つたのである。それを父と、男とが、いろ〳〵になだめて、無理に停車場の方へと連れて行つてしまつた。

それぎり、姉はもう歸つて來なかつた。終日、利吉は、姉のことを思ひ出して涙ぐんでゐた。晝過ぎに、父が一人、しよんぼりとして家へ歸つて來た。

「姉さんは、どうしたかい？」と、利吉は、父にたづねた。

「汽車に乘つて、あつちへ行つてしまつた」と、何となく父は堅くなつて答へて、がつかりとした樣子で其處へ坐つた。

なんでも、その時、細かな雨が窓の外で降つてゐたやうに、彼は、覺えてゐる。

兄も姉もゐなくなつて、家に殘つた利吉は、學校へ行くやうになつた。兄も、姉も、もう見ることさへ出來なかつた。二三度、それから冬が來たり、夏が來たりした。彼が、やつと十一になつた時、こん度は彼に奉公の口がかゝつた。

「どうせ、長く、いつまでも家に置ける譯ではなし、利吉を出すことにしようか」と、父と母とが相談をしてゐた。

利吉は、傍で、その話を聞いてゐた。

「正直に、よく働けや、いんまに金持にもなれるし、どんなに偉い男にもなれる！」

利吉は、この言葉を兩親の口々から聞かされた時、どんなに深く、頭に刻み込まれたらう。學校で、たとへ圖畫や、習字や、算術が出來なくとも、自分は、正直に、よく働くことが出來るだらう。きつと働いて見せる！　主人は私を可

愛がつてくれるにちがひない。自分は出世をする。そして、いつかは、みんなの羨むやうな金持にもなつて見せよう。その時はどんなに、父や、母が、自分の偉くなつたのを見て、驚いて、喜ぶだらう。彼は、子供心に、いろ〳〵と未來のことを空想した。

「私は東京へ行きたい」と、言つて、彼は父母に頼んだ。

利吉が行きたいと言つたので、行つた後は、寂しくなるとは考へながら、彼の兩親は、つひに意を決したのである。

利吉は、いよ〳〵この村から去らなければならない日が近づいた。けれど、彼は、にこ〳〵と喜ばしさうにして遊んでゐた。

「私は、東京へ行くのだ！」彼は、友達にも、また近所の人達にも、知る人の顏を見ると、かう言つて告げた。「まだ年の行かないのに、そんなに遠い處へ、もうやられてしまふのか、旅の苦しみも知らぬ顏に、たゞ賑かないゝ處へでもやられると思つてゐるのだらう。可哀さうなものだ」と、心ある人は思つてゐたのであつた。

しかし、利吉には、小さい胸の裡に希望の火が燃えてゐた。まだ見ない、そして話にだけ聞いた賑かな都會の光景を眼に描いたのである。

「ほんたうに、姉をやる時は、泣いて、泣いて、行くのを厭がつたが。この子は、またこんなに行くことを喜んでゐる、あんなに姉のやうに泣かれては、行つしまつた後でも氣がきでならないが、同じやるのにも、この子のやうだと私共まで氣が勇んで安心をする」と兩親は、互に言ひ合つたり、また他人に對して話をしたりした。

利吉の、つひに旅立つ日が來た。彼の兄が、この家から出て行つた時のやうに、また、姉が泣きながら、幾たびも幾たびも彼女の生れた家の方を振返つて知らぬ男に連れられて行つた時のやうに、彼は、たとへその姉のやうには泣かなかつ

たけれど、やはり家から出て行く時の様子は、哀れであつたのである。

東京に汽車が着いた時は、朝であつた。街には、霧がかゝつてゐた。其の裡に建物や道路が姿を現はしてゐた。車や、人影は、まだ音を立てるのを憚かるやうに動いてゐた。紅い花の蕾のやうな街燈は、霧に濡れて雫は滴りさうに流れてゐた。やがて太陽が雲を破つて上ると、目の前に、高い塔や、洋館や、宏荘な商店が、軒を並べてゐる。人形を見るやうに、綺麗な着物を被た女や、洋服を被た男が急がしさうに歩いてゐる。目のまはるやうに車が行つたり、來たりする。利吉は、はじめて知らぬ世界に、たゞ一人來たことを心細く感じた。そして、自分の生れた靜かな村の景色と、其處で繰りかへされる一日の生活の有様がなつかしく眼に浮んで來たのである。

利吉は、左右を見まはしながら、「自分も辛棒をして、正直によく働いたら、いつかこんなやうな大きな立派な家に入ることが出來るのだらうか？」と、思ひながら歩いた。

彼の眼は、涙で輝いてゐた。悲哀に近い感激が小さな胸を壓したからである。そして、眼の中に映つた。これ等の建物は莊麗といふより、田舍から出て來たばかりの少年にとつては、すべてが威嚇的であつたかも知れぬ。

彼の十年契約で年季奉公をした家は、小僧を三四人も使つてゐる呉服屋であつた。そして、其の町内には同じやうな呉服店が幾軒も並んでゐた。

二三日も經つと、もう彼は、その店先に坐つたのである。國にゐる時、都へ行つたら、いろ／＼な珍らしいものが見られるばかりか、賑かな街を歩くことも、また公園へも、動物園へも、何處へでも行つて見ることが出來ると思つてゐた。そして、動物園には、獅子や虎がゐるといふことである。繪で見てゐたものをほんたうに實物が見られると思つてゐた。しかしそれは夢であつたことを知つた。彼は、都に來てから、既に幾月にもなつたけれど、どこへも自由に行つ

て見ることが出來なかつた。毎日、同じ店の前の往來の上を眺めてゐた。

筋向ひの家と家の間に、かうした町では珍らしく、一本の桐の木が立つてゐた。その木を見るのが、彼にとつて、せめても故郷にゐた頃のいろ〳〵な景色を思ひ出させるよすがとなつた。それが喜びであつた。木は、埃を浴びてゐて、あの青々とした圃で見た木々のやうに活々とはしてゐなかつたけれど、明け暮れ同じ處に立つてゐるのが、――恐らく、この木が枯れる日までかうしてゐなければならない宿命であらう――何うすることもできなく、辛棒強く、忍耐をしてゐることが、ちやうど自分と境遇を同じうするもののやうに思はれて、いつしかこの木に對して、彼は、特別の親しみを感じずにはゐられなかつたのであつた。

ある日、彼は、母親から、こんなやうな手紙を受取つた。

「お前は、まだほんの子供の時分に、兄に別れたのだから、よく兄の顏を覺えてはゐないだらう。そしてそれきり顏を合はしもしないといふのは、なんといふ兄弟仲のうすいことであつたらう。血を分けた間柄だもの、なんでお互に顏を見たくないことがあらうものか、それを察しないのでないが、何しろ遠方ではあり、それに奉公の身ではあり、旅費もかゝることであるから、折角來てくれて、却つて兄を悲しませて、後々までの思ひ出となり、そのことが忘れられないやうになつては、あだであるから、このまゝもう遇はないものとあきらめた方がいゝと思つて知らせなかつた。去年の秋、兄は、體を惡くして旅から歸ると、そのまゝ臥たきりであつた。手をつくしたが、冬を越してもいゝことはなく、花も散つた頃から惡るくなつて死んでしまつた。昨日は形ばかりの葬式をすました……」

と、書いてあつた。

利吉は、手紙を握つたまゝ空間を見つめてゐた。そして、しばらく、ぢつとして、其處から白い顏を探し出して、も

つとはつきりとそれを見ようとつとめた。

しかし、それは空しいことであつた。この時、あちらの家と家との間に立つてゐる桐の木が、うす紫色の花をつけたのが眼に入つた。……彼は、遠く、雨雲の垂れ下つてゐる地平線を心に描いたのである。青々とした大麥の圃がつゞいてゐる。その先きは、遠く煙るやうに、こんもりとした森や、木立が脊伸びをする。行つても、行つても、後からつゞいて盡きない白色の雨雲が音もなく、其等の上を掠めて行く。圃の畦には、梅が青い實を結んでゐる。桐の木が香りのする紫色の花を咲いてゐる。其の傍の細い道をさびしい葬式の列は行くのであつた。

其の次の時は、夏の暑い時分であつた。利吉は、晩方汗を流して、外から歸つて來ると、國許から手紙が着いてゐた。

それは、思ひがけない姉が死んだ知らせであつた。——もう手當のしようがない間際まで姉は工場で働いてゐて、家に歸つてから三日目で死んだ。やはり、兄と同じ病氣であつた——と、其の手紙に書いてあつた。

利吉は、見つめてゐる文字が涙の中に浮き上つて、手がぶる／＼と震ひた。全身に水を浴びるやうな冷たさを覺えた。彼は、其の手紙を握つたまゝ身動きをしなかつた。悲しくて泣くといふよりは、何か分らない忌はしい、腹立たしい、物狂はしい氣がして、たゞ體がぶる／＼と震へてゐるばかりだつた。前の家と家の間に立つてゐる桐の木が、晩方の紅い西の空を、其の梢の下から覗かせて、黒い掌のやうな厚みのある葉で風を叩いてゐる。

彼は、長い月日の間に、三たびも悲しい知らせに接したのであつた。

父親が死んで、彼が、故郷へ歸る途にあつた時である。一夜、汽車の中の暗いランプの下で、まんぢりともせず、もう決して二度とは返つて來ない過去の、世の苦しみを知らず樂しかつた、幼兒の時分の思ひ出を繰り返へしながら、限り

て見ることが出來なかつた。毎日、同じ店の前の往來の上を眺めてゐた。

筋向ひの家と家の間に、かうした町では珍らしく、一本の桐の木が立つてゐた。その木を見るのが、彼にとつて、せめても故鄕にゐた頃のいろ〱な景色を思ひ出させるよすがとなつた。それが喜びであつた。木は、埃を浴びてゐて、あの青々とした圃で見た木々のやうに活々とはしてゐなかつたけれど、明け暮れ同じ處に立つてゐるのが、――恐らく、この木が枯れる日までかうしてゐなければならない宿命であらう――何うすることもできなく、辛棒强く、忍耐をしてゐることが、ちやうど自分と境遇を同じうするものゝやうに思はれて、いつしかこの木に對して、彼は、特別の親しみを感じずにはゐられなかつたのであつた。

ある日、彼は、母親から、こんなやうな手紙を受取つた。

「お前は、まだほんの子供の時分に、兄に別れたのだから、よく兄の顏を覺えてはゐないだらう。そしてそれきり顏を合はしもしないといふのは、なんといふ兄弟仲のうすいことであつたらう。血を分けた間柄だもの、なんでお互に顏を見たくないことがあらうものか、それを察しないのでないが、何しろ遠方ではあり、それに奉公の身ではあり、旅費もかゝることであるから、折角來てくれて、却つて兄を悲しませて、後々までの思ひ出となり、そのことが忘れられないやうになつては、あだであるから、このまゝもう遇はないものとあきらめた方がいゝと思つて知らせなかつた。去年の秋、兄は、脇を惡くして旅から歸ると、そのまゝ臥たきりであつた。手をつくしたが、冬を越してもいゝことはなく、花も散つた頃から惡るくなつて死んでしまつた。昨日は形ばかりの葬式をすました……」

と、書いてあつた。

利吉は、手紙を握つたまゝ空間を見つめてゐた。そして、しばらく、ぢつとして、其處から白い顏を探し出して、も

つとはつきりとそれを見ようとつとめた。

しかし、それは空しいことであつた。この時、あちらの家と家との間に立つてゐる桐の木が、うす紫色の花をつけたのが眼に入つた。……彼は、遠く、雨雲の垂れ下つてゐる地平線を心に描いたのである。靑々とした大麥の圃がつゞいてゐる。その先きは、遠く煙るやうに、こんもりとした森や、木立が脊伸びをする。行つても、行つても、後からつゞいて盡きない白色の雨雲が音もなく、其等の上を掠めて行く。圃の畦には、梅が靑い實を結んでゐる。桐の木が香りのする紫色の花を咲いてゐる。其の傍の細い道をさびしい葬式の列は行くのであつた。

其の次の時は、夏の暑い時分であつた。利吉は、晩方汗を流して、外から歸つて來ると、國許から手紙が着いてゐた。

それは、思ひがけない姉が死んだ知らせであつた。――もう手當のしようがない間際まで姉は工場で働いてゐて、家に歸つてから三日目で死んだ。やはり、兄と同じ病氣であつた――と、其の手紙に書いてあつた。

利吉は、見つめてゐる文字が涙の中に浮き上つて、手がぶる／＼と震ひた。全身に水を浴びるやうな冷たさを覺えた。彼は、其の手紙を握つたまゝ身動きをしなかつた。悲しくて泣くといふよりは、何か分らない忌はしい、腹立たしい、物狂はしい氣がして、たゞ體がぶる／＼と震へてゐるばかりだつた。前の家と家の間に立つてゐる桐の木が、晩方の紅い西の空を、其の梢の下から覗かせて、黑い掌のやうな厚みのある葉で風を叩いてゐる。

彼は、長い月日の間に、三たびも悲しい知らせに接したのであつた。

父親が死んで、彼が、故鄕へ歸る途にあつた時である。一夜、汽車の中の暗いランプの下で、まんぢりともせず、もう決して二度とは返つて來ない過去の、世の苦しみを知らず樂しかつた、幼兒の時分の思ひ出を繰り返へしながら、限り

ない感慨に耽つてゐた。

やがて、ほの〲と夜が明ける頃、汽車は、ある高原を走つてゐた。朝の光りは、窓から暗い疲れた、室の裡に射し込む。室の裡は、空氣が汚れてゐた。みんなは爭ふやうにして窓を開けて、新鮮なひや〲する風を入れやうとする。そして、いまゝで止んでゐた話聲が、そこゝで起りはじめる。昨夜、聲高かで、うるさく耳についた男の聲が、またあちらの隅でしたのである。子供の泣聲がする。それ等は、僅かに車室が、生きた動物の檻だといふ感じを抱かせたのである。しかし、まだ眠りをつゞけてゐる人もあつた。大きな乳房を片方だけ着物の外に出してゐる若い女や、黑い被風を着た、坊主頭の男や、青い顏をした女や、眼鏡をかけた男等は、いづれも其等の顏に、旅の疲れを表はしてゐた。そのうちに、地平線から離れた日の光りは、幾つもの硝子窓に光りの波を打たせたのである。

利吉は、窓から、頭を出して、眠りが不足のために、何となく重苦しく感じたのを、水の流れるやうに吹いてゐる風に當てやうとした。すると、自分と對ひ合つて、腰をかけてゐた十三四の少女が頻りに咳をつゞけてゐるのである。彼は、この少女は、風を引いたのであると思つた。それで、咽喉を傷めてゐるのを、風に當つて、かうして咳をするのであらうと思つたから、頭を窓から引きこめて、硝子窓を閉めたのであつた。そして、はじめて、その少女の顏に注意を向けたのである。

少女は、連れもなくたゞ一人ぎりであつた。彼女も昨夜から、まんぢりともしなかつたやうである。夜の間、體を動かして、獨り冴えた眼で身のまはりを眺めてゐた。小さな風呂敷包を傍に置いて、それに體を凭りかけるやうにしてゐた。頭には、あちらを立つ時に、新しいのと差し換へたのであらう、小さな造花の簪が、さびしく赤い、少ない髮の毛を飾つてゐた。

利吉は、この少女の顔色が、非常によくないのに、はじめて氣付いてびつくりしたのであつた。少女は窓を閉めてからも、咳をつゞけてゐた。時間が、だん／＼と經つて、汽車は進行をつゞけてゐる。少女は、時々、硝子窓に額を押けるやうにして、外の景色を眺めてゐたが、そして、少しも落付かずに、たえず不安を感じてゐるやうな様子に見えた。

「まだ、なか／＼Nへは、着きませんでせうか？」と、やつと決心したものゝやうに、口を開いて、利吉にたづねた。

「Nですか、まだなか／＼ありますよ。お前さんは、Nまで行くのですか？」と、利吉は、話の糸口を見出したので、かうたづねた。そして、昨夜から、一言も、誰にも向つて話をしなかつたので、窮屈を感じてゐた際であつたから。

「Nまで行くのです」

「Nに家があるのですか」

利吉は、まだN町へ行つて見たことがなかつた。けれども、子供の時分から、N町が幾十里か先にあるといふことを聞いてゐた。その町は、みんなに聞こえてゐる程、かなり賑かな町のやうでもあつた。

「いゝえ、妾の家は、Nから、まだ一里ばかり田舍なのです」

「それで、お前さんは、どこか、工場へでも行つてゐたのですか」

利吉は、少女の顔を見ながら問ひかけた。眼ばかり大きく、頬邊の肉は削げて、皮膚の色は黄ばみがかつてゐる。それは、病氣が餘程進んでゐることを思はせたので、彼は、かう言つてたづねる裡にも、强い傷みを胸に感じた。

その少女は、自分の姉には、眼も、鼻も、口のあたりも似てゐると思はれなかつたが、たゞ姉が、あの時はちやうどこの年頃であつたので、この時代の少女に共通な何ものかゞ、同じやうな哀れな姿に見えたのである。彼は、どうしても、この少女を見てゐるうちに、全く知らぬ間柄とは考へられぬやうな親しみを覺えたのであつた。

少女は、さびしさうに、眼許にはゝ笑みながら、

「Kの工場に行つてゐたのですけれど、病氣になつて、もう働けなくなつたから家に歸るのです……」

「どこがわるいの？」

「肋膜が……わるいのです」

利吉は、これを聞くとぞつとした。自分の姉もやはりこんなだつたのだらう。そして、死ぬまで働いて、もう働けなくなつた時に、國へ歸されて、すぐに死んでしまつたのだ。

「いつ、工場へ行つたの？」

「もう、三年目なんです」

「自分から、體が惡いので、歸ると言ひ出したのですか」

「いゝえ、お醫者様が、病氣だから、家へ歸つて癒して來いと言はれました」

「それで、一人で、歸るの？」

「えゝ、停車場に、誰か迎ひに來てゐてくれる筈です」

「兄妹があるの？」

「三人あつて、妾が、一番末なのです」

「家は、何をしてゐるの？」

「百姓をしてゐます」

利吉は、自分の姉も、こんなやうな時があつたのだと思ふと、熱心に、少女の身の上を知らうとした。少女は、聞か

れるまゝに、すなほに答へてゐた。そして、やはり、苦しさうに時々咳入るのであつた。

誰れに、この少女が、二たびこの汽車に乘つて、體が健康となつて、Kの工場に行く日があると考へられやう。彼女は友達に別れて來る時、それが最後の別れであると思つたらうか。利吉の、兄も、姉も、同じ病氣で死んだ。そして、しかもこの少女が、また同じ病氣であると思ふと、やはり助からないのだと考へた。こんなに幼ない年で、死んでしまふ。そして、他の家の娘達が、大きくなつて嫁に行き、家庭を造り、子供を持ち、また母となつてから、お婆さんとなるまでには、まだどんなに多くの樂しいこと、面白いこと、悲しいことを經驗するであらうと考へると、これだけで死んで行つてしまふ、そして、恐らく少女自身では、さうとは考へてゐないのであるが、それを思ふと可哀さうでならないばかりか、彼は同じ運命で死んでしまつた、自分の姉が可哀さうでならなかつた。

利吉は、同時に、不仕合であつた兄のことや、また一生苦勞をし盡して、子供等が大きくなり、一人前となる姿を見ずに死んでしまつた父親のことを考へると、胸が締め付けられるやうに感じたのであつた。

母は、どんなにか心細く、自分の歸るのを待つてゐるだらうと思ふと、窶れた母の姿が眼に見えるやうな氣がした。彼は、幾年目かで故郷に歸るのだけれど、それは、なつかしいといふよりは、不安と苦しみで心はいつぱいであつた。

「この世の中は、なんで私達親子に辛いのだらうか？」

彼は、さう思ひながら、うす曇つた、窓の外の景色を見た。山や、森や、野原が、忽ちにして、見えたかと思ふと後へ流れて行くのであつた。この時、やはり少女の咳き入る聲が、彼の空想を破つてしまつた。

（ほんたうに、苦るしさうだ）と、彼は、その少女を見てゐるうちに、たまらなくいぢらしくなつた。そして、不幸の者は、獨り自分達ばかりでないことを知つた

「蜜柑を食べませんか」と、利吉は、蜜柑を少女に與へた。
少女は、羞かしさうに、それを受取つて、すぐには食べずに、手に持つたまゝ膝の上にのせて、片手にハンケチを口に當てゐた。
彼は、心の中で、この少女を見るのは、これがはじめであつて、また終りとなるであらう。しかし、いつまでも今日のことは自分の頭に刻んで忘れないであらうと思つた。
汽車は、故郷に近づいた。
窓の外は、心に染み込むやうな青い空が低く垂れ下つてゐる。黒い樹影が、點々として地平線に佇立してゐる。海の方は、雲切れがしてゐて、電線が、傾斜勝に走つてゐる。燕が、平野の上を鳴きながら飛び廻はつてゐる。獨り北國で見られる悲しい景色だ。
「體を大事にして、早く癒んなさいね」と、利吉は、降りる用意をしながら、少女をぢつと見詰て言つた。熱い涙が、知らずに眼の底に湧き出て來るのを覺えた。
少女は、さびしさうに、沈み勝ちに笑つて頭を下げた。

正直に、よく働いて、年季が明けた曉には、店を出してもらつて、どうにか暮らして行けるだらうと思つてゐた。利吉は、父親の死んだ時、僅かばかり故郷に歸つたけれど、他は、前後十年の長い月日の間、店のために働いてゐた。
十年の年季が明けると、あと二年を禮奉公につとめたのである。この間に、他の朋輩は辛捧がし切れずに、店を出て行つた。かうして、利吉が一番古くからの番頭であつた。あとはみんな彼よりは年が若く、新たに雇はれて來た者ばか

りであつた。

その時分、やうやく彼は、たとへ、いかに正直に、よく働いても、この世の中は成功するものでないといふことを朧氣に感じたのである。そして、巨萬の富を造り、宏壯な建物の中に生活する人達は、どこか自分等と異つたところがあるのだと云ふ事を知つた。しかし、彼はさう感じたけれど、どうすれば成功するかといふことは分らなかつた。たゞ、正直に、落度なく、よく働いたら、主人は、決して、自分を見殺しにはしないだらうと最後の日まで思つてゐた。

「年季が明けた時には、きつと、どうにかしてやる」と、最初に言つた主人の言葉を深く頼みとしてゐたのであつた。

朋輩のAは、ある時、利吉に向つて、

「お互に行末のことを考へなくちやならないぜ。かうして、織物の名前を覺えたり、品物の善し惡しの見分けがついたりしたつて、結局は古着屋になる位が落ちだと思ふのだ。俺は、今のうちに露店商人になつても、一つ自分の力で働いて見る氣だ」と、言つた。

利吉には、Aが考へてゐる程に、其の時分、まだ考へることが出來なかつた。他人は、どうであらうと自分はこの家に止つてゐやうと思つた。Aは、間もなく、この店から暇を取つてしまつた。

朋輩のBは、利吉より、古くからこの店に來てゐたのであつたけれど、Bは、ある時、利吉に向つて、

「何、年季だけ、つとめたつて、百か、百五十の金をくれるのが關の山だ。そんな端た金をもらつて店が持てるものでありません。私は、なぜ呉服屋などに奉公をしたかと後悔してゐます。私は、十位の時分から、おとなしく、ぢつとしてゐることが出來ない性分でした。野原や、山を驅けめぐるのが好きでした。叔父が土木の請負をやつてゐますが、私を下に使つてやると言つたのを兩親が呉服屋へよこしたのです。毎日、坐つてばかりゐて、往來と睨みくらをしてゐる

だけでは、しまひには、手足がきかなくなつて、病氣になつてしまひます。これからでも、まだおそいことはありませんから、叔父に頼んで、土方にでもなにでもなる氣であります。廣々とした田舍を歩いて、橋を架けたり、堤防を築いたりするのは、どんなに愉快なことでせうか……」

Bは、話しながら大空に飛ぶ雲の影を追うやうな、また遠くに憧がれるやうな眼なざしをして、心の中の希望を語つた。利吉は、この脊の低い、肥つた、頭髮を綺麗に分けてゐる男にもこのやうな考へがあるのかと不思議に思つたのであつた。そして、話を聞いてゐる中に、いつしか自分も、故郷の自然を眼に描いてゐたのであつた。

Bもまた、この店から去つてしまつた。あとに殘つたのは、利吉だけであつたが、彼は、正直に、忠實に働いてゐた。

Aや、Bが、利巧であつたか、それとも自分の信じてゐるのが正しかつたか？　彼は、其後、このことを心の中に幾たびも考へながら、その時の至るのを待つたのであつた。

刹那の現在は、忽ちの間に過ぎ去つてしまつて、歸らない過去となつてしまふやうに、すべての豫期は、また一度は現在となるのである。

利吉が、殆んど十二年の間、待ちに待つた日はやつて來た。それが、いま現在であるが、やがては、また過去になつて行く。忠實に働いたことは、畢竟この日を待つたのに他ならなかつたのである。(決して、主人は、惡いやうにはしてくれないだらう）それが、唯一の彼の頼みであつた。

主人は、その日は、暗い顏付をしてゐた。そして、彼を前に坐らせて言つた。

「よく働いてくれたので、もつと仕様もあるのだが、何しろこの不景氣ではどうすることも出來ない。これでおしまいにするといふ考へではないから、またお前が、世間の景氣でも直つて店を出すやうになつた時は、品物の上で融通をつけることにする。これは、ほんのいまゝでの勤めに對しての志なのだ……」と、突き離すやうに言つて、彼の前に一封の金を差出した。

それが、最後の日の光景であつた。そして、すべてがわかつた。利吉はその渡された金を握つて、誰もゐない處で開いて見た。そして、いつかAが考へなくちやならんと注意したことなどが、一時に頭の中に浮んだのであつた。彼は、まさかと思つたのが、いま事實になつてあらはれた。そして、長い、長い間、賴みとし、また信じてゐた一切が裏切られたのをはじめて知つた。やはり、Aや、Bの言つたことがほんたうだつたのだ。

「正直に、よく働くんだぞ!」かう言つて、自分を戒めた、死んだ父親や、母親が、なんとなく怨めしくなつた。みんな、俺を欺いたのだ。世間も俺を僞はれば、親もまた自分を僞つたのだと思つた。

彼は、最後の日がこんなことにならうとは考へなかつた。十二年の間、自分は、何のために働いて來たのだ! 世の中は、そんなに虛僞で、冷酷で、無情であるのか?

彼は、はじめて眼が覺めたやうな氣持がした。そこで、主人の家を出ると、永久に宿を失つた小犬のやうに、あてもなく町の中を歩いたのであつた

たゞ、主人を憎んだ。世の中を憎んだ。そして、死んだ兩親を怨めしく思つた。

彼は、いま地の中から、兩親を呼び出して、なぜ世間を知らない自分を都に出して長い奉公をさせたか、そして、正直に、よく働けば立派な人間になると言つて僞つたか、それを詰りたかつたのであつた。

彼は、小學校に上つてゐる時分に、ある年のこと、學年試驗が濟んで、その成績が發表された時、隣家の子供が、學校から優等賞をもらつて、彼が何ももらはずに歸つて來たと言つて、彼の母親が、さも嘲けるやうに、隣の子供を褒めて、我が子を卑下したのであるが、彼は、その時、どんなに悲しかつたか。泣いて、訴へるところがなく、いかに孤獨を感じたか。もし、目に見えない、遠いところに、ほんたうのやさしい、父母があるものなら、何處へでも走つて行きたいと思つた。その時分のさびしさが、新しく彼の胸の中に味はれたのである。

半生の頼みが、ついに頼みにならなかつた。彼は、右を見ても、左を見ても、自分と關係のない人達を見たばかりである。彼は、冷淡な社會と、希望を失つた、自身の哀れな姿を見たばかりであつた。

利吉は、夜になるのを待つてゐた。あたりがたくなつた時に、彼の足は、燈火の明るい巷の方へと向つてゐた。其處は、絕えず雜踏してゐた。そして、いろ〳〵の料理屋などが軒を並べてゐるのであつた。

隣の間では、女中が、學生といつしよになつて歌などをうたつてゐた。

利吉の前には、色白な小肥りのおきぬが、二三杯も彼からすゝめられた酒のために、ほんのりと頰を紅くして、厚ぼつたい瞼の下から、うるんだ瞳をうつとりと彼の顏の上に落してゐた。

「去年のお盆だつたね、活動を見て、歸りに此店へ寄つて、夕飯を食べやうとすると、お前さんが、ちやうど私の番に當つて出たんだ。どうも見たことのあるやうな顏だと思つたが、どこで見たのか考へが付かなかつた。そして、いろ〳〵考へると、もう七八年も前に、まだお前さんが、やつと十三か十四の時に、主人の家へ來て……あれで半年もゐたことがあつた。おきぬさんだ。さう思つたから、人違ひでないか？ と聞いて見ると、やはりおきぬさんだつたのだ」

と、利吉は、いつになく顔を熱てらして言つた。
「妾は、全く忘れつちやつたの、さう言はれると何んだか、見覺えのあるやうな、ないやうな氣がしましたのよ。ほんたうにあの時分は辛かつたわね。まだ、子供なんですもの、率公は、はじめてだし、それに毎日、山のやうに澤山の洗濯物を出されるのでせう。その辛かつたことだけをいまでも忘れずに覺えてゐるわ」と、彼女は、其の當時を思ひ出すやうに言つた。
「ほんたうに、俺は、あすこにゐる間、眞面目に働いたものだ。一夜だつて、店を留守にしたことはなかつた」
「どうだか、あてになりはしないわ」
「あの時、はじめて、おきぬさんに遇つてから、それはたび〳〵店をあけるやうになつたけれど、それまでは何處へも出やしなかつた」
　二人は、同じ主人の家にゐた時分のことを思ひ出して話した。
「それで、あんたは、こんどおかみさんをお貰ひなさるのでせう」と、彼女は、煙草の煙を吹かしたがら聞いた。
「今夜、その話で來たのさ。お前さんも、親や兄妹はないときいてゐた。俺も、全く獨りぼつちなのだ。考へるとさびしくて仕樣がない。それで、いつかおきぬさんに、しつこく言ひ寄つた男があるといふことだが、その方の話はどうなつたのかね？　俺は、おきぬさんぎりしか、他に可愛がるやうな女はゐないのだ。おきぬさん、厭でなかつたら、わしといつしよに世帯を持つてはくれないかね」と、利吉は、いつの間にか、正しく坐り直して、眞面目になつて言つたのであつた。
　女は、默つて、しばらく俯向いてゐた。

それも、今から顧りみると、すでに昔になつてゐる。二人が、かうしていつしよになつて、それから三人の小供が產れた。その中の一人は生後四月ばかりで死んでしまつた。

互に世の中に賴りのない二人が、いつしよになつて、力を合せて何かやらうとしたけれど、意氣込みばかりでは駄目であつた。貧乏の二人は、何をしようとしても金がないのですることができなかつたのである。そのうちに、二人は、早くも生活に疲れてしまつた。

子供が二人にもなつてからは、夫婦喧嘩をしない日はなかつたのであつた。男は、女を憎んだ。女は、男を意氣地がないといつて呪つた。しかし、貧乏が、二人を敵視さしたことをば知らなかつたのである。もし、金さへあつたら、二人は、仲よく暮らすことが出來たであらう。

おきぬは、三十に近い年增であつたけれど、まだ、どこかに男を引き付ける艶つぽいところが殘つてゐた。利吉は、いつまでも一定の職にあり付かず、ある時は、見習ひの廣告取りや、勸誘員などになつて、出歩いてゐた。その留守を、おきぬは、棟つゞきの隣の家などに入り込んで、其家の女房などとぺちやくちや話をしてゐた。

「おきぬちやんなど、それほどの器量があるのだから、もつと樂な暮らしができたんですわね」と、隣の女房が、おきぬを煽動するやうに言つた。

「妾、いくらでも苦勞をするけれど、今のやうぢやほんたうにつまらないの。全く、あの人は意氣地がないんでせう。子供があるし、心細くなるわ。少しお金が入れば、すぐにお酒を飲んでしまふし。先達ても、昔、妾を贔負にしてくれてた客に、途中で出遇つたのよ。どうしてゐるかと聞かれて恥かしかつたわ」

「まあ、さうでしたの」と、女房は、わざと魂消たやうな顏付をして見せて、もつと、深く、その話について探らうと

した。

「その人は、隨分うるさく、妾に、いつしよになつてくれいと言つたことがあつたの。だつて、その人には、その時分、おかみさんがあつたのでせう。いま離緣をして、獨りでゐるといふけど。妾に、是非遊びに來てくれいと言つてゐました」

「まあ、そんなら商賣をしてゐる方なの？」

「いゝえ、自轉車屋ですの、それは、ごく親切な人ですのよ」

「手に職のあるのが、一番たしかで、氣丈夫ですのね。で、その方の家は、こゝから遠くですの」と、女房は、かう言つて、おきぬの顏色を讀まふとした。

「いゝえ、そんなに遠いこともないのですけれど、遊びに來いたつて、行かれはしませんわ、子供があるんですもの、ねえ」と、おきぬは答へながら起ちかけた。

正午の太陽は、雨上りのした後の長屋の路次を暑さうに照してゐた。

利吉は、この日、ちやうど手や、足が、一本位無くなつても、纏つた金がもうかることなら、いまの苦境から、自分達は救はれるだらうと思つて、金持の乘つてゐさうな自動車をめがけて、幾たびか、ふら〳〵と其の車輪に觸れやうとしたのであつた。しかし、流石に命が惜しかつたものか、或は、たま〳〵乘つてゐる運轉手が熟練してゐたものか、そのたびに失敗して、罵られたり、交番に突き出されたりした。

彼は、この日舊友のAを訪ねた。そして半日話をして、幾何かの金を借りて日暮方その家から出たが、直には我が家へは歸らずに、ある裏通りの酒場に入つて、泡盛の盃をあげてゐたのである。

「なあ、兄弟この世間には、嘘付きばかしだなあ。俺達みていに、まつとにやつてゐた日にや損ばかりするぜ。かうして酒を飲んでゐる時だけが極樂なんだ。雨にでも打たれて醉ひが醒めれや全く地獄だ。兄弟、さうぢやねえか」

印半纏を着てゐる年とつた勞働者が、汚れた顏を利吉の方に向けて話かけた。眼の中は赤黄色く濁つて、頬から口にかけて短かい毛が、白毛混りに生いてゐた。其の男には、相手が誰でもよかつたのだ。利吉が、たゞ笑つてゐると、勞働者は、張合抜けがしたやうに、前の壁を睨んで、獨り頭を傾けたり、皺の寄つた手で顏を撫でまはしたりして、ぶつ〳〵とつぶやいてゐた。

利吉は、何とも口に出して言はなかつたが、此處にも親しい友達を見出し得たやうな氣持がして、彼は、いつになく酒がうまかつたのであつた。この時、彼の眼には、Aの顏が浮んだ。それが消えると先刻ぢつと見詰て立つてゐた川の流れが浮んだ。しまひには、何もかもみんな河水の中に卷き込まれて、自分もひとつに、其等のものと共に、あてもなく流れてゐるやうな氣持がした。前に、しやべりながら酒を飲んでゐる勞動者も、また他の者も、壁も、あちらにかゝてゐるビラも、この家も、何もかもみんなふわ〳〵と漂つて、しかも愉快さうに、あてもなく流れてゐるやうな氣持がした。――空腹に飲んだせいもあらうが、彼は、腰の起たないまでに泡盛に醉つてしまつたのである。

家の外は暗かつた。かすかに雲間から星の光りが地上に射してゐた。生温かな、濕つぽい風が空を吹いてゐた。

彼の、肉體は、殆んど知覺のない程、また綿のやうに疲れてゐたけれど、頭の中には、一筋の光る針金のやうに、神經が目を覺ましてぴく〳〵と戰いてゐるのを感じた。彼は兩手で頭を抱へた。前に掛けてゐる勞働者のぶつ〳〵といふ聲が、もう彼の耳には入らなかつたのだ。

彼の心の目には、妻のおきぬが、あの男と對ひ合つて話をしてゐる姿が浮んだ。彼女は金歯を露き出して笑ふ。男

は、女のやうな猫撫で聲で彼女の歡心を買はうとしてゐる。さうかと思ふと、また忽ち光景は變つて、彼女は、冷淡な顏付きとなる。そして、利吉が疲れて、外から入つて來るのを、いまゝで火の氣のない長火鉢の傍で、つくねんとして思案をしてゐたが、ながし目で見て、彼が、坐ると、「妾と子供は、何うかして暮らして行きますわ、あんた、先達て、朝鮮へ行けば口があるといつてゐたが、あとのことは構はんで行つたら何う……」

「生意氣な、女の腕で、ど、どうして暮らして行くつもりだ」

「房州の叔母に、二人の子供を賴んで、そして、妾は、ひとりになつて働きますわ」

利吉は、頭がガン、ガンと痛んで、眼が暈つてゐた。何か考へるだけでも彼に、重苦しい懊惱を感じさせた。

酒場の扉を押して、暗い外に彼は轉げ出るやうに出た。しばらく、何處に立つてゐるのだか、方向も、場處も分らなく、途惑ひをしてゐた。そして、たゞ足の向く方に歩いてゐたが、不意に泥濘の前に、ばたりと倒れた。起ち上らなければならない、そして、足に力を入れて歩いて行かうといふ意志はあつても、どうしても腰が自由にはならなかつた。

(これだから、泡盛を飲むんぢやなかつたのだ)

彼は、頭で思つたどうしても眼を開けてはゐられなかつた。彼は、兩手を地面に突いたまゝ眼を閉ぢてゐた。すると地面から傳はる冷たさで快い氣持がした。やがて、眠氣が全身を痺びらせる。其處が何處であつてもいゝ、またどんな處であつてもいゝ。彼はこの愉快には換へられなかつた。そして、このまゝでぐつすりと眠入らうかと考へた。

それは、ほんの瞬間であつたけれど、その間に彼は夢を見た。そして、たいへんに長いこと、眠つたやうな氣持がした。その間、誰も、この道を通らなかつたらうか？　彼は、眼を開いた。暗い地の上には、きら〳〵と水が、片側の街から洩れる軒燈の火に照らされて光つてゐる。それは濁つた泥濘の水であつたけれど、譬へやうもない程美しいものに

見えた。彼は、岸邊に立つて、滔々として流れてゐる河の面をいまでも見てゐるやうな氣持がしたのである。

忽ち、彼の顔に、太陽よりも眩ばゆい光りを受けたのを感じた。次に獸物の吼えるやうな叫びを聞き、重い物體が地響きをたてゝ來るのを感じた。彼は、いま自分は轢殺されるのだ――ずつと以前のやうに記憶するが、自分から轢かれやうとして、やり損つたことがある。こんどは、あちらから否應なしに轢殺すのだ――彼は、恐怖のために、身を悶えた。そして、どうかして、避けやうとした。けれど、氣だけが焦せるばかりであつて、體は、地に付いたまゝ動かされなかつた。彼は、せめてこゝに人間が倒れてゐることを運轉手に知らせるために大きな聲を上げようとした。しかしそのことすら、思つたばかりで、舌が硬ばつて聲が出なかつた、その間に、彼は、頭のあたりに熱氣を感じた。轢かれた！と心は叫んだ。同時に、心臟は氷つたやうに冷たく縮んだが。そして、神經は、體の何處かに痛みを起したところをさがしたが――この時程、自身の體が大きいものに思はれたことはなかつた。頭から、足の先までが殆んど幾里もあるやうに――別に異狀がなかつた。彼は、頭から三四寸ばかり先きの泥濘に、突然深い溝が出來て、その窪みへ、水が光りながら、何遍渦を卷いて注ぎ込むのを見た。車輪の跡だ！

その時は、自動車は、もう遠ざかつてしまつて、彼方に、つゞけさまに警笛を鳴らしてゐるのを聞いた。

彼は、また眼を閉ぢた。しかし、醉は全くさめてゐる。そして、眼の前に、彼が久しぶりで今日訪ねて行つた、友達の顔がはつきりと映つた。Aは、親切に言ふたのである。

「それがいけない時は、また、考へるよ。どうにかして食つて行けるだらう。いま話した二軒が、毎月廣告を出してくれさへすれや助かるからね。その方は、私が、何とか骨を折つて見よう。廣告なんかは、取り方一つだよ」

利吉は、彼の言つたことを二たび耳許で聞いてゐるやうに、はつきりと思ひ出したが、また、眼を閉ぢて、顔を地面

に摺り付けた。地は濕氣を含んでゐた。風は折々溜息のやうに吹いて、雲は亂れてゐる。

大抵の露店は、片附けて去つてしまつた後も、刄物を賣る店だけが出てゐて、男が、つくねんとして路傍に坐つてゐた。カンテラの火は、ちら／＼と赤く、細く蛇の走るやうに、光る刄物の尖に搖れてゐた。利吉は其の前に立つて、出刄庖丁や、匕首や、小刀や、いろ／＼のものを眺めてゐる。其等のどの一つでも人を殺す兇器に役立たないものはなかつた。

頭をめぐらせば、都會の體全部を闇が擁つてゐた。そして、其の裏通りや、路次は、一際闇の色が深くなつて、さながら深い傷口のやうに見られたのだつた。路の兩側には、狹い、小さい家がぎつしりと建込んでゐる。其等の家々の戸はみんな閉つてゐる。內部の火影だけが、かすかに戸の隙間から洩れるばかりで寂然としてゐる。しかし、その內部にはどんな怖しい事件が起りつゝあるか？ 嫉妬、口論、擲り合ひ、忌はしい人間の鬪爭と罪惡が、行はれてゐるところもある。しかし、誰れにも分らない。今は、夜だ。明日、太陽が上つた時に、周圍は騷ぐだらう。新聞は、それを報告するのだと思つた。彼は、女の亂れた黑髮を眼に描いた。また裸體の男女を想像した。すると血は熱して來た。自分の妻は、いま頃何をしてゐるだらう？ 偶々、自分が其の場處を見付けたなら、默つてゐない。たゞ一突きだ！ 彼は、眼の前にあつた、切味の好さうな匕首を手に取り上げて、それに糸のやうな血が筋となつて、滴たり、垂れる光景をあり／＼と眼に見たのである。

「これは、いくらだ」と、利吉は、問ふた。

「一兩二分、それなら切味は、請合です」

利吉は、何と思つたか、その匕首を下に置くと、其儘、店の前を離れたのであつた。

少し先には、銀行の軒下に、痩せて、眼の落窪んだ口髭のある賣卜者が、やはり路の上にテーブルを据えて、こちれに向つて立つてゐる。

利吉は、不意に、自身の運命を占つてもらうといふ氣が起つた。

(さうだ、この易者は、たゞ者ではなささうだ) 彼は、頭髮の長い、眼の光りの凄い、男の前に近付いた。

易者は、うなづきながら利吉の賴みを聞いてゐたが、やがて、彼に年齡をたづねた。それから、易者は、卦を置いた。

「迷つちやいけない。私の言つたことが、當るか當らないか、それはお前さんの心に問ふて見れば分ることだ――お前さんは、いま生活に困つてゐなさる。正直で、約束はよく守り、人に對しては親切だ。涙深くもあるけれど、人は、其のやうに、自分に對して善くしてはくれない。早い話が、お前さんの親方だ。お前さんは、其の親方のために、隨分長い間忠實に働きなさつた。他の者は、其の親方に、早くみきりを付けた。そして、それがため、却つて今では成功をしてゐる。それだのに、お前さんは、いま途方に暮れてゐる。今日や、明日の生活にも困つてゐるといふやうな有樣だ。で、お前さんには、女房がありますか? ある! さうだらう……ちやんと卦に現はれてゐる。子供がありますか! ある! さうだらう……それも、ちやんと卦にあらはれてゐる。女房だけなら、容易に手が切れるけれど、子供があるために惱んでゐる形だ。お前さんには、其の女と手を切るだけの勇氣がない譯ではない。決して、無理に、いつまでもいつしように居たいと思つてゐない。しかし、其の女とお前さんは、戀仲であつたゞけに未練がある。前は、面

白く、互に樂しかつたけれど、この頃では、少しも面白くない。それも金がないのが原因だ。女は、お前さんを意氣地なしだと考へてゐる。たゞこゝに、お前さんの心を苦しめるのは、子供まで出來た間柄でありながら、女は、金のあるもつとやさしくしてくれる男の所へ變心しかゝつてゐるといふ疑惑だ。今、女には、內々心に思つてゐる男がある。さう卦には、あり〳〵と出てゐる。

「實に、危險だ。お前さんの身の上は、實に危險な運勢である。お前さんは、人殺しをやりかねない意志を持つてゐなさる。險難破滅の相がある。相手を憎いと思つて殺せば、自分の身もいつしよに殺すことになる。大事を前に控へて、輕々に身を處す危險は、このことだ。――まあ、大概こんなものだが、もつと、委はしく、いろ〳〵なこと知がりたければ、私の宅へお出なさい。處はこゝに書いてあるから、名刺を差上げて置きます――」易者は、落窪んだ眼を光らして、にた〳〵と笑つた。齒が缺けてゐると見えて、口の中が、空洞のやうに暗く、齒が見えなかつた。

利吉は、不思議なことに出遇つたものだと思つた。

ふら〳〵と彼は、其の易者の前を離れたが、もらつた名刺を財布の中に收めた。この時、銀行の角を曲つた路次の端に、印半纏を着た勞働者らしい風をした男が立つてゐて、利吉が近づくと、彼の耳に聞えるやうに、

「あんな奴の言ふことを眞に請けては駄目だ。あの易者は、贋造紙幣の嫌疑で牢屋へ行つて來たんだ……」と、ぢつと賣卜者の方を見ながら言つた。

利吉は、ぞつとした。そして、いつたいこの勞働者は、何者だらう？　どうしてそのことを知つてゐるかと怪しんだ。彼は、路次を曲つて、廣い通りからあちらへ遠ざかつて行つた。

（あの易者は、兎に角不思議だ。俺の胸の裡をすつかり見拔いてゐる。今迄、二三度、易も、運勢も見てもらつたことが

あるが、あんなことを言つた者には、一人も出合はさなかつた。あの男は、少し夢のやうで、自分の言ふことばかり言つて、俺の言ふことは、よく耳に入らない樣子だつたが、あの眼は、俺の腸まで見拔いたやうだ。ほんとうに怖しい男だ。あの易者は、紙幣贋造の嫌疑で、牢屋へ行つて來たと、勞働者風の男が言つてゐたが、……さうだらうか？……あれ程、人の腹の中がよく分るのだから、賣卜者などせずに、何か、もつと大きな仕事が出來さうなものだ。俺は、なんだか、あの貧乏臭いが、眼の鋭い、怖しい男を、なつかしいやうな氣がする）

利吉は、とぼ／＼と自分の家の方へ歩いて來た。空には、星の影が、遠く、霞んでゐる。

利吉は、呉服店の小僧であつた時分から、ひとつに暮らして知り合つてゐたAが、親切にも力になつてやると言つたのを忘れたのでない。けれど、彼は、心に傷みを感じながらいまは、Aを訪ねるのでなく、まばゆい、日光の照り付ける往來を首垂れて歩いてゐた。彼は、なんだかあの易者に引付けられたやうに感じた。そして、昨夜もらつた名刺を握つて、其の男の住んでゐる家を訪ねやうとしたのである。

道すがら、彼は、何を頭の中に思ひ出してゐたか？　其れは、朝のこと、自身が目撃した光景であつた。

カラ、コロ、カラ、コロと音がしたので、彼は、窓を開けて、外を見ると、青く晴れた空の下で、子供等が、小さな自轉車に乘つて、狹い往來の上を行つたり、來たりしてゐる。みんな、この近所の五歲か、六歲までの子供等であつた。

夏のさはやかな風に吹かれて、道端に立つてゐる櫻の木の葉が、愉快さうに、その靑い空で、はた、はたと鳴つてゐ

た。子供等は帽子を振つたり、小さな手を擧げたりして、カラ、コロ、カラ、コロと車を走らしてゐた。

その自轉車は、あちらの二階家に住んでゐる子供のものであつて、その子供が乘り廻はしてゐるのを、この近所の長屋の子供等がまはりについていつしよに驅けてゐるのであつた。ちやうど、自分までが、その自轉車に乘つてゐるやうに、車の廻はるのを見て喜んでゐた。

「誰か、うしろにお乘りよ」と、車に乘つてゐる子供が言つた。すると、傍の子供等は、我先にと乘せてもらはうとして爭つた。そして、一人が後方の心捧の上に乘つて、腰かけてゐる子供の肩につかまつた。やがて、車は、二人の子供を乘せて走つた。後に、乘せてもらつてゐる子供は、絶えず自轉車を持つてゐる子供の機嫌を損はないやうにしようとした。そして、少しでも長く、乘せてもらはうと思ふやうに、しやべりつゞけてゐる。

利吉は、我が子が、遠慮勝で、こんな場合にも人を押し退けて、自分が乘らうとする男氣がなくいつまでも、いつまでも車の後について走つてゐるいぢらしい姿を見た。

「こんどは、僕に乘せておくれね」と、自分の子供が言つてゐるのである。其の聲が利吉の耳に聞えた。さながら、氣兼ねをするやうに、そして、哀訴するやうに、其の聲は震へてゐた。利吉は、自からが子供であつた時分のことを追想して、

(俺も、こんなやうに弱蟲であつたらうか?)と考へた。

他の子供等が、我が子の哀訴を耳にも入いれずに、喚めいたり。笑つたりして驅けてゐるのを利吉は見た。

「ねえ、こんどは、僕に乘せておくれね」

また、さう言つて自分の子供が訴へてゐる。聞かれもしない願ひを繰り返してゐるのをきくと、利吉は、見てゐるに

忍びなくなつてつひに障子を閉めたのである。

其れは、たとへ子供のことゝはいひながら、見てゐても齒痒ゆく、また腹立たしい事實であつた。しかし、利吉は、自身がこの世間に對して意氣地のないことを省みると、子供を叱る氣にはなれなかつたのであつた。

（どうせ、俺の子だもの）

彼は、頭を上げて、溜息を洩した。

地の底にまで、浸み込むやうな強い日の光りを受けながら、すべての物が輝いてゐた。この明るい世界の中を、人の影や、車の影が、小さく忙がしさうに黒く動いてゐた。

利吉は、ある横町を曲がつた。そして、易の看板のかゝつてゐる家を探がした。ぢきに其の家は分つた。入口の障子が開くと、奥の狹い一間が見えた。其處に例の眼の落ち窪んだ易者がいままで汚れた洋服を着た青年と話してゐたと見える。易者は、利吉の顔を見るとよく覺えてゐて、

「さあ、お上んなさい」と、齒の缺けた空洞のやうな暗い口を開けて、笑ひながら言つた。

利吉は、框を上つて、黒く、破れた、疊の上に坐つて、易者を見た。こゝでは、少しも易者らしい態度はなかつたが、しかし、鋭い、光る眼の印象には變りがなかつた。易者は、彼を見ながら、

「あなたは、きつと私のところへ訪ねて來なさると思つてゐました。そして、こゝへ來なさるからには、いつ身の上に好運が向いて來るだらうか、いつ一家の内が平和になつて、愉快に、衣食の心配なしに日が送られるだらうかと、それを聞きたいと思つてゐなさるのにちがひない。好運？　平和？　そんなものが、この社會に、ありやう筈がない。ますます〳〵みんなは貧乏し、窮迫して、どうすることもできなくなるばかりです。あなたの顔を見れば、はつきりと相に現は

れてゐる。ハハ……。（易者は、兩方の頬に皺を寄せて、暗い空洞のやうな、口を開けて笑ふ。口のまはりに生えた髭が、手入れをしないので、赤ちやけて縺れてゐる）

「ほんたうに、お前さんは正直者だ。泥棒もできないし、掏摸にもなれない。さらばといつて、路の上に、大金の落ちてゐる筈もなからうし。ハハ……。

「考へて見なさるがいゝ。生れてから、いままで生きただけ、もうこれから生きるとしたら、お爺さんになつてしまふ。いままでの生活と、これからの生活と考へて見たつて別に變りのあらう筈がない。みんなは血眼になつて、少しでも自分が得をすればいゝと焦つてゐるのだ。どこの隅を探かしたつて、そんな儲け口のあるわけがない。金が天からでも降つて來ない限りは、好運なんかといふことを考へるのは間違つてゐる。金が澤山ほしけれや惡いことをするのだ。それでなけれや、この世の中の建て直しをやるのだ……」

利吉は、成程と思つた。いままで、自分が、寶探がしでもしてゐるやうな氣持でゐたことが恥かしくなつた。眼に、冷酷であつた主人の顔が浮んだ。金のために、自分に情なく當つてゐる妻の顔が浮んだ。

「ほんたうに、金のために苦勞をしますが、金がなくても樂に暮らして行けるやうな世の中になれるものでせうか」と、利吉は言つた。

「だから、この社會を改造するのだ」と、傍にこの時まで默つてゐた青年が口を挾んだ。

易者は、冷かに、利吉の思案する顔を眺めてゐた。

「君は、自分さへいゝ暮らしをして、幸福であれば、それでいゝとは考へないだらう。もし、それでいゝと考へるなら、君がこの場合困つてゐたつて、仕方がないとも言へることになるのだ」と、青年は、言つた。

利吉には、よく靑年の言ふことが理解されなかつた。そして、腹の中で、この靑年は何ういふやうな人間だらうと、其の職業を見分けることに惑つてゐた。

「いや、かういふんです。——自分だけが好運を望んではいけない。誰が、困るのも同じことだから、みんなが好運であるやうにしなければならぬといふのです。そして、みんなの力でやりさへすれば、なんだつて出來ないことは、一つもない。正直に働いて食へない筈がないのだから、正しい世の中に造り改へさへすればいゝ。みんなが幸福に暮らして行けるのだ。幸福は、天から降つては來ないのです」と、易者が言つた。

利吉は、びつくりしたやうに、顏を上げて易者を見た。

「やはり正直に働けば、いゝんですか?」

彼は、死んだ、兩親の言つた、言葉を思ひ出したのである。その言葉は、彼にとつてなつかしい言葉であつた。また、怨めしい言葉であつた。彼は、正直によく其れを守つて働いたであらう。そして、その言葉が、噓だといふことを知つた。彼は、曾てどんなに兩親が、自分に敎へた言葉を思ひ出して怨んだであらう。

「私は、正直に働いて貧乏をしたのです」と、利吉は、顏を赤くした。

「それは、不思議なことでない」と、易者が、言つた。

「どういふ譯で?」

「正直に、働かない者があるからだ」と、靑年が叫んだ。

「ある人達が正直に働いて、ある人達はそれをいゝことにして、其等の人達を欺いて、遊んでゐて、樂をしようとするからなのだ」と、易者が言つた。

「成程」と、利吉は、思つた。

「ぢや、世の中の造り改へといふのは、みんなが正直に、よく働くことなんですね」と、利吉は、たづねた。

二人は、すぐには、それに對して、何とも返答をしなかつたが、やゝ、しばらくしてから、

「まあ、さうなんだ」と、易者は、うなづいた。

「自覺してゐるのは、苦しんでゐる人達だけだ。たゞ、其の人達の結束があるばかりだ」

青年は、かう言つた。並んで歩くと利吉よりは、ずつと青年の脊が低かつた。そして、瘦せてゐる。けれど元氣で、熱してゐた。靑年は顏を半分隱すやうに、帽子を目深かに被つて、あたりに、注意を怠らずに話をつゞけて歩いてゐた。

利吉は、默つて、靑年の言ふことに耳を傾けてゐる。充分に、飮み込めないところがあるけれど、其の一語、一語は、彼の今迄眠つてゐる精神を覺醒した。そして、急に、力强い希望を感ずると同時に、この世界までが明るくなつて見えるやうな氣持を覺えた。

「僕は、この都會を駛る、××も××も××も一時に×めて、××も××も××も×つて、僕達の力で××を××の如くして見せる日のことを考へる。血が熱して堪らない。すべては、それからだ。新社會が產れるだらう！　お互に忍耐しようよ。金や、女が何になるんだ。僕達は、どこへ行つても、理想を捨てないことだ……」

「君も、時々、あの易者のところに行つて見たまへ。また、いつか遇はう」

青年は、言ひ終ると、輕く會釋して、ふいとある路次の間に入つた。さう思ふと、もぅ姿は見えなくなつた。

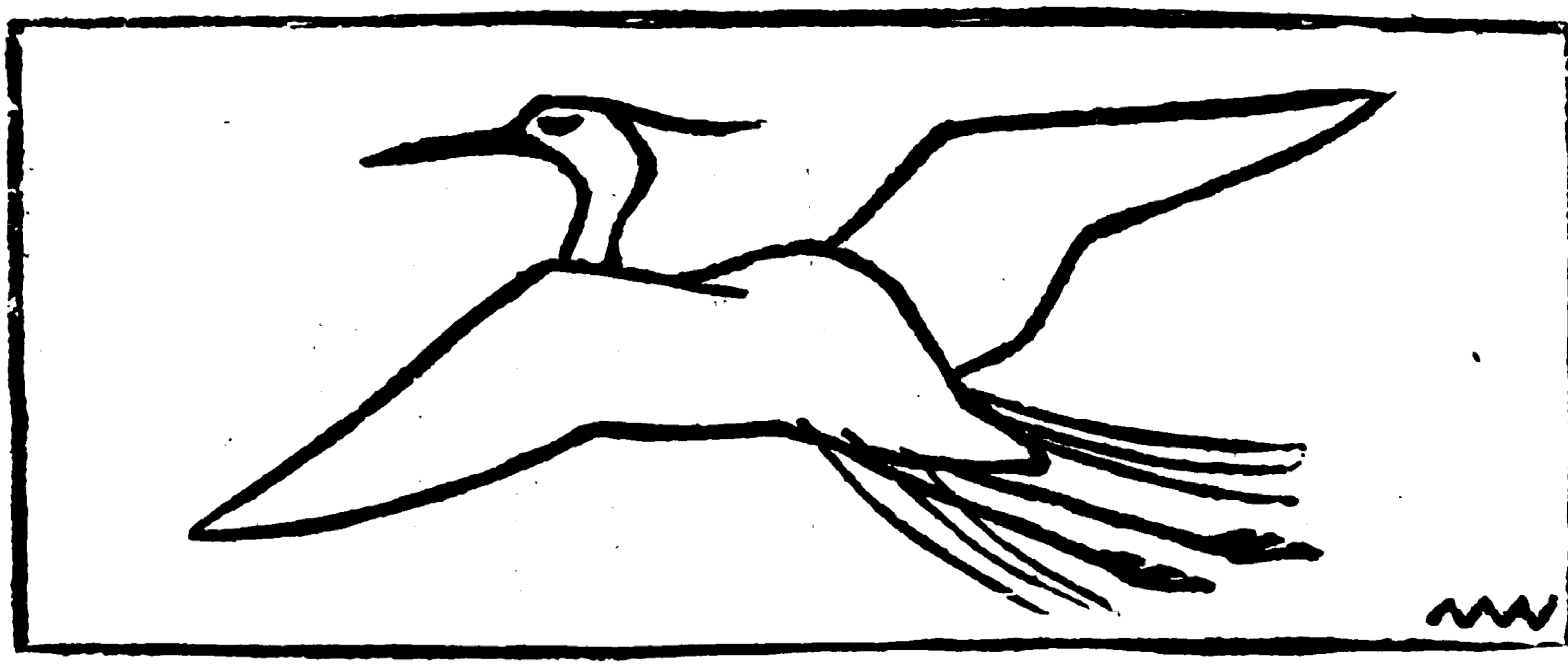
利吉は、新しい世界と、人とを見たやうな氣持がした。しかし、其の人から受けた感激も、世界も、だん／＼と歩いてゐるうちに消えてしまつた。そして、彼は、たゞ一人、日暮方の路上に殘されたのであつた。

彼は、重い足どりで、首垂れ勝ちに歩いてゐた。暗い、底知れない地の下へ向つて歩くやうに、不機嫌な妻の顏やいぢらしい子供の顏などが、眼先に浮んだ。

（いつそ、彼女の言ふやうにしよぅか？　そして、俺も、獨りになつて、もつと考へよぅか）

彼の胸には、限りない哀愁が、波の如く打ち寄せて來た。街の中は、人や、車が、黄昏の光りの中に蟻の散る如くうごめいてゐた。頭の上の空は、奥深く、冷たい色をたゞえて青黑く見えたけれど、西の方の地平線は、血の流れた傷口のやうに入日の跡が爛れてゐた。

──一九二二、五作──



慾と慾

正宗白鳥

先日、日比谷の圖書館の東京市史料展覽會で、江戸の地圖を見た。太田道灌以來次第にこの大都會が膨脹し充實して來た經路が、時代順で揭げられた十數枚の地圖の上に暗示されてゐた。ことに、一目瞭然として私の心に映つて、舊幕時代の世相について感じさゝれたのは、江戸の土地が、本丸とか西丸とか名付けられてゐる將軍の住宅を中心として、殆んど全部が有名な幕臣や諸國の大名によつて占領されてゐたことであつた。江戸ッ子であることを光榮として自慢してゐた幾十萬か幾百萬かの人達は、江戸の圖面のどの邊に住んでゐたのであらう。私は、落語などに出て來る、口先ばかり達者なお長屋の老若男女を思出した。

江戸の地圖を見て昔の市民の生活を考へてゐるうちに、私はふと自分が今住んでゐる大磯に思及んだ。大磯の地圖を描いたら、昔の江戸の地圖に似た者になるのではなからうか。御本丸に擬してもいゝI男爵の別莊を中心として、土地の大部分は、他郷の富豪の邸宅として用ひられてゐるのである。小磯から二宮にいたる一里あまりの海

岸は、すべての松林をも取入れた宏大な別莊の幾つかによつて遮られてゐる。昔の江戸ツ子は大名が諸方の田舍から持つて來て播き散らす金によつて、日常の生活を立て、あるひは宵越しの金は遣はぬなどゝ氣取つてゐたが、大磯の住民も、多くは御別莊の餘澤を蒙つて生活してゐるので、土着の者で大邸宅を構へてゐるのは極めて尠い。

「土地を大部分他鄕の者に取られて、自分だちは小さくなつて暮してゐるのだから、別莊へ賣付ける物品をボレるだけボルのも無理はない。濡手で粟のうまい儲けをして、贅澤な別莊なんぞ建てて、好きなことをして遊んでゐながら、高の知れた魚屋八百屋の不當利得を攻擊するのは蟲がよ過ぎる。」と、私は現今の思潮にかぶれたやうな考へを起して、土地の商人の肩を持つ氣にもなつたが、私の家までも富豪の別莊並みに扱はれて、高い物を賣付けられると、いゝ氣持はしなかつた。

「御別莊の方」として、周圍の人々に上べだけでも奉られるのが擽つたかつた。

「お宅の裏の海岸通りは、二十年ほど前には大臣街と云はれてゐました。大隈さんに伊藤さんに山縣さんに柴山中將なんかの別莊が並んでゐました。陸奥外務大臣も日淸戰爭後に此處で病氣の保養をして居られたのです。その時分の大磯は、今よりも却つて活氣がありました。海水開きの日には、東京からいろ〳〵な藝人が來て、賑やかな餘興があつて、近在から大勢の見物人が來るといふ有樣でした。」と、近所の老人が私に話したことがあつた。……その頃から、官人や富人の威光と金力の前に膝を屈して利益を得ようとする習慣が、他の都鄙の人間よりも一層はげしくこの地の多くの人々の心に浸込んだらしい。

昔の街道筋であつた私の家の門のあたりには、御維新前には、掛茶屋が並んでゐて、そこから海が見下されたさうであつた。

しかし、今は街道筋から海までの間に一二丁の距離が出來て、その間に堂々たる別莊が建てられてゐる。昔の竹籔や草むらが刈取られて、その跡が住宅地として意外な價格を有つやうになつた。大磯の將來の發展を見込んだ横濱や東京の商人によつて、早くから買占められた所はあつても、眼前の小利に齷齪してゐる土地の者は、地價の騰貴によつて大きな利益を得ることはなかつたと、私は近所の老人からいろ〳〵な實例を聞かされたこともあつたが、しかし、町の小地主も時世につれて、多少は利益のおこぼれに惠まれてゐるには違ひなかつた。

私の住宅の敷地だつて、數十年前までは、雜草のみ生へてゐた不毛の地であつたのが、今では坪七十圓とか八十圓とかに値付けられる程になつてゐるさうだ。私はふとした機勢で家だけは買つたのであつたが、敷地は買ふ資力がなかつたし、たとへ金があつても買ふ氣は更になかつた。昨年の六月のはじめ、家屋買入れの話が纒つた時に、前の持主であつたこの土地一流の旅館××の主人は、かういふ取引については無經驗な私に向つて、いろ〳〵な事を好意をもつて敎へて與れたが、「子孫に傳へるのではなし、家や地所は自分の者であらうと、借物であらうと、どちらでもいゝ。明日の日買つた家が潰れやうとも構はない。それだけの金は棄てたものとして家を買ふのだ」と、はじめから思つてゐた私は、他人の注意を身を入れては聞かなかつた。

たつた百坪あまりの敷地が、隣家の鳥屋の大村と、昔は可成りの資産があつた土地の舊家である戸田と、二人の所有になつてゐた。戸田は貸金の擔保か何かになつてゐたのを、どうかして自分の物にして、それに鳥屋の地所の一部を借りて、二十年ほど前にこの家を建てたのであつた。

「戸田といふのはなか〳〵六ケ敷男です。地代だつて法外な事を云ふのを、それではあなたにお氣の毒だと思つて、私がたび〳〵足を遊んでやうやくこれだけに負けさせたのです。隨分難題を云つて人を困らせるので、一時は町内の交際

が絶えてゐたさうですよ。しかし、あなたの方は地所の貸借を三ケ年契約といふことにしときましたから、その間は地代を上げられる心配はない譯です。あなたがお飽きになつて家をお賣りになるとか、地所の事で將來面倒なことが出來たら、私どもが御相談に預かりませう。私どもがこの土地を引上げるやうでしたら、××といふ男にでもお賴みなさい。あの男はさういふことには馴れてゐるし、人間が着實ですから信用出來ます」

旅館の主人父子は、海の見える應接室で、私に向つてさういふ話をした。庭の砂地には、松葉牡丹が可憐な花をつけてゐた。私は、父子に案内されて、庭へ下りたり、空いてゐる二階の廣間を見たりした。

私の買つた家は、永らく空いてゐたのであつたが、旅館の持家だつたのだから、庭の手入れも掃除も行屆いてゐて、居を定めるのに煩はしい手數を掛けないで濟んだ。私だちは障子を開放して、勢ひのいゝ綠葉を眺め、爽かな汐風に吹かれながら、旅館の主人が氣を利かせて贈つて呉れた料理を食べて、快く最初の一日を過した。浴槽はあるし、電燈は部屋毎に點いてゐるし、東京で小さな借家にのみ住んでゐた私だちは、急に上流階級に立身したやうな氣がした。

「これだけの家を綺麗にして住通すことは出來ない。今に荒らしてしまふんだね」と、私は云つてゐた。

地主の一人である戸田は、契約書を持つて、卵の手土産まで持つて挨拶に來て、打解けた世間話をした。「××館は平井さんの代になつてから宿料が非常に高くなつたので、お客が減りました。あの人も宿屋稼業にはいや氣が差してゐるやうですから、早晩他人へ讓ることになりませう。私は平井さんによく云つてゐるのですが、東京の料理屋なみにされちやお客が堪りませんよ。一晩飮んで騷いで七圓十圓取られるのは、何とも思はない人でも、五日とか十日とかの滯在にさうひどく取られちやかなひませんからね。停車場なぞで客が苦情を云つてるのを、私はよく聞きました。しかし、この頃は平井さんも氣がついて、やり方を大分變へたやうです」と云つたりした。

私だちは、臺所や浴室などの修繕をした。東京の倉庫に預けて置いた嵩張つた荷物をも取寄せた。何時まで此處に住めるのやら分らないが、交友も無く家族も少い者の永い田舍生活は淋しくつて退屈でたまらないだらうと察せられたので、ふと思付いて早速鷄を飼ふことにした。地主の一人である鳥屋の老人に賴むと、自分の店の賣物を仕入れに近村へ行つた次手に、相當なのを四五羽買つて來て與れた。そして、鷄のあつかひ方を一とほり敎へて與れた。

鳥屋の老爺は朴訥で感じのいゝ人だ。若い主婦は氣性がしつかりしてゐて中々の働き者らしい。家の者がみんな揃つて稼業に身を入れてゐて、外の家のやうに上べを飾らうとする輕薄なところがちつとも見えないと、私だちは、をり〳〵耳目に觸れたことによつて、隣の地主の家庭について好意のある批判を下してゐた。

梅雨の時節にも土用前後にも、例年より雨が多くて涼しかつた。涼しい海風に吹かれながら、午睡をしたり讀書をしたり、文章を書いたりして夏を過すのは、都會の暑くるしい部屋で机に向つて頭を惱ましてゐた時分に比べて、私は幸福を得てゐる譯なのだが、一夏を過さぬ間に、私は大磯といふ土地にいゝ加減飽いて來た。「此處に來ても借家住ひをしてゐればよかつた。おれなんぞが自分の家を持つのは厄介者を脊負つてるやうなものだ」と、時々感じては口にも出した。

たまに訪ねて來た人に、「結構なお住ひですね」と褒められたり、「今時このくらゐな手丈夫な家は安く建ちません」と、建築の說明を聞かされたりすると、私も一種の所有慾の滿足を覺えて得意になるのであつたが、それはその時きりの事で、衣服に對する慾望がないと同じく、住居に對する私の執着は極めて薄かつた。

近年殆んど會つたこともない弟の畫家が、二度目の佛蘭西行の別れを告げるためか、子供を連れて一日遊びに來て、外國の話などして歸つたが、その時、「洋行もさう面倒なことはない。船にさへ乗れば、マルセーユへ着いた時に、僕が

迎へに出る」と云つて、歸り際に、「この家を賣つて西洋へ行つたらいゝぢやないか」と、笑ひ〳〵云つてゐた。

家を貰つて小さく收つてゐるよりは、その金で洋行でもした方がいゝくらゐなことは、私もよく知つてゐる。洋行でなくつても、日本内地の旅行でもいゝ、餘分の金があれば、家を買ふよりも、先づ書物を買つた方がいゝ。あるひは藝者遊びをしてもいい、美食をあさつてもいゝと私は思つてゐる。目に映る女の脚體(したい)の肥瘠(ひせき)や鼻目の高低清濁は多少心に掛るのであるが、家の天井や床柱が、檜であらうと松の木であらうとも、それは、自分の着てゐる衣服が、本場の大島であらうとまがひ物であらうとも氣にならない如く、氣にならないのである。

「たまに東京へ行くと、自分が田舍者になつたのに氣がつきますよ。やはり東京住ひがいゝんですね」と、妻も感じてゐた。

「おれも東京の言葉を次第に忘れてくるやうな氣がする。」

ことに東京の若い女の言葉がよく分らなくなつたやうに、近年の私は感じて、老いの迫つた淋しさを覺えてゐるのであつた。

「ここを貸別莊にして、私だちは東京で暮すことにしたらいゝんですね」

「何だかそれも臆劫(おつくう)だな」

身體の弱い私は、健康のためには海邊にゐるのがいゝのだから、大磯生活の價値をせめてそこに求めてゐた。

夏が過ぎると海岸も淋しくなつた。秋雨の靜かに降る夜などに、机に向つて波の音でも聞いてゐると、絕海の孤島に獨りで住んでゐるやうな氣がした。たまに東京へ行つても、知友を訪問することがないので、ますます世間が遠くなつた。

庭に柿の實が熟して蔦の葉も紅くなつた。鷄は大きくなつてよく卵を生んだが、その生活を見てゐると、牝と牡との間の愛情や嫉妬の現はれが、人間社會の有樣とよく似てゐた。そして、私の目には、汚くても、植物よりは動物の生活の方が面白く見られた。大磯の美しい山海を眺めるよりも、却つて近所の貧富それ〲の生活を垣間見る方が面白かつた。

私だちは町内なみに門松を立てゝ、大磯で新年を迎へた。

一月のある日、妻は垣根の壞れを自分で工夫して繕ろつてゐたが、ふと不穩な顔して家へ入つて來て、「鳥屋の老爺さんが今いやなことを云ふんです」と、私に云つた。

私が訊返すと、妻は昂奮して事情を話した。

先つき彼女が修繕をしてゐると、隣家の子供が、「お隣りでは垣根を直してるよ」と叫んだが、すると間もなく、老人が庭へ入つて來て、

「垣根のお手入れをなさるのなら、その時に次手に私の家の羽目板を直させて頂きたいのです」と云つて、老人は垣根を搖動かしながら、「竹がこんなに腐つてるのですから、取拂つて新規におこしらへになつた方がよろしいでせう」と云つた。

隣家は私の家の垣根に密接してゐるので、垣根を取拂はなければ、朽ちてゐる羽目板の修繕は出來ないのであつたが、しかし、そのために此方の垣根の修繕に差圖がましい口出しをするのは、妻の耳には不快に響いた。

「私どもでは、犬の入らないやうにさへして置けばよろしいのです。この邊をみんな新しくつくり直すのは大變ですから」と、妻が答へると、

「私どもの地所は戸田さんの地所との境界線がハツキリしませんので、人樣にお貸しするかどうか、家の若い者もまだ

考へてゐるやうです。……さあどう極りますか」と、冷笑するやうなデビリッシュな目を向けた。

妻は棒か何かで胸を打たれたやうな氣がした。戸田とは貸借の契約書を取りかはしてゐるのであるが、隣の鳥屋の領分については、××館の主人も事もなげに云つてゐたので、この地主の人柄を信じて面倒な契約書のことなどは話にも持出さなかつたのであつた。で、まるきり法律の智識のない妻は、鳥屋の老人の言葉によつて一圖に不安を感じて、浮つかりした口は利けなくつて、垣根の繕ろいをも一先づ控へた。

「それで此處を立退いて呉れとでも云ふのかい」私も、妻の話を聞くと意外に感じてさう云つた。

「この敷地は××館と私だちとで勝手に讓渡しをしたので、地主は私だちに貸すとも貸さぬとも云つたのぢやないといふやうな口吻なのです」

「そんな筈はない。××館が隣りへも一通り話はしてくれてる筈だし、第一、一年分の地代をおれの方から拂つてるぢやないか。それに、役場への屆けにも鳥屋は印形を押してる」

「契約書のないのに附込んで、地代でも上げようといふ腹た

「だつて今の地代でさへ、法外に高いんだから」

私は地所や家屋の貸借關係について、時折人から聞いてゐることをいろ〳〵思出したが、法律には極めて暗いので、今の借地について問題が起つた時にどういふ態度を取つていゝか、明瞭な決斷はつきかねた。で、

「そのうち東京へ行つた時に、辯護士に聞くことにしよう」と云つて、私はまだ急ぐ必要はないと思つてゐたが、妻は神經を惱して、早く事を極めて、地主に契約書を書かさなければ、一日も安んじてこの家にゐられないやうに云つて騷いだ。

「どうせこの家は無駄な者と思つて買つたのだからいゝぢやないか。若しも隣りの地主から立退きを請求されて、法律上拒むことが出來なかつたら、戸田の地所の方にだけ住むことにして、半分は壊せばいゝ。大工の淸吉に、無代でやるから壊して持つて行けと云つたら、喜んで持つて行くだらう」

私はそれでもいゝと心から思つてゐた。私も無慾な人間ではないので、時としてはさま〴〵な物慾について烈しい惱みを感ずるのであつたが、この家については少しも執着はなかつたし、ことにこんな家のために、地主などに自分の心を苦められるのはいやだつたので、最後の破壊を覺悟して置けば氣樂だと思つたのであつた。

しかし、妻は氣輕に放任してはゐられなかつた。夫の冷淡な態度を腑甲斐なくも手頼りなくも思つて、屢々昂奮した口を利いた。そして、毎日のやうに隣りへ足を運んで契約書を求めた。移轉當時に私だちが隣家の人々に對して寄せてゐた好感は全く覆されて、狡智に富んだ油斷のならない人々のやうに見做されだした。先方の言ふ事が話すたびに變るので、信用は置けなくなつた。

そのうち一度だけ私も隣家を訪ねて行つた。若主人は裏で働いてゐて出て來なかつたので、老人に會つて話を仕掛けた。老人は百姓業で汚れた手を拭き〳〵、煙たさうな顏して挨拶して、上框に腰を掛けて、

「私どもでは決してお貸しゝないと申すのでは御座いません。境界線さへ極まれば、十年でも二十年でもお貸しゝませう。あなた樣の御存じないことですが、何年も前から、戸田さんと私どもとの地所の境がハッキリしとりませんので、戸田さんに極めて貰ふやうに賴んであるのですが、あの人は何とか理窟をつけちや逃げて仕方がありません。此間も途中で會つてその話をすると、今家が建つてゐるのに、あの宅地へ入つて行つて境界爭ひをするのは、住まつてる人に氣の毒だから、もつと先のことに伸して置かうと申すので御座いますよ。一年先二年先きと伸すうちに、私も取る歳です

から、極まりのつかないうちに死ないとも限りませんが、それでは安心して息を引取ることが出來ません。御先祖から殘された大切な土地ですから、私の目の黑い中にどうしても境界線をハッキリさせたいと思つてゐるので御座います」
と云つたが、それは嘘ではないらしかつた。
「それなら、私の方では床板を取つて測量されても構ひませんから、戸田さんにさう云つて、今のまゝで境を極めたらどうです」
「ぢや、お爺さんさうさせて頂いたらいゝぢやないかね」と、側にゐた若い主婦が橫から言葉を挿んだ。
「あなた樣の方から戸田さんに話して頂いて極りがつけば結構なんで御座いますが、私どもではあなた樣が御都合でお立退きになれば、更地になつたところで界を極めようかとも申して居ります」
「しかし、私の方では直ぐに立退くつもりで家を買つたのぢやありませんよ。手で提げて何處かへ持つて行く譯には行かないんですからね。全體あなたの方で此處を更地にするつもりだつたのなら、私が家を買ふ前にさう云つて下さればいゝのに」
「××館へはだびさう申したことが御座いますから、あなた樣のお耳にも入つてゐることゝ思ひまして」
「だつて、役場へ屆ける時にもあなたが印形を押したり、地代も文句なしに取つたぢやありませんか」
「おれの印形を誰れが捺した?」と、老人は傍を顧みて叫んだ。
「何を云んだね。家には老爺さんの印形の外には印形はないぢやないか」と、若い主婦は叱るやうに云つた。
「ぢや、あなたは早晩私の家を立退かせようと云ふんですか。」と、私が詰ると
「いゝえ、決して地所をお貸しゝないと申すのぢや御座いません」と、老人は慌てゝ打消して、境界線のことをくど〱

と云つた。

頭腦の明晰でない老人の愚痴話も、要點だけは次第に私に分つて來た。祖先傳來といつても、昔は三文の價値もなかつた猫の額ほどに狹い不毛の土地も時世の力で幾らかの價値を生じて來たので、外には財産らしい財産を有つてゐない老人は、この土地を無上の寶と見做して、子々孫々へ傳へようと思つてゐるのであつた。そして、一度何氣なく戸田へ貸したために、境界を亂されて、戸田が此方の地所をも次第に我物顏に言觸らしてゐるのが氣になつてならないのであつた。

「××館の話では、券面よりも實坪が少さうだといふことですから、私の方でも一度測つて見ませう」

私はさう云つて歸つた。妻は尙隣家へ足を運んでゐたが、ある日は、戸田の家へ自分で行つて隣家のために地所の境界を極めるやうに賴んでやつた。生憎主人は不在であつた。「歸り次第此方からお伺ひします」と、家の者は云つたが、何日立つても戸田は顏を見せなかつた。

「隣家では、戸田さんを憚つて强い事が云へないので、私だちをお先棒に使つて、この機會に境界線を極めようとしてゐるんですよ。私だちを脅かしとけば、私だちが無理にも戸田さんに賴んで境を極めるだらうと思つてゐるんです」

と、妻もやうやく隣りの魂膽を氣づいたやうに云つた。

「だから放とけばいゝんだよ。戸田はおれの方から賴んだつて、自分の損の行くことに出張つて來りやしないさ」

「裁判に掛ければいゝんだが資力がないためにそれが出來ないつて、隣りでは口惜しがつてるんですよ。可愛さうも可愛さうだけど」

「お前が氣にしてたびく〵下手に出て契約書を賴みに行つたものだから、隣りではおれだちを與みし易いと思つてるん

だよ。可愛さうだなんて思つてるとます／＼附込まれるぜ」

私は面倒くさいから、東京へ行つた時でも、辯護士を訪ねはしなかつたが、ある日土地の知人が私の家へ寄つた時に、地所の問題を話すと、

「あなた方はお人がいゝ」と、その人は笑つて、「×町の橋の側の志村といふ床屋は、持主が家屋附で地所を東京の人に賣つたので立退を請求されてるのですが、此處で賣込んでる店が他所へ移れるものかつて、てんで取上げません。建物を無代でやつた上に二百圓も立退料を出さうと云つても動かないさうです。借家の立退きさへさう手易くは行かない有樣なのでさ。私は法律をよく心得てゐる譯ぢやないが、法律上から云つても借地人が地主に對してさうビク／＼する必要は御座いますまい。全體からいふ事は此方から足をお運びにならないで、相手に足を運ばせるやうになすつた方がよろしいんですよ」

世間馴れた知人は、借地に關係した慣例や實例をいろ／＼話して、私たちに力をつけて、「奥さん、世間はあなたのお考へになつてるやうぢやありませんよ」と云つて笑つた。

妻はやうやく安心して、その後は隣りの閾は跨がなかつた。が、參考のために敷地の實測はして置かうと思立つて、測地ではこの人と認められてゐる町役場の役人の瀬川に依頼することにした。

「鳥屋でも境界線の事を愚圖々々云つて、一度よく地坪を測つて與れと賴まれてゐるんですが、煩いので延し／＼してゐるんです」と、瀬川は私だちの依頼を承知した上で云つた。彼れは隣りの大村とは緣續きになつてゐるのであつた。

四五日後に瀬川は約束通り測量器を持つてやつて來て、私の家と隣家との敷地を測つた。隣りの老人は熱心に手傳つた。測つた結果を圖面に描いて持つて來て、瀬川は説明したが、それによると、二人の地主から私が借りてゐる敷地は

契約面よりも十坪以上も不足してゐた。

「役場の繪圖面でもこの邊はハッキリしてゐません」と云つて、瀬川は、證據になる者がないから、兩家の地所の境界を正確に定める手懸りがないが、常識で判斷すれば、鳥屋の言分が正しいらしいと云つたが、それは、私だちの耳には身內贔負のやうにも思はれた。

「地主同士の爭ひは別として、私の方では、十坪でも餘計な地代を拂はせられるのは迷惑ですね」と、私が云ふと、

「しかし、戶田さんは實坪があつても無くても、契約の券面だけの地代を取らなければ承知しますまい」

「みんなが僅かな事にも慾を張合ふんだから面白いですね」

些細な金だが、借りてもゐない地代までも支拂ふのは忌々しいから、實坪以外の地代は渡すまいと、私だちは略々態度を決めてゐた。

隣りではたびく額を鳩めて評議を凝したらしかつた。瀬川を煩はして屢々戶田へも掛合つたらしかつた。

「鳥屋では二坪や三坪は減らしてもいゝから、境を極めて呉れと折れて出たのですが、戶田さんでは、自分は券面だけの土地を持つてゐるんだからつて讓步しないのです。券面通りの地坪を戶田さんが取るとすると、お宅の敷地からはみ出して隣りの家の根太までも境が切込んで來るので、そんな無茶な理窟はないと云つても、あの人は承知しないんです。强いて境の杭を打ちたけりや、根太の所に打つがいゝ。家は立退かなくつても、おれの方で地代を取つて貸してやらうといふ言草なんですからね。元々戶田さんが隣りの地所の一部分を借りて自分の地所に補足して、この家を建てたのに、あの人の地所が隣りの根太までも喰ひ込んでる譯はないぢやありませんか」

瀬川はある夜私の家を訪ねて來て話した。そして、「隣りの老爺は、今後お宅の地代を取らないで置いたら、自然お立

退きになるだらうと云つてゐますから、そんなことはいけない、契約書は書いたらよからうと私がよく言聞かせて置きました。しかし、坪數は今まで通りで増減なしにして契約して頂きたいんです。」

「界が極らん限りは仕方がないでせうね」

兩方の地主が互ひに讓らないために、私は世の中に存在しない十餘坪といふ地所に對して地代を拂はなければならぬのであらうか。その事を深く考へて見ると、金錢の損失は別として、神秘不可思議な感じがした。この家が建つてゐる限り永久に、空虛な地所に對して代價を拂ふことを考へると、人間社會の事が不思議なものに思はれた。また、たとへ私がこの家を取拂つたにしたところで、十坪の地所が何處からか湧いて出る譯ではなし、二人の地主の爭ひは何時までも續かなければなるまい。裁判所で何かの方法によつて二人の境を極めたにしても、不足の地所についての不平は二人の地主の頭から、あるひはどちらか一人の頭から消え去ることはあるまい。

隣りの老人は、戸田に強く楯突く力もないし、私だちは取合はなくなるし、諦めはつきかねるので、傍目にもいた〳〵しいほど失望の色が顏に現はれだした。獨り合點の事をブツ〳〵云つて傍の話など耳に留めないやうになつてゐた。

「役場の力でどうかして呉れ、極りをつけて呉れなければお前を怨むと云ふんですが、私だつて困ります」と、瀨川は云つてゐた。

さうしてゐるうちに、春が來て春が去つた。家を買つて以來一年の歳月が殆んど過ぎんとしてゐる。前の持主であつた××館の主人は、去年の暮れに旅館を他人に讓つて東京へ歸つたのであつたが、私と同年くらゐな若主人が急病で死んだことを、春のある日の新聞で私は知つた。一人子に逝かれた老主人について私は考へた。それから間もなく、立退きを請求されても立退かないで頑張つてゐると噂されてゐた床屋の主人が、これも急病で死んださうである。床屋に

は、東京へ行つてゐた弟が歸つて來て稼業を繼けてゐたが、「大磯は詰らない」と人にこぼしてゐるのが、ある日散步に行つた私の耳に入つた。

初夏のある日、戸田の老主人は珍らしく私の家を訪ねて來た。

「もつと早くお伺ひする筈でしたが、地所の話がゴタついてゐる時にお伺ひしちや、私が此方へ惡い智慧をつけに來たやうに、鳥屋に誤解されて、却つて此方へ御迷惑を掛けやしないかと思つて、差控へてゐました」と云つて、地所の問題について自分の辯解をした。この人にはこの人相當の尤もらしい言分があつた。しかし、私は「三尺向うへ入つて」とか「何の木の根方からどうなつて」といふやうな話には興味がないので、身を入れては聞かないで、空々しい受答へをしてゐた。

「なにゝ立退かなくつてよう御座んすよ。借地人には地上權といふものがありますからね。あなたの前だが、お宅ではこの土地に御自分の地所がおありなさるのではないから、この家の持つて行きどころがないぢやありませんか」などゝ、戸田は私だちに好意のあるやうな話をつゞけた。

「瀨川にも云つたことですが、總坪數が足らなければ、按分比例で損をし合ふぢやないかつてね」と、ふと云つたので、私はそれなら話が分つてゐると思つて、

「それが當然かも知れませんね」と云つた。

私だちは乾燥無味な地所の話には疲れてゐた。そして、契約書などはどうでもいゝと思ふやうになつてゐた。

妻は期限前に次年度の地代を收めに戸田の家へ行つたが、先夜の話の按分比例といふのは、十坪不足の分を鳥屋と戸田とが按分比例で地代を減ずることかと思つて、そのつもりで計算して地代を持出すと、戸田は、

「それは可けません。あなたの思違ひです」と云つて聞入れなかつた。鳥屋が現在住んでゐる敷地までも入れて按分比例にするといふ意味なので、しかもその比例問題は地主同志が土地分割の方法だけで、地代の増減には關係ないのださうだ。

私には意味がよく分らない。兎に角、總坪數の足らないことは二人の地主にも認められてゐるのに、借りてゐる者は、世の中に存在しない地所のために果はされなければならない。私どもは兎に角支拂ひは中止して考へた。

「お隣りの老爺さんは、今垣根の外で會つた時に見ると、ボンヤリしてゐる」と、妻は同情したやうな口調で云つた。「去年來た時よりも歳を取つてるよ。あの人も地所を持つたゝめに苦勞するんだね。これつばかりの地所のために」

しかしそれは嗤へなかつた。



憂鬱の家

宮島資夫

一昔ほど前まで漢法醫の病院だつたと云ふその家は、表てから一目見たゞけでも、妙に古ぼけた陰氣臭い影を、寂れた町の角に漂はせてゐた。壊れかゝつた玄關の格子は、いつも斜つかけに傾いてゐて、中には脂じみた薄汚い下駄ばかりが、無暗にだらしなく散らばつてゐた。雨に朽ちて所々穴のあいた軒の廂には、時代遲れな石油の軒燈が、晝はその四角い大きな姿を間抜けらしく日に曝し、夜はぼやけたような弱い光で足場の惡い溝板の上を僅かに照らしてゐるのであつた。横手の方の家の周りは杉の垣根で圍はれてゐたが、それもたゞ垣根と云ふのは名ばかりで、下枝の枯れた骨のような杉の木が、ひよろ〳〵と立ち並んでゐる間を、ぼろ〳〵に腐つた黑い竹が、漸く横につながつてゐると云ふだけである。それだから表てを通る人々の眼には、便所の傍にある物置小舍の中に、古樽だとか古下駄とか云ふものが、いぎたなく押し込んであることも、破れた障子の中の方で、營養不良らしい顔をした子供達が跳ね廻つて遊んでゐるのをでも、たゞ一目に透して見えるのであつた。

が然し、もしどんな人でもその玄關から一足中へ踏み込んで見たならば、表ての汚さや陰氣さ位のものでなく、更に一層陰慘な重苦しい空氣が漲つてゐるのに氣が附くに違ひない。昔は煎薬の匂が籠つてゐた、小さく分けた部屋部屋に今は色々な人達が住んでゐて、この大きな屋根の下で、同じような自炊生活をしてゐるのである。それは無論斷るまでもないことだが、どれもこれも一軒の家を借りる力のないまでに、零落れ果てた人達である。けれども彼等は、下谷の萬年町山伏町とか、本所の横網とか、深川のどこそことか云ふような、貧民窟と云ふ名で呼ばれる所に住んでゐる人達ほど、まだ自分の貧乏に徹底してゐない人達である。長い間の貧乏生活に慣れきたえられて來た人達には、同じ悲慘な生活を過す中にも、貧しい人達のみが持つてゐる放縱な快活さを帶びてゐる。彼等はもう明日の飯の食へない事などは、大して念頭にもかけてはゐない。苦しければ悲み、腹が減れば唸り、金が入れば喜んで飲んだり騒いだりしてしまふ。凡てがその場その場で決濟されて行く。そしてまた誰もがさうである彼等の社會にあつては、金が無いと云つて恥ぢもしなければ、飯が喰へないからと云つて顔を赤くするわけでもない。何も彼もが曝け出されてゐるだけに同じ悲慘の生活の中にも、どこかに明け放たれた明るさがある。それが貧民窟から、狂人や自殺者を餘り出さない理由なのかも知れないが、今こゝに描かうとする家の人々の日々の生活は、それ等の人達より苦しくとも樂な狀態ではないらしかつたが、たゞこの人達はまだどこか世間體を裝はふと努めたり、昔の生活を鼻の先にぶら下げたりすることに引かゝつてゐた爲めに、どん底に落切つた人々の放縱な快活をさへ持つ事が出來なかつた。もつともそれはそこにゐた大部分の人達が、中年を過ぎた夫婦者や老人達であつた爲めにさうであつたのかも知れないが、見え透いた貧しさを蔽はふとしたり、判り切つた苦しさを隱さうとするのはたから見てゐる者に、餘計に陰氣で悲慘な感じを與へるばかりでなく、時とするとたゞ痛ましい滑稽な氣持さへ起させる位であつた。

玄關を入ると右手の方には二階へ通ずる階段があつた。その踏板も歩くたびに、ぎし〳〵と妙な音を立てゝ鳴るほど危げな物であつたが、その下には三疊の部屋が二つ並んでゐて、古道具屋らしい老人夫婦と、町工場へ通つてゐる四十過ぎた職工が、七八つ位の女の子と二人で住んでゐた。老人は茶人らしい帽子を被つて、破れた十德のような物を着てゐた。そしていつでも膝の前には、瓢箪の古いのとか浮世繪を一枚位並べて置いて、絶えずそれをひねつては何かぶつぶつ云つてゐたが、もしそこへ誰か人でも入つて來ようものなら、

『どうでげすこの瓢箪は、光澤と云ひ恰好と云ひ、好い買手が附きや十兩は免しませんがな、えゝ、全くですよ、私がもと仲通りに居た時分にや、一寸堀出し物をしてくりや十倍や二十倍にするな本當に譯もねえ事だつたんですが』とそれから自分が仲通りで店を持つてゐた頃の儲け話が、綿々として果しもなく續くのである。老人がその話を初めると、年の割合に壯健らしい酒好きな婆さんは、窓の下で仕事をしてゐた手を時々休めては、ぢろり〳〵と爺さんの方を蔑むように眺めるのであつた。老人はその眼とひよつくり出くわすと何故か間の惡さうな顏附をして横を向いてしまふのだつたが、それでも尙ほその口は休まずに、應擧の幅を何圓とかで堀り出して、

『そいつをお前さん五百兩で賣りましたあね、これなんか本當にこたえられねえこつてさあ』と一段と聲を高くして語りつゞけて行くのであつた。けれども夕方になつて晩酌の醉が婆さんの顏を赤黃色く染め初める頃になると、

『ふん、お前さんはいつでもお體裁の好い事ばかりよく喋云つてゐられるねえ、私やまたお前さんと一緒になつてから、仲通へ店なんか持つた覺えはありやしないよ、それどころかね私が親から貰つた物は皆なお前さんが何だ彼んだつて滅茶苦茶にしてしまつたんぢやないか、五圓で買つた應擧が五百圓だつて、よくまああんなことがのめ〳〵と喋舌れたもんだと思つて私や本當に呆れ返つてゐたんだよ』と勢ひよくまくし立てられると、老人は

『まあ好いやな、そんな大きな聲で怒鳴らねえでくれよ、みつともねえから』と手を合さんばかりにして婆さんに詫びるのであつた。そして、

『せめてお前そんな馬鹿つぱなしでもやらなきやあ、くしや〳〵してやり切れねえぢやねえか』と云つて、きまつて溜息をほつと一つ吐くのだつた。それを聞くと、婆さんも不思議に默つてしまふのだつた。さうして二人は默つたまゝ長いことかゝつて僅かな酒を飲んでゐた。老人は時折寂寥に堪えなくなると見えて、洗面場や便所へ通ふ途中などで、同宿の人の顔を見れば必ず、

『如何です、ちつと遊びにお出でになりませんか、お茶でも入れますが』と愛嬌を振りまいてゐるのであつたが、その長々しい話を聞かされた人達で、二度とその部屋を訪れる者はなかつた。

隣の部屋にゐる職工は、老人とは反對に恐ろしい無口の男だつた。夕方に工場から歸つて來て、臺所で米を磨いでゐる時などに人に逢つても、挨拶一つするでもなく、磨ぎ終つた米を赤い釜に入れてしまふと、怒つたようにさつさと部屋に引つ込んで行つてしまつた。食事をする時にさへも、小さな女の子と話し合ふ聲さへ洩れては來なかつた。それでも朝出て行く時には、必ず小遣をやつて行くものと見えて、子供は千代紙や駄菓子を買つて來て、薄暗い杉垣根の中の所で、一人してぽつねんと一日遊び暮してゐた。

臺所の前にある六疊二間續いた部屋が、その家の女主人の居間になつてゐた。その女は山田と云ふ姓のもう六十を越した婆さんであつた。十年程前に死んだ漢法醫者の家に長年勤めてゐた下婢で、その病院のあとを貰ひ受けて、貸間を商賣に始めてゐたのだが、道樂と云つては、夕方から救世軍の説教を聞きに行く事がたつた一つの樂みで、晝間の中でも方々の部屋を廻つては、

『どうです今晩お說教を聞きに行きませんかね、人間なんかいくらくしや〳〵考へたつて何にもなりはしませんよ、だからわしなんかはあ何も彼も神樣にお任せしとくと、どんなに心が樂で好いか知れねえですよ、ねえ、あんたも一度聞きに行つて見なすつては』とどこか近在らしい訛りのある言葉で、勸めて廻つて歩くのであつた。間貸の家の主人に對しても、まだ店子と云ふような態度を捨て切れない人々は、

『有難うございます。何れ晩になりましたら』と體裁の好い返事をしてゐたが、それでも夜になつてから、救世軍の集會へ顏を見せる人は一人もなかつた。彼等に取つては疲れた身體を引づつて行つて有難い神の思召を聞かされるよりも、氣兼のない休息と、出來ることならもつと多分な金が欲しかつたからである。けれども婆さんは、そんなことには一向頓着なく、いゝときの聲を持つて歩いたり、時とすると部屋の中へ入り込んで、神樣のお力を長々と說き聞かせてさへゐるのであつた。

婆さんの隣の部室は五つ位の男の子がゐる、商人の零落らしい夫婦者が借りてゐた。五十を少し越したらしい亭主は何をするのか、朝になると家を出てしまつて、夜になつても歸つて來ない事が多かつた。眼玉が飛び出して蒼い顏色をしてゐる爲に、いつでも產婦のように見える內儀さんは、洗濯をしながらでも、お飯櫃を洗ひながらでも、少し馴染の人の顏を見れば、

『わたしとこだつてねえ、家の人があんなに酒さへ飲なけりや、こんなところへ來なくとも好かつたんだけど』と甘えるような言葉附で愚痴をこぼしながら、昔は素晴しく立派にでもやつてたように云ふのであつた。けれども同じように零落て、同じように苦しんでゐる人達には、そんな自慢らしい言葉は好い感じを與へもしなければ、同情を引く種にもなりはしなかつた。だから誰れでもその內儀さんと天氣の挨拶位はしてゐたが、少しでもそんな話が始りさうになる

と、

『まあご免下さい』と云ひ捨てゝ、さつさと逃げ出してしまふのだつた。

階段を踏むたび毎に、壞れた泣人形の泣くような滑稽な音を出す梯子段を上り切つた所には、階下の人達とは全で違ふ男女の一組がゐたのである。そこは座敷の間取もよければ、此家でたつた一つの明るい日の射す部室であつた。男は二十七八位になるらしい身體つきの頑丈なしつかりした風采をした人だつたが、七八年前から腦が惡くなつて、病院から出た時は、この家の二階に來て、毎日ぶら〳〵と遊んでゐた。實家は北海道の資産家で、男の生活に不自由のない丈けは月々に送つてくると云ふ呑氣な身分が、階下の人達の羨望の的になつてゐた。女は元は看護婦であつたのが、男が病院に入つてゐる中に一緒になつて、今ではもう五つになる子供まで出來て、どこかに預けてあると云ふ事だつた。

山田の婆さんには、その桑野と云ふ二階の男が、唯一の書き入れの客だつた。階下に居る部室借りの人達は顏さへ見れば愚痴をこぼすし、それに釣り込まれてうか〳〵話をしてゐれば、だん〳〵と間代の拂へない云譯になつて來たり、時とすれば小遣を貸してくれと云ふような事さへ賴まれる恐れはあつたが、桑野は定つたものの外に心附さへくれるので、自炊客でなければ置かないと云ふ、獨ぎめの規定を破つて、婆さんは三度三度の食事まで運んでゐた。

腦が惡いと云つても發作の起らない時は、普通の人よりも溫和しい桑野は、その二階でたゞ茫然と轉がつて暮してゐた。自分の女に大して口を利くわけでもなければ、書物を耽讀すると云ふ風でもなかつた。が、それかと云つて格別退屈らしい顏もしてゐなかつた。そして夕方になると、新しい麥稈帽を少し前のめりに被つて、幅の廣い肩を怒らせて、悠々と町へ散歩に出かけて行くのが彼の毎日の日課であつた。

さて此の家の汚い玄關を入つてから、二階建の家の下に住む人々の事は、あらまし之れで說明は出來たのであるが、

まだ、例の階段の下の老人の部屋の前を通つて行くと、便所があつて、その邊は丁度トンネルのように暗くなつてゐる。そこに三疊敷の部屋があつて、此家でたつた一人の若々しい女である交換手が住んでゐれば、その廊下の突當りで八疊と四疊半と三疊の部屋があつて、そこにもそれ〳〵の人が住んでゐるのだが、それは之れからの話につれて自ら物語らなければならなくなつてくるであらうから、それはまた後に廻す事としよう。

私が今物語らうとしてゐる主人公の順吉が、此の家に越して來たのは、六月初めと云つても一日の事だつた。彼はその日まで、家を出てから十年振り位で母親と一緒に家を持ち、自分はぼて振の魚屋をしたり、夜店へ出て見たりして色々ともがき廻つて見たのであつたが、眞面目に働きさへすれば必ず幸福の道が開けると云ふ事はほんの文句の上だけの事であつて、此の世の中にはそんな人の好いお目出度い道などゝ云ふものは、勸業債券の當籤ほどに僅かしか開けてゐなかつたのであつた。順吉が如何にあせりもがき苦しんでも、開けない道は総に開けず、思案に暮れてゐる中に、年を老つて性も根も弱つてゐるし、それにまた今日までそれ程のその日暮しをした事のない母親は耐え切れないと云つて苦情を云ひ出した。思ひ餘つたように母親は、

『一體お前毎日こんな事をしてゐて、どうすれば好いのだね』とよく云ひ出した。

『だつていくら働いたつてこれよか出來なきや仕方がないから、このまゝで辛抱するよか仕方がありませんよ』と彼は極つて答へた。

『辛抱つてお前、これ以上の辛抱が出來るかね』

『だつてどうにも出來なければ仕方がないぢやありませんか。働いても働いても喰へなけりやどうにも仕樣がありませんよ、餓死するより大した事はありやしないんだから』

『そんなお前亂暴な事を云つて』年老つた母親はすぐに涙ぐんでしまつた。それから色々の愚痴が出て、憎み合つてもゐない二人は毎日苦しい爭ひを續けてゐた。雪の降つた寒い日に母は僅か計りの儲の爲めに、半道もある遠くの學校まで、岡持を下げて出掛けて行つて、途中で鼻緒が切れた爲めに、五十を越した老人が雪の中を足袋裸足で歸つて來た事もあつた。順吉は心にもなく口で爭ひながら、そんな事を考へると思はず涙が滲んで來たが、それは決して現在の締木にかけられたような苦しさから、一寸でも浮び出るたしにはならなかつた。

それに順吉こそ零落れ切つてゐたとは云へ、彼の姉達の所へ行きさへすれば、まだふた親共に、大して暑さ寒さに苦しむ事もなく暮せる家を持つてゐた。母は自分の愛してゐた子に頼りたいと云ふ、他の子供達に對する意地や氣兼から、その方へは行き度くはなし、こちらは苦しいし、と云ふ妙な羽目に陷つて苦しんでゐるのだつた。僅かばかりの金のない爲めに、愛する親子でもどんなにつまらない事から爭はなければならないか知れないし、さうした氣持の推積は、やがて終には心から憎み合ふようにさへなるかも知れない事を考へてゐた順吉は、母のその樣子を見るたびに、意地なんかすてゝも好いから早く姉の所へ行く方が好いと考へた。そして一度大喧嘩をした末に、母にその事を云つた時、母も案外素直にそれを受け入れて、姉の所へ行つてしまつた。

一人きりになつてしまふと、彼は云ひようのない自由さを心に感じた。

『働いても働いても喰へなければ、盗人をするか、野仆死をするかだけの事である。生きてゐたければ盗人もするだらうし、それもいやなら野仆死をするだけだ。死たくないと云つたつて、いつペストにかゝつて死ぬのか判らないのが人間だ。俺はもう死なんかを恐れやしない。然し、懐手をしてぶら〳〵遊んで樂に喰つてゐる人間がゐる一方に、汗水をたらして働いても喰へない人間があつて好いものか、野仆死をするまでも、俺には行突つて行く所がある』さう思ふと彼

の心には今までにない勇氣が湧いて來た。順吉はその頃僅かに小さな形をとゞめてゐた思想團體にも近づいて行つた。十年程以前に彼の心に燃えてゐた異樣な血は、また新らしく更に烈しい熱を持つて來た。

その時彼は此の家に越して來たのである。彼の借りた部室と云ふのは、玄關から入ればそのトンネルのような便所の前を通つて、突當つた部室の先にある、四疊半の間であつた。それは丁度此の家の裏側の角になつてゐたが、北側に窓が一つ開いてゐるだけのその狹い部屋の中には、永遠に日の光の射す事はないように薄暗く出來てゐた。その部屋に越して來た當時の彼は、魚屋もやめてしまひ、何一つする仕事もない儘に、丁度その頃始まつてゐた市會議員の選擧事務所に雇れてゐたので、朝は早く出て、夜は遲くならなければ歸つて來られない爲めに、その家にどんな人達が住んでゐるかも知らないで暮してゐた。

然しそれは六月七日の朝だつた。議員の選擧もその前日終つてしまつたので、その日からはもうあのがさ〳〵したつまらない選擧事務所に行く必要もなくなつたと思ふと、彼は床の中で眼を醒すと、まづのう〳〵と伸をして昨夜久し振りで買つた敷島に火をつけて、先づ一服吹かしながら、あやめの小袋の底に殘つた粉屑をなた豆のがん首でいぎたなく淩ひながら、漸く一杯にして吸ふよりも、この方がうまいと云ふような事を考へてゐた。それから彼は事務所から貰つた金の殘りがまだ幾らあるかと胸算用をして見た。昨夜當選の祝酒を飲まされて、それから又バーへ行つてなどゝ色々考へて見た。それでも彼は寢ながら財布を出して見る事は、旅の空で絞め殺される按摩かなにかのように思はれて、自分ながら一寸やつて見る氣にはなれなかつたのであつた。そして色々考へて見た結果、時々喰つた辨當代や、昨夜の無駄使などを引いて見ると、當選の祝ひとして別にくれた十圓の金まで入れて、二十五圓あつた金がもう十二三圓しか殘つてゐないのであつた。

『もし彼奴が落選してあの十圓もくれなかつたら』と思ふと一寸ひやりとした。そして『自分は候補者が當選しようとしまいとこちらの勞力には關係がないのだから、規定の時間以外に働いたのには割增をくれろ』と云つていつか會計と爭つた事が本當に正しかつたのだとも一寸考へて見た。『しかし米を一圓買へば五升あるから十日位はあるだらうし、間代も拂つてあるのだから。まあそんなにあたふたしなくとも好いだらう。今日一日はゆつくり休んで、好きな本でも讀んで遊ぶ事にしよう。さうして明日の晩から夜店に出てしつかり稼がう』と自分で自分に言譯するように考へた。こんな下らない世の中の人間が、名譽だの體裁だのとさもさも大切らしく取扱つてゐる事が、結局三文の値打もないことだと云ふ事は、心の中では知り切つてゐるのであつたが、さて愈々大道に坐り込んで往來の人に顔を曝し、三錢五錢の本を賣らなければならないと云ふ事になると、どこかに自分の無力を耻ると云ふような氣持が彼の心の底には潜んでゐるのであつた。

『そんな量見がいけないのだ。そんな量見を打ち壞す爲めだけにでも、俺は夜店の商人とならなければなるまい』と彼は自分を非難するように考へたが、然しまあ今日一日位は骨休みをしても好いだらう――と無理に考へ直しながら、强て自分の氣持を靜めようとするように、久し振で吸ふ敷島の煙を悠々と吐きながら、今朝はじめて落着て見る自分の部屋を見廻した。

夜も戸を締めない窓の破れた障子に、もう明け切つた朝の色が映つてゐた。そしてその破れた紙の間からは、部屋の前のまばらな垣根や、ひよろ〳〵な檜の幹が貧しげに覗いてゐたが、梅雨近くなつた空は曇つてゐると見えて、朝日の影も見えなかつた。順吉は何を考へると云ふでもなく、枕の上に兩肘をついて、どんよりした朝の色を眺めながら、幸福さうに煙草を吹かしてゐた。その時彼の寢てゐる左りの方の部屋から、「

『どうしたのさお前、今日も又た休みかい』と年寄らしい意地の悪い疳高い聲が聞えて來た。順吉はそれを聞くと、今まで珍しく伸々としてゐた心が俄かに固く縮み上つたように思はれた。そして慌てゝ聞き耳を引ッ立てたが、隣の部屋はそれつ切り又たしばらくひつそりとしてゐた。

『ねえお前休むのかつて云へばさ』と二三分經つてから、以前よりも疳高い聲が聞えて來たが、その時になつて漸く、

『えゝ、うーん』と鈍い重苦しい力のない聲の返事が聞えた。

『へ、そんな事を云つて昨日も人に辨當までこさへさしておいて、とう〳〵休んでしまつたんぢやないか、一體この餓鬼や誰の子だと思つてゐるんだ。お前の子ぢやないか、大きな圖體をしてそんなだらしがないから嬶にも逃げられるんだ。さうしてこの年寄に洗濯だの手傳だのつて働かせて、それでどうやらかうやらやつて行けるんぢやないか、本當にお前みたいな意氣地のない伜を持つたばつかりに、こつちはどんなに苦勞することつたか知れやしない。考へるとこつちが本當に病氣になつてくらあ』と年寄は又た疳高い聲で休みもなく怒鳴り散した。順吉は此の部屋に越して來た晩その部屋に一寸顏出をした時に、薄暗い豆ランプの影の下に、皺の寄つた赤ら顏の、髮の毛の縮れた、どこか眼に險のある婆さんと、水死人のように蒼脹れた顏をした、若いのか年寄か判別のつかない男と、十位になる男の子が、小さくなつて固まつてゐるのをちらと見ただけであつたが、それが、壯健らしい婆さんの息子と孫であつたことをその時初めて知つたのであつた。

『ねえどうするんだよ』と婆さんは堪りかねたように、又た一段と聲を張り上げて噛みつくように怒鳴りつけた。『お前みたいな大きな身體で休んでごろ〳〵してられちや、第一邪魔つけで、こつちがくしや〳〵して堪りやしない』

『あゝ行くよ、行くよ、そんなに云はなくつたつて好いぢやないか、俺本當に身體が惡くつて苦しくつて仕方がねえん

だから』

『へ、そんなことばつかり云つて怠けてゐられた日にや、こつちが堪らないよ、一日出たつて三貫か四貫しか取れやしないのに、月の中半分も休んでゐられて、どうして家がやつてけると思ふんだい、ちつとは考へても見るが好いんだ』と年寄の尖り聲はなほ續いてゐた。

やがて悴が起きたのでもあらう。襖を開けて力のない足取りで、廊下をのそ〳〵歩いて行く足音が聞えたが、それとともに

『あゝあ、本當にいやになつてしまふね、お前は大きくなつてもあんな意氣地なしになるのぢやないよ』と嘆くような聲で孫に云つてきかせるのが聞えて來た。

『あゝ』と云ふ元氣の好い子供の聲がすぐにそれに答へた。

一と月半ほど前まで魚屋をしてゐた頃に、時々自暴になつて河岸の買出しを休んで、二階でいつまでも寢入つてゐると、『お前今日もお休みかへ』と起しに來た母親に聞かれた覺えが順吉にもあつた。彼の母はそれから先きは別に嫌味を云つたり、怒鳴つたりする事もなかつたが、もし母にもあゝして行く所もなく、自分の貧しさが尙もつと烈しくなつて行つたら、矢張同じような結果になりはしなかつたらうかと思ふと、彼は自分の持つてゐる醜さをまざ〳〵と見せ附けられたようにさへ思はれて、久し振で吸つた敷島の甘さも、今日一日は骨休みの出來る樂しさも何も彼も一度に何處かに消えてしまつて、重苦しい妙な氣持が、彼の頭を暗くした。

しばらくすると隣の部室から、悴が一人して朝飯でも喰ふらしい茶碗や箸の觸れる音が聞えて來たが、それが終ると、『あ』と大儀らしく低い聲で、溜息をつきながら立ち上る氣勢がした。そしてその部屋についてゐる裏口の格子を開け

る音が聞えて來た。

『苦しいのにとう〳〵出かけるのか』と思ひながら、順吉はふと起き上つて障子の破れから外を覗いて見た。縞柄も判らないほど汚れた單衣物に繩のような帶を巻きつけて、辨當箱を左りに抱えてゐる、隣の伜の姿を彼はその時初めてよく見たのであつた。さつき婆さんから子供のように怒鳴りつけられてゐたその男は、一寸見た所では四十を越してゐるように老けてゐた。顔は腐つた西瓜でも思はせるように蒼くむくんで、ぢつと据つたようになつてゐる小さな眼は、物を見つめる力もなくなつてしまつたように、どんよりと鈍く濁つてゐた。彼は虫の這ふようにそろそろと二足三足重たい足を動かしては、立ち止つて何か考へて、又そろ〳〵と歩いては何か考へてゐるようであつたが、それでも思ひ切つてしまつたように、大儀らしい足の運びをのそ〳〵と續けて、やがて向ふの角に姿を消してしまつた。

『あゝあ』と云ひながら、順吉も又た布團の上にごろりと横になつた。が、その時隣の部室からは、祖母と孫が再び新らしい眠りに落ちたらしくかすかな鼾が、靜かに樂しげに聞えて來た。

何も彼も忘れ切つて、本でも讀んで骨休みをしようと思つてゐた心持を、隣の部室の親子話からすつかり打壞されてしまつたので、彼はその午前の半日を、たゞわけもなくそわ〳〵として暮してゐたが、晝頃になると、もうすつかりいつものぢり〳〵した焦立しい心持に惱まされてしまつてゐた。彼は遂に堪らなくなつて、その薄暗い部屋を飛び出してしまつた。しかし今までの友人にも親戚にも、凡ての知合に縁を切つて、たつた一人の道を歩いて行かうと心に決めてゐる彼には、訪ねて行く人の家もなかつた。厚ぼつたい雲の奥から、太陽がぢり〳〵と蒸すような熱を投げてゐるむれるような町を、彼はたゞ當てどもなく、いつまでもいつまでも歩いてゐた。何を見ても凡てが彼には敵意を持つ種になつた。薄羽織を着て氣取つて歩いてゐる若い男の顔も、熱くるしくやけた煙のやうな砂を、人の顔にぶつかけてごーご

ゝと通つて行く電車も、町の店も垣根の並んだ邸町の家にも、何も彼もが癪にさわる程になつてきた。坂道を重さうに車を引き上げてゐる、汗に濡れた車力の顔を見ても、好

『何をしてるのだ間抜けめ』と突き飛ばしてやりたくなつて來た。『僅かな金を貰つてそんな物を引張つて歩くから、いいように馬鹿にされるのだ。そんな物は坂道の下へ投り出してもつと威張つて金の取れることを考へろ』

彼は自分でも出來ない事を、平氣で考へながら、狂人のように眼を据えて暑い町を歩いてゐた。油照りのする町を長い間歩いた爲めに、身體も足もすつかり汗にまみれてしまつて氣持が惡くなつたので、家へ歸つて湯にでも入つたら、少しは氣が落着くかも知れないと思ひながら、ぼつ／＼とその家の近所まで歸つて來た時であつた　順吉の借りてる家の横町から出て來た米屋は、彼の姿を見ると、漸く見つけたと云ふ風に、あたふたと彼のそばに馳け寄つて來た。順吉も自分の留守に二三度米屋が訪ねて來たと云ふ事は、八疊の部屋の方に住んでゐる、お抱車夫らしい人の細君からその度毎に聞いてゐた。彼も米屋の姿を見ると、いままで堪えてゐた疳癪を爆發させる對象物を見附けたのを喜ぶように、こちらの角で、ぢつと足を留めて待つてゐた。

『今日は』と米屋は一度挨拶をして『先達から度々伺つたのでございましたが』とさも不服らしく云ひ出した。

『いくら來たつて用があつて出てりやないさ。さうして第一何しに俺のとこへやつて來るんだ』と順吉はすぐに挑みかゝつた。

『へゝ、御勘定を頂かうと思つて』と云ひかけた時に、

『ばかな事を云ふな』と順吉は怒鳴りつけた。

『馬鹿な事とはどう云ふわけですか、お貸ししたるから催促しに行くのに、馬鹿な事とは』

『さうよ、馬鹿な事だから馬鹿な事つて云ふんだ。先月の末に拂へないから俺がわざ〳〵貴樣の家まで催促に來られない中に斷りに行つたんだ。その時貴樣は晝寢をしてゐたのを起されたのが不服だと云ふやうな面をして、俺が、一度には拂へないから、又た一圓づゝでも持つて來てくれ。さうすれば一切現金で買ふし、その度に五十錢宛でも借りは拂ふから、と云つたら、貴樣はそんな事は出來ません、とえらさうに云つたろ、こつちが出來るやうな方法で拂はうつて云ふのに、出來ないと云つた奴が何だつて催促なんかに來るんだ。耻知らずめ』

『耻知ずですつて、耻知らずつて云ふのはお前さん見たいに借りたものを拂はない人のこつてさ』

『何を云やがるんだ。貴樣のやうに人が情を盡して話をしても判らないでまだのそ〳〵と催促に來るやうな奴を耻知らずつて云ふんだ。そんな馬鹿に拂ふやうな金はないから取りたきや勝手にどうでもしろ』

『驚いたね、私もお前さん見たいな無茶な人に逢つたのは初めてだ。それなら、お母さんの方へ頂戴に行きますから、よござんす』

『なに、俺の名前で通が來でゐるのを、母親の方へでも取りに行けるものなら行つて見ろ、もしそれが俺に判つたら、貴樣を目つけ次第たゞ置きやしないから、それでも行けるなら行つて見ろ』

『これや全く驚いた』と米屋は途方に暮れた顏をした。順吉が聲高に罵り初めた時から往來の人が一人立ち二人立ちして、七八人の人が彼等の廻りを取り卷いてゐたが、順吉の見幕が激しいので、米屋の方が何だか耻かしいやうな顏をしてゐた。

『よござんす。それならこれから、お前さんの知合の人のところへはどこへ行つても、お前さんの事を云ひふらして歩いてやるから』

『馬鹿、餓鬼みたいな事を云ふな、そんな事を聞いて驚くような親類や知合とは、とつくの昔に絶縁してゐるんだ 口惜かつたら毎日でも催促に來い、俺も安坐をかいてつまらなさうな顔をして、出來ないよつて斷つてやるだけだから』

米屋はもう諦めたように、默つて彼の前から立ち去つた。

『馬鹿野郎つ』と口の中で云ひながら、順吉も家の方へ向つて歩き出した。彼は朝からむしやくしやしてゐた變な氣を、米屋に向つて破裂させたので、少しは心持が淸々したようにも思はれた。そして部室に歸ると、椽側に出した焜爐の下をばた〳〵煽いで火を起して、臺所の方へ野菜物を切りに出かけて行つた。薄暗い廊下を通る時に、一坪ばかりの中庭の方に向つた障子を明けた隙から、襦袢一枚になつて食事をしてゐる交換手の二の腕がちらりと見えた。彼は野菜物を切りながらも、幾度もその腕の色や形を頭に浮べては考へてゐた。

その翌晩から順吉は、近所の賑かな街へ古本の夜店を出した。初めて大道に茣蓙を敷いて、隨分前から貰つたり、買ひ集めたりして置いた古本を、ぽつ〳〵と並べかけた時分には、彼も何となく落着きを失つて、町を通る人達がみんな、ぶきまな手附で書物を並べてゐる彼の方を、顔に薄笑ひを浮べながら眺めてゐるように思はれて、一人でおど〳〵してゐたのであつた。そして時々ちらつ〳〵と盜むやうに往來の人を見上げたが、まだ暮れ切らない町を歩いてゐる人達は、そんな事に眼をくれてゐる暇はないと云ふ風に、皆な急いで步いてゐた。彼は自分の臆病を嘲笑ひながら、ほつと息を吐いて漸く書物を並べ終つた。

日が暮れて、街の表てに燈がつく頃になると、夜店を素見す人達の姿がぽつ〳〵見え初めて、やがて町は、車の通るすきもないほど群集で一杯になつてしまつてゐた。彼の店の前にも時とすると割込まなければ書物が手に取れないほど一杯に人が立ち、やがてまた一人もゐなくなるまでになつたりした。夜の町を歩く事が余り好きでなかつた順吉は、毎晩夜店

を出してゐる中に、同じ人達が、いつも同じような時刻に、同じ町を歩いてゐるのが判るようになつて來た。『何だつて彼等はかうして町を歩いてゐるのだらう』と彼は冷たい大地の上に坐りながら冷かに考へてゐた。『彼等はきつとぢつとして家に坐つてゐると、生とか死とか、或ひは日々の生活の事が心に浮んで來るに違ひない。さうしてやがてそれを考へる事が、苦しく淋しくなつて來て、明るい光のついた町に出かけて來るのだ。そこに矢張り自分と同じように用もない町をぶら〳〵歩いてゐる人間を發見する。さうして皆も矢張りかうして歩いてゐるのだと云ふ位の事で安心して、家へ歸つて眠るのだらう。自分がまともに考へなければならないことの苦しさから、かうして逃げ出して來てゐるだけなのだ。世の中の社交とか何とか云ふものだつて、恐らくこの夜店歩きより以上に、一歩も出てやしないのだ。こんな人間ばかりが、住んでる限り、この變てこな世の中がどうなるもんぢやありやしない』彼はそんな風にも考へてゐた。しかし彼がそんなことを考へてゐる間にも、店の本はぽつ〳〵賣れてゐた。そしてだん〳〵尠くなつた本を補足するために、順吉は晝間の間は、ぼろ本の市へ買出しに歩いてゐた。

鉛色をした梅雨曇の雲が、頭の上から押しつけるやうに空一杯に擴がつてゐる日であつた。ぽつねんと一人して暮してゐる彼は、時々寂しさに堪えなくなるのか、妙にぢり〳〵とした氣に悩まされる事が多かつたが、殊にさう云ふ陰鬱な重苦しい日には、彼は働くような氣にもなれないので一人して部屋に閉ぢ籠つて商賣物の書物を讀んでゐた。けれども狭い部屋の中は風呂場のようにむし暑く、ぢつと坐つてゐる額からは、油汗がぢり〳〵とにじんで來て、眺めてゐる書物の字はすぐにぼうつとしてしまつて、すら〳〵と頭に入つて來ないのに、彼は一層氣をくしや〳〵させてゐた。その時、表ての二階と思へるあたりから、

『うを一つ』『うを一つ』と獣の唸るような、重苦しい大きな聲が響いて來た。その聲は、丁度順吉がもし自分が溺らな

くなつて唸つたら、矢張りあゝ云ふような聲が出るだらうと思ふように、幽靜な物凄い聲だつた。彼はその聲を聞くと頭の中が一時にくら〳〵とするように思はれて、ぢつと耳を押えた。けれども、物の五分と經たない中に、又た、『うをーつ、うをーつ』と云ふ唸聲が、陰氣な梅雨曇の空氣を震動させて響いて來るのであつた。彼は遂に堪らなくなつて、

『あのうをーつ、うをーつて云ふのは一體なんでせう』と襖越に隣の細君に聞いて見た。

『あゝ、あなた此頃家にゐないから知らないんですね、あれは二階にゐる桑野さんがね、こんなようなお天氣の日だと、頭の具合が悪いんで、それであゝして唸るんですよ、いやですねえ』と云つて隣の細君は『ほゝ』と笑つた。

『こんな日には狂人でなくつたつて唸りたくなら』と順吉は心の中で考へながら、『あゝさうですか』と返事をした。が、その時また續けざまに、

『うをーつ、うをつ』と唸る聲が響いて來た。それはもう彼の頭の中を引掻き廻して、彼にも矢張同じように唸り出させようとするのではないかと思ふほど、頭の芯にびん〳〵響いた。

『あゝ堪らん』と云ひながら、彼は兩手を組んで、ごろりと仰向けに轉がつた。隣の部屋からも初めてごた〳〵を聞いてから、時々朝になると、婆さんのぶつ〳〵云ふ聲は聞えて來たが、あの時のような事はもうなかつた。けれどもこの半狂人の出す唸り聲はそれにも增して頭の中に意地悪く響いてくるのだ。

『全く變な人間ばつかり集つてゐる家だ』と彼はその時ひよつと考へて見たが、世の中だつて大して之れに變りはありやしないんだ。皆な別々な家に暮してゐるからこそ判らないのだが、貧乏して苦しくなれば喧嘩もするし、零落た人間は何か慰めが欲いからあの玄關の傍の爺みたいに、瓢箪をいぢくり廻しちや十圓十圓と云つてゐるんだ。さうして少し

金があつてぶら〳〵してゐる奴あ氣違ひになつてゐるんだ。と彼はさう考へをきめて、自分の頭を靜めようとして見たが、又た續いて、

『うおーつ、うおーつ』と底力のある唸り聲を聞くと、頭の中がめちや〳〵こね廻されたように苦しくなつてくるのであつた。

『何ていふいやな聲だ』まるでどす黒く濁つた血が、ぶつ〳〵と煮え立つような中から起つてくるような聲だ。あんな聲を始終聞かされたら、こつちが狂人になつてしまは』とさう思ふと、彼は何となく不安になつて來て、慌てゝ家を飛び出した。鉛色の雲は意地惡くこのあされたような町の上をどんよりと壓しつけて、所々雲の切れかゝつた所からは、銀色の光が筋のように流れてゐた。彼は又た當てもなく町を歩き廻つた。そして何か不愉快な物に出逢ふては、心の中で、『うおーつ、うおーつ』と云ふ聲を立てながら、又暮方までに町を歩きつゞけてゐた。

順吉がその聲を聞き初めてから四五日たつてからの事だつた。彼が自分の部屋で夜店の本に正札をつけてゐる時に、

『吉村さん、昨夜あなたがゐない時、そりや二階で大騷ぎがあつたんですよ』と隣の細君は珍らしく話しかけた。

『へえ、大騷ぎつてどうしたんです』と順吉も好奇心に釣られてすぐに聞きかへした。

『いえあの二階の狂人さんね、あの人が何か怒つて、あの女の人をいぢめてね、そりや恐いようでしたよ』

『だつてあの女の人は穩和しさうな、上品な好い人ぢやありませんか』

『そこが狂人さんだから仕方がないんですよ、さうして何だか大きな聲で怒鳴りつけてね、そりや恐いつたらないんですよ、それに家でもゐなかつたし、あなたもゐないし、力になるような人は誰もゐないんだから、泣き出したら私なんか子供をどうしようかと思つてね、そりや心配しましたよ』

『それでもうまく納つたんですか』

『えゝ、しまいにね、あの女の人がね泣いて山田さんのとこへ逃げて來たんですつて、さうしてね、皆に氣の毒だから、どうかして靜めようと思つて云ふ通りになつてゐたら、そりや亂暴な事ばかりして、とう／＼何んにね、ひどい傷をつけられたんですつて、それでどうにも辛棒が出來ないから、つて云ふもんだから、山田さんが上つて行つてね、大變な見をしたんですつて、さうしたら急に穩和しくなつてね、今日もそれであんなに靜かなんですよ』と云つて細君はほゝつと笑つた。

『隨分妙な事をする男ですね、女の人はそれでどうしました。今日もやつぱり二階にゐるんですか』と順吉も笑ひながら尋ねた。

『いゝえ、昨夜それから、しばらくよそへ行つてくるつて出て行つたんですよ、きつと子供衆の預けてある家へでも行つたんでしよ、本當にまあ狂人の子なんか生んじまつて因果な人ですね』と細君の話はそれで終ひになつたが、あの獸のような聲で唸つてゐた男は、遂に自分の女を、それほどまで慘忍に取扱はなければならないような氣持にまで進んだのかと思ふと、順吉は妙に暗い感じに打たれてゐた。

『しかし二階から聞えて來る、あの變な唸り聲も、これ位のことで止んでくれゝば有難い』とその聲を恐ろしく忌み恐れてゐた彼は、窃かに喜んでゐたのであつた。晝頃になつて彼が臺所へ出かけて行つた頃には、家の中はいつものように陰氣で、誰一人昨夜の噂をしてゐる人もなく、開け放した三疊の部屋では古道具屋の老人が、何かの幅を擴げてしきりと見入つてゐると、職工の娘は窓際に玩具を並べて穩和しく遊んでゐた。

桑野の騷ぎを聞いてから三日程經つた朝に、順吉は何か大きな聲で起されたような氣がしてふと眼を醒して見たが、

窓から射してくる光の具合で、まだ恐ろしく早いのに氣が附いた。夜店を出すようになつてからは、歸つて來てから片附物をしたり何かしてゐる中に遲くなるので、彼はその頃自然と朝寢をするようになつてゐたので、不思議さうに四邊を見廻してゐた。すると、

『何だ、又た休みか、五日か十日も通つたと思ふと、さうすぐに休んでゐられちや本當にこつちが堪らないや』と婆さんは、さつきから罵りつゞけてゐたように、もう可なり疳高い聲で怒鳴つてゐた。けれども、その朝はどうした譯か、悴は『今日は行くよ』とは仲々云はなかつた。極り切つた文句で婆さんが何を怒鳴つても、たゞ默つてゐるばかりで時々、『うん、うん』と唸るとも溜息ともつかないやうな聲を洩してゐるばかりであつた。婆さんは長い間、その疳高い聲で怒鳴つてゐたが、やがてそれにも疲れてしまつたものと見えて、

『どうでも勝手にするが好いさ、お前みたいなもんにかゝつてゐたら、三人とも乾干になつてしまはなきやならないから、私はこれから、鈴木さんへ手傳に行つてくるよ、あゝあ、この年をして十何人も人のゐるとこへ手傳ひに行つて、一日働き通しに働いて三十錢か五十錢しか貰へやしないんだ。それをまたあてにして、自分ばかり樂をしようつて量見の奴がゐるんだから、本當にこつちは堪りやしない。竹や、お前おまんまをたべて學校から歸つて來たら鈴木さんのとこへ來な、お前に使ひの代りでも賴まなきやならないから』と孫には優しく言ひ置いて婆さんはさつさと出掛けて行つてしまつた。しばらくすると悴は、

『竹、とつちやんに水を一杯持つて來てくれよ、咽喉が乾いて仕方がねえから』鈍い聲を一層苦しさうにして、自分の息子に賴んでゐた。けれども竹と云ふ子は、

『駄目だよ、おいら急いで行かなきや學校が遲くなつちやうんだもの、父ちやんなんか休んで寢てるんだから、自分で

起きて飲んだら好いぢやないか』と云つたまゝ、勢ひよく格子戸を開けて、表てに馳け出して行つてしまつた。順吉は餘り氣の毒になつたので、自分で起つて行つて、隣の部屋の入口の開きをあけて、

『水を持つて來て上げませうか』とひよつと顏を出したが、むつとした烈しい臭氣に襲はれると、彼は思はず鼻を押へて一足あとに下つた。疊も何もぼろ〳〵に切れた上に、綿とも布團ともつかないものを並べた上に、祖母と孫が並んで寢てゐたらしく、眞黑になつた薄い掛布團が引ん丸めてその上にのせてあつた。そして病人であるその男は、敷物もなく、たゞ古い綿入の着物一枚を上にかけてその傍に丸まつてゐた。順吉が聲をかけるとその男は綿入の中に顏をつゝ込んで子供のやうに、たゞ『うん、うん』と點頭いた。ふけだらけになつた後頭部の薄い髮の毛と、垢で眞黑になつた頸筋か、漸く彼の眼に入つたが、云ひようのない臭氣はそこから洩れてくるように彼には思はれた。順吉はその四邊を見廻したが、水の容物もないので、

『何か容物はないの』と尋ねたが、男は綿入に顏を埋めたまゝそれに答へようとはしなかつた。『困つたな』とつぶやきながら、彼は一歩部屋の中に入つて見たが、膳らしい物も、茶碗の影も見えないので、彼は思ひ切つて突當りの障子を明けて見た。そこには壞れかゝつた焜爐の上に口のかけた土瓶が一つ乘つてゐて、そばには、茶碗と箸が一膳づゝあるばかりであつた。その外には、彼の眼に觸れるものは、何一つなかつたのである。彼はその土瓶を持つて臺所へ水を汲みに行きながら、一つの茶碗でどうして三人の家族が暮してゐたのか知ら、と不思議さうに幾度か頭で繰り返して考へて見た。

『さ君、水をこゝへ置きますよ』と云つて男の枕元に土瓶を置いた時にも、男は顏を隱したまゝ、たゞうんと點首ただけであつた。順吉は自分の部屋に歸ると、

『何だつてこんな變な家へ越してくる事になつたのか知ら』と今更のように考へて見た。二階には狂人がゐるし、下

の爺さんは、はじめて逢つた人間をつかまへて、『私が仲通にゐた時分には』と半日も黄金の儲つた話をして聞かせるのだ、と彼はいつか古本に交ぜて買つた錦繪を見て貰ひに行つた時の事を思ひながら考へた。さうして自分の隣の部屋には苦しまぎれに自分の子を仇のように憎んでゐる親子がゐる。本當にこんな家に長くゐたら、こつちの身體までどうかなつてしまふかも知れないのだ。と思ふと彼の心は何となく不安になつた。しかし本當に突詰めた世の中と云ふものは、之れが本當の正體なのかも知れないのだ、と思ふと、彼の心は一層暗くなつて行くばかりであつた。

順吉はその部屋にぢつとしてゐるのが、だん〳〵苦しくなつて來たので、午頃になると彼はぼろ市へぶら〳〵遊びに出かけてしまつた。さうして夜になつて店を出してゐる間だけ、彼は漸く心の紛れてゐる事を感じて、『俺も矢張り人混みへ出かけて來たくなつたのか』と自分で自分を笑つてゐた。

翌朝も隣の部室で同じような怒鳴り聲が、繰り返されてゐたが、氣の弱い悴も本當に動けなくなつてしまつたものと見えて、どうしても出て行かうとはしないので、婆さんはいつものようにぶつ〳〵云ひながら出て行つてしまつた。順吉はどこかほかの家に越したいとも考へたが、夜遲くなつて車を引いて歸つて來たり、古本の荷物を出し入れするのに氣兼なくやれさうな家もないので、彼は諦めて、晝間の中はぼろ市廻りばかりをやつて時を過し、金がないのでもりそば一つも喰へないひもじい腹をかゝへて歸つてくると、急いで夜店を出してゐた。そして三錢か五錢の金が入ると、漸く食パンを半斤買つて來て、往來の人を眺めてむしや〳〵やりながら、辛うじて餓をしのいでゐた。

隣の悴が工場を休み初めてから、五日ほどたつてからの夕方であつた。順吉は自分の部室に歸つて來て、夜店に出る仕度をしてゐると、

『あゝ俺(おいら)あ漸く今判つた』と隣の部室で悴が大きな聲で怒鳴つてゐるのが聞えた。『俺あ、あの神棚に祭つてある將軍樣

と親類だつたんだ。それを今日までちつとも知らなかつたんだけど、漸く今判つたんだ。さうだ、俺らあの將軍樣と親類なんだ、だから日本で一番偉いんだ』と又た大きな聲で怒鳴りつゞけた。すると、

『おい、ちつと靜かにおしよ、見つともないぢやないか、そんな下らない事ばかり云ひつゞけてさ』と婆さんの宥める聲が聞えて來たが、それはいつものやうに怒りを含んだ聲ではなく、どこかに恐れたよッな戰慄きの震えさへ帶びてゐた。

順吉は初め悴の聲を聞いた時、自分の耳を信じられないやうな氣がしたが、婆さんの慄え聲を聞くと彼は一層驚いた。さうして、あの弱い悴は思ひ詰めて、苦しまぎれにとう／＼頭の工合まですつかり惡くしてしまつたに違いないのだ、と思ふと彼も何となく恐ろしくなつて來た。彼は隣の八疊の方の小さな入口をあけて、そこから車夫の細君をそつと呼んだ。そして、

『ありや愈々氣が違つたんでせうね』と確かめるやうに尋ねて見た。

『えゝ、今日のお午頃からね、餘り變な事を云ひ出して氣味が惡いから、さつき山田のお婆さんに、久保田のお婆さんを呼んで來て貰つたんですの、餘りお婆さんがぐづ／＼云つてばかりゐるもんですからね』と車夫の細君は眉をよせて小さな聲で語つた。

『どうでせう、大丈夫でせうか』と順吉が懸念らしく聞き返すと、

『えゝまああの人はふだん穩和しかつたからね、そんなに無茶な事もしまいと思ふのですけれど』

『さうですか、まあ僕は商賣に行つて來ますから、何しろ一晩休むと全く參つちまうから』と彼は言譯らしく云つて荷物を引き寄せた。

『えゝえ、本當に日錢を稼ぐ人はね、どこでも同じですよ』と細君は愛想よく笑ひながら、隣の部室に入つて行つた。

その晩順吉が歸つて來た時には、餘程落着いたものらしく、隣の部屋は靜かになつてゐたが、翌日の午後になると、

『あすこに俺の親類がゐるんだ。俺の親類は將軍樣だからな、だから俺ら日本中で一番偉えんだ。これもあすこへ上げといてやれ』と悴はやつと立ち上る音がした。すると婆さんは、

『何だねお前、神棚へ下帶なんか祭り上げて、本當にちつと落着いておくれよ、お前のそばに私がかうしてちつとついてなきやならないと、家中が皆なひぼしになつてしまはなきやならないぢやないか、ねえ、本當にお願ひだから』と云つてゐたが、その聲はもう哀訴するやうな響きを含んでゐた。

『好いぢやないか、俺ら將軍樣の親類なんだから』と云ふかと思ふと、『あゝあ、俺ら本當に足がだるいんだ。見な、こんなに樽みたいに脹れちやつたからな』とどたりと足を投げ出してゐた。そして少時すると又た『はゝゝゝ』と力のない無氣味な聲で俄かに笑ひ出して、『見な、あのロール紙の下から南京蟲がぞろ〳〵這つてくら、ほら、いつくらでも、いつくらでも、な、いくらでもゐるだろお母あ、はゝゝゝゝ』と笑ひこけてゐた。

順吉はその聲を聞いてゐると、本當に自分も狂人になりさうな氣になるのであつた。一度ある事は三度ある、といふつまらない言葉までが妙に氣になつて來て、彼はその部屋にゐるのが堪らなくいやになつて、そとに出てしまふのであつた。その晩彼が夜店から歸つて來た時には、隣の部屋では悴が盛んに怒鳴りたてゝゐるし、いつも靜かな臺所の方からも何かごた〳〵と人聲が聞えてゐた。順吉は襖のそばへ寄つて悴が何を云つてゐるのか聞き取らうとしたが、その言ふ事は少しも判らないで、たゞ

『痛えよ、繩を解いてくれつてば』と云ふ丈けが判然と聞える丈けだつた。それから彼は臺所の方へ廻つて行つて見ると、そこには隣の婆さんもこの家の主人も、車夫の細君も集つて、何かひそ〳〵話をしてゐたが、彼の顏を見ると、

『あゝ好いとこへ歸つて來なすつた、丁度あんたにお賴みしようと思つてゐたとこでしたよ』と山田の婆さんは最初に口を切つた。隣の部室の婆さんは、澁紙のように赤黑い顏をして深い皺のよつた額の下で猿のような眼をちか〳〵光らせてゐたが、その時になつて、

『本當に皆樣に御厄介までかけて』と俄かに萎れたような聲を出しながら眼を伏せた。順吉はそれを見ると何となく滑稽な小憎らしい氣もしたが、

『久保田さんのとこの事ですか』と尋ねると、

『えゝあれがとう〳〵氣が變になりましてね、今夜なんか神棚に上るんだつてあんな小さな物にとつついて暴れるので危くつて仕方がないものですから、止めても止めても私なんかぢやとても押へる事が出來ないで困つてゐるとこへ、二階の旦那が來て漸く縛つて下すつたんですよ』と久保田の婆さんが説明した。

『二階の旦那つて桑野さんですか』と順吉が聞き返すと、

『えゝあの方は柔術がお出來になるんでね、それで漸く押へて下すつたんですの』と婆さんは答へた。順吉はつい十日ほど前にはその人が半狂人になつて、自分の女の××にまで傷をつけた事を考へると、何となく變な氣になつた。

『それで病院に入れたいと思ふんですが、どんな風にしたらよろしいのか、私達には判らないので、今山田さんがあなたにお願ひして見よう、と云つて下さつた所なのですが』と云つて、『何卒何分』と婆さんはひよこりと頭を下げた。

『さあ、僕も別に入院させる方法つて知らないけど、警察へ行つて聞いて見たら判るでせう、兎も角今夜はもう十二時を過ぎてゐるこつたから、明日の朝早く行つて見ませう』

『えゝ何卒それではね』と婆さんは又た頭を下げた。順吉が部室に歸つて來た時も、隣の部室では、何かぶつ〳〵云つて

は『繩を解いてくれ繩を』と大きな聲で怒鳴つてゐた。彼は何となく氣味が惡くなつて、おち〳〵と眠ることも出來ないのに苦しんでゐた。

翌朝、彼れは警察へ行つて手續きをして歸つてくると、久保田の婆さんにその事を話して、すぐに市へ出かけてしまつた。その日はいつも夜店を出す町に緣日がある晩なので、彼は市から歸つて來ると、すぐに車を引き出して商賣に出かけて行つた。

緣日の夜の町には、人の流れは一杯につまつてゐたが、彼の本はその割と賣れもしないので、順吉はたゞ茫然とぞろ〳〵と往きつ戻りつする人達を眺めてゐた。その時彼が店を出してゐる下の方から俥の上でわい〳〵怒鳴りながら來る男があるので、彼はひよつとそれを眺めると、それは、今時珍らしい二人乘の俥の上に、隣の部室の悴ががんぢ搦めにしばられ結えつけられてゐる傍に、刑事らしい男がその肩を抱くようにして、乘りそつてゐるのであつた。悴は俥の上でもしきりと、

『馬鹿野郎――俺は將軍樣の親類だぞう、馬鹿野郎』と破れるような大聲で怒鳴りつゞけて行つた。往來の人達は、『醉漢でせうか』『さあ狂人かも知れませんよ』などゝ口々に云ひながら、その後影を見送つてゐた。

順吉はその後影をぢつと見送つてゐる中に、彼は堪らない苦しさを感じた。『あんな氣の弱い男でも思ひ詰めて氣違ひになると、將軍と親類だつたなんて云ひ出すんだ。恐しい苦しいどん底に追ひつめられたら、誰だつて何をするか判りやしない。俺だつてもつと一層窮迫したならば、本當に死ぬ氣でなんでも出來るようになるかも知れない。けれどもどうかして本當の狂人だけにはなりたくない』彼はさう思ひながら、二三ケ月前に讀んだ、Oの感想文『正氣の狂人』の事を心に思ひ浮べてゐた。そして俄かに思ひ立つたように、今まで並べてゐた店をばた〳〵と片附けて、暗い道を撰つ

て車を引きながら自分の部室へ歸つて行つた。

翌日からその家は、又たもとの通り靜かで陰氣な家になつてしまつた。古道具屋の爺さんは相變らず古ぼけた物をひねくり廻してゐるし、產婦のような顏をした細君は、愚痴をこぼしながらいつも忙しさうに洗濯ばかりやつてゐた。山田の婆さんは夜になると提灯をぶら下げて腰を曲げながら、救世軍の行列について歩くし、まだ女の歸つて來ない桑は野、二階で寂しさうに輾轉んでゐた。たゞ順吉の隣の部室からは、元のように尖つた聲で怒鳴りつける婆さんの聲の聞えて來ないのを、彼は氣の毒に思ひながら、又た喜んでもゐた。

一週間ほどたつて、久保田の婆さんの處へ伜が病院で死んだ報知が來た時には、一と月遅れ位で降り出した五月雨が、もう三日も續いてゐる時だつた。そして夜店も出せない順吉は、蒼い顏をしてその部室に退屈さうに轉がつてゐた。

母を招ぶ

室生犀星

一

その花時も過んでしまつてから、また母を呼んで、東京見物をさせようといふ話が、何よりもさきに出たのである。

「いつそ二人で迎えに出かけようぢやないか。國へは久潤りだし來月は休暇もあるんだから。」

「さア、二人で迎えに行くのはすこし大がかりだ。あまりさわぎ過ぎるやうな氣もするぢやないか。」

「それもさうだなア、だがおれは何時でも出かけられはしないから、さきに決めて置かないと困るんだ。」

「まアこんどは寢臺にでも乘つてきて貰ふんだ。年取つてもまだ軀がしつかりしてゐて、姉のところなどへ三時間も汽車でゆすられて行つて平氣なんだから……。」

「ぢや、さうするかな。」

池の端にゐる義兄の治三は、はじめの强腰をすぐに弱め、やはり母親一人で出てきて貰ふことに同意した。はじめ花時にといふ話が出てからも、その事を搬ぶのが面倒になり、一日延ばしになつてゐたのである。私だけの考へでも一度は東京を見てから死にたいといふ母親の心をも、絶えず氣に引つかけてゐたので、どうせ呼ぶなら早く事を運びたいと思つてゐながらも、いさとなると、停車場で出迎えるといきなり啼き出されさうで、それだけを考へても氣がすすみ兼ねた。

「それぢやア、いつたい何時にするかね。暑くなると出歩きが大變だし臆劫にもなるからな。」

「それもあるんだ。月の終りはどうだらう、梅雨前のうちにね。」

「すると何か今月のかい。」

治三は、商人らしく眼で素早く何かを考へるやうに瞬かした。

「明日にでも手紙を出して豫告しておいてね。實はまだその話を毛ほどもしてないんだ。」

「そいつあ、すこし暢氣だつたな、とにかくすぐ出して呉れ。旅費なぞはどうするんだ。」

「それは僕の方で引受けよう、唯、細かい見物の案内をたのみたいんです。」

「よし、引受けた。」

話が決つてから、治三は、葡萄の靑い花蕚の散るのと、その棚の竹目にからむ葉や莖の影が、藍しぼりの浴衣地の程よい影を落してゐるのに眼を遣つた。下町者らしく珍らしげに瞶とれてゐた。

「おふくろもずいぶん年拾つたらうなア、頑固なおふくろだつたが……。」

「七十二さ。」

「そんなになるかね。手の早い人で、すぐ撲られたもんだよ。口よりその方が早いんだからね。」

「煙管でかい。」

「煙管ツてやつあちよいと手應えがびりつくんで、ずんぶん痛かつた。」

おほげさに、治三は、肘のあたりを擦つて見せてから大聲で微笑つた。十二歳まで育てられ、それから實家へ引取られて、徴兵が濟んでから上京した治三は、こんど母親（治三は生みの親よりも却つて私の母をおふくろと呼び馴れてゐた。）に會へば、十七年振りだつたのである。

治三は、呉服物で四五年のうちに、かなり金廻りをよくしてゐたが、依然、七軒町の小さい長屋に住んでゐて、行商をおもにやつてゐた。「君はかういふ家にゐるので、ちよいとおれの長屋の方が氣恥かしいんだ。」と言つて、濕つた路次の奥にある自分の家ばかり氣にしてゐた。

「家なんぞはどうでもよいさ。僕なぞは外にないから斯うやつて居るのさ。」

「いくらなんだ。」

治三は、何がどれだけかかると云ふことまで執着く尋ねやうとしたので、私は別の話をし出した。すると治三は又話し出した。

「おれの家は君も知つてゐる通りで、うちのやつが天理教なもんだから、やつには、小使より外には持たさないんだよ。つまり天理教へみんな持つて行くんだからな。いや、そりやね、無理もない話なんだよ、はじめを言へばおれの方が惡いのかも知れないのさ。」

せつの娘が醫藥でどうにも快くならなかつたので、天理教を信じてから大へん快くなつた。それからその娘が死んでからも、細君が夢中になつて本所の教會へ行つてゐると云ふやうなことまで言つて、

「止めたつて聞かないから此頃は打棄らかしとくんだよ、それでも何んでも此頃は先生様なんだとさ。」

「さうか。」

興もないことなので、私はその話には打身になつて聞かれなかつた。それよりも母親が出てきてから、何處と何處を案内しようかと、それればかり氣になつた。よく田舍の老人らしいのを連れた私くらゐの年輩の人をみると、やや少し極りわるげにしてゐるのが、言はずとも年寄りを伴れてゐるといふ理由からだと知ると、電車のなかでもそれほど惡い氣がしなかつた。上品な老齢者をつれた若夫婦といふものは、ともかくも外側からは善くみえるもののやうな氣がした。しかし自分の母親のことを考へると、その上品とか、老齢者らしい澁みとか、おつとりした温良さとか私の考へてゐるそれとは反對なやうな氣がして、きふに氣鬱ぎがしてならなかつた。

さういふ母親を呼ぶといふことも、よく考へると、自分らの生活を見せ安心させるといふことも、かなり下らない見え透いた此方ののぼせ方を感づかせるやうな氣がした。つきつめて云へば、萍のやうな暮し向きを鮮やかに見せつけるといふことも、その頼りなさを知つてゐる私としては、きふに陰氣な、出しやばり過ぎたことのやうにも思へた。日南の强烈な光に曝してみると、わけもなく縮れ上つてしまふ不良い一枚の紙片のやうに、その繪の具までみるみるうちに色が褪め、しまひに剝げ落ちてしまふやうな欝陶しさを、なんだか曇天のやうな自分の心の内に感じたのである。よしそれが母親に安心させるとか喜ばせるとかしても、内側がガタガタだつたりしてゐたら、そしてそれをちやんと見透してゐるものがあつたら、とり返しのつかない笑ひ事のやうに思はれてならなかつた。私はだんだん弛いしびれのやうな悲

しい氣もちに、ぼんやり座つてゐながら取りつかれてゐた。七軒町の義兄にしても平常はすこしも往き來しないでゐたのだが、こんどの話がでると、話してゐるうち夢中になり、すこし話頭がそれ出すと引込みがちに思案してゐるのも、なんだか卷き添ひに惹きいれるやうな氣疎さをかんじてならなかつた。

「とにかくおれも停車場へ出るから、着く前に知らせて呉れないか。」

治三は、立ち上ると、前掛きを合しながら言つた。

「知らせるとも、では。」

治三は、その他のこまかい事まで、非常に重大な事件のやうに取扱つて、歸つて行つてしまふと、私は家の者に、母親への手紙をかかせた。自分で書くよりその方がよいと思つたからである。

「とにかく十日くらゐの日數を切つておくといい。おたがひに永びくと面倒だから。」

さう私は家のものにいふと、母親はむつかしい人だからそのつもりで居るやうに、それとなく注意した。

「むつかしいなんてことは、初めつから左う考へるからです。わたしには何んでもない氣がするんです。」

家のものは、しうとめなどといふ考へにコダわらずに、どういふ御馳走をしたらよいかとか、動物園へは自分であんないをするとか、さういふとき子供をつれて出たらよいとか、お湯へは一番さきに入れるものであるとか、そのほか母親によく似合ふ地味な反物を買つて仕立てて田舍ものらしく見せないとか、さういふ樣樣な空想をこまごまと話しつづけた。そして最後に、

「いつ來ていただくんですの。日をきめなくては。」

「さう、月のなかばだな。それとも終りにしておくか、いや、ずつと月末の方がよからうぢやないか。」

何んだか一日づつでも延ばしてをけば、それだけ混雜さが惑はせる氣齒を安めるやうな氣もし、ぐずりながら晴明りしかつた、とは言へ、一方ではなるべく早く事の濟むのが重りかかつた暗みを明るくした。「おばあちやんが入被るんですよ。泣かないで溫和しくしてゐなければいけません。」と言つて稜してゐる家のものの前でも、母親がなるべく頑固でなくなつた事を自分ひとり決めに考へ、そのことに依つて吻としてゐた。しうとめといふものに初めて逢ふ家のものは、母といふものを少しも知らずにゐるのが憫れまれた。

二

上野停車場の敷石をあちゆき此方ゆきしながら、私の頭にからみついた母親といふ考へは、むしろ母親の性情の善い方ばかりを、めくら捜りに考へてゐた。——《何んでも紺屋の廣い庭さきへ、そこが遊びよい馴馴しいところだつたせいか、いつの間にか紛れ込んで、しんし張りをした長い海苔色をした干し物に、指さきを當ててそのまま走ると、草の葉を唇にあてて鳴らしたやうな澡つたい音がした。しまひに苛々しいしんし張りの弓竹をカチカチと引つぺかしたりしたのは、まだよかつたが、藍甕の澄んだ上皮が黑水晶のやうに光つてゐるのに、その、しんし張りの弓竹で搔き廻したりした。がそのとき私はふいに腰のあたりを撲られ、間もなく母親の前へ座らせられた。そして酷く叱られたあとで、母親は氣狂ひのやうになつて私の手をぐいぐい引き擦るやうにして、紺屋の、くらい土間で、なぜ此の子供を撲たなければならなかつたか、藍甕のあるだけ買ひもどしてやつても此の子の腰がなほるかと、母は、土間へ座り込んでなりの高い紺屋のあるじを決めつけた。さういふ母のうしろに立つてゐた私は、藍甕の幾つかが、埋められ、靜かな廣庭の光にさそはれながら光つてゐるのを、さういふ時に起りやすい後悔された濕つた氣もちで眺めてゐた。なりの高い

紺屋のあるじは聲の高い母親の氣振にすつかり驚いて、妙に物を避けるやうな風情で、母親に言ひ込められてゐた。(今になると紺屋のあるじの困つてゐた顔付も分つた。)そして外へ出ると、くらひ垣根のところで、すつかり蒼ざめ顫えてゐる母親は、物もいはずに私の頭をふたつみつ張りつけて置いて、「汝のためにかうして近所ぢゆうに恥を掻いて歩かにやならん。」と、ぐいと手を引いて歩き出した。)――。

時計をみると着車には、まだ十五分ある。とにかく一晝夜かかるんだから隨分勞れてゐるだらうと思へた。歩廊の方へ這入ると、家のものは其處に赤ん坊を負つてゐる身なりの着くたびれした女の、その子供の誕生月などを問いてゐた。さういふことにも母親らしいひとゝりでに氣づき出した好みが、私にはべつに氣にならなかつた。

一分のちがひもなく列車がずるずる這入つて來た。なぜかうも正確なものであらうと、いやに胸づかへする自分の呼吸づかひをあざけりながら、うすぐらい寢臺車の窓かけの靑みを幾つも素通りさせ、目にとまる人かげに鋭い直覺をたのんだ。母親が窓の方へ向き、兩手で腰かけの端をおさへ、ちやうど二階にばかり住んでゐる人がよくする疊をおさへるやうな、その癖づいた手つきをしてゐた。その顔に私の目がとまつたときに、うす暗い博物館の内部で見たことのある、急に思ひ出せない或る標本にあつた茶褐色の、感じの愉快でない顔付を思ひ出した。私は妻をふりかへりあの人だよお母さんはと左う曖昧な聲音でささやいた。

家のものはすぐ母親の手を執り、母親はそれにすがり、私は小さい汚ない荷づくりを車夫にもたせた。が、どういふ端みだつたか、ひとりでに何かが左うさせたものか、私は母親の手をつかんでゐて、冷たい荒粗な、竹箒のそれの應へをうそさむく感じた。

「ほんとうによく入らしやいましたわね。どんなにかおつかれでしたらう。」

母と私とに、家のものはかう言つてゐるうち、私はこの女が家内であることを紹介してほつとした。

「煙草を喫むと火でも起つては大へんぢやと思ふて、止めときました。寢る汽車は恐ろしい。」

母親はかういふとボーイには菓子をやつたが、よその人は何にも遣らなんだとも云つた。家のものは、この母親がまだ腰もまがらずにゐるのに驚いて、何度もその事を私への好意をしめすために囁いた。

「よく出てきたものだ。」

私の考へでは、さうひとりでに言ひ出されるほどだつた。「孫は。」といはれたときに、「まだ小ちいから家にゐて待つて居ります。」と家内がこたへた。「いい人ぢやありませんか。こんなに優しくて。」と家内が又言つた。「いい人はいい人だよ、むかし頑固だつただけだ。」私はさう答へた。

車は上野公園から谷中へ出て、根津の大通りをまつつぐに走つた。母は耳が非常に遠くなつてゐることが、先刻からの話が飛んでもなく逸れがちだつたのに初めて感づいて私どもは微笑つた。ゆるい大きな町なみの曲がり角で、母親は、それに目をしよぼしよぼ遣つてゐたが、ふいに目をとめ、私のそで口を惹いた。

「安江町に似てをる。」

と、左っ聲をかけられ、その根津の曲り角に目をとめると、どうしたものか、電柱のきわに八百屋があり戸板がその電柱に寄せられてあつた。郷里の停車場近くの町格構によく似てゐたのである。母親の頭がさう大して鈍つてゐないのに氣がついた。私は私の母親がすぐ目の前にあるのが、有り得ないものがあるやうな不自然さを感じた。あたまは黒い地がなかつた。

(母親はすぐ家の前の川になつてゐる石垣へ出て、晩は遲くまで、兄と、その嫁のかへりをげぢげぢな感情で待つてゐ

た。十年前だつたから六十のときだつた。そのとき私は腹のなかで、老犬でも雌になると、馬なぞと同じいやうに氣が狂ふものだといふ事を考へてゐたほどだつた。嫉妬とか憎惡とかいふものでなく、いきなり取つついて食ひ散らかす屋根猫によく似てゐた。——母親の、その容貌が崩れはじめたのも、兄嫁をいびりつけるために、瞳孔なぞもぐりぐりに剝り拔かれてゐた。それと前後して父が死に、永い間ゐた家を賣つてしまつてから、母親は一方に尖がつたがりがりな氣もちゝ、一方には年老らしい何も彼も諦めるといふ風情も、頑固な性情から少しづつ沁み出たらしい。——姉が嫁にゆき、兄は市街から離れた町に轉任してから、母親は寢るにも起きるにも、いつも一人で、耳が遠いので時計の音もきかずに暮してゐた。孤獨もひどいが何時厠で打倒れてもそれきりのやうな中でも、べつに寂しいとも言はずにゐた。酒が飲けるので、その酒くさくなつて冬は炬燵にはいつたままでゐることもあつたのである。)

私はこの川根岸の奥さんの言つたことを不意に、車が自家に近づいたころにぼんやり思ひ出した。

「生みの親なんてものはそれほど子供の頭に成人してからも殘るものぢやありませんよ。どうしても永い間育てられたといふことが、自分で見たり感じたりしたことだけに永く殘るものですよ。」

さう言へば私のいまの頭では、子供のときに慕つた生みの母親が古い寫眞のやうにすつかり色がなくなつて、まざまざと、今はこの母親が目にはいつてくるのだつた。直接憎み合つたりしたのでないかぎり、生みの親のかんじは分明りしてこなかつた。ではお前の母親はこの人かいと露はに言ひつけられると、それにはすぐ答へることのできない執拗な、またそれに自分の感情のすつかりを打ちあけるには、もつと殘したい氣もちがあつた。と云つても他に母親のあらう筈はない。だが、私の奥にはやはり何かが殘つてゐて、それの慕つてゐるものは自ら別物のやうだつた。さういふ氣もうはただ餘分に蓄へておくだけで、どこへそれを打ちあて温めるといふ的はないが、そつとして置きたいのは實際で

ある。べつに美しい母おやを胸のところでこさへ、それを空想する子供らしい考ではない……ないが、何故か私にはさう思へてならないのである。

三

母親は庭へ出たり茶の間にゐたりして、その黝ずんだ姿を老人といふものの居たことのない家庭に、影をひいてゐた。結局それがしまりない家にどこかつや拭布（ふきん）を當てたやうな、これまでにない磨きを出したやうな調和をあたへた。老人のゐない家庭といふものは新しい長屋に住むやうな明るさをよりけばけばしく感じるものだ、とさへ私には一切が好ましかつたのである。

も一つは私のやうにさまざまな意味で、父や母に迷惑をかけたものが、どういふ形式にせよ、その田舎の母としばらくでも一緒にゐるといふことが、母おやが東京といふところを一生のうちにちよいとでも見たいといふ望みを遂げさせることだけでも、内輪によくよく深入りして考へてみると、こつそりした或る爽々した氣もちになるのであつた。べつに自分が世の中へ出たとか出ないとか云ふ問題を外にして、かういふ内輪な氣もちを誰でも持つものだらうと考へた。それ故、順從な、氣疎い母親がすこし腰をかがめては庭木を覗き込んでゐる姿をみると、人間の老ひくちた姿といふものは、明るい日南へさらしても彫りもののやうで、又化石になつた自然木のやうなおもしろみを持つてゐるものだと考へてゐたのだつた。

だが、それから或る朝、魚屋がきたので、東京には變つた魚があるから、ちよいと勝手へ出てみたらどうかと、私は何氣なく妻と母と三人で茶をのみながらゐるときに、ふと左う言ひ出した。老人といふものは不思議に魚や樹をよろこ

ぶものであるからと、わけもなく言つたのである。

「魚屋なんぞ見たうない、魚なぞを覗きに出るほどこれまで貧乏したことがないわい。碌なことかい。」

母は、どういふ意味にとつたのか、いきなり左う言つてがみがみ餘程腹が立つたらしく怒り出した。

「見たいかと思つて言つたんですよ。何を怒つてゐるんです。」

私はわけがわからないので、さう言つてなだめると

「いや、見たうない……。」

さういふと、ぷいと立ち上つた。家のものが何か慰さめるやうにいふと、なほ怒つて庭へ出てしまつた。やはりむかし通りだと私はきふに陰氣になつてしまつた。ちよいとしたことにコヂれてしまふと、慰さめてもコヂレを戻すやうな人でなく、益々深入りして自分で苦しんでゐる人だつた。それの悲しげな氣もちも分つてゐるには居たが、私はそのままにしておけと、家内の立たうとするのを手でとどめた。

その日まる一日ぷりぷりしてゐたので、わづか着京三日にしては早すぎるやうな氣がした。何かのくせに

「七軒町の治三が來んか。」

さう言つて最う私たちより、義兄の方をたよつてゐた。——七軒町へは着いた日も知らさなかつたので、ただ、ハガキを出したきりだつた。それは餘り騒ぎ過ぎられると困るからと云ふ意味と、あとでゆつくり逢つて貰ふつもりだつたのである。

翌日七軒町の治三は、朝早く格子戸をあけるが早いか、間拔けた大聲を出して叫びながら這入つて來た。

「や、とうたう出て來ましたか、よく來ましたなア。」

さういふと、不氣嫌だつた母親は、いきなり治三につき纒ふて、私だちをそち退けにして、十七年も會はなかつたことを、それからそれへと喋りつゞけた。

「おれの家へも泊つて貰ひたいんだが、狹くてお母さんには却つて迷惑だらうと思ふんだが……。」

治三がさう言ひかけると、母は私だちへ對ふ感情をあらはにして、

「狹うてもかまはん、泊めて下され。かまはん。」

しつこく左う言つて聞かなかつた。それより前にもし治三が泊れと言つても商賣をしてゐるのだから、案内はして貰つても泊るのは此家だけにして置かねばならぬと、私は母に言ふておいた。母もそれはよく嚥み込んでゐた。治三も間數がないので、その腹でゐた矢先きだつたので、行き窮つたやうな顏をしてゐた。

「狹うてもいいなら來なさい、どつちにしても同じだから――。」

「さうかいの、嬉しやの。」

母は、最うすつかりひとり決めにして、昨日からの不氣嫌の腹いせに、やたらに、泊る、泊ると言ひ張つた。

「ちよいと氣嫌をわるくしたんだ。それで强情を張るんだよ。」

私は治三に、もし今日どこかへ案内してくれるなら、泊るだけはこちらへ連れてきて吳れ。折角呼んだのに今から事をブチこはしてはこまるからと賴んだ。

「連れてくるとも。――おれの家はあの通りせまいし、女房は晝間敎會へ出掛けるから。」

治三は、いくらか安睹したやうに左う言つてゐるうちにも、母は、遠い耳の位置を變えながら、やはり

「泊るわいの。」

と、さう言つてきかなかつた。

「あ、さう決つたんですよ。だから泊つたらいいぢやありませんか。」

治三は、大聲で言ふと、母は、しよぼしよぼ目をしめらせた。

「さうか、嬉しやの。」

治三は、さういふ母親のかはりはてた姿を、やつと氣づいたやうに、その商人らしい小利巧な目付を瞬かせた。そして感心したやうにその弛んだ惡い龜甲のやうな皮膚をのぞきながら言つた。

「變化つたもんだなア、實際、これが庭の茶畑を趁つかけ廻して叱つてゐたおふくろたあ怎うしても思へんからな、あのころは全たく恐かつたからな。今かうしてみるとまるで別人だ。」

國訛りまで出して、治三は、ぴしぴし指を折りかぞへた。暑いせいもあらうが、くるつと膝がしらまで裾をまくつた。

「何んでも外から泣いてかへると、此方が惡くとも、そこンちへ暴れに出かけるんだからな、理屈も何もなしに一本氣で、自分の思ふとほりを無暗に通したがるんだからね。あのころは來る客毎に酒を出して一日飮んでゐるんだから耐らない。――どうだ、今でも飮けるのかい。」

治三は、左の手を口へもつて行つてみせ、母が飮むかどうかを尋ねた。

「いや、一本くらゐがせいぜいだね。もつとどうかねと言つても手を振るんだから知れたものだ。」

「さうか、一本くらゐかね。しかしまだしやんとしてゐるらしいぢやないか、からだ付きも達者さうだが。」

「とにかく此年でこちらへ來るんだから、まだまだ永生きだよ。」

「全くな」

治三は、こんどは母親の耳もとへ口をもつて行つた。

「酒もだいぶ弱くなつたさうだつてね。一本くらゐだといふぢやないかね。」

「この年だからの、みんなが飲め飲めといふひなさるがもう姆あかん。」

治三は、こんどは私の方へ向いて、「いやこんな達者な人といふものは、ころりと參つてしまふもんだよ。思ひがけないときにね。」と言つた。さういへば實際誰のみとりもなくそれこそころりと物陰でまゐつてしまひさうなことを、そのあとで氣のつきさうな參り方をしさうな人にも思はれた。

「君も子供をもつてゐるが、八つくらいまで育ててとられてしまふと、實際、誰かに向つて返してくれつて言ひたくなるものだよ。まるで夢のやうにとられるんだから。」

治三は、何かの話のつひでに、その八ツの亡くなつた娘のことを云ひ出した。「それから見れやおふくろなんさ何時まゐつたつて思ひのこすことなしだよ、そりや生きてゐる分にはいくらでも生きてゐたいのが、山々だらうがね。」とも言ひそへた。

「その亡くなつた娘はいまゐるやつより、ずつと綺倆もよかつたし快活でもあつたんだが、思ふとほりにゆかないものさ。」

さういふ治三は、すぐ又自分のことを云ひ出した。

「おれなんぞはおふくろも知つてゐる通りに、こちらへ遣つてきたときはまるで裸だつたんだからね。君が根津の下宿にゐたころに、おれはやつと人並みにくらしが立つやうになつたんだよ。あれからも十年以上は經つがやはり下らない

商賣だよ、君なぞとくらべるとね。」

治三は、こんどは話をすつり變えてしまつて、「もしおふくろに急なことでもあつたら、やはり國の方に出掛けなければならないからね。そんなときには……。」治三は、母親へきこえぬ低い聲で話し出した。

「そんなときはどうしても七子の羽織をこさへておくんだよ、どうだい、もう拵へたかい。」

私はさういふものを着る機會のないことと、まだ仕立らないことを微笑ひながら、すこしこいつは苦手だなと考へた。

「まだかい、おれは仙臺平も一ちやくつくつたが、いらない金があつたら、（一度にできはしないよ、だからちよいちよい氣をつけて置いてこさへるんだよ。）――いざとなると要るものは、そろへておいたつて惡いことはないからな。」

母が横合から治三の話を聞かうとして、その耳をせり出した。治三は、すぐ氣づいて言つた。

「七子の羽織をこさへたんだ。だから此方にもすすめてゐるところなんですよ。――耳の遠いッてやつア氣骨が折れるな。」母は、これも感心したやうに、「それはよいことをしたの。せつかく作らつし。」と言つた。

「この時計にしたつて……。」

治三は、金時計を帶の間にさぐり出した。新しい蜜柑色をした時計はなめらかに治三の手のひらに、何度もその腹をうらがへされたりした。

「つまり要るものだから、少しぜいたくだが買つておいたのさ。――それでも、かう言つたつて日本橋の問屋から町々へ廻るときは、あまり電車にも乗らないやうにしてゐるんだ。」

治三は、さういふ話し面をまとめることなしに、みんな言ひ開けしてしまつて、きふに母親の方をみて

「變つたもんだなア。」と復言つた。そして立ち上ると

「それぢや上野方面を一つ案内して上げよう、博覽會だけでも大した見ものだからな。ほら、機械で機を織るところがあるだらう、知らない？　さう、ありや是非見ておくといいぜ。あれだけでも年寄りにはおもしろからうと思ふんだ。」

母は、治三に尾いて立つた。

「では一つ頼む。」

「よし。」治三はこたへた。

家内は、母親の耳もとで

「今晩はやはりこちらに用意しておきますから、おかへりなさいましな。」

おそるおそる言つたが、母は、家内にさう言はれると、なほ一層剛情にあたまを振つて玄關へ出て行つた。

「治三のところで泊ります。狹うてもかまはん。」

さう云ふと、自分でさつさと門の前へ出て行つてしまつた。

「狹い狹いつて、狹いことに決めてしまつてゐる。」

治三はわらひながら玄關へ出た。門の前へ出た母は治三を呼んでゐた。

「あれだから困る。」

私は家内にさうささやいた。「いや、おれがよいやうに言つておくから、姉さんも心配しないで待つてゐるといい。」靜いでゐる妻に左うみんな呑みこんで、治三は日和下駄をナラして出て行つた。

夕方から酷い土砂降りになつた。家ぢゆうの雨戸を閉てなければならぬほど、庭泥がしぶきに閾際まで刎ね上げられた。

「いま時分は降り込められて困つてゐるだらうな。」

博覧会場で、治三と老母とが歩き惱んでゐるのが目にみえる程だつた。家のものも氣の毒さうにその事に口を添えた。——夜になつても、十一時まで待つてゐても歸つてこなかつた。

「とうとう泊つたのだな。」

いくらか泊ることに面倒な思ひをしてゐる治三が、たくみに歸へさうと促を掛けるほど、却つて居座つてしまつて不氣嫌な腹いせを私だちに打つけようとする母親をツイ思ひ出すと、いやな、寂しい淺猿しさを感じた。人間の、イコヂな性質などといふものは寄る年波の晴みに泌みついて、倒つても抜ききらない執拗さを見せつけられたやうな氣がしたのである。

十二時すぎに、「今晩はおかへりにならないんでせうか。」と家内が言つた。「歸へるまい。」と私はこたへながらも、ひよつとすると明日の晩もあちらで泊るだらうと、それがさう想像されるほどの母親であつたことを、いまいましく考へた。

四

埃と氣疲れとを、一直といふ料理屋で足を延したころには、卵の白みのやうな光らない夕方の光線が中庭の青い笹の上にあつた。打水の冷しい匂ひが一枚選りに枯葉を拔いた敷徃や置石の上に立ち罩め、足袋をぬいだ此の座敷へも濕りをながした。

「あれが女中かいの。」

母は、すぐ廊下をゆききする五十近い、小白い色をした中婦をふしぎに眺め、さう尋ねた。

「あんな年をして下女をしとらんならんとは、何て悲しいこつちやらう。」

黒繻子の帯をしめ、小さいこざかしい丸髷を結つた姿が、そのちよこちよこした歩き振りまで、母の目には不兄討な印象をあたへたらしかつた。私にもそれがあまりに年寄りであることが氣になつた。

「人間に甲斐性がないからぢや、ああいふ人は死ぬまであんなことをしとるものぢやらうわい。」

池に臨んだ脚高な手摺に、だらりと靠らせた袂がいくつも入り亂れ、三人の半玉がこちらの座敷から正面に、きわ立つて繊い頸首をならべ、喉の奥にかかるやうな圓みのある聲で何か立ち話をしてゐた。

「ありや藝者かの。」

母親は、しばらく眺めてゐたが、すぐれいの批評が出た。

「ああいふ妓を連れてあるいたら、大枚かかるぢやらうに、物好きな。」

池の鯉が夕方の羽虫を餐るのであらう、幾疋となく光る鋭い水柱を立てて跳ね上つた。それがすこしも斜にならないで棒立ちに飛ぶのを見ると、魚はななめに飛ばないものかも知れないと、靜まる波紋を瞻入りながら思ふた。

若い時から酒席の數をしたことのある母は、落ち着いて献酬をかさね、私をはらはらさせるところがなかつた。鮎を頭から舐る私を却つて女中の前で、不行儀らしく見せまいと「こんなことを平常はせん子ぢやけれど、時々こんなことをやつて見るのぢや。」と言つたのには可笑しかつた。――氣がつくと、半玉だちが私達の方を向いて、指差しながら田舎の婆さんとその子息との盃のやりとりをくすくす笑つてゐた。

女中が氣を利かし、漬物を小刻みに齒にあふやうにして來たのを、母は箸のさきで指さし、賞めた。

「氣のきいたことぢや。」

そして女中にも盃をやつた。

一直を出てから、いくらか氣嫌がなほつてゐたが、やはり治三のところに、二タ晩も泊つたことを、さうして却つてよかつたとも當つけて言つたりした。

その日私と家内との夏の羽織を持つてきた呉服屋が、玄關さきへ來てゐたときに、母は、庭へ出、芭蕉の芽の殖えたのを覗き込んでゐたが、私は家内に早く呉服屋をかへし、なるべく見せない方がよい、わけても家内の物があるだけに何彼といはれたら煩さいからと思つたからであつた。だが、芭蕉の根元から立つた母は、すぐ一間隔てて、玄關を眺め、そこへ出かけて行つた、と、すれちがひに家内は品物の楮紙の包みを簞笥の上に乘せたのが、恐らく氣がつくまいと私まで考へてゐたのである。

だいぶ經つてから、さつき簞笥の上に仕立物がのつてゐたが、もう收まつてしまつて見えない、あれは何か、と、庭に立つてふいち草に遣水をしてゐる私に囁いた。やはり知つてゐたのか、しまつたと思つたが、何んでもない顏付でそれを家内に出させて見せた。こんなのなら始めから見せればよいのにと、自分でも變に隔てを妻の手前に持ち、母の、その氣もちを破いたのが悔まれた。ひとりでに母がよくさういふ仕立物にいふ小言を知つてゐたため、ツイ思はずに隠し立てをしたのが、さういふ隔たりを持つのが自分でもあさましかつた。

ふしぎに母は縞柄などを賞めたが、私だちの隠し立てをしたことに別に神經をつかつてゐないらしかつたのに、なほ一さうこちらの遣口がよくなかつた。母では埃でもかかるくらゐの考へで蔵つたものとしか思つてゐないらしかつた。母の性質を測り過ぎたためにドヂを踏んだことも、こちらの氣がまがつてゐると、對手が對手だけに眉をそけるほど物

寂しい氣がした。

だが、母はまだ二つにならない嬰兒に、どつかすると、茶や湯をかくれて飮ませることは、病氣ばかりしてゐる嬰兒のことゆえ、神經質になつてゐる私には我慢がならなかつた。

「嬰兒ちゆものは頸に火のつくほど喉が乾くものぢや。」

さう言つてきかなかつた、そのうち腹をコワして良くない綠ばんだ便をしたので、私はコダわつて言つた。

「やつていけないつて言つてゐるのに、あなたが碌でもない可愛がり方をするから、これを見なさい。」

綠色の便をさしつけたが、母は、「わしが子供の腹をコワしたといふのかい。わしはそんな事をした覺えはない。」と眞赤になつてしまつて

「わしがしたと言はしやるか。」

眞向けに煮え立つた。しまつたと思つたが母は頓着なく怒り出した。

「何ぢや、葛湯のやうな山羊乳を飮ましておいて、子供を育てることも知らんくせに、何ぢや。わしらはまだ乳ばなれせぬうち、お前にはさかなを食べさせた。そいで、そんなに大きくなつたのぢや。お前だちの爲ることは聞だるこうて見て居られん。」

「むかしと今とはちがふ。」私はさうぶつきらに言ふと

「なかしも今も同じことぢや。子供にかはりがない。」

なるほど子供にはかはりはないが、體質にかはりがある。さう思つても私は默つてしまつた。――そのうち、十分ほど過ぎると、ぷいと居なくなつてしまつた。女中に池の端への道順をきいてゐたさうだが、そこへは絶對に行けさうも

なかつたから、そこらを一ト廻りしてゐるのだらうと考へてゐた。

「恃々しくじつて了ふ。どつちも惡いのだから爲方がない。」

私は腹の中で呟やき、そこらの青い垣根のあたりを年寄りらしく不愉快にいらいらしてゐる母親の、歩きぶりまで考へると耐らなくいやな氣がした。子供の寫眞を郷里にゐると決つて抱いて寢てゐると書いてよこしたり、かうして來てゐても父の寫眞を飾り立てて、朝茶を汲みよけてゐるのなど思ふと、こんどはその一本氣が誰にも嚙みわけられないで、陰でばかりわるく言はれてゐさうで淋しい氣がした。

《何んだかさういへば固いものを頰張らせられたおぼえがあるにはある。おれが大さう泣きつづけてゐたといふことも聞いてゐる。臍がぐりぐりとえぐり出てゐるのも、全く、小さいときは不思議におれは、あさりの剝き身のやうな臍を、いつも指さきで悲しげに弄くつてゐたことをおぼえてゐる。やや大きくなつてもそれをどの位恥かしがつて居たかも知れない。だが嬰ん坊のときに泣き過ぎたものが臍がツン出てゐるのだといふことは、ずつとあとから知つたことだつた。》

《おれは白い曇つた光の方へばかり向き、ひたひたにその手で水のやうな冷たいものをおさへ、泣けるだけ泣いてゐた、とも思はれるのだ。なぜだといへば、かうして自分の子供の毎日をみてゐるとおれとべつに變化つたところがない。おれもやはり毎日退屈に仰向きになり、はてしのない白い曇つた日を見てゐたからである。おれの乳母は死んだときいてゐたが、停車場近い裏町にもうかなりな婆さんになり、まだ生きてゐるさうだ。おれは乳母をおぼえてゐる。》

母は、それから二時間も經つてから、ぼんやりかへつて來、たばこを喫み、話しづかれたあとでする人のそれに似てゐる、ぽかんと無表情なさむしい顔をしてゐた。さういふ顔を私はしばしば眺め記憶えてゐる。ひどく掃除をしたあと

とか朝食後とか、私どもを小びどく叱りぬいたあととかに能くする無表情な、味氣ない顏である。――私は何處へ行つてきたかとも問はずに、その顏をさつと素通りにさせるくらゐの視線で、自分の室へかへつて座つてゐた。けれどもそのぽかんとした顏はなかなか消えやうとせず、茶褐色にわたしの瞳孔内に取りついてゐた。兄、姉、さうして治三や私をそだてたが、母親自身は生まず女だつた。どういふわけだか知らない。知らうと思はない。ただ母は生むことなく、ただの一度もなくさうして私どもを育てたのである。此のぽかんとしてゐる顏を仔細に考へ込んでみると、よくわかつて來るものがある。若いときからさういふ物忘れした顏をときどきにする癖を、七十二になつた今まで地べたに引摺つてあるいてゐるのである。一人でも自分の腹をいためて生んだら左ういふ拙いさむしい顏をしないであつたらうに。もつと優柔な心榮えをしまつて來たらうにと思はれるのである。

なるべく母のそばへ行かぬやうにしてゐると、母はやはり話さずにゐたが、茶の間を離れずにゐた。そして子供が泣いても別にいままでのやうに綾さうとせず、剛情におし默つて立たなかつた。

「伊織のおばあさんのところへ行つてゐたらしいんですよ。すこし六つかしくなると必然ゆくんださうです。」

その伊織は、やはり國のもので近くにゐて行き來してゐたので、今朝そこへ腹立ち紛れに行つたものらしかつた。

「さうか。」

それきり私は家内にも何もきかずに置いたのである。むかしからのくせで、誰か口説き對手を見つけると、その人にしがみついて喋らずにはゐない人だつた。偶然にそんな人をすぐさま見つけたのも、母親らしく可笑しかつた。

「せめて伊織のおばあさんくらゐに靜かにしてゐらしやるといいのに。」

さう家内まで言ひ出したので、私はふくれたやうな顏付でしやべつた。

「母は自分より上のものと交際つたことのない人だ。家も賣り子息とはいつも離れてゐる孤獨な人だから、氣の毒がるのは當り前だ。おれにしても老ひてあの境遇だつたら、ああいふ性質になるかも知れない……。」

全く私なども年老ると、なんだか陰氣な、蝉のやうな顔付になりはしないかとも思はれた。それに性質にしても、もつと別の意味で複雑な老人になるやうな氣もした。老ひて晴々した顔付をしてゐる人をみるのは快いが、老ひてなほ沈んだ顔をしてゐるのに出會ふと人ごとのやうに思へない。

「寄つてたかつてああいふ性質にしてしまつたのだ。それに持ち前のも合せると、あの年寄りには背負ひきれないものが、知らず識らずのうちに折重なり、あの人を上から押潰さうとしてゐるのだ。だからそいつを背負ひきれなくなると、ころりと參つてしまふのだ。」

私はさう獨り言をいつてみたが、家内は默つてゐた。しばらくしてから、母が夜中に厠へゆくやうな振りでちよいちよい子供と家内のゐる部屋を覗いて行くやうな事があると言つて

「どうしてでせう。」家内は、ふしぎさうに「そりや襖が暑いから開けておくには置くんですが……。」と附け加へた。

この話は、肌寒いまでに私を悸とさせた。私は母がきてから離れに寝てゐる。だから此方のことは少しも知らない。

「はばかりへ行く途中だから、何の氣なしに覗いてゆくのさ、それに嬰ん坊のことも氣になるからだらうぢやないか。年寄りつてものは其麼ことに氣を廻さずに不意にやるものだよ。氣を廻すのは却つてこちらなんだよ。」

さう平氣で答へたが、固いものが胸に痞へるやうでならなかつた。夜中に飲む水やその他の用事で母のねてゐる部屋へはいると、いつでもちやんと眼を醒ましてゐらつしやいますと、さうすることが恐いことのやうに、おづおづ女中が家内に話してゐたと、そのことをも取りついで言つた。

「何んでもないことさ。寢つかれないのだらうよ。」

どこまでも取り合はないで居るうち、私はものゝ底からまだ死にきらない青い芽が、スイと、枯草の中からさし覗いてゐるやうな氣味のわるい蠢きを、心のなかで濁つた氣もちで考へてゐた。さういふ事くらゐ有りさうなことで、却つて本氣で母が左うやつて覗いてみたかも知れないとも考へた。或ひは疑ひはやはり此方にあるのかも知れないとも、済まない氣がした。

(母は高い聲でよく夜中に、兄の名を呼んだりした。何故ああ呼び立てるのだかと、私はひとりやきもきしてゐたことがあつた。新妻をもらつて間もない兄は、すこし眠るとすぐ母親の呼ぶ聲に起された。――母親の部屋と、兄の部屋との間にある田舍の廣い茶の間を、兄は夜寒の寢衣の襟をかき合せながら、用事のないのに母の呼ぶ方へ行かなければならなかつた。)――そのことも、いまの私の上に來てゐるのかと思ふと、にがにがしい微笑がこぼれるやうな氣がした。いつも夫婦きりの暮しに、かういふ點綴物のあるのもちよいとよいやうな氣がした。が、何だか奥暗いところから落し覗かれてゐる窮屈さをも感じた。

それに晩になつて、いつでも家内や女中がなるべく早く寢させようとして、かはるがはるに

「おやすみになさいまし。お床もできて居ますから――。」

と言ふと、きまつて機嫌が惡くなるらしかつた。或る晩、おそくなつて或る會合からかへつてくると、母は、まだ茶の間に泰然と座り、煙管のヤニを通してゐた。何となく怒つてゐるらしく思はれた。

「なぜ早く寢させないんだ。十一時になるぢやないか。」

家内は、さういふ私の口をふさぐやうな手つきをして

「おやすみなさいましと言ふほど、機嫌が悪くなるんですから、起きてゐると被仰るまゝにしておいたんですの。」
「さうか。」
私は茶の間へはいると、「寝てしまへばいいのに、今まで起きてゐなくともいいのに。」と言つた。
「いゝえ、お前がかへらないのに、さきに寝るのも何ぢやと思ふたから、起きてゐたのぢや。」
さう言つてやはり泰然としてゐた。やつと次の間へおくり込むと、宵のうちから黙つて座つてゐらしつたので、何と言つていいか分らなかつたと、家内が言つた。――れいの、もの忘れしたやうなぽかんとした顔付で誰とも話をせずにゐたのが、目に冴えて映つてくるのだつた。イコヂで、そのイコヂゆえに自分で寂しい気もちへ飛び込んでゐることを考へると、どうにもない事に思はれた。

五

出發の前日になると、母は、こんなことをぼんやり言ひ出した。
「手紙にも書いてあつたとほり十日になつたから、最うかへります。」
やはりああいふ風に日を限つた手紙を出したのが、悪かつたやうに思はれた。
午后、七軒町の治三夫妻が、土産などの包を持ち、そとは非常に暑いと汗を拭きながら這入つて來た。
「いくら歸へるんだと言つても泊る泊るつて聞かないんだ。黙つてゐたら最う一ト晩も泊つたかも知れない。昨夜でも待つてゐるだらうと思つたんだがね。」
「いろいろありがたう、實は晩おそくまで待つてゐたんだ。」

「さうだらうと女房と話してゐたんだよ。何しろまだ頑固だからな。」

治三は、妻君をふりかへつて、ちよいと持てあましたやうな顔をしてみせた。妻君は、きうくつに微笑つて見せ、

「こちらできつと待つてゐらつしやいますからと言つても、かまはんと言つてお聞きにならなかつたんですよ。」

私は治三とは二つばかり上の妻君が、商人の内儀らしい悧巧さをその表情の上にもつてゐることを感じた。

「あれでなかなか自分を押し通すことに、すこしも弱みをみせないんですからね。おいそがしいところを済みません。」

「初めつから狭いけれど一ト晩くらゐお泊めしたいつて左う言つてゐたんでございますよ。」

治三は、土産の包を母のそばに置いた。三包になつた繪葉書と此間行つた帝劇のすぢがきの本まで添えてあつた。「いや、笑つちやいけない、これで田舎へ行くと何から何まで話の種になるんだからね。君だつて泉岳寺で忠臣蔵の石版摺を買つてあげたつて言ふぢやないか。あゝいふものを田舎者は喜ぶんだよ。あれを諸方へ見せてあるくんだからな。」さういふと、「荷物はおれが荷作りをしてやるよ。どこにあるんだ。――さうか、よし。」治三は立つて、茶の間にある母への土産の荷作りをはじめた。

「これだけありや結構だよ。あれで婆さんのくせに見栄坊だからな。……足袋を脱がなくちや暑くて――。」

治三は、足袋をぬぐと、女中に「ハタいてちよいと日南へ出しておいて下さい。何しろ汗掻きだから。」と一人で忙しさうに立ち働いてゐたが、妻君は、母親のそばへ座つて天理教信者らしく落着いてゐた。

「でもお前、天理教つてものは屋敷を拂へと言ふぢやないかの。飛んでもない……。」

母は、かう皮肉に出ると、妻君は頭をよこに振つた。

「いえ、屋敷を拂へではなく、惡しきを拂へつていふんですよ。間違つたことばかり傳へられてゐるんです。」

「さうかの、わしは又た屋敷を拂へたまへ〳〵いふのかと思つておつた。」

荷物の麻繩を手に、片足を行李にかけて引締めてゐた治三は「どちらでも同じことなんだよ、つまり屋敷を拂ふやうなものさ。」と言つて笑つた。けれども妻君は苦笑したきりその事については何も話し出さなくなつた。

「お前のものは天理樣に捧げたつて關はないが、おれのものは捧げたりなんかすると承知しない――と、いつも左う言つて脅かしてゐるのさ。」

治三は、いくらか低聲にさう言つて「だからおれのものは少しも手をつけはしないからいいよ。」とちらりと妻君の方を振りかへつた。

「風邪をひいてもすぐ電報をお打ちなさいまし。いつでも飛んでまゐりますからね。すぐにね。」

「さうかの、嬉しや。」

母は、すつかり妻君に惚れ、濕つた目を赤くしてゐた。

「オイ、そんな見え透いた嘘をいふと年寄りつてものは、すぐ本統にしてしまふよ。第一風邪をひいたからつて電報を打たれてたまるものかね。横濱ぢやあるまいし二百里もあるんだぜ。」

治三は、妻君に對ひ笑ひ聲でさういふと、妻君は夫の聲が母親にきこへなかつたので吻としたものの、

「だつて行けば行けるぢやないの。」と、自責的に頑張つた。

「ばか、こちらにやそんな閑暇なんかあるものか、風邪をひいたら電報を打てなんて、そんなことを天理樣で敎はつてくるのかい。」

「默つてあなたの爲さることを早くなさいましな。いちいち口を挿まなくともいいわ。」

妻君は、すこし本氣になつて怒つた。怒るのを見澄すと治三は默つてしまつた。

荷物が、まとまると、みんなで、座敷で茶をのんだ。ハトロン紙につつまれた土産の包をみてゐると、夢のやうな二週間が過んでしまひ、また田舍へかへつて行かねばならぬ母親の、弛んだ草臥れたやうな顔を頭のさきから逆に見上げた。その老眼は斑らに木の葉漏れの日ざしの上を這ふてゐた。

「わしも東京まで見たのでもう思ひ殘すことがない……。」

さうポツンと言ひ出した。自然にながれ出たやうな言葉で、私の耳には爽やかにきこえた。いつだつたか伊織のおばあさんに「あれも氣のよい子ぢやが、すこし甘いところがございましての。」と言つたといふことを、伊織のおばあさんから聞いたことがあるのを、私はうす擽つたく思ひ出した。皮肉を覗かせる言葉はちよいちよい私を刺戟した。

しばらくすると、母がゐなかつたので書齋へ行つてみると、母はぺたんと座つて何かを拜むやうな手つきをしてゐた。よくみると本箱の方へ向き、ならんだ金文字に手を合せてゐるのだつた。そのとき私はきふに汗がにじみでるほど、呆氣にとられた驚きを感じた。

「ご飯だからあちらへ行つて下さい。」

私は書齋から母をつれ出した。心は妙に苛々してならなかつた。――母は、飾り立てた父の寫眞をバスケットにしまひ込み、その初茶の冷たいのを自分で飲んだ。

「どうだ、出掛けるか。」

治三は、干した足袋のコハゼを引つかけながら、立ち上つた。――みんな外へ立ち出、子供もつれて停車場へゆくこ

とにした。外は明るい初夏らしい日ざしが、綠色を含んで、白い田端の白い道路の上にゝつらつ影をおとしてゐた。母は、さういふ青い垣根の多い國の町々を目にうかべてゐるにちがひないと、私もその考へにとらはれた。

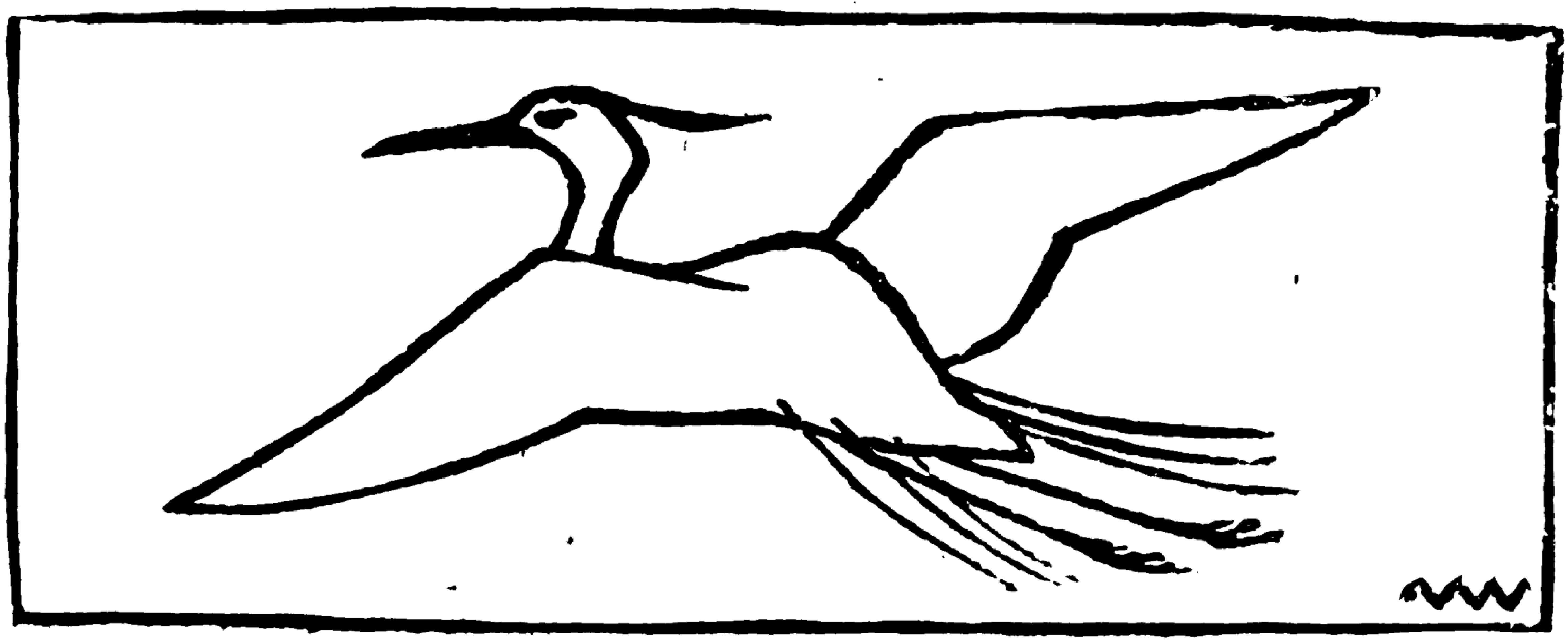
途中で、治三は、「やはり迎えに出かけなくてよかつたなア、こんなに達者なんだから。」と言ひ、「これが多分おしまひになるんだらうよ、目に見えて左う考へられるからな。」とも言つた。

人間には左ういふ豫感をもつてゐても、それをどうしようとする事もできない。いいかげんにその場を胡麻化してしまつて、死ぬものはさつさと死んだ方がよいと云ふ考さへもちらちら影をさすものだ。あきらめ兼ねといふことを、よく考へると私にさへもう失せてしまつてゐた。「だから剛情を張つたつて張らせておく方がよいのさ。つまり薬につながつてゐるやうな氣にもなるだらうからな。と言つたつて亡くなつた娘のやうに、どつちへ籤が當るか分らないからね」

治三は、重い荷物に汗をだくだく流しながら、やはり死んだ娘のことを考へてゐた。

「停車場でまた泣かれるかなア。」

治三は、こんなことまで言ひ、あとになりがちな母の、のろいその足をときどき牴牾かしがつた。



友を賣る

新井紀一

一

がちや〳〵つと云ふ音で閉ぢてゐた眼をパツと開く。と、拳銃と洋刀とで腰の周りを固めつけた一人の憲兵が、ぎゆつぎゆつと長靴の音をさせながら眼の前を通り過ぎる。さうして如何にも重々しい足取りで彼等は外の闇の中に消え、また、闇の中からこの建物の中へ入つて來る。——凝乎と默想に落ち込んでゐた私はいくど、さうした音に眼を開かせられたことか。そして、おど〳〵した眼で彼等を見上げたことか。彼等のさうした慌しげな物々しい様子を見てゐると、絶へずどこかで大事件が起つてるやうな不安に驅り立てられる。

私の右には望月が同じやうに默然と腰をかけてゐる。そのまた右には古田がこれも同じやうに默り込んで座つてゐる。工場での猛者も、こゝでは鳩のやうにおとなしく、その小さな胸をおど〳〵させて、ふとした物音にも顔を擡げたり眼を閉じたりしてゐる。

——私は默想をつゞけた。そして二十八年といふ今までの生活を顧みた。まるで葱の皮のやうに、その二十八年といふ年月は如何にも整然と平穏無事に、そして單調に、私といふものを包み、私の外形を大きくして來た。追憶の刄はその葱をザクリと斷つ。と、縱斷された廿八年の私の生活が一皮一皮、層をなして眼の前に展開される。小學校を出たばかりの少年の姿が、遠い遠い過去の霞の中から出て來る。彼は見習工募集の廣告を見て、父に連れられて砲兵工廠の門をちよろ〳〵と入つてゆく。——それは時折り私の眼に描き出される自分自身の姿であつた。それから十三年——ある時はハンマーを握り、ある時は旋盤の前に立ち、バイトを研ぎ、そしてまたある時は危なくベルトに卷き込まれさうになり、時には卷き込まれた仲間を見、兎に角一人前の職工になり、そして今日までつゞいて來た。これから先き何年、その生活はつゞくであらうか。いや永久に、尠なくとも私が五十五になつて、滿期の慰勞手當を貰つて工場を出る日まではつゞくことであらう。私は昨日まで、いや、先つきまでさう思つてゐた。ところが、運命は急轉した。その生活は今日限り中斷されるかも知れない事となつた。

ストライキの煽動——恐らく私達はかうした名目の下に、今夜取り調べを受けるのであらう。こゝに居る私とともに三人の仲間の他、石井、小野、その他二三人は既に今日、晝間の内に引致されたといふことである。が、彼等は或はもう取り調べがすんで放還されたかもしれない。それともまだ此處に、恐らくこの奥の方にでもあるであらう留置場にでも放り込まれてゐるかもしれない。私は知らない。が、たとへ此處を無事に放還されたにしても私達の凡てが、工場を放逐されることは分り切つてゐる。失業は免れない運命だ。——

「辨當はもう遲いので無いと云ふんですが、そばかうどんぢやいけませんか」

私はハツとして眼を開いた。先つきの年寄つた小使が立つてゐる。今夜は遲くなるかもしれないと云ふ憲兵の注意で、

私達は夕飯の辨當を注文しといたのであつた。

私は望月と古田の二人を顧みた。

「さう、ぢや、そばでもうどんでも熱いやつを取つて來て下さい」私は云つた。

小使は去つた。

五分、十分、二十分……時計は遠慮なく針を進める。扉の立たない、吹き曝らしの玄關には火の氣もない。三人は先つきの姿勢のまゝ、身動き一つしないで木製のベンチに腰をおろしてゐる。時々、ふうつと溜息を洩らすのが聞える。古田か、望月か、或は二人が交互に洩らすのか、青黝い煤けたやうな顏には心配げな皺が深く額に刻まれてゐる。彼等は時々、そのからだをぶるぶるつと顫はして、棒のやうにしやつちこばらせてゐる。針のやうに鋭い夜氣が、外套の無い青服ばかりの彼等の皮膚を痛い程刺し通すのだ。受付の卓子の前に控へて居る一人の憲兵は、鐵火鉢に炭火をカン〳〵起して股の下に置いて居る。私達は只、羨望の眼でそれを時々横目でじろつと眺める。

望月と古田はいまどんな事を想つてゐるのだらう。――私はチラッと二人の方へ視線を投げた。二人は二人とも眼を閉ぢて何か考へ込んでゐる。今度の事件を起したことを後悔してゐるのであらうか。それとも、かういふ結果を豫想しないでうま〳〵と自分達の要求が貫徹した場合のみを空想してゐた爲めの、所謂、幻滅の悲哀に沈つてゐるのであらうか。それは分らない。が、若しさうならば、この二人は餘りに蟲が好過ぎる。餘りに物事を甘く見過ぎてゐる。固より私達の最初の計劃は大地を叩くよりも確實なものと信じて取りかかつた仕事には違ひない。ところが、それは見んごと失敗して了つた。併し、仕事が仕事である以上、さうさう成功ばかりを夢想しないで萬一といふ場合を豫想して居ればよかつたではないか。萬一、失敗の曉には――と云ふ防禦工事を心の裡に施して置けばよかつたではないか。――

いや、だが——と私は思つた。だが、如何に二人が無計算なお目出たい人間であらうとも、さう成功の時ばかりを空想してゐたのではあるまい。二人は失敗の場合をも豫想してゐたのではあるが、この前と向つた失業といふ事に、今更のやうに當惑してゐるのかもしれない。若しさうならば、それは充分同情に値ひすることだ。おまけに望月は既に二人の子の父ではないか。その生活を支へる爲めに工場で働く以外、彼は更に休日を利用してはいろ〳〵の仕事に出掛けて行くのではないか。若し彼がこのまゝ工場の方を解傭されて、直ぐと次の仕事が見付からない場合にはどうするのだ。彼の一家四人は忽ちにして路頭に迷はなければならないではないか。古川とても同じやうな境涯である。年寄つた母親と二人、彼の得る貧しい賃銀で暮してゐると云ふ話ではないか。二人の考へ込むのは無理もないことである。——

受附の正面に懸つてゐるボンボン時計が九時を打つた。夜氣は益々鋭く膚に喰ひ入つて來る。六時に工場を出てから既に三時間。——まだ、三人の前には辨當が運ばれて來ない。

「いやに悄氣てるなア」私は呑氣らしく、しかし、出來るだけ聲をひそまして云つた。餘りに悄沈してゐる二人の暗い姿を見ると、意地にも明るい呑氣らしい聲を出さずにはゐられなかつたのだ。「だが、調べるんなら早く調べてくれりやいゝのになア、いやに待たせやがるぢやないか」

「まつたく、これぢやいつ歸れるか分らないね、寒くて仕樣がない」鼠のやうな落ちつきのない望月の眼がチラッと柱のボンボン時計に注がれ、それからその下の卓子に頑張つてゐる憲兵に向けられた。そして最後に、その眼はこの私に注がれてさう云つたのだ。

その聲に古田も、外套もない青服のからだをぶる〳〵つと顫はして時計を見上げた。それから二人はまた首を下げて一寸見ると居眠りでもしてゐるやうに今までの沈思をつゞけ始めた。私の頭もいつか二人にならつて下に垂れてゐた。

憲兵達は絶へず三人の前を突つ切つては他の室から他の室へと往復してゐる。また、その玄關から外へ出て行つたり、外から入つて來たりしてゐる。長靴のぎし〳〵云ふ音、洋刀のがちや〳〵足にぶつかる音、それは宛がら私達ち三人を威喝するやうに、森閑と更けてゆく夜の空氣を震はしてゐる。だが、直覺的に、私の心の隅では今夜のこの召喚をさう重く見てゐない或るものがあつた。なあに思つた程の事はないのだ。と極めて輕々しく看過しようとするものがあつた。それは、今夜自分達を工場から此處へ連れて來た憲兵の如何にも無頓着な、そして氣輕な、投げやりの態度が自づとさうした心を起させたのかもしれなかつた。

「君達ち三人に何か一寸訊きたいと云ふ人が門の處に來てゐるから、直ぐに支度して行きたまへ」

終業のボーが鳴る少し前、私達は事務所へ呼ばれて永田工場長からさう云はれたのだ。ビクッと胸へ來るものがあつた。が、私達はさりげない風をして、工場から門まで、掛りの福岡技手に送られて行つたのである。その時の工場長の態度と云ひ、また福岡技手の態度と云ひ、どこに一點疑ひを挿ませるやうな不安な影はなかつた。明るい顏をして明るい聲をして、如何にも何んでもなささうに私達に云つた。

「何んだか今夜はいやに寒いねえ」

門まで一丁ばかりの處を歩く間にも、福岡技手はそんな事を云ひながら星で一杯に埋まつた闇の空を見上げたものである。通用門まで來た時、私達は福岡技手の手からそこの守衛小屋に待つてゐた何者とも知れぬ青年の手に渡された。見やうに依つては、それは私達の逃走を防ぐための尾行だつたのである。何んだか不快な氣もした。福岡技手と、その青年とが何か二言三言話し合つた後、「ぢや宜敷く賴みます」と云ふ福岡技手の聲を私達は聞いた。彼はそのまゝ工場へ引き返した。私達三人はその青年の後について門を出た。青年は二十四五に見へる紺飛白の和服に矢張り木綿の袴を穿

いた、どこか書生じみた男であつた。

「一寸お訊きしたい事がありますので、甚だご足勞ですが大手町まで來て下さい」その青年は門を出る時、私達に云つたのだ。「電車で行きますか、それとも歩いて行きますか。僕の方はどつちでもいゝんで、あなた方のご都合のいゝ方に……」

この時まで私にはこの青年が何者であるか解らなかつた。T署の刑事であるか、それとも憲兵隊の者であるかと云ふことが。が、「大手町」と云ふ言葉でやつと憲兵だな、と云ふことが解つたのである。

「さあ、どうしよう？」私は古田と望月に相談しかけた。相談とは云つても、大手町まで歩くのは大へんだ、無論、電車にするだらう。――私は二人の返事を頭からさう決めてゐた。が、二人は躊躇してゐた。

「歩くつもりかい？」私は愕かずにはゐられなかつた。この寒いのに、そして腹が減つてるのに、一刻も早く歸るやうにした方がいゝではないか――と、思ひながら。

「電車賃がないんだ」と、やがて二人は同時に云つたのである。

「さうか、ぢや俺が出さう」私は二人にかう云つて、次にその青年に向つて云つた。「電車で行くことにしませう」

「さうですか、ぢや、さうしませう」青年はすたすた先きに立つて歩き出した。

三人は默つて青年の後について歩いた。憲兵隊では一體どんなことを調べるのだらう？――私の胸を先づ最初にさう云つた不安の影が掠めた。俺は一體何を惡いことをしたと云ふのだ。今日、半分からの缺勤者があつたことが何か俺の關係したことだとでも云ふのか。若しそれなら、俺には充分辯解の言葉がある。何も恐れることはない。――

併し、これから憲兵隊へ取り調べられに行くのだ、と云ふ意識は可なり私の心を重くした。いろいろ爭議中に自分の

云つたこと、した事が省みられた。あの事は法に觸れてはゐないだらうか、いや、それよりもあれで突つ込まれはしないだらうか、と、自分のした事の一切があり〱と頭に浮んで來た。

夕方で電車が混んでゐたので、車内では四人は殆どばら〱になつて了つた。第一、自分達を連れてゆく青年がどこにゐるのか、その姿さへ見失ふ程であつた。小川町で私達は電車を乘り換へた。そして、大手町で他の少しの乘客達と一緒に降りた。その時初めて青年は私達の點檢を行つた。

「淺見さんてどなたですか？」

「は、僕です」私は云つた。

「古田さんは？」

「望月さんは？」

皆夫々に返事をした。

「あゝさうですか」青年はさう云つてまた先きに立つて歩き出した。街燈のない、眞つ暗な路であつた。三人は兎もすれば先きに立つてゆく青年の姿を見失ふ程であつた。私は餘つ程、石井と小野の消息をこの青年に訊いて見ようかと思つたが默つてゐた。

「表門は閉まつてゐるから裏門へ廻りませう」紺飛白の青年はさう云つて、また大きな建物の塀についてぐるつと一つ角を曲つた。

四人は間もなく憲兵隊の玄關に立つた。そこの入口の玄關の處で、「少し待つてゐ給へ」と云つた青年はそのまゝ私達三人だけ殘して、奥の室に姿を消して了つた。そしてそれきり出て來なかつた。

九時を三十分程過ぎた時、やつと注文のそばが來た。もう冷たくなりかゝつてゐた。三人は玄關脇に置かれた靴箱をお膳にして、立つたまゝ喰べた。が、喰べて了ふとまた元のベンチに戻つて、無言の行をつゞけなければならなかつた。で、三人は木像のやうに默り込んだ。

私は外套のかくしに兩手を突つ込んだまゝ、再び默想に耽り出した。頭は自然、今夜の召喚そのものを生み出した今日までの罷業問題に入つて行つた。が、それは實に問題にならない程のみじめな失敗に終つたものであつた。とは云へ、あの工場としては今までに曾てなかつた大問題には相違なかつた。彼等工場長や技手、更にその上の役人達ちに取つては羊が急に狼になつて牙を鳴らし初めたのを見たぐらゐの驚異、恐怖には違ひなかつた。創立以來曾て一度もさうした問題の起らなかつた工場である。職工と云ふものは實に柔順な家畜である。足りようが足りまいが、與へられただけの餌をその檻内におとなしく喰つてゐるものだ。今までもさうであつた。これからだつてさうなけりやならない。――かう思ひ込んでゐた彼等には、如何に職工側の失敗に終らうとも、今度の事件はまさしく青天の霹靂であつたに相違ない。しかし、我々はその青天の霹靂をお見舞ひ申したゞけで溜飲を下げ、ひとり痛快がるのが目的であつたのではない。決してそんな事で腹がくちくなると云ふのではない。決してくちくなるのではないが諦めるのだ。これも人生に於ける經驗の一つであり、更に今後に於けるかうした場合の訓練だと思へばそれで諦めはつくのだ。併し私は今度の事件で諦めて了はれない、見過しの出來ない、ある醜いものを見た。他人の上にも、また、自分自身の上にも。それは幾度今度のやうな事件が吾々の前に繰り返され、經驗されてもどうにもならない、背信者、裏切り者だ。如何にも意志の堅い同士のやうな顔をしてゐて友を賣る卑劣漢だ。それは利己的な人間性が生んだ一面ではあらうが、併し、これは經驗や訓練がいくら積み重ねられても、人間性なるものの改造されない限り、事件の起るたびに必ず出て來る事實である。

その卑劣漢は今度の事件で二人まで出た。しかも證據を握り得ないが疑はれる者はその他尚幾人かあつた。

呪ふべき秋元、田口、——この二人の名は烙印の如く私の頭に印されてゐる。恐らく永久に私の頭から忘れられないだらう。私は先つきから凝視てゐる向側の羽目板に、ありありと田口、秋元の二人の影像を描き出した。秋元の眼の下にふくれ上つた紫色の傷痕——それはせめてもの腹癒せであつた。私は彼の顔へ石を叩きつけた。そのやり方は卑怯であつた。が、私は自分の卑劣と彼の卑劣と相殺して、尚私に自分の心を慰めるに足る理由の殘るのを見た。

二

今度の事件がいくらか問題らしい形を取つて動き出したのは、今から恰度一週間ばかり前であつた。が、問題は必ずしもその日に起つたのではなかつた。問題らしく具體化されたのはその日であつても、そこへ來るまでには可なり永い日子を要した。問題の原因は可なり前に胚胎されてゐた。

×月十五日——この日私達はいつもの通り賃銀を支給された。袋の中には豫想より更に尠ない金が入つてゐた。今更のやうに、皆んなポカンとしてその袋に見入つた。

「馬鹿にしてやがらア、これつぱかりで喰つてかれるもんか」或者は叫んだ。

「俺達はこれつきりしか仕事をしなかつたのかなア」或者はかう呟いた。

「何を云つてやがるんだ。どだい單價が安過ぎるんだ。三分だの四分だのつてケチ臭え歩合を取つてゐるのはこの工場ばかりぢやねえか。ほかの工場を見ろ、鍛工場だつて旋工場だつて皆んな八分や九分は取つてらア」次の者はまたかう云つて叫んだ。

どこを見ても三人五人づつ塊まつて、手に手に袋を持てがや〳〵云ひ合つてゐた。が、これは今度に限つたことではなかつた。いつの支拂日にも起る、毎月二回づつ見られる光景であつた。で、これまで彼等がそんな不平を鳴らす度びに私は彼等に云つた。

「當り前よ、皆んながおとなしくて甘えから上の方ぢや上げてやらうと思ふ單價だつて上げずにゐるんだ。奴等は一體どんなものを喰つて生きてやがるんだらう。——つてな」

私は彼等の不平をよそに、自分の仕事の位置についた。そしてハンマーを揮つた。鼓膜を破るやうなカンカンと云ふ鋼鐵の響音は、不平面を並べてゐる連中を嘲笑するやうに私のハンマーの下から起つた。

三十分もたつた頃には、彼等は皆んな各自の不平の呟きにたんのうしたのであらう、夫々の席に着いてハンマーをカンカン云はせてゐた。

なんて腑甲斐のない奴どもだ、やるんならやるで徹底的にやつたらいゝぢやないか。少しばかり不平を並べるぐらゐですむんなら、もうそんな不平は止しちまへ！——

この時後ろから私の肩を叩くものがあつた。石井であつた。

「ねえ、淺見君、これつぱかりの工銀ぢや喰つてけないぢやないか、何か方法がないだらうか、かうなりや俺達はなんでもやるよ」

石井のくる〳〵した大きな圓い眼を見ながら、この男なら或は何でもやるかもしれない、と私は思つた。石井はこの工場へ一昨年入る前までは、砂村の方で土工をしてゐたといふ經歷のある男であつた。大きながつしりしたからだと、黒い額の狹つた顔と、そして鼻の下にはチョビッとした髭を持つてゐる。

「さうかね、なんでもやるかね」私は氣乘りのしない聲で、しかし仕事の手は止めて云つた。「なんでもやるつたつて、そんなにやることはないね、まあ精々單價値上の嘆願書でも出すくらゐなもんだね」

「ぢや、その嘆願書を出さうぢやないか。血判だつて何んだつてするよ」

卒直な、生眞面目なその態度に、私は或るぴりつとしたものを感じた。

「血判の必要もあるまいがね、だが君ひとりぢや駄目だね、尠なくも、この組全部が協同して、最後までやり徹すといふ覺悟でなくちやあね」

私は石井の顏をにやりと見ながら、再びハンマーを取上げた。私は石井の狹つた額から滲み出る陰慘な、或る氣魄を感じてなんとなく今までの彼に對する冷淡さが恥かしくなつたくらいであつた。事に依つたら、こりや物になるぞ――と云ふ信念を益々強めずにはゐられなくなつた。よし、ものにならなくとも、かうした家畜のやうな職工の多いこの工場に、さうした暴風――とはならないまでも些かの旋風でもいゝ、卷き起せるならそれで充分結構だ、と思つたのだ。

「ぢや、僕はこの連合の奴を片つぱしから說きつけてやるよ、そして賛成させるよ、そしたらあとは淺見君やつてくれないか、嘆願書の方の一件は……」

石井はさう云ふと私の傍をはなれた。

私達の連合はこの時百二十人ぐらゐはゐた。金が取れないと云ふので絕へず辭職者があつたが、それだけにまた絕へず、あとからその補充がされてゐた。しかし補充はされてもそれは只、頭數だけ、直ぐと實際の仕事の役には立たなかつた。なぜなら私達の連合でやつてゐる仕事は、この小銃製造所で働いてゐる四五千人の內のほんの一部分ではあつたが、銃身の矯正と云ふ一番熟練を要する作業で、半年や一年の事では迚々一人前の腕になれないのであつたから。隨つ

て、こゝの連合には五年十年といふ勤續者はザラにゐたし、三十年勤續といふ老職工すらゐた。また終身の矯正工と云ふ職工は、こゝを除いてはさう滅多にゐるものではないので、若し私達の全部が結束して罷業する場合が來たとしたら、工場としてはどこからもその職工の補充が出來ない狀態であつた。だから吾々百二十人の向背如何で、小銃製造所にゐる四五千人の仕事はどうにでも出來る——つまり、彼等の咽喉を扼してゐるやうなものであつた。

私の傍をはなれた石井は片つぱしからこの百二十人の連合の者を說服して了ふつもりらしい。つか／＼と一番端つこで仕事をしてゐる者の處へ行つて、例の額と眉の狹つた顏を恐ろしく眞面目に引き歪めて、何か話しはじめた。彼が何を云つてゐるか、それは無論私の處まで聞へよう筈がなかつた。聞へはしなかつたが併し、石井がどういふ事を云つてゐるかは想像出來た。更に、その相手の者の云ふことさへ、私の耳にはあり／＼と聞かれる程はつきりと、その顏から讀めた。

石井は次から次へと移つて行つた。或る處ではお互ひに意氣投合し、昂奮して團結の必要を說き、歎願書提出の止むなきを語り合つてゐるらしい顏付をし、また或る處では冷々淡々として侮蔑的な嘲笑を浴び、まるきり取り合はれない石井の顏を見た。が、石井の顏はどこまでもその引き緊つた、眉と、額の狹つた顏を緩めはしなかつた。口を尖らしながらぢり／＼と咬みつきさうに相手に迫つて行つた。

が、百二十人の者を說伏することは容易ではないらしかつた。石井はまるで自分の仕事をすつぽかして、その方に熱中してゐた。

それから最後に彼は組長の田口のところへ行つた。田口はその時、工場の隅にある卓子の上で何か書き物をしてゐた。仕事の上り高でも記入してゐたらしかつたが、その前から時々眼を上げて、石井が次から次と何か說いて廻つてゐ

るのを見てゐたのであつた。

組長としての田口は人望家ではなかつたが、併し仕事の上で彼に敵ふものは百二十人の內、一人としてなかつた。二十年近い勤續工で、酒もろく／＼呑めない眞面目一方の男であつたが、同時に職工には稀らしい讀書家で、いろ／＼な新聞や雜誌を漁つては讀み、政治だとか外交、乃至は思想問題について口を尖らして誰彼の差別なく議論するやうな男であつた。淺薄な、杜撰極まる議論ではあつたが、と云つて彼のその論旨を顚覆さす程の者も、私達の仲間にはゐなかつた。社會問題、勞働問題について論ずることもあつたが、その何れも新聞雜誌の受賣りで、それに對する彼自身の批判といふものは全然なかつた。だから彼の主義、思想が一體どんなものかはまるで見當がつかなかつた。或る時は國家社會主義を是とし、又或る時は無政府主義に心醉してるやうなことを云つた。かと思ふと、早く社會政策を實施して近頃の危險思想の蔓延を防がなければならない、と云ふやうなことを說いた。しかもそのどれもが自分自身の獨創かのやうな顏をして說いてゐるのである。

併し、若し彼にさうした方面の思想が幾分かでもあり、さうした主義の信奉者であるならば、彼はこれまでに自分の部下とも云ふべき仲間の窮狀を見、不平を聞いて默つてゐられる筈はなかつた。率先して何かやり出さなければならなかつた。が、彼はそれをしなかつた。見て見ぬ振りをしてゐた。見樣に依つては、この連合で最高給を取つてゐる彼のその態度は、その組長といふ地位を棒に振るまいが爲めの事勿れ主義で、一生懸命にその地位に噛りついてゐるとしか思はれなかつた。つまり田口のその態度は卑劣な利己主義であつた。その利己主義を隱さんが爲めに、いろいろな新思想を噛つては、自分のもの丶如くに撒き散らすらしかつた。

石井はその田口の卓子の前に行つて立つた。石井のその眞面目腐つた顏が口を尖らして何か云つてゐるのを、私は這

くの自分の場所から見た。

石井の言葉に對してどういふ解答を田口が與へるか。——それは興味のある問題であつた。私は石井がどういふ報告を私に持つて來るか、仕事の眼を時々其方へ奪はれながら待つた。

田口の迷惑らしい、額に刻んだ皺が先づ石井の不利であることを思はせた。考へて見れば、田口の執るべき態度は一寸、他の連中とは一に見ることは出來ない狀態であつた。彼は組長である。それが、入職後まだ一二年にしかならない石井あたりの勸告に逢つて「うんさうか」と云つて贊成して了ふことは、自分の意志がそれに同意しても組長といふプライドが到底承知しないかもしれない、と云ふことであつた。何を小僧ッ子が！といふ反抗が首を擡げるかもしれないことであつた。それればかりではない。彼が工場から支給されてゐる賃銀は、豊かと云ふ程ではなくとも今更石井達若輩に尻を突つつかれて問題の中心に飛び込み、爭議の渦紋に卷き込まれて單價の値上を強要するには當らないのだ。殊にその渦卷に投じることは、自分のその地位を賭け、失業を豫期してかゝらねばならない仕事だ。——田口はそれを考へてゐる。自分の執るべき態度は飽くまでその渦亂から遠ざかることである。いや、遠ざかるだけではまだ足りない、組長といふ立場から、また組長としての責任上、部下のさうした渦亂を未然に防がねばならぬ地位にゐるのだ。——

私の眼は、槌を上げたり下げたりするその合間合間の僅かの時間に、素早い一瞥を二人の上に向けてゐた。併かも非常な興味をそこに見出して眺めたのであつた。

最初、田口の顏は笑つてゐた。相手が何を云はうと馬鹿にし切つたやうな、だいち相手になるといふことが既に自分の估劵にかゝはると云つた風なあしらい方をしてゐた。それはこんな風に云つてゐるやうであつた。

——君の考へは若いよ、第一その歎願書を出すといふことからして間違つてるぢやないか。まあ考へても見たまへ。工

場ぢや決して强制的に君達をこゝに引き留めて働かしてゐるんぢやない。と云ふことをね。君達は最初自分の自由意志で、日當いくらいくら支給する、といふことを承知して志願して來たんぢやないかね。また工場の方でも決して、君達の生活を保證する、喰へないやうにはしない、とは云はなかつたらうぢやないか。だから不平があつたら、君が最初自分の自由意志で來たやうに、おとなしく出てゆくまでぢやないか。僕にも連名して仲間にはいれつて――そりや僕はごめんかうむるよ。僕が今云つたやうな理由でね。――

それはこれまでにも何かと云ふと田口の云ふ言葉であつた。それは私なんかの耳にはタコの出來る程聞かされてゐる言葉であつた。だから、石井が今どういふ風に持ちかけて行つたかは知らないが、田口の冷笑を含んだ顏がさう云つてゐることは明らかであつた。またこれまでの例として、古參職工の殆ど全部は田口のその主張に共鳴し雷同してゐる傾きがあつた。そして兎角、新參職工の中から持ち上る不平を壓迫してゐた。が、單に口先きだけの不平は、工銀を受け取る度びに古參者の方も隨分鳴らしてゐた。「これつぱかりで喰つてかれるもんか、俺達の仕事がこの工場中で一番骨が折れて、一番むつかしくて、また一番肝心の仕事だぐらゐの事は承知してゐるくせに、工場長の奴ら俺達を舐めてやがるんだ。ほかの誰れにでも直ぐ出來る機械作業の方の奴らにや、いつも八分も九分も取らせやがつて、俺達と來たらもう可なり長い間、三分か四分の連續ぢやねへか。こんなべら棒の話つてあるかい。」――

だが、彼等はその不平を公然と發表し、自分達の要求を主張しようとはしなかつた。ただ口先きだけの不平を仲間内だけで洩らし合ふことに依つて、僅かにその不滿を發散させてゐた。だから彼等のその呼吸を呑み込まないで、彼等の不平を眞正面に取り、彼等と共に事を解決しようと思つたらいつも失望しなければならなかつた。私はこれまでに幾度かその失望を舐めさせられた。彼等のその不平、その生活難に同情したり、義憤を發したりすることは、いつもその彼

同情者たる彼等から嘲笑を以つて酬ひられ、有耶無耶の裡に葬られて了ふのであつた。併し、新參職工の方は、彼等古參職工から見ると、毎月取る賃銀も尠なかつたし、その感情を僞る職工氣質中毒にも比較的かゝつてゐなかつたので、その不平も眞劒なものであつた。油を注ぐ者さへあれば彼等はいつでも火になつた。

石井は最初、その新參者に油を向け、それから古參者に及び、最後に田口の處へ行つたのであつた。その方法は間違つてはゐなかつた。石井の顏は火を吹くやうに燃え立つてゐた。何を云つてるのか分らなかつたが、今はその連名を求めるのではなく、頭から田口のその態度を攻撃してゐるやうであつた。今までこの工場特有の堅く守られてゐた參古新參といふ埒を越えて、面皮を剝くやうな敗罵を浴びせてゐるらしかつた。田口のその階級から來る優越感――自尊心は全く石井の爲めに傷けられたらしく、顏色を失ふまでに青く顫えてゐた。

田口はやがて持つてゐたペンを投げ出し、ぷいつと石井の傍をはなれてどこかへ行くのを私は見た。何かぷんぷん怒つてゐるらしかつた。同時に、石井の苦笑する顏が私の方に向いて、その大きなからだをのそりのそり運んで來た。

「組長だなんて偉さうな面をしてやがつたつてまるきり話になりやしねえ。あんな分らずやのでくの棒なんて構ふことあねえ、嘆願書は吾々だけて出しちまはうぢやねえか」石井は私の傍へ來るなり、聲をはずませて云つた。

「さあ、どんなもんかね。で、組長は兎も角としてほかの古つ株はどんな返事だつたね」

私は田口に輪をかけたやうな頑迷な、他の古參連中を頭に描きながらさう云つて訊いてみた。

「だめだね、皆んなつちやゐねえんだ、田口と同じやうなもんさ。殊に富田の跛と來たら虫のいゝことを云つてるぜ」

石井は富田の方をじろつと横目で見ながら吐き出すやうに云つた。その富田は私の位置から五六尺離れたところで仕事をしてゐるのだ。石井はさう云ふのにも別に、聲の調子を低めやうとしなかつたが、また例へ石井が却つて聲を張り上

げて喚くやうに云つたからとて、それは恐らく富田の耳に入りはしなかつたらう。なぜなら、かうして私と石井と話をしてゐる間にも、私達の周圍では相變らずハンマーの響きがカンカンと鼓膜を破る程にしてゐたのだから。そしてモーターの唸り、ベルトのはためき、シヤフトとメタルとの摩擦する音——それらが伴奏のやうに入り亂れて一大交響樂を奏してゐたのだから。「ふむ、富田は何んと云つたんだね」かう云つて石井に訊きながらも、私の眼は矢張りその富田の方に向けられてゐた。「僕は君達と違つて滿足のからだでないんだからね、萬一こゝを失敗るやうなことになると弱つちまうんだ。だからつて何も嘆願書を出すのに不贊成のわけぢやないがね、君達がどこまでも責任を負つて萬一の場合には僕らの犧牲になつてくれる覺悟なら、僕はそりや判を押すぐらゐ悅んで押すよ。——とかう云ふんだ。おれあ、餘つ程張り倒してやらうと思つたんだが胸をさすつて來たんだ。いつの工銀日だつてあいつがいつも一番先きに文句を云ふんぢやねえか。これつぱかりぢや喰つてけねえの、嬶や餓鬼が干物になるの——つて」石井はフンと鼻を鳴らしてつゞけた。「月二割つつもの利息を取つて金をうんと貸しつけてやがるくせに……」

「へえ、いかにも富田らしいことを云ふぢやないか。あの脚の惡いといふことがいつも奴の逃げ場なんだが……。で、組長や富田は兎に角として他の連中はどうだつたね、贊成したかね？」

私は二三日前、秋元と話し合つた時の彼のいつにない强硬な態度を思ひ浮べて、今度は大低間違ひなくものになるだらう、といふことを漠然とではあるが感じて、云つた。尤も秋元と話し合つた時の問題は今度の單價値上の一件とは全然別なことであつたが、併しまた、さうした空氣を釀し出す一つの原因であつたとは云へる。秋元と私と話し合つたこと——それは同時にこの連合全體の者の問題であつた。しかも單價値上と同じ程度に、私達の生活を支配する問題であつた。それは福岡技手と伊東職工長の二人を排斥する問題であつた。私と秋元とはその時盛んに、如何にも子供じみた憤

慨ゃ昂奮に醉はされて、到底實行されさうもない夢のやうな計劃を話し合つたのであつた。

その時秋元は云つた。

「排斥——なんて雜作なく一口に云へるけれどこんな官僚工場ぢやそれが却々むつかしいからね、間誤々々するとこつちが馘首になつちまうからね」

「そりや無論さ、この工場中のものが皆んな結束してかゝらなくちや駄目さ。だがこゝの工場の者にそれが出來るかね。こいつばかりはいゝ加減な誤間化しや、妥協は出來ないんだからね。此方が勝つて相手の二人を追ひ出すか、先方が勝つて此方が馘首になるか——そのどつちかなんだからね」

私はかう云ひながらも幾度かきよろ／＼して周圍を見廻はさなければならなかつた。若しかうして話し合つてる處を福岡技手か、伊東職工長に見つからうものなら直ぐがみ／＼と呶鳴りつけられたから。私達の仲間は、その二人には毎日可なりひどい目に逢つてゐた。仕事時間中に煙草を吸つてるのを見付かつて規定通り五時間分の罰金を取られた者は幾人もあつた。朝の出勤時間に僅か五分を遲刻したが爲めにむざ／＼と追ひ返された者もあつた。終業のボーが鳴る僅かばかり前に道具を片づけて手を洗つた、と云ふ廉で頭からがみがみ呶鳴りつけられた上、危なく毆られかけた者もあつた。併し多勢の同じ規則を破つた者が同じ取り扱ひを受けるなら、その嚴酷さを呪ふ者はあつてもその公平に對して私達はまだ我慢した。が、そこにはその公平はなくて、同じ規則違反を見つけられながら何も云はれずに看過されてゐる者があつた。

秋元はその時聲をひそめて云つた。

「工場中の協同なんて、到底出來つこないね、だから排斥なんてことはこゝではまあ不可能さ。だから僕が思ふにはあ

いつら二人を時々ひどい目に逢はせて工場へ出て來られないやうにするのが一番だと思ふんだがね」

「と云ふと、どんな方法で？」

「方法はいくらもあらあね。僕は前から誰れにも相談しないでひとりで實行しやうと思つたこともあるんだがね」秋元は更に聲をひそめて殆ど囁くやうに云つた。「僕は前から福岡が晩方工場を出て家へ歸る時にいつもあの眞暗な、人通りのない江戸川の川岸つぷちをとぼ〱と歩いて行くのを知つてるんだ。だからその時、奴の後をつけていきなりその川の中へ突き落してやらう、と幾度思つたかしれないんだ」

「ふむ、そりやいゝ」私は思はず呟いた。

江戸川べり――さうだ、そこはこの私も時々通るところである。一週間に一遍、乃至二遍三遍、酒を呑む爲めに、そして女に逢ふ爲めに。醉つてぐたぐたになつて何もかも忘れて了ふ爲めに。――そのバアに通ふ途々で私は幾度、いま秋元の云つたと同じことを想つたことであつたらう。が、私の犠牲になるべき者は福岡には限らなかつた。その時私の前を歩いてゐる者は誰れでもよかつた。それ程私の頭はむしやくしやして居り、何か異常な事變を望む衝動で一杯になつてゐたから。

秋元の云つたことは私の耳に入ると同時に一つの繪として、いや、活動寫眞として私の頭の中に展開された。暗闇の川べりをとぼとぼと行く福岡技手、そのあとを影のやうにつけてゆく一人の男、――それは秋元でもあればまた私自身でもあつた。それは如何にもドラマチツクな情景である。私は私の空想を追ふた。頭の中には何もなかつた。私自身が見物人であるのか、その登場俳優であるのかさへ分らなかつた。

突然、私の空想は破られた。

「それからね」秋元が口を開いたのだ。「それからね、かうも思つた事があるんだ。僕はうちに少し許り砒素を持つてゐるんだ。劇薬さ。眼の中へでも入れゝば直ぐ盲らになつちまうやつだ。夜學へ行つてる時分、化學實驗の時少しばかり失敬して來たんだがね、そいつを利用する方法を考へついたのだ。昔からよくあるやつだが卵の中をうまく空にして、その中へ例の砒素と砂と交ぜたやつを一杯詰めて、福岡と伊東とが門から出て來るところをパツと目つぶしに投げつけるんだ。奴らが呀ツと云つて眼を押さへた時にやもう追つつかねえ。あの眞暗な煉瓦塀について走りやこつちはもう安全なもんさ」

さう云つてにや〳〵と笑つた時、秋元はふいと後ろを振り返つて慌てゝ自分の席へ戻つて行つた。階段を上りかけたその福岡技手の顔が半分現はれて、此方を睨めてゐたのだ。が、私は彼の顔を見てもいつも程びく〳〵しなかつた。びく〳〵しないばかりか、彼に對して一種の憐憫をさへ感じた。秋元の喋つた今の空想が、今夜にも直ぐ實行出來るやうに、彼に對して加へられるやうに思つてゐたから。つまり彼は私達の爲めの憐れむべき犠牲であつたから。

福岡技手はやがて私達の前に全身を現はして、急に熱心な仕事振りと緊張したハンマーの響音を起した私達の顔の一つ一つをじろじろと睨め廻はしながら、歩み去つた。福岡技手の後姿を見送つた秋元はやがて、赤い舌をぺろつと吐き出して見せながら嗤つた。私は何んだか不快な氣がした。それは福岡技手を嘲弄する意味の赤い舌ではあつたのだが、そして私は秋元にも負けないくらゐ福岡技手に對して強い憎惡を感じてゐたのであるが、私は彼のその一擧動で、私と同じ事を考へ、同じことを企んでゐた事に依つて自分の分身のやうにさへ思つてゐたに拘らず、忽ち強い反感と憫笑と侮蔑とを感じずにはゐられなくなつた。

秋元つて案外、見下げ果てた根性を持つた奴だな——私はまるで彼の赤い舌で自分を嘲笑されたやうな憤怒に驅ら

れ、顏を嚴しくして彼から反けた。

とは云へ、私と彼とは暫くの間ではあつたが同じ目的を以つて同じ夜學校に通つた、この工場では唯一の學友であり、心友であつた。學校へ通ひはじめて二三ケ月、私は忽ちいやになつて止めて了つたが秋元はその後ひとり、孜々として三年間の勉學をつゞけた。そして二三年前、その工業學校を卒業した。秋元の學生の目的は機械技師であつた。が、彼はその後も依然としてこの工場に一職工として働いてゐる。——が、いつであつたか、彼がある人の推薦で、この工場の技手になる運動をしてゐると云ふ噂を聞いたことがあつた。福岡技手の邪魔でそれが失敗に終つたといふことも聞いたことがあつた。が、その何れも噂で、秋元自身は「そんなばかなことがあるもんか」と云つて否定はしてゐたが。

三

三時の休業のボーが鳴つて私達がいつもの通りがや〳〵ストーヴの周りに集つた時、事務所から小使が石井を呼びに來た。その時憎々しげな田口組長の眼がじつと、事務所へ行く石井の後姿を見送つてゐるのを私は見た。

そこに圓く輪をつくつて煙草をふかしてゐた私達は、それが何故の呼び出しであるかを突嗟に直覺した。が、その時私達の心には妙に、その急所に觸れるのを避けたい氣持があつた。

「どうしたんだらう?」

石井の姿が見へなくなつた時、誰れかゞふいつと、まつたく何んにも知らない風で云つた。

「さア、どうしたんだらうね、何か用があるんだらう」誰れかゞそれに答へた。

パツトの先きから立ち上る強烈な臭ひと、薄青い煙とはいたづらに漾々とこの一塊りの職工達の顏を包んだ。いつか

十五分の休憩時間は過ぎ去つて始業のボーが鳴つた。と、そこへ顔色を變へて石井が歸つて來た。彼は直ぐに田口組長の處へ押しかけて行つた。それツと云ふと私達の仲間は忽ち、石井と田口と睨み合つてる周りを取り閉んで了つた。

「どうしたんだ？」誰れかゞ聲援するやうに石井に云つた。

「どうしたもかうしたもねえ、俺は組長に訊きてえことがあるんだ」石井はかう云つてその鋭い眼をぎら〱させながら田口に詰め寄つて云つた。

「田口さん！」石井は更めてさう呼んで、卓子を中に眞向ひに立つた。「田口さんは先つき工場長に何か僕の事について云つたね、どんな事を云つたのか、こゝで僕に聞かせてくれませんか」

努めて穩やかに云はうとしてゐる石井の言葉は、それでも兎もすれば昂奮して彈ね返りさうに苛立つてゐた。

「さうか、そのことか」田口はわざと落ちつきを見せる爲にさう言葉を切つて、更に冷笑するやうにつゞけた。「君がさつき僕のとこへ來て云つたことを報告したまでさ」

「だからどういふ風に云つたのです？　と訊いてるんぢやありませんか」石井はぎし〱と卓子の兩端を摑まへながら、詰め寄つて云つた。

「君が先つき僕のとこへ來て云つた事をよく考へて見りや分る。君はまさか自分の云つたことを忘れやすまい！」

「うううそを吐け！　貴様はしらばつくれるつもりか！」石井は卓子の一角をぐるつと廻つて猛獸のやうに唸りながら迫つて行つた。

が、それを見てゐる私達の內、誰れ一人留めようとする者はなかつた。私達は皆んな、田口が內心恐怖を感じながらも表面は飽くまで冷靜を保たうとしてゐる、狡猾な彼のその顏つきを眺めやつた。

「さア、こゝで皆んなの居る前で云つて見ろ！」石井は更に咬みつくやうに叫んだ。「貴樣はなんだらう。石井は連合の者ひとりひとりの處を歩き廻つてストライキを煽動してゐる。どうかご注意を願ひます。――とから云つたらう。いくら隱したつてだめだぞ、工場長がさう云つたんだ」

二人を取り圍んでゐた私達はまだ、誰れも何んとも云はなかつた。默つてゐた。と、そこへ割り込むやうに伊東職工長が來た。そして兩手を擴げて云つた。

「何を君達はぼんやりしてるんだ、もうかゝりのボーが鳴つたぢやないか。早く仕事にかゝりたまへ！」

「なにーッ、ぼんやりしてゐようと何してゐようと大きにお世話だ。おれ達ア請負仕事をしてゐるんだ。怠けようと働かうとおれ達の勝手なんだ」

この時はじめて私達の中の一人が云つた。それは古田だつた。この時急に周圍の空氣が險惡になつて來たのを私は感じた。今まで埴のやうに、そして只の棒杭のやうにおとなしく突つ立つてゐた者全體が、各自に手を振り眼を怒らしてゐるのを私は見た。面白くなつて來るぞ――と云ふ氣がした。

「伊東さん、今日は默つてあつちへ行つて貰ひませう。かうなつたら仕方がない。今日は今までの一切合切を皆んな片づけちまうんだから。それにあんたにゐて貰つちや少し都合の惡いことがあるんだ」さう云つて叫んだのは、今まで居るか居ないか分らなかつた小野だつた。

益々面白くなつて來る――私の顏にはにやりと微笑が浮んだ。私は猶も傍觀してゐた。もつともつとこの渦が大きくなればいゝ、と念じながら。この時、小野にやり込められて飽氣に取られたやうな、取りつき場のないぽかんとした伊東職工長の顏を私は見た。いつもは自分の一喝で小さくなつて散りぢりになる職工達の、この意外の反抗に對してすつ

かり面くらつて度を失つてゐる彼の顔を見て、私は少し氣の毒にさへなつた。

「まアさ、さうがや〳〵云ひ合つたつて話がつくもんぢやない。もつと氣を靜めて落ちついてから話をしたらどうだね」

この時はもう實際蜂の巣を突つき壞したやうに騷然としてゐた。誰れが何を云つてゐるのか分らなかつた。が、伊東職工長は流石に自分の責任を感じたものゝやうに、それでもいつものやうに高壓的に出ないでおとなしくさう云つて靜めにかゝつたのであつた。併し、誰れひとり聞き入れる者はなかつた。

「石井君！」

私は大きな聲で、尚も出口と睨み合つてゐる石井にさう云つて呼びかけた。石井の昂奮して蒼ざめた顔がじろつと私の方に向けられた。で、私は云つた。「そこで一つ大きい聲で今工場長からどういふ風に云はれたのか、皆んなのゐる前で云つてみたらどうだね、さう田口さんにがみ〳〵咬みついたつて仕樣がないぢやないか」

「さうか、ぢや、皆んな聞いてくれ！」石井は割合に落着いた聲で云つた。「おれは今事務所へ呼ばれて工場長からかう云はれたんだ。――石井、お前は今日限り辭職書を出したらどうだ。不平のある工場にゐるのはお前に取つても辛からうし、第一、おとなしい職工達を煽動なんかして騷がれちや非常に迷惑だ。それにそんなことが分ると、お前も臭い飯を喰はなけりやならん事になるからなア。――とかうなんだ。こんなことす、この田口でも喋らなけりや他に喋る者はゐやしねえや、で、俺は云つたんだ。馘首にするといふなら仕方がない、なりませう。だが、その前に一寸云つときますが、わたしや嘆願書を出さうと云ふことで皆んなと相談はしたが、ストライキの煽動なんか絶對にやつた覺えはありません。だから辭職書なんか決して出しません。――つてね」

田口の口がこの時ぴく／＼ッと微かに動いた。何か云ふかな、と思つたが何んとも云はなかつた。私達ち仲間の凡てはこの時もういつもの柔順さは影もなかつた。一寸でも觸れたら、その觸れたところの皮肉を突き破られさうな刺々しさが、そのからだ一面に漲つてゐた。

形勢は私の豫想よりも遙かに急激に變化して來たのである。これまでの階級意識に支配された、軍隊と少しも變らない程嚴格に保たれてゐた階級的差別觀から來る秩序——それはもう滅茶苦茶に破壞されて了つた。まさかこれ程まで——とは思はなかつた私の心の準備は、實に他愛もなく洪水のやうなその反抗の血に押しひしがれて了つた。これらの人達に絶望しきつてゐた私の心は、まだ失はれ盡してゐないこの反抗精神の爆發を見て雀躍してゐた。頼もしい人達だ、と思はずにはゐられなかつた。

私はなんとかしてこの反抗の血の奔騰を或る目的に向つて注がしたら——と希はずにはゐられなかつた。滅多に見られないさうした精神の爆發を徒らに消散さして了ふことは、何んとしても惜まずにはゐられなかつた。が、それは實にこれまでにさうした訓練もなく教養もない私に取つて、また、仲間の者に取つては實に困難な、しかも緊急を要する問題であつた。このまゝ放つたらかして置いたら、がや／＼と騒ぎ立つたのはいゝとして時間の經つにつれ、べた／＼とへたばつて了ふのは知れきつてゐた。さうなつた曉の私達のみじめさ、弱さはもう説明するまでもないことであつた。彼等の爲めにいゝやうに押へつけられて、今までよりか更に不當の壓迫を受け、不利の狀態の下に置かれることは餘りに明らかであつた。それを思ふと私の心はじつとしてゐられなかつた。じり／＼した。

いつの間にか伊東職工長はこの場をはづしてゐた。姿が見へなかつた。と、氣がついた時には、彼は再び元氣を盛り返したやうな顔をして、階段を上つて私達の群へ近づいて來たのであつた。

「おいおい、秋元君、それから古田君、小野君、望月君、……君！　工場長が何んか君達に用があるさうだから事務所へ直ぐ行きたまへ！」

伊東は困惑し切つた田口組長を應援するやうに、そこへ並んで立ちながら大勢に向つてさう云つて叫んだ。が、私の名はいま伊東職工長が呼び上げた内に聞かなかつたので殘つてゐた。呼び上げられた七八人の者はどや／＼と事務所の方へ押して行つた。瞬間、どつと押し寄せた浪がすうつと引き去つた後の靜けさが來た。

石井はこの時もまだ凄い眼を光らして口をぎつと結んだまゝ、田口を睨みつけてゐた。田口の方でも默つたまゝ睨み返してゐた。

「さアさア、君達は行つて仕事をしてくれたまへ、そんなとこでぼんやりしてゐたら尙のこと歩がつかなくなるぢやないか」

伊東はその時兩手で皆んなを押しやるやうな格恰に動かしながらさう云つたのである。

假りに何かこの連合で事が起るとすれば、それは今事務所へ呼ばれて行つた連中がその中心となつて騷ぐであらうことは、誰れの胸にも思ひ浮べられることであつた。こゝに殘つてゐる者は、石井その他二三を除いては要するにわい／＼と雷同して騷ぐ野次馬に過ぎなかつた。それは伊東職工長の今の身振りと言葉でぼつ／＼自分の席へ戻つて行く者があるのでもしれてゐた。が、この時突然、叫び出した石井の言葉で、彼等の足はまたそこへ釘付けされたやうに留まり、再び元の處へ戻つて來た。

「歩がつかうとつくまいと大きにお世話だ。おれ達がこれまであれだけ一生懸命に稼いでも歩がつかねえのは、そこに何か曰くがなくちやならねえんだ。おれ達ちや今日それもはつきりして貰はねえぢや、もう仕事なんか絶對にやるこつ

ちやねたに

誰れの口からともなく、恐らく、こゝに居る者凡ての口からまた騒然とした響きが起つた。誰れが何を云つてるのやらまるきり分らなかつた。

その間に時間は經過した。

事務所に呼ばれた連中が歸つて來た。彼等は夫々に昂奮した顔をして、こゝに塊つてゐる一團と合するとまた各個に喚き出した。靜まりかけた渚へまたしても怒濤が打ち返して來たやうであつた。

「おい、秋元君！ どうしたんだい？ やつぱりこの事件に關係してゐることなのか」私は秋元の顔を見るなりさう云つて訊いた。

「なに、石井がストライキを煽動して歩いたといふことだが一體どんなことを皆んなに云つたのか。——つて工場長の奴が云ふのさ。つまりね、正直に云つてくれ、でないとお前達の爲めにならん——と云ふのだ。要するに證人に呼ばれたのさ」

「ばかにしてやがらア」

この時突然、誰れかゞ叫んだ。秋元の云ふのを聞いてた者が奮慨の餘り叫んだものらしい。

「まつたく馬鹿にしてゐる」私も云つた。そしてじろつと田口の顔、伊東の顔を睨めた。石井は相變らず默々として田口を睨めてゐる。

間もなく六時のボーが鳴つた。私達は三時から六時まで一寸もハンマーを握らずに騒ぎ通して了つたのである。私達は依然としてがやがやした中に仕事道具を片づけ、手を洗ひ、着物を着換へ、そして工場を出た。

外はもう暗かつた。電車の停留場まで行つた私は、また思ひ返して暗い江戸川べりについて歩き出した。このまゝ電車に乘つて家へ歸るにしては餘りに私の心は平靜を缺いてゐた。頭の中で頻りと、酒酒……と囁く聲を私は聞いた。鋭い川風は熱し切つた私の頭を冷やし、耳の傍で絕へずへうへうと鳴つた。外套の襟を立て、兩かくしに手を突つ込んだ私は前屈みになつてせか〳〵とその河岸つぷちを步いた。私は秋元の云つたことを思ひ出してふつと首を起して前を見た。また後ろを見た。今、自分達と一緖に工場の門を吐き出された職工達がぞろ〳〵と步いてゐた。が、私の豫期したものは見られなかつた。こんな筈はないが――といふやうな氣がした。あの二人――福岡技手の後を惡魔のやうな呪咀の眼を光らせながらつけてゐる秋元の姿。――が、それは到頭、私がいつもゆくバアの扉をぐつと押して中へ入つた時まで見られなかつた。

をんなの丸い白い顏が大勢の頭越しにチラツと私の入つて來た姿を見た。そしてニツと微笑んだ。

「大へん顏色が惡いわ」私の傍へ來るなりをんなは云つた。「どつか氣分が惡いんぢやないの」

「いゝや、どこも惡かない。ところで……」と私は私の前の卓子でチビリチビリ、グラスについだ眞赤な葡萄酒をすかしすかし舐めてゐるお仲間らしい一人の勞働者を見ながら云つた。「葡萄酒を持つて來てくれないか」

「まア、稀らしいのね、葡萄酒なんて……」

をんなのその狎れ〳〵しい聲を耳にして、周り中の眼が一齊に私と女に向けられた。私は我れにもなく頰のほてるのを感じた。

「うん、あの眞赤の色がいゝぢやないか。まるで血のやうだ」さう云つてから今度は胸の中で呟くやうに云つたのである。「血を搾られるばかりぢやたまらない、せめてこいつをひとの血だとでも思つて呑まなくちや……」

だが、をんなは至極平氣な顏をして云つたのである。

「さうよ、葡萄酒ぐらひ飲つてるんなら心配いらないわ」

この時私は女のまだら剝げのしたおしろいの顏を近くに見ながら、なんて汚ない顏だらう、と思つた。その黄色い地膚を見てゐると、何んだか軍鷄の羽根の抜けたあとの赤膚が聯想されてならなかつた。

いつか周りの客が立つて私一人になつてゐた。私は私と向ひ合つて椅子に腰をおろしてゐるをんなの手を卓子の上に弄びながら云つた。

「ねえ、おい、お前ほんとに俺と結婚する氣か、あとで後悔するやうなことアないかい」

をんなは取られた手をぐつと引つ込ませながら云つた。

「なんで今更らしくそんな事云ふの。もうこの間云つたちやありませんか」

その言葉の様子や態度で見ると、をんなのどこにも疑ふ點はなかつた。まさに言葉の通り、この間私に嘯いた通り決定してゐるやうである。併し私は今になつて更に、それを確かめて見ずにはゐられなくなつたのだ。おれは殊に依るとあの問題で失業するかもしれない。その時でもをんなは果しておれのところへ來るだらうか?――

だが私はそんなことは云はなかつた。そんなことを云つたが最後、反かれて了ふやうな、また、取り返しのつかないやうな、兎に角とんでもないことが起るやうな不安を覺へたから。が、不安はそれ許りではない。自分の首が今まで通り安閑として、よしこの先きいつまでもつながれてゐるとしても、それは決してをんなを私につなぎ留めて置く唯一の安全の綱ではない、と云ふことだ。その安全の綱と云ふものは、決して一片の口約束や、一度の接吻ぐらゐで保たれるものではない。そんなことは寧ろ十六七の小娘や、中學生の戀には美しくもあり、また相應しくもあらうが、この俺や

そんなに取つては餘りに詩的と云ふものだ。俺達の戀はもつと現實的で、もつと物質的で、もつと動物的でなければならないのだ。尠なくともそんな夢のやうな戀では駄目だ。餘りに誘惑が多過ぎる。かうしたところにかうした商賣をしてゐる女に對する誘惑――それは決して想像に難くはない。考へて見れば、女はその周圍に附き纒ふ男の凡てに對してこの俺に應へるやうな態度で接してゐるのかもしれない。とするとこの女を確實に自分の手に掌握する者は必ず、誰れよりも一歩積極的に出て、その額に自分の烙印を押したものでなければならない。――

「ねえ、ちつとの間こゝを拔けられない?」

私はをんなのまだら剝げのしたおしろいの顏を眺めてゐる內に、どうすることも出來ないパッションに支配される自分を見た。

「だつて……」と云つたをんなは、私の燃えるやうな眼を見た。そして嬌羞を見せながらじろりと室の中を見廻し、ぽつねんと帳場の前の椅子に腰を掛けてゐるもひとりの女の方に橫目を注いだ。

「だつてこゝはこれから忙しくなるんですもの。Wの學生さんなんかこれからやつて來るのよ。もつとずつと遲いといゝんですけれど、さうすりや途中まで一緖に歸れるわ」

「いつも何時頃しまうんだい?」さう云つた私の眼はまた意地惡く剝げかゝつたおしろいの跡に注がれた。「だが今日はもう大分その學生さんが來たんだらう。キッスの跡がうんとついてるぜ」

「あらツ、冗談ばつかり……」をんなはついと拗ねたやうに橫を向いたが、また直ぐに顏を突き出すやうにして云つた。

「どこにキッスの跡がついてゝ? さア、敎へて頂戴!」

「こゝにさ！」私は立ち上つて素早くをんなの顏を兩手で挾み、自分の顏をその脣に押しつけた。

「まアひどい人……」をんなは私の手を拂ひ退けるやうにして慌てゝ後ろの帳場の方を振り返つた。顏を眞赤にして——。が、そこには誰れもゐなかつた。私はそれを知つてゐたのだが、それでもやはり、室の周り中見廻はさずにはゐられなかつた。

私は間もなく暗い川ぺりを通つて電車の停留場に向つて歩いた。レールと車輪の咬み合ふキーキー云ふ音が、如何にも冬の夜らしく冴へ冴へと響いて來た。私の頭には今、先つきのやうな刺々しい無闇に突つかゝりたい憎惡の感情もなく、まして顧岡技手の後をつけ廻す秋元の影像も浮ばなかつた。晝間の工場の騒ぎなぞ十年も前に聞いた虻の唸り程の事件としてしか頭の中にありはしなかつた。

だが、電車を降りてから私の頭はまた、なぜかしら苛々しはじめた。家へ近くなればなる程、胸の中がかうじり〳〵して來た。同時にそれが外からものしかゝるやうに壓迫して來る。息のつまりさうな、また暗闇の穴ぼこへ突き落されるやうになつた時、私の足はいつか自分の家の前へ來て留まつてゐた。

私は格子を明けて中へ入つた。米三が來てゐた。見れば、いつも早寢の父もまだ起きてゐた、母も起きてゐる。久美子も美代子も起きてゐる。が、五人もかうして額を突き合はしてゐながら咳一つしない、各々が堅く口を閉じて默り込んでゐる。

「只今！」と云つた私の挨拶に對しても皆んなチラッと眼を上げただけで、何んとも言葉を發する者はなかつた。

いやに佛頂面をしてやがるな——と思ひながら私は着物を着返へに二階へ上つて行つた。何かよくないことが持ち上つてるぞ——といふことは、皆んなの顏を見た瞬間に感じられたことであるが、やがて、それは米三が齎らして來たも

のだなと云ふ風に思はれて來た。それは、いつ來た時もだんまり勝ちな米三ではあるが、今夜は特に恐縮したやうな、すまないやうな、困惑し切つた顏をして疊の目を見詰めてゐたのでどうもさうではないか、と思はれたのであつた。それに父の苦り切つた、どこに持つてき場のないやうな憤懣の表情を見ると、それは決して米三ひとりを責めることの出來ない底の性質であるやうな風にも察しられた。

まア何んでもいゝ。どつちみちろくな事ぢやないんだ。――私は着物を着換へるとそのまゝ下へ降りて、父と米三との向ひ合つてるそれと三角形をなす點に座を占めた。

「おそかつたねえ、どこかへ廻つたの？」母が小聲で云つた。

「あゝ、一寸用があつたもんだから……」私は曖昧な返事をした。―

と、その時父はやけに煙管を火鉢の縁に叩きつけて、それをきつかけに私の眼をチラツと見ながら云つた。

「米三が店の方をひまになつて來たんだ」

父はそのたつた一言でぷつりと口を噤んで了つた。その樣子は、如何にもばか〳〵しいくだらないことで――と云つてる樣である。

「一體どうして？」私は米三の答へを豫期しながら、そのくせ誰れにともなく漠然とさう云つてみた。

下を向いてゐた米三の顏がこの時徐々に、しかもそれが無理に、轆轤か何かで捲き上げられたやうに上げられたが、私の視線と合ふとまた慌てゝ下を向いて了つた。が、下を向いたなり、彼は呟くやうに云つた。

「いまもこゝで話したことなんだけれど、ほんとに馬鹿〳〵しいことなんです。實はやつぱりあの店に外交をしてゐる奴なんですが、そいつが店の金を二千圓ばかり攫つ拂つてどこかへ隱れちまつたんです。ところが二三日前の晩、そい

つが無理に誘ふもんだから途ひ一緒に芝居見に行つて夜遲く歸つて來たことがあるんです。店の大將、それが面白くなかつたとこへ、そいつが姿を隱しちまう、つゞいて金のなくなつてることが分る、で、お前はあいつとぐるになつて金を盜ませ、一緒に使つて歩いたんだらう、俺のこの眼で睨んだことに間違ひはねえんだ、さア、あいつの隱れ先きを白狀しちまへ——と、かう云ふんです。ところが僕はそんなことはちつとも知りやしないんです。で、そんなことはちつとも知らない、第一、ぐるになつて金を盜む、なんてあんまり人を寃ひるもんだ。——とさう云つてやつたんです。ところが大將と來たら僕の云ふことなんか聞き入れるやうな男ぢやないんです。兎に角その男が捕まつて事實が分明するまで家へ歸つてて貰はう——と云ふんです。幾ら辯解しても通らないし、仕方がないから先方の云ひなりに店を出て來たんです」

「ふむ」と云ふには云つたが、私の頭の中はもうむしやくしや苛立つてどうにも納まりがつかなかつた。何がさう癪に觸るのか見當がつかなかつた。腑甲斐ないこの弟に對してか、それとも、横暴な資本家氣質のその主人に對してか。私はそれきり口を噤んでまた元氣のない顏をしてうな垂れてゐる米三の頸筋を眺めてゐた。この時私の頭には、勝手向きの苦しいこの家庭へまた一人厄介者が闖入して來た——と云ふ當惑もあつた。凡ての傭主とか資本家と云ふ者の我がまゝに對する憤りもあつた。が、その憤りは弟のそれと一緒に、私自身、今現に紛爭を起してゐるところの工場のそれとごつたになつて、頭の中で渦を卷いてゐた。

「ほんとに運が惡いんだね、間の惡いときにはどうにも仕方ないものさ」

米三の悄げ切つてる姿が母の眼に憐憫を催したのだらう。彼女は如何にも仕方がないと云ふやうに、また如何にも諦めたやうにさう云つたのである。

「ところで僕の方の工場ぢやねえ」私は喉のところまで出かゝつた言葉を無理に嚙み殺した。いまこの事を私が口にしたらそれをきつかけにして續々と皆んなの胸ひとつの中に疊み込まれた、よくない事が一時にこゝへやけくそに曝け出されるに違ひない、と云ふ風に思はれたから。今こそあゝして、俺の方には何んにも問題なんかありやしないぞ――と云つたやうな平氣な顔をしてゐる父も、俺が工場の紛爭を口外し、いつ馘首になるか分らないのだと云ふ事を喋ることに依つて「さうか、實は俺も會社からもう免職になる內示を受けてゐるのだ。何しろもうあと二三年で六十になるんだからなア。それに近頃の不景氣で事業縮少、冗員淘汰――と云ふ斧で大分仲間がやられてるんだ。だから俺の會社に出てゐる壽命も既うこゝ四五日と云ふところかもしれんなア」なんかと云ひ出すかも分らない。さうすると今度は母は母で何か持ち出し、久美子は久美子で持ち出す。そんなことを云つてる內に、いまは景氣よくやつてるといふ辨次郎までが此處へひよつこりやつて來て「僕も到頭馘首になつちまひました」と云つて來るかもしれない。――

が、出かゝつた言葉を喉で喰ひ止めた不快は私をじりじりさせずには置かなかつた。何もかもぶち壞しちまへ！　と云つたやうなやけくそが、私の妥協を望み平穩を希望してゐる心に爆藥をかけたやうに滅茶苦茶にした。――一體、月給だとか日給だとかで生活してゐる俺達のどこに生活の獨立なんてものがあるのだ。皆んな奴隷ぢやないか。主人公の心の動き方一つでどうにでもされる生活ぢやないか。まるで主人といふ薄紙一枚で支へられてゐる生活ぢやないか。その薄紙に載つかつてゐる重い生活――それはいつどんと落つこちるか知れないのだ。その時の父や母の暗憺とした絶望の顔――それは想像するだけでも胸が一杯になる。生れてから六十年、その長い間を只喰つてゆくと云ふだけの事でいつも頭を一杯にし他を顧みるの餘裕もなく血みどろになつて藻掻き通し、やがてその終局に報ひられるものがその破綻である。しかもその父の經て來た苦しい暗黑の道に何時の間にか引きずり込まれてゐる自分。――私は今それを實にあ

り〳〵と眼に描いた。そして父が汗と血をぽたり〳〵と垂らして辿つた道をこの自分が再び辿らなければならぬと知つた時、私はこれを運命と見ていゝのか、自分の弱小が生んだ當然の結果と見なければならないのか、それとも或る人々の云ふ如くこの社會組織の不當がいやでもさうした結果に導くと見るのが本當か、――と放心狀態で道を歩いてゐた者がふいつと壁にでも突き當つたやうに、困惑の眼を上げて前後左右を見廻はし、考へて見ずにはゐられなかつた。

父も母も、米三も久美子も、皆んな何を考へてゐるのか默り込んでゐる。呼吸をしてゐるかさへ疑はしい程、森と押し默つてゐる。

「もう遲いんだねえ、十一時になる……」

私は時計を見上げてさう云ひながら立ち上つた。

二階では道夫がよく寢入つてゐる。布團と布團が敷き合はさるやうに二つ並べて私と米三は寢た。なか〳〵眠りつけなかつた。工場の騷動が明日はどう展開するだらうかと云ふこと、米三の失業のごと――併かもその大事件が二つ揃つて今日突發したとは一體何んと云ふ意地の惡い運命の神の戲れだらうか、と云ふこと。――私が眠れない如く米三もいつまでも寢床の中で寢返りを打つてゐる。恐らく彼は彼で矢張り、自分の惠まれない運命を呪つてゐるのだらう。」

四

朗らかではあるが冷たい霜の朝、私はいつもの通り六時といふのに家を出て工場へ行つた。始業のボーが鳴つた時、私は私達ち仲間が今日はどういふ態度に出るかに興味を持つて、自分の席に着いた。平常と變つたことはなかつた。皆んな、昨日の事なんか夢でもあつたかのやうな、けろりとした顏をして仕事に取りかゝつた。私は妙に張合拔けのし

た。こんな筈ではなかつたが――と云つたやうな氣持で自分の頭を疑つた。昨日の騒ぎの主役を演じた石井の顔を見ても、そこからは何にも昨日の昂奮の續きらしいものは受取れなかつた。田口組長は――と見ると、彼は相變らず、自分の卓子の前で切々と仕事の上り高を記入してゐる。こんな筈はない。これぢや昨日の事は何もかも夢だ。――

「田口さん、今度は何分ぐらゐつきます？」

私はハンマーを臺の上に置いてつか〳〵と田口の處へ行つて訊いてみた。「昨日は一體どんなくらゐ仕事が上つてるのです」

「まあ、二分か三分だらうね、何しろ昨日なんかあんな騒ぎでまるきり喰ひ込みだもの」

田口は顔の筋一つ動かさずに、ぶつきら棒にさう答へたのである。

「まあ昨日は例外ですね」矢張り夢ではなかつたのだ、と確かめて私は自分の席へ戻つて行つた。石井の顔を見ると相變らず太平の面持ちを漂らして、しかも、にた〳〵笑ひながら隣りの者と話をしてゐる。昨夜から今朝へかけて餘り大袈裟に考へ過ぎた私は、何んと云ふことなく脊負ひ投げを喰はされたやうな氣持ちだつた。まあ、何んでもいゝ、昨日のはほんの一寸した夕立だつたんだ。あのまますんでしまつたのなら却つて世話がなくていゝ。――こんな風にも私は思つた。何んとなく重い肩の荷を卸した氣持でもあつた。

秋元が私の後ろに立つて肩に手を置いてゐた。何が可笑しいのか、彼の顔はその時にやにやと嘲笑的の皺を刻んでゐた。

「まるでなつちやゐないね、初め脱兎の如く終り處女の如し。――かね」

昨日の事を云つてるんだな、と私は思つた。で、私も彼の微笑に報ゆるに微笑を以つてしながら云つた。

「僕は昨日工場の歸りにね、あの江戸川の縁を歩いて見たがね、とうたう福岡にも誰れにも逢はずさ」

ふん！と鼻を鳴らした秋元はその時チカツと眼を光らしたが、しかし氣のなささうな調子で云つた。「いつも柳の下に鰌はゐないてね、奴らは昨夜おそく迄事務所に居殘つて職工共の對策を討議してゐたんだとさ」

「へえ、さうかね」と云つたが、私は一體秋元がどこからそんな事を聞き出して來たものか、それともまた「さうだらう」ぐらゐのところを云つたものか知らなかつた。

「しかし君はあれを實行する氣かね？」秋元は突然さう云つたのである。

「あれつて、何を？」私は反問した。

「だつて昨夜江戸川べりを歩いたつてえからさ」秋元は冷たい笑ひを顏に浮べながら、またにやりとして云つた。

この時なぜともなく私の腦裡に、女のまるい白い顏がぽつかりと浮き上つて來た。その白い顏に私のその時思つてたことが何もかも書かれてゐるやうに思へて來た。で、おしろいが剝げて黄色い地膚の出てゐるところを凝視るやうにしながら、私は曖昧に呟いたのであつた。

「あながちさうでもないがね」

「だが福岡つて奴は全くけしからん奴だよ。今度なんか俺の方の連合は八分ぐらゐついてるんださうぢやないか。そいつを福岡の奴が他の連合へ廻しちやつたもんだから、俺の方が三分しか附かないことになつたんだ相だ」

「だがそんなことは今更はじまつたことぢやなし……」と、努めて冷淡には云つたが、しかし私の腹の中は穩やかではなかつた。「まあどつちみち奴は排斥もんだね。いくら運動して單價を上げて貰つたつてそんな工合に掻き廻されちやたまらないからなあ」

「だが見ろよ」秋元はかう云つて、カンカン眞面目くさつて仕事をしてゐる連中を顎で示しながら、侮蔑するやうに云つた。「昨日のいきり立つた樣子はちつとも見へないぢやないか。皆んな羊のやうにおとなしく仕事してるぢやないか」

「ふむ！」私は苦笑を浮べずにはゐられなかつた。「先生達ちやいつもあれさ。まるでサイダーみたいなもんさ。何んかの調子でわーつと沸騰はするが直ぐ氣が拔けて了ふのさ」

ほんの一寸ではあつたが、事件がこのまゝ立ち消えになつちまへばいゝと希つた昨夜から今朝へかけての私の心は、この時またその時の心持を忘れて仲間の餘りに無方針な無自覺な態度に苛々させられて來た。

石井らに對する冷笑を洩らし切つて了ふと秋元はやがて自分の席へ戻つて行つた。が、私には秋元のやうに彼等を笑殺したゞけではすまし切れないものがあつた。

「嘆願書の一件はどうなつたね？」

私が石井の處へ行つてさう云つた時である。福岡技手はいつの間にか來て私達の居る前に立つてゐた。彼は田口組長と何か二言三言呟き合つてから、やがて手を喇叭のやうに口の處へ當てゝ叫んだ。

「皆んなこつちへ集れ！」

私達はどやどやとその周りをまるく取り卷いて集まつた。

「他ではないんだが」私達がすつかり揃ふのを待つて、福岡技手は口を開いた。「昨日から工場長どのともいろいろ相談したんだが、何分單價の値上といふことは自分達の獨斷で決めるわけには行かんのです。そればかりでなく、君達はしきりと三分とか三分五厘しか步合のつかないことを不平の口實にしてるやうだが、併し自分の眼から見ると君達が果し

て全能力を發揮して、しかもあのぐらゐの仕事しか出來ないのかどうか、頗る疑はしいのである。で、明日からこの連合は全部解散して單獨請負で仕事をして貰ふことに決めました。云ふまでもなく……」と、云ひかけて彼はにやりと氣味の惡い冷笑を洩らした。が、彼の冷笑はいつまでもつゞかなかつた。

「云ふまでもなく、單獨請負は强い者勝ちである。腕のある者が勝つのである。此處にあるだけの仕事は全部君達のやるに任せる。隨つて仕事を澤山やつた者は澤山お金が取れる。また怠けた者はその腕相應に怠けただけしか取れない。……そしてその單獨請負は明日から實行する」

福岡技手はやがて、きつと口を結んで私達一同を見廻した。これがお前達の本望だらうと云つたやうな顏をして。

沈默が來た。そして、やがてその沈默の破られる時が來た。いきなり、石井が叫び出したのである。彼はまるでこの連合の代表者ででもあるやうな態度で、福岡技手に喰つてかかつた。

「私達ちや何も昨日單獨請負にしてくれと願つたわけちやなかつたんですがな、つまり單價が安いからいくら仕事したつて歩が附かないと云ふんです。我々が今上げてゐる能率は今のところこれが精一杯です。そ　や職工なんてものはさもしいもんですからね、單獨請負なんて事になつたら自分のからだの參つちまうのも知らないで、夢中で仕事をのぼる奴も出るでせう。だがその單獨請負と云ふ方法は要するに職工の無智を利用して能率を上げさせる、一種の動物虐待ですなあ」

石井の圖拔けて大きいからだは、その聲までがどことなく落ち着きがあつて堂々たるものであつた。殊に正面を切つて今のやうに迫つてゆく態度は、ふだんの石井を知つてる者に取つて殊に驚異であつた。そればかりでなく、古參者から比較すると毎月尠ない收入を得てゐる石井らに取つては、この單獨請負は最も歡迎されてゐる筈であるに拘らず、却

って反對の聲を聞いたのである。石井の云ふことは尤もであるが、同時に彼等が率先して贊成すると思ってゐた私に取つては實際意外であつた。石井の一言で沈默を破られた一團は急にさわめき出した。
「まるで問題が違ふ。おれ達はそんなことを要求したんぢやねえ」誰れかのさう云ふ聲もした。また昨日襲來した低氣壓が來さうであつた。
「兎に角半月でも一月でもやつてみたらどうかね。君達の方にしてみりや、問題は金が取れさへすればいゝんだらうし、工場の方から云やあ今までよりかもつと仕事を澤山やつて貰ひたいんだ。で、それにや單獨請負が一番いゝ方法だと思ふんだがね」
福岡技手は最後の決定を與へるやうにさう云つて、そのごたごたの渦から出て行かうとした。が、その時「ノー、ノー」と叫んだ石井の聲はまた彼の足を留めて了つた。
「問題はまだそれ許りぢやないんだ。吾々は單價値上の他に……」と云つて、自分の脇に立つてゐる伊東職工長を横眼にじろりと見やりながらつゞけた。「この伊東職工長の排斥が眼目です。それは吾々皆んなの意志です」が、石井は流石に福岡技手をも排斥します——とは云はなかつた。
伊東職工長の顏が電氣にでも觸れたやうにびくつと顫えた。顏色はみるみる變つた。同時に福岡技手の顏色も變つた。田口組長の顏色も變つた。誰れも口を利く者がなかつた。彼等は無言で最初その視線と視線を忙しく取り交した。それから自分達の持つてゐる唯一の武器——壓迫的な言葉が喉にでも引つかかつたかのやうに、眼の玉をくりくり動かした。それでもそのいつも使ひ慣れた高壓的な言葉は出て來なかつた。
彼等がさうである如く、その味方——私達ち仲間にも青天の霹靂のやうな混亂を惹き起した。伊東職工長並びに福

岡抜手の排斥——それは吾々一同の要求ではあつたが、併し、それに就ては今まで連合全體としては一回も相談し合つたことはなかつた。それが今「皆んなの意志です」と云つて石井が宣言して了つたのだ。それは味方の戰備が整はないのに早くも宣戰を布告した形だつた。彈着距離にも達しない內に輕卒にも發砲した形だつた。しかも戰機の熟してゐる今日、身方の戰備が整はないからと云つてそれを口實に、その一發を取り消すことは出來なかつた。實際、石井が單價値上嘆願と云ふ問題を提げて連合の者一人一人を說いて廻つたことは、そして大部分の贊成を得たことは、その內容に値上問題ばかりでなく、福岡抜手と伊東職工長の排斥といふ誰れの心にも潜んでゐる一項目が仄めかされてゐたからであつた。だから誰れにしても自己の意志を否定し得ない如く、石井のいま云つたことを輕卒であるとは思つても否定し去ることは出來なかつた。併しまた一方、輕卒ではあつたが石井の宣言は却て味方の決心を促し、味方の協力を促進する動機とはなつた。私自身でさへ今までの中立的、傍觀的立場から何れにか自分を投じなければならないと考へさせられた程であつた。が私は、此處に集まつてゐる仲間の內、古參者の幾部分が明らかにその何れにか自己の立場を決定する事に當惑を感じてゐることを見た。彼等は明らかに、多少の不滿や不足は忍んでも平穩無事の空氣を望んでゐた。彼等は微動だもしない古池の中に投じられた石のやうなものであつた。彼等のからだには一面に水苔が生へてゐた。その水苔はまたかうした社會、かうした階級に於て一の特權であつた。何かの原因の爲め池水の動搖し、波打つことは彼等の悦こばないとこだつた。それは云ふまでもなくその青苔である特權の喪失であつたから。私は彼等のさうした心持は了解した。が、その理解や同情は自分の感情をまで支配することは出來なかつた。私は本能的に彼等の當惑げな顏、躊躇逡巡の態度を憎まずにはゐられなかつた。輕蔑しずにはゐられなかつた。彼等を憎み輕蔑することに依つて私の心は同時に旗色を鮮明にし、自分の立場を決定することが出來た。工場なんか明日が日にも馘首になつても構はないと云ふ氣になつた。

がや／＼蜂の巣を突つき壊したやうな狀態の裡に三時間は空しく經過した。六時の終業のボーが鳴つた。敵味方とも睨み合ひのまゝ引き分けなければならなかつた。

眞黑に汚れた手や顏を洗つてる時、着物を着換へてゐる時、列を作つて門を出る時、絕へず昂奮して高聲に喋つてゐる石井の聲が聞へた。門を出て彼等と別れる時、明日こそこの問題もどうにか目鼻がついて進むべき方向へ進むだらう。といふ風に思はれた。

門を出ると私はすぐ電車に乘つて眞つ直ぐ家へ歸つた。直ぐ夕飯の膳に着いた。が、米三の姿が見へなかつた。歸參が叶つたのかな――と私は思つた。が、默つてゐた。

「米三の口がうまくあつてくれゝばいゝが」

默つて箸を動かしてゐた母がやがて獨り言のやうに呟いた。

「ええ？」と私は訊き返した。「どこか口を探しに行つたの？」

「あゝそれがね、友達のところへ一寸行つてくるつて出たんだけれど、米三のこつたからたゞぶら／＼遊んでるんぢやないだらうし、屹度方々口を賴み廻つてるんだよ」

「しかし米三も意氣地がなさ過ぎるぢやないか」私はこの時何んと云ふこともなくむか／＼と向つ腹が立つて來た。で思はずさう云ふには云つたが、併し米三のどこが意氣地がないのか――それは自分でも理由は見つからなかつた。たゞ昨夜一寸聞いたあれが米三の馘首になつた理由だとすると、そして事實だとすると、あんな冤罪を着せられてのめ／＼と出て來る米三があんまり意氣地がなさ過ぎるやうに思はれたのに違ひなかつた。が、それならば、その場合に米三の執る態度はどういふのがいゝか――となると、それは自分にも分らなかつた。米三と同じやうに矢張りのめのめと出て

來るより他に仕方がなささうであつた。が、私の心はそんなことは閑却してこの時理由もなく苛立つてゐた。傭主の暴狀に對して憤慨する心は、そして傭主の暴狀に對してどうすることも出來ない泣き寢入りするより外仕方のない自分達の弱さは、傭主に對して憤慨すると同じ程度に自分達自身に對して憤慨したのである。同時に、若しあの事件が擴大して自分があの工場を馘首になるやうなことになつたら――と云ふことは絶へず私の頭の中に暗い影を投げてゐた。それからまた一方、今の內なら自分はまだあの渦の中に卷き込まれないで首をつなぐことが出來る――と云ふ自分自身を守ることも考へないではなかつた。

兎が如何に猛然と獅子に對つても一擊の下に殺されて了ふのは分り切つてゐる。が、この場合の弱者の反噬は、その反噬の瞬間に於ける玉碎を覺悟した自分の雄々しさを享樂するのである。そこに生命の燃燒を感ずるのである。それは實に瞬間の感激であり、また生活化した瞬間の藝術である。ところが、米三の執つた方法はなんであつたか。退いて身を守ることもしなかつた。いや、出來なかつたらしい。それならば玉碎の覺悟で主人に抗議はしたか、と云ふに抗議はしなかつた。如何におとなしい米三でも腹は立つたに違ひない。その腹立ちまぎれに主人に對して腕力でも揮つたか、尠なくとも暴言でも吐き散らして罵詈したか、――と云ふにそれもしなかつたらしい。彼はおとなしくすご〳〵と出て來た。恐らく彼の胸の中にはその時、怨恨と憤怒と、自己憎惡とが一杯に充ち滿ちてゐたに違ひない。いや、今でも抑壓されてゐるに違ひない。それなら彼は一體その抑壓された鬱憤をどう處置するのか。――私は知らない。が、彼の胸の中を想ふと、私は自分の胸までが苦しくなる。だがどうすることも出來ないのだ。

米三は夜おそく、私達が寢て了つてから歸つて來た。朝、眼が覺めてから彼が昨夜歸つて來てゐたことを知つたのであつた。

私は昨日の通り工場に行つた。昨日有耶無耶に分れた、睨み合ひのまゝ分れた兩者が今日はどういふ風に展開するかに興味を持つて。

ところが今朝は、昨日の朝の平穩さとは大分樣子が變つてゐた。皆んな恐ろしく昂奮して一つ處に集まり、がやがや云ひ合つてゐた。

「どうしたんだい？　もう何かあつたのかい？」私は仕事着に着換へると直ぐ大勢の處へ行つて訊いてみた。石井の眼がチラツと、妙に素氣なく光つたのが私の心を冷たくした。へんだぞ――と云ふ氣がした。その時小野が囁くやうに私の耳に話して聞かせた。

「昨夜ね、あれから牛天神へ集まつて單獨請負制度に反對する協議會を開いたんだよ。石井なんかが先棒でね」

「へえ、さうかね」私は小野の顏をみつめたまゝ云つた「昨日歸る前までそんな協議會をやるやうな模樣もなかつたがね」

「うん、それが實に偶然に協議會みたいなことになつちまつたんだ。初め五六人で單獨請負の是非つて事について話しながら歩いてる内に、一人集まり二人まりしていつの間にか四五十人集まつちまつたんだ。それでね、あのお神樂堂の傍の空地で一二時間ばかしつてもの、わやわや相談し合つた結果が、單獨請負制度には絶對反對すること、穎岡技手伊東職工長の二人は極力排斥すること、單價値上問題の貫徹を期すること――この三つを決議したんだ。で、若し容れられない場合には最後の手段に訴へる――とね、まアそんな風に昨夜のとこでは決まつたんだ」

「へえ、ちつとも知らなかつた。で、どういふ方法でその三つの計劃を進めるね？」

「まだそんな細かいことまでは相談が進んでないんだがね、今日でもこれから決めることになるんだらう」

いつか始業のボーが鳴つたと見へて、モーターは凄い唸りを立てゝシヤフトを廻してゐた。ベルトは巨鳥の羽搏きのやうな音を立てていろ〳〵の機械を動かしてゐた。

が、この時私達の連合では一人として仕事にかゝつてゐる者はなかつた。あつちに一塊り、こつちに一塊り、異様に耀く眼を光らして額を鳩めてゐる。作業時間中に若しも手を休めて話でもしてゐる處を福岡技手に見付からうものなら、これが何事もないいつもの事でもあれば慌てゝ話を止めてハンマーを握るのだ。けれどもこの時ばかりは幾度福岡技手の巡視する姿を見かけたか知れないけれど、誰れ一人振り返らうとする者さへなかつた。てんで無視してゐた。また彼の方でも、私達の傍を通る時にはいつもの八釜しやに似合はず、見ても見ない風をしてサツサと通り過ぎて了つた。

一時間經ち、二時間經ち、やがて九時の休憩時間も過ぎた。が、私達の仲間ではまだ誰れ一人落ち着いてハンマーを握る者はなかつた。次から次と山積されてゆく仕事の材料を私達は冷やかに眺めやつた。

作業の停滯は福岡技手の最も怖れるところであつた。工場長に取つてもそれは容易ならぬ問題であつた。

九時の休憩時間が過ぎて間もなく、當然何か云つて來なければならぬと思つてゐた工場長から果して豫期してゐた通りの使ひが來た。

連合は全部、三階の食堂へ集れ――と云ふのである。

私達は矢張りてんでばら〳〵に勝手なことを云ひ罵りながら三階へ上つて行つた。工場長をはじめ、伊東職工長、福岡技手――と云つた連中はもう既に先きへ來て、私達を待つてゐた。私達は彼等を眞ん中に取り卷いてまるく集まつた。

この時工場長は顏を起して私達を端から端までづらツと見廻してから口を切つた。

「君達は今朝工場へ出て來ながらまだ一本も仕事をやらないと云ふことだが、一體何が不服なんだね。まア、君達の方にもいろ〳〵云ひ分はあらうけれど、兎も角さうやつて折角工場へ出て來ながら少しも仕事をやらないと云ふことは少し不穩當ではないかね。だいちそれでは工場長たる私の責任がすまないと云ふものだ。ところで相談だが、君達の方でもさう大勢が殘らずがや〳〵云ひ合つたところでどうにも仕様があるまいぢやないか。それよりも四人なり五人なり、君達ち自身の信認する人達を委員に選び出して、この私と穩やかに話をさしてみたらどうだね。さうして萬事を委員に任して了つて後の者は平常通り仕事をすると。……それでどうだ、諸君に異存はないかね？」

工場長は如何にも氣さくにさう云つて、私達の顏を初めの通りぐるつと見廻した。それは今までの上から見おろす態度ではなく、如何にもさばけたものだつた。

「それがいゝ、さうしよう！」

暫くしてから石井がいきなりさう云つて贊成した。誰れも異存を唱へる者はなかつた。で、この場で直ぐ委員の選擧が行はれた。紙も鉛筆も既に工場長の方に用意してあつたので事はぐん〳〵運んだ。

大勢の眼の前で投票用紙は開票された。組長の田口がそれを一枚一枚讀み上げた。その傍から伊東職工長がそれを記入して行つた。

三十一點、石井君。二十七點、淺見君。二十五點、小野君。十八點、望月君。同じく十八點、古田君。――

「もうそのくらゐでいゝだらう。今讀み上げられた五人で、君達ち凡ての意見、要求をすつかり纏めて來てくれたまへ。さうして穩やかに交渉しよう」工場長はさう云つてから、今呼び上げられた以外の者に向つて云つた。「さア、君達は行つて仕事をしてくれたまへ。君達の選出した委員に全部を任して……」

石井が最高點で選出されたのは先づいゝとして、私のやうなものが第二番目に選出されたことは私に取つて少し意外であつた。殊に古田や望月が當選して秋元の落選したことは更に私を驚かした。

工場長に追ひ立てられるやうにして仲間達は皆んな下へ降りて行つた。その後から工場長も降りた。福岡技手も降りた。組長も職工長も皆んな降りた。あとには私達ち五人の者だけが殘されて了つた。が、私達ち五人も決して作業時間の全部を割いて相談することを許されなかつた。工場長は降りる時にかう云つたのである。

「君達も成るべく休憩時間中か、たもなければ仕事が終つてから相談するやうにして、時間中は成るべく仕事をするやうにしてくれたまへ！」――

「さア、どうするね。まア大體の方針を立て、それから着手することにしようぢやないか」私は四人の者を等分に見比べながら云つた。

大勢でわや〳〵やつてゐる內こそ心強くもあり、何事も出來るやうに思はれたものゝ、かう僅かばかりの者がぽつんと殘つてみると誠に心細い、賴りないものであつた。それは石井に於ても、望月に於ても、小野に於ても、また古田にしても變りはないらしかつた。皆んな心細さうな顏をして何から先きに手をつけたものか、どういふ方法でこの紛糾の解決をつけたものか、何んらの具體案もなく迷つてゐるらしかつた。私としてもまた、かうした顏振れの中に交つて委員と云ふ名に一括され、前後策を立て、自分達の連合を有利の地位に導かうと云ふことは實に容易ならぬことに思はれた。それならば、と云つて假りに他の顏振れを持つて來て委員の位地に据へてみても、これならば――と云ふやうな、凡てを信賴して任せられる者は見當らなかつた。

「どうだね大體の策戰計劃を立てゝ、あとでゆつくりその具體的の相談に取りかゝらうぢやないか」私は自分の心細さ

をまぎらすやうにかう云つて、四人の者を顧みた。

「だが委員と云ふものを工場長の方から發議して拵へさせ、事件の解決に努めさせながらそれに時間さへくれないと云ふのは少し不合理だね」やゝあつて古田が口を尖らして云つた。「十分や十五分の休憩時間で何が出來るもんか。事件の解決するまでは構ふこたあねえ、仕事時間中でもなんでも相談をやらうぢやねえか」

「ぢや俺がさういふ風に工場長の處へ行つて交渉して來る」石井が云つた。そして彼は直ぐ大股で歩いて階段から姿を消した。

　理由もない微笑があとに殘つた四人の顔を流れた。俺達の責任は重いぞ——と云つたやうな、また大勢の中から兎に角認められて選出された自己と云ふものを、今更他の者とは違つた偉いものででもあるかのやうに眺めやる快心の微笑みでもあるらしかつた。そして今までは彼等と對等に口を利くことさへ出來なかつた自分達が、永い間押さへに押さへられてゐた自分達が、兎に角彼等と對等の立場に立つて自分達の要求を主張する——と云ふその自分を意識することだけで、既に事の成否は兎に角として虐げられ通した心は滿足の微笑を洩らさずにはゐられなかつたのでもあつた。

　間もなく石井が歸つて來た。その狹つた額の下にどこか刺々しく光つてゐる彼の眼が、先づ私達の微笑を無慘にも、ぐちやりと踏み躪つて了つた。うまく行かなかつたな、と云ふことは彼の口を開く前既に分つた。

「だめだ、まるでなつちやゐない。鼻の先きであしらつてやがつて、てんから受けつけねえんだ」石井は顔全體を尖らせて云つた。「おれ達はまた奴等に一杯喰はされたんだ。奴らが委員を選び出して交渉しろなんて云つたのは、つまり俺達の力を割く計略だつたんだ。つまり奴らは俺達の力を見越してゐたんだ。五人ぽつきりで何が出來るもんか——つて」

石井の昂奮した顔を見ながら四人は默つてゐた。今はもう微笑の影もなかつた。

「だが五人きりとは云ふもんの、俺達の背後には百人からの仲間がついてるんぢやないか」

小野が抗辯するやうに云つた。

「いや、ところがその背後の援兵なるものが頗るあやしいもんだて」私は小野の抗辯を冷笑するやうに云つたが、實際どの程度まで彼等に信頼を置いていゝのか疑はしいものだつた。

「ヘツ、君達もやるだけの仕事はやつて、それから何んとでも相談してくれたまへ――だとよ。人を笑はせやがらア」

石井は自嘲的な呟きを洩らしてから、更に今度は言葉を強めて云つた。「どうだい、先方がさういふ風に舐めてやがるんだから「へえさうですか」なんてがち／＼仕事を始めようもんなら尚のこと馬鹿な目を見るぜ。最初が肝心なんだ。一つ委員だけ揃つて早退けをして奴らの鼻を明かせてやらうぢやねえか」

「まア、さうするより他仕方がないね」

誰れも石井の云ふことに反對する者もなかつた。石井の憤慨がいつか私達全部の憤慨になつてゐた。私達は揃つて事務所へ行つた。そして工場長の悔いたやうな顔をしてゐる前に五人がづらつと並んで云つた。

「僅かな休憩時間なんかでは到底滿足な相談は出來ません。それにかういふ事はいつまでも長びかして置けないことですから、我々は直ぐ歸らして貰ひます」

さう云ふ私達の顔を臆病らしい眼つきをしてぱちくり眺めてゐた工場長は、やゝ暫くしてから云つた。

「では勝手にするがよからう」

私達が仕事着を脱いで歸り仕度を始めたのを見ると、秋元が直ぐに私の處へやつて來た。

「どうしたんだい、歸るのか？」彼は何かまた譯けがあるな――と云つたやうな顔をして云つた。

「工場長の奴、實にけしからんよ。おれ達ち委員にさへ相談する時間を與へないんだ。仕事をして休憩時間にやれなんて云やがるからこつちだつて意地にならアね。早退けをしてこれから何處かでやらうと思ふんだ」

「今度は徹底的にやるんだね、おれ達だつて出來るだけの應援はするよ」

私達は工場を出た。が、口に出して反對こそしなかつたが、望月一人はこの早退けを好まないらしかつた。彼はどこか憂鬱な樣子をしてゐた。

「どこへ行かう?」

門を出たところで私は立ち留まつて四人の顏を見比べた。

「さア、さうだね、どこがいゝだらう?」

皆んな同じやうなことを云つて立ち留まつた。五人もゐて誰れ一人そのことを考へてゐなかつたことは如何にも不思議だつた。

だが一歩工場の門を出ると、直ぐ私達の心はのび〳〵と解放された氣分にならずにはゐなかつた。思ひ切り大きな欠伸をして、それから胸一杯に息を吸ひ込んで、大きな聲で歌でも唄ひたいやうな心持だつた。が、さうかと云つて話は少しもはづまなかつた。五人は默り勝ちに人通りの尠ない江戸川べりを歩いた。いつも私がこの道を歩くと云へば仕事の終つた工場の歸り、酒を飲みにゆくのか、をんなの顏を見に行くのか分らない、江戸川バアへ行く時ぐらゐのものであつた。そしてそれはいつも、太陽が西の空に沈み切つて眞暗になつてから、外套の襟を立てゝぺら〳〵と耳のあたりを掠める風を避けながら、福岡技手のあとを蹤けることを想ひ、その想つてゐることを決行した刹那の異常を享樂しながら歩くのだ。かと思ふと、初めてをんなを連れ出した夜、如何にも初心らしく胸の鼓動ばかり高く鳴らしながら堅く

手を握り合つてこの同じ道をやはり歌り勝ちに歩いた時の事を想ふのだ。が、今は十二時近い眞の晝間である。それらの幻影を描くには餘りに氣羞かしい、白日の光りが漲り渡つてゐる。だが江戸川バーの前まで來た時、私の足はひとりでに留まつて了つた。そしてそこの扉を押しながら云つた。

「どうだね、一杯やりながらどこで會議するか、それを決めやうぢやないか」

おたみと、もひとりの女の白い顔がぼんやり、客のない卓子越しに窓から外を眺めてゐた。私達ち五人がぞろつと入つたのを見ると、二人の女は驚いたやうに立ち上つた。が、私の姿を認めたのであらう。おたみだけ私達の傍へ來ても、ひとりの女はにつと遠くから微笑を投げたゞけで、傍へは來なかつた。彼女は離れたまゝ遠くで何か唄ひ出した。

「まア、どうなすつたの、今日は？　だけど稀らしいわね、こんなひる日なかゐらつしやるなんて」おたみはまるい眼をくるくるさせながら云つた。

「なに、今日は少し問題が起つて早退けさ。……まア一杯持つて來てくれよ」

五

一時間ばかりの後ち、私達は五人の内で比較的一番近いと云ふ理由から石井の家へ集まつてゐた。そこで朝、家を出る時持つて來た辨當を各々に開いて喰べた。

「若しこんなことで馘首になつたら君達はどうするね」飯を喰べながら望月が眞面目くさつた顔をしながら云つた。

「なアに、造兵ばかりに日が照りやしめえし、働くつもりならどこにだつて仕事はあらね」

石井が口を尖らして云つた。彼はまだ先つき少しばかり飲んだ酒の醉ひが殘つてゐるらしかつた。

「時に、本會議に入る前に僕は諸君の前に動議を一つ提出する。と云ふのは今日の淺見君の態度だ。あんなお安くないとこを見せつける爲めに、死活問題に望んでゐる吾々をわざわざあんなとこへ引つ張り込んで、しかもあんな酒一杯ぐらゐですましてゐられては吾々の虫が納まらないと云ふものだ。淺見君には大いに吾々におごる義務があると我が輩思惟します。ねえ、諸君、さうではありませんか。贊成の方は起立して下さい」

眞面目ともつかない、冗談ともつかない、大きな聲をしてから云つたかと思ふと、石井はいきなりアツハハハ……と笑つたのである。

「贊成、贊成！」

起立こそしなかつたが皆んな口々にさう云つて叫んだ。棠月までが、遂ひ釣り込まれたやうな顏をして一緒になつてさう叫んでゐるのが、何んだか悲慘なやうな寂しい氣を起させた。

「まアさ、そんなことアどうでもいゝやね、折角早引けまでして來たんだ。早く本會議に入らうぢやないか」私も遂ひ釣り込まれたやうに笑ひながら云つた。

「さう逃げなくてもいゝやね、ぢやそれはそれで多數決で決めたとして、愈々本會議に入るかな」

石井はさう云つて尙もにや〳〵笑ひながら、室の隅から古新聞やら古雜誌がうづ高い埃と一緒に積まれてゐる机を持ち出して來た。その四脚はぐら〳〵してゐた。彼はそれを五人の前に持ち出して來てから、その眞白な埃に今はじめて氣がついたかのやうに、ぷつと頰をふくらまして吹き拂つた。

「おい雜巾を持つて來て拭けよ」眉をしかめながら小野が云つた。埃が彼の顏へまともに吹きつけられたのである。

「そこの抽斗に紙と鉛筆がある筈だ。出してはじめてくれ給へ。おれはこれから火を起すから」

石井は室の隅にある七輪で古新聞を焚きつけてバタ〳〵煽ぎ始めた。煙と埃はもや〳〵つと室の中に渦を巻いて、皆んなの頭の上から降りかゝつた。

ぐら〳〵する机を押さへて抽斗を明けてみたが、そこには紙も鉛筆も筆も、何もなかつた。そこにあるものはやはりうづ高い埃と、バツトの空き箱と、それからけば〳〵しい色で彩色された表紙の脫れかゝつた、はやり唄の本が一冊あるぎりだつた。

「何んにもありやしないぢやないか」私は石井の方を見やりながら云つた。

「たしかそこに在る筈なんだがな、よく見てくれよ」石井は煙にむせた涙の眼をぱち〳〵やりながら云つた。

「いくら見ても同じことさ。あるものは埃とバツトの箱と……」

「いゝよ、いゝよ、分つた……ぢや誰れか買つて來てくれ。直ぐこの四五軒先きに賣つてるから」石井は慌てゝさう云ひながらまた後からつけ加へて云つた。「そして何んだね、この會議で必要の爲めに買つたものはちやんとつけといて連合の奴らから出さしてやるんだね」

「そりや勿論さ！」望月が直ぐそれに應じて云つた。

「ぢや誰れか買つて來ないか。俺が金を出しとくよ」私は云つた。

が、誰れも行かうとする者はなかつた。皆んな煙草を吸つたり、寢轉んだりして石井の火を起すのを見てゐる。パチパチ火花を散らしながら炭火は眞赤におこりかゝつてゐた。

「おい、早く誰れでもいゝや、買つて來いよ、ぐづ〳〵してたら折角早退けして來ても何んにもならねえぢやねえか」石井が火鉢に火を取りながら云つた。

「ぢや俺が行つて來る！」

しばらくしてから古田が澁々立ち上つて行つた。と、それをきつかけにしたやうに、皆んな起き上つて火鉢を囲んだ。

障子の棧を見ると灰色の埃はこゝにもうづ高く積もつて、薄黒く煤ぼけた障子を鈍い午後の日が黄色く染めてゐる。石井の顔を見ても、望月の顔を見ても、どれもどれもが皆澁紙のやうな黄色い、やはりうづ高い埃を浴びてゐるやうな感じを漂らしてゐる。

買物をすました古田は階段をみし／＼云はせながら上つて來た。彼は買つて來たものを丁寧に一つ一つ机の上に並べた。

五人は額を鳩めて机の周りに座つた。机は私に向つて押しつけられ、紙と筆は私の前に据へられてある。さア筆を執れ――と云はぬばかりに皆んなの顔が交々私に向けられる。私はいつの間にか、無言の裡に筆を執るべく餘儀なくされてゐたのである。

「だが嘆願書つてどういふ風に書くものかね？」私はふと顔を上げて云つた。

「形式なんかどうだつていゝぢやないか」

「全くだ、おれ達が本當に困つてゐること、今のやうな賃銀では喰つて行けないことを書いて、だから單價を値上げしてくれ――と云ふことに結論してやればいゝぢやないか」小野の言葉を引き取つて古田が云つたのだ。

「ぢや、それはそれでいゝとして何割ぐらゐの値上が適當だらう？　餘り法外の要求をしたつて容れられないのは分り切つてるし……」

私は筆を擱いてみたり執つてみたりしながら相談するやうに云つた。

「さうだねえ」と云つて石井は口を噤んだ。

「さア、何割ぐらゐがいゝだらう？」と、また一人が首をひねつた。

「三割ぐらゐぢやどうだらう？」石井がおづおづ云つた。

「今の收入に三割增やして貰つたんで滿足に喰つて行かれるかい？」思はず私は突つかゝるやうに云つた。

「三割ぢや無論だめさ、だが餘り大きなことを要求して却つてぶち壞しにしてもいけねえからなア」と、石井が云ひわけするやうに慌てゝ云つた。

私の頰をチラツと微笑が掠めた。石井つて男も案外可愛らしい奴さ——と思つたのである。どんな無法な事を云ひ出すかと思つてゐたのが意外にも、さうした實際的な、要求の容れられさうな程度に小刻みに切り出して來たのだから。

私は彼の方へ微笑の顏を向けながら云つた。

「ぢや勘定よく五割にしよう」

「うむ、五割要求しときや、二割ぐらゐ削られたつていゝからなア」打算的な、その人らしい笑ひを浮べながら望月が云つた。

「五割にしよう、五割に……」小野と古田とが同時に、決定するやうに云つた。

「では五割と決めて、その次は生活の困窮狀態を述べる段取りになるんだね。……こいつがむつかしいて」私はそこで筆を擱いた。「あんまり事實の通り書くと、その事實が又餘り悲慘なんで第三者が見たら作りごととしか思はれない

一たが事實の通り書くより仕方があるまいじ

さう云つたのは小野である。彼の語氣は何かに怒つたやうな調子だつた。

「ぢや百人以上もの連合の者の生活狀態を殘らず書くか。さうすりや何より完全に違ひないぜ。先づ例を擧げるとだね、細君携帶の共稼ぎで工場へ出て來る者は普通として、それらが家へ歸ると今度は直ぐに、賣藥の袋貼りをする。麻つなぎをする。夜店を出しに行く者がある。かと思ふと、たまの休みにや、勞働ブローカーの處へ行つて臨時稼きをする。建築場の煉瓦運び、お葬式の棺擔ぎ……」とかう云ひかけた時私はふと、望月と古田とが苦い顏をして反つ方を向いてるのを見た。私は日曜といふと二人が勞働ブローカーの處へ行くと云ふことを聞いてゐた。こいつア少し當り過ぎたかな――と思ふと何んだか氣の毒になつて、私も彼等の顏が見られなかつた。

「そんな例を擧げたらきりがあるまいがね、事實は兎に角、吾々が工場で十一時間も働いてゐるに拘らず、それだけでは、活することが出來ないといふことを示してゐるのだ。と云つて吾々が贅澤をしてそれで生活費が足らないかと云へば、決してさうではないので、着る物はと云へばこの寒中に外套もなしでぺら／＼の淺黃服を着て工場に通つてゐる。喰ふ物はと云へば、今こゝで皆んなが開いた辨當を見ても分ることなのだ」

私は苦笑と一緒に口を噤んだ。皆んなの顏にも苦笑の皺が小波を打つた。が、誰れも何んとも云はなかつた。で、私はまたつゞけた。

「それに棲む家はと云へばこの石井の如く……」

石井の顏がハッと險しくなつたかと思ふと直ぐにや／＼とした苦笑に變つた。彼は今更のやうに、この自分の室の中を見廻してゐる。私は彼の眼を追ふやうに無遠慮な視線を投げながらつゞけた。

「石井の如く二階借りをして自炊をするか、でなければじめじめした日蔭の裏長屋に棲まうよりか他に仕様がないんだ。如何に世の中が變つてもだ、光りと空氣は萬民に等しく惠まれる——だなんて唐人の寢言は「富める者は禍ひなるかな、その人の天國に入るは駱駝の針の穴を通るよりも難し」なんて基督の言葉と同じく、吾々を誤間化す諦めの思想に過ぎないんだ。富める者が何んで禍ひなもんか。富める者ほど幸福なものはないぢやないか。立派な邸に棲めて、綺麗な着物が着れて、旨いものを喰つて、自動車に乘れて寢たい時に寢て、行きたいとこへ行けて……えゝおい、俺は金持になりたいよ。金持になつてさういふ生活がしたいよ。皆んなはどうかね？」

私はそこで言葉を切つて四人の顏を代る代る見比べた。

「そりや無論なりたいさ。なりたいからこそかうして一生懸命稼いでゐるんぢやないか」

暫くしてからこの同じやうな答へが殆ど同時に四人の口を衝いて出たのである。

「ところがなれないと來てゐる」私は冷然として云つた。「だいち金持になりたい者がさうして職工なんかしてゐるつてのが間違つてるんだ。職工なんかしてたんぢや一生眞つ黑になつて稼いだつて金持になれないね。君達ち——いや、俺達ち職工なんかする者には全然金持になる能力が缺けてゐるんだ。人がよ過ぎる。馬鹿正直過ぎる。それにもう一つ、根本的な缺陷がある。しかもそれは先天的のものでどうすることも出來ないものだ」

私はそこでまた言葉を切つた。そして四人の者の好奇心をそゝるやうに、學校の先生が質問を出して生徒に答へさせる時のやうに、心持ち微笑を含んだ顏を彼等の一つ一つに向けたのである。

が、石井も望月も小野も、また古田も皆んな出來の惡い小學生のやうに、好奇心は動かされたらしいが口をぽかんと明けて、その「根本的の缺陷」が何んであるかを訊かうとするやうに、私の顏を見詰めるのである。

どうですな、答へられませんかな――から云つてからかつてやりたいやうな、いたづらつこらしい氣持を覺へながら私は更に微笑の影を濃くしてつゞけた。

「人間つて奴はなんだね、生れながらにして――つまり性格的に二つの傾向に別れてゐる。と、かう思ふんだ。で、僕はその二つの傾向を今まで「蛭」型と「蟻」型とに見立てゝゐるんだが、君達ちやあの蛭といふ奴を知つてるかね。人のからだに取つ着きさへすりや直ぐ血を吸ひはじめる。その血を吸ふといふことは彼等の本能なんで、自分のからだが鞠のやうになるまで血を吸ふ。それはその血がうまいまづいを味識する暇もなく、またそれだけの能力もなく、只機械的に血を吸ふ。その蛭が血を吸ふといふことは實に彼が生れながらにして持つてゐる素質なんだ。それから又蟻を見給へ。奴は只もう一生懸命に働く。朝から晩まで休む暇なく勞働してゐる。そしていつも瘠せてゐる。だが、その働くといふこと、その事は奴らに取つてはまた生れながらのもので、只もう何がなし働かずには生きてゐられないのだ。ところ初めに歸つて云ふが、「蛭」型の人間と云ふ奴はつまりその蛭のやうに先天的に、人さへ見ればその膏血を搾取せずにはゐられない人なんだ。おまけにその搾取と云ふことに對して何らの道徳的批判も、倫理的の反省をも加へることなしに只自分の持つて生れた才能を本能的に發揮するのだ。またその才能を發揮すべく有ゆる要素を具有してゐるのだ。また「蟻」型の人間と云ふ奴は只働いて働いて働き拔く。つまり働く爲めに生れて來たやうな人間で、俗に云ふ貧乏性の人なんだ。つまり社會と云ふのはこの二つの傾向が寄り集まつて出來上つた人間の集團で、隨つてそこには勢 さうしたものゝ矛盾や衝突でいろ〳〵な事件が持ち上る。無論、さうは云つても多少はその中間性の奴もあらうし、變則の奴もあらうがね。大體がその二つに大別されると思ふ」

傾聽してゐる四人のぼかんとした顔を見ると、いつもは喋ることの嫌ひな、いや、てんで喋れない私ではあつたが、こ

の時ばかりは妙に調子が狂つて次から次と言葉が出て來るのだ。私は更につゞけた。が、この時はもう微笑の影もなかつた。

「ところがだね、蛭型や蟻型とは云つても人間となるとさう奴らのやうに單純にはいかない。蛭型の人間はその貪慾である一方、その貪慾を遂行させるに必要な狡智と殘虐性と、その他有ゆる特質を持つてゐる。だから金持とか成金とか云ふ奴の裏面を覗いて見給へ。彼等の歩んだ背後には必ず無數の犧牲がころがつてゐる。血と精力と、有ゆるものを絞りつくされた蒼醒めた人々が無音に呻きを揚げてゐる。呪咀の叫びを發してゐる。」

この時私の頭にはあり／＼とさうした犧牲者の血みどろの姿が、首を振り手足を動かし、からだ中を蠢めかして踠き苦んでゐる圖が描かれた。それは地獄の圖である。その中には私の知つてゐる顏もいくつか交つてゐる。現にこの工場に最近まで働いてゐた、腕一本で一人前の仕事をしてゐた旋盤工の根岸がゐる。彼は左腕のない、右腕だけを器用に使つてバイトを研ぎ、スパナを握り、更にパスを使つて眩しい程の素早やさで仕事をしてゐる。――私は遂ひ一ケ月程前まで毎日彼のさうした姿をこの工場に見た。今も彼の姿は私の頭の中でさうした姿で働いてゐる。十三年前、私がはじめて見習工としてこの工場へ入つて來た時、彼は既に右腕だけで働いてゐる姿を私達に見せたのだ。私の小さい胸はその時どんなに愕いたことか。――十年も前の戰慄を私は今だに忘れずにゐる。殘酷と云つていゝのか、情けないと云つていゝのか、兎に角その時私の心臟は急に凍へたやうに冷たくなつて、その根岸の姿を茫然と詰めたものであつた。それから十三年間、私は毎日彼の一本腕の姿を見て今日まで來た。彼がその一本の腕を失つた時、そして工場の診療所で呻吟してゐる時、工場が彼に與へたものは約三ケ月に亘る休養中、日給の半額づつであつたと云ふことである。その時彼には既に妻があり小供があつた。働けなくなつた彼れ、腕一本になつた彼れに與へられた僅か半額の日給――それが

どうして一家を支へるに足りるか。私がはじめて彼と口を利いた時、そして腕を車輪に卷き取られた時の樣子を聞いた時彼は憤然として工場の冷酷を罵つたのであつた。

「あの旋盤工の根岸をみたまへ」私はそれらの血みどろの犧牲者の姿を眼に浮べながらまたつゞけた「あの根岸なんか犧牲の標本ぢやないか。腕一本にされても尚吾々は默つて一人前の仕事をして働かなければ生活出來ない社會狀態ぢやないか。人間の集團生活が初まる時、つまり社會組織の緒についた時、その社會の權力を握つたものはつまり蛭型の人間だつたのだ。强者だつたのだ。强者が弱者を押さへつけて權力を握ること、それは實際いゝ惡いを超越して當然のことだ。さうして彼等は漸次、自分達に都合のいゝやう、又自分達ち子孫を擁護するためいろ〳〵の道德とか、法律とか、宗教とか、その他さまざまの手段を考案して實施して來たのだ。如何にも尤もらしくね。そしてそれが今日に及んだのだ。それは實際いゝことさ。皮肉でも何んでもなく、いゝことだ。が、只一ついけないことは、つまり不幸であつたのは、俺達がさうした蛭型の人間に生れないで蟻型の人間に生れたことだ。俺達だつて蛭型の人間に生れてゐたら彼等と同じやうに多くの奴隷を使ひ、自動車に乘つて人を轢き殺してもちつと許りの弔慰金で慰謝し、煤煙を空一面に漲らして自分だけはどこかの海岸の別莊にでもおさまり、新聞なんかに時々現はれる「悲慘な家族」を見ては寄附金をし、金が儲けたくなれば戰爭でもなんでも始させるんだ。そして銃後の功勞者とか何んとか云つてね、まア勳章を貰つたり爵位を貰つたり、彌が上にも自家の安全と搾取の武器を增大するんだ」

「ふん、まアそこで一寸待つてくれ」小野が手を揚げて私の口を遮つた。「すると何かね、君は今の金持だとか權力階級のすることを全部肯定するんだね。權力さへあればどんなに人道を無視しても道德に反した行爲をしてゝもいゝと云ふんだね。つまり資本主義の肯定論者だね」―

何んの反響もない四人の聽衆を前にして喋つてゐた私は、實は少し、餘りに手應へのない聽衆なのに張り合ひ拔けを感じてゐたのだ。誰れか一人ぐらひノーとかイエスとか云つてくれさうなもんだが——と待ち望んでゐたのだ。ところが、その待ちに待つた質問者が出たのだ。私の顏には思はず微笑が浮んだのである。

「その通り、俺は資本主義の謳歌論者だよ。實を云ふと俺は今でもナポレオンを夢想し、カーネギイを夢想し、權力に汲々たる——人は何んと云はうと、さうした一個の平凡人なのだ。が、どだい正義だとか人道だとか云ふ奴に限つて弱虫の泣き虫なんだ。そんなことを云つて強者の袖にすがつて苛責の鞭を緩めて貰ひたいといふ、つまり同情心にすがる情けない奴なんだ。奴らが羨やましかつたら奴等に取つて代る考へを起したらいゝぢやないか。俺は同じやうに働いて同じやうに喰つて、同じやうに着て、同じやうな家に棲まふ平等論なんか大嫌ひだ、平等論もいゝが、さうなるには一旦俺達ち自身が權力階級になつて、獨裁君主になつて、今まで俺達を虐げ通してゐた奴らを脚下に蹂躙し、奴隷にしたその上でこつちから一歩讓つて社會主義を實行してやるね。俺は今の奴隷狀態から急に平等社會にされることなんか眞つ平ご免だ」

「ぢや、その蟻型の人間だといふ弱者の俺達にどうして、あの堅固な資本主義が引つくり返せるね？ それが第一疑問ぢやないか」

小野の蒼白い顏が眉一本動かさずに云つた。

「覆へせないことはないね。が、覆へせなくたつていゝさ。實のところ俺は今そんな事はどうでもいゝやうな氣がするんだ。そんな事はつまり飢え切つたお客さまを前にして、彈丸を拵らへ、山へ獵りにゆき、歸つてから獲物を料理して火に炙り、鍋にかけてそれから薦めるやうなもので、そんなことをしてゐる間には肝心のお客樣は飢え切つて死んで了

ふかもしれないのだ。俺達は今恰度、さうしたお客さまなので、そんな大したご馳走よりか差し當つて、一杯の粥飯でもいゝから至急喰はして貰ひたいのだ。――なら、それは何か？　と云ふことになるがそれはつまり、彼等に對する復讐だ。君達はどうかしらないが、俺はダイヤだとか眞珠だとかぎら〳〵した指輪をはめ、ぴら〳〵した着物を着た奴を見ると、むかむかつと理屈なしに憎惡を感じるのだ。それは、彼等は略奪階級だから憎む、といふ意識的努力的の憎惡でなくて殆ど本能的の憎惡なんだ。それはどうすることも出來ない感情だ。俺に取つては今、社會主義者なんかの夢想してゐる黃金時代なんてものは要するに、先つき云つた腹の減つたお客さまを待たしといて山へ狩りにゆくやうなもので俺達は、そんな時代の實現を待つてられない程苛々してゐるのだ。つまり彼等學者たちの拵らへた學說――夢想する黃金世界なんてものは、そりや理屈の上では俺達だつて感心するさ。だがどうも心がそれにぴつたりしないのだ。つまりそれは彼等が机上から得た夢だと思ふからだ。だが、その夢といふやつが所謂正義人道に立脚した却々立派なものさ。つまり名工の手になつた立派な彫刻さ。長い間專門の技師がかゝつて築き上げた間然するところのない殿堂さ。だが惜しい事にそれには血が通つてゐないんだ。生命がないんだ。ところで俺達だけの持つ「憎惡」は成る程、屋根だけはあつても床のない蒲鉾小屋であるかもしれない。眼が片方なかつたり手が三本あつたりする片輪者かもしれない。がそれでもそれにはちやんと血が通つてゐる。生きてゐる。いくら立派なものでも血の通つてない死んだものでは仕方がないぢやないか。併かもその生命が、金持共のぴら〳〵した服裝や、自動車にふんぞり反つてゐる姿を見ると、それを羨む前にむら〳〵つと憎みの一眸を投げかけるその憎惡が、彼等の學說以上に力強く實際的であるのを知るのだ。知つて悅しくてならないのだ。つまり彼等に對する復讐が俺の生命なのだ。」

　この時私の頭は眞つ暗な夜の江戸川べりを思ひ浮べた。一人の男のあとをつけてゆく惡魔のやうな一人の男の姿を描

き出した。私は私達の仲間の凡てが、場合は違つても、時は異つても、自分達の壓迫され通しの憤懣がさうした手段に依つていつか、唯一の捌け口を見つけるであらうと思つた。

室の中はいつか暗くなつてゐた。誰れも口を開く者がなかつた。石井が立つて室の隅から電燈の紐を外して眞ん中へ吊るした。石井はそのまゝ階段を鳴らして下へ降りて行つた。皆んな今更のやうにからだを動かし、ポケットを探つて煙草を取り出し、火をつけた。ゆるやかな煙が濛々と各々の顔を包み、天井に舞ひ上つて行つた。やがて古田が立ち上つて障子を明け、暮れ切つた闇の戸外を眺めてから雨戸を閉めはじめた。

階段を踏む足音がしてやがて石井が姿を現はした。

「そばをあつらへて來たがそれでいゝだらうね」彼は座りながら云つた。

「うゝ結構……だが大分喋つちやつたね」私は彼等の顔を見廻しながら云つた。「嘆願書の一件もそつちのけにして……」

「まアいゝさ、嘆願書なんか。そばでも喰つてゆつくり書かうや」滿足したやうな、どこか晴れやかな聲で古田が云つた。「だがかうして話でもしてゐると時間が短いが、工場にゐると隨分長いね」

「どだい十一時間の勞働なんて少し長過ぎるよ。だが工場の連中ももう終る時分だらう」私は時計を見た。六時一寸過ぎだつた。「だが俺がはじめ一見習工であの工場へ入つた時は丁度戰爭中だつたが、何んでも十六時間とか皆んな働いたんださうだぜ。富田が今でも月二割づつも取つて貸してるあの金も、その戰爭時分に儲けた金なんださうだからなア」

「ふん、心掛けのいゝ奴だな。だからあんな跛なんかになるんだ」石井が冷笑の皺を鼻のあたりに刻んで云つた。

「だつておめえなんかその富田のお世話になつてやり繰りしてるんぢやねえか。あんまり惡く云ふと罰が當るぜ」小野がまぜつ返すやうに云つた。

「お互ひさまになア」石井も默つてはゐない、直ぐそれに應じて云つた。

「さア、ほんとにもう雜談は止しにして嘆願書の方にかゝらうぢやないか。折角早退けしても何んにもなりやしない」

私はいきなり机の上の鉛筆を執つた。そしてぐら〳〵する机の上に兩肱を突いて、頭をじつと抱へ込んだ。先つき話し合つたいろ〳〵の値上理由がごたごたと頭の中から出て來た。私はコツ〳〵と鉛筆を走らした。

私は何にも耳にしなかつた。只、紙の上を走る鉛筆の音のみが、私の意識を一杯に占領してゐた。靜かな一瞬間であつた。あるとも思へない五人の微かな呼吸の音、時計のセコンドを刻む音、それから火鉢を取り圍んだ連中の私語――それがカサコソと耳に入る時、私はいつか自分の鉛筆を持つ手が一つ處に停まつてゐるのを見る。私は靜かに首を起して室の中を見廻す。皆んなの鼻から出て來る息がそのまゝ白く凍つて霧のやうに發散する。手の指はいつか凍へて感覺を失つてゐる。

「寒くなつて來たねえ」石井がさう云つて慌てゝ炭をつぎ足した。私はまた鉛筆を執り上げ頭を抱へ込んだ。暫くはまた鉛筆の走る音が凡ての焦點となつて活動をつゞけた。火鉢には幾度か炭がつがれた。

「おい石井、その炭の代もちやんと記けて置け。でないとお前のじばらになつちまうぞ」

誰れかゞ石井をからかつてる聲であつた。

私がやつとそれを書き上げた時は、いつか十時半を過ぎようとしてゐた。私は初めからそれを讀み返してみた。修正したい個所もあつた。皆んなにもつと意見がありさうだつた。清書する時間も無論なかつた。凡てはまた明日にすることにした。

「どうもご苦勞!」

お互ひにかう云つて石井の門口で別れた。

六

とろ〳〵と眠つたかと思ふと私は直ぐ起された。澁い眼をこすつて時計を見た。五時だつた。

「昨夜は大へん遲かつたねえ」母が云つた。

「あゝ」私は氣のない返事をした。何んであんなにおそく歸つたかを說明する氣になれなかつた。母の心配するであらう顏を見るに耐へられない氣がした。「友達のところで話し込んでる內に遂ひおそくなつちまつて……何しろ車庫前から電車がなくなつて步いて來たんだもの」

たつたいま脫いだばかりのやうな氣のする服に着換へて私は外へ出た。夜はまだ明け切らない薄闇だつた。

「お早よう、どうも眠くて弱つた」かう挨拶をするかしない內に始業のボーが鳴つた。

「どうもご苦勞さま」顏の筋一つ緩めないで皆んなが殆ど申し合はせたやうに云つた。それは如何にも他人ごとのやうに、冷淡な言葉として私の耳に響いた。

「田口さん！」私はかう云つて、その冷淡さを露骨に現はしてゐる組長に呼びかけた。「仕事をはじめる前に兎も角三階へ集つて貰ひませう。昨夜拵らへて來た嘆願書を讀んで皆んなの意見を聞きたいと思ひますから」

田口の顏が迷惑さうな皺を刻むのを見た。彼が組長といふ位置にゐながら成るべく、この爭議の渦から遠ざからうとする醜い卑怯な態度はこゝにも現はれてゐた。彼は云つた。

「三階へ集まることは兎も角工場長の許可を得てからにしよう。何しろわれ〳〵はこの全權を君達に委ねてあるのだし

それに昨日君達が早退けをしてから工場長に云はれたことがあるんでね」

「どんなことを云はれたんです？」私は鋭い調子で云つた。

「どんなことつて工場長はつまりかう云ふんだ。――今度の問題については吾々は誠心誠意、君達の選んだ委員諸君と交渉を遂げるから、君達はなるべく其方へ首を突つ込まないやうにして仕事をやつてゝくれ給へ。でないと、折角纏るものも纏まらないで仕事の能率が益々下がるから。――つてね」

「そりや工場長の許可を得ようと得まいと、どうでもいゝんですがね、吾々は只、皆んなに集まつて貰ひさへすりやいゝんです。吾々の委員といふものがどの程度まで諸君から信頼されてゐるものかしらないけれど、さうかと云つて諸君は必ずしも吾々委員がどんなことを決議して要求しても構はん、と云ふんぢやないと思ひます。若し構はんと云ふのなら何も集まつて貰ふには及ばないんですがね」

「その通りその通り」石井がじろつと田口を睨めながら叫んだ。

「ぢや、僕らは三階で待つてますからね、田口さん直ぐに工場長のとこへ行つて許可を得て、皆んなを連れて來て下さい」

田口が澁々頭を二三度肯かせるのを見て、私達は三階の食堂へ上つて行つた。食堂では雜役のお婆さんが一人、せつせと箒で床を掃いてゐた。が、そこにはこの冷たいのに火の氣一つなかつた。私達は一列になつて、僅かに朝日の當りはじめた硝子窓の處へ背中をくつ着けて並んだ。

「田口の野郎なんだい、組長だなんて云やがつたつてやつぱり俺達と同じ職工ぢやねえか。利害を共にする仲間ぢやねえか。そいつが何かつてえと、工場長がどうだとか、規則がどうだとか……ヘツ、糞面白くもねえ、今度何か文句を云

やがつたら、踊りのどさくさまぎれに袋叩きだ。ボカボカツとな」

石井がまた今更のやうに口を尖らして田口に對する憤慨を洩らしはじめた。彼は二三日前の事件の始まる前に、嘆願書の連名を求める爲めに仲間を說き廻つた時、田口からへんな風に工場長に密告されたことが今でも癪に觸つてならないらしかつた。何かと云ふと田口に對する私憤を洩らさうとする。が、どちらかと云ふと直情徑行的な石井の單純さに比べて、田口の態度は餘りに曖昧な、どつちつかずな、組長と云ふ地位に余りに戀々とした自家擁護の觀があつた。私は石井をなだめるやうに云つた。

「だが、やつつけるにしてももう少し待てよ。やつぱり連合と云ふものの全體を動かすにはどうしてもあいつの力を借りなければならないことがあるんだからなア。あいつがどこまでも俺達の邪魔をするやうだつたら、その時やつつけても遲かアないんだから」

この時どか／＼といふ多勢入り亂れて階段を登つて來る足音がした。來たな！　と私は思つた。私達は一齊に階段の方へ眼をやつた。

連合の者が昇つて來るのだつた。

田口がその小さなからだを眞つ先きに大股に歩きながらやつて來た。

「今、工場長のとこへ行つたんだがね」彼は來るなり息をはづませて云つた。「工場長が云ふにはね、單價値上については自分もいろいろ考へてゐる。ところで君達が更たまつて嘆願書なんか所長の方へ出すと、事が大仰になつていけない。で、所長の方へは自分からそれとなく穩やかに話をつけてみたいと思ふから、君達の要求は要求として只自分の手許へ參考までに出して貰ひたい。さうすれば自分の方ではそれに據つて出來るだけ君達を滿足させるやうに、所長殿と

交渉するから。――と、さう云ふんだ」

私は默つて石井の眼を見た。それから小野の眼を見た。二人とも眉のところに氣むづかしさうな皺を寄せてゐた。

「どうせ碌なまねはしねえんだらうが、試しに任せてみるのもいゝだらうぢやねえか。で愈々いけなかつたら、その時俺達が肌を脱いでかゝりや……」

しばらくしてから石井はいつもの單純さから無雜作にさう云つて退けた。誰れも、ほかには何んと云ふものもなかつた。工場長のさう云ふ腹をどの程度まで信用していゝのか、どこか不安らしい樣子は示しながら默つてゐる。

「ぢや、一應任て見るのもいゝでせう。だが參考として出すのも、自分達が直接嘆願書として出すのも、どちらにしても內容に變りのある筈はないのだから、現に昨夜書いたものを玆で讀んでみます。だがこれは吾々が勝手に出すんではなくて、連合全體の意見として出すんだから足りない處は補ひ、惡い處は注意して貰ひたいと思ひます」

私はさう云つて嘆願書の草稿を石井の前へ差し出した。それは「俺に讀まさしてくれ」と云ふ彼の昨夜からの賴みであたから。

が、彼はその時ポツと頰を染めて小供らい嬌羞を見せたが、やがて無言のまゝ受取つて讀みはじめた。

しばらくは石井の朗讀の聲だけが三階に響に渡つて、咳一つする者がなかつた。森閑としてゐた。

やがて石井は讀み終つた。私は皆んなの顏を見廻して意見の出るのを待つた。誰れも何んとも云はなかつた。

「それで結構ぢやないか。」しばらくしてから秋元が云つた。

「さア、仕事にかゝらうぜ！」

その期を待つてたやうに田口が叫んだ。皆んなぞろ〳〵と降りはじめた。

あとにはまた、私達ち五人の委員だけが殘つて了つた。

「どうだい、直ぐ早退けをしてこれを清書して了はうぢやないか」先づ第一にさう云つて口を切つたのは石井である。

「だが、まだ來たばかりぢやないか。せめてお晝頃までゐなくちや義理が悪いや」

私達ち五人はまたそこで十五六分間、そんなことの押問答をした。結局昨日の通り、正午からまた五人揃つて早退けすることにした。が、實はもうそんなに揃つて早退けする必要は少しもなかつたのだが、私自身、何んだか石井の云ふ通り仕事をする氣にならないので、無言の裡に贊成した形になつて了つたのであつた。望月と古川とはこの會合の初めから終ひまで口を開かなかつたが、また今の早退けと云ふことにもどこか贊成し兼ねたやうな風だつたが、結局、委員といふ名に引き摺られて行動を一にすることになつて了つた。

正午のボーが鳴つた。

他の連合の者の怪訝さうな眸を背中に受けながら、私達は揃つて工場を出た。

私達はまた石井の家へ集まつた。彼は昨日の通り新聞紙を裂いてマッチの火をつけ、火を起した。

一人でやつてこそ一時間もかゝれば足りる仕事であつたが、それが五人も集まつては却つて仕事の清書の方には手がつかなかつた。時間は徒らに空費して、他愛もない雜談は枝から枝と延びて行つた。

「併し今度のやうな問題が起つた場合に勞働組合が出來てると非常に心強いと思ふね」小野が今まではづんでゐた雜談の腰を折るやうに、眼前の問題に話の緒を持つて來た。

「それはさうさ。組合は無論必要さ。これを機會に一つ作らうかなア」私は冗談のやうに直ぐそれに應じて云つた。「だが考へて見りや吾々微力の積立てた金とか力とか云ふものは、無限に近い官僚共の力にはどうも敵はないらしいて。此

方の力が大きくなれば先方はそれに倍する力で押して來るから仕方がない」

こんなことを話しながらも私は妙に沈んでゐる望月と古田とを見た。その二人が何を考へ、何を想つてゐるか、その想像の出來ないことはなかつた。望月にしろ、古田にしろ、工場の休日毎に建築場の日傭に行く人である。二日もつゞいた早退けの爲めに失ふ工銀の事を考へてゐるのであらうことは餘りに明かであつた。

「ぢや、勞働組合なんて結局必要がないことになるね」小野が私の云つたことに對して反駁するやうに云つた。

「必要のないことはない、大いに必要さ」私は云つた。「なぜつたつて吾々勞働者なんてものは一人一人では誠に弱いものさ。みじめなものさ。だがそれを數多く束ねたらいくらか強くもならうぢやないか。それに差し當つての必要はあつてもなくてもだ。これからの階級戰爭に今のやうに訓練のない、統一のないことぢや勞働者に勝ちみはないからね」

「しかし勞働者が堅く團結したらそれが正義の觀念に出立した要求である限り、必ず勝つと思ふがね」小野は默つてはゐなかつた。彼は勞働組合を堅く信じてゐるらしかつた。

「そりや團結さへ出來てりやどんな無理だつて通るがね、そして必ず勝つに決まつてるがね、その團結といふやつがうまくいかないのさ。裏切る、友を賣る、つて奴が續出するんだ。少し嚇かされるとぐにやぐにやと參つちまうんだ。勞働運動が多くの場合失敗するつてのは、いつもそれなんだ。だから資本家や官僚が加へるその後の壓迫は反動的に一層強くなるんだ。しかし、それはいゝことさ。虐められゝば虐められるだけ勞働者は早く自覺する。資本家とか官僚とか云ふものゝ正體を知る。そして今までの壓迫酷遇に對する漸層的、潜在的の復讐觀念が、意識的に強まつて來る。そして溫情主義なんてものゝ化の皮をはがして了ふ。だから勞働運動が着々と成功してゆくのと、失敗に失敗を重ねて頸を締められるのと、どちらが早く吾々の最後の目的に達しさせてくれるかと云へば、それは成功の方よりかも失敗の方によ

り可能性があると云へる。だから吾々としては勝つても負けてもどつちでもいゝのだ」

「ぢやその最後の目的を達する爲めに、吾々は目前には益々頸を締められることを豫想して勞働運動をするんだね」心細いこつたなアーーと云つたやうな顏をして小野が云つた。

「どうも仕方がない」私はさう答へるより他なかつた。「だが議論はあと廻しにして仕事の方を先きへ片づけて了はうではないか」

さう云つて私は紙と筆をぼんやり考へ込んでゐる望月の前に押しやつた。「君は字がうまいんだから清書だけはやつてくれたまへ」

「俺は晩飯の仕度にでもかゝらう」

石井はさう云つてそゝくさと下へ降りて行つた。あのがさつな石井がーーと思ふと、その晩飯の仕度に降りてゆく後姿がどことなくしほらしくも見へた。

外はいつか日が暮れて障子一重外には暗い冷たい闇が音もなく、ぐる／＼に取り卷いてゐた。

無理に押しつけられた望月は、まるで小學生が習字の清書をする時のやうに、一字一字丁寧に字劃を揃へて書き初めた。その苦心して書いてゐる望月の手許を見てゐると肩が凝りさうであつた。

望月がやつと二枚程書き上げた時、石井は再び梯子段をみし／＼云はせて上つて來た。眞赤な彼の手には、水の垂れてゐる葱と小さな新聞紙包みが摑まれてゐた。

「今夜は一つ前祝ひに牛鍋だ」石井はにこにこしながら云つた。そして不器用な手つきで葱をザクザク刻みはじめた。

「七輪の方へ火をカン／＼起しといてくれや」

彼は初めからすることもなく手持無沙汰にしてゐる古田に聲をかけた。

私と小野とは議論の後の沈默をお互ひに胸の中に感じ合ひながら、望月の清書するのをぼんやり見つめてゐた。何んだか寂しい氣持だつた。皆なんかうして志を同じくしてかたまつてゐても、結局人間はひとりぼつちだと云ふ孤獨の感じであつた。寂しさは、意識すればする程自分と他とを阻隔する淵が大きくなつて來る。深くなつて來る。頭がぼうつとして來て、凝乎と見つめてゐる望月の筆を持つ手がだん／＼に小さく、微かに、自分から離れてゆく。石井の葱を刻む音、古田の七輪に火を起す團扇の音、――それらが遠く微かに、現實を離れ、夢幻の世界の出來事のやうにぼんやりして行く。やがて、凡ての官能がぱつたり窓を閉めて、自分は自分の呼吸をすら意識したくなる。――かうして自然に、現實との境の扉をぴつたりと閉て切られた私の頭には、いつかしら、過去の自分の繪卷物が展開されてゐる。

何んの色彩もない、煤けた灰色の繪卷物である。續つても續つても陰慘な、見るに苦しい、顏を反けたい場面である。若し人間が生れた時、物心がついた時、これはお前がこれから先き生きてる限り踏んでかなければならないお前の一生だぞ！――と云つて、この單調な暗い人生を豫示されたら果してどうであらう？　併し幸ひにして人にはその運命を豫知する能力が與へられてない。しかも絶望の一歩先きには希望といふ奴が座つてゐる。人はいつでもそいつにだまくらかされてのこ／＼と茨の道を歩かせられてゐる。

私は私の前にひろげられた自分の繪卷物を見る。――紺飛白の筒袖を着、袴を穿いて小學校へ通つてゐた主人公はいつか淺黄の勞働服を着た一個の少年工となつてゐる。ひよろひよろした足を踏みしめてハンマーを揮つてゐた。また或る時は旋盤のハンドルを握つてゐる。手の中一面に出來た肉刺の皮が破れて水が出るのを、人知れず涙と一緒に拭き取つてゐる。

雨の日風の日、少年工の足を煩はした工場への遠い道にはいつか電車が走るやうになつてゐる。が、彼がそれに乘るやうなことは滅多にない。ひどい霜の朝も雪の晩も、彼はその電車に追ひ越され追ひ拔かれしてその同じ道を歩く。さうして彼が月々家へ齎らす工銀は皆んな、燒石に水を注ぐやうに生活費の中へ吸ひ込まれて了ふ。しかも彼が工場で毎日見聞きするものは何れも暗憺たる人生の斷片である。先輩職工の悲慘な末路である。彼等は何れもよく働く。しかも健康のつゞく限り小さな棟割長屋から貧しい辨當を提げて惡い空氣を吸ひに、過激な勞働に心身を消耗さすべく工場へやつて來る。缺勤が五日六日つゞいたな、と思ふと彼等の內の誰れかの死が傳へられて來る。

少年工は自分の一生を彼等の裡に見るやうに思つた。彼はその度びに悚然とした。彼はやがて夜學に通ひはじめた。勉强をして勞働者の足を洗はうと思つたのである。が、夜學も長くはつゞかなかつた。意志の薄弱を責めては幾度か學校へと志した。それでも半年とつゞいたことはなかつた。

少年工はやがて一人前の職工になつた。そして間もなく徵兵に取られた。二年の兵役をすまして彼はまた、もとの工場へ戻つた。どこへも他に行くところがなかつたから。

職工生活がいつまでつゞくことか。――彼はいくど自分の腑甲斐なさを呪つたことだらう。少年時代に彼の描いた白晝の夢は今でも折り／＼彼の胸を眞面目に惱した。近代の素張らしい文明を生んでゆくところの科學といふもの、その科學の具體化された工場といふものに、そして機械といふものに每日面接してゐる彼の眼は勢ひ、その科學の母である科學者に向つて憧憬の瞳を放たずにはゐなかつた。彼は第二のエヂソンたらんとした。彼が少年時代から敎へ込まれた「社會の爲め」「國家の爲め」の奉公は唯、科學の研究、偉大な發明に依つてのみ完成されると思つたのに無理はない。併し、彼には科學の研究の爲めの暇がなかつた。金がなかつた。彼は徒らに懊惱した。そして夢を描いた。何千年かの昔

錬金學者の失敗した銅を黄金に變化させる術は、彼の胸の中では容易く成功させられた。また地球引力に相對する斥力は彼の胸の中でこれも容易に發見された。無限の動力も發明された。完全無缺の飛行器は、彼の胸の中を自由自在に飛び廻つた。——道を歩きながらも、工場でハンマーを握りながらも、彼のその夢はつゞけられた。

二年、三年、月日は瞬く内に飛ぶ。彼はやがて勤務演習に三週間引つ張り出された。喇叭で起き、喇叭で寢、喇叭で飯を喰べた。彼はそこで小學校時代の舊友に會つた。彼は昔の自分の友人を陸軍歩兵中尉といふ嚴しい軍服で包まれた上官として面接した。彼はその日から友人の閃らめかす指揮刀の下に、叱咤號令の下に、走り、伏し、止り、不動の姿勢を取り、汗をたら／＼流した。或る時はその友人の口から「お前の動作は鈍い」と罵られた。軍人精神を説かれ、精神講話を聞かされた。

三週間の後ち、彼はまた工場へ戻つた。彼はだん／＼夢から遠ざかつた。彼の胸には今までの夢の代りに階級意識が芽を吹き出した。今まで諦めの裡に葬つてゐた、支配階級の理由のない暴壓、侮辱に對する憤りが勃然として眼を覺まし、煮えたぎつて來た。しかもかうした階級を生み、貧富の差別を急激ならしめたところのものが、今まで自分の憧憬の的であつた科學であり、科學的發明であつたことに思ひ到ると、彼はそれを呪つてい〻のか侮辱してい〻のか、分らなくなつて了つた。

この時、彼の工場には一つの大恐慌が襲ふて來た。日露戰爭後の軍器補充が完成された結果、豫算は削減され仕事はまるきりなくなつたのである。職工の大淘汰が行はれた。各工場とも半分ぐらゐの人員を減らされて了つた。何んの反抗もなく、彼等は仕方がないものと諦めてすご／＼と工場を出て行つた。私は殘つた。間もなく、第二回の人減らしがあると云ふ噂が、どこからともなく傳はつて來た。殘つた者は毎日戰々兢々として仕事に從つた。半分に減らされても

まだ、その半分の人の仕事がなかつたからである。自分から他に職を求めて出て行く者が毎日のやうにほつほつあつた。それから半年たつた。工場では職工の大募集を始めた。歐羅巴の一角から起つた一發の拳銃が、歐洲全體に亘る大騷亂となり、それがやがてこの東洋にも影響して來たからであつた。

大旱魃の爲めに生色のなかつた草や木が、突然驟雨を浴びたやうな形だつた。彼等はほつと吐息をついた。世界到るところに殺戮が行はれ、破壞が行はれた。彼等は毎日、工場へ來る早々新聞を開いて戰爭が益々殘虐に、益々發展して行くことを悅び合つた。破壞がもつと猛烈になることを祈念した。勞働時間は段々延長されて、六時間が十時間になり、十二時間になり、やがて十四時間になつた。彼等は不平は云はなかつた。不平どころではなく、これが永遠につゞくやうにと希つた。驟雨の惠みを受けたのはこの工場ばかりではなかつた。どこもかも景氣がよくなつた。株式は毎日昂騰し米價は奔馬のやうに狂騰した。それにつれて有ゆる物價が高くなつて行つた。毎日十四時間づつも働いて得た今までに例のない多額の賃銀は、彼等のポケットに三日とは留まつてゐなかつた。皆んな家賃となり、米となり、味噌となり、した。彼等は依然として汚ない裏長屋に棲み、まづい辨當を喰ひ、油じみた靑服を身に纏い、女房までかその子供をまで工場に入れて働かした。彼等は今までの例に依つて戰爭が今日にもすめば、また働きたくも仕事がなくなる、と云ふことをよく知つてゐた。彼等はやがて次に來るべき旱魃に備へる爲めに、親子總がかりで水を汲み込んでゐるのであつた。が、彼等の水槽には溜まる分量よりか減り出す分量の方が多かつたのである。――

私の繪卷物はこれで二度、戰爭といふ赤色で彩られた。一つは少年工として工場へ入つた當時既に開始されてゐた日露戰爭であり、一つは今度の歐洲戰爭の東洋に於ける一分派戰とも云ふべき靑島戰爭である。希望のない、生活難といふじめじめした灰色の地紙に染められた二つの赤色――これはいつも自分達ち同胞の血と膏で染められてゐるのだ。こ

れから先き、この灰色の地紙──私に與へられた生命、人生と云ふものがどの位あるのか、豫測することは許されない。また、その地紙がいつ白色の光輝あるものになるか、分らない、灰色は益々灰色の色を濃くしてゆくかも解らない。

私は既に盡きかゝつてゐる、つまり現在に近づいてゐる私の繪卷物を更に繰りひろげて見よう。──私達の水槽には一滴の水もたまらない内に、戰爭はやがて終つて了つた。私達の勞働時間は十四時間が直ぐ十一時間に減つて了つた。收入はそれだけ目に見へて減つた。第二の恐慌時代が既に來つゝあるのだ。彼等は内心びく／＼もので毎日工場へ通つた。が、到頭彼等の恐れに怖れてゐる第一の鐵槌は、彼等の頭上に打ち下されたのだ。單價の値下げ──と云ふ鐵槌が。

私の繪卷物はこゝで再び灰色の色を濃くすることゝなつた。──

次に來るのは人減らしである。もう當分戰爭もなささうだ。──人々は絶望の溜息と一緒にかう呟きはじめた。その口裏には、どこかと戰爭でも始めてくれゝばいゝが……と云ふ希望であつた。單價は下げられ、勞働時間は減つたが、しかし、人々の日常缺くべからざる米や味噌や家賃や、の物價は少しも下らなかつた。人々は有ゆる方面に仕事を探した。が、どこも同じ不景氣である。──

「おい、飯にしよう」

ハッとして私は我に返つた。石井の聲である。

「いやにぼんやりしてるなア」石井は森と靜まつた空の中にうつろな笑ひ聲を響かせながら再び云つた。「肉が煮へたんだ。飯にしよう」

繪卷物はぐる〳〵と頭の中に卷き納められて、先つきのまゝの室い光景が私の眼の前に展開されてゐる。

「實際灰色だ！」私は思はず呟いた。

「えゝ？　何が？」石井が不審さうに訊き返した。無言のまゝ望月、古田、小野の三人が顏を起して私の顏を見つめてゐる。

「なに、なんでもない。灰色だつてことよ、俺達の生活が……」

なあんだ――と云つたやうな顏をして四人は無言のまゝ箸を取つた。

「帳面へ忘れずにつけとけよ」石井の顏を見ながら小野がにや〳〵と笑ひを浮べた。

「何を？」石井の太い眉がぴくつと動いた。

「今夜のこのご馳走をさ」小野は矢張りにやにやしながら云つた。

「なに、こりやいゝんだ。俺が勝手に買つて來たんだから」

「そんな遠慮する柄ぢやねえぢやねえか」小野はからかふんだか眞面目なんだか解らないやうな顏をしてつゞけた。「何もじばらを切るには當らねえさ。こんなものは當然連合の奴らに負擔さすべきもんだ」

食事がすんだ時、望月はまた直ぐ筆を執つて眞四角な堅い字を書きはじめた。

終業汽笛だらう、遠くの方で私達の工場のボーが一齊にピーピーボーボー鳴り出した。六時だつた。

一時間ばかりの後ち、私達は石井の家を出た、明日の朝は愈々嘆願書を工場長の手許に差し出すばかりだつた。

江戸川バーの前まで來た時、私の足はひとりでにそつちへ向いた。そして何の考へもなく吸ひ込まれるやうに、そこの扉を押した。一人二人の客がゐたが、私は一目見て、彼等が矢張り私達の、工場に出てゐる職工であることを知つ

た。背廣を着てゐないまでも、彼等にはどこか特定の型があつた。

おたみの姿は見へなかつた。

「おかねさん、今夜はひとり！」私は椅子に着くなり聲をかけた。

彼女は頸だけ私の方にねぢ曲げてニコツと愛想笑ひを浮べながら云つた。

「まあ淺見さん、今晩はお氣の毒ね、おたみさん、少し用があるからつてたつた今歸つたとこなのよ」

私はさう云ふ女の顏に何か隱れた意味の冷笑が漂つてゐるのを見た。私は直覺的に、その顏から不快な或る場面を描き出した。

「誰れかと一緒ぢやなかつた？」私は口の先きまで出かゝつたこの言葉を嚙みつぶした。何んだか不快な氣持だつた。

私はそこ〳〵に其處を出た。醉ふどころではなかつた。例の江戸川が私の歩く道に沿ふて、音を立てゝ流れてゐた。そして此處を通る時にきまつて浮んで來る幻影がこの時も私の頭に描かれた。

私が家へ歸ると同時に時計は十一時を打つた。用もないであらうのに、母一人がまた起きてゐた。

「この頃毎晩おそいねえ」母は私の顏を見るなり云つた。

「あゝ」私は曖昧に返事をした。「いま工場に一寸した問題が起つてるもんだから……」

だが、私は更に具體的にその內容を母に說明して聞かさうかと、その瞬間思つた。尾鰭をつけてこの問題を大仰に話し、いつストライキの首謀者といふ名目で監獄に叩き込まれるか分らないのです。――と云つてやらうかと思つた。この時私は無暗に苛々して來る自分を見た。餘り何も知らない、吞氣らしい、そのくせ兎のやうに始終おど〳〵してゐる母を見ることが一層、自分の心を苛々させるやうであつた。が、それは結局、自分自身の平板單調の生活に對する怒り

と反抗の際に外ならなかつた。が、また一方では、老年になつた父がいつ會社を馘首になるか解らないと云つて怯へ切つてるところへ持つて來て、つまらない事から店を追ひ出されて家へ歸つてゐる米三のゐる今、またこの私までがさういふ危險の淵に立つてゐることを知らすのは餘りにむごたらしくも思へた。私は母の前にゐるに耐へられなくなつて立ち上つた。

「お休みなさい」私は逃げるやうに二階へ上つた。

失業者――米三の青白い寢顔が今更のやうに私の胸を衝いた。この先き一體どうなることだらう、といふ氣がした。私は自分の冷たい寢床にもぐり込むなり眼をつぶつた。何んにも思ふまいとした。下では母の寢床に入るらしいごそごそいふ音がしてゐた。母はこの二三日毎晩遲い私を待つてゐたのだ。私は胸の底から熱い何かの塊りがごくりと込み上げて來るのを感じた。

七

伊市職工長の手を經て、歎願書は工場長の手許に出された。どういふ返事が來るか、それは連合全部の興味の焦點であつた。ノウかイエスか、妥協を許さない文面であつた。が底を割つて見れば、私達の凡ては全然拒絶されるよりか、幾分今よりか有利の條件ならば悅んで妥協をする下心であつた。拒絶された場合の準備なぞてんで出來てはゐなかつた。新參の連中や獨身の連中は、その場合には即時ストライキを斷行する――といふ氣組みであつたが、他の古參の連中にはまだそこまでの決心はついてゐたかつた。單に決心がついてゐない許りでなく、全然反對の意見を持つてる者さへ可たりあつた。歎願書には最初、連合全部の連名をして出さ

うといふ私達の意見も、さうした連中の反對で只五人の委員の名で提出した始末であつた。彼等の大部分は、そ　が容れられなかつた場合の、官僚との交渉斷絶、反目の結果當然來るべき彼等の暴壓を恐れる心が餘りにあり過ぎた。さうした場合にいくらかでも責任遁れの遁路を作つて置くことに拔け目はなかつた。

だが委員としての私達のなすべきことはこれで終つたと云つてもいゝ。殊に工場長等の勸告に隨つて選出された委員である。その性質が既に連合側の意見を纏めさへすれば、その他どうかう出しやばつてやる資格はないのである。私達は今は、工場長からの解答を待つ許りだつた。

嘆願書の起草者である私はそれに對して或る自惚を持つてゐた。あの情理を盡した文字を見たならば、如何に頑固な冷酷な人間だとて多少動かされずはゐまい、と云ふそれであつた。そして工場長がそれを讀んで、順々に所長の手許へまで出され、審議されるには尠なくも一日や二日はかゝるだらうと思つてゐた。

私達は不安と期待の入り交つた、妙な昂奮を覺えながら仕事にかゝつた。

間もなく九時の休憩のボーが鳴つた。その時、伊東職工長は私達が二時間前に出したばかりの嘆願書を無雜作にそのポケットから出して云つた。

「嘆願書は見た。だが、私設の工場や會社と違つていろ〳〵豫算もあることだから、これを直ぐ聞き屆けるわけには行かない。が、その内何らかの方法で諸君の要求は充たすやうにする。——とかう所長の方で云ふんだ。だからまあ、この嘆願書は一應しまつといてくたまへ！」

さう云つた伊東の顏には明らさまな侮蔑の色が浮んでゐた。職工長といふ彼には、單價の値上からは何らの利得もなかつたし、且つ自分の部下とも云つていゝ連合の者のよくなるのを指を啣へて見てゐるのが業つ腹で耐らない、と云つ

たやうな氣持が見へてゐた。彼は、それが所長の方から拒絶されて來たことを知つて、自分がはら〳〵してゐたゞけそれだけ、い〻氣味だ――と云ふ心持を隱し切れなかつたものらしかつた。

だがあれ程苦心して、夜おそくまでか〻つて作つた嘆願書が、かうも無雜作に飽氣なく突つ返されてみると、急にがつかりして了つて、只ぽかんと伊東職工長の嘲笑を浮べた顏に見入るばかりだつた。それを受け取ることさへ忘れてゐた。

「いらないのかい？」

伊東職工長の勝ち誇つた顏が皮肉な笑ひを浮べてにや〳〵しながら、その嘆願書を私の眼の前でぴら〳〵動かしてゐた。私はそれをいきなりむつつりした不機嫌な顏をしてひつたくつた。私の周圍には忽ち、私と同じやうにそれに期待をかけてゐた大勢の顏がづらつと垣を作つて並んだ。

「皆んな聞いたやうな始末だ。突つ返されて來たんだ」私はやけに、恰かもこの相手が眼の前にゐる當の伊東職工長であるかのやうに、彼を睨みつけながら、突つ返された嘆願書を頭の上でひら〳〵振りながら云つた。さうしながらその瞬間、私は私の仲間の間にどういふ反應が起るかを心持ちに待つた。彼等が左するか、右するか。さうか、仕方がない。と云つて諦めるか、かうなつたらもう止むを得ない、最後の手段に訴へろ――と云つて怒號するか。

暫くは何んの反應も起らなかつた。彼等にしても矢張り、餘り無雜作に餘りに素氣なく突つ返されたことが意外だつたのだ。同じ突つ返すにしても、もう少し勿體ぶつて一日なり二日なりの時日を置いて突つ返したなら、人のい〻吾々は尠なくもかう云つて善意に解釋したであらう。――奴らの間でも屹度、いろ〳〵論難是非が起つて、解決が見られなかつたのだらう。それでから手間が取れたのだ。――と。

かうした場合、いつも一番先きに聞く石井の怒號をこの時も私は、自分の直ぐ後で聞いた。彼は如何にも激昂したやうな聲で叫んだ。

「先方にや、はじめつから誠意なんかありやしねえんだ。何んでもかんでも「豫算」「豫算」つて云やがつて、そのくせ單價を下げる時にや「豫算」のヨの字も云やしねえぢやねえか。そんなべら棒のこと云やがつたつて誰れが承知するもんか。もう仕事なんかするな、皆んなサボレ、サボレ！」

石井のこの激昂は少なくも、只この一言で連合の半分の心を捉へたことは確實だ。彼等は何がなし騷ぎたくつて耐らないと云つたやうな若手の連中であるところへ持つて來て、諸々方々の工場を渡り歩いてゐる手合なのだ。この工場ばかりに日は照りやしねえ——と馘首なんかを一向に恐れない連中なのだ。若し事件が起るとすれば、かう云つた輩が面白半分に、自棄半分にやることに相場は決まつてゐるのだ。だから彼等をうまく煽動すればストライキは直ぐにも起し得るのだ。

併し問題はさうした火事騷ぎにあるのでなくて、ストライキの決行が果して最初の目的を達し得るか否かである。つまり、ストライキをするしないは今の問題ではないのだ。戰爭も終り、軍器の補充もあらかた終り、またこれから先きいつ戰爭が起るか、當分起りさうもない形勢のところへ持つて來て、つまり鐵砲なんかの必要のない時にその製造を中止してみたところで、果して彼等官僚を畏怖さすことが出來るかどうかと云ふことである。だが、それはまだ杞憂かもしれない。彼等官僚の口吻を借りて云へば、今は兎に角、この工場で一日五百挺の小銃を製造しなければならぬ豫算になつてゐるのだ。私達は毎日、その五百挺を十一時間づゝかゝつて拵らへてゐるのだ。しかも五百挺の小銃を拵らへるには何千人と云ふ職工の手を借りなければならないのだ。ところが私達ち百二十人の銃身矯正工が罷業することは、彼

等何千人の作業をぱつたり止めて了ふのだ"事の善惡とか利害とかいふ問題からはなれて、この工場中の機關をぱつたり止めてみる――考へて見るとそのいたづらは可なり私の好奇心をぞく〳〵させるものであつた。自身達の最初の目的なんか達しようと達しまいと關やしない。これは要するに官僚共に對する復讐だ。彼等の責任問題を起して、彼等自身を馘首にしてやれば、それだけでも胸は透くのだ、その上、こつちの目的が達せられゝばそれは勿怪の幸ひと云はなければならない。餘計な拾ひ物なのだ。――

嘆願書の突つ返しが豫想外の反抗を强めたのを知つたのか、伊東職工長はそゝくさと階段を降りて姿を消して了つた。事務所へ形勢惡化の報告に行つたのかもしれなかつた。

何か爲さうといふ不平組みの連中はいつか石井を中心に取り卷いて、眞つ黑に額を鳩めて塊つてゐた。また、事を好まない古參の連中はぼつ〳〵と自分の席へ着いて、ハンマーをカン〳〵云はせ始めた。大勢はこゝに二つに分裂してゐた。それはいつ如何なる場合にも現はれる傾向であつた。が、頭の數から云つてはこの事勿れ主義の古參株は僅か十人ばかりに過ぎなかつたが、仕事の能率とか精緻とか云ふ點にかけては、到底無視することの出來ない地位を彼等は占めてゐた。連合全體から見て僅か一割ばかりの勢力ではあつたが、彼等を無視しては併し、小銃製造の全機關を止めるといふ藝當は一寸出來なかつた。若し罷工を決行するとすれば、どうしても彼等を仲間に加へなければならなかつた。

「ねえ、淺見さん、かうなりやもうストライキより他仕樣があるまいと思ふんだがどうだね。俺達はもう明日からやつつけようと思つてるんだが……」

石井は相談――と云ふよりか寧ろ、その決定したことを報告すると云つたやうな語氣で私に云つたのである。

「で、それに贊成した者は何人ぐらゐあるんだね?」私はかう訊かずにはゐられなかつた。

「四十四五人は大丈夫ある」石井は言下に、待ち構へてゐたやうに云つた。
「百人餘りの中四十五人か、それぢやちつと心細いね」
「だがそりや確實のところがそれだけなんで、まだ皆んなの腹を探つてみたわけぢやないんだからね、相談したら誰れも異議は云ふまいと思ふんだ」
「だが折角やるんなら出來るだけ功果のあるやり方をしなければ損だぜ。何もストライキそのものが目的ぢやないんだから」
「併し俺はもう面倒くさいことはいやだ。失敗しても馘首になつても、そんなことはどうでもいゝんだ。俺はもう斷然やるよ」
石井は如何にも私の煮え切らない態度に苛々したやうに、いくらか嘲り氣味な語調でかう云つて、彼の所謂、その同志の方へ行つて了つた。彼の意志が今は、最初の要求貫徹にあるんでなくてストライキそのものに興味を持つてゐることは明らかであつた。
私は今三叉路に立つてる自分を見た。一つの路は彼等に交つて何の目的もなく、わーつと云つて騒いで了ふこと。も一つの路は更に陣容を更めて所長乃至提理の許へ直接、嘆願書を出して破れるまでも交渉すること。それから最後に殘された一つの路は、これらの紛争から一切手を退いて老人連の軟派に交り、吾不關焉の態度を執ること。――だが、第一の野次馬的にがやがやと騒ぐ事は出來ても第三の路を選ぶことは一寸出來さうもなかつた。それはこの場合最も安全の方法であらうけれど、そしてその安全の殼であることを知つてるが故に、その中に堅く閉じ籠つて若者達の騒ぐのを覬望し、ひよつとかしたら來るであらう利益の均霑にだけ與からうといふ卑しい彼等の顔を見ると、兎ても默つてはゐ

られない程の怒りを感じずにはゐられなかつたから。

私の執るべき路は今は殘された第二の方法よりなかつた。はやり立つてゐる石井の一派をなだめて明日から決行するといふストライキを思ひ止まらせ、更に、不快極まる古參連中を說いて彼等に一致の步調を取らせ、そしてもう一遍、拒絕されるまでも所長の處へちかに押しかけてつて交涉してみることであつた。そして、その上で愈々いけなかつたらその時こそ石井なんかと事を共にし、最後の手段に出でる。――さういふことは餘り早まつてもいけない。かと云つて時機を失つては尙いけない。

だが私がさうと決心のついた時はもう、終業のボーが鳴る少し前であつた。石井の連中はこれから歸りにまた牛天神の境内に集まつて、更に細々した協議をし、打ち合はせをするといふことであつた。

連合の頭數から云つて三分の一の人數で、しかも仕事の技倆は、と云へば比較的未熟者揃ひの連中が決行しようとするストライキ――それは餘りに非打算的な、勝味のない亂暴極はまるものであつた。それは官僚共に取つて何んの打擊にもならない、厚い鐵板へ向つて空氣銃をぶつ放すやうなものであつた。しかもその一發の空氣銃を楯に取つて月分達の馘首の口實を與へるやうなものであつた。

ボーが鳴つて皆んな仕事場をはなれて手を洗ひに立つた時、私は石井の處へ行つた。

「ねえ石井君、どうだらう、明日からやるといふストライキをもう一日延ばしてくれないかね、どう考へても君達だけでやるといふことは無意義としか思はれないんだ。同じやるならどうだい、組長を引り張込んで、古參の連中を片つぱしから口說き落させたら……。君の方でもう一日待つと云ふなら、僕は乾度田口を仲間に入れて連合全部を動かすやうにしてみるがね」

もう利害の打算もない、只わーわー騒ぎたくなつてる連中のことだから、兎ても聞き入れまいとは思つたが、しかし私はさう云つて頼み込むやうに石井の顔を見入つた。

「それにね、秋元の奴、どこから聞いて來たんだか知らないが、今度のこの騒ぎが憲兵隊の耳に入つて、奴らが活動しはじめた――といふことを云つてるんだ。萬更の嘘つぱちでもなささうだから、無暗にだね、勝味のないストライキなんかやることは一層、俺達の力を分裂さす基になりやしないのかと思ふんだ」

「で、田口の野郎若し首を横に振つたらどうするね」石井は割合に落着いてゐた。

「必ず仲間に入れるといふ自信はあるんだが、若しいけなかつたらその時は俺は一人でも君達の仲間になつてやつつけるよ。若し君達がそれを承知してくれるんなら、俺はこれから田口の連中を説いて牛天神へ集まることにする。そこで奴らを説き伏せるんだ」

「そりや一日ぐらゐのとこは待ちもするがね、……ちやいゝ、淺見君に一日だけ兎も角任せよう。しつかりやつてくれ給へ！」

「さうか、結果はいづれ明日、解ることだからね」私はさう云つて石井と別れた。そして直ぐに組長の田口の處へ行つた。

手を洗ひ顔を洗つた連中はもうぞろ〳〵と着物を着換へたり、或はその仕事着のまゝで工場の外に整列しはじめてゐた。彼等はこれから身體檢査を受け、人員點呼を受け、それからやつと解放される段取りになるのだ。

「田口さん、こゝで一肌脱いでくれませんか」

私は彼と肩を並べて歩きながら云つた。「もうかうなつちや手がつけられませんね、これをうまく纏めるのはやつぱり

組長の外ないと思ふんです。そしてまた責任でもあると思ふんです。だが、明日からストライキをやるといふ石井なんかの連中は、兎も角明日一日だけ待つてくれと云つてなだめて置いたんですがね」

「さう煽てたつていけないよ」田口は苦笑ともつかないにや〳〵笑ひを顔に浮べながら云つた。「組長組長たつて組長は神様ぢやなし、もう自然の勢ひに任せるより仕方がないね。それにまた石井なんかゞあゝ躍起になるのも無理はないのさ」

私達は工場の出口で伊東職工長の検査を受けた。彼は私のポケットを探り、空になつた辨當箱の中をあらためた。暗い外の空地には既に検査を受けた連中が長い列を作つて、各組合毎に並んでゐた。

「だがね」田口がふと呟くやうに後ろから聲をかけた。「今度の問題もいづれこのまゝぢやすむまいし、それにどうせ乗りかゝつた舟だ。どうなるか知らないが、仕上の連中もどこかへ今夜集まつて相談して見ようよ。その上でどう衆議が決するか……或は君の希望には反對の結果になるかもしらないがね」

彼はかう云つて終ひの方を冗談らしくアッハヽヽと輕い笑ひにまぎらした。

「ぢや、さうして下さい」私はさう云つて列の中へはいつた。

組長は列へは入らなかつた。あちこち歩を移してはこそ〳〵相談しはじめた。

毎日のことではあるが、皆んな出揃ふまでには可なり時間がかつた。すつかり人員が揃つて、検査がすんで、列が歩き出してから田口がまた小さな聲で呟くやうに云つた。

「ぢや、門を出たら直ぐ牛天神へ行つてくれたまへ！　仕上の連中皆んな行くから」

私達は常夜燈の灯つた鳥居をくゞつて真暗な石段を登つた。境内は更に暗かつた。私達はお神樂堂の北側にある僅か

の空地にまるくたつて集まつた。誰れ一人、無駄口を叩く者もなかつた。森としてゐた。たゞ、ぼんやりとまるく輪をつくつてゐる人の氣はいはしたが、誰れが誰れやらまるで分らなかつた。木立を通して拜殿や、社務所の建物が黝く、ほのかな輪廓を闇の中に漂はせてゐたが、燈火らしいものは少しも射してはゐなかつた。堅く戸が閉してあるらしかつた。

シュッと燐寸をすつて誰れかゞ煙草に火をつけた。一瞬間、まるく輪をつくつた人々の緊張した顔が青く、黒く、描き出された。

「おい、誰れだ。煙草なんか吸ふのはよせ！」

闇の中で誰れかの低音が鋭くたしなめた。田口の聲らしかつた。「巡査にでもみつかつたらどうするんだ。屋外の集會は禁物なんだぜ」

小さな赤い火がポトリと落ちた。折角吸ひつけた煙草を捨てたのである。同時に、それを下駄で踏みつぶす音がした。

闇に慣れた眼は、ぼうつとそこに立ち並んでゐる人々の、影のやうな姿を見得るやうになつた。

「今夜わざ／＼此處へ集まつて貰つたのは……」

田口が革たまつた口調で、しかし低聲に云ひ出した。「今朝出した嘆願書は、諸君も承知の通り直ぐそのまゝ突つ返されて來たのです。それについて吾々はどういふ態度を取つたらいゝか、どうか腹藏なく意見を述べて貰ひたいのです」

「それについて僕は僕の立場をこゝで明らかにしときたいと思ひます」私は田口の直ぐ後を受けて云つた。「僕の委員としての責任は今朝、嘆願書を出したことに依つて一先づすんだことゝは思ひますが、實は石井君、その他が明日から決行するといふストライキを無理に一日だけ待つて貰つて來たのです。で、私としては明日もう一遍交渉委員を選んで、

所長か提理と直接交渉してみたら——と思ふのです。若しそれがいけなかつたらもう止むを得ません、最後の手段あるのみです。僕は石井との約束もあることだし、是非諸君の贊成を得たいのです」

さう云つて私は口を閉ぢた。難破船が信號を發してその反應を待つやうな、何んとも云へない不安が私の心の隅に暗く根を張つてゐた。どういふ反應が來るか——私は影のやうな黒い闇の中の姿に見入つた。

暫く沈默がつゞいた。

「贊成……ぼくは贊成します」

影の一人が答へた。森つとしてゐた空氣の中に、その聲は妙に寂しく頼りなく響いた。私はその「贊成」の聲にハツと胸のときめくのを覺へた。そしてもつともつと贊成者の出ることを期待し、望んだ。

「贊成つて何んに贊成するんです？」

突然、太い聲が反撥するやうに云つた。秋元の聲であつた。おやツ、と思つた。私は自分の耳を疑ふやうに次の言葉を待つた。が、暫らく聲がなかつた。

しかし、そのたつた一言はどんなに私の期待を裏切り、希望を覆へして了つたことだらう。あの秋元が——と思ふと信じたくも信じられない氣がした。が、それは確實に、この自分の耳が聞いたのである。胸を轟かせながら私はまた次の發言を待つた。

「そりや、もう一遍出して見るのもいゝが、矢ゝ張り無駄になりさうだね。それにストライキなんて口で云つてこそ何んでもないが、一寸考へもんだと思ふ。今日もある處で聞いたんでは、憲兵隊が聞きつけて徹底的に取り締ると云ふことを云つてるさうだからね」かう云つたのは矢張り秋元であつた。彼の調子はどうも今までとは違つてゐた。官僚に買

戮された、味方を分裂さす爲めの裏切り者としか思へなかつた。「ストライキには僕は反對だね、監獄ぐらゐ平氣だ——と云ふ人があるかしらないが、しかし實際はどうかね」

どこか皮肉な、嘲けるやうな、人を喰つた云ひ方だつた。それはどうしても今までの秋元ではなかつた。彼はさう云ふとぷつりと口を噤んで了つた。

誰れも何んとも云ふものがなかつた。針のやうに鋭い冷たさが、犇々と足の爪先きを刺し背中を撫でた。墓場のやうな暗い沈默は永遠につゞくかと思はれた。

もう駄目だ、何を云つても無駄だ——と云ふ氣がした。ものは云はなくとも、顔は見なくとも、玆に集まつてゐるものの凡てのものゝ魂が、意氣地のないかそかな溜息を吐き、鬪ふ意志を喪つた屈從の媚態をつくり、卑屈極まる安住の殼の中に逃げ込まうとする醜い後姿を見せてゐるのを感じた。

沈默の時間は益々彼等に卑屈な安住の殼を戀ふ心を起させる。私と彼等との間には益々大きな淵が開いて來る。

もう駄目だ——といふ絶望から來る諦めはあつたが、しかし、このまゝ彼等の意志に押さへつけられて引つ込んで了ふことは、みす／＼この自分を犬死させて了ふことであつた。鐵板に向つて空氣銃を打つやうな、何んらの効果もない石井一味のストライキに雷同して、馘首の口實を提供するに過ぎなかつた。さうした約束は石井と結んだのであるが、それは云はゞ、連合全部の團結を作らうといふ自分の背水の陣に過ぎなかつた。全部のストライキを望みこそすれ、そんな自分一個を滿足させ、その欝憤を洩らさうとする吝ち臭い蠢動はしたくなかつた。

「なんだね、かうなつちやもう仕方がないから、いづれ折を見て君達の滿足を圖ることにする——と云ふ工場長を信頼して任せるより他仕方がないね」不意に、凍りついたやうな沈默を破つて跛の富田が云つた。

「もう一遍あらためて嘆願書を出さうといふ淺見君の言葉だけれど、結局、彈ねつ返されるのは分つてるしねえ」田口組長の聲が闇の中で呟くやうに云つた。

もう默目だ——絶望の影は益々濃くなるばかりだつた。

「しかしだね」私は多少やけくそ交りの反抗に驅られて云つた。「こんな嘆願書なんか出さうと云ふからにや、誰れにしろ初めつから多少の犧牲は覺悟してゐたと思ふがね。容れられなかつた場合のストライキぐらゐ覺悟してゐたと思ふがね。その結果がよし、秋元君の云ふ憲兵隊の活動となつて現はれたにしろ、そんなことは諸君はちつとも恐れることはないんだ。その犧牲になるのは吾々委員に擧げられた五人に決まつてるんだから」

「そりや犧牲者は出してもいゝさ。成功さへすれば」いやに落ちついた冷やかな口調で田口が云つた。「だが、犧牲々は出た、成功はしない——と云ふんぢや、やり切れないぢやないか。第一、他の連合に對しても外聞が惡いし、かと云つて、吾々としてその犧牲者やその家族を知らん顏してほつぽらかして置くわけにもいかんし、……まア今度はこのまゝ引つ込んで次の掛合を待つんだね。そして廿日や一月の罷工を持ちこたへるだけの準備を整へ、そして萬一、犧牲者が出た場合にもその家族を困らさないだけの準備をこしらへてかかるんだね」

田口を說き落して是が非でも仲間に引き入れるといふ最初の意氣込は、もう私のどこにもなかつた。私は彼等と自分との棲む世界が今は全然別であることを知つた。が、彼等の逃避的な安住に憧れる境地に同感出來ないことはなかつた。戰備がなくて戰鬪を開始することの無謀を彼等は知つてゐるのだから。が、私自身は、と云ふと私だつてそれを充分知つてゐるのだ。知つてゐながら、その無謀の戰鬪に參加しなければならないやうに自分でして了つたのだ。石井と約束したことを後悔する心と、田口や秋元の逃げ腰を憎む心とがごつちやになつて、私の頭の中で渦を卷いてゐた。

「さうすると諸君はもうこれで諦めて了はうつてんですね、鬪ふ意志はないんですね」私はやがて駄目を押すやうに、そしていくらか田口を脅かしてやらうといふいたづら氣を交へて云つた。「それはいゝでせう。だが田口さんは自分だけは參加しないで逃げたとしてもですね、連合の半分以上は石井なんかとストライキをやりますよ。その時田口さんは自分が組長としてどういふ責任にあるか考へてるでせうね」

これは田口に取つて可なり應へたらしかつた。顏は見えないながら、彼がぎくつと行き詰まつたらしい、困惑の色を浮べてゐるのが感じられた。

これでもういゝ――といふ氣がした。靑い星が樹の枝を透してチラ〳〵輝いてゐる。何んとなく、或る悲しみに似た感情が私の胸を掠め過ぎた。

ポケットの懷中時計が刻むセコンドの音がコチ〳〵聞へるくらゐ、靜かな靜かな時が、何秒か、何分か過ぎた。永い永い時のやうに思はれた。

「ぢや、もう仕方がない、解散しませう」

私はしばらくしてからさう云つた。

沈默の輪はがや〳〵と頽れはじめた。彼等は間もなく二人三人づつかたまつて、各々の方向へ步きはじめた。失望と憤恨とが苦い毒液のやうに私の心を嚙みつけた。

彼等の姿が一つも見へなくなつた時、私はひとり、十分の希望と期待とを胸に秘めて先刻登つて來た石段をコツ〳〵と降りはじめた。そして常夜燈の灯つた鳥居をくゞつて右に折れ、例の江戸川べりに出た。

外套の襟深く顎を埋めた私は、胸一杯にたゝえられた憤り、悲しみ、絕望の苦汁をぴしやぴしやと味ひながら、自分

の胸に浮んで來る一切のものに呪咀の礫を投げた。私を裏切つた（としか思はれない）秋元の眼は、私の刺すやうな瞳に射竦まされてくるつと後ろを向く。と、そこへ尊大な面構へをした田口がひよいと現はれる。堅く握りしめた私の拳はパツと、彼の眼と鼻の間を突く。と、彼の影像は手應へもなくふわつと二三尺も飛び退つてにや〳〵と嘲笑の皺を刻む。跛の富田が強慾な眼に媚びるやうな笑ひを浮べて田口に何か私語きかける。私の眼は釘付けされたやうにその影像を睨みつけて思はず足を早める。――私はふと、人の話聲を聞いた。ひそ〳〵と忍びやかな聲はたしかに、私の聞き覺へのある聲である。咄嗟に、私は闇をすかして前を見た。思ひも寄らない近いところに、私の一二間先きを二つの人影が耳と口とをくつ附け合はすやうにして囁きながらゆく。どきんと心臟が高く皷動を打つた。我れしらず私は息をひそめた。二つの人影は何も知らぬもののやうに、やはりひそ〳〵と囁きを交はしながらゆく。

田口と秋元だ――

カツと血が頭に上るやうに感じた。憎惡と憤恨の血だ。なぜ？　と、私は自分自身に向つて叫ぶ。彼等と私との間をまた闇が垣のやうに距てる。

彼等は氣がつかない。――音のしないゴム底の靴を穿いて來たことを私は感謝しつゝ、更に忍びやかに息をひそめて彼等の後を踵けた。

彼等は一體何をひそ〳〵話してゐるのか。彼等の家とは方角違ひの、一體どこへ行かうと云ふのか。――

私は全身を眼にし、耳にし、彼等が立ち止まり、振り返りはしないかを恐れつゝ後を踵けた。

彼等は立ち止まつた。私はハツとして一足後へ退つた。餘りに近く、私の呼吸が彼等の頸筋にかゝるくらゐの距離にゐたから。

彼等は私に氣がついたのではなかつた。彼等は立ち止まつて更にひそ〳〵と聲をひそませて何か呟き合ひ、やがて左側の小さな門の中へ消えて行つた。それから三十秒……五十秒……私はそろ〳〵とその門へ近づき、標札を透かして見た。

永田精次——

工場長の名である。私は瞬きをし、眼をこすり、もう一遍その標札を見た。永田精次——それに間違ひはなかつた。この夜更け、二人は何んの用事があつて工場長を訪問したのか。しかも會合のあつた直ぐ後ちのいま。——疑ふまいとしてもどうして二人の態度を疑はずにゐられよう。彼等は今夜の會合を、そして最後の手段に訴へることを極言した私の言葉を、そして更に、石井らの企てを洩らしたそれらの事凡てを密告してるに違ひない。

私は自分の喋つたことを思ひ返してみた。工場長なんかの耳に入つて見れば、今夜私の喋つたことはどの一言でも穏やかにすむものではないであらう。その言葉を——

工場長は乾度云ふだらう。「ではストライキの張本人は石井に淺見ではないか。二人さへ馘れば事はすむのだ」——と。それは餘りに明らかである。

私は彼等の裏切りを、友を賣る態度を、そのまゝ見逝してやらなければならないのか。彼等の裏切りに依つてみす〳〵馘首になるのを甘受しなければならないのか。それ程寛大でなければならないのか。

だが今なら——と、心の隅で或るものが云つた。今なら、お前は正義にもとる彼等に報復することが出來るのだ。正義の名に依つて懲らすことが出來るのだ。——慘酷な或る場面を私は想像した。三人が血まみれになつて格鬪する。が二人はその不意の襲撃者が誰れであるかを知らない。彼等は最初に目つぶしを喰つてゐる。やがて二人は昏倒する。明

日になつてもその姿が工場に現れない。私は平氣な顔をして工場にゆく。誰れも、田口に秋元がどうなつたか知るものはない。――

「コトンと玄關の方で音がした。」

私は垣の陰に、暗闇をつくつた影に身をかくした。二人が出て來る氣はいだつた。やがて二人は出て來た。」

「ぢや、いづれ明日……失敬！」

秋元と田口はさう云つて右と左に別れた。田口は電車のある方へ。秋元はいま歩いて來た方へ。

機會は去る。――が、私は目つぶしさへ持つてゐない。ポケットの中はからつぽだ。何もない。二人の中、どつちを蹤けようか。が、私はまだ自分の望みを、そして計劃を捨てゝはゐない。私は闇の中へ、秋元の後を追つた。彼の淋しげな猫背の姿がとぼ／＼と私の前をゆく。彼が嘗て、福岡技手の後を或る想像を描きながら蹤けたといふ同じ方法で、彼は今、この私にあとを蹤けられてゐる。

私の眼は釘づけされたやうに彼の頸筋をみつめてゐる。躍進一歩、二歩……私の手は彼の頸をしめつけたらう。しかも私の手は、手頃の石塊を摑んでゐる。闘犬の如く、彼に跳びかゝつた瞬間、彼の眼を叩きつぶすつもりで。」

人が通つた。

緊張し切つた心の弦はそれでぷつりと斷たれた。右手に油汗と一緒に握つてゐた石塊はだらんと下げられた。

川べりを離れて明るい街へ出た。瓦斯電氣の灯つた江戸川バアはその右手にあつた。今は餘り近く彼に蹤いてゐることは出來なかつた。周圍が余りに明る過ぎたから。やがて秋元の姿はついつとその明るいバアの中へ吸ひ込まれて了つた。

機會はまた去つた。この時まだ右手にしつかりと握つてゐた石に氣がつくと、私は何かしら恥かしくなつてコトンと手から放した。私は暫くそこの、秋元の吸ひ込まれた明るい扉の前に佇立した。入らうか、入るまいか、と躊躇つた。入つて了へばいやでも秋元と顏を合はせなければならない。それは彼の背信を面詰するには或はいゝ機會かもしれない。だが……と、私はまた私自身を顧みた。私にはまだ充分未練があつた。面詰といふことはこの場合自分の執るべき最善の方法ではない――といふことであつた。面詰に對しては彼れ秋元はどんな辯を構へて云ひ逃れるかもしれない。或は窮して自分の前に謝罪するかもしれない。そんな一遍の謝罪に依つて彼に對する私の怒り、恨みが消え去るとは思へない。このまゝにしては置けない――といふ憤慨の方が強い。――

私はその明るい扉の前を去つた。暫く行つてまた戻つて來た。そしてまた去つた。私は私の計劃を考へた。寒さも、手の凍えも今は意識しなかつた。

二十分、……三十分、……私は何度目かの時計を出してみた。洋服屋が大戸を卸してゐる。八百屋が店を閉めてゐる。文房具屋はもう先つきに戸を閉して了つた。街の大半は今は戸を閉し、軒燈だけがその店先を照らしてゐる。街を通る人も今は尠なかつた。電車は時々凄じい音を立てゝ疾走してゐる。私の眼はどこにゐても江戸川バアの明るい扉をはなれはしなかつた。時々、人が出たり入つたりするのを見守つてゐた。

私の監視はつゞいた。やがて、私はその扉の中に今は秋元ひとりしかゐないだらうことを知つた。私はまた時計を見ようとしてポケツトを探つた。と、その時、私は彼の姿がその扉の中から出て來るのを見た。外へ出た彼は街の左右を見廻はし、それから空を仰いだ。彼は二三歩足を動かして電柱の傍に立つた。誰れかを待つてゐるらしい様子だつた。私は彼の家を知つてゐた。彼の通る道筋を知つてゐた。多分彼はどこへも寄るまい、眞つ直ぐ家へ歸るのだらう。――

私は彼を待ち伏せする爲めに格恰の場所を頭に描き、それから足を急がせた。私は手ごろの小石をポケットに潜ました。私は彼が必ず通るであらう坂の上の三叉路に立つた。暗い屋敷町だつた。只、所々にある門燈が侘びしく路を照らしてゐた。私は暗い一方の道を自分の遁路に選び、坂の下を見降した。秋元はそこを登つて來る筈だつた。戰鬪準備は成つた。

私はこゝで又いくどか時計を見た。それからポケットの石塊を撫べた。彼は死ぬやうなことはあるまいか――と、ふと思つた。死んでもいゝではないか。彼は裏切つたのだ。友を賣つたのだ。――

遙か坂の下の方に二個の人影を見た。彼等はだん〳〵登つて來る。ぞくぞくつと戰慄が脊筋を走つた。秋元……たしかに秋元である。が、も一人の方は……？　私は眼を据へた。膝頭がいつかしらがた〳〵顫えてゐる。私の右手はポケットの中の小石をぎゆっと握つた。

二個の人影はだん〳〵大きくなつて來る。――また一つ、大きく心臓が鼓動を打つた。も一人は女だ。おたみだ。彼等はぴつたりと寄り合つて手を握り合つてゐる。頭がくらくらつとした。あいつまでが――と思ふと、もう何も見へはしなかつた。胸の中を燒き鏝でこね廻されるやうだつた。

ピューッと唸つて石は飛んだ。石垣にカチンと當つた。と、二人はぴたり足を留めた。女は手を執られたまゝ、身をうしろへ退きかけてねぢらせてゐる。秋元はからだを斜めに身構へて、闇の中をすかすやうに手を額の上にかざした。

しまつた！　と思つて私はまた一つ取り出して二人を覘つた。石は唸りを生じて飛んだ。

「誰れだ！」秋元は叫んだ。

女も何やら叫びながら、もと來た道をばたばた遁げ出した。が、秋元は頭を手でかばつたまゝ、まだ踏み止まつてゐ

る。

第三の石が飛んだ。手應へがあつた。「呀つ」と云ふ叫びを私は聞いた。つゞいて第四第五の石は飛ばされた。ボケツトは空になつた。私は後ろの道路を一目散に駈け出した。曲り角で一寸後ろを振り返つた。誰れも追つて來る樣子はなかつた。が、暗闇を通る時は突然後ろから襟頸を掴まへられさうな氣がして、幾度振り返つたかしれなかつた。だが、明るい場所は避けなければならなかつた。

暫く闇の道をうろ〳〵してから私は電車で乘つた。私は隅へ小さくなつて腰をおろした。

八

からだはへと〳〵に疲れてゐた。が、なかなか眠れなかつた。この日一日、餘りにいろ〳〵なことがあり過ぎた。神經はすつかり昂つてゐた。頭の中に素張らしい器械が取りつけられて、それが眩しい勢ひで廻つてゐるやうであつた。とろ〳〵としたかと思ふと、ハツと眼を覺ました。眼と眼の間をビューッと石が飛んで來る。又はさうとすると頭はしつかと何者かに押さへつけられてゐて、動かすことも出來ない。ぶるぶるつと身顫ひして危なく聲を立てかけた。それで眼が覺めて了つた。次ぎには、血だらけの顔が現はれた。見ると紫や青や、氣味の惡い何かに打たれた班痕が無數についてゐる。秋元の顔である。私はじつと彼の顔を睨みつける。と、ひとりの女が出て來て秋元の介抱をはじめる。そして猫がするやうに、長い舌をべろつと出してその血だらけの顔を舐める。ぞつとする程赤い、長い舌だ。その女はやがてこつちを向いてにた〳〵と笑ふ。おたみである。――

夜が明けた。重い頭を我慢して出勤した。今日は一日休みたかつたのだが、昨日のいきさつを石井らに報告して置か

なければならなかつたから。若し、私がこのまゝ工場を休んだなら、今度は私が石井らを欺き裏切ることになるのだ。それに秋元がどんな樣子をしてゐるか、それを見屆けなければならないといふ氣もした。今日は出て來られない程の傷を負つてゐるか、それとも平氣な顏をして出てゐるか。私は昨夜あの時たしかに、彼が「呀つ!」と叫びながら顏を押さへたのを見た。右の眼にでも當つて傷が深ければ、彼はもうこの仕事は出來なくなる。それは當然の報ひを受けたと云ふものだ。彼は多分出て來ないであらう。

私はストーヴの前に、石井の人待ち顏な苛々してる樣子を見た。

私は早速、昨夜牛天神の境内へ集まつた會合の結果を話した。が、田口と秋元の二人を躡けたことは話さなかつた。工場長の宅を二人が訪問したことは、口まで出かゝつたのだが、到頭押さへつけた。うつかり喋らうものなら、秋元を闇打ちしたことまでばれて了ふであらうから。

「ふむ、さうでしたか」石井は苦々しさうに云つた。たつたその一ことを。

秋元が出て來た。別に變つてゐるやうでもなかつた。離れてゐるので分らなかつたが、いくらか左の眼の下が腫れてゐるやうでもあつた。彼は作業衣を着換へると、煙草を持つてストーヴの傍へ來た。私は彼の顏へ鋭い一瞥を與へて、くるつと後ろを向いた。やつぱり左の眼の下が腫れてゐた。紫色になつて。

「秋元君、顏をどうしたい?」仲間の一人が素早くそれを見付けて云つた。

「いや、なに、なんでもない」秋元は如何にもなんでもないやうに云つて、顏をつるつと撫でた。眼の球が赤く充血してゐた。私は何んだか彼と顏が合はせられなかつた。で、出來るだけ彼の視線を避けるやうにしてゐた。

始業のボーが鳴りかけた時、田口が慌しく階段を上つて來た。皆んないつもの通り揃つてゐた。

私は秋元と田口の間に注意を拂つた。

石井は凄い眼をして無言のまゝ、田口と秋元を睨みつけてゐる。昨夜の會合で、二人が軟派の主魁であつたことを私から聞かされてゐたから。彼は無論、秋元の眼の下に腫れ上つてゐる紫色の傷も見た筈である。が、彼は訊かうともしない。

「秋元君、眼の下をどうしたんだい？」

今度は田口がさう云つた訊いた。

私は彼等に背を向けてゐたが、その全身が耳ともなり、眼ともなつて働いてゐた。

秋元は何んと云ふだらう？　いや、それよりも秋元は自分に闇打を喰はせた者が誰れであるかを知つてるだらうか？——秋元は何んと云つて田口に答へるか？　彼の答へように依つて彼がその加害者をどういふ方面に物色してゐるかゞ分るのだ。穩やかならぬ不安の血が、胸の中で跳つた。出來るなら、私はこゝを逃げ出したいくらゐだつた。

だが自分を離れて第三者として觀察する時、秋元は尠なくとも二方面からその加害者を物色して來ることが出來る。一つは昨夜の會合の時自分の言說を不快に感ずる立場にあつた者の暴行と見ること。も一つは、自分とおたみとの關係に對して嫉妬を感じてゐる競爭者の行爲と見ること。——

私はかうこゝまで考へを進めて來て、これは何れにしてもその加害者としては當然、自分に嫌疑が向いて來なければならないのだ、といふことを知つた。私は秋元の眼を鋭く自分の背中に感じた。

「いや、別にどうもしないが一寸、ね……」

秋元はかう云つて明らかに、事實を明かすことを厭つてゐるらしかつた。それは悧巧な方法であつた。事實を明かす

ことは、その周圍にゐる澤山の敵——反對の地位に立つた者に或る智識を與へることであつたから。

だが秋元がはつきり云はないだけに、私は彼の意中をはかり兼ねた。彼がどう推察の眼を向けてゐるか分らなかつた。

私達はやがて各々の仕事場に着いた。シヤフトはもう滑らかな音を立てゝ天井で廻つてゐた。だがどうしても平氣な心持をして私に仕事が出來よう？　秋元の紫色に腫れ上つた顏を見ると、私の心は騷いだ。仕事の手は鈍つた。

十二時が來た時石井やその他十人近くの者が早退けをした。彼等が何んで途中から仕事を投げ出して早退けをするかそれは聞かなくとも分つてゐた。その事に就ては私も彼等の憤怒を買つてゐた。それは今日から決行する筈だつた彼等のストライキを無理に延ばさしたくせに、一向約束した田口の連中を説き決すことが出來なかつたから。だが、石井は決して私の前ではそれを表面に現はさなかつた。今度彼はまた中心人物となつて何か劃策してゐるらしかつた。

石井は工場を出る時、私の處へ來て云つた。

「すまないけれど五圓ばかり金を貸してくれないか。實は今夜、本鄕俱樂部を借りて會を開くんだけれどその手金に是非必要なんでね」

私はポケツトを探つてみた。が、五圓の金はなかつた。

「ぢや、すまないけれど富田からでも借りてくれないか。利息は間違ひなく僕の方から拂ふから。あの跛の野郎、俺が行つたんぢやもう借してくれないんだ」

私は石井に對しては何かしら言葉に云へない負債を感じてゐた。で、今の申出をも無碍に拒絕するわけにはいかなかつた。

私は富田から自分の名で五圓借りた。そして彼の眼の前で、石井に渡してやつた。

「工場の退ける時分には僕らも必ず迎ひに來るつもりでゐるがね、君からも是非、連合の奴らを說き伏せて連れて來てくれたまへ。今夜は示威運動だ！」石井はかう云つて工場を出て行つた。

三時頃であつた。事務所へ呼ばれて行つた望月が歸つて來ると、彼は今度は私のところへ來て云つた。

「今度は君の番だ、工場長が直ぐ來いつて」

私は事務所へ行つた。

「或る處から聞いたんだが……」工場長は卓子に向つて職工名簿を開きながら云つた「君達の中で或る者は近頃の問題について不穩の行動に出るやうなことを言明してるさうだが事實かね？」

私は默つてゐた。顏中小さな羽虫か何んかゞ匍ひ廻つてるやうなむづ痒さを覺えながら。

工場長は名簿の或る部分に眼を留めながら又つゞけた。

「君は明治三十七年の入職だね。それぢやこの工場の規則とか氣風とか云つたやうなものは、この僕よりかよく知つてる筈だね」彼はさう云つて皮肉な笑ひを鼻の處に浮べ、じろつと私の顏を見た。「つまり、徒黨を組んで不穩の擧動に出る者は罰金の上放逐所分にすると云ふのだ。だが、十何年といふ間この工場に勤續して眞面目に働いてくれた君に對して僕は感謝しとる。信用の厚い君がまさかそんな連中の仲間入りをしようとは思はない。で、僕はあらためて君にお願ひするんだが、工場に若しさういふ不心得の者がゐたら君からよく注意してやつて、改心するやうにしてくれたまへ！」

この狸奴！　私は腹の中で呟いた。昨夜すつかり田口と秋元から聞いて知つてゐるくせにしらばつくれてやがる。何んと云ふ皮肉なおやぢだ！

「わざ〳〵呼び立つてなんだつたが」工場長は今度はしかつめらしく顏を引きしめて云つた。「念のため、君にもこゝで僕の前で誓つて貰ひたいのだ。決して罷工の仲間入りはしない。――とね」

私は返事が出來なかつた。ぎゆつと急所を掴まれたのだ。眼をぱち〳〵やりながら云ひ遁れの口實を考へた。が、浮ばなかつた。いゝえ、私は明日から罷工の仲間入りをします――かう云へば事はすむのだ。それは私の意志なのだから。が、私にはさう云へなかつた。それでは「お前にはもう用はない。明日から出て來なくともいゝ」と云ふ免職の云ひ渡しを彼に云はせるやうなものだから。失業――その二字が私の眼にチラチラツと描かれた。家にごろ〳〵してゐる米三のことまでが頭に浮んで來た。

「ストライキは決してやりません！」

暫くして私はさう云つた。が、云ふと直ぐに後悔が私の心を咬んだ。貴樣はどの面下げて約束したその仲間に顏を合はすのだ。他人の背信を散々に責めて罵打ちまで喰はした貴樣が、直ぐその舌で石井らの連中に背くとは…… 貴樣は意氣地なしだ。失業がそんなにまで恐ろしいのか。――

「それでは直ぐ楠見に來るやうに云つてくれたまへ」工場長が云つた。

私は工場へ歸つて楠見に云つた。彼は事務所へ行つた。私と同じやうなことを誓はせられる爲めに。

困つたことになつた――私は重々しい憂欝を感じて誰れとも顏を合はすことを避けた。

終業のボーが鳴つた。退出の時間が來たのだ。が、私の心にはこの時まだ、本郷俱樂部へ行かうか行くまいかの決心がついてゐなかつた。併し今までの行きがかり上私は當然行かなければならなかつた。が、何んと云つて石井に顏を合はせるのか。――と思ふと、足には重い鐵鎖が卷きついたやうに動かなかつた。問題は今、馘首になる、ならない以上

に出てゐた。

石井に對しては是が非でも仲間入りをして罷工する――と云つた。工場長に對しては、ストライキの仲間入りをしない――と誓つた。併かもその何れもが退つぴきならぬ行きがかりの上、そこへ行つた約束だつた。だが退つぴきならぬ行きがかりの上の問題とは云へ、考へて見れば、何れも自分の弱さが生んだ當然の結果だつた。自分が強くさへあれば――馘首を恐れず、義理を怖れず、感情に支配されず、飽くまで冷靜な理智の指示に隨つて行動したならば、こんな陷穽にはまり込むことはなかつたのだ。

私達はいつもの通り、身體檢査を受け、ぞろぞろと暗い門の外へ出た。門の塀に沿ふて、チラ〱と黑い人影の動くのを見た。晝間、早退けをした連中だつた。

「もう仕度が出來てるんだ。さア行かう」

彼等は蔭から蔭からと出て來て、門を出る一人一人に云つた。彼等の或る者は、膝までしかない袴を穿き、木劍を持ち、政黨の壯士然とした風をしてゐた。彼等は腕をまくり、肩を怒らし、勸誘と云ふよりか威嚇に近い言辭を以つて誘つた。

「家へ歸つて飯を喰つてから行く――」或る者は云つた。

「乾度か、逃げたら承知しねえぞ」木劍を持つたのが云つた。

私は四五人の者と一緒にまるで彼等の捕虜と云つたやうな樣子をして彼等の中に取り圍まれ、倶樂部へ行つた。眼の下を紫色にした秋元はいつか來てゐた。私は彼の姿を見ると、彼が私達の工場を出る一二時間前から工場に見へなかつたことを思ひ出した。

その秋元が私達より先きに此處へ來てゐる――それは私には一寸解らなかつた。秋元はチラツと私達に視線を投げた

が、そのまゝ又石井に向つた。彼はしきりに石井に何か說いてゐた。

その瞬間、私は秋元が工場長の內命を受けて石井の說伏に來てゐるのだな——と云ふことを直覺した。

「ヤア」石井は私達を見ると、救はれたやうな聲をして云つた。そして秋元をそのまゝすつぽかして立ち上つて來た。

仲間達は追々に集まつて來る。

秋元はあちこち人の集まつてる處へ行つては必死になつて何か說いてゐた。私の推察は當つた。彼は矢張り切り崩しの使命を受けて來てゐるのだ。彼はしきりに、憲兵隊が活動を始めたことを云つてゐる。今日も現に、工場へ私服のが二人三人來てゐたことを云つてゐる。このまゝ運動を繼續し、示威運動することは、そして更にストライキなんかすることとは、自分から自分を滅すことで實に馬鹿馬鹿しい骨頂である、と云ふやうなことを云つてゐる。

私は成るべく眼につかない、隅の方にへばりついてゐた。私にはもう何を云ふ資格もなかつた。また、何も云へなかつた。今は只、卑屈にも秋元の切り崩しが成功して、石井なんかゞ初志を徹回してくれることを望んでゐた。さうすれば自分は誰れをも傷けず、誰れをも裏切らず、自分を完ふすることが出來る——と思つてゐた。

私の眼はいつか、秋元のみならず望月までが切り崩し側に立つて仲間を說いてゐるのを見た。彼等の云ふことはちよい〳〵隅にゐる私の耳にも入つた。あいつも寐返り打つたな——と思ふと、むら〳〵と不快の血が湧いた。が、私はそれを靜めねばならなかつた。自分を押さへつけて却つて彼等の成功を祈らねばならぬ私であつた。

秋元と望月はしきりに「憲兵が」と云ふことを云つた。今夜もこゝへ彼等のいくたりかは來てゐると云つた。

一時間經ち二時間經つた。來ると云つて、來ない者が幾人かあつた。第一、組長の田口が見へなかつた。跛の富田も見へなかつた。その他まだ七八人あつた。

「誰れか行つて田口を連れて來い！」石井は叫んだ。「田口の家を知つてゐる者はないか」
「俺が知つてゐる！　引つ張つて來てやる」
騒然とした中に、さう誰れかゞ應へて、荒々しく室の外へ飛び出した。
私は二三人の者と一緒に夕飯を喰べに外へ出た。帳場のところに見たことのない青年が立つてゐた。書生つぽらしい紺飛白の和服を着てゐた。建物の外にも、怪しめば怪しいと思はれる一人二人の人影が立つてゐた。
憲兵かな――と思つて私は外へ出た。
私達が再び倶樂部へ戻ると殆ど同時に、田口を引つ張つて來る――と云つて飛び出した者が歸つたて來た。
「田口の奴家にゐないんだ。まだ工場から歸りません、つておつ嬶の奴、へんな面をしやがつてじろ〳〵見るんだ。餓鬼共が大勢泣いたり喚いたりしてるのを罵せつけてゐたがね」
「野郎逃げやがつたな」唸るやうに石井が云つた。
彼は壇の上へ飛び上つた。そしてじろつとその險しい眼を光らせながら室中を睨め廻した。
「我々に殘された道はもう最後の手段あるのみです」彼はいきなり、突拍子もない聲で叫び出した。「いまになつて憲兵隊を恐れるなんて、そんなことなら初めからこんな事に首を突つ込まなけりやいゝのです。だから嫌やな者は決して仲間にはいれとは云ひません。遠慮なく、こゝから歸つて貰ひます。我々は我々同志だけであとに殘つて相談したいと思ひます」
石井が降りるのを待つて、秋元が重々しい足取りで壇に上つた。彼の眼の下の傷はこの時壇の上で殊に大きく見へ、この物々しい空氣の中で何かしら重大な秘密の鍵に包まれてるものゝやうに、皆んなの視線を惹いた。彼は沈痛な口調

で云ひ出した。

「僕が今夜こゝへ來たのは、諸君も既に知つてゐられる通り決して諸君の同志としてゞはありません。諸君にもう一度考へ通して貰ひたいが爲めであります。工場長はどこから耳に入れたか、諸君の計劃や行動を殘らず知つてゐます。工場長の方からはもう憲兵隊へ通告をしてあつて、諸君が實行に移ると同時に活動を開始することになつてゐるのです。で僕は工場長に願つて、どうかもう少し待つてくれ、友達同志のことではあり、もう一遍皆んなに逢つて熟考を促してみるからと云つて――」

「餘計なお世話だ！」誰れかゞ隅の方で叫んだ。

「工場長が知つてるのは手めえが喋つたんだらう！」また別の聲がさう喚いた。

「今夜は生憎と月夜ぢやねえぞ、歸りを用心しろ！」

秋元の眼がじろつと聲のした方を見た。さう云つた者が誰れであるかを確かめるやうに。

初めから議長も幹事もない、てんで秩序のなかつた會場はこの時もう蜂の巢をつゝき壞したやうに亂れて了つた。發企者として、また議長格として最初からこの世話を燒いてゐた石井までが、大聲を揚げて野次り、怒號を始めた。

秋元はあとがつゞけられないで暫く室の一方を睨めたまゝ立つてゐた。彼はまだ昨夜の暴行者が誰れであるか知らずにゐる。そこへ持つて來て「歸りを用心しろ！」と云ふ言葉を聞いたのである。彼がハツと思つたのも無理はない。彼の嫌疑は當然、その發言者に向はずにはゐなかつたのだ。

「もう時間でございますから」倶樂部の管理者らしい人が來て、入口のところから叫んだ。

「ばか云へ！　まだ三十分ある。よく時計を見てものを云へ！　十一時半ぢやねえか」

直ぐそれに應じて、がや〳〵した中から誰れかゞ叫び返した。

秋元はいつか壇を降りてゐた。

私は時計を見た。十一時半だつた。歸りの電車が案じられた。議場はいつ靜まるか、どういふ議決をするか、何もかもが無茶苦茶で豫想がつかなかつた。私は心を惹かれながらも、二三人の者と一緒に通れるやうに外へ出た。會場のどよめきが暫く背後に聞へてゐた。

最後の日が來た。

その朝、工場へ出ようか休まうか——といふことを決める爲めに私はどのくらゐ自分自身と鬪つたらう。工場長とも誓つた。石井とも約束した。今、私に許される道はこのまゝ何も云はず辭職書を出すことだつた。私はいつもの時間に起きた。飯を喰べた。辨當は既に、何も知らない母の手に依つて用意されてゐた。私がそれを持つて出て行くばかりだつた。が、その時、私の心はまだ決定してゐなかつた。米三はまだ家にごろ〳〵してゐる。彼も毎日、職を見付ける爲めに奔走してゐるのだ。彼れ一人の失職でさへ、父や母がどのくらゐ暗い心持で生き、不安の壓迫を感じてるかと思ふと、私は到底自分をも米三と同じ地位に置いて考へてみることが出來なかつた。

工場へ行き着くまでに何んとか進退を決めよう。——私は辨當を持つて家を出た。時間は經つて、電車はいつ降りるところへ來て停まつた。私は降りた。考へてゐたことに何んの決定を與へることも出來なかつた。私はまだ迷つてゐた。

異常な吸引力を持つ工場の門は、その前を通る大部分の人を吸ひ込んでゐた。私もいつか彼等に卷き込まれて門をくゞつてゐた。

妙な不安を感じながら私は工場へ入つた。全體で恰度半分ばかりの不參者があつた。彼等は兎も角實行した。工場に對してそれがどれだけの痛棒に値ひするか、それは解らなかつた。が、しかし、彼等はそれで自分自身を滿足させた。私は彼等を裏切つて了つた。結果に於て友を賣つて了つた。秋元の眼の下の斑痕を見ると私の胸は痛んだ。彼に對して私は顏向けが出來ない氣がした。

十時頃、石井がやつて來た。

何んと思つたのか、彼は不參者全部の缺勤屆を持つて總代といふ格でやつて來た。彼はそれを組長に渡して了ふと、懐中から手帳を出した。そして仕事をしてゐる者に片つ端から凄い睨みを與へながら、何か記け始めた。出勤者の姓名を書き留めてゐるらしかつた。彼の眼が私に留まつた時、それは私の氣のせいであつたらうか、私は彼の眼が憎惡と裏切られた怒りで燃え上つてるのを見た。私は我れにもなく顏を反けて了つた。「石井、許してくれ！」かう私は心に叫んだ。

彼は無言のまゝ尙一時間ぐらゐそこに立つてゐたらうか。彼は間もなく、事務所から呼びに來た小使に連れられて、下へ降りて行つた。

午後——誰れが云ひ出したのか、石井は憲兵隊から來た自動車で引つ張られて行つた、と云ふ噂を傳へはじめた。

「あんなことをするからいけないんだ。帳面なんか出して名前を書くなんて……」

誰れかゞ云つた。

それからまた間もなく、小野とその他四五人の者は自分の家から、矢張り憲兵隊に引つ張られて行つた——と云ふことを傳へた。何れも事實らしかつた。それは秋元が事務所へ行つて聞いて來たものらしかつた。

夕方、事務所から小使が私を呼びに來た。私は工場長の前に立つた。と、私の後から望月と古田とがやつて來た。私の胸は妙に騷いだ。不安の影が射した。

「君達ち三人は直ぐ歸る仕度をしたまへ。今門のところに君達に逢つて話を訊きたいと云ふ人が來てゐるから」工場長が云つた。

私は瞬間にその凡てを了解した。

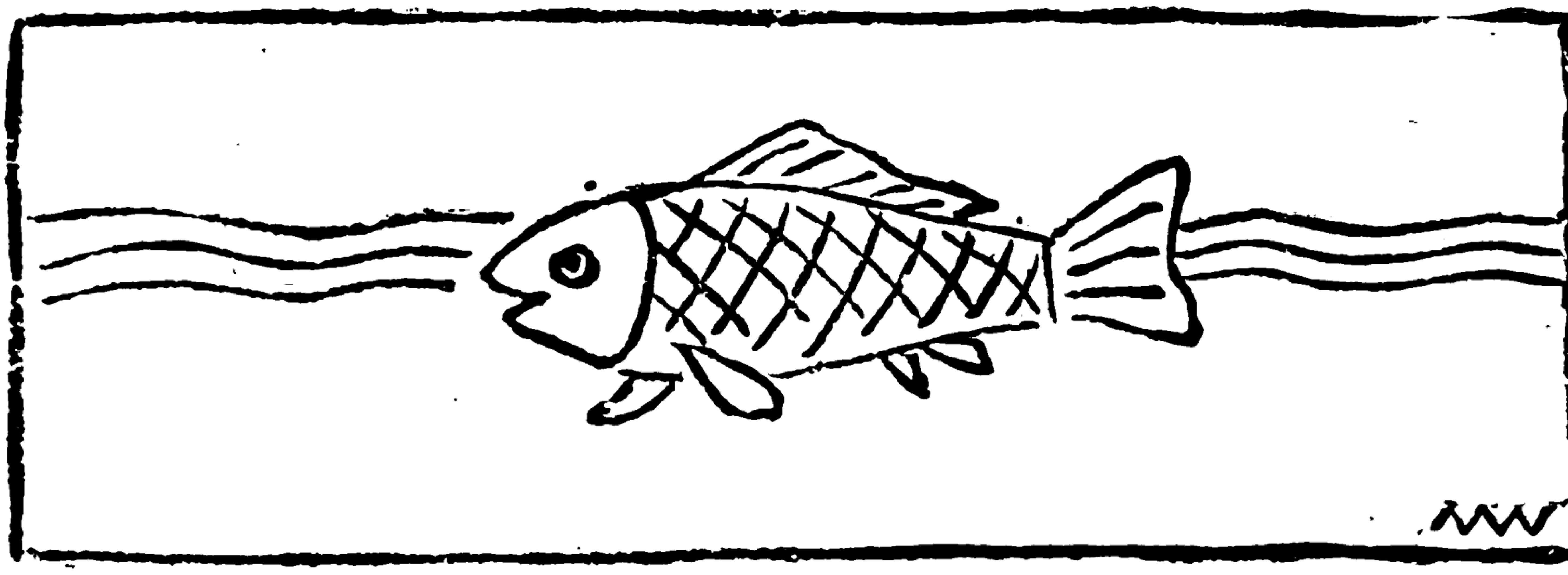
事務所を出ると終業のボーが間もなく鳴つた。三人は福岡技手に連れられて通用門へ行つた。昨夜、倶樂部の入口で見たやうな覺のある紺飛白の青年が立つてゐた。

「一寸大手町まで來て下さい。少しお訊きしたいことがありますから」

青年はさう云つて先きに立つた。四十分ばかりの後ち、私達は電車で大手町に降り、憲兵隊の門をくゞつた。

玄關の時計が十時を打つた。長靴と洋刀の音が時々私達の默想を破つた。

——一九二二・五・二九——



ガラス

上司小劍

一

ガラスの發明が、人間の生活に、どれだけの影響を與へたかといふことを、大石は始終考へてゐた。地球を基礎として起る雨や風や、あらゆる力は、それを透すことが出來ないで、地球の外から來る太陽や星や月の光だけがそれを透すといふ不思議な物體の發明は、人間の力の最高點を示したもので、これ以上の仕事は形に現はれたものとして、向後人間の生命が地球の上に繋がる間に、到底出來ようとは思はれない。空氣――風――を通さないで、光だけを透す。人間の指先きを支へて、眼の光――視力――ばかりを透す。こんな重寶なものがまたとほかにあらうか。

ガラスの力は、眞理の力だ。人間が其の透明を破るには、暴力を用うるよりほかにない。――大石はさういふ變てこな論理を組み立てゝ、頭の中に智惠の遊びを試みてゐた。

彼れは、この晩春から初夏に移らうとする頃、圓形のだいぶ大きいガラスの壺——鉢——を求めて、それに水を盛り八尾の金魚を泳がせた。金魚は廣い〳〵果てしのない池に放たれたやうに思ひながら、眞つ直ぐに泳いで行かうとすれば、眼に見えぬ障壁があつて、鼻つ先きに突き當る。行かうとしても、行かうとしても、眼に見えぬ或る物が己れを支へて、どうしても通らせない。行かうとする先きには、人間の美しい世界が見え透いてゐる。立派な書籍もあれば、いゝ樂器もある。美しい花もあれば、見事な畫もある。あの廣い世界へ、自分はどうして出ることがならないのであらうかと、金魚どもは、人間の恐ろしい魔術にかゝつたのに驚きつゝ、廣い〳〵中の、狹い〳〵自分の世界をくる〳〵と幾度も幾度も泳ぎ廻る。さうして、何處かに、廣い世界と通ずる一條の道を見出さうとするが、滑々とした眼に見えぬ障壁は泳いで行く先き〳〵に附いて廻はつて、執念ぶかく自分を支へる。どうすれば、これから先きに泳いで出られるのであらうか。ほんのもう目と鼻との間に見えてゐるところへ、どう焦慮つても行かれない。鐵のやうに堅い無形の或るものが、自分の行く手を遮つてゐる。時としては、自分と同じ形をしたものが、向ふから現はれて、大きくなつたり、小さくなつたりして、自分の眞似をしながら泳いでゐる。さうして、自分が廣い世界へ出ようとして、眼に見えぬ障壁に突き當る時、自分の鼻つ先きは、自分と同じ形をしたものゝ鼻つ先きと相觸れる。其の鼻つ先きの冷たくて堅いこと、それで、此方が後へ寄れば、先方でも後へ寄る。此方が進めば先方でも進む。此方が鰭を動かせば、先方でも鰭を動かす。尻尾を振れば、尻尾を振る。口から泡沫を吐けば、矢張り同じ大きさの泡沫を同じ形に吐く。これくらゐ眞似をする奴はないと、腹が立つて來るが、其のうちに忽然として、先方の赤い姿が消えてしまふ。

俺は、沈默の表象だぞ、お喋舌の人間め、俺に對して恥を知れよ。——さう云つた顏をして、金魚は毎日毎夜、透明な壺の中を泳ぎ廻はつてゐる。蚯蚓でさへ鳴くといふのに、俺は默つて生れて、默つて泳いで、死ぬまで默つてゐ

る。断末魔の苦しみも、俺にはたゞ沈默があるばかりだ。狭いやうで廣い、廣いやうで狭いこの俺の世界は、行けども、行けども、果てしがない。俺の毎日毎夜泳ぐ里程を明細に測つたら、幾千里に及ぶか知れたものでない。一生に泳ぐ里程は、人間が一生に歩く里程よりも長いか知れない。何んにしても、三熊野の果て無し浦のやうに果てのないのは、俺の世界だ。つひ目と鼻との間に見えてゐて、幾ら泳いでも、泳いでも、其處に行かれない不思議な世界は、俺たちの世界のほかにはあるまい。茫乎として其の際涯を知らず、然も遠きにあらざる也、といふ氣がする。

冬になると、俺たちがこの前に住んでゐた世界の泉水とかいふものゝの水が堅くなつて、うつかり浮き上らうとしようものなら、コツンと頭を打つ付けることがある。俺の今入つてゐる世界は、あれが前後左右へやつて來たものであらうか。俺たちの吸ふ水が堅くなつて、俺たちの行く手を遮つてゐるのであらうか。――

金魚は、こゝまで考へて、一大發見をしたといふ歡喜にたへないで、悦びの餘り身を躍らせて跳ね上ると、浮いてゐた藻に引つかゝりながら、其の堅い／＼障害物をば飛び越してしまつた。

ところが驚いた。今まではたゞ一圖に、この目に見えぬ無形の堅いものが、俺たちの幸福を遮る唯一の障害物のやうに思つて、これさへ打ち破れば、其の先きには廣い自由な世界があることゝ信じ切つてゐた金魚の理想は、痛ましくも一場の空想と破れて、目に見えぬ障害物の彼方は、金魚に取つて、恐ろしい死の世界であつた。目に見えぬ障害物とのみ思つて、それを破壊することが、彼等の畢生の事業と信じ切つてゐたのは、彼等を死滅に導く惡夢であつた。障害物だとばかり思はれてゐた透明な堅いものは、其の實障害物でなくて、彼等の生活を保護するに最も必要な楯とも堤ともいふべきものであつた。彼等の生活には一瞬時も缺くことの出來ない水が、この目に見えぬ障壁によつて、彼等の生命とゝもに保護されてゐるのであつた。青く美しい藻や、慈姑の根や葉を、其の目に見えぬ障壁の中を限つて、育つてゐる

のであつた。

大石は、金魚に代つてこんなことを限つた。透明な廣い世界！　行けども、行けども、果てしのない廣い世界の、生の喜悦に堪へかねて、パツと躍り上ると、其の美しい金の鱗を裝ふた赤い魚の小さな身體は、忽ちにして、目に見えぬ透明な障壁の外にあつたのだ。其處は堅い紫檀の卓の上で、水の無い、恐ろしい、死の世界であつた。金鱗の小さな魚は、小さな口をパク〳〵して、人間の吸ふ空氣だけを、其の鰓に受けてみたが、もとよりそれだけでは、彼れの生命を繋ぐに足りなかつた。尾と鰭とで、ぴん〳〵と跳ねても、元の水のあるところへ歸ることは出來なかつた。彼れは徒らに故郷が戀しかつた。

大石は、自分の愛讀書を積み重ねた紫檀の卓の上に、小さな金鱗の魚が、赤い身體を横たへて、もう跳ねることも飛ぶことも出來なくなつてゐるのを、腕組みしながら、ヂツと見詰めてゐた。たゞ死あるばかりのこの場合になつても、彼れが神から命ぜられた沈默を守つてゐるのを哀れ深く思つた。このまゝでおけば窒息があるばかりだ。そこで大石は決然として、――こんなところへ決然といふ漢語を使ふのは唐突で不當であるかも知れないけれど、これが其の時の大石のほんたうの心持ちであつた。――赤い小さな魚を指先きに摘まむと、もとの透明な壺の水の中へ放してやつた。

脫獄を企てた金鱗の小さな魚には、まだ生命があつた。稍身體を斜めに、腹をかへしつゝも、再生の悦びに其の赤い姿を輝かして、仲間のなかへ泳いで行つたが、仲間には別に其の友だちの無事に歸つて來たのを歡び迎へるさまとてもなかつた。彼等は人間の拵へた『物』とも知らずに、神の與へた不可解な謎として、目に見えぬ障壁に隔てられた狹くるしい天地をば、行けども行けども果てしのない無限境として、くる〳〵泳ぎ廻つてゐるのだとも、大石には考へられる。

二

風の音と雨の音とには、小さな赤い魚の神經が、甚だ鋭敏に動くのを見た。風には沈み、雨には浮き上つた。風が水を狂はせる恐ろしさを、彼等は生れながらに知つてゐるのであらう。前代未聞の大風が來て、彼等を壺の中に囚へてゐる人間の家を破壞しない限り、彼等の狹い天地の水は動搖することがないのであるが、それをどうして彼等が知り得よう。人間に與へられた窮屈な壺の中を、彼等自身に發見した自然の天地として、幾筋かの藻と、一株の慈姑の根との蔭をば、唯一の隱れ場所にするやうになつた。

雨の音には、彼等が言ひ知れぬ憧憬をもつてゐることがよく分つた。水のあるところに生命のあるのを彼等は知つてゐるのであらう。人間どもの生きる陸地にくらべて、彼等の生くべき水の量は三倍もある。この豐富な水を與へられて生れた彼等魚の群れは、人間の手が汲み取つた少量の壺の水に滿足して、殿かに沈默を守りつゝ、平和な顏をしてゐるけれど、遠くに聞える雨の音には、其の平和な心を亂されて、水を戀ふる彼等の自然の情が動くのであらう。

雨がいよ〱劇しくなつて、樋を溢るゝ音が、さながら川の瀨のやうに聞えて來ると、彼等の勢ひはほんたうに潑剌として、水の面に浮き上らうとする。彼等には川の瀨や淵をば、無上の樂園として夢むる覺魂の閃めきがあるのであらう。

しかし、愛すべく、哀れむべき小なさ魚よ、爾が戀ひ慕ふ大きな廣い水の世界には、恐ろしい敵が居るぞ。其處には弱肉强食が、徹底的に行はれてゐる、爾の赤い姿は、……何んの保護色をも有たぬ爾の赤い姿は、……緋絨の鎧を着けた殿上眉毛に鐵漿黑々の若武者が、荒々しい坂東武者に發見されたやうに、日の丸の扇翳して打ち招かれるまでもなく、忽ちパクリと其の餌食になるであらう。人間の手に囚へられて、壺中の天地に泳いでゐるのが、爾の安全の第一であ

る。透明な壺の中の、同じところを、くる〳〵廻つて泳いでゐれば、無限の廣い世界に住んでゐるのと同じである。水は時々に人間の手で、半分ほどづゝ、新らしいのと取りかへてくれ。餌は折々に、孑孑や麩の碎いたのを與へられる。爾の生命は人間に委ねておいて、はじめて爾の幸福は生れ出る。爾は何んの風を恐るゝことがあらうぞ、雨の音に憧憬れて、よその水を慕ふことがあらうぞ。——

大石は人間を代表したといふ顔をして、透明な壺の中に泳いでゐる赤い小さな魚に向つてかう言つた。

さうして、其の夕、魚もまた外氣に觸れなければならぬ。夜露を受けることによつて、且つは太陽の光りを直かに惠まれることによつて、活々と育つて行くことは、植物も同じだと、或る男から敎へられたので、大石は透明の壺の水をゆら〳〵させながら、小さな魚に不安を感じさせつゝ、庭前の椎の青葉の下に持ち出し、竹の臺の脚がだいぶ怪しくなつた上へ載せて、今宵から明日を其處に泳がせておくことにした。泳ぐ壺の中の小さな天地に變りはないけれど、周圍に見える光景が、二階座敷の紫檀の机の上とはスッカリ變つたので、赤い小さな魚は、其の金鱗を澱はせつゝ、喜び勇んで、毎日毎夜の果てしもない長い遊泳が、同じところを廻つてゐたとも知らないで、長い間の努力の甲斐あつて、漸くにこんな新らしいところへ泳ぎ着いた、もう占めたものだとでも思つてゐるらしかつた。

大石は緣側に端居して、透明な壺の中に、時としては其の赤い姿をば幾倍の大きさに映して動いてゐる哀はれな魚を見ながら、魚と同じ色をした苺を、魚の容れものと同じ透明な皿に盛つて、銀色の匙で、白い砂糖を振りかけ、黄色い山羊の乳汁に浸して、おいしく喰べてゐたが、一寸傍見をした隙に、早くもこの邊の臺所を狙つては、肉片を銜へて逃げ出すヴアガボンドが、痩せた三毛の姿を長くして、伸び上りつゝ、前脚の爪を立てゝ、透明な壺の中を覗つてゐた。

恐ろしい牙をもつた、口の耳まで裂けた猛獸が己れを狙つてゐるとも知らないで、異つた世界に達したといふ空しい

欣びに、鰭を振り尾を斜めにして、喜び勇んでゐる赤い小さな魚は、うか〱と水面へ浮び上つて、ヴアガボンドの鋭い爪にかゝらうとした。

『しいつ、しいつ。』と、叱咤しても、赤い魚に未練を殘して、なか〱逃げようともしないヴアガボンドの圖々しさ。大石は少し癇癪を起して、立ち上りさま、ドタリ〱と音させて、兩足で敷居を蹈み鳴らすと、ヴアガボンドは漸く前脚を透明な壺から離し、後脚で砂を蹴つて、垣根の外へ、風の如く逃げ出した。透明な壺は其の機みに竹の臺ごと、ぐらぐらと動いて、中から水玉をさへ飛ばしたが、赤い小さな魚は、相變らず嬉しさうにして、時ならぬ水の動搖をも、自分だちが新らしく到着した世界の特色のやうに思つてゐるらしかつた。

これではいけないと大石は思つた。さうして暫らく考へた末に、ヴアガボンドの野良猫ぐらゐが押しても突いても、脚をかけても動かない丈夫な木製の臺の上に、透明な壺を置きかへたが、何んぞ蓋がなければ、ヴアガボンドの爪に小さな赤い身體を引ツ浚らはれる危險があるので、丁度緣側にあつた支那燒きの圓い水盤に、小笹の一株が竹生島の形に浮んで、中に辨財天の堂の見える稍俗なのを取り上げて、金魚の棲んでゐる透明な壺の上へ置くと、いゝあんばいに、こつぽりと蓋になつた。今まで見えてゐた蒼空が急に灰色に變つて、近く頭の上にまでやつて來たのに驚きもしないで、赤い小さな魚は、矢張り悠々と壺の中を泳ぎ廻つてゐた。日本一の琵琶湖の下に居れば、これほど完全なことはないぞと大石は赤い魚に向つて言つてやつた。

大石が元の緣側へ戻つて、銀色の匙で苺を突きつぶしてゐると、先刻のヴアガボンドがまたのそ〱と木蔭から現れた。彼れは覆面をした黒裝束の曲者といふ風に、何家かの土竈の中へでも入つて來たのか、全身を煤に染めて、さなきだに汚れてゐる三毛の色を薄黒くしてゐた。

曲者は前の通りに、赤い魚の泳いでゐる透明な壺に前脚をかけたけれど、重い水盤が載つてゐて、水に爪を屆かせることがならないので、『ニヤア』と一聲、失望の叫びを殘して、のそ〳〵と立ち去つた。眼の先きに見えてゐて、爪も立たぬ透明な物體の不思議さも、この動物はちやんと心得てゐて、何んの未練も殘さなかつた。

それから二三度、三毛のヴアガボンドは、この庭前を、のそり〳〵通つたけれど、もうスツカリ諦めたものと見えて、赤い魚の方は見向きもしなかつた。大石は獰猛でも執着の淡いヴアガボンドの氣象に感心しつゝ、『ツオツ、ツオツ、ツオツ』と舌打ちして、呼んでみたが、彼れは何を吐かしやがるとばかり、三角な耳をぷるツぷるツと動かしたゞけで、素知らぬ風に行つてしまつた。

三

其の夜大石は、何んとなく寢ぐるしかつた。八尾の金鱗の魚が、赤い友禪の振袖を着て、ずらり並んで、都踊りでも踊りさうな樣子で、枕頭にやつて來たといふ夢を見た。

『どうも有りがたう。』

雛妓のやうな姿をした彼等の一つはさう言つた。其の聲は銀鈴の響くやうなのではなくて、ぶく〳〵と、破れ太鼓の水に浸つたのを叩くやうなのであつた。

『あゝ苦しい。…………』と、振袖の一つが言つて、圓い眼を剝いて大石を睨んだと思ふと、彼れは魘されてゐたやうな惡夢から、ハツと醒めて、全身に汗が浮んでゐた。二燭光にしてある電燈が、ぼんやりと、淡々しく枕頭の紫檀の机の上を照らした。其處は昨夜まで赤い魚の棲家の透明な壺が載つてゐたところで、今夜は二燭光の下に金鱗の輝くのが

見えないので、悪夢の名殘りから來る寂しさが、犇々と彼れに襲ひかゝつた。

大石は庭前に出してある透明な壺のことが氣にかゝつてたらなかつた。壺は淡い電燈の光りを受ける代りに、寂しく星を宿して、星影の中に赤い魚は泳いでゐるであらうか。いや／＼あの小さい壺の中に星の影が宿つたら、壺は破裂するであらう。などゝも考へた。星の影にも強い重みがあるやうに、この時大石には感じられたのであつた。小笹の繁つた竹生島の形をした水盤を、薄い透明な壺の蓋にして置いたことを、スッカリ忘れてしまつてゐた。

たまらない氣持ちになつて、大石は薄い夜具を撥ね退けるなり、立ち上つたが、いつになくよろ／＼として足元が定まらなかつた。まるで醉漢か中風病みのやうな形で、廊下まで出ると、白い幕を手繰り寄せて、外の樣子を覗つた。外にはしつとりとした夜氣が、水のやうに浮んで、枝を垂れた松の樹が、黑く泳いでゐるやうに見えた。星の影がチラ／＼と眼に映る。大石は愕然として天の一方を睨んだ。彼れが書齋にしてゐる階上の一室の南面には雨戸がなくて、透明な――さうだ赤い金鱗の魚の棲家になつてゐる小さな壺と同じ――物質を嵌めた戸が立てられてゐるのだ。赤い魚が透明な壺の中を泳いでゐるのと同じやうに、俺はこの透明な戸に、一枚の薄い白布を垂れた中に眠つてゐたのだ。魚も俺も同じことだ。……とまで大石は考へて、其の透明な冷たい戸に顏を摺り付けた。

夜氣が透明な戸を透して、大石の筋肉の間に滲み込むと、彼れはぞく／＼と身體を慄はした。夏と言つても若葉の頃には、後へ春を飛び越したやうな冬に似た寒さが何處かに殘つてゐる。夜に於いて殊にさうだ。彼れは嚔を一つした。

赤い小さな魚は、どんな風にして、透明な壺の中を泳いでゐるであらうか。それともヂッと動かずに眠つてゐるであらうか。紫檀の卓の上にあの透明な壺が載つてゐた時、大石がいつなんどき眼を覺ましても、二燭に弱めた電燈の下で、赤い魚は絶えず、泳いでゐた。魚といふものは眠ることも息むこともないのかと思つたことがある。たとへ眠つても眼

を閉ぢない彼等には、ほんたうの眠りといふものがあるであらうかとも考へた。眼で眠らずに心で眠る。――さういふことを彼等魚の群は知つてゐるのであらうかとも考へた。

眼で眠らずに心で眠ることが出來るのならば、眼で物を見ずに、心で物を見ることも容易であらう。沈默の表現として、暑いにつけ、寒いにつけ、痛いにつけ、苦しいにつけ、一言もそれを口から聲として現はすことのない、聖者とも見らるゝ彼等！……彼等の口は、水を吸ふ爲めと、孑孑や麩の破片を食ふ爲めとにのみ存在してゐるのである。恥を知らぬ人間どもの饒舌家と思ひ合せて、大石は更に彼等魚たちの滑らかさと貴さとを知つたのである。

冬の寒い時、厚い〳〵氷の下に、……其の氷は、今現に彼等赤い魚の入つてゐる壺ほどに透明なものでないが、それでもヂツと動かずにゐる赤い姿を見透すことが出來た。まるで人間の拵へた瀬戸物に赤い繪の具を塗つた魚の形のやうな恰好をして、沈默に活きてゐる赤い魚はヂツと動かずにゐた。かうして彼等は眠つてゐたのであらうか。冬眠つて夏覺めてゐる彼等の生活！……さうして其處に冷靜と沈默とがある。

考へれば考ふるほど、大石は魚たちの貴さに打たれた。あの透明な壺の中の赤い小さな魚は、今どうしてゐるであらう。彼れは再び三たびそれを考へて、暗い庭前を、透明な戸を越して俯瞰したけれど、闇の中に眼の光りは消えて、何ものをも見ることは出來なかつた。

もとの通りに白い幕を引いて、またよろ〳〵と臥床に戻つたが、この夜ばかり、曉の待ちどほしく待たれたことはなかつた。うつら〳〵と夢に入りかけたと思ふと、幻の如く八人の雛妓が袂の長い赤の振り袖を着て、眼の前に現はれた。

「どうも有りがたう。」

『お禮を申しにまゐりました。』

銀の鈴の鳴るやうな聲に、苦しい夢を破られて、ハッと飛び起きたが、まだ夜の明けてゐないのに、大石は全くがつかりした。一體何時なのかと、時計を見ようとして手を伸ばしかけたけれど、この場合時刻を知るといふことが、恐ろしくてならなかつた。もう四時にも近づいてゐればよいけれど、若しや一時か二時であつたらどうしようといふ恐怖があつた。身體のわるい時名醫といふものゝ診察を受くる恐怖、熱のありさうな折りに檢溫器を挾む憂慮、丁度そんな心が、この時の大石の心であつた

またうつら〳〵と、夢に入りかけると、八人の雛妓が同じ振り袖の赤い姿で、ずらり並んで立ち現はれた。さうして今度は『今晩はあり……』とも何んとも言はないで、いきなり立つて、翩々とした手ぶり、足どりで、舞踊を始めた。よく見てゐると、彼女等は、年のわりに皆年をとッてゐた。年ツくひであるらしかつた。どれもこれも皆散々に男を知つてゐさうであつた。深々とした肩揚げが、目立つて滑稽であつた。癪もちと言つたやうな樣子をしてゐるもあつた。翩々と踊りながら、時々じろり〳〵と此方を見る眼に、恐ろしい光りがあつた。鬼神が化けた戸隱山の美女といふやうな趣きが、ちら〳〵見えて來た。

其のうちに、一人の雛妓が案の定、鬼神の形相になつて、吊り上がつた眼に、礑と大石を睨んだと思ふと、口が耳まで裂けて、猫とも虎とも分らぬ顏になつた。赤い舌が蛇のやうにベラ〳〵出ると、それが忽ち火焰となつて、噴き出された。見る〳〵うちに、八人とも同じ鬼神の姿に變つたが、それがまた一つに凝固つて、鯨のやうな大きい金魚になつた。さうして、パクリと圓窓のやうな口を開いて、自分を呑んでしまつたと、大石は思つた。

『あツ。』と叫んだ自分の聲に眼は覺めたけれど、どうしたことか、二燭の電燈が消えてゐて、夜はまだ明けてゐなかつ

た。夢とは知りつゝも、大石は何んだか鯨のやうな金魚の腹の中に居るやうな氣がしてならなかつた。さう思ふと四邊が暗く思はれて、手を伸ばすと、ベタ〳〵ザラ〳〵する金魚の胃の腑に觸れさうな氣がした。ぬら〳〵した金魚の胃液に浸されて、このまゝじり〳〵と自分の身體がどろ〳〵に消化され、黑い細長い糞となつて、赤い魚の尻から排出されるのではあるまいか。

さう思つて、大石は、恐ろしい、氣味がわるい、もう駄目だ、といふやうなことよりも、この身體がこのまゝじりじりと溶けて行くのに、無上の快味があるやうに感じて來た。身體の溶けて行く折りの心知と、阿片を喫した折りの快よさと、いづれであらうか、なぞとも考へた。しかし、また昔し素盞嗚の命か、日本武尊の命か、何んでもそんな強い命が西海の波の上で、大きな惡魚に、乘つた舟ごと呑まれて、腰の名劍で、魚の腹を裂いて、背の上に現はれたところの繪を、幼い折り、金毘羅名所圖會といふ赤い表紙の五冊本かの中で見たことを思ひ出し、あゝいふ風に、大きな魚に呑れて、魚の腹を突き破つて出るといふのも、男壯で爽快なことであらうと考へた。

怪魚に呑まれたといふ物語は、世の中に幾つもある。近世の科學的なものになると、魚に呑まれて魚の胃の中に悶絕してゐた人間が、魚の消化作用に、一種の強い興奮と刺戟とを與へられ、忽ちむつくり起き上つて、滑る足を踏みしめ踏みしめ、腰にしてゐた軍艦ナイフを取つて、力まかせに魚の胃壁へ突き立て、ぐツと一つ抉ると、其の機みに空氣が入つて、丁度空氣銃の彈丸が銃口を出るやうに、魚の胃袋に包まれた男はそのまゝ胃袋とともに、魚の口を飛び出し、遙か彼方を航行中の巡洋艦の近くに、高い水柱を立てゝ落ちたが、幸ひに怪我もなく、軍艦に救ひ上げられた。さうして魚の胃液の爲めに、顏の黑子がスッカリ無くなり以前よりも美男になつたといふ話をも、幼い頃母の添ひ寢に聽かされたことがあつた。

そんなことをいろ〳〵想ひ出してゐるうちに、大石は全く鯨のやうに大きい金魚の胃液に溶かされる風に、正體もない眠りに落ちた。

四

『金魚が死んでる。……………』

大きなキイ〳〵聲が、耳の端で聞えたと思ふと、大石はハツと飛び上らんばかりにして眼を覺ました。夜はもうスツカリ明けなばれて、死んだ人をも甦らせるやうな太陽の光りは、爽やかな初夏の蒼空から、障子を穿つて射し込んだのかと思はるゝほど勢ひよく、枕頭にまで來てゐた。

『金魚が死んでるよ。』

耳の端で、またさう言つたキイ〳〵聲の叫びが聞えた。大石はまご〳〵して、四邊を見廻はしたが、もとより其の書齋兼寢室に他に何人も入り込んでゐる筈はなかつた。

『金魚が死んでる。』

三たび目に漸く、其のキイ〳〵聲が庭前から來るのだといふことを知るほど、大石はほんたうにまだどうかしてゐたのである。

『なに、金魚が死んだ。』

さう言つて、大石は夢の中の人のやうにまたよろ〳〵として立ち上つた。

『えゝ、金魚が死にましたよ。』

十歳になる男の子の恐ろしくよく聞える耳は、大石の言葉を最も鋭敏に聞き取つたとおぼしく、庭前から、物の響きに應ずるが如く、かう答へた。大石は解けかゝつたまゝの古い兵兒帶を猫の尻尾の如くに引き摺つて、廊下まで出た。其處の透明な戸の内に垂れてゐる芝居の引幕のやうな白いカーテンを、夜のうちに一度引き開けて、庭前の臺の上にある赤い魚の透明な壺の樣子を俯瞰しようとした記憶が、夢のやうに殘つてゐる。太い針金を滑る細い眞鍮の鐶の音が、サラ〳〵と川の瀬の囁くやうに、朝晴れの空氣に響いて、若葉の匂ひの豐かな坪の内は、鮮かに眼の下にあつた。

『金魚が死にましたよ。』

男の子は手に青い竹片を持つて、こぶ〳〵と繁つた八つ手の葉の下に、其の葉を頭に被つたといふ風にして立ちながら、またかう言つた。

『一つ死んだか、二つ死んだか。』

大石は臺の上の透明な壺を俯瞰しつゝ訊いた。小笹の繁つた水盤が、透明な壺の上に載つてゐるので、壺の中の樣子はよく分らなかつた。

『みんな死んだ。』

『なに、みんな死んだ。』と、愕然たるおもゝちで、大石は立ち竦んでしまつたが、大の男が十歳の小童に調弄はれるのも、まだ夢の覺め切らぬ爲めだといふやうな氣がして、『嘘を吐けッ。』と怒鳴つてみた。

『ほんと、みんな死んだんです。』と言つた子供の顏が、八つ手の葉の下に痛ましく、青ざめて映つた。

『それは大變だ。』と、嘆くやうに言つて、大石はドンドンとひどい音をさせつゝ、階子段を下りた。出あひ頭に、丸髷の女の顏が、ひよいと出た。

『可哀さうぢやありませんか。あなた。金魚をみんな殺しちまつて。……』

女は丸髷の頭を振り〳〵かう言つて、怨むゝ如く大石の顔を見た。肌理のあらい、さら〳〵した女の顔は、まだ朝の化粧が濟まないので、口まで大きく見えて、締りの弛い唇から、隙間の多い前歯が、よく磨かれないで見えてゐた。

『馬鹿言へ、僕がどうして金魚を殺すもんか。今起きたばかりぢやないか。』と言ひながら、スツカリ解けてしまつた古い縮緬の兵兒帶の捩れたのが、階子段の上から下へ、交尾した蛇の如く垂れ下がつてゐるに、やつと氣がついて、後を向きつゝ拾つて、くる〳〵と締めた。

『ほゝゝゝ。』と、太い聲で笑ひながら、女はヂツと、はだけてゐる男の前を見詰めて、『あなた、化けて出てよ、金魚が。……あんな可哀さうなことをするんですもの。』と言つた其の口調は、如何にも娘らしく甘つたれてゐて、高い竹馬に乘つて遊ぶ子があらうとは、兎ても思はれなかつた。

『馬鹿ツ。』とだけ言つて、大石は成るべく陽氣にと、大きな聲で笑つたが、どうも勢ひが出なかつた。夜の夢に見た八人の赤い舞妓のことが氣になりかゝつた。

『まア見てゐらツしやい。隨分慘酷よ。人道主義者も、金魚道にかけちや惡魔ね。』と、女はまた毀れかゝつた丸髷を振り〳〵生意氣なことを言つたが、大石には何んのことだか、サツパリ分らなかつた。

『お父さん。早く〳〵。早く來て御覧なさい。今のうちなら甦へるか知れませんよ。早く〳〵。』と、子供が小まちやくれた言葉で、庭前から急き立てたので、大石は女と童とに兩方からいゝ加減弄ばれてゐるやうに思ひながら、兎に角急いで椽側へ出て、沓脱石の上に日光下駄を探るももどかしく、臺の上にある透明な壺の側に行つて見ると、これはどうだ、壺には殆んど一滴の水もなくなつて、八尾の赤い魚は腹をかへして、横に寢てゐる。ほんたうに寢てゐると言ひた

いほど、靜かに平和な姿である。

透明な壺の底には、玉川砂利の小さいのが敷いてある。青いのや白いのや黄色いのや褐色をしたのや藍色に白く細い筋の美しく入つたのや、そんなのが玉を敷き並べたやうになつてゐた。其の玉のやうな小砂利を褥とし、枕として、八つの赤い麗はしい姿が靜かに横たはつてゐるのを見た時、大石はただもう息の詰まるのを覺えた。

『可哀さうに。……………』

竹片を手にした小童は、いつものやうにそれを振り廻はすこともしないで、八つ手の葉の下に立つたまゝ、痛ましさうに、眉を顰めつゝかう言つた。それは母親の口眞似らしかつたが、この場合、『可哀さうに。……』の一語よりほかにこの場の情景を語るべき言葉はないのであつた。

大石は最愛の人の柩の蓋に手をかけるやうな心で、小笹の繁つてゐる竹生島の形の水盤をば、透明なる壺の上から取り下ろした。昨夕これに蓋をした時は、さほどにも思はなかつた水盤が、今朝は可なりに重いのを感じた。薄い透明な壺は、この水盤の重みに堪へないで、底に龜裂を生じ、赤い魚の命とたのむ水はそれから流れ失せて、彼等八尾を窒息させてしまつたのであつた。藻と慈姑とは、片脇にかたまつて、露を帯びたまゝ、まだ生きてゐる。

三毛のヴアガボンドを恐れた爲めに、昨夕は蓋になる水盤は重いほどよいと感じてゐたから、其の重さに氣付かなかつたのである。ヴアガボンドともパルチザンとも言ひたい恐ろしいものゝ爪を恐れた爲めに用ゐた、重い、しツかりした防禦物が、其の重さの爲めに、將たしつかりしてゐる爲めに、裏の方から、底の方から、水を漏らして、八つの赤く美しい王子や姫の生命を喪はせることになつた。

竹生島の形に小笹を植えた水盤を、透明な壺の上にスツポリ被せて、琵琶湖を頭の上に頂いてゐれば、猫の爪ぐらゐ

大丈夫だ、と思つたのは、全く仇になつたのだ。琵琶湖は猫の爪よりも恐ろしかつた。よしやこの盃がなくて、パルチザンの爪が襲ひかゝつたとしても、赤い魚は八尾が八尾皆やられるとはきまらなかつたであらう。恐ろしいのは獰猛な兇悪なパルチザンよりも、平和な姿をしたこの小笹の水盤である。——

大石はさう思つて、水盤を土の上へ下ろしたのだが、其の途端、小笹の竹生島が傾いて、水が流れ出し、したゝかに大石の裾を濡らした。下の壺では生命とたのむ水が無くなつて、八つの美しい王子王女が、轍鮒の苦しみに悶えてゐるのに、上には波々と水を湛へた水盤が、冷やかに澄まし込んで、其の水の一滴だも融通しようとはせぬ。あゝ何といふ殘忍！　下で水のなくなつた原因は、上の水盤にあるものを。——

さう考へて、大石は、むら〳〵と起つた腹立たしさに、水盤を叩き碎かうかと思つたが、しかし過ちは總べて、自身にある。無心の水盤の知つたことかと、思ひなほして、自らの愚に苦笑した。

五

夜のうちに起つた一つの兇變！

よしや、上の水盤に魂魄があつて、下に轍鮒の苦しみをしてゐる赤い八尾の哀はれなものがあると知つても、さうして、それが決して自分の故意にしたことでなく、人間の意志に從つて動くことよりほかは知らぬ偶然の變災ではあるが、しかし、ぢつとして知らぬ顏で見てもゐられないといふ心の働きを起して、水盤自身の水を下の透明な壺の中に殘らず供給したところが、既に底へ龜裂の入つた壺では、上からの好意も、畢竟は無駄である。恐らく五分間とは長く八つの赤い王子王女の生命を繋ぎ留めることは出來なかつたであらう。してみると、透明な壺がわるいのだ。壺が弱くて、水盤

の重みぐらゐで底に龜裂を生じたのがわるいのだ。ああ何んといふ弱いやつだらう。——

さう思つて、大石はまた自分の過ちを忘れさうになつて、八つの赤く美しい死骸を並べた透明な壺を取り上げた。もう少し重いと思つてゐた壺の輕さ。風に舞ひ上る紙のやうに、ひよいいと持ちあがつた輕さ。これに水の盈ちてゐた時の重さを豫期したのではなかつたのだが、餘りと言へば、紙のやうな輕さであつた。

手に取つて、龜裂の入つた底を改めると、龜裂といふよりは穴と言つた方が適當なほどの破れ目が出來てゐた。この穴から水が漏つてだん〳〵に淺くなつて行く我が世界をば、矢張り平和な世界だと思ひつゝ、刻々に迫る最後の運命をも知らずに、八つの赤い魚は、其の美しい金鱗を星影に映して、幸福氣に泳いでゐたであらう。五分減り、一寸減り、二寸減り、三寸減り、四寸減りして、背中が水の上に露はるゝまで、腹が底に觸れて、泳げなくなるまで、彼等赤い魚は、決して騷がずに、平和な天地を樂んでゐたのであらう。行けども行けども果てしのない天地に。漸く世界の果てが來たとは知らなかつたであらう。每夜紫檀の机に載つて、電燈の下にあつた世界が、八つ手の葉蔭の岩乘な壺の上から、星の光りを仰ぐ世界へまで、自分の鰭の力で泳いで來たと思つてゐたであらう。

泳ぎ泳いで行き着いた果ては、水のない、苦しい世界であつた。——

さう思つて、彼等赤い魚は、矢張り沈默をつゞけたまゝに死んで行つたであらうか、水がいよ〳〵乏しくなつて、其の鰭だけをも浸すに足りなくなつた時、彼等は定めてピチ〳〵と跳ねたであらう。それは水のあるところへ行かうとする努力であつたに違ひない。あゝア、哀はれなる、美しき、小さなものよ、其の轍鮒の苦しみを、爾は何故に、我が夢枕に立つて、我れに告げなかつたのか。

大石はさう思つて、涙ぐましい眼で、チツト八つの美しい死骸を見詰めてゐた。もう活きてゐない金鱗は、うらゝか

な朝日を受けて、一層美しく、紅玉よりも見事に輝いてゐた。

八人の美しい舞姫になつて、夢に枕頭へ立つたのは、彼等赤い魚が自分に救ひを求めたしるしなのであらうかと思ふと、大石は覚えず慄然として、四邊を見廻はした。

『お父さん、早くなさいよ。生き〳〵どんぼを。……』と、子供は側から、父の姿を憐はれむやうに見ながら言つた。

『生き〳〵どんぼ？』と、大石は眼をそばだてゝ男の子を見た。『生き〳〵どんぼ』といふのは、大石の郷里の方で、金魚や鮒なぞが死にかゝつた時、……腹をかへして弱つた時、子供等がよくやる一種の人工呼吸法或は刺戟法、またはお禁厭ともいふべきもので、波々と汲んだ冷水の中へ、弱つた魚を移し、其の尻尾を摘まんで、『生き〳〵どんぼ』と言ひながら、水の中を引き廻はし、振り廻はすのである。さうすると弱つてゐた魚は氣付け藥でも與へられたやうに、一時興奮して元氣を回復することがあるし、うまく行くと其のまゝ生きつゞけることもある。それを大石が時折り、赤い魚に對して試みたことがあるのを、子供は面白く見て、よく覚えてゐたのである。

『駄目だよ、羊ちやん。こんなになちつまつちや。』と、大石は痛ましさうな顔をして言つた。赤い魚を摘まんでみると、跳ね上げた尾が、其のまゝ堅く曲つて、飾り物の鋼のやうになつてゐた。生きてゐる時も冷たい彼等の肉體には、死んで却つて、幾分の温かみが加はつたやうに思はれた。沈默に生きて沈默に死ぬ。さうして、永久の沈默がある。

彼等は貴い。――と大石はつく〴〵思つた。

六

何んと言つても肯かないで、羊ちやんは、バケツに波々水を汲んで、よち〳〵提げて來た。

大石は羊ちやんにせがまれて、よんどころなく、羊ちやんとともに『生き〳〵どんぼ』をやつた。赤い魚の死骸を一つ宛摘まんだ大きな手と小さな手とは、小さいバケツの中で衝突しながら、可なり長いこと、『生き〳〵どんぼ』をやつたけれど、小さい霊魂は、つひに麗はしい肉體に還らなかつた。

『駄目だ。』と、ベソを搔いた羊ちやんの頰べたには、赤い小さな鱗がこびり附いてゐた。

『金魚のお墓を拵へてやりませうか。』と、羊ちやんは、鈴を張つたやうな圓い眼に露を浮べて言つた。

『さうだお墓を拵へてやらう。そつちの垣根の側がいゝよ。』

大石がさう言つた言葉の下に、羊ちやんの手はもう、家庭園藝用の小さなシャベルを握つてゐた。

小さな手で、小さなシャベルが、黒い土を掘り返した。やがて、小さな赤い魚を埋めるには深かすぎる穴が、八つ並んで掘られた。不意の騷動に何事が起つたかと怪しみ惑ふ風で、細長い蚯蚓が一匹這ひ出した。

『お父さん、お經を知らないんですか。』

羊ちやんは、さう言ひながら、赤い魚の死體を一つ〳〵、黒い土に埋めにかゝつた。一番小さなのを先きに、だんだんと大きなのを埋めて、最後に一番大きなのに及んだ、羊ちやんの心理を考へながら、大石は瞬きもしないで、小さな墓掘り男のすることを眺めた。

『如是畜生頓生菩提…………』

八つの小さな土饅頭が並んで、小さな赤い魚が、水の中の沈默から土の中の沈默に移つた時、大石が、變な節を附けて、出たら目にかう唱へると、羊ちやんは土だらけの手をブラリと垂れて、さも〳〵感心したやうに、父の顏を見詰めた。

『石塔がなけれやいけませんね。』と、稍暫らくしてから、羊ちやんは、矢張り父の顔を見上げたまゝで、小まちやくれた風に言つた。

『石塔はさうすぐに立てられないが、墓標を一つ拵へようかなあ。』

さう言つて、大石は、杉板の菓子折りを砕いて、同じ形、同じ大いさの小さな墓標をコツ〳〵と、刃の缺けた出刃庖丁で八つ造つた。さうして、出たらめの戒名を書き附けた。ペンばかり使つてゐる彼れに取つて、毛筆に古梅園で字を書くのは、ほんたうに久し振りの業であつた。

宣言院龍頭蛇尾信士
去來院猛虎竹影信士
相互院自由合意信士
法判院勇奮開發信士
　俗名レエニン
無風院嗚咽感激信士
蝸牛院盤觸兵憐信士
雲鎖院高峯金珠信士
紅顔院長袖善舞信女

ずらりと並んだ墓標の文字は、殆んど一つも尋常三年の羊ちやんに讀めなかつた。

『これなあに。……何が書いてあるの？　金魚の名、こんなにむづかしいの。』と羊ちやんは小さな首を傾けて言つた。

『はゝゝゝゝゝ。』と、大石は笑つて、一つ〳〵墓標の字を讀み上げたが、讀んだとて、半ちやんにはチンプンカンであつた。

そこへ、女がこつてと、厚く、暑くるしく化粧をして、氣に入つた不常着に更へて、緣側に立ち現はれた。

『馬鹿々々しい、何んですね、それは、年甲斐もない。子供と一緒になつて。』と、彼女は太い聲をして嘲つた。

大石は八つ並んだ墓標の字を見詰めて、咄嗟の思ひつきとは言ひながら、まづいなア、もう少しうまく命けられさうなものだと思つた。さうして、半分以上を女性にしたいと考へた。戒名の脇に一々世界に實在の人の俗名が書いてあつたのを、考へなほして七つまで消し、たゞ一つレエニンといふのだけを殘した。但し紅顏院は初めから何んの意味を持つて居らぬ。實在の人物の名でない。

ガラスのやうに透明な、時としては空虚に等しい平和と、眼の光りが透るだけで實際に手を觸れることの出來ない愛と飾り物にしてゐる人たちは、堅くと脆い透明な壺の中に水を失ふて、八つの屍を横たへた赤い沈 の表象のやうなことにならなければ幸いであると、大石はしみ〳〵考へつゝ、底に穴のあいたガラスの壺を取り上げ、大地に打ち付けて、微塵に碎いた。

――二二・六・二二――

戯曲

亡國行

中島清

Welch ungeschliffenes Werk gewidmet zu werden meinem seligen Kind Masako, dem teuersten Opfer für meine Arbeit, dessen Mutter krankliegend noch nichts davon berichtet werden kann und darum hier also auf deutsch geschrieben werden muss! ——Verfasser der Vater.

第一幕（浪人小宮山内膳）

主要人物

小宮山内膳正友信（三十六七歳。）

その弟又七郎（三十歳前後。）

又七郎の妻皐月（二十二三歳。）
右兩人の息子國若（五六歳。）
荒木源八郎（三十八九歳。）北條家の臣。
その他百姓作平、条吉、樵夫吾八、治助（これは内膳と同格の武田の家臣秋山攝津守の被官）逃亡兵、避難民等。

時

天正十年三月三日、夕方前より夜に入る。

所

甲州の或る片田舍、内膳佗住ゐの家附近。

幕のあく少し前より、舞臺では三味、笛などの混つた賑かな歌ひさゞめきが、向つて右奥の方で聞えてゐる。その合間々々には左の方で稍や低い讀經や念佛の聲。讀經と念佛が止むと、程なく幕があく。

舞臺は甲州の或る山地より平野へ出る川沿ひの田舍道。川は舞臺の奥を左より右へ流れ、岸より道までの間には所々に二三株の桃が花咲き、その下は畑の樣になつてゐるが、又野生の灌木が所擇ばず多少斷續してゐる。川の下手の彼岸には大勢の男女が桃見の宴を張つて、陽氣に騷いでゐる。

ずつと左に寄つて直ぐ川に臨んだ所に見すぼらしい藁葺の家があり、殆ど骨ばかりになつた破れ障子、土の剝げ

落ちた壁などが、惨ましく人目を引く。
背景として遥かに巨摩郡の地蔵岳、鳳凰山、駒ケ岳等の連嶺が見渡され、又その右稍や近くに帯那山の餘脈の裾と接して古府（今の甲府市の直ぐ北）の町が仄かに眺められる。

一

（農夫作平（人相の悪い六十を越した老人）同粂吉（四十歳前後）樵夫吾八（二十四五歳の丈夫さうな若者）の三人、左の方より登場。内膳の家に入りさうにして、何かを憚るらしく少し行き過ぎ、立ち乍ら話し合ふ。）

吾八。來るにや來たが、どうも心が少し咎めるだて。何せえ二月前までは俺のお師匠様だつたし、あの奥様の死なれた事を幸ひにして、あのお住えをぬ嘘で企んで取上げるとなつてみれあ、俺にも情けつちふ厄介な心が、まだ些とべえありさうでな。

粂吉。なあに。情けだ慈悲だつてなものなら、今ごろ流行りあしねえだから、薩張り果てるがえゝだけんど、痩せても枯れても向うは武士だ。怒られちやあ此方が怖えだからな。

作平。いくら武士でもあの通り、食はず勝ちぢや怒る力も有んめえし、此方あ嘘せえばれなけりや、怖ながるにも及ばねえだが、巧く追ん出して取上げても、三人で等分たあ俺ちと引合はねえと思ふだ。

粂吉。一旦同心した事を、今更不服とは、又慾の皮が突張つただな。だから割前の外にあの家もお前が取つてえゝ事に話をきめて來たでねえか。

作平。何だと？　あの家だと？　あれが家かね？　乞食小屋でもまだ立派なのが幾らもあるだ。あんなあばら屋は塊い

て來てなきやなんねえだけ、手數が要かつて却つて損だあ。

粂吉。ぢやあ俺が取らあ。壞して焚きあ薪の代りにやなるだからな。

作平。八段の地所なら俺が三段五畝を貰はうかい。すりやあの家なんざ貴公に遣らあ。そしてあと四段五畝を二人で分けろい。

吾八。いや、俺あ仲間を御免だ。お前達二人でやるがえゝだ。別な惡事なら俺もやるだが、あの內膳樣が今以上に苦しましやる樣に、俺が加入つてやるわけにや行かねえ。

粂吉。おい等の企らみを知つた貴公が、さう云つて脫けるんぢやあ、おい等どうすれあ可えと思ふだ。

作平。それに吾八公の腕力も場合によつちやあ借りなきやなんねえ事だしなあ。……吾八公だつて田畑の一二段も所有となれあ、嬉しうねえたあ云はせねえぞ。

吾八。そりや嬉しいさ。だけんど、だけんど……おら新府城の普請にでも人足となつて行く事にすらあ。そして當りめえな仕事で儲けた金で以て田なり畑なり買ふ外ねえだ。お前達の企らみは知らねえ振りをしてゐてやらあ。

粂吉。怪しいもんだて。また新府城普請の人足になつて、汗にまみれて働えたつて、何のうめえ事があるもんけ。あの普請でも懐ろ手して儲けてゐるなあ、普請取締りの秋山攝津樣だの、普請を請負つてる被官の治助さんだのに限つてゐらあ。平の人足が眞面目に働えて儲けるなんて、上も下も泥棒の世の中とは知らねえのか、阿呆らしい考も大概にしろよ。

作平。（酒宴の場を見やり、忌々しげに。）吝んぼの治助が、內膳樣へ、振られた娘の面當にもしろ、彼樣に贅澤な酒盛りなんぞやらかしてやがる所を見ても、うめえ汁を吸つてる具合が分らあな。ちえツ、羨しいわい。

粂吉。うめえ汁ぐれえの話ぢやねえぜ、身でも骨でもしやぶつてゐるだ。お城の前の道に敷く砂利でも、石垣の石でも、何でもムれで噛つてゐるさ。そしてお城の出來上りはいつの事だか、まだまだ目途も立たねえツちふ爲態だ。

吾八。そりや何だろ、月日が長く要るだけ、それだけ要害堅固な名城が今に出來上らうて譯ぢやねえだか。

粂吉。(鼻で笑ひ。)要害堅固が聞いて呆れらあ。貴公なんぞ譯を知んねえだから、其様なこと云ふだが、なるだけあの普請が長びく様にツちふて、織田徳川の方から甲州方の大將達に、そツと金を握らしてるツちふ事だ。あの跡部大炊様さな、あのお方なんさ大した金を貰つてムるツちふ事だぜ。

吾八。(稍や性急に)。だけんど、そんぢやあ、そんぢやあ國の爲めになんねえでねえか、國の爲めにさ。おらも些たあ悪い事もするだが、國の爲めになんねえ事はまだ一度もした覺えねえだ。

作平。(笑ふ)。ハハハ。國の爲めだの世の爲めだのツて、今時其様な譫言を眞面目に云ふ奴があるもんけ、ハハハハハ。貴公は其様な量見だから、内膳様を追ん出すにも、濟まねえなんぞと云ふ氣を起すだ。よう聞くがえゝ、なあ吾八、あの長坂釣閑様にしろ、穴山信君様にしろ、徳川の方からうんと貰つてムるツちふだぞ。えゝか、分つたかね。

吾八。(少し恥ぢるらしく、口ごもる)。だけんど、お前、だけんど……。

粂吉。何がだけんどでえ? そら、いつかの越後征伐の話は貴公忘れたけ? (特に噛んで含める様に云ひ聞かせる)總元締めの勝頼公からして、どツさり賄賂の金銀をお取りなすツたでねえけ。そら、あの御舍弟分の景虎様を救ける爲めに越後征伐にお出かけになつただろ、そしてどんどんお勝ちになつただろ、ところが何うでえ、越後の方から黄金大枚一萬両、それから越後布三千反、これだけ差上げますだから、どうぞ和睦を、と來やがつた。これにや幾ら勝頼公でも、目が昏むのに無理もねえて。

作平。(同じく吾八に云ひ聞かせる態度)。また長坂様や跡部様も、別に二千兩づゝ掴んでムるだ、こりや云ふ迄もねえツて事さ。

粂吉。で、もう和睦どころけ、勝賴公のお妹様が早速越後へお輿入れと、斯う打つて變つた運び方さ。可哀さうに景虎様は、越後勢に攻め立てられて、痛いお腹を召したでねえけ。現在勝賴公の奥方様の血を分けたお兄上様ぢやろ、景虎様はさ、なあ。それをさうして見殺しになすツた勝賴公だ、景虎様のお兄上の氏政様が烈火の様に御立腹なさるに無理があるけ? 昨日まで仲よしの北條家も、もうはや彼方ぢや、死んでも忘れねえツちふ仇の國になツたて事よ。どうでえ、吾八公、え、おい、これが國の爲めけ? 國の爲めに勝賴公がなすツた事け?

作平。新規に越後が味方になツたと云ふか知んねえが、遠く離れた越後なんぞが何になるだ?

粂吉。それよか相模の北條様を敵に廻して、いつ攻め入られるかも知んねえのに、それでも國の爲めなんけ? ハハハハ。總元締めの勝賴公が、ちやあんと斯うしてお手本は疾ツくに見せて下すツてら。國の爲めだの世の爲めだの、まツた慈悲の情けのと云ツてる奴あ、大馬鹿者の骨頂でムいだ。ハハハハ。

吾八。(口惜しさうに)。だけんど、だけんど……。

作平。もう負惜みは止しねえツたら。それよか貴公も田畑の一二段でも割前に取つてみろ、直き女房でも貰へるでねえか。可哀さうに、まだ女の味も知んねえだろ。

粂吉。(酒宴の場を顎で指し示し)あれ見ろい。彼樣な面白え娯みも、馬鹿正直な貧乏者にや一生廻ツて來やしねえだぞ。

吾八。(決然と)。うん、さうだ、分つただ。俺も新府城の普請なんぞに行きやしねえや。矢ツぺえ内膳様の家敷を騙り取る事に賛成だ。ぢやあ早速やツつけやうや。(短い間。作平に)だけんど内膳様の方が、もし騙されなけりや何うなるだ?

粂吉。(作平に)。その嘘のつき方を、もツと詳しく俺にも聞かして置いて呉んろ、三人の云ひ方が區々にでもなりや、直
き　けの皮が剝げるでねえか。
作平。フン、成るほど、臆病は禁物だが用心は入用か。ちやあ策略を投げてやら、(右の方を顎で指示し)少し彼方の方
がえゝ、篤と聞いてよう會得んでゐて呉んろ。
(三人右の方へ退場)。

二

(舞臺少し廻つて、左手のあばら家が殆ど正面に來る。遠景の連山の位置は殆ど少しも變らない。古府の町も矢張り右の方に眺められる。家は壁土も大分剝げ落ち、柱も隨分傾いてゐる。屋內は上座と覺ゆる所に二枚折の薄汚い屛風が彼方向きに逆に立ててあり、その彼方より二筋三筋、靜かに細く線香の煙が立昇つてゐる。其他に家具と云つては若干の本箱と二つの錢櫃、それから長押に二三本の槍や薙刀がかけてあるばかり。骨のみの樣な障子の外側には、朽ちかゝつた狹い椽が、右側だけに附いてゐる。酒宴の場は次第に終りに近づき、程なく三々伍々と引上げて行く。)

內膳。(椽に背を向け、柱に心もち靠れながら坐り、腕を拱いて哀傷の態。時々深い溜息を洩らす。着物はひどい襤褸。體格も風采も元來は立派な堂々たる男らしいが、瘦せ衰へて、顏にも血色が全く無い。)

又七郎 (ずッと前方に坐り、時々顏を上げて何やら話しかけやうとするが、又自分でもそれを抑へ、靜かな敬虔な心持を續けやうと努める。兄ほどには瘦せてゐないが、顏色は同じく惡い。着物も同じく襤褸。)

國若。（父又七郎の傍に行儀よく坐り、時々兩親や伯父の顔を見てゐたが。）お母様、私はお腹が空いた。（父より叱とした顔で默ッて見られ、又ちツとおとなしくなる。）

皐月。（痩せてゐる事、着物の粗末な事、良人や義兄とほゞ同様。少しく下の座に坐り。時々顔を拭く。）幾度も云ふ様でムりますけれど、どうしても本當とは思はれません、あんな優しい嫂上がお亡くなりになる譯はありません。夢とし か思はれません、今に覺めさうな氣ばかり致しますの。それだのに、何故まだ覺めないのでムりませう。あゝ私の看病が少しも行き届きませなんだ爲め……。（急に又何やら思ひ出して悲しさに堪へかねるらしく、顔を被うて靜かに立ち奥へ入る。）

内膳。其様なこと云はれると、拙者が苦しい。たうとう醫者にもかけないで死なせるなぞとは、何といふ事だ。（短い間）拙者の様な不運な者の所に、何の因果で彼女は嫁入つて來たのかなあ。

又七郎。（慰める）人間の離合が此世の一寸した運不運でばかりきまるものでもありますまい。如何に當世が輕佻浮薄で、正しい者ほど愈よ窮する習ひであるとは云へ、現世以上の强い深い結合を全く否定する事が、誰にどうして出來ませう。

國若。（泣き出し度いらしい顔を上げて又七郎を見。）お父様、私はお腹が空いた。

内膳。（爽かな顔つきを裝ひ、國若に。）いま少し待つてお居で、もう直ぐ食べるからな。どうだ、少し外に出て遊んで來ないか、好い子だから。

國若。はい、それでは遊んで參ります。（ちよこちよこと小走りに奥へ行き、母親に向つて）お母様、私は遊んで來ますから、歸つたら直ぐ御飯を食べられる様にして置いて下さいな、ね、ね。

皐月の聲（奥より）。あいよ、ではおとなしく遊んでおいで。川岸なんぞへ行つてはいけませんよ。

[illegible]者。はい。（と表に出て、左の方へ小股に可愛く走つて行く。）

又七郎。（前の慰めの言葉を續ける。）醫者を呼べなかつた事は、拙者とても今に殘念でムりますが、それ程の大病であらうとは、嫂上御自身さへ思つてゐられませなんだし……。

内[illegible]。さうだなあ、飢ゑや餓ゑは病氣の部類には入るまいて。醫者を呼ぶ金があッたら、それだけ食物さへ取らして置けば、なんの彼女とてもまだまだ死にはしなかッたらうよ。（短い間）だが過ぎた事だ。そして此の次ぎは拙者が順番さ。

又七郎（聞き咎める）それは兄上、あまりに意氣地ないお言葉ではムりませんか。（次第に憤激して來る。）兄上が斯様に零落なさるなんぞと、我々が斯樣に落ちぶれるなんぞと、そして世間の虫けら共が時を得顏に、醜と惡との限りを盡して榮えて行くなんぞと、滑稽と云はうか、何と云はうか、いやはや、まるで話になりません。（憤激の極、言葉も出ず、たゞ口の邊りを少し顫はせる。）

内[illegible]。醜でも惡でも、榮える者には力があり、滅びる者には衰弱あるのみさ。强がりでなく、打明けて云へば、もう拙者には實際かうして坐つてゐるだけさへ懶く、此の襤褸さへが鎧でも着てゐる位に重いのだ。

又七郎。（悲憤の情を押し隱してゐる態。默。）

内[illegible]。妻の看護に來て呉れた其方たち夫婦の厚い志を、拙者は決して決して忘れはしないぞ。だがな、もう今日で初七日の法事も濟んだ以上、歸つて呉れる方がよい。此の貧乏のどん底生活を、今後も相伴して呉れるのでは、拙者は愈よ申譯がない。

又七郎（輕蔑する樣に兄の顏を見つめ。）何ですと？　えらく水臭いことを仰しやるではありませんか。

内膳。何が水臭いものか。我々夫婦の命は、その半分が缺けたので、今では渚のうつせ貝さ。其方だち夫婦はさうでなく、そして國若といふ立派な芽をさへ出してるでないか。その國若にまで飢じい目を見せる拙者の心苦しさを、其方はたゞ、伯父甥の間の義理からとでも思つてゐるのか。（間）六年前に松枝の城中でお亡れになつた母上の最後のお言葉を、そなたもまさか忘れてはゐまいね？

又七郎。（追懷して涙ぐみ。）「國若は？」つてお尋ねになりましたなあ。

内膳。生れたら命けるとおきめになつてゐた孫の名を、まだ生れもしないのになあ。いや、二人ともまだ女房も持たずにゐたのになあ。（間）おい、又七郎、血統の斷絕を怖れる親心を、甘い卑しいものの樣に思ふのは、以ての外の心得違ひだぞ。そしてね、臨終の時に子を思ふ親の愛ぐらゐ、此世に強い尊いものがあるであらうか。それだのに我々は、親の心に逆らつてばかり居たつけなあ。

又七郎。それは拙者もしみじみ感じます。國若に注がれる兄上や拙者等の愛も、つまりお亡れになつた御兩親の愛に相違ありません。

内膳。愛といふものが幸か不幸か今の世では、同一時代に橫に廣がらうとする持前を著しく挫かれてゐる爲めに、勢ひ過去より未來へ亘る縱の存續性を矢鱈に強くされてゐるのだ。これは孰らが良いにしろ惡いにしろ、急には何うにもならない事さ。（短い間）まあそれはそれとしてもだ、生ひ立ち盛りの國若に、此の伯父が、飢じい思ひをさせてよいのか。あゝ濟まない。

又七郎。勿體ない、そ、そんなにまで……。（感謝の餘り、言葉なく涙ぐむ。）

三

(粂吉、作平、吾八の三人、右の方より登場。軒さきで一寸先きを譲り合ふ様な風をするが、直ぐ引續いて入る。)

粂吉。(幾らかおづおづと案内を乞ふ。)御免下せえ、お賴み申しやす。

又七郎。(取次ぎに出る。)粂吉とやらに、次は作平とかいふ名だつたな。何用かね。その若いのは?

作平。(吾八に代り答へる。)へえ、先に内膳様に本を敎はつてゐやした吾八といふ樵夫でムえやすだ、へえ。

粂吉。で、三人で些と内膳様にお話致し度え事がムりやすで、へえ、ちよつくらお目にかゝり度えと思ひやすだが。

内膳。(吾八といふ名を聞き、坐つた儘で稍や懷しさうに呼びかける。)おう、吾八か。暫く振りだな。此方へ上れ、三人とも此方へ通つて呉れ、どんな用か知らないが、まあ上つて呉れ。

(三人は上つて座につく。吾八は少々極りわるさうである。)

作平。えゝと、その、今度は奥様はたうとうお宜しくなかつたさうで、へえ、どうもお氣の毒に存じやすだ、へえ。

粂吉。まだ若えお年でなあ、ほんまに惜い事でムえやしただ。さぞお力落しでムえやせうなあ、お察し申しやすだ。

内膳。其方たちもさう云つて呉れるのか、有難う。

作平。(吾八に。)吾八、お前もお弔みゝ申上げねえかよ。

吾八。(機械的に。)お弔み申上げやす。

内膳。有難う。

作平。ほんまに手前どもは内膳様の御不運をお察し申して居りやすだ、お氣の毒に思つて居りやすだ。今度の事に限ら

す、なあ。そして手前どもが今日斯うして參りやしたのは、實は又々お氣の毒な事がありやしてな。へえ……。

粂吉。かういふ御不運のなかに又かういふ事をお耳に入れやすのは、手前どもゝ實はつれえでムえやすだけんど……、だけんど、筋道は筋道通りにしなきやなりやしねえでなあ……。（作平に稍や小聲で）お前云ひ出せよ。

作平。實は、その、何でムえやす、もう四年にもなりやすなあ、内膳樣があの治助の長娘をお嫁にお貰えなさらねえてんで、秋山攝津樣と小山田將監樣とから訴へられなすつたのは、なあ。そして、たうとう浪人にお成んなすつただなあ。ほんまにお氣の毒でムえやしただ。ところであの時屋形樣は、たゞ内膳樣を浪人になすつただけではお氣がお晴れにならなんだと見えて、只今の此の御家とお屋敷もお取上げになりやしたつちふ事でやすな、そして將監樣と攝津樣とにお下しなすつたつちふ事でやすな。

内膳。（冷かに微笑し。）そんな事があるものか。

作平。（稍やあせり。）いや、これはお忘れなさる事でもムえやすめえがな。それとも攝津樣と將監樣とだけに御沙汰がありやしたのか知らん。兎も角も手前どもはお二人樣の爲めに、今まで何かにつけて働えた事がありやすだが、それで去年の暮に此のお屋敷を御二人樣から戴いたツちふ譯でムえやすだ、へえ。

内膳。さういふたわいない作り話を聞く耳は拙者に無いて。（坦懐に）それよりも吾八、須川氏とやらの塾では、今何を敎はつてゐるかね？

吾八。（極り惡さを強いて抑へ。）へえ。それは、その、孟子の素讀を始めやした所で、へえ……。（勇を鼓し）だけんど、作平の今申上げやした事を作り話とは、ひでえお言葉でムえやすだ、へえ。

粂吉。いや手前どもは何も分らねえ田舍者でムえやすだで、別に證文も何も貰はねえでやしただけんど、其樣にお疑え

なせえやす樣だら、(作平を顧み)一札貰つときやよかつたなあ。

作平。いんや、お心の立派な內膳樣達に、其樣に證文を突きつける樣な事をするのは、無禮至極だて。俺等も其樣な面倒な事にや慣れてゐねえだからな。

內膳。(半ば獨語。)其樣な淺はかな策畧に誰が乘るのだ、ハハ。憐れな者ども。(そしてもはや彼等を相手にしない。)

粂吉。(性急に。)ぢやあ內膳樣は手前どもが云ふのを嘘だと仰しやいやすだな。そりや餘りで厶えやすだ。手前どもは村でも正直者で通つて來てやすで、まだ嘘なんぞついた覺えは厶えやせんだ。

作平。實は早く御相談しやせうかと思つてやしただが、何せえ奧樣が病つてゐなさりやしたで、今までは御遠慮して延ばしてゐやした樣なわけで、へえ。

(此の時表の通りを右から左へ、文箱樣のものを持つた仲間らしい使の者、何やら少し不安さうに急ぎ過ぎ行く。)

粂吉。內膳樣がたをお氣毒に思ふ手前どもの心に替りあありましねえだが、手前どもも年中貧苦に泣いて居りやすで、此のお屋敷でも戴けれあ、田や畑にでもして、どうやら女房や餓鬼なども育てて行けさうに思ひやすだ、へえ。

晉八。どうか手前達三人にお渡し下せえやし。

作平。折角戴きやしたのを、いつ迄も此儘にして置きやしては、攝津樣や將監樣にも相濟まねえ譯で厶えやすだから。なあ、御舍弟樣、あんた樣からもどうぞ好う仰しやつて下せえやし。

又七郞。(彼等に對する輕蔑を辛うじて抑へつつ。)嫌ひな女を娶ならないので訴へられるも珍妙だが、それは兄の場合事實であつたから仕方がない。又その揚句浪人となつたのも事實だ。併し兄の親讓りの家屋敷を、如何に勝利公なればとて、無斷でお取上げになる譯は決して無い。又それを假に秋山氏等が戴いたとしても、さういふ戴きものなら其方達にあ

の人達が喰れる道理は尚さら無いて。(皮肉に微笑しつゝ)但し其方達ぁ勝頼公の寵臣とでも成り上つたかね。

作平。(どぎまぎしながら。)だげんど、だけんど、手前共が貰つたに相違ムえやせん。其様にお侍が百姓風情の者をいぢめなすつちやいけましねえだ。

粂吉。(まさか斯うたあ思はなかつただが、ああ證文を貰つときや好かつただなあ。

又七郎。愚圖々々云はずに早く引退るがよからう。あまり無禮を募らすと後悔しやうぞ。

作平。取る筈のものを取らうちふのが何で無禮でやすだ。お侍だちふて餘り威張るもんぢやありましねえだ。

粂吉。(半ば吾八に。)よし、其様な御量見なら、俺等にぁ覺悟があるだ、なあ吾八、貴公から須川様と將監様に云つて喰れ、俺は攝津様と治助さんに相談するだ。誰だつて俺等に味方するにきまツてるだからな。

吾八。(矢張り多少極り惡さうにどぎまぎと。)うん、そりやさうだ。もう斯うなりや仕方ねえだ。

(以下三人は何とか直接に内膳等の氣を挫いてやり度い様子であるが、内膳の平靜な、又七郎の昂然とした態度に、漫ろ怖れを覺えるらしく、くやしがりつゝも自分達の間の會話にしてしまふ。)

粂吉。(作平に。)おいらぁ學問が無えだから、議論は出來ねえだけんど、貰つたものを取るのが惡いて理窟はあんめえでねえか、なあ。

作平。なあに、自己流の學問しか無え様な人は、矢鱈に理窟を並べ度がるもんだて。あの須川様みてえに、幾らも免狀だの肩書だの持つてムる本當の學者は、滅多に議論なんぞしやしねえだ。

吾八。うん、そりやさうだ。おら達もな、須川様の立派な免狀てのをどつさり見せて貰つただ。大え印形捺してあつただからな、偉えもんさ。

粂吉。ちやあ行かうや。議論なんぞするよりも、村の若え強え男達にさう云はうでねえか、そして事の鬼をつけやうや。
作平。(内膳等に。)ちやあ、お邪魔致しやした。
粂吉。(同。)大きにお邪魔致しやしただ。
吾八。(同。)せえなら。
(三人は口惜しがりつゝも捨ぜりふの様にさう云つて立上り、家を出る。此時、國若左の方より歸り來る。)
作平。(行き違ひさま國若を憎々しげに見て。)えい、この餓鬼め。
粂吉。(同。)此奴でも撲つてやれ(と云ひさま國若の頰を平手で一つ打つ。)
國若。(よろけて倒れる、泣く。直ぐ泣きやむが、さも無念さうにして内へ入る。)
作平。粂吉。吾八。(皆急ぎ左へ退場。)
内膳。(がばと跳ね起き走り出で、國若を掻き抱き、逃げ行く三人を一目睨むが、直ぐ又自分を制し、國若をいたはる。)
おい、國若、どうした、どうした。虫にでも螫されたか、うむ、よし、よし。
又七郎。(同時に走り出で、一時赫となつて三人を追はうとするが、やがて自ら氣を鎭め、國若を受取り奥へ連れ行く。)

四

内膳。(内膳座に戻り、其處に少しの間立つたまゝ、隅の方へ向つて腕を拱いてゐる。兩肩が顫へてゐる。)
又七郎。(奥より出來りもとの座に着くが、まだ昂奮を抑へきれずにゐる。)
内膳。(以前の通りに向き直つて坐り、)又七郎、拙者は濟まない……なほ此以上も此處にゐれば、そなた達にまでどの様

な災難をかけやうも知れぬ。もう早く歸つて呉れるがよい。

又七郎。（稍や長い默。それから靜かに立つて奥へ行き、大小四五振の刀劍を持つて戻り來り、その目釘をあらためたり、紐を結び直したりしながら、半ば獨語。）一旦は出家までした拙者が、又斯樣な物を手にする身の上となつたのも……。

内膳。（又七郎が續けて云ひさうな言葉の方向を豫め轉ずる樣な心持で。）もし松山の義兄上が今にお見えにでもなつたら、もう刀もそれだけしか殘つてゐないかと仰しやつて、お氣色が惡くなるかも知れないよ。

又七郎。もう大丈夫お見えになりますまい。法事中にお見えにならないで、本當に幸ひでした。（稍や改まつた屹とした態度で、少し膝を進めて）で、兄上、もうこれで嫂上の初七日も終りましたから、愈よ先達てから申上げて置きました事を、どうぞ何れかにお決め下さい。陸奥の伊達家に仕へる事にして下さるか、でなければ今一つの事をお許し下さい。

内膳。（羨ましさうに。）原田とかいふ伊達家の老臣は、嘸ぞ頼もしい人物であらうなあ。

又七郎。當國でなら、先頃死なれた高坂彈正殿か、馬場美濃殿といふ所でせう。そして拙者は丁度兄上が御勘氣をお受けなされた四年前に、初めて安中の宿屋で會つて、拙者から話もしないのに、向うから兄上の事まで尋ねたなども、何かの因縁と思はれます。足助城攻めの時の兄上の武功なども、ちやんと向うで知つてゐまして、決して拙者に口先きの愛想を云ふのでなく、心から感服してゐる模樣でした。ですから、これより我々が頼つて行けば、屹度よく世話して呉れるに相違ありません。これは拙者、命にかけて請合ひます。

内膳。馬場殿は長篠であゝいふ立派な落ちついた討死をなされたが、あれも矢張り高坂殿の樣に、先祖からの此國の將來を思うて憤死されたのさ、悶死されたのさ。併しあゝいふ憤慨や悶々の心の底には、矢張り切ない願ひが潛つてゐるのだ。死んでも瞑目は出來ずにゐられるのだ、高坂殿も馬場殿もね。ところで我々は、さういふ切ない願ひを承け

繼いで其の幾分でも成就させるどころか、反對にそれを打棄てて此國を出るといふわけかね？

又七郎。では兄上は、矢張り又高坂殿や馬場殿の樣に、憤死なさるお積りですか、悶死なさる御所存ですか。その他には何一つ方法は無いのでせうか。高坂殿や馬場殿の切ない願ひも、つまりは國内に善い政治が行はれて、上下一同が本當に幸福になる樣にといふ事でせう。それが此國では當分は駄目です。しかし、未來永劫にわたつて駄目ときまつては居りません。ところで其の駄目な當分の中に我々は斯うして餓ゑ死して、今に希望の光が見えやうといふ段になつた時、そこにこそ揮ふべき存分の力を、揮へないならば、そして折角の希望の芽をも其爲めに空しく枯死させてしまふ樣ならば、それこそ永劫盡きない憾みではありませんか。我々は伊達家に仕へましても、子や孫の代になつてからでも我々の願ひは達せられます。伊達家は今の主君輝宗公も、世嗣の政宗公も、たゞ無茶に我利我慾のみで戰爭をする樣な人物ではないと云ひます。そして俠氣も情けもある人物と拙者も觀てゐます。ですから、兄上、どうぞ拙者の此の言葉をお容れ下さい。

内膳。フン。あの楠公兄弟は、七度生れ替ツて梟賊を亡ぼさうとか云はれたさうだね。しかし拙者は凡夫だ。外敵よりも國内に時めいてゐる佞人揃ひの上下一同に對する憎惡が、憤怒が、此の心に煮えくり返ツてゐるのでね、子や孫の代になツて此國の爲めに盡さうなんぞと、そんな悠長な心で國を出る事は到底出來はしない。（次第に熱を帶び、叱咤する樣に云ふ）拙者が此國を出るとすれば、此國を滅ぼす爲めさ。こんな腐ツた國が、抑も何處に存在の理由があるのだ。

又七郎。此國の將來を思ツて瞑目する事も出來ずにゐる先祖達の靈を、打棄てては置けないと、今さき兄上御自身が仰しやつたではありませんか。ですから兄上のその憎惡も、つまり切ない愛から來てゐるに相違ありません。

内膳。フン、當世の學者どもが云ひさうな口吻を洩らすぢやないか。理窟ではさうかも知れんて、だがな、又七郎、端的の此の拙者の胸を。そんな言葉の先きで操らうといふのか。

又七郎。では其の憎惡からでもよろしうムいます、此國を滅ぼさう爲めに此國をお出になつてもよろしうムいます。斯ういふ悲慘な、言語道斷な生活をなさつて、無駄に自分を滅ぼしておしまひなさつて、それが何になります。此國をお出になつた上では、屹度その憎惡は變ります。

内膳。フン、此の憎惡を遂げる爲めになら、(と一語一語に力を籠め)此の命も惜しうはないぞ。

又七郎。(半ば呆氣に取られ、半ば傷心の態で獨語。)國を治め民を育てる爲めには、命はいつも投出してゐなければならないと、あれほど云つて居られた兄上が、憎惡の爲めに命も捨てると抑しやるなんぞと……。(と悲痛に耐へかねる態。)

内膳。(稍や輕快さうに。)ぢやあ國を出やうや、そして伊達家に仕へやうや。(少し笑ふ)なあ。そして……

又七郎。(訝りながらも嬉しさうに。)では愈よ御決心が出來ましたか、何より嬉しうムいます。早速發ちませう。

内膳。(弟には頓着なく云ひ續ける。)……そして先方に着いたら直ぐ又引返して、今度は甲州征伐の先鋒となつて來るのだぞ。愉快だなあ。跡部長坂の幇間どもばかりぢやない、地位や門閥で威張り返つてゐる穴山梅雪だの逍遥軒だの、見てくれ學問、見てくれ慷慨の小山田出羽だの麟岳だの、其他上下一同の穀潰しどもが、狼狽てふためいて逃げまどふ様子を、想像するだけでも溜飮が下りさうだ、では行かうや。政宗公や原田殿に、よく其方から話して呉れ。

又七郎。(面喰ツて。)……御冗談はよして下さい。

内膳。何？冗談だと？

又七郎。 そんな事は出來ません。 そんなに直ぐ此の甲斐の國を征伐に來るなんぞと、そんな事が出來ますものか。

内藏。(冷かに笑ふ。)ずゐぶん遠く離れてゐる上に、今まで此國と何の和戰關係も無いからね。又は伊達公といふ他の人の意志を、直ぐ我々の爲めに全部用ひさせるわけには行かないからね。如何にも、如何にも。だが、織田や德川となら、それも出來やうといふわけか。フン、織田德川に降參しろか。

又七郎。(多少兄の心を測りかね、たゞ何となく壓倒された樣な心持で默。間。)

内藏。 伊達家にも降參か。何、降參でない? 戰爭以外で他家へ仕へるのは降參でない? 勝頼公が伊達家に仕へるのなら降參だが、我々が仕へるのは降參でない? 勝頼公は君主で、我々はその臣下だからと? フン、そんなら寧そ正直に、勝頼公は人間で、我々は人間以下だとでも云つてはどうだ。

又七郎。(同前。間。)

内藏。 フン、人間以下に甘んじて、此世に生れた甲斐があると云ふのか? 吝臭い些ぽけな君臣關係? 主從關係? そんな、現世だけの便宜上の關係を、いやさ政治上の方便に過ぎない關係を、その根本に横はつてゐる友誼關係より重いといふのか? その情誼が、その心情が缺乏したればこそ、墮落したればこそ、今の此國の此の悲慘な運命が來たではないか。その心情を我々から賣つて、めでたく伊達家へ御奉公か。(愈よ人を壓する樣な間。それから調子を少し更へ)それともだ、もし伊達公に果して俠氣があるのなら……(自分を叱る樣に)いやいや、馬鹿なッ。

又七郎。 伊達公に俠氣があるならと仰しやると? あれば何うなさらうといふのです?

内藏。(諭す樣に。)をとこ氣なんぞと云ふけれどね、大抵の場合は一種の虛榮ぢやないか。虛榮でなく、どうしても止むに止まれぬ俠氣なんぞと云ふものは、千に一つもあるものぢやないよ。虛榮でも何でも、それを此方で利用しない

のは損だといふのか。フン、どちらが何を利用するのだか、する事が出來るのだが、知れたものぢやない。(笑ふ)ハハハハ、滑稽なものだて。

又七郎。(兄の言葉を充分はのみ込みかね、深い溜息をつき、暫く無言。それから屹と顏を上げ。)では兄上、やむを得ません、跡部長坂等の醜類どもを退治る事に御賛成下さい。もし御賛成下さらなければ、拙者一人でもやれる所までやります。その爲めに命を捨てるのは仕方ありません。斯樣にして日一日と、ちりぢり飢え死して行くのに、一體何の意義があります？ 不平も憎惡も、その向ふ所へ向けて勃發さしてこそ、どうにかならうではありませんか。

内膳。で、先づ其方は新府城の油虫どもから片付けて行かうといふのだね？

又七郎。これが焦眉の急だと思ひます。今度の新府城普請の遲延は。今迄の樣にただ油虫どもが勘定を誤魔化すとか、賄賂を取るとか、してゐるだけが原因でなく、敵の織田や德川に内通してゐる毒虫どもがあるからでは厶いませんか。拙者が彼奴等を三人か五人、巧く行つて十人なり二十人なり斬り捨てても、此國の上下一同が直ぐ目を覺ます事にもなりますまい。併し兎も角、それだけの効能は屹度あるにきまつてゐます。

内膳。信玄公の時代には、今の油虫だの毒虫だのも、まあまあ並の人間であつたがなあ。それが、陽氣の加減とでもいふものか、斯うしてうようよと虫になつて湧いて來たのは、可哀さうでもない事はないて。

又七郎。(性急に。)それは勝頼公が暗愚だからには定つてゐます。然し急に勝頼公の心を入れ替へて上げる事は出來ないではありませんか。(苛立つて、疊みかけ)そんな事を仰しやつて。此の昨今の時勢を、我々は傍觀してゐられますか。そして我々も斯うして自滅を待つてゐられますか。

内膳。で、やるなら拙者の役目であらう。それを其方がやると云ふのか。國若の大切な生ひ立ちを誰が見るのだ。國若

には愈よ本物の飢え死をさせる積りか。皐月さんも何うなるのだ。(間。)だがね、拙者はやらないぞ。油虫や毒虫どもをさへ退治ればそれでよいのなら、疾つくに拙者がやつてゐるさ。フン、虫けらどもを拙者の相手？　馬鹿にするな。——少し頭の中が熱くなつて來た。些と風にでも當つて來やうて。(と障子をあけて椽より下りたち、ぶらぶらと川の邊りへ歩いて行く。ともすれば足もと危く、物に躓かうとする。)

又七郎。(刀劍をそれぞれに始末し、奥に納つた上で、又もとの處に戻つて來るが、腕を拱いて立ちながら沈思の態。時々深い溜息を洩らす。)

内膳。(ぶらぶらと歩いたり立止つたりしながら、その邊の景色やら、遠い彼方や此方やらを眺め廻しなどする。時々一人で笑ふ。椽の方へ近く戻ツて來た時、少し聲にさへ出して又笑ふ。)

又七郎。(その笑聲を聞いて少し訝りながら、つかつかと椽に進み出て。)何かをかしい事でもあるのですか？　近頃にない兄上の爽かな笑ひ聲を聞く樣ですが？

内膳。(一層蒼白くなつた樣な痩せた頰に、妙な微笑を湛へながら。)いや、つい可笑しくなツた。もう愈よ駄目だね、愈よ甲斐の武田は滅亡だよ。斯うしてたゞ漫然と拙者は邊りを眺め廻してゐると、何故といふわけもなく、そんな氣持がして仕方がないのだ、これは神の告げかも知れないて。

又七郎。(兄の心を測りかね、默。間。)

内膳。　面白いものではないか、ね、又七郎、此の今の甲斐の武田は、上下一同擧ツて此の内膳を滅ぼさうとしてゐるだらう、現に斯うして滅ぼしつゝあるだらう。そして、内膳を滅ぼす事で以て自分は榮え行きつゝある積りだらう。ね、それがどうだ、内膳を滅ぼす事が取りも直さず甲斐の武田自身を滅ぼす事で、それで斯うして愈よ滅びて行くのだか

らね。どうも實に何とも云へない滑稽だよ。悲痛だの何だのと云ふよりも、たゞ無茶苦茶に滑稽だよ。ハハハハハ、…

…ハハハハハハ……（そして内に入る際に、又よろよろと倒れさうにするが、辛うじて自ら支へ、もとの座につく。）

又七郎。（又七郎兄の心持をのみこみかね、呆氣に取られてゐる。兄が倒れさうにする時、支へてやらうとして、却つて又躓かうとする。座につく。）

五

案内を乞ふ聲。（家の入口の方で。）頼む。

内膳。松山の義兄上ではないだらうか。

又七郎。（出迎へる。）

松山景康。（入り來る。兄弟は彼を上座に請ずる。彼は兄弟の痩せ衰へてゐる姿恰好を見て、今更の様な悲痛を覺えるらしいが、さりげない風を裝ひ、たゞ溜息を洩らす。そして、まだ座につかないうちから。）今日は妹の初七日だのに、案内も寄越さない所をみると、法事もして與れないのかと思ツてな、少々不愉快でもあツたのだが、別に些と大切な用事もあツたし……やつて來たのさ。そして途中でお寺に寄ツてみると、墓に花なぞ供へてあツて、掃除もしてあるし、香も上げた様子だし、ぢやあたゞ此の景康だけを抜きにしたのかと思ツた次第さ。

内膳。（少し頭を下げ。）どうも恐うムいました。坊さんを呼ぶ金が無いやら何やらで、つい義兄上にも默ツておきまして。

景康。そんな事ではないかとも思ツたさ。それでも可なり水臭いな。經は幸ひ、（と又七郎を見て）そなたでも讀んで與れればよかつツたではないか。一度は佛門に入ツたそなただもの、袈裟など無うても、眞心の回向が何よりさ。併し

斯様な事かも知れんと思ッたでな、儂い貧乏はまだ是程ではないのだし、握飯を二三十作らして來たよ、精米も三桝ばつか持ツて來た。それに着物も儂の着古しを二枚、一緒に入れて置いた。

内膳。度々どうも相濟みません。經はお言葉通り、又七郎が昔の復習をやりました。

又七郎。（景康が持ツて來た包みを奥へ運び、皐月と二人で其の一部を屏風の彼方の佛壇に供へる。）

皐月。（出て來て景康に挨拶し、自分の服裝を恥づるらしい様子で、直ぐ又急ぎ奥に入る。）

景康。ぢやあ儂もお線香を上げるとしやう。（内膳等に）お前達は握飯でも食べてくれ、腹を拵へて篤と聞いて貰はにゃならん話があるでな。（と立つて屏風の彼方へ行き、少しの間合掌念佛の態。）

又七郎。（座に戻る。間。稍や低い聲で内膳に。）何でせうね？　松山の義兄上が大切な用事と仰しやるのは？

内膳。（又七郎に。）早く國若に食べさしてお呉れ。そなたも先きに食べてお呉れ。皐月さんも、な。

又七郎。兄上は？

内膳。拙者も後ほど。（屹とした語調で）だが先づ拙者の云ふ通りにしてお呉れ。

又七郎。ではお先きに戴きます。（奥に入る。）

景康。（屏風の彼方より出て來て、内膳に。）そなたは食事は濟んだのか？　食べ度くないのか？

内膳。（強いて少し笑ひ。）色々な思ひが胸につかえてゐますので、これが下つてから戴きませう。武士は食はねど高揚子とか云ひますね、つまらない體裁ではあるが、餓鬼道の慘めさを自分ながら餘り露骨に見せるよりは、まだ此の方が優しでせう、ハハハ。

景康。（少し顔を曇らせ。）その體裁も効かなくなつたら、なほ一段と慘めな事であらうがな。（調子を替へ）まあ可い。時

に内膳、そなたが平生嫌つてゐたあの穴山梅雪齋よ、あれはな、愈よ今度叛いたらしいて。つい五六日前の事、さうだ、二月二十五日の夜なかだつけ。闇にまぎれて、内室子息殘らず連れて古府を出奔し、領地下山へ引上げたのだ。

内膳。何、では愈よあの梅雪が、下山口より徳川勢を導いて、押し寄せて來るのですかね？（自分ながら少し信じかねる態。）

景康。兎も角その註進が行つたので、勝頼公も諏訪の御陣を引拂はれ、まだ普請中の新府の城に一時お立籠りといふ事だ。

内膳。（朗え朗えしい生き生きした顔になり。）何ですと？ 諏訪の本陣をお引拂ひになつて、普請半ばの新府の城に？ そりや確かな事なのですすか？

景康。儂が現に見て來たと云つてもよい位ゐ確かなものだ。それで此地の跡部大炊の親戚其他の者の邸にも、召出しの急使が來てゐる筈だ。そして仁科殿の高遠城も防戰覺束ないらしいて。

内膳。（さもさも氣持よげに。）ほお、高遠城も危いと？

景康。寄手は三萬以上だのに、味方はやつと其の十が一だといふからなあ。そして後詰も牽制も、もはやすつかり望みが絕えたといふ事なのだ。

内膳。（大きい深い溜息をつき、獨語。）あゝ、さう聞いて始めて此の胸が透くわい。今夜こそは、いや今後はずつと、嘸ぞ熟う睡れる事だらう。

景康。（たしなめる樣な口調で。）味方の不利をも悦ぶのは、その不利で勝頼公始め上下一同の目が覺める事を、期して待たれるからだらうね？

内膳。勝頼公の目が覺める？　何の、何の、そんな氣遣ひがありますもんか。萬々一に目が覺めても、もう取返しはつきますまいて。あゝ拙者の此の氣持よさ、これを何うして包み隱して置かれませう。あゝ好い氣持だ

最康。（呆氣に取られて内膳を見やり。）さう露骨に悦ぶのでは……仇に報ふるに恩を以てするといふ事さへもあるではないか。

内膳。（輕蔑の口調で。）フン。

最康。それに、今日は儂はそなたにな、或る好い便りを傳へに來てゐるので、なほさら勝頼公に對しても寛大であつて貰ひ度いのだ。

内膳。フン。

最康。今日はそなたに他國への奉公を勸めるのぢやないよ。（全く違つた爽かな口調になり）そなたも或は名前ぐらゐは聞いた事があるかも知れんが、隣國北條家の臣下に、荒木源八郎といふのがあるのだ……。

内膳。勝頼公の慘狀に對する拙者の氣味好さは、何によつても變りはしません。然しお話が別事なら、そりや其積りで承りませう。（敬意を持つた云ひ方）荒木殿と云へば、松田尾張守の手の者でせう。確りした立派な人物らしいと、拙者はかねて思つて居ります。

最康。その荒木源八郎殿が今朝儂を、はるばると訪ねて來てな、そなたに少し折入つて願ひ度い事があるといふのさ。それで儂がそなたに豫め下相談をしに來たといふ譯でもないが、かういふ貧乏な暮しの所を、未知の他國人より出し拔けに訪ねられては、それこそ何かに都合が惡いかも知れんと思つて、一應そなたに前以て知らせゝしやうし、又儂も勸めはしたいと思つたので、それで斯うして來た次第さ。

内膳。その願といふのは何でせう？

景康。そなたに教へを受け度いといふのさ。軍學でも兵學でもなく、又必ずしも四書五經や國學なぞといふわけでもなしに、たゞそなたの自己流に修めて來た學問を、そなたに就いて學び度いと、かういふ希望さ。

内膳。拙者の自己流の學問を、誰より荒木殿は聞いたのでせう？　拙者は自分を學者として標榜した事なんぞ、今迄についぞ一度も無いのですが？

景康。そこが何さ、德は孤ならずさ。此の甲州ではそなたが浪人になつた理由は、あの治助とかいふ者の娘を貰はないと頑張つて、不法な訴訟に打負けた事だとしか一般に信じられてゐないのだが、荒木殿はな、どうしてなのだか、そなたがあの訴訟にあんなに打負けた本當の理由をも知つてゐるのさ。あの三郎景虎殿見殺しの一件で、そなたが勝頼公を散々に罵倒した事に、大へん荒木殿は同情もし、感服もしてゐるらしいのだ。

内膳。同情はしてゐるかも知れませんが、どうしてあの事に荒木殿が感服なんぞするものですか。拙者こそ荒木殿に就いて學ばねばならない點が多いでせうよ。兎も角も會つて話をしてみたいとは思ひますね。

景康。程なく此處へやつて來るよ。そして、そなた達四人を相模の自分の家に來て貰ひ度いと云つてゐるのだ。荒木殿も富裕ではないさうだが、我々よりはずつと樂な暮しをしてゐるとかで、そなたを迎へて何かと教へて貰へれば仕合せだと云つてゐるのさ。（稍や低い聲で）尤も、さうして行く中には、又七郎には北條家より仕官を勸めて來るでもあらうし、又七郎の方でも荒木殿に長らく厄介になるのは濟まないとも思ふだらうし、だから其點をそなたは考へるかも知れないがな……。

内膳。いや、それは又七郎とても、北條家に仕へなくとも、彼地でなら近所の子供に讀み書きを教へても、獨立して妻

子を養つて行けませうよ。(少し考へて)併し拙者が荒木殿の師となつて行く？　しかも特に何を教へるといふ取りきめも無しに？　そんなに荒木殿が拙者と同じ考を持つてゐられる事か知ら？……いや、兎も角も會つてみませう。

又七郎。(奥より出て來る。)兄上、お先きに失禮致しました。

最康。(内膳に。)會ふ前に腹を作つておくがよい。そして拙者が持つて來たあの着古しを着るがよい、その姿では少々極りが悪いからな。又七郎も着替へなさい。

内膳。(しみじみと昔を懐かしむ様な口調で獨語。)七つ八つの柔順な幸福な子供の頃の氣持がするわい。この内膳にも、あんな平和な日があツたツけなあ。(と奥へ入る。)

又七郎。(續いて着更へに又奥へ入る。)

最康。(ほツとした様な氣持で獨語。)珍らしくすらすら事が運びさうだ。これで又味方の武運も挽回と來れば、一寸心配も絶へるのだがなあ。(あきらめる様な調子で)どうも勝頼公では困つたものだて。

(表の道を右から左へ、町人風の男女三四人、息を喘ましながら來かゝる。)

甲。もう此邊まで來てれあ大丈夫ぢやろ？

乙。いんや、いんや、もう一里ぐれえ逃げてねえと危えぢやろ。だけんど隨分走ツたで、足が疲れた。ちと緩り行かうや。

丙。あゝ怖え、怖え、新府城でだた、その逆張付けになツたツちふのは？

乙。さうよ、そして其の新府城も、又お引拂えになるツちふだ。愈よ負け戰かも知んねえや。

甲。なあに、一寸の事だんべ。ほんまに敵が寄せて來たんぢやねえだろ。

丙。其様に高を括るだから、危え目に遭ひやすだよ。さ、急がう、斯様にのろのろ歩いちやゐられねえ。

（と皆々又足を速め過ぎ行く。）

景康。（槍や薙刀の寂しくかゝツてゐる長押の方を一寸眉を寄せて見てゐた彼ば、又表の道の方の右の人聲に耳を欹てたりして、なほも暗い顔つきをする。）

又七郎。（景康の着古しに着更へて奥より出て來る。）何だか表の通りを騒々しく喋ツて通ツた様ですが？

景康。新府城もお引拂ひの様な事を云ツて通ツたが、どうやら本當らしいて。

又七郎。（緊張。）なに、新府城もお引拂ひ？

内膳。（これも着更へて出て來る。）高遠の城も陷落だぞ。

又七郎。（内膳の顔を凝視し。）何です？　高遠の城が陷落？　誰よりお聞きになりました？

内膳。松山の義兄上が今さき仰せられたでないか。いやいや兄上は、ただ危いと仰せられたツけな。だが拙者は、なぜだか其様な氣がして仕方がない。（腕を拱き一寸思ひ入れ）。こりやどうも拙者の直覺が的中らしいぞ。愈よ總敗軍になツたのだ。むう、愉快だ、愉快だ。

景康。又七郎（共に不安と批難に滿ちた目で内膳を見詰めながら、呆氣に取られゐる。）

四

荒木源八郎（表の通りを右より登場。颯采堂々たる武士。内膳の住家を直ぐそれと見て知つたらしい様子で、その見窄らしさに一寸立止り深い溜息を洩らしたりする。それから入口の方へ行き、案内を乞ふ）御免下され。

景勝。荒木殿の聲らしいて。どうりや、儂が……（又七郎が立たうとするのに先んじて出迎へる。）そら、案の定だ。此の樣な金殿玉樓なんで、直ぐお分りになりましたらうなあ、荒木殿、さ、ずつと此方へ。

源八郎。（座に通り、一同にそれぞれ挨拶。）相模の國の住人、荒木源八郎と申す者で……以後よろしくお願ひ致します。

内膳。拙者が小宮山友信、これは弟又七郎と申します。何分よろしく……。

源八郎。（痩せ衰へた兄弟二人の顔かたちを見るのが辛いらしく、少しの間顔をそむけて眉を寄せるが、又氣を取り直して正しく向ひ合ひ。）お二人ともお名前はかねて承つて居りました。そして是非お訪ね致し度い、御指導御示教を仰ぎ度いと、早くより志して居りながら、此の戰亂の世の忙しさ、思ふ樣にもならないで、殘念に存じて居りましたが、今度少しの閑が出來ましたので、愈よ思ひ立ち、松山殿にお頼みしまして、此の通りお目にかゝれましたのは、源八郎何よりの仕合せでムいます。

内膳。そんな御丁寧なお言葉を受けられる友信ではムいません。拙者こそ御示教を仰ぐべき身であらうと思つてゐます。

源八郎。松山殿にもお話致しました通り、拙者は只今北條家の臣として申すではありませんが、先年勝頼公の越後喜平次（上杉景勝）方へ御左擔なされた一件に就き、貴殿が萬事を差し置き極諫なされた義心に對し、一個の人間として尊敬の念を禁ずる事が出來ません。その他にもまだ、遙かに聞き及んで敬服してゐる事が澤山ありますが、何よりもあの一件に對する拙者が感謝の微意をお受け下さい。

内膳。（少し首を垂れ。）さう云はれますと、如何に鐵面皮な拙者でも、全く面目がありません。あの諫め方も惡かつたに

相違ないからこそ、此身は勘氣を受けながら、何の効果も無かつたわけです。貴殿こそ笠原新六郎殿が當武田家へ降參の時、言葉を盡してお止めなされたといふではありませんか。それでも笠原殿は空しく降參なされたが、貴殿の諫め方には、ちやんと禮節に適つた眞の威儀があつたればこそ、あの松田尾張守殿(笠原新六郎の實父、北條家の老臣)さへ、今に貴殿の事を褒めてゐられると聞いて居ります。

源八郎。それは、斯う申しては憚りながら、勝頼公の暗愚な事が、北條家のそれよりも一層ひどいからの結果に過ぎませんて。

内膳。(稍や聲低く)それをさう思ふのは、拙者如何にも不愉快で仕方がありません。

源八郎。(氣の毒さうに。)不愉快でも、それに相違ありますまい。

内膳。(默。)

源八郎。御心中お察しします。

(稍や長い間。)

内膳。(自分を責める樣な嘲る樣な調子で。)いや、いや、拙者は禮節の精神など到底分らない下根の人間です。さればこそ勝頼公に對しても、いまだに許す心が持てません。今度の戰爭にも、武田方の敗北を聞いて、好い氣持こそすれ、さらさら殘念ではないのです。

又七郎、景康。(共に呆氣に取られ、批難を眉宇に漲らして内膳を見てゐる。)

源八郎。(深い同情を寄せ。)如何にも、如何にも……。しかし其のお心の底には……

内膳。跡部、長坂、それから梅雪、出羽その他を拙者は隨分罵りましたが、拙者も彼等と五十歩百歩の小人です。たゞ

小人振りが違ふ位なものでせう。(自分を嘲る様に笑ふ。間。)で、お訪ねの意味は、義兄より先ほど聞きましたが、斯ういふ友信と御承知の上で御世話下さる事でせうか。これでもお世話下さるのなら、どうぜ厚顔な友信ですから、辭退致さず、早速參上致しませうよ。

源八郎。その小宮山殿で結構です。その小宮山殿は、言葉と心と、又その心の表面と奥とが、どうかすれば大へん違つてゐられるお方です。では只今より御同道が願はれませうか?

內藏。(少しの間ぼんやりしてゐる。氣乘りのしない機械的口調で。)只今より御同道致しませうて。

又七郎。(兄に。)愈よ御決心が出來ましたか。何より嬉しうムいます。いろいろ申上げ度い事もありますが、途中でも話はゆつくり出來ますし……(立つて奥へ行かうとするが、又何となく兄を氣遣ふ様子で、行きかねる。)

景康。これで儂も安心といふものだ。

源八郎。なほ念の爲めに申して置きますが、今日午の刻過ぎに拙者が宿を立つまでに耳に入りました所では、信州高遠落城の報によつて、新府韮崎の城中も城下も、上を下への騷ぎださうです。勿論新府も早速お引拂ひになり、古府へお着きになつたとか、今なる所とか申してゐました。お國中の各方面の武士達に、お呼び出しの使は頻りと出たさうですが、集る者は殆どなく、折を見ては背き去る者のみだと云ひます。拙者が此方へ參る途中でも、逃亡者らしい多くの者を見受けました。

景康。儂が來る時も、避難者らしい平民どもには少し逢つたが……。

內藏。(何となく自失の態。漫ろに少し拍子をつけて寂しく獨語。)ほう、背き去る者ばつかりで、退却、退却、また退却—

源八郎。(念を押して確かめる樣な表情で。)かういふお國の有樣でも、無論小宮山殿は拙者の許へお越し下さる事でせうな？　然し同じお越し下さる以上、何もかもさらりとお諦めになッて、勝賴公その他の上下一同に對するお憎しみからでなく、あッさりと爽かなお心からお越し下さる方が、なほ願はしいと思ひます。

景康、又七郎。(共に源八郎の言葉に熱心に贊成の顏つきで、內膳の顏を見詰める。)

內膳。(源八郎に。)まだ御存知ないかも知れませんが、拙者の學は荀子の人間性惡說と、孟子の性善說とを、どちらも同等の强さと深さで承認するだけの事ですが、其の惡を矯める事も、善を發揚する事も、なかなか出來ないのが拙者の病ひで、お恥しい次第でムります。勝賴公に對する憎みも、諦めやうとは思つても……。

源八郎。(間。何か思ひ出し、次第に激し來る。)いやいや、そこは拙者も御同樣。ですからお越し下さる御決心は、どうしてお出來になッてもよい、勝賴公に對するお憎しみからでも何でもよい。他國人たる拙者でさへ、憎惡の情が込み上げて來ます。新府のお城の評定で、抵抗力も何もない人質一千人中より、所謂忠義の者の妻子眷族僅か百人を除く外は、すべて人質曲輪に追ひ込まれ、燒き殺されたと聞きましたぞ。殊に木曾義政の母親と妹には、城の追手の勝山口で、どうでせう、逆張付けの酷刑を加へられたと云ふ事ですぞ。如何に今度の戰爭で反いた最初の者の血緣とは云へ、何も知らない孱弱い憐れな境涯の女子供に、抑も何の罪科があるのです！

又七郎。(悲憤。)あゝ、さう聞いても、疑ふ事さへ出來ないとは、何といふ情けない我々だらう。今になつても勝賴公はお目が覺めず、そんな卑劣な殘酷な……。

景康。(同じく。)それで國家が滅びなければ、桀や紂の戒めが何だ！

內膳。(頭におッ被さり來る黑い霧でも掻き除けるかの樣な痙攣的な手つきをし、殆ど泣き出しさうな哀願の態度で。)も

う、もう、どうぞ其の事は……。それよりも、その結果を云つて下さい、臣下離散の事を云つて下さい。（自分で代りに云ふ、前の通り自づと少し拍子をつけ）……呼び出しの使は四方へ行つたが、集る者は一人もなく、反き去る者はつかりで、勝頼公は思案投げ首、次ぐに退却又退却……。あゝ、これでこそ胸が透く。（周圍に對する憎惡も次第に忘れ）此の四年が間といふもの、拙者は生き埋めになつてゐて、もう愈よ窒息といふ所だつたのに、今となつて何處からか、かすかに息がつける樣になつて來た。これは夢だらうか、どつせ人生は夢だといふが……。あゝ併し、（音を延べて）變な氣持だなあ。

又七郎。（心配さうに兄を見て。）兄上を窒息させやうとした御自分のその憎しみが、少しでも引き退つたのなら、これに越す悦びはありませんが……。

内膳。（我に復り。）いや、からだ具合で氣が少しぼんやりなつたせいなのだ。何だと？　拙者の憎惡が引き退つた？　馬鹿を云ふな、進んで突き破つたのさ、突き破つて息をついてるのさ。あ、少し眩暈がする樣だ。（源八郎に）荒木殿、失禮ながら少し風に吹かれて來ます、暫らくお許し下さい。（と云つて椽から下りたち、又ぶらぶらと川の邊りへ歩いて行く。）

源八郎、又七郎、景廉。（三人とも傷々しげに内膳を見やる。）

内膳。（顚きさうにしては蹈みこたへ蹈みこたへ、歩き行く。ふと川岸に立止り、遙か彼方の一地點を凝視する。仄かに見える地藏岳と鳳凰山との間ぐらゐの麓邊りと覺しき所に、煙が一筋かすかに立昇つてゐる。）

（表の通りを右の方から又騷々しい人聲がして來るので、源八郎、又七郎、景廉の三人は又その方へ注意を向けつつ）

又七郎。(不安と悲痛の表情で。)扨ては愈よ兄上のお言葉通り……。

主膳。(殆ど同じ表情で。)どうせ斯うより外に成り様はなかつた事といひながら……。—

(表の道を百姓町人等の老若男女が一群また一群、種々の包などを背負つたり携げたりして、後ろを見返り見返りしながら右より左へ、斷續して急ぎ行く。皆多少息を喘ましてゐる。走つて行つてしまふのもある。手を引かれたり背負はれたりして泣いて行く子供もある。雜兵らしい者も二三人づれで逃げて來るのがある。

さういふ避難民や逃亡者などが一寸途絶えた時、反對に左より右へ治助と其の雇人三八、性急に話しながら急ぎ來かゝる。)

治助。(確と云ひ含める。)ちや、可えかな、須川様にもお逃げなせえツて云ふだぞ。な、跡部様の御親類せえが、呼び出しのお使せえ來ただにお逃げなさるだからな。さう直接に云ふだぞ。そして娘は是非々々連れて來なきやいけねえぞ。(一寸考へ直して獨語)いや、おらが行かうか知らん、もし娘が愚圖々々すると困るだし。いんや、いんや、家の米だの金だのも心配でなんねえ。(三八に)ちや、確と頼んだぞ。えゝか、ちや、おら家の始末をつけて待つてるだからなあ。

三八。えゝ、えゝ、大丈夫、お二人とも連れて來まさ。誰も命は惜いだから、須川様だてお逃げなせえやすだとも。ちやあ、安心して待つてなせえよ。(と云つて別れ、右の方へ急ぎ行く。)

治助。(ちやあ乾度だぞなー(と念を押した上で、左へ急ぎ引返しつゝ)あゝあ、上娘の彌生はどうなる事か知らん。奉公なんぞに何故出しただろー(と半ば走つて退場。)

（雜兵三人又右より急ぎ來かゝる。逃亡兵らしい。）

雜兵甲。何？ 下方彦作様が殺された？

乙。もう此處まで來れあ大丈夫だらう、もう追つかけて來はしないや。少し緩り行かう。あゝ疲れた。――さうさ、殺されるさ、勝頼公を臆病だなんぞと、あんなに御前で惡口しなさるからよ。

丙。でも、實際臆病ぢやないか、まだ敵の旗先きも見えないうちから、あんなに退却ばかりなさるのだもの。本當に彦作様は氣の毒だつたなあ。

甲。だが、勝頼公も嘸ぞ心細い事だらうさ、毎日々々、我々部下が斯うして逃げ散るばかりだからね。」

丙。勝頼公にも臆病神が憑いたのだね。

甲。そのくせ勝頼公は亂暴な事ばかりなさるぢやないか。ひどいねえ、あの立派な彦作様を殺されるなんて。」

乙。臆病者は兎角ひどい事ばかりするよ。そして愈よ部下は離れてしまふのだよ。

甲。そして今は古府の一條様のお邸にお休みになツてゐるんだね？ まさか此方へお逃げぢやあるまいね？ 此方へでもお逃げだと、我々は助からないぞ。

丙。いや、多分鶴瀬の方へお逃げだらう。小幡豐後様がさうお勸めなすツてゐたのだから。併しもう織田勢は、日野春から此方へ押しかけて來てるんだな。

乙。そして市川口にも、徳川勢の旗先きが見えたツて云ふでないか。（地藏岳の麓に方る煙やゝ盛になツてゐるのに目をとめ、非常に不安恐怖の態。）や、あれあ敵の放火だな―

甲。（慴き怖れ。）ありや韮崎だろ、新府のお城に違ひないて。

丙。(同。)もう韮崎まで敵が來たんだな!?
乙。(丙と殆ど同時に云ふ。)愈よ怖しい事になツた! 急がうや、急がうや。さ、愚圖々々してはゐられない。
(そして皆々左へ走り行く。程なく右の方古府の町からも煙が立ち始める。
須川靜馬、その妻つる、三八の三人、それぞれに種々の袋だの包みだのを擔いだり提げたりして、右の方より急ぎ來る。)
三八。え丶所で逢ツて好かツた。さ、急がうや、急ぎませうや。
靜馬。その菅笠を一寸貸して呉れ。(と云ツて三八の菅笠を奪ふ樣に取り、内膳の家の方から見られない樣に頭を隱して、其邊だけは特に急いで走り過ぎる。)さ、急がう、急がう。や! 古府も變だぞ!
三八。(古府の煙を見て、非常に愕き怖れ。)た、たい變、た、たい變。(と云つて四人とも左へ走り入る。)
(日が暮れるにつれ、二ケ所の煙は次第に赤くなり、勢も強くなる。遠くに人馬の騷ぐ音も聞える。又七郎、昌康、源八郎、國若、皐月等、椽に出たり下におりたりして山の方を見やる。皐月と國若の二人もどうやら着物を更めてゐる。二人と源八郎との挨拶は、表を逃亡者どもの通つてゐる時に濟んだ事とする。又七郎は又その間に鎧櫃を持つて來たり、刀や槍を揃へたりして、旅立ちの仕度をし終る。)
内膳。(川邊の方より靜かに戻つて來る。全く死人の樣な顏をしてゐる。)
又七郎。兄上、それでは、もう御出發なさる方がいゝでせう。今夜中にも行ける所までは行きませうよ。さ、兄上。」
源八郎。では早速御同道致しませう。」

内膳。（縁先きに立つたまゝ、腕を組んで默つてゐる。その片方の肩は痙攣る様に顫へてゐる。吃りつゝ。）憲よ、どん……どん詰りに來たんだな。あゝ、耳が鳴る、頭が割れ……割れさうだ。國若を呼んで呉れ、國若を。あの頑是ない顔でも見たら、少しは此の……。

國若。（走つて來て内膳に抱きつき、心配さうに。）伯父様、伯父様、どうなすつたの？　え？　どうなすつたの？　まあ、そんな怖いお顔をして……あゝ、そんなに伯父様はお苦しいの？（と泣く。）

内膳。（こみ上げて來る自分の切ない情を抑へつゝ、國若を抱きしめて其顔をつくづく眺め。）むう、國若か、國若か、お亡ぎになつた母上そつくりだ。あゝ懐かしい。むう、よろしい、よろしい。伯父様は何ともない、一寸頭痛がしたのだ。もう快くなつた。彼方へ行け、彼方へ。彼方へ行つておとなしくしてゐて呉れ。（と國若をやさしく斥け、自分は面をそむけて深い溜息をつく。）

國若。（伯父に取縋らうとしつゝ。）伯父様がお苦しいなら、私は彼方へ行くのは厭！

卯月。（國若を賺しなだめつゝ奥へ連れ行く。）

長庵。（不安と傷心に滿ちた目で内膳の顔をのぞき込みながら、何氣ない調子を無理に裝ひ。）では儂もお暇して、妻子を兎も角も少しの間避難させずばなるまい。浪人でも武士の片割れは、こんな時には餘計な面倒があるのだからな。（恐れ憚りつゝ思ひ切つて内膳を促す）では、そなた方も……一刻も早く……出發するがよくはないかね、今夜の中にも成るだけ、その……。

又七郎。（これも兄の深い心の中を忖りかねながら、促す。）さ……兄上、もう仕度は出來て居ります……さ、兄上……。

源八郎。（傷々しげに内膳等の様子を見、默つてゐるが涙が頻りに溢れるので、後には顔をそむけてしまふ。）

早月。（内藤の前の株の上に袴など置く。が、何故ともなく彈ぢかれた様に恐れ退る。）

景廉。（自分の心を勵まして、なほ無理にも急き立て促す。）さ、もう發たなくちやいけない。もう今更どうにも仕様はない。なあ、さうぢやないか。さ、もう發つがよい。では、儂は歸るからな……そなたも隨分たつしやにしてな……ぢやあ、もう……（これも彈ぢかれた様に、皆まで云ひ終へず、退る。）

内藤。（依然として默。肩は兩方とも激しく痙攣り顫へ、それが次第に烈しくなつて波打つ様に見え、胸は底より覆へされ掻き亂されつゝある様子。）

（大勢どちらも愈よ強くなり、古府の方より響き來る喧騷の聲ますます高く大きくなる。──幕靜かに下る。）

第二幕（駒飼の勝頼）

主要人物

武田四郎勝頼（三十七歳。）

息信勝（十六歳。）先妻の腹。

桂の方（二十五六歳。）勝頼の内室。北條氏政の妹。

おげん（七十歳近く。）小山田出羽守信茂の母。腰元頭を勤めてゐる。
弥生（二十五歳。）腰元。前の幕に於ける治助の長女。
長坂釣閑（六十歳前後。）勝頼の寵臣。
跡部大炊助（六十二三歳。）同。
倍譲岳（五十歳。）武田家の菩提所大龍寺の住職。
土屋惣藏昌恒（二十七歳。）勝頼の臣下。
温井常陸介（三十一二歳。）同。
安西平左衛門（同。）同。
安部加賀守貞村（三十五六歳。）同。
小山田八左衛門（三十一二歳。）出羽守信茂の甥。
竹田左衛門行村（二十五六歳。）姓は實は武田。出羽守の娘婿。
石見儀助（五十歳前後。）駒飼の百姓。
間者小關彦太（三十歳前後。）

その他なほ腰元一二名、足輕、雑兵、百姓の風を装うた出羽守方の兵卒等若干。

時

前の幕より六日後（天正十年三月九日。）夕方より夜に入る。

所　甲斐國東八代郡駒飼の民家、石見儀助の宅。

一

（勝頼夫妻及び信勝の室に宛ててある座敷。正面に床があり、その上に「人和」と書いた額が少し傾いてかゝつてゐる。その右は寝室と腰元等の詰所へ行く出入口。前と左は庭に面して椽が廻つてゐる。

勝頼は座を離れて椽側に立ち出で、山の方を仰ぐ。内室松の方、信勝、それぞれの座に着いてゐる。長坂釣閑椽側近くの末座に控へゐる。）

勝頼。なる程この笹子峠は險路だなあ。今までにも上州や武州を征伐に行く度毎に、此處は屹度通るので、幾度越したか覺えもしないが、これほど險しいとは氣付かなかつた。しかし斯うしてじつと眺めてみると、我が領國内ながら如何にも急峻な山勢だ。大菩薩岳から大倉山、田野山と、蜿り蜿つて續いてゐる具合はどうだ。これでは京坂近くに育つた足弱ぞろひの織田勢なんぞは、見たばかりでも目をまはすかも知れないて。ヘヘヘヘ。

釣閑。天險とは全くこれでムいます。殊に愈よ出羽守の岩殿城にお立籠りになりますれば、もう占めたもので、柵を結つたり土手を築いたりして戰爭をする樣な上方勢は到底指一本でも觸る事は出來ますまい。それに鐵石の樣な忠魂義膽の出羽守が守護致すのでムりますもの、織田徳川は四日を出ないで引返すにきまつて居ります。天の時に、地の利

に、人の和、この三つが斯う揃つて居りますのに、御武運挽回が出來ないで何うしませう。

勝頼。(感心の態。)かねて餘り好い仲でもなかつたあの出羽の事を其方がさう褒めるのは、立派な心といふものだ。又、出羽の精忠には全く感じ入る。樣子にはそれとも見せないで、いつも拙者の事ばかり考へてゐて呉れるからなあ。拙者も何がな出羽を悦ばしてやり度いものだて。

釣閑。親孝行なもので君に忠を盡さない者はありません。腰元を勤めてゐる母親のあのおげん殿を、出羽守がいつも思ひやつて居ります心は、はたから見ても誠に美しいものでムいます。

(此の時、三十前後の旅商人體の男、前方の植込みの間より内の樣子を窺ふ。程なく其處を出て後ろへ廻り、左の木立の邊りからも又しきりと見測つたりする。)

勝頼。うむ、うむ、さうだらうとも。併し今日も迎への使が來ない樣だが、どうしたのだらう? (と少し不安の態。が直ぐ又それを自分で取消し) 明日は來るだらう。何かと準備をしてゐると見えるよ。(何か思ひ出した樣に座に復り、内室松の方に向ひ) 時に、おげんと彌生とは、何か云ひ爭ひをした樣だつたな。彌生は百姓の娘のくせに、不心得な奴だ。どんな事だね。拙者が彌生に云ひ聞かしてやらう、そして從かなければ甚い目に遭はしてやらう。此處へ呼べ、彌生を、こゝへ。

松の方。まあ、そんな。上樣がそんな事を遊ばすなぞと……。ほんの一寸した女同士の言葉の行違ひでムりましたもの。彌生が少し急いで障子を閉めました音を、おげんが僻んで聞いて皮肉な口を利いただけの事でムいますもの。そして、もうそれも治まつたのでムいますもの。どうぞ其樣な事はおよし下さいまし。二人の今後も私が確かにお受合ひ致しますから。

勝頼。いや、いけない。蟻の穴より堤が崩れるといふ諺は何の爲めだ。些細な事と云つて必ずしも打捨ててはおけぬ。治まつたのなら、なほ今後の心得を云ひ聞かせる。これから岩殿に行つた上で又さやうの事があつてみい、出羽に相濟むまい。此處へ呼べ、此處へ、おげんも一緒に呼べ。呼ばなければ拙者が呼ぶ。(奥へ向つて呼ぶ)、彌生、おげん、おげん。おい、彌生、おげん。

松の方。(呆氣に取られてゐる。)

彌生。(正面右手の唐紙をあけて靜かに入り來る。かたの通りに手をつき禮をする。)お召しでムいますか。

勝頼。その方はおげんと云ひ爭ひをしたさうだな？　どういふ事だ？　斯ういふ國家の危急存亡の場合に、不心得者め！　次第を云へ、一切殘らず云へ！

彌生。どうも申わけムいません。何でもないほんの一寸した事でムいました。そして、もう綺麗に仲直りを致しましたから、どうぞ此の儘にしてお許し下さいませ。

おげん。(同じ處より入り來る。)お呼びでムいましたか？

勝頼。(柔かに。)おゝ、おげんか、その方は彌生と何か言ひ爭ひをしたといふ事だが、どういふ事柄だな？　その方の樣に物靜かな年上の優しい婦人が、他人と爭ひなどする筈はない。何か彌生が無禮なことでも云つたのだらうな。

おげん。(少し極り惡げに。)恐れ入ります、どうも相濟みません。全く一寸した何でもない事でムいました。お耳に入れますのも恥かしい程の事、どうぞ、もうお許し下さいませ、今後は尙ほ謹むでムいませうから。

(勝頼は尙ほ再參二人に次第を殘らず云ふべく促すが、二人とも少し笑つたり、恥かしさうな樣子をしたりして、答へない。)

勝頼。(拍子抜けがした様な心持で、おげんに。)では其方は彌生に、もう何の苦情も持つてゐないのだな、確かにさうか?

おげん。ゑゝ、ゑゝ、もう些とも何とも思つてゐないのでムいます。

勝頼。(彌生に。)無論その方もおげんに云ひ分はあるまい。では、よし、仕方がない、退れ。おげんだけは少し殘つて居れ、ちと別に話があるのでな。

彌生。では御免下さいませ。(と退場。)

勝頼。(おげんに。)いや、決して叱るのではないぞ。今も釣閑と話をしてゐた所だがな、その方の伜出羽守は、全く感心な武士だ。拙者はいつも、出羽や秋山攝津などこそ、本當の武士の手本だと思つてゐる。今度これから頼つて行くからではないが、何がな出羽の誠忠に酬ひてやり度いとは、拙者の平生からの心なのだ。時にどうだな、出羽の長女は今年十五歳で、まだ誰にと約束もしてないさうだが、信勝の許嫁といふ事にでもして貰ひ度い氣はないか。その方はどう思ふ?

おげん。(平身低頭して恐縮の態。)まあ、勿體ない、そすな、そんな……。御冗談にしても勿體ない……。

釣閑。あゝ、何といふ有難い上様の思召しでムいませう。我々臣下として、さういふお言葉を聞きますと、たゞもう感泣の外ありません。(とさも感泣の態。)

勝頼。(おげんに。)いや、さう恐れ入るには及ばない。どうだ、どう思ふ? 先づ其方だけの心は?

信勝。(跳り上る。)ちえツ! 穢らはしい。父上、誰が出羽の娘なんぞを貰ふと云ひました? 出羽ぐらゐの機嫌を取るのも好い加減にして下さい。そんなにしてまで臣下の者の機嫌を取らなければ、岩殿に立籠つても不安心なら、岩殿なんぞへ行かないがよいではありませんか。そして、これから寄手の西軍へ斬り込まうではありませんか。恥ちの上

にも恥ぢを重ねて、虫の様な命を盗み續けて行くよりは、潔く斬り死した方が、どれだけ優しだか知れません。

釣閑。それは、憚かりながら、若君の血氣の御短慮といふものでムいます。上様のお言葉を、さう僻んでお聞きになつては宜しうムいますまい。決して出羽守の機嫌を取るの何のと、そんな……。

信勝。(みなまで云はせず。)何をぬかす、此の腰抜けの古狸め。貴様の様な奴がゐたればこそ、我が武田家も斯ういふ悲運になつたのだ。それを思はず、此の拙者を弱年と見くびり、忠臣めかした其の諫言顔……、うぬ!(と云ひさま、走り寄つて釣閑を斬らうとする。)

勝頼。(しかと信勝を引止め、たしなめる。)亂暴と勇氣を取違へてはなりますまいぞ。人の和といふことを、そなたは打壊す所存かね?

信勝。(辛うじて心を鎮め。)それが拙者には、却つて父上が打ち壊してゐらッしやる様にしか思へません。どの様に岩殿が要害堅固た名城でも、又出羽がたとへ精忠無比な勇士でも、拙者は何故か、人の和などといふ事は、今の此の武田家には到底出來ない様に思ひます。父上はそれを無理に作らうとなさつて、實は却つて打壊してゐらつしやる様にしか拙者には思はれません。

釣閑。(おげんに。)若君のお言葉は、何分血氣の云はせる事でムいますから、氣に留めないで措いて下さい。

おげん。え丶、え丶、それはもう無論でムいますとも。信茂が若君の身になりますなんぞと、そんな……、勿體ないと云ふよりも、罰が當るでムいます、はい。

釣閑。いや、さう謙遜なさらんでもよい。何しろ上様が臣下の者を愛して下さるお心の程を、ようくお察しなさるがよいて。それに、あのお娘御は讀み書きは云ふに及ばず、茶道、生花、其他萬事に御器用で、また敷島の道にも……。

信勝。(たまりかねて又跳り上り、釣閑を蹴らうとする。勝頼しかと止める。)あゝ口惜い！(と椽側傳ひに左へ、憤々して出て行つてしまふ。)

(舞臺靜かに左へ廻る。)

二

(近従の武士の詰所。正面の稍や右に寄つた所に奥へ行く唐紙障子。右は壁が一間ほど前へ來て、又その右前方に控の間の一部が詰所と續いてゐる、左と前方には土間が廻つて居り、なほ左は格子の外が村道、ずつと樹が茂つてゐる。右前方にも灌木が二三株。室内には鎧櫃だの弓矢だのが、それぞれの所に置いてある。

僧麟岳と跡部大炊助の兩人、膝を寄せて話し込んでゐる。)

麟岳。たうとう今日も郡内よりの迎へは來ませなんだな。もう準備も萬端出來てゐさうなものではありませんか。

跡部大炊。(稍や低い聲で。)出羽殿が新府で上樣にお別れして歸つてから、今日でもう八日にもなりますしなあ。兵を集めたりするのは、上樣をお迎へした上での方が却つて都合も好ささうなものであるのに。だから實は上樣がお待ちになるよりは、郡内の方から早く來て下さいと、催促でもして來さうなものですがな……？　どうも拙者は何だか少し不審に思ひますよ。

(以前の旅商人の風を裝うた忍びの者、木立の間に見え隱れしつゝ内を覗ひ、話にも耳を傾け、熱心に聞き取らうとする樣子。)

麟岳。いや軍勢も、もう大分集つてゐるでせう、何しろ郡内で昔から名望家の小山田家の事ですからな。まさか出羽殿

か病氣でもありますまいし。又病氣なら病氣と知らして寄越しさうなもの、いや病氣にしてもお迎への使は寄越す筈ですがなあ。(と切りに心配の態。)

大炊。(相手の心を探る樣な顏つきで。)貴殿は出羽殿とは平生より特別に御昵懇の間柄でしたな。何か出羽殿に不意な事情でも起りさうなお心當りはありませなんだか?

麟岳。(不安さうに、却つて大炊に何か問ひ度げな顏つきで。)別に何の心當りもありませんが?

大炊。(一段と聲を落し。)まさか出羽殿が心替りぢやありますまいな。(と云つて麟岳の顏を見詰める。)

麟岳。といふと?

大炊。(前の通り。)敵に內通なんぞぢやありますまいな?

麟岳。(少し笑ひ出し。)ハハハ、さやうな事がありますもんか。(一寸又考へる樣な恰好をするが、又直ぐ自分からそれを否定し)さやうな事がありますもんか。餘人は知らず、あの男に限つて、さやうな事は無用な御心配といふものでムいますよ。

大炊。とは拙者も思ひますが、上樣の御義弟の穴山殿さへ徳川に內通なさつた樣な次第なんで……。

麟岳。(少しどぎまぎして、云ひ遮る樣に。)いやいや、出羽殿は、えゝと、その……奥へ母御を腰元頭として勤めさしてもゐる事ですし、それに、その……えゝと、かねて孝心深い性質ですもの、さやうな事の出來やう筈はありません。

大炊。(可なり安心し。)そりやさうですな。むう、如何にもさうでした。してみれば、よくよく何か都合があると見えますなあ。

麟岳。と思ふより外はありませんよ。併し一日も早くお迎が來ないでは、どうも安心が出來ません。何しろ敵は、もう

古府に陣を据えたに相違ありませんからなあ。

大炊。(無理にも自分の安心を確かめる様な顔つきで。)む、では明日はお迎へが來るでせう。いや、屹度來ます。事によつたら今夜中にでも……?

[illegible]昌。さうかも知れませんな。或はもう其邊に來かかつてゐるかも知れませんよ。どれ、拙者は一寸若君の御機嫌を伺ひに出ませう。(と立つて奥へ行く。)

(跡部一人やはり思案を續けゐる。時々溜息をつく。又不安さうな目つきで邊りを見廻したり、强ひて自ら安心したりしてゐる。――内も外も次第に暗くなる。

戸外では少し前より温井常陸、旅商人體の曲者の後ろを、氣付かれない樣にそつと尾けてゐたが、曲者が何やら一人うなづいて去らうとする時、つと進み寄つて其の襟がみを掴み引倒さうとする。曲者はそれを振拂ひ、小さい荷など投げ棄てて、杖としてゐた仕込みの刀を引抜ぎ斬つてかゝる。常陸は應戰し、少時格鬪の後、曲者の刃物を叩き落して彼を取押へ、袖より敏捷く網を出して縛り上げ、家の内へ引立て入れる。)

大炊。(たゞならぬ物音に愕き、物々しく大小を差して身を固め、氣色ばんで丁度出てみやうとする所で、常陸と入口ではたと會ふ。)おゝ、温井殿、曲者でムッたか。

常陸。(曲者を土間に坐らせ、大炊に。)御手數ながら跡部殿、外に散らばつた此奴の荷やら仕込杖やら、一切こちらへ拾ひ入れて下さい。此奴なかなか大力で、拙者が斯うして附いてゐなくてはなりませんから。荷にも何か秘密なものが入つてゐやうも知れませんし。

大炊。(云はれた通り拾ひ蒐め廻る。)

彌生。(物音を聞きつけ、奥より出て來る。)

土岐晶匠 (外より歸つて來る、そして大炊に頓着せず詰所に入る。)

帶睦。(敏捷く彌生に、低い聲で叱と。)彌生殿、今少しの間、此處へ上樣が決してお出なさらぬ樣に、何とか巧くやつて下さい。ね、賴みますぞ、乾度!

晶匠。(同じく彌生に。)又この曲者の事を上樣の耳に入れてもいけませんぞ。あとで我々が上樣には、何とでも謝りはしますから。確かに賴みますぞ。さ、早く。跡部殿が戻ると困るから。

彌生。はい、かしこまりました。(と立派に答へ奥に入る。)

大炊。(仕込杖其他を拾ひ寄せて入つて來て、曲者に。)大膽不敵の曲者め、よくもよくも窺ひをつたな。(と云つて上席に坐り、審問でもしさうに構へる。)

晶匠。拙者も先き程あの橋の手前で會つて、こいつ的きり怪しい奴と思ひましたが、果して僞商人の間者でしたな。

帶睦。(片手に綱の端を持つて、曲者の直ぐ面前に腰かけ、刀を鞘ごと腰よりはづして杖の樣につき、曲者に。)さ、曲者、斬り捨てずに危い目を見て取押へたのは、織田方の云ひつけの一伍一什を、白狀させねばならないからだぞ。

彌生。(奥より又出て來る。)

大炊。時に溫井殿、曲者を取押へたのは貴殿のお手柄でありませうが、上樣を差措いての御糾問は、ちと僭上で厶らんかな。拙者只今さう申上げに參るとしませう。(と立つて奥へ行かうとする。)

彌生。あの、跡部樣、上樣なら只今お庭の中門から、若樣と麟岳樣とお三人で、少し其邊を(と指して)見廻りに步く

と仰しやいまして、」お忍びのお姿でお出かけになりました。

大炊。（引返し、右の控の間の方へ來る。）なに、お忍びで……。（常陸と昌恒の二人に）では拙者がお連れ申して參るまで、御料間はお扣へなさい。

昌恒。承知しました。では、どうぞ。御老體御苦勞樣。（大炊は右の方へ出て行く。）

常陸。（昌恒と顏見合せて一寸笑ふ。）フン、出て行きましたね。（彌生に）彌生殿、お手柄々々々、有り難う。（大炊が行つた方を見て）大切な場合に要らざる心配。まして上樣に申し上げて、肝腎の白狀をさせない中に、短氣の上樣、たゞ一刀に斬つてお捨てにでもなつたら、戰さの上にどれだけ損の影響があるか知れはしない。畜生め！（と大炊の後ろから浴びせる樣に赤ん目をする。）

彌生。（少し微笑む。）

昌恒。それにしても、彌生殿の氣轉にお禮を云はねばならない。（と云つて何となく一寸極り惡げな顏つきをするが、直ぐ又心を引締め）さ、酒井殿、やり出しませう。こりや曲者、上樣がお歸りになれば、其方の首は是が非でも飛ぶ。今の中に一伍一什を僞らず白狀すれば、我々二人の命にかけて、何とか工夫が無いでもない。

常陸。（彌生に座をはづす樣に目配せする。）

彌生。（奥へ入る。）

常陸。（曲者に。）さ、あり體に云つて命を助かり度いか、但しは今直ぐ首を差のべるか。貴樣の好きな方にしてやるぞ。

昌恒。（勃と怒る。）云はぬか？　我々が其方の命を助ける爲めに、あの老人を出し抜いてまでも特別に取扱つてやつてゐるのに、白狀せぬ？（常陸に）では、やつつけませう、仕方がない。

曲者。(少し慄へるが、餘りには恐びれない。顔を上げて。)命の惜しくない事はムいません。けれども、此場は助かりましても、どうせ御當家に勝利はないとしか思はれませんし、さうすれば結局拙者は死ぬより外はありません。同じ死ぬ位なら、節義を賣つて笑はれやうより……。

常陸。(不安を强いて笑に紛らし。)節義も矢つ張し算盤珠で彈き出したんだな、では商人に化けたと云ふより、それが地金ぢやないか。そして勝利は御當家にない? では我々は、その方の算盤珠にはかゝらない損な節義を盡してゐるといふ譯かね、ハヽヽ、こりや面白い事を云ふ奴だ。

昌値。(氣短かに。)さ、溫井殿、やつつけてしまひませう。いつ迄云つても同じ事です。(と云つて片足で床をどしんと强く蹈む。)

常陸。どうせ隣國の北條家へも便りがあるので、何とか我々二人で取り計らつて、あちらへ送つてやつてもよいと思つてゐたが、それより貴樣はあの世の方が好きと見えるて。(と云つて靜かに刀を引拔く。)

曲者。(急に怖れ戰き)いえ、いえ、白狀致します。北——北條樣の御領分には、拙者の生みの母が……あの、母が居ります……あゝ、十年前に別れましてから今日まで……。いえ、あちらへお逃がし下さいますならば、すつかり、白……白狀致します。有り難うムいます。拙者はあの、拙者は信忠樣の先勢瀧川左近樣の組下の足輕で、小幽左太と申します、はい。三年前に御當國古府の飴屋に暫く奉公して居りまして、此邊の事も何かと心得居りましたのが左近樣のお耳に入り、それで忍びの役を仰せつかつて參つた譯でムいます、はい。そして、たうとう運惡く……。

昌値。その忍びの役といふのは?

陸本。(次第に落付いて來る。)第一に此方の軍勢がどの位であるかといふ事、それから勝頼公は本當に此地に御滯在であ

るか何うかといふ事、それから又、郡内岩殿の小山田樣より信忠樣の許へ内通の使者が再參行つて居りますが、その内通が果して本當のものか何うか、本當として一方は笹子口より、一方は石和筋より挾み討ちといふ計畫――はい、これは小山田樣の方からお勸めになつてゐる計畫でムいます――此の計畫に應じてよいものか何うかといふ此の三ケ條を探る樣にと云ひつかつて參りました。そして又、よし小山田樣の方の眞意が分らないでも、こちら樣の現在の軍勢が五百を超えないのであつたら、夜に入り次第、合圖の火を上げる樣にと、斯う云ひ含められて來たのでムいます。

昌國。（不安の心を押し隱し、無理に笑ふ。）なに？　小山田殿が内通だと？　そして此方を挾み討ちだと？　ハハハハ。

常陸。（同じく。）そして織田勢は何處まで來てゐる？　又その人數は？　三人か五人か、十萬か百萬か、ハハハ、それとも五百萬か千萬か……。

彦太。（常陸の出鱈目によつて一寸煙に卷かれ、稍やどぎまぎする。）はい、その……先勢瀧川樣と河尻樣と合せて二千の上方勢は、石和、小松の邊に今夜は泊る筈でムいます。はい、古府の信忠樣の本陣は、確かに五萬を超えて居ります。

昌國。で、其方は我軍を凡そどの位と偵察した？

彦太。失禮ながら、百人を少し出たばかりと見積りました。

昌國。（彦太の看察の鋭さに愕くが、さあらぬ態に強いて反語をさへ使ふ。）さう目があいてゐるのだから、忍びの者になり度がるのも無理はないね。又さういふ目明きの其方を忍びの役に使はうとする瀧川とか河尻とかも、揃ひも揃つた目あきだなあ、ハハハハ……。

常陸。（これも無理に笑ひ。）ちやあ取押へるにも及ばなかつた樣なもんだ。取押へないで、合圖の火とかいふ奴を擧げさした方が、餘つぽど面白かつたらうかも知れないて、ハハハ。そして何かね、それを擧げるのを見れば、今夜中にも

襲ッて來るとでもいふ手筈だつたのかね？

彦太。勿論さやうでムいます。

昌恒。（吐き出す様に笑ふ。）何だ、阿呆らしい。ぢやあ、溫井殿、その合圖を今夜我々が擧げてやらうではありませんか、な、そして道に伏兵でも置いて……なあ……。いや、どうもこりや面白いぞ。

常陸。（ほゞ同様に。）よからう、よからう。少しは面白い事もあつて異れなくちや。

彦太。合圖がなくとも押寄せて來るかも知れません。

昌恒、常陸（不安と狼狽が、此時のみは巧く包み隱せない。殆ど同時に云ふ。）何？　何と？　合圖なくとも攻め寄せる？　どういふ譯で？

彦太。こちらの軍勢が五百なんぞ無いといふ事は、もう瀧川樣逹に大抵分つてゐさうな氣がします。（少し考へて）いや併し、合圖なしには矢つぱり押寄せますまいかな。何しろ上方勢は御當家を大へん怖れて居りますので、用心の上にも用心をしいしい進んで來てゐるのでムいます。でムいますから、矢つぱり確かな合圖がなくては、多分押寄せないでムいませう、大抵の見當ぐらゐはついたにしても……。

常陸、昌恒。（外觀の爲めの優越感を大分恢復し前の様に笑つたりする。）

彌生。（奥より登場。）あの、溫井樣、上樣がお召しでムいます。

常陸。（昌恒に。）では、拙者より此の始末を上樣にお詫びしますぞ、助命の件も併せてね。（彦太が不安に堪へない様な哀願の目で常陸を見てゐるので）大丈夫、拙者に信賴しておじやれ。（又昌恒に）では尙ほどしどし調べて下さい。お賴みしますぞ。（と云つて奥へ入る。）

昌恒。（彌生の顔を見て親しげに。）どこを跡部老人は歩いてゐるのやら、御苦勞ですね。

彌生。（何となくツンとした心持で、顏を少し赤め。）でも仕方がありません。御老人のくせに何事にも邪魔ばかりして忠義振るお方でムいますもの。（奥へ入る。）

昌恒。（一寸寂しい顔をする。が直ぐ氣を取直して彦太に。）その方には妻子はあるかね。

彦太。（感慨深げに。）あゝ、そ……それが有ればこそ、此の命も惜しうムいます。殊に母親の事を、また子供の事を、どうして忘れられませう。

昌恒。さういふ大切な命だといふ事も、忍びの役を引受ける時は、けろりと忘れてゐたのかね？

彦太。さあ、それが……今になつて思つて見ますと、惡い夢でも見てゐた樣な氣がします。あゝ、本當に、あゝ……。

昌恒。む、まあよい。――で織田勢の事に就いて、まだまだ聞かねばならない事が幾らもある。河尻肥前と瀧川左近は仲は好いかね？ どちらが信長信忠等の覺えは好いのだ？ 士卒の間の評判はどうだ？ 先陣を爭ふ樣な事はないのか？ 今夜の夜襲は誰の發議た？ 違つた意見を述べた者はないか……？

（此時、蓑笠に身を包んで百姓の風を裝うた者ども三々五々、すべて十名ばかり、表の方を通りかゝり、おづおづと內の樣子をうかがふ。そして家の前を通り過ぎたと思ふと急に足を早め殆ど走る樣に急ぎ行く。日はすつかり暮れてしまふ。

三

昌恒が彦太に種々と訊ねてゐる間に、舞臺又靜かに廻る。）

(勝頼等の座敷。燭火が二つ、程よい所に立ててある。勝頼、釣閑、麟岳、常陸。)

勝頼。(少し不興げに、併し餘儀なく少し笑ひを含み。)では仕方がない。其方の口達者にはもう參つた。それ程に云ふのなら、今度は特別に其奴の命を助けてやらうよ。

常陸。(勝頼に。)有難うムいます。では近日中に北條家へお使りのあります時、あの男も一緒に添へてやる事にします。

麟岳。(不安さうに。)それにしても、今夜々襲を企らんでゐたなどとは、敵もなかなか油斷がなりませんなあ。

釣閑。(同じく。)そして又、出羽守が敵に内通したなんぞと。無論只噂だけではありませうが、隨分いやな噂でムいますな。

勝頼。(自分の不安を强いて追ひ拂ふ樣に。)何だ、臆病神に憑かれちやいかんぞ、追つ拂へ、追つ拂へ、臆病神は追ツ拂へ。多分それは敵に油斷をさせやう爲めの、出羽の計略の一つだらうさ。だが都留の樣子を見に行つたあの使の者もまだ歸らないのか。出羽からの迎へは兎も角、あの使はもう歸りさうなものではないか。

常陸。もう疾うに戻つてゐなくてはなりませんが……?(少しおどけた顔つきをし。)途中でちよつくら油でも賣つてをりますかな。

釣閑。おげん殿も嘸ぞ心配でありませうに。

勝頼。加之さ、あの秋山攝津は、黒駒在の舊被官を一寸訪ねると云つて暇を貰つて行つたのだが、どうしたらう? 病つたのではあるまいな? 我々の出發前に戻つて來ないと、織田勢に追はれやうも知れないぞ。

釣閑。屹度あの何でムいませう、あの男の事でムいますから、序でに敵の動靜の一部分でも探つて參るのでムいませう。何か屹度そんな事に相違ありません。本當にあの攝津には感心でムいます。でも又、もしや却つて敵に感づかれて、ひどい目にでも遭はないのだと好いのですが。

勝頼。賴もしげに。)又釣閑の攝津ばめが始まつた、ハハハ。(短い間。少し調子を變へ)だが、昌恒を呼べ昌恒を。拙者は一室に閉ぢ込めて置くがよい。拙者は何やら斯う少し昌恒と話し度い樣な氣持がする。

勝岳。(常陸が呼びに行かうとするのに代る。)いや土屋殿には拙者が御意を傳へませう。そして拙者は若君にお目にかゝりに一寸歸ります。多分拙者の許に若君はお見えになつてゐませうから。(禮をして退場)

勝頼。(釣閑に。)其方は大炊を呼んで呉れ。

釣閑。は(と辭儀をして退場。)

常陸。(半ば獨語。)古府に信忠が本陣を据ゑたとすれば、彼處に殘して置きました味方の間者二人からも、早速何とか註進が來さうなものと思ひますが……(と考へる。)

勝頼。(不安。)敵に降參したのであらうか? その一人は大炊の手の者だつたらうな?

常陸。今一人は拙者の部下でありますから、大の字を二つ三つは重ねて附けてよい位の大々々丈夫でムります。

足輕一名(左の庭口より急ぎ登場。)溫井樣、どうぞ第二宿舍までお出でを願ひます、又いつの間にか三名だけ逃げ失せました。(と云つて直ぐ又急ぎ退場。)

常陸。何、又逃げた? 腰拔けめ!(勝頼に一寸禮をして急ぎ退場。)

(舞臺少しの間しいんとなる。夜の闇次第に濃くなり。外の木蔭などには黑い何かが蹲つてゐさうに思はれたりする。)

勝頼。(腕を拱いてぢつと何やら考へる。かと思へば又急に不安に驅られるらしく、邊りをきよろきよろ見廻しなどする。それから立上り、何となく氣落ちした樣な低い聲で呟く。)昌恒はまだか、何處へ何しに行つたのだらう。

(何處かで馬の嘶きが二聲三聲、妙に顫へつゝ斷續して聞える。)

勝頼。（ハツと愕き、つかつかと椽側に出て、左の方の或る樹の蔭を見るや否や、悸然として思はず二三歩退る。顔は蒼白になる。氣を取直し又椽側に出で、刀の柄に手をかけて一寸身構へするが、それも又直ぐやめて、たゞ一心に其樹の蔭を睨み詰める。それから其の恐怖の緊張は次第に薄らぐ。深い溜息をつき）はあ、消え失せをつた！　でも不思議な事だなあ！（侍詰所へ通ずる唐紙の傍へ行き、少しあけて呼ぶ）昌恒、昌恒……誰か來い、大炊はまだか、釣閑はどうした、どこへ行つた、昌恒、昌恒。

（何の返辭もない。燈心がちりぢりと燃えて音するのが聞える、それ位に一體がしんとしてゐる。）

おけん。（奥の唐紙をあけて靜かに入り來る。その顔が又妙に蒼白く、一段と痩せて見える、少し嗄れた聲で。）御用でムりますか。

勝頼。（又悸然とするが、強ひて平靜を裝ひ、少し顔をそむけながら。）いや、奥の者への用ではない。其方は彼方へ行つてくれ。

おけん。（では御免下さいまし。（と云つて勝頼の顔を一二度見返りながら奥へ入る。）

勝頼。（ホツとして。）おゝ、あれの様子までが、何だか變化の様に見えたわい。それに又、何といふ妙な聲であつたらう！

（昌恒、急ぎ入り來る。）

昌恒。お召しでムいましたか……。や、どうなされました、そのお顔色は？

勝頼。（懐かしげに。）昌恒か。む、拙者か、拙者はな、いや拙者はどうもせぬ。皆はどうした？　詰所には誰もゐないなんぞと……？　あゝ（と溜息をつく。）

昌恒。は、溫井も安部も安西も、それぞれ宿舍を見廻りに、又跡部は確か馬糧の方へ行つてる筈と思ひます。拙者は一

寸つい其處まで……。

時頼。何だか變ではないか、皆が皆申し合せた樣に斯う詰所をあけるといふのは？

昌恒。(云ひにくさうに。)實はその……逃げる者共を一層嚴重に取締ります爲めに……。

時頼。うむ、さうか。うむ、さうか。(間)時にな、昌恒、不思議な事もあればあるものぢやないか、今拙者が此處で一人何となく考に耽つてゐると、いや、何だか其方に尋ね度い樣な氣持がしてゐるとだ、あの丁度四年前に古府の庭で見たのと寸分違はぬ馬の生首が二つ、(木の蔭を指し)あの木の下に嚙み合つて轉がつてゐるではないか。そして矢張りあの時の樣に、前以て二聲三聲嘶いたのだ。今度は拙者も、どう變げて行くか見極めてやらうと思ひ、ただぢつと目を据ゑて見詰めてやつたさ。するとね、又程なくすうつと消えてしまつたのだ。(間)どうせ狐狸の爲業か何かであらうが、あの四年前の事を、斯う寸分違へず繰返すといふのは、どうも不思議なものだなあ。

昌恒。(少し考へてから稍や小聲で。)兎も角も、他人には餘りお洩らしなさらない方がよいと思ひます、四年前にもあれを御當家滅亡の兆だなんぞと、噂し合つた者も隨分ありましたし……。(短い間。氣を取直し、強ひて放膽に。)いや、妖怪にもしろ狐狸にもしろ、所詮御退屈のお慰み位のものではありませぬか。

時頼。(次第に元氣づき。)それはさうさ。(間)で、今日は總數いか程だつたね？

昌恒。(云ひにくさうに。)は、その……七十三名で厶います。

時頼。(自分の耳を疑ふかの樣に)。なに、七十三名？ (急に泣き出し度い位になつた自分の心を、無理にも引締め引締め)むう、昨日は百三十餘名と云つてゐたな。新府を引上げる時は七百以上もあつた兵が、十日も經たずに、軍さもしないで七十三名か。むう、如何にも。

昌恒。(痛々しげに勝頼の顔を見守り、默)

勝頼。(努めて强がりを云ふ。)だがな、嘛に怖ぢて逃げる奴ばら、何の軍さの役に立たうぞ。そんな虫けらどもは逃がせ、逃がせ、蹈みにじつてやる迄もないて。(間)だが、郡內の様子を見に行つた足輕も、まだ戾つて來ないのか?

昌恒。もう戾る時分でムいますが……。もし又郡內よりお迎へが參りませなんだら、明日は此方から押しかけて行つては如何でムいませう?

勝頼。(決しかねる。)む、それもさうだな。

石見儀助(腰をぺこぺこ曲げつゝ庭の方より登場。一通の書面を昌恒に渡す。)御免下せえ、へえ、これ秋山攝津様の足衆が上様に差上げて呉れつちふて、置いてめえりやしただ、へえ。どうぞ土屋様からお上げなすつて下せえやし。

昌恒。(書狀を受取り、勝頼に渡す。)

儀助。(又ぺこぺこしながら庭口より退場。)

勝頼。何? 攝津より拙者に宛てて? 愈よ病ひでもしたと見えるな。(併し不審さうに封を切つて讀む。)

信勝。(左側の椽より戾つて入り來る。)

勝頼。(讀み行きつゝも最初は容易に信じかね、幾度も其書狀の眞僞を確める爲めの仕草をするが、その怪訝の表情は次第に憤怒の色に變じ行く。)何だと? 「小生の先祖は元來甲州の者にも無之候故……」何? 「小生も上様に諫言申上げし事數々有之候と雖、少しも御採用無之により、ついに斯かる非運と相成り……。」何? 何? 攝津が拙者に諫言した? 「斯様の次第故、主從の緣も昨日までと御諦め下され度く、今日よりは全くの他人に候へば……。」何? 何? これ

が攝津、書面だと？　むゝ、確かに彼奴が直かに書いた文字だ。拙者に向つて攝津からの去り狀？　臣下より君主への去り狀？　……うぬ、攝津め。（と云ひさま書狀を地に投げつけ、更に拾ひ取つて寸裂しやうとする。が、又急に何事かに氣付き、辛うじて自分を制し、それを懷に納める。そして如何にも人を信じ得ないらしい目つきで昌恒や信勝を妙にじろじろと見た上で、（暫く茫然として默つてゐる。）

（安部貞村、安西平左衞門の兩人、右側の唐紙をあけて登場。）

貞村。申上げます。山縣源四郎、馬場民部、屋代越中の三名、騎馬武者百餘名、雜兵七百人を引連れ、お供に馳せ參じました。

勝頼。（疑深げな不安な目つきで二人を暫く見比べてから。）何だと？　誰が何しに來たのだと？

平左衞門。屋代越中守、山縣源四郎、馬場昌房の三名、部下を率いて參じました。總勢八百餘名でムいます。

勝頼。（怖れる。）何、八百餘名で？　皆甲冑を着けてだらうな？　いけない、いけない。さやうなものを供に加へて堪るもの　。早く引退ふ樣に傳へろ、早く傳へろ。

平左衞門。（情けなげに。）そりや上樣、あゝ、又お疑ひでムいますか。

勝頼。云ふ迄もない。昨日も高坂源五郎が、敵にでも向ふ樣な扮裝で、二百幾らの兵を引連れ參つたが、今日は又馬場山縣が、何ぢや總勢八百で來た？　誓紙でも書くなら書け、起誓でもしたけりやするがよい、ヘン、拙者は供には加へないぞ。

昌恒。（半ば獨語。）よしあやふやな心を、幾らか抱いて參つたにしましても……

貞村。（勝頼に。）上樣さへ何ほど大きい美しいお心をお見せになりますならば、さやうな小さいあやふやなんぞは、見る

間に消えてしまひませう、そして尙ほ一層御奉公を勵むに相違ムりませぬ。

勝賴。えらく諫言めいた口を利くではないか。拙者は餘り正直でね、今迄は人を信じてばかりゐたのだが、さうさう甘くは乘らないぞ。ヘン、先祖以來の君臣の關係なんぞ、本當に思つてゐる者が、抑も幾人ゐるのだ。淺間しいものだて。

平左衞門。恐れ乍ら申します。御先祖八幡太郎義家公に、絕へず害意を持つてゐた俘虜宗任さへ、たうとう眞心を傾けて御奉公申上げる樣になりましたのは、一體なぜでムります。宗任如き者をさへ、義家公が近侍の士としてお使ひになり、夜の忍びのお出ましにまで、たゞ宗任一人をお連れになり、御自分は車中に睡つてお居でになるといふ樣な、あんた御信任のなされ方であつた爲ではありませんか。どうぞ上樣、彼等のお供を叶へさしてやつて下さい。

昌輝。殊に斯う味方の人數不足の際、どれ程助かるか知れません。士氣も振つて、逃亡兵なども屹度無くなるに極つてをります。

勝賴。煩い、八ケ間しい！　許さぬと云つたら許すものかッ。御先祖の事なぞ其方どもから引合に出して貰はずとも、ちやんと知つてをる。特殊の場合を一般に當嵌められるかッ。山縣にしろ馬場にしろ、眞の忠義ある武士ならば、受持ちの固めの城をおめおめ敵に明渡しておいて、此の勝賴に合せる顏がある筈か。詰り彼等の卑怯の果てが此の敗軍となつたでないか。二百でも、八百でも、軍さのできる兵があるならば、なぜ敵軍中へ斬り込まなかつた？　申譯の立つだけの事をなぜしなかつた？

（釣閑と大炊、右の方より登場。）

そりや釣閑が來た、大炊が來た。どうだ釣閑、馬場山縣が供に加へて呉れと云つて、戰爭支度で來たさうだ、歷代

もやつて來たさうだ。其方達はどう思ふ? なあ、如何に拙者でも、さうさう迂濶に乘るものか。

大炊。あの……矢張り何でムいます、お供お許し下さる方が宜しからうと思ひます。今八百の兵があれば、どれ程心强いか知れません。

釣閑。どうぞ上樣、こればつかりは山縣以下の者共の願の通り、お供を許してやつて下さいまし。世々代々の君恩をも決して忘れ居る彼等とは思はれません。どうぞ、どうぞ上樣……。

勝頼。(云はせも果てず懷中より秋山攝津の去り狀を摑み出し、釣閑の面上に叩きつけ。)たはけ者め! 貴樣の昵懇な攝津はどうだ? これを讀め! 貴樣はかねて拙者に向ひ彼奴の事を何と云ひをつた?

釣閑。(非常に恐れ入り、おどおどしながら書狀を默讀する。)

大炊。(屹とした樣子で右書面をのぞき込む。釣閑に同情する風は微塵も見せない。)

勝頼。(半ば獨語。)御兄弟の木曾や穴山が敵に內通し、緣續きの小笠原や下條が軍さもせずに降參し、義で鳴ツた今福が君を瞞し、情誼に厚いと云はれた秋山攝津守が節を賣るなんぞと、これで人の和が何處にあらう。

勝頼。(嫌味式に云ふ。)みんな此の勝頼の愚かな爲さ、へン、云はずとも分ツてゐるて。

釣閑。(讀終ツた去り狀を取り落しなどして慷慨悲憤の態。)扨ても扨ても、斯樣な攝津奴であつたのか、あゝ、これでは人面獸心と云はうか何と云はうか、いやはや實に言語道斷……。(勝頼の前に頭を疊に摺りつける樣にして謝る。)この釣閑、全く面目次第もムいませぬ。何とでも上樣のお胸の透きます樣、存分の御處置をお加へ下さいまし、(併し又攝津を憎む自分の心を抑へかねる風を見せ)それにしても憎い攝津め! 憎い憎い攝津め!

大炊。(同じく慷慨悲憤の態。)うむ、これが人間として出來る事か。人の皮着た鬼畜の秋山! よくもよくも斯樣な去り

狀なんぞを……。

平左衛門。　では上樣は、どうしても彼等の願ひを……？

勝頼。（云ひ終るも待たず。）煩い、八ケ間しい。云ひつけた通りさッさとせい、さッさと去せろと彼奴等に傳へい。

大炊。　致し方ムいませぬ。詰りは山縣以下の者共の自慢が本でムいます、上樣の御立腹も御尤も至極。では、さやうに拙者が傳へに參ります。（とすたすたと退場。）

平左衛門。（深い溜息を洩らしつゝ退場。）

眞村、昌[illegible]、（期せずして顏を見合せ、共に深い溜息をつく。）

[illegible]。（尙ほ秋山攝津を憎む心の烈しい餘り、餘事には氣を向けかねてゐるかの態。）
（稍や長い間。）

昌[illegible]。（耳を欹て。）や、詰所の方で……。どうやら使の足輕が戻ッた樣な氣はひがするが……。（と半ば獨語ちて立ッて行かうとする。）

勝頼。　此處へ通せ。拙者も直接に樣子が聞き度い。

昌[illegible]（急ぎ退場。間。それから又入ッて來て。）お庭さきへ廻らせました、今直ぐそこへ。
（一同非常に緊張した期待の態。）

使の足輕。（稍や喘ぎつゝ庭口より入り來る。頬には少し血が流れ、着物は擘裂かれたり汚れたりしてゐる。大地に手をつき。）只今戻りました、遲く相成ッて面目ムいませぬが、これには仔細がムいます。先づ途中の事より申しますれば、

笹子峠より此方一里が程、逆茂木を植え柵を結び、何でも嚴しい防備の手配が出來てをります。

釣閑。何？ 嚴しい防備の手配？

勝頼。(自分の不安を強ひて打消し。)云ふ迄もなく織田勢を防ぐ爲めさ。で都留城下の様子はどうだ？ なぜ迎へをまだ寄越さぬ？

足輕。峠に構へて居ります仰山な關所で拙者を捕へまして、これは織田方の間者に相違ないと云ッて、拙者のあらゆる申開きも耳にも入れず、却ッて拙者を無理無體に拷問するのでムいます。織田軍の總勢は幾らあるかだの。信忠の旗元にも鐵砲隊がゐるかだの、さやうの事のみ尋ねるのでムいます。そして拙者を、知らない振りを張り通すかと云ッて、蹴たり踏んだり……あゝ實に、實に、拙者は殘念でたまりませぬ。

昌恒。足早を選んで其方を遣ッたが、さうだ、さうだ、其方はまだ新參で、郡内の兵とは顔見知りもなかッたかな。殊に色が白いので、上方兵と見られたな。こりやどうも其方には氣の毒であッた。

釣閑。(勝頼に聞えよがしに、昌恒に。)それゆゑ拙者が申した通り、あの今一人の足輕をお遣りなさればよかッたに。

勝頼。(昌恒を稍や叱りつける様に。)斯程大切な使者を出すのに、さう手拔かりをして何とする。ちえッ！ (氣を取り直し) 併し又、上方勢に出羽が警戒してゐる嚴密さも、それで大概察しられるね、(と誰にともなく賛成を求める。)

釣閑。はい、はい、それはもう、あの用意周到な出羽の事でムいますから、何から何まで遺漏は恐らくムいますまい。

眞村。(足輕に。)その方を織田の忍びの者と咎めたのは、關の者ども全體かね？

足輕。十四五名の足輕どもが、口を揃へてさう申しました。その餘の軍兵どもには拙者たうとう顔を合はせる事も出來ませなんだ。足輕大將にでも會つて是非わけを云ひ度いと思ひましたが、それも許して呉れませず そして拙者を牢屋

の様に暗い所へ押込めると云つて、無理矢理に引立てて行くのでムいます。その時拙者は一寸の隙をうかゞつて、一生懸命、やつとの事に逃げ戻つて参りました。

貞村。(考へる。)むう。

勝頼。(足輕に、)よろしい、一先づ引退れ。

貞村。(足輕に。)いや兎も角も大きに御苦勞。では又あとで拙者も少々尋ねたい事があるが、先づ引退つて休んで呉れ。

足輕。畏りました、(禮をして退場。)

大炊。(足輕と殆ど入違へに右側の唐紙をあけて登場。入口の所に手をつき手柄顔に。)上様、小山田八左衛門が參じました。たゞ一人、丸腰の儘で、詰所に扣へ、御沙汰を待つて居りまする。

勝頼。(短い間。見る間に嬉しさうな顔つきに變り。)こゝへ通せ、早く、こゝへ。

大炊。(引き返す。)

(一同稍や緊張。間。)

大炊。(八左衛門を連れて入り來る、)

八左衛門。(末座につき、稍や口早に。)お供に馳せ參じましてムいます。どうか御旗元にお組み入れ下さいます様、たツてお願ひ致します。實は叔父出羽守と一緒に新府城にて上様にお別れ致しましてから、拙者だけは(いさか)ひ和で又叔父と別れ、八幡の方へ兵を募りに參りました、ところが時日切迫、埒あかず、それに此方の上様の事が氣にかかツて仕方ありませず、たうとう空しく八左たゞ一人、走つて參ツた次第でムいます。此上はどうぞ御旗元にお加へ下さる様、起

非々々お願ひでムいます。叔父出羽守も、拙者が遅くなれば上様のお供を致して郡内へ參るものと、かねて承知致してる居のでムいます。

勝頼。（笑をさへ湛へて悦ぶ。）素肌で丸腰で參らずとも、眞心ある武士を疑ふ勝頼ではない。が、其方としては殊勝な心掛けだ。其方の樣な臣下を一人持つのは、あやふやな七八百の兵を從へてゐるより、餘つぽど頼もしいて。旗元に入つて働いて呉れ。併し武士の丸腰は些と不恰好だぞ、ハハ。（釣閑に）何か差し料を取らせい。それから拙者の替への具足一揃、これは當座の褒美なのだ。

八左衛門。（感泣の態。）はツ、限り無い君恩の程、八左死すとも忘れは致しませぬ。

（釣閑は立つて奥に入り、程なく鎧櫃一つに大小の刀を載せて捧げ持つて入り來り、八左の前に置く。八左なほ一層感泣の態。やがて八左は拜領の品を持つて詰所に入る。それから今度は脇差だけをさして又入り來る。）

八左衛門。（幾らか内々尋ねる樣な口調で、主として大炊に。）拙者はもう、多分上樣はもう都留へお越しになつてゐるかも知れぬと思つてゐました。それにしても、まだ都留からのお迎へが參らずにゐる譯ででもムりませうか？　併しお迎へが參らずとも、もうお越しになつてよいではムいますまいか。彼地では無論お待受け致して居るのでムいませうのに。

（一同不安の氣持を去つて、晴れ晴れしい顔つきになる。貞村だけはまだ腑に落ちない所があるらしく、殊に八左衛門に對して心を許せない樣子。）

平左衛門。（右側の唐紙をあけ、入口に中腰になつて、元氣よく。）お持ち兼ねの郡内よりのお迎への使者、竹田行村が參りました。

（一同愈よ明るい氣持になる。貞村だけはまだ安心しかねてゐる。）

八左衛門。（獨語。）あゝ、拙者は丁度よい時參つた。

竹田行村。（平左衛門と入代り登場、勝頼の前に手をつき。）舅出羽守信茂の使者として、お迎へに參上致しました。どうぞ明早朝にも郡内都留の岩殿城へお越しの程、お願でムります。少々遲くなりましたのは、何しろ上方勢に對する防戰の準備に、最善を盡した爲めでムります。もう百萬の敵を引き受けましても、決して落城の心配はムりませぬ。實は辨護の兵をも引連れて參る筈でムりましたが、愈よ織田勢と刄を交へる段となります迄は、なるだけ味方はひつそりとして、油斷をさせ度いといふ考から、拙者たゞ一人、しかも斯樣に身を窶して、夜陰にそつと參つた次第でムります。

勝頼。（威容を崩すまいと努めながら、嬉しい心を包みかねる。）うむ、いや何もかも行屆いた出羽の方寸、今更ながら感じ入る。

大炊。（勝頼の機嫌の直つた事が何より安心らしく。）御武運をお開きになります事、もう鏡にかけて見る樣なものでムいます。

釣閑。（同。）蛟龍も池中に居る事ありと申す通り、今日迄の上樣は、まあ其池中に忍んでお居でなされた樣なものでムりますて。

勝頼。（につこと笑む。）岩殿城の天險と、出羽以下一同の忠節とで、上方勢を鏖殺するのも、はや三四日の内と相成つたな。何といふ愉快な事だ。では早速、今夜にでも出發しやうか。

行村 八左。（瞬間無意識に目と目を見合せ、當惑と狼狽と不安の色を著しく浮べる。）

貞村。（右二人の樣子を拔目なく觀察し居る。）

八左衛門。（少し云ひ澁りながら勝頼に。）さあ、さやうでムります……それは、その、些とどうも……。

勝頼。（打笑ひ。）ハヽヽ、誰が夜發たうぞ。あの勝頼はこそこそと夜逃げをしたと云はれてよからうか。ハヽヽ、少々其方どもを試してみたまでさ。――さ、では皆も退つて寝るがよい。此の二三日、いろいろな心配やら考やらで、皆の頭も疲れたらう。拙者も寝やうて。（と奥へ入る。）

信勝。（同じく立つて奥へ入る。）

貞村、（此時まで腕を拱いて何やら考へてゐたが、何氣なく行村に。）拙者は少し貴殿にお尋ね致し度い事がありますが、一寸別室に來て下さらぬか、何、ほんの一寸の事なんで……。

行村。（瞬間少し妙な疑惧の色を浮べるが、直ぐ又平氣を装ひ。）何の御用か知りませぬが、お安い事でムいます。では參りませう。

（一同座を立つて引退る態にて舞臺まはる。）

四

（二三分間、黒い幕が垂れてゐる。近從の詰所。昌恒と貞村、寝ず番をしてゐる。）

昌恒。（時々不安さうに四邊の物音に耳を欹てなどしながら、）何だか拙者は妙に斯う氣がかりで仕方がありません。どうも味方の考は、一から十まで喰ひ違つて、ちぐはぐにばかりなつてゐるではありますまいか？

貞村。貴殿もさう思ひますか。信じねばならない事を皆疑ひ、警戒を要する事を直ぐ信ずる、といふのが上様に昨今殊に著しい樣で、どうも安心が出來ません。と云つて上樣のお考の間違つてゐる證據が、我々に分明してゐるとも云へず、強つてお諫めする譯にも行かず。

晶匣。詰り總てを洞見して味方一同を指導する中心的の人物が無い爲めですね。まるで舵の無い船の樣に……いや上樣が其の舵をお取りになつてはゐるものの……。

貞村。その舵取りたる上樣の目をゝ又心をも狂はせる一種の變な、怪しいものがありますのでね。

晶匣。(はつと妙な恐怖の衝動を覺えるが、直ぐ又何氣ない風を裝ひ、稍や低い聲で。)たゞの狐や狸のわざのみならば、まだ何とか仕樣もありませうが……どうも、その、長坂殿だの跡部殿だの……。

貞村。勿論さ。併し他にもまだまだありますぞ。矢張りあの小宮山殿があの時申上げた通り、目に見えない或る醜惡な根性が、まるで蟒の樣に上樣の心に喰ひ入つてゐますのさ。天地間の大きい永劫の道理を貴ばず、つまらぬ事で威張つたり偉がつたりする樣な醜惡な根性がね。上樣が亂暴をなさるのも、詰りその根性がさせるのですよ。亂暴をなさるから部下は日に日に反いて行くし、日に日に部下も少くなるので上樣は、内心非常にびくびくしてお居でなのです。そして、其びくびくしたお心で物事を判斷なさるから、何でもちぐはぐにばかりなりますよ。單純に斯うとばかりも云へないか知れませぬが、まあ大體は斯うですね。しみじみと拙者は昨今、あの小宮山殿の事を思ひ出します。

晶匣(感慨)あゝ、小宮山殿がゐて呉れたら、まさか是ほどの非運にもなつてはゐますまいに。併しあゝいふ小宮山殿でさへ、上樣の其の所謂醜惡な根性の爲めに斥けられてしまつたからには、もう萬事が絶望なのですかね?もう我々は刻々と不安が募るばつかりで、何とも仕方はありますまいか?(半ば獨語)もう都留へ行くばかりとなつてゐながら、此の一夜の明ける事だけさへ、どうして斯うも氣になるのだらう!

貞村(半ば獨語)。都留へも果して行けるか何うか……。(耳を欹て)。もう何處もすつかり靜まりましたね。何だか妙にしいんとした夜だなあ。少し其邊を見廻りませうか、又逃げ出す奴があらうも知れませんて。(刀を携げ立上る)。

[illegible]（輕く聞き咎めながら同じく立上り）。都留へは明日無論お發ちではありませんか……？　今夜は拙者が下手を見廻りませう。

（[illegible]恒は左へ、貞村は右へ靜かに退場。新の聲が何處かで微かに聞える外は、しいんとした靜かな夜、稍や長い間。）

彌生（奥より入る來る。呟く）。まあ、夢か知ら、あれほどはつきり見えたのに……。

松の方（程なく彌生の後より續いて入來る）。彌生かえ？　お前そんな所に何をしてゐます？

彌生。まあ、御免遊ばせ。どうして松の方樣はお目覺めになりまして？　私あんまり不思議な夢を見ましたので、どうしてもぢつとしてゐられませずに……。

松の方。どんな夢？

彌生（少し伏目になつて默）。

松の方（同情を寄せ）。又あの小宮山の夢なのね？　ね、屹度。

彌生（少しぢつと默つてゐてから、顏を上げ）。三千餘りの兵を引連れまして、此方へお供に參りました。そして不思議な事には、上樣も少しもお疑ひなど遊ばさず、萬事よき樣に計らつて與れと、それは本當に御立派な大將樣の態度でお頼みになつて居りました。そして、それが夢だなぞとは思へない位ゐ、はつきりしてゐたものですから……。あゝお羞かしうムいます、御免遊ばせ。（袖で顏を少し蔽ふ）。

松の方。それはお前、夢だともさ。もうあんな人が味方になんぞ來ますものか。御勘氣を受けて、流浪して、困り拔いてゐるといふ事ですもの。どんなに上樣を憎んでゐませう。賤しんでゐませう。私はもう御家はこれで終ひではないか

と思ひます。（と松の方も少し顔をそむける）。

彌生　それにしても、あんなにはツきり……。

松の方（幾らか彌生の心持に引き込まれ、淺ろに何やら考へつゝ半ば獨語）。でもねえ……私も何だか斯う少し不思議と思ふ事には、今お供として殘つて從いてゐる者は、みんな以前に小宮山と仲のよかつた人達だものねえ……。そりや跡部と長坂と、それに麟岳殿と、此の三人は昔から小宮山とは敵の様にしてゐたのだけれど、何だか近頃は此の三人の影が薄い様に私には思はれる。まるで居ない様な氣持さへする……。そして安部だの溫井だの、安西だの土屋だのいふ人達の小宮山贔負は無論のこと、（次第に少し涙ぐみ）足輕雜兵の末に至るまで、殘つてゐるのは皆あの小宮山に心服してゐる者ばかりらしい……。これも、あんな人の遺した感化であるから、當り前とも思はれるけれど、でも、何だか……。それに又、其様な夢を見たとお言ひだし……。

彌生（半ば無意識に）。でも、よしんば小宮山が實際歸つて來るにしましても……。

松の方（怪訝と憐憫の表情で彌生の顔をぢつと見詰める）。

彌生。あの、松の方様、女といふものは、いへ、女に限りますまいけれど、取りわけ女は、相手の男の愛を確かめる迄と、男に捨てられた後との外には、どうして眞面目な立派な心が持てない勝ちでムりませう？　殊に私は……あゝ、もう永劫あの人の傍へは寄れないのでムります（啜り泣く）。

松の方（痛はしげに彌生を見て、言葉でよりも態度や心持でより多く慰める）。さうお思ひでないがよい。今のお前の綺麗な心はもう永劫あの人の傍にゐる様に、許されてゐると替りはありません。

（間。）

彌生（氣を取り直して涙を拭き、靜かに土間に下り、表の戸口を細目にあけ、少しの間默つて外を見廻はし居る）。

（程遠からぬ所で、馬の嘶く聲が二三度聞える。）

松の方。さ、戻つて寢む事にしませう。こんなに莊嚴なしいんとした夜の靜けさを破るのは、何だか惡い事の樣な氣持がする。

彌生（闇の裡に何かを見とめ、それを屹度目を据えて確かめる態。つと其處を離れ、口早な抑へつけた樣な聲で松の方に）。誰か逃げます！（右の方へ向つて稍や高く口早に叫ぶ）、宿直のお侍樣、お侍樣、土屋樣、安部樣、どなたかお出なさいませ！

（右より昌恒、奥より勝頼、殆ど同時に登場。勝頼は夜着のまゝ。）

昌恒。何？　何ですと？　誰が逃げました？

彌生。長坂樣に跡部樣がお逃げの樣でムいます。屹度あのお二人でムいました。彼處の廐より馬を二頭引き出してお乘りになる所を、私確かにそれと見ました。

勝頼（憤怒）。早速、追つかけて射殺せ。餘人は兎も角、あの今迄拙者に諂ひ居つた人非人ども。さ、早く。（立てかけてあつた弓矢を急ぎ取り、昌恒に渡す）。

昌恒。ちえつ！果して彼奴等逃げ出しをツたか！（と飛鳥の樣に追つかけ行く）。

勝頼（獨語）おべつか者の大奴に釣閑、どうせ忠義の心なんぞを、奴等に望んではゐなかつたが、さうと知つて使つてゐたのは、どうせ腰拔、滅多に危險を冒してまで逃げは得すまいと多寡を括つて、半ばは軍旅の慰み物と思ひ貶してゐたればこそだ。然るによくも夜に紛れて……。（二人に向ひ）それにしても其方達は、彼奴等の逃亡によく氣付いた

な？

彌生。私が夢に魘されてゐます所を松の方様が起して下さいました時、妙な物音が庭の方でしましたので、何となく胸騒ぎが致しまして、急いで來てみますと今の次第でムいました。

松の方。あい二人が四年前にゐないで呉れたら、斯様な破目にもなりますまいに、いやな軍陣のお慰みでムりましたこと

勝頼（少し愕然として）。何？　四年前？（又自分で取消す）いや、なに、何でもないわい。

平左衛門（怪訝の面もちで右の方より急ぎ登場。口早に）。これは上様、どういふ譯で今頃こゝに……？　して又そのお顔色は？

勝頼（稍どぎまぎと口早に）。其方もあと追ッかけて射殺し……射殺して呉れ、跡部長坂が今逃げたのだ。昌恒は飛んで行つた。さ、其方も弓がよい。（弓矢を取つて渡す）。

平左衛門（引つたくる樣に受取りさま）。では上樣。（と一散に追つかけ行く。）

勝頼（女二人に）。そなた達のお蔭だ。もし逃げ延びれば此方の事情を、一層細かに敵方に傳へる奴等だ。どうだらう、昌恒は射とめたらうか？　安西は此と遲かつたが、どれ位ゐ逃げてゐる頃なのだ？

彌生。今さき馬が二聲三聲嘶きましたのが、あの二人の引出す所でムいましたから……。

勝頼（悚然として云ひ遮ぎる）。何？馬が嘶いた？む、それは拙者も知つてゐる。その後か！では可し、分つた。

松の方。上樣もよう直ぐお目覺めでムいましたこと。

勝頼。何だか心氣が昻つて碌に眠れず、うとうとしてゐる所に、それ、その、先刻の馬の嘶きさ……（一寸云ひ淀む

が、稍や訴へる様な心持で云つてしまふ）あゝ、あの聲で、何だか胸騒ぎがして堪らなくなり、跳ね起きたのさ、そして庭の樹蔭を見てみたのさ。すると、あの、それ、四年前に古府の庭に出た馬の生首が二つ、矢張り噛み合ひ乍ら轉がつてゐるではないか。日暮れ方にも拙者一人の時に見えたがね、又見えたのさ。そして其の二つの首が、今度は妙に斯う人の顔の様になつて、あの越後の喜平次景勝に、今一つは（と松の方を見）そなたの兄の三郎景虎殿の様になるではないか。

松の方（愕きと怖れの輕い痙攣）。まあ！

彌生（勝賴の語るのを咎める様な、松の方を守護する様な表情でゐる）。

勝賴。なほ見てゐると、喜平次の顔をした首は案の定、三郎殿の方を噛み殺し、それから首だけでなく胴も足も次第に生へ、誰かを乘せて、ずつと彼方へ行つてしまつたが、その乘手が一寸振り返つた顔は、あの腰元頭のおげんに何うやら似てゐたつけ、……。そしてすつかり消え失せたのだ。と思ふと其時彌生の消魂しい聲がしたので、早速やつて來てみた譯さ。（强いて元氣づけ）。なあに、狐や狸の惡戯なのさ。して其お蔭に釣閑どもの逃亡を早く氣付いてよかつた譯さ。

（と云つて勝賴は戸口より外に少し出て、昌恒等の戻り來るのを待つ心持。と、また逃走兵らしい者二三人、木蔭の邊りに見え隱れして、此方の戸口より射す光を憚りながら、忍びつゝ急ぎ走り行く様子。勝賴も直ぐそれに氣付き、新たな憤怒と共に一寸追つかけやうとするが、又自分を制する様な諦める様な態度。雲破れ月出づ。）

勝賴（漫ろに感慨を覺え獨白）。毎日々々、逃げる奴どもばかりだなあ。拙者の德望が無いのも源因かも知れぬて。あ

ゝ、何だか斯う此の勝頼の命數も見えて來た樣だ……。（氣を取直し强ひて笑ふ）、何だ、ハハハハ、明日郡内へ行きさへすれば、萬事安心ではないか。（間。眺めるともなく四方の山の姿など眺めるに連れ、又妙な不安に襲はれる）、夜中に見るせいか、どの山も、どの山も、皆まつ黑に肩をならべて、ぬつと無氣味に押し默つてゐるわい。おゝ、まるで拙者に今にも押つかぶさつて來さうな姿ぢやないか。先き程は賴もしい險山と見えたのが、今では何だか拙者を鵜呑みにもしさうな魔の樣にさへ思はれる。

彌生（戶口に來て）。お一人で上樣は何を仰しやつてゐますか知ら。内へお入りなさいますれば宜しうムいませうのに……。

勝頼（入口の方へ歩んで來ながら、矢張り半ば獨語）。いや、何でもない。たゞね、目に見えぬ魔といふものは、押しのけても押しのけても、何處からともなく、いつの間にか入り込んで來て、人の心を威かすのだ。あゝ……。

彌生（勝頼の顏の蒼白さに今更の樣に愕くが、その愕きを押し隱し、それとなく靜かに又松の方の傍へ行く）。

昌恒（走り戻り來る。片手に弓矢、片手に跡部の首を携げ、息遣ひ荒く）。釣閑を取逃がし、何とも申譯ムいませぬ。奴等が徒歩（かち）ならば、二人とも決して逃がしは致しませぬが、馬に鞭當て一目散に落ちました。幸ひ提燈を鹽手に引付け落ちて行くのが見えましたので、月は曇つてゐましたが、その火を目當てに、唯の一箭で射落しました。それが此の大炊でムいます。安西も程なく拙者に追つつきましたが、はや釣閑は、姿も見えずなつてゐました。が又其時別な一人の逃亡兵が丁度走つて來たのを安西、頭より胴へ、まつ二つに致しました。や、今戾つて參ります。

平左衞門（走り戻り來る）。何とも申譯ムりませぬ、大事の釣閑を取逃がし、ちえツ、無念至極！

勝頼。其方は遲かつたから無理もない。だが又別な一人を斬り殺して呉れて滿足ぢや。

（勝頼以下三名とも內に入る。信勝も奥より登場。）

昌恒（大炊の死顔を炬火の明りで見つめ、情激して涙ぐみ）。上樣、拙者は此の……此の白髪頭を見ますれば、思へば思ふ程――……何事も此奴と釣閑めの爲めに……そして、たうとう斯ういふ破目になりまして……。

彌生（昌恒をさも賤しむらしく見てゐる）。

勝頼。云つて吳れるな、拙者が惡かつた……。此の（と首を取り上げ、土間に投げつける）人非人め！

（松の方、彌生、共に顔をそむける。）

松の方（淺間しげに獨語）。まあ、どんな人でも、死ねば佛と云つてあるのに！

信勝（半ば獨語）。拙者は生きた釣閑を蹴飛ばさうとして叱られたが、今は死首を投げつけて、フン、それが何になるのであらう！

（貞村と常陸、右の方より急ぎ登場。）

常陸（勝頼を屹と見て、鋭く）。上樣、出羽は背きましたぞツ！

貞村（同）。小山田信茂、愈よ敵に內通しましたツ！

勝頼（自分の耳を疑ひ）。何、な、なんだと？

昌恒、平左衛門（と同時に）。何ですと？　誰が何をしましたと？

貞村（一息に云はうとする）。古府に殘しました味方のあの二名の間者、信忠勢の動靜を申上げやう爲め、早馬で石和を過ぎ、つい二時餘り前、勝沼近く迄來ました時、菅笠扮裝の出羽方の武者十幾名、これ亦大急ぎに古府を差して行くのに出會ひ、さては味方と、挨拶もし、任務其他をも尋ねました所、物をも云はずに向うの奴等は、二人に斬つてか

ゝりまして……

源左（急ぎ奥に入る）。

常陸（貞村のあとを續け）一人は全くしてやられ、一人は斬られて打倒れ、路傍の崖より滑り落ちて、一寸氣が遠くなりましたのを、死んだと彼方の奴等は心得、これで挾み討ちの策略は上首尾々々々々と、悦び合つて又直ぐ西へ、笑ひながら馬を飛ばしたと申します。その間者が、と云ふのが即ち拙者の部下の足輕ですが、正氣に復して、近所の百姓馬を盜み出し、つい其處まで參りましての口上が右の通りで、間者はたうとう第三宿舍の入口で、がツくり氣力が拔けてしまひ、これにて直かに申上げさせられなんだのが、殘念でムります。あゝ足輕とは云ひ乍ら、惜い武士を失ひました。――こりや上樣、一刻も御油斷はなりませんぞ。奥の詰所を見て下され、出羽の母親は寢て居りますか、おげん殿は居りますか？（昌恒と平左衛門に）行村はゐますか？　八左はゐますか？

昌恒、平左衛門（右の方へ飛んで行く）

（麟岳、他の麾元二名、雜兵七八名、方々より急ぎ登場。皆極度に緊張の態。）

麟岳（まだ幾らか信じかねる樣子）。何だと？　信茂が、あの出羽が叛いたと？

源左（急ぎ奥より入り來る）おげん樣は居りませぬ、寢床は藻拔けの殼でムります。枕もとの屏風は倒れて、草鞋の痕が皆で九つ、椽から疊へかけて印いて居ります。

（昌恒と平左衛門、飛んで戻り來る。）

昌恒（口疾に）。相違ムりませぬ。先程參りました小山田八左と竹田行村の兩人、出羽の母おげんを盜み出し、もう疾ツくに逃げうせてゐます。

平左衛門（同）。斯までかく振りし居つた八左の寢床に、溫みの氣さへ無いので見れば、あれから直ぐ仕事をしたに相違ない。拜領のお鎧は、櫃諸共に蹴散らして居ります。

[illegible]。おげん樣の寢間の草鞋の痕も、庭さきの泥濘を蹈んでゐながら、すッかり乾いて印いて居ります。

信勝（氣早に）、何？　信茂が叛いた？

[illegible]（怖れをののく）。あの……あの出羽守が內通した？あの小……小……小山田が裏切ッた？

勝頼。（顏色次第に蒼ざめ、目は異樣に光る）さうだといふ事だ、あの信茂が、あの男が、拙者を騙したといふ事だ。（凄く笑ふ）、ハハハ。其樣な事があッてよいか、ハハハ。織田に降參して、內通して、拙者を挾撃ちだとな？……仁義忠孝を人にも說き、自分も行ッてゐた筈の、あの小山田信茂がさ……。（間。一層凄く笑ふ）、ハハハハ……

一同（心配と同情に滿ちた目つきで、一心に勝頼を見詰め居る）。

勝頼（殆ど死人の樣な顏になり）。其方どもが一心に拙者を見つめてゐるのは、信茂の叛逆が本當だからだな。拙者が誰にも誰にも逃げられて、此世に又とない不仕合せ者であるからだな。さうだ、むう、さうだ、拙者は又とない不仕合せ者だ。

昌恒、常陸（顏を反け、悲憤と同情の淚をのむ）。

勝頼。あの八左と、あの行村とは、此の勝頼を、此の不仕合せな愚かの勝頼を、うまうまと騙したのだな。（勝頼の顏は殆ど蒼白の極に達し、目は氷の樣に輝き、頭髮盡く天を指す）。――さ、これから岩殿へ押しかけるのだ。味方は七十人か、五十人か、二十人か。敵は千か、萬か、十萬か、幾らでもよい。して、あの信茂の首を引拔き、それから古府へ引き返して信忠の首だ。して其の二つを、あの信長のを引拔く前に、先以て信長の面に擲きつけてやるのだ。さ、

出發だ、具足を持て、太刀を持て……。皆も早く支度をせい、早くせぬかッ……。何故默り居る？ 何故動かぬ？ ……拙者の此の一念が通らぬとな？ 身は矢丸に中つたら倒れもしやう、槍や刀で殺されもしやう。魂が死ぬるか、死ぬか、どうだ……。具足を運ばぬ？ よし、それならば、（と急に衰い極みの靜けさになり、幽靈の樣にすうゝッと自分で奥へ行かうとする）

（貞村と平左衞門は勝頼の裾を押へ、昌恒、常陸、鱗岳等は或は顔をそむけたり、疊に額を伏せたりして忍び泣きしてゐる。――幕。）

第三幕（修羅道入口）

主要人物

勝頼。信勝。松の方。彌生。昌恒。平左衞門。常陸。貞村。鱗岳。（皆第二幕既出の人物）

内膳。又七郎。（第一幕既出の人物）。

岩下右近。小原忠五郎。皆井小助。多田新藏。（四人とも十二三歳の少年）

右の外、武田方の足輕雜兵若干。

時　大正十年三月十日（第二幕の直ぐ翌日）、申の下刻（今の午后五時）頃より、十一日の夜明けまで。

所　甲斐國東八代郡田野の東北のはづれと、天目山の半腹。

一

（東八代郡田野の東北のはづれ、日川の東岸。山徑ではあるが其邊だけ幅も廣く、傾斜も緩になツてゐる。右後方に川裾は蜿々と山谷の間を縫ツて、遙かに鶴瀬の方へ走ツてゐるのが目渡される。前齣の翌日、申の刻頃。溫井常陸と安部貞村、共に甲冑に身を固め、槍を杖づいたり肩にかけたりして右手より登ツて來る。）

貞村。さ、此邊で我々も少し休んでお待ちしませう。（一寸後ろを振り返り）大分お遲れになツてゐると見え、馬の蹄の音も聞えませんな。

常陸。此處はまるで平地の樣で、休むには持ツて來いの場所ですな。（ずツと前方へ來て、下の方日川の水面を見おろす態）併し川は白泡を飛ばして流れてゐるから、すぐ又險しい登りになりますぞ。（路傍の石を選み腰をおろす）どれ、お待ちしますかな。だが又上方勢の用心と來ては、險阻な山徑を無案内な爲めとは云へ、まだ鶴瀬までも來てないらしいではありませんか。

眞村 (木の根に腰かけ)。用心よりも臆病さ。臆病なればこそ、(深い悲憤の情を抑へ) 罪さに無緣の惠林寺を燒き、快川和尚を虐殺し、無辜の婦女童幼を殘害して、それで威光を示さうといふ、見下げ果てた上方勢さ。

常陸。彼奴等と愈よ刄を交へる段となるまでは、忘れた積りでゐやうと思ツてゐましたのを、そのお言葉で……。(勃として込み上げて來るらしい痛憤の情を抑へ抑へ)、戰國亂世の習ひとして、民屋放火も家具家財の掠奪も、又田地作物の狼藉も、珍らしいとは云はないが、今度の彼奴等の殘忍さは……殊に先手の將とかいふ川尻肥前とやら瀧川左近とやらの酷たらしさは……(川尻等を今眼前に置いてゐるかの樣に)、うぬ、今に見てをれ……。

(馬蹄の音、かすかに聞え來る。)

眞村。いや、拙者が云ひ出して悪うムツた。今徒らに憤激の火を燃え立たして、我と我が身を燒き盡しては此方の損。やがて彼奴等に思ひ知らせる時が來るまでは、ぢツと耐へてゐませうよ。

常陸 (苦笑し) フン、いつ其時が來ますか知ら。よしや運よく川尻ぐらゐの素ツ首に (太刀の柄を一寸握り) これを喰はしてやる場合があるにもせよ、それしきの事で我々の此の腹の虫が、フン、治まりませうか。せめて信忠の陣にでも斬り込む事が出來るのなら、まだ諦めもつけ易いが。(立上り) や、もう上樣が來らしツた。

眞村 (同じく立上り)。我等の太刀や槍さきは、如何に奮鬪激戰しても、此處から古府の信忠の陣まで遠く道理は勿論ないが、美濃岩村に在陣の信長の胸元にも、我等の凝ツた一念が、ぐさと立たずに何としやう。(間)。

(勝賴、信勝、松の方の三名は馬上、その餘は徒歩で前後に從ひ、右より登場。前に昌恒、次に平左衛門。平左衛門は武田家の旗を卷いて立てながら持ツてゐる。足輕二名。後ろに麟岳、小原忠五郎、皆井小助。腰元三四名、その中に彌生もゐる。足輕雜兵等若干續く。すべて四十餘名。勝賴馬を止め、一行亦それに倣ふ)。

勝賴（人を信じかねる目つきと口調で、馬上より常陸等に）。ずんずん先きに行ッてしまッたぢやないか。逃げ度い所存で折角急ぎ乍ら、一寸休んでゐる所を拙者に追付かれ、逃げるにも逃げられずといふ譯合か。ヘン、御遠慮なくお逃げなされぢや。（誰も答へない。流石に勝賴自身少し恥ぢ）、それとも待ッてゐたのか、拙者を待ッてゐて呉れたのか。

平左衞門（反抗的に冷笑し）。逃げ度さに急いで行ッて、誰が休みなど致しませう。ねえ、溫井殿、安部殿。先立ちとして一二丁前に行けとのお言葉を、上樣御自身がもうお忘れになッたと見えます。

勝賴。（憤然とするが、又自分で制し、どぎまぎと）。だから待ッてゐたかと云ッたぢやないか。（極り惡さを紛らすべく）いや拙者も待ッてやらう、まだ後から足弱どもが來るらしいて。そして一休みしやうや。今日中には敵も寄せまいしね、（又漫ろに不安を覺え）それとも攻寄せて來るだらうか？

常陸（勝賴のその臆病を齒痒く思ふ心持。併し其心持を努めて抑へ）。鷲や鷹みたいに翼の生へた敵でもありますまいし、まさか空を飛んでも來ないでせうよ。

勝賴、松の方、信勝（皆馬より下りる）。

（一同その邊によろしく休む）

勝賴（又不安さうに四方を見廻しなどする）。どうも昨日の夜から此來、四方の山の姿までが、妙に氣味惡く押し默ッて、脅かす樣に聳えてゐる。いッそ早く夜になッて、何も見えなくなッてしまへばよいに。

平左衞門。早く暮れれば早く明けるし、そして「死」といふ怪物が、愈よくわッと大口あいて、たゞ一呑みと來ますさあね。

常陸。さうすりやそれで永却の夜となり、愈よ何も見えなくなッて終ひますさ。（と云ッて彼自身も一寸しいんとした氣持に

なる。その氣持は平左衞門、昌恒以下の者へも及ぶ)。

昌恒 (氣を取直し、手を額に翳して右後方を見おろす)。なる程、誰やら二人ヤツて來ますぞ。うむ、岩下右近に多田新藏か。

平左衞門 (同じく見おろし)。えツちら、おツちら、登ツて來るなあ。何しろ年齢も行かない子供達だし……(と云ツて少し顏をそむけ)、待ツてやらなくてはいけない。

彌生 (同じく見おろし、憐む)。それに、あの荷は嘸ぞ重からうのに……。

忠五郎 (小助に) 我々二人で持ツて來てやればよかツたなあ。

小助。本當に濟まなかツた。

勝賴。まさか敵ではあるまいね? 小さく見えるのは遠いからではあるまいか? 敵の間者ではなからうか?

常陸 (勝賴に聞えよがしに)。臣下の者の顏形さへお見損ひになるのだから、その心の忠不忠をお取違へになる位は(少し拍子をつけ)、無理にも非理にもあらさりけりか。

勝賴 (憤然と)。何を云ふ、無禮至極な! 似た者は多いぞ。それに、戰をする時は、注意に注意を重ね、用心に用心を加へてこそ、進退すべきものではないか。

常陸 (ハツと首をすくめ、恐縮した樣な滑稽な身振りで獨語)。あんまり調子に乘ツて枝が出過ぎて、コツンと一つ喰はされたか。併しこれでも、隨分自由な空氣が呼吸される樣になツたものだて。

信勝 (小助と忠五郎とに)。もう直ぐそこに來た。あすこから此處まで、其方達二人であの荷は持ツて來てやるがよい。

(小助と忠五郎、右の方へ退場。)

勝頼。よもや、あの、何ではあるまいね。小助等は……。いや、さうでない。(と自分で急ぎ取消す。そして、其の氣拙さを紛らすべく。急に思ひついた様な調子で)。さうだ、さうだ、信勝、こゝへお來でなさい。

(足輕の一人が勝頼の前に熊の皮を敷く。)

信勝(熊の皮の上に坐り、勝頼に對する)。

勝頼(鹿爪らしく)。何やらかやらの心づかひに絶へ間がなく、つい斯う云ひ遅れたが、そなたは此處より落ち延びるがよい。御旗、楯無を足輕一名に持たせ、此處より山續きに武藏へ出で、それから出羽奥州へ向ふもよからう、そして時節を見はからひ、武田家再興の旗を擧げるがよい。都合によッては、越後の喜平次景勝を頼りなさい。景勝は拙者の旗下の格でもあるし、そなたに取ッては叔母聟でもある事だから、まさか頭を横には振るまい。ね、そして織田徳川を打破り、一つには武田家を再興して武名を天下に輝かし、一つには此の勝頼の鬱憤を晴らして下さい。よいかね、頼みますぞ。

一同(傾聽する)。

信勝(小し考へてから)。いへ、拙者はお言葉に從ふ事は出來ませぬ。御家の斷絶は悲しい事に相違ありませぬが、あの景勝が拙者を護り立てて兵を擧げやうなんぞとは、到底考へる事も出來ませぬ。如何にも景勝は父上のお蔭に(ちらと松の方を掠め見て)景虎叔父に打勝ッて、謙信の跡を取ッたでせう、そして金銀寶玉の賄賂により菊叔母上をも嫁に貰ッたでせう。けれども景勝は最初から、たゞ武田家を利用するのが目的らしかッたではありませんか。敗殘の武田の落人を、何の酔興で護り立ててなんぞ呉れませう。(短い間)。又あてもなく出羽奥州とさまよい歩いて何になります。今迄とても頼みにならぬ事を頼みにして、あの古府で殺された下方彦作の言葉の通り、ぢりぢりと川奥さしてお

逃げにばかりなッたればこそ、斯様に悲惨な場合となッたではありませんか。新府城を枕にして潔く決戦なさいましたなら、もッともッと、どれ程立派な戦ひが出來たか知れませぬ。あゝ拙者は、それを思ふと、殘念で殘念で堪りませぬ。

勝頼 （腕を拱いて無言）。

信勝 （少し間をおいて）。拙者の様な弱年者が斯う申しますと、何だか出しや張る様にも聞えませうが、今から思へば、本當にあの小宮山が地團駄踏んで口惜しがッた通り、折角景虎叔父への援軍をお出しになりながら、そして景勝を散々お破りになりながら、金銀にお目が昏んで景勝と和睦なされ、たうとう景虎叔父を見殺しなされましたのですもの、その天罰によッてだけでも、斯うなるのが當然ではありますまいか。

勝頼 （やゝ良心の苛責を覺えつゝ、厭味式な口調で）。それは皆この勝頼の不明な爲めさ。それは云はずと分ッてゐる。だがもう今となッては、そなたが武田家再興の爲め此處を去るのが厭ならば、無理にさうしなさいとは云はないのだから、さう過去の事まで陳べ立てずともよいさ。さう親を恥しめるばかりが、そなたの能でもあるまいて。

信勝 （もとの座へ戻る）。

勝頼 （半ば獨語）。さう云ッて貰はずとも、昨夜の馬の生首だけで、もうもう勝頼には澤山だ。妖怪變化ぐらゐを恐れなんぞは決してせぬが、妙に斯う暗い氣持がするものだなあ。（間。氣を取直し、松の方の方へ身を少し捩ぢ向けて云ふ。松の方も少しく膝を進める）、そなたにこそ早く拙者は云はねばならなかッた。今信勝よりもお叱りを頂戴した通り拙者は四年前に目前の利に心が昏み、景虎殿を見殺しにして、氏政義兄と鉾楯の仲とはなッたが、そなたは血を分けた兄妹だもの、拙者の遺言だと云ッてこれから行ッて縋ッたならば、情誼に厚い義兄上が、どうしてそなたを不便に

思はぬ事があらう。(前方を指し)あの大菩薩峠を越えて小菅川に沿うて下れば、武藏國は直ぐだから、それから相模へは雜作はない。ね、さうしてお呉れ、そして拙者よりも義兄上に宜しくと傳へてお呉れ。そして我々父子の菩提をも弔ッてお呉れ。(足輕等の間へ向ひ)、おい、劍持、劍持但馬、何處へ行ッた?

松の方 (稍やつんとして)。もう二時程前に劍持は相模へ向ッて發ちました。昨夜の間者と同道で發ちましたのを、どうして上樣が御存知なかッたでせう。ほら、私の髮を私の身代りとして持ッて行ッたのは、あれは誰でしたか知ら。もう其樣な事は仰しやらないで下さいまし。

岩下右近、多田新藏 (少し喘ぎつゝ一行に追ひつき來り、休む)。

貞村、平左衞門(右二人をいたはる)。

勝賴 (間。それから稍や離れてゐる麟岳に呼びかける)。麟岳御坊、少しの間これへ!

麟岳 (勝賴の前に進み出る)。

勝賴。只今お聞きの通り、信勝も內室も、あの樣に云ッて、拙者の言葉を用ひぬから、そなたも自然同じ意向に制せられてムらうも知れぬが、そなたこそ出家の身として、此處までお見屆け下さッたのは、もうこれで十二分のお志と申すもの、どうぞこれよりお歸りになッて、我々一同の冥福をお祈り下され。どうぞこれからお戻り下さゝ。

麟岳 (不安)。敎への爲めを思ひますれば、一日も多く生き長らへて、法の道を修めるのが本當ではムりませぬ。(勝賴の氣色を損ねはしなかッたかと危ぶみ、急に調子を替へ)併し桑門としても、代々の御厚恩を忘れる事は出來ませぬ。でムいますから、拙僧としては、此際眞俗の別はないと思ひます、はい。未來永劫、冥途黃泉までもお供致します。(餘り立派に云ひ過ぎて失策ッた! といふ心持を隱すべく、少しどぎまぎする)。

勝頼 (滿足の心を押し隱し)。方々のさういふお志ならば、是非もない。それにしても此の勝頼は、抑も何の德があれば、さういふ厚い志を受けるのやら。

勝資 (もとの席へ戻る)。

平左衛門 (皮肉に半ば獨白)。全くだ、上樣には抑も何のお心があれば、さういふ厚い志を、今更お試しになるのやら、お確めになるのやら。フン、もう斯うなツて、誰も落ち延びやうたツて、落ち延びられない事くらゐは、疾うに分ツてゐるのだからな。

帶刀 (平左衛門に調子を合せ)。お心細いからの事、死が怖ろしいからの事さ。然しそれは我々皆も同じで、親に貰ツたかけ替へもない大事な命を惜むのが、何も上樣お一人だけに許されてゐるといふ事もあるまいし……。

(此の時小助と忠五郎追ひつき、荷を其邊に置いて休む。)

昌恒 (又右後方を見おろし、稍や緊張の表情で)。や、又ずツと下の方から、誰やら二人登ツて來るが、もう足弱連もゐなかつた筈であるのに……?

勝頼 (不安)。今度こそ敵であらう? だが二人限りだな? 敵の間者だな?

平左衛門、帶刀等 (皆右後方を見おろす)。

眞村 (一心に視力を凝らし)。どうやら馬場美濃守の樣な歩き振りだな。そして一人は息子の民部少輔の樣にも見えるが……?

信勝 (同じく瞳を凝らし)。や、此方を見た。手を上げて合圖をする樣だ。これは無論味方だ。鎧も着てゐないし、背負ツてゐるのが鎧櫃らしい。(彼も片手を上げ合圖をする)。

松の方 (何氣なく)。小宮山ではないか知ら……(自分に復り)でもあの人が來るわけはなし………。さうよ、違ふ様だわ。でも誰なのだらう、味方の人には相違ないのだけれど。

勝賴。小宮山? 冗談を云ツてはいけない。ハハハ。初鹿野傳右衛門ではないかね。味方の者なら兎も角も待ツてやらうよ。

平左衛門。初鹿野よりはずツと上品な武士らしく見えますが……? あいた、あの出ツ岬で見えなくなつた。(それで一同は又此方へ向き直り、別の話をする。彌生たゞ一人は依然として身動きもせず右後方を見つめてゐる。)

御岳。小宮山なんぞが來ますものか。傲慢不遜なあの男は、昨今の上様の御難儀を、好い氣味に思つて、舌でも出してゐませうさ。

勝賴 (貞村に)。昨日駒飼に來てお供をしたいと云つたのは馬場民部だつたね、馬場に屋代に山縣だつたね? むう(と後悔の態)、許して供をさせる方がよかつた様な氣持もする……。もう、まさかあの三人が來ても與れまいし、來やうとしても來られまい。昨日もせめてあの三人に會ふだけでも會つてみればよかつたなあ。

貞村。お會ひになつてみて、それでお疑ひが晴れずにお戻しになつたのなら、まだ其の方が心殘りも少い譯でありましたが。

勝賴。つい少し前に、あの秋山攝津が、あんな去り狀なんぞを寄越しくさつたものだから、拙者の心は人を疑ふ思ひで一ぱいになつてゐた矢さきだつたのでね、……あゝよくない事をした。

平左衛門 (稍や低い聲で常陸に)。どうです、妙に上様が感心な事を仰しやるではありませんか。

常陸。 明日雨にでもならなければ好いのですがね。――で、あの三人は、あれから何うなつたのでせう？ あれでは厭でも敵に降參する外ありませんからね。

平左衛門。 南の方へ山を越えて、駿河から相模へでも出てゐれば好いのですがね。どうも氣の毒なものですよ。

信勝（誰にともなく）。一體あんな秋山攝津を、どうして彼様（あんな）に御信任になつてゐたのだか。

勝頼。 もうもう秋山の事なんぞ、云はないでゐてお呉れ。あんな去り狀なんぞを寄越しくさツて……（と又憤激しさうになる）。

常陸（云ひ遮る）。いへ、いへ、あんなものでも持たして寄越すだけは、まだまだ相濟まないといふ心がありますからさ。）

（一心に右後方を見おろしてゐた彌生は、此時電氣にでも撃たれた様にはつとして左方へ引退き、人々の後ろへ隠れる様に入る。）

右近、忠五郎（共に右後方を見おろしてゐたが、殆ど同時に叫ぶ）。や、あれは小宮山様だ。小宮山の御兄弟だ！

平左衛門。 なに、小宮山殿？ 出つ岬の此方に見えたかね？（と走り行き、見おろす）うむ、さうだ、小宮山兄弟だ、（抑へつけた驚喜の聲で）小宮山兄弟がやつて來た。

昌恒、信勝、常陸、眞村、勝頼等（殆ど同時に右の方へ走り來り見おろす。口々に）。何だよ？ なに、小宮山？ あの内膳殿？ 友信殿？ なに？ なに？

（一同、心の底まで震盪する様な深いショックを受け、少しの間そこに釘付けにされた様に佇立、無言。それから深い溜息。勝頼は頭を垂れて悄然と左の方へ戻る。）

常陸（勝頼の傍へ行き、稍や低い聲で）。あれをも上樣はお疑ひになりますかな。
勝頼（無言、たゞ顔をそむける）。
常陸（半ば獨語、感慨の籠つた口調）。最後のお供に來たのでなくて、外に今更何の用事があるものか。それにしても、よくまあ來て呉れたものだなあ。
勝頼（頭を垂れたまゝ）。拙者は彼に會ふわけに行かない。長の暇まを遣つたでないか。
常陸。男らしくお詫び……（云ひ改める）、いや、お取消しになればよいではありませんか。
（昌恒、平左衛門、貞村等も、低い聲で切りに感嘆の意を洩らして居る。鱗岳は極り惡さうに人々の後ろでもぢもぢする。松の方は急いで彌生の傍へ行き、彌生の手を取つて少し俯向き、無言。間。——昌恒等の感嘆の囁きがやみ、小宮山内膳正友信、少し後れて弟又七郎、共に鎧櫃を背にし、袋を嵌めた槍を杖づき、少し喘ぎつゝ右の方より登場。）
内膳（昌恒に）。土屋殿お久し振りでムいます。（鎧櫃を傍におろす）。
昌恒（幾らか勝頼を憚る樣に）。お久し振でムいます、お懐かしうムいます。
平左衛門（進み寄つて内膳の手を取り）。小宮山殿、お懐かしうムいますぞ。（顔をそむける）。
内膳（も一寸顔をそむけるが、直ぐ又氣を取直して屹と）。安西殿、土屋殿、さ、どうぞ御勘氣のお許しを願つて下さい。でなければ、拙者が直接にお願ひします。
昌恒（勝頼の前に行く）。
常陸（内膳の前に來て、その手を取り握りしめる）。小宮山殿！

平左衞門 (低い聲で傷々しげに、内膳に)。隨分お變りになりましたなあ。

貞村 (同じく)。見違へる樣にお瘦せになりましたなあ。

常陸 (同じく)。お顏も色のわるいこと。又七郎殿も御同樣。

内膳 (少し强ひて笑ひ)。なあに、もうこれで大分恢復しましたよ。

昌恒 (勝賴に)。上樣、あらためて拙者よりお願ひする迄も厶りますまい。御最後のお供に參つた小宮山で厶ります。御勘氣おゆるしを待つて居ります。我々一同も待つて居ります。

(一同無言。緊張。)

勝賴 (默。それから再參何か云はうとするが、又口を噤んでしまふ可成り長い間)。

昌恒 (迫る)。上樣、おゆるしを待つて居ります。我々よりもお願ひで厶います。こればつかりは我々一同、おゆるしを得ずにはおかれません。

勝賴 (辛うじて絞り出す樣に)。……拙者が惡かつた……。(顏をそむける)。

(一同又しいんとした氣持に襲はれる。内膳はつかつかと勝賴の前へ進み行き、勝賴の手を取る。二人とも立つたまゝ暫く無言)。

内膳 (それから又靜かに常陸等の傍へ步んで來て)、さ、これでもう四年前の友信になりました。過ぎ去つた事は仕方がない。女々しい愚痴や感慨は、もう一切云ひつこなし。拙者も聞くまい。御厄介でも皆樣の死出の旅路の路連れに、又昔のまゝの意地惡者が舞ひ戾つて來た譯です。(又七郎の傍へ行き)、さ、そなたの杞憂は不要になつた、此の通り立派にお許しを受けたのだから、そなたは早く戾つて吳れ。

又七郎（躊躇。少し涙を浮べ）。でも……でも、拙者は妻子の事よりも、……このまゝ兄上と一緒に……。

内膳（叱る樣に）。馬、馬鹿なつ……そんな子供じみた心で何うする。此の兄を愛するならば、兄の魂を愛するならば、早く戻つて國若を見てお與れ、さ、早く、早く。

又七郎（澁る澁る又自分の鎧櫃を脊負ひ）。では兄上、さやうなら！　皆樣、さやうなら！　これが生きる又七郎より、死ぬる皆樣への言葉なのか、あゝ。上樣、さやうなら！

貞村、信勝、常陸、昌直、平左衛門（殆ど同時に）。さやうなら！　御機嫌よく！　さやうなら！　さやうなら！　御機嫌よく！

勝頼（稍や離れたまゝ、併し誠の籠つた口調で）。さやうなら！　どうぞ達者でね！

内膳（又七郎の手を取り）、いゝかね、又七郎、お亡くなりになつた御兩親のお心を忘れてはなりませんぞ。國若を賴みますぞ。さやうなら！

（又七郎は皆と別れ、右後方へ下りて行く。内膳をはじめ常陸等默つて見送り居る。日は次第に暮れかゝる。）

麟岳（内膳の傍へ進み寄り）。拙者も貴殿に面目がありません、あの訴訟では、出家のくせに、つい小山田將監の肩を持つたりしまして……。それにしても、斯うして最後のお供に來られた貴殿の心、あゝ、拙者は今までの生涯中、こんなに感じ入つた事はありません……。

貞村。跡を見ては落ち失せる者ばかり多いなかに……。

勝頼。仇に報ゆるに恩を以てするとは其方（そなた）の事だ。（情感的に）、併し、よく來て與れた、よくもそなたは、あゝ、よくもそなたは、此の勝頼を棄てなかつたなあ！

内膳（少し皮肉な微笑を浮べ）。抑角御難儀の上樣を棄ててしまつては、その所謂仇に報ゆるに恩を以てする譯には行きませなんでなあ……。ハハハ。だが、あんまりお褒めに預ると、此の内膳も増長して、今に大に駄々を捏ねますぞ。それよりは、軍さの計劃を伺ひませう。まさか此處で敵をお待受けでもありますまいね？

（あたり次第に暗くなる。）

常陸。小勢で陣どるに屈強な要害と、先年見込みをつけた場所が、此の奥の（左上の方を指差し）天目山の五合目ほどにありますので、彼處で敵を待つのですが、要害よりも何よりも、（感謝に堪へないらしく）貴殿がお一人加はつて下されたので……

平左衛門。百萬の援軍を得たよりも……

昌恒。味方の士氣が、どれほど振ひ立つか分りません、味方の一致團結が、どれほど鞏固になるか知れません。

眞村。此の現世での結合は、よしや今日が最後であらばあれ……。

（と交々感激を述べてゐる間に、舞臺廻る。）

二

（舞臺が廻りやむと、青黒い幕が垂れてゐる。間もなく幽かに或る音樂が始まり、徐々に其の高度が加はる。それは九州の北部地方に昔から傳はつてゐる浮立（ふりう）の樂に似たもので、沈痛と悲壯と悽愴の調子が強く出てゐなければならない。その樂は少くも十分間の繼續を要する。幕の色は樂の音が近く高く聞え來るに連れて次第に明るくなり、赤みを帶び、後には一面燃ゆる樣な眞紅となる。樂終る時は幕の色も亦前の通り青黒くなる。そして程なく幕は撤

失される。

天目山の半腹、山嶺重畳の間に少し平らになつてゐる地點。雲間の月が一寸姿を現はして、遠近の景を照らして見せる。日川の裾は遙か彼方に仄かに光つて見える。月が雲に入ると再び靜寂陰暗の景。篝火が左右に一つづつ焚かれ、その焔の後ろには楯板が一枚づつ立てられて、彼方より見えない樣にしてある。左端後方に武田菱の定紋ある幕を張つた所が半分ほど見えてゐる。十一日の丑寅（今の午前三四時）の刻。

女性を除き、勝頼、信勝以下一同、大きい圓を成して並び、水盃の場。勝頼と信勝、その他二三名は床机に腰かけてゐるが、鎧櫃などを代用してゐる者もあり、岩や木の根にかけてゐる者、全く胡座をかいてゐる者もある。皆甲を着てゐる。小原忠五郎、酌をして廻る）。

勝頼 （一同に向ひ）。さ、これで愈よ今生の別れだ。（盃を干し信勝にさす。そして又一同に）、もう攻上つて來る敵を待つより外には仕事は無い。拙者の代になつてから丁度十年、皆には隨分働いて貰つたなあ。

昌恒。さういふお言葉を戴きますと、我々一同、地にも入り度い位に恥かしうムります。我々の働きも足りなかつたればこそ、斯ういふ非運ともなりましたのに。

勝頼。勇將の下に弱卒なしと云ふが、拙者の樣な愚將の下には、賢臣も空しく朽ちてしまふのさ。あゝ濟まなかつた、濟まなかつた。

平左衞門 （盃を常陸にさしながら）。さういふお言葉を戴くに足るほどの所謂賢臣は、何處にも滅多にゐはしませんが、上樣としてさういふお心にお成り下されました事は、我々に取つて何といふ有難い事でムいませう。

常陸。この有難さ嬉しさは、敵を退け城を落した嬉しさなんぞよりも、秤にかけてもずつとずつと重い目方になります

なあ。

内藤（常陸より受けた盃を干しながら、其場の一般の會話とは別な私事の樣に、平左衛門に）。同じ此國の水を飲んで育つた我々で、詰り血も肉も此の水のお蔭でありますが、もうこれで飲み納めですかね。（雲薄らぎ、月の光朧ろに照る。）

平左衛門。さやう、斯うして一緒に末期の水を飲み合ふ程の親しさは、此世に又と滅多にありますまいて。

眞村（主として勝頼や常陸等に）。なあに、軍さには勝つても、領地は廣く切り取つても、君臣の間にも、士民上下の間にも、本當の親しみや信頼が無く、疑心暗鬼のひまが無い位なら、人間の本當の仕合せは其處には決して有りますまいよ。

常陸。恐らく織田や徳川が後になつて天下を一統したところで、とても上下一同が心から和する事なんぞ、有る氣遣ひがありません。

眞村。表面だけ無事太平を裝つても、各自の缺點も短所も有りの儘に曝け出しての信頼と努力が無い以上、たゞ實力無しの空威張りと、牛馬の樣な屈從とより外に、何が彼等にありますものか。

内藤。どうかすると、却つて無事太平の時代の方が、死に面接する事の尠いだけに、生きてる事に狃れ倦み、何事にも眞劍な考や感じが持てず、學問といふものは兎角臆病者の逃げ場所となり、臭い物に蓋ばかりして、そこから淺間しい悲慘な滑稽のみを生み出し勝ちなものですからね。

平左衛門。それを思ふと我々一同は、今では一種の仕合せを受けてゐるとも云へますね。（空を仰ぎ）、あゝ好い月だ。雲はすつかり霽れたらしい。これも見納めか。むう、好い氣持だ。

晶道（同じく月を仰ぎ）。あゝ、餘りに氣持がよくて、妙に涙さへ出さうになつた。

（勝賴、常陸、內膳等も皆月を仰ぐ。盃は此時足輕等の間に廻されてゐる。空は拭ッた樣に晴れて月光愈よ明るい。一同しんとした氣持になる。）

勝賴（感傷的に急に內膳の手を握り、再三何か云はうとしては自ら抑へ抑へした上で）。おい、內膳、そなたは何と思ふ、拙者の心は妙にしんとなつたが、人間は一體何の爲めに生れて來たものだらう？

內膳。さういふお尋ねならば、あの（と隣所を指差さうとしたが）……いや、あのお方の繩張りは後世安穩の方でしたつけ。さやうでムりますなあ、（一寸考へて）詰り死ぬ爲めでムりませうよ。成るだけ氣持よく死ぬ爲めにさ。

（內膳との會話を、他の者は皆時に或は訝つたり。多少背いたり、又は感心したりしながら、兎も角も深く考へつつ聞きゐる。）

勝賴。さうだとすれば、も、拙者は隨分氣持よく死ねると思ふよ。斯樣に皆と心の底から打解け合ッて話などする樣になれたのだから。あゝ好い氣持だ。心にかゝる雲も無いとは、斯樣な氣持を云ふのだな。

內膳。ではもう上樣は、織田や德川や、乃至小山田出羽以下の叛逆人等に對しても、恨みも憎みも一切合切、さらりと捨ててお居でになりますかね？

勝賴。さあ、それは……正直に云へば、それはまだ然うとは少々云ひかねるて。

內膳。併し彼奴等の襲來も、又內通も裏切りも、もともと上樣のせいではありませんか。

勝賴。（稍や低い聲で）、うむ、さう云はれれば一言も無い。しかし、それも……だから程なく、さらりと捨ててしまふともさ。

内膳（少し進み寄り、次第に苛烈な言葉づかひになる）。さらりと捨てておしまひなさる？——では今一つ申しませう、此の國内の民百姓が、年が年中、筋も立たない戰爭に、穀税血税を絞り取られた揚句のはて、とどの詰りは斯ういふ悲慘な狀態となり、現に卑劣な暴虐な敵軍の爲め、どれ程非道な目に遭うてゐると思召します？　又國民の大部分が長坂跡部を筆頭とした醜類どもを見習つて、我利々々一天張りの氣風を釀し、心の上でも形の上でも、どれ程さもしい慘めな生活をしてゐると思召します？　斯ういふ事をも今、上樣は、さらりと綺麗にお忘れになつて、たゞ御自分お一人だけ、氣持よく死なうと仰せられますかな？

（又雲が少し出て、月の光を弱くする。内膳と勝賴との言葉遣ひが激しくなツたりする都度、足輕等は盃を手にする事を躊躇する）。

勝賴。（憤然と）、だから愚將の勝賴と云ツたでないか。それで、そなたは、拙者を愚弄しにやつて來たのか？

内膳。フン、なる程。或る意味では、愚弄しに參つた事にもなりませうよ。併し、拙者の言葉が愚弄であらうと何であらうと、これで上樣の淺ツぱかな感慨が、幾分でも深くなりさへすれば、それでよいではありませんか。（短い間）、恨みも憎もさらりと棄てる？　フン、詰り上樣が御自分だけの小ぽけな御損をお諦めのお積りだから、そん　淺ツぱかな感慨も出るのです。（短い間）、又、織田徳川や叛逆人等の非道を咎める力が上樣に無くなツたとて、上樣御自身の今迄の惡業は決して消えはしませんよ。實は其の差引が御希望でせうが、そんな　人ぎめの自分勝手な差引きで人間の罪が帳消しになつて、それでさらりと氣持よく、極樂往生といふ譯ですか。（麟岳に）、フン、麟岳殿、貴僧のお畑では如何でムる？（月は又全く雲に隱れ、邊り暗くなる）。

勝賴。（太刀に手をかけ、憤然として身を顫はし）。だから……だから、拙者が行くのは地獄の中さ。地獄の中へ眞逆樣に

落ちて行くのだッ！

内藏。(ハタと自分の膝を打ち)。それです、それです。それでこそ、拙者が胸の溜飲も、ぐいぐい下つて來るのです。(短い間)。いやなに拙者の溜飲はどうにもあれ、他には我等の踏むべき道は斷じて一つもありません。さ、大阿鼻地獄の眞ッ只中へ悦んでお供をしませうや。人間の持つて生れた醜と惡は、其死と共に消え失せるものではありません。だから、小さな悟りや諦めに隱れる弱者ならいざ知らず、さうでなければ自分が持つ其の醜惡と、永劫の奮戰苦鬪を續ける外に道は決して決してありません。

(重苦しい樣な壓倒する樣な間。)

平左衞門(深い溜息をつき、貞村に)。あれが上樣をたゞ愚弄しに來た者の言葉でせうか？ 何だか知らぬが小宮山殿の胸の中に燃えてゐる烈火が、拙者には見える樣な氣持がします。

貞村。そして、所謂小さな悟りや諦めに兎もすれば落ちやうとする我々を、餘人がどうして救つて與れやう。

時賴(再三深い溜息をつく)。

内藏(微笑し)。又もや拙者は偉く褒められてゐる樣ですな。拙者は今日まで上樣を、殊に御勘氣を受けて以來の此の四年が間といふもの、憎んだの憎まないのつて、言葉には盡せませんぞ。それでも拙者を皆樣は、さう褒めそやして與れるのですか？

昌信。そのお憎みも、詰り上樣の爲めを思ふお心からではありませんか。

帶刀。まさか貴殿が上樣を(と太刀を振り翳して斬り殺す手眞似をし)とでもお考へなされた事はあるまいし、ハハハ。

内膳。ハハハ、それしきの事で滿足される位に淺い拙者の憎惡ならよかつたらうが……。

（一同少しの間深い呆氣に取られ居る。又自分等の耳を疑ふ樣な心持もある）。

平左衞門（無理にも何かを排し除ける樣な口調で）。いやいや、何と貴殿が云はれても、如何に貴殿が上樣をお憎みなされても、又武田家をさへお憎みなされても、兎も角わざわざ斯うしてお供に來られた以上、そのお憎みも詮ずる所上樣の爲め、武田家の爲めを思ふお心が本ではありませんか。

貞村。（平左衞門に調子を合せ。）又この國の爲め、此國の士民上下一同の爲め、延いては人間一般を愛するからの憎みではありませんか。

内膳。（稍や氣短かに。）誰の爲めだの何の爲めだのと、さう煩うては御免です。「我」といふものを投げ棄てて斯う馳せ參じた拙者ならば、忠臣とでも義士とでも、幇間とでも賊とでも、せいぜいお褒めなさるがよい。フン、卑屈な……。

常陸。（少し考へて。）では貴殿のその「我」とは、今も矢ツぱり上樣に對し、飽く迄所謂溜飮をお下げになツてゐるといふ事ですか。（短い間）通常我々の溜飮なら、尤も我々はさう甚い胃病患者でもないのだが、憎い相手が弱ツたり死んだりすれば、はやもう夫れだけで充分下ツてしまふのですが、貴殿は御自分の命も其處に投げ出して、寧ろ相手を助けても、一層深い氣味好さを……？（と云ひさして内膳の顔をのぞき込む。）

内膳。（一語一語に力を籠め音を延べて。）斯ういふ氣味好さを味はふ爲めにならば、命も惜しくはなくなりますね。虎穴に入らずんば虎兒を得ずさ、ハハハ（と自己を嘲る樣に鋭く短く笑ふ。）

（一同また沈思。深い溜息をつく者もある。稍や長い間。）

貞村。（溜息をつき獨語。）おう、飽く迄愛する者は飽く迄憎む！　そして其の極は……？

内膳。(揶揄の様に、又眞實の様に。)どなたも何だが大層六かしさうに考へ込むではありませんか。なあに拙者だとて、いや見様によつては拙者こそ、最も素直な從順な一頭の小羊ですよ。先祖代々苦樂を共にし希望を共にして來た人間同志の關係を、誰が抑も斷ち得ませう。幾ら拙者が傲慢不遜な男と見えましても、此の關係だけからは、悲しい哉、のがれる事が出來ませんよ。

信勝、昌恒。(なほ内膳に何やら問ひ度げな顏つきをする。)

内膳。小山田出羽や梅雪齋でも、なる程叛いて主從關係は斷ちましたらうさ。だが此の人間關係を一體どうして斷たれます？　叛逆と云へば當世流には何だか偉さうにも聞えるが、小才を利かして自分を賣り、新規に他い支配者に平伏頓首するのでは、何と貧弱な滑稽なものではありませんか。今に言語に絕した苦しい寂しさを嘗て死にますよ。(間。自己辯解の樣に稍や低く半ば獨語)勝頼公のお身の中にも、我等の先祖が知らず識らずに憧れてゐた或る尊い光を求める心が、何處かにはほんの少しなりとも、屹度あつたに相違ないのだ。だが、どうして何處へそれは隱れてしまツたらう。(間)

勝頼。(溜息をつき。)いま先き常陸や貞村が、織田德川の天下になつても、實力無しの空威張りと、牛馬の樣な屈從とでは、上下の和合は駄目だと云つたが、拙者の治めた甲州は、それが尙一層ひどかつたのだ。そして、さういふ屈從の氣風を養成したのは、實力無しの本尊たる此の勝頼であつたのだ。斯ういふ木偶が滅びずに、世に何が滅びやうぞ。——尊い光を求める心？　フン、拙者のは光は光でも、螢蠅の光みたいな光であつた。そして、それで偉いと威張つてゐた。(間)あゝ。これでは地下の先祖の靈に、我等一同の先祖の靈に、拙者は合はせる顏が無い。たうとう腑甲斐なしの勝頼が、さうして國を誤つたかと思召したら、父上信玄公の魂も(躑岳の方を顧み、その慰めを求め度げに)

浮ばれやう道理が無いて。

内膳。(麟岳が勝頼に何とか氣休めを云はうとするのを遮るべく、進み寄つて勝頼の手を取り、屹とした口調で。)上樣!

勝頼。(内膳の手を握りしめ。)内膳!(間。)

(東の空の端かすかに赤くなりそめる。左後方の幕の内より足輕一名出來り、勝頼の前に跪まづく。)

足輕。(一通の書狀を勝頼に捧げる。)北の方樣よりの御消息でムいます。(左へ退場。)

勝頼、(受取つた書狀を急には開かうともせず。)そろそろ夜明けに近くなつて來た。新らしい日を今一度見るわけだな。

新藏。草木や石や、それから山だの川だのは我々とは違つて、今後も毎日斯うした新らしい美しい日を見て行くのだな。

信勝。かういふ草木にも山川にも我々は別れて、これから暗い寂しい所へ落ちて行くのだ。

麟岳。いへ、いへ、さう暗い所へお行でにはなりません。どうして其樣な――。

小助。でも、これだけで行くのだから、心細くはないや。(と强いて元氣つける樣な心持。)

忠五郎。それでも、斯ういふ山だの川だの、また石でも土くれでも、ようく見て置かなくてはいけないなあ。

右近。早く夜が明けて吳れればよいと思ふのだが――又明けるのが惜しい樣な氣持もする。

勝頼。(右少年達の言葉の終る迄に書狀を讀了り、或る別な感慨を覺えて内膳を見てゐる。)

内膳。(右近の肩に親しげに手をおき、少年達を傷々しげに打眺め、時々顏をそむける。)

平左衞門。(少年達に。)なあに、もつと好い世界へ皆で行くのさ。だがね、此の世をも輕蔑すると悪い所へしか行けない

のだ。だからようく見てお置き、山でも川でも、石ころでも何でも、もう櫻も咲きかけるよ。(右後方を指し)彼處にも一株あつた樣だ、今少し夜が明けるとあれも見える。

勝賴。(內膳に。)おい、內膳、そなたは斯ういふ罪のない少年達が最後の日を迎へる心の中を、ようく察して吳れてゐるね。そして、それならば、尙一層美しい日の光を、尙一層切ない心で見度がつてゐる或る娘の心を察して吳れ。(短い間)そして許して吳れ、あの彌生を許して吳れ。

昌恒。(內膳に對する輕い嫉妬を抑へゐる。)

內膳。(或るショックを覺える。)今にあの彌生殿が御奉公をしてをりますか? ついまだ見かけもしませなんだが。

勝賴。拙者がそなたに合せる顏がなかつた通り、彌生もそれで隱れたのさ。戀慕なんぞといふものを今迄拙者は知りもせず、又卑しんでもゐたのだが、斯ういふ純な切ない願ひを(と書狀を渡し)拙者はもう斥ける事は出來ぬ。今迄に時々內室が何やら拙者に云つた事もあるが、これ程まで彌生は清い苦しみを續けて來てゐたのか。たゞ一言「許す」と云つて吳れさへすれば、それでよいと書いてある。內室がさう書いてゐる。

內膳。(深い溜息をつく。無言。)

勝賴。たゞ其一言で、彌生には又とない美しい最後の一日が來るではないか。しかも幾時と經たずに直ぐ又消え失せる一日ではないか。その光を彌生に見せてやツて吳れ。

足輕。(幕內より出來り、又勝賴の前に跪づく。)北の方樣がお見えでムります。(退場。)

(昌恒、常陸等、座をあける。)

松の方。(靜かに歩み來り、程よい所に腰をかける。)

彌生。（松の方に續いて來る。顏は殆ど少しも羞恥を帶びず、寧ろ冥想三昧に耽つてゐる樣な表情。楚々とした體つきは松の方よりも氣高く見える位ゐ。松の方の少し後に控へる。内膳と視線が會ふ。其時も殆ど羞恥の色を見せず、たゞい、い、はらはらと落淚。）

内膳。（溜息をつくのみ。無言。）

松の方。（勝賴に）。文を差上げましたけれど、ぢかに參ツた方がよいと思ひまして。（内膳に）返辭を聞きに參りました。

内膳。前月末に亡くなりました妻が、今も矢張り拙者の心を占めて居ります。

彌生。（目が昏んだ樣な恰好で倒れやうとし、辛うじて自ら支へる。）

松の方。（悲痛の態。間。）ではたゞ彌生に、名を呼びかけて貰ひませう。せめてそれだけなりとも……。

内膳。（少し考へた後）いや、それは直接にも云ひませう。彌生殿！

彌生。（少し痙攣る樣に肩の邊りを顫はし。）あ、宮山樣！ お懐かしう御坐います！

内膳。（無表情を努めてゐる。無言。）

松の方。まあ、何といふ六ケしい心でせう！

勝賴。（内膳に。）まさかそなたは、四年前の拙者のあの亂暴極まる裁きを今ゐ意地に持つてゐるではあるまいね。拙者には兎もあれ、此の無垢な心の唯一の願ひを、そなたは踩み躙つて、よく何ともないのだね？ 斯ういふ戀慕を、そなたは以前の拙者よりも輕く輕く見くびツてゐるのだね？

内膳。決して輕くなんぞ思ツて居りませんので、それで別に答へ樣がありません。その代りに、彌生殿の心の中は、誰よりも拙者が深く思ひやつてゐる積りであります。

松の方。それであッて其樣に——まあ、何といふ厳めしい心でせう。

彌生。(頷へながら靜かに松の方を促す。)私堪へられませぬ、彼方へ參ります。小宮山樣、さやうなら。皆樣、さやうなら。

内膳。彌生殿、さやうなら。

松の方。(勝頼に會釋して彌生の手を取り憐みいたはりつゝ、共に靜かに左へ退場。)

(一同無言の儘、いたはしげに見送る。)

勝頼。(内膳を疎んずる樣に。)厳めしいばかりが武士の偉い所でもあるまいよ。

内膳。フン、言語道斷な貧苦を拙者と共にして、たうとう一步先きに餓死してしまッたあの妻を、何と云はれやうとも、どうして拙者が裏切りませう。今日は丁度二七日に當ッてゐますて。(一人でそッと合掌する。)

(一同又別な感慨に襲はれ無言。たゞ深い溜息が口々より洩れる。)

勝頼。さう云はれれば、むう、一言もない。さういふ甚い貧苦のどん底へ、其方達を突き落したのは、取りも直さず此の……あゝ拙者は、もう自分の名を口にするのも厭だ。

内膳。なあに、もう過ぎてしまッた事ではありませんか。今では拙者も此の通り、大分もとの體に復してゐます。(少し寂しく笑ひつゝ)掛値のない話が、上方勢の四十や五十なら、今日も一人で蹴散らす事も出來ませうて。

常陸。(内膳に。)どうぞ願ひます。先年の足助城攻めの時のお働き振りを、今日も此處で亦見せて下さい。(微笑しつゝ)拙者の握飯を二つだけ、失禮ながら後で分けて進ぜませうで。

(足輕一名座を立ッて、左右の篝を消す。はや空も大分明るくなッてゐるが、篝の消えた瞬間は、なほ急にそれだ

け暗くなッた事が感じられる。

幕の内より他の足輕一名急ぎ登場。)

足輕。(勝頼と内膳とに向ひ、口疾に。)松の方様より使として参りました。彌生殿は自害をなさいました。(退場。)

内膳。なに、む、自害か。

勝頼。何、彌生が自害した、自害したのだと?(内膳を促し急ぎ行く)さ、來ないか、内膳、そなたも來ないか。

(勝頼、内膳、共に幕の内に入る。一同傷心、無言。殊に昌恒は人々と顔を合せない様に少しそむける。)

鈴岳。(稍やあッて。)扨てもまあ、可哀さうな事をしましたなあ。

平左衛門。どうせ一同も、もう長く生きてはゐないが、松の方様の御自害まで、彌生殿は待ちきれなかッたと見えますなあ。

常陸。此の少年達が待ッてゐる最後の此世の日の光も、彌生殿には苦しい重荷となるばかりであッたのだらう。

(太陽はまだ上らないが、夜はもう殆どすッかり明けはなれる。)

眞村。今さき松の方様と一緒に此處から出て行く時、さやうならと云ッた彌生殿のあの言葉が、あの言ひ振りが、今に拙者の耳には殘ッてゐる。あんなに冷靜にしてゐただけ、あの胸の中の悲しさが、愈よどんなに激しかッたか、思ひやられる。

昌恒。(悲痛を強ひて抑へつゝ、一二度顔をそむけ。)拙者は今まで最も多くお側へ出てゐましたので、彌生殿の事も誰より詳しく知ッてゐますが、あの四年前に小宮山殿と破談になッてからは尙一層、彌生殿の心がけでも氣立でも、それは實に感心なものでしたよ。あゝ本當に惜い娘御だッたになあ。

（遙か遠くの谷の方より、貝の音が聞え來る。間。
勝賴と內膳、幕の方より戻り來る。內膳の歩みは幾らか重い。後ろの山と山との間より、日の光さし初める。邊りの草木も鮮かに匂ひ、露などが映えてきらきらと輝く。）

勝賴（歩いて來ながら時々立止り、內膳を責める樣に。）其方の心はあんまり嚴しい。たゞ一言「許す」と口でいふだけが、今日で二七日のその佛にも、何しに惡い事があるのだ？

內膳。（無言、無表情、たゞ溜息を洩らす。）

（貝の音また聞える。）

勝賴。（座に着いて。）おい、內膳、なぜ答へぬ？　なぜ許すと云はなかツた？　それとも悔いてゐるのか？　あんな心の立派な女に、あんな切ない思をさせて死なした事を、口では云ひ盡せない位に、心の底から悔いてゐるのか？　いや、さうでない、悔いてゐる樣子は少しも見えぬ。でも、そなたは……。

內膳。（溜息をつき）さても、さても。（噛んで含める樣に云ひ聞かせる。）ようムいますかな、上樣、女といふものは、いや女に限らず人間といふものは、その切ない願のきかれる迄が立派な心で、願ひが叶ツた瞬間からは、直ぐ不純な小狡い甘い感傷を混へます。極く僅かにもしろ、それを混へずには置きません。これは實に厭な事ですが、人間といふものが、我々他も、皆かういふものなら仕方がない。（短い間）ところで上樣、今日は總勘定の日でムいますぞ。ね、御合點が參りましたか――。（極度の嚴肅さで）で、あの女は立派な死に方をしましたよ。

勝賴以下一同。（呆然として內膳を暫時見詰め居る。次第に或る重苦しい冥想が一同を襲ふ樣な光景。）

（稍や長い間。何處も一帶に尙一層明るくなる。）

新藏。(ホッとした氣持で山の端を眺め。)夜が明けた。綺麗な日の光だなあ。

右近。(同樣な氣持。)到頭明けてしまツたなあ。

彌五郎。(同。)愈よ最後の日となツたのだ。

小助。(同。)最後の日だから、何とも云へぬ美しさだ。山も川も、草も木も、石ころも……。

勝賴。(再三深い溜息を洩らし、四方の景色など貪る樣に眺め。)拙者が云ひかねてゐる心の中を、少年達はよく自由にすらすらと云ツて吳れるわい。あゝ、國土に對する本當の愛着も、此の勝賴の心には、今となツて始めて斯う切實に湧いて來るのか。いやいや拙者も七八歲の子供の頃には、こんな純な心を持ツてゐた樣な氣持がする。それにしても昨日から今日までの僅かの間に、(一語一語、音を延べて)何といふ種々樣々な思ひを拙者は辿ツたらう!

(間。貝の音次第に近く高く響く。)

一同。(本能的に今更の樣な恐怖を覺え、顏と顏とを一寸見合ツたりするが、それは次第に絕望的な勇氣を孕み來る。谷を見おろして腕を扼する者、太刀を拔いで反りを見る者、それを二三度振ツてみたりする者、弓弦の張りを檢べてみたりする者などがある。)

平左衞門。(卷いてあツた旗を解き、程よい所に確と植てる。旗は勇ましく朝風に飜る。)

內膳。(少年達の傍へ步み行き、片手を新藏の肩にかけ、憐む樣な勵ます樣な表情で、少年達一同をぢツと見る。)さ、いゝかな。

少年達一同。(電氣に感じた樣に身中の勇氣を呼び起され、屹とした目を舉げて內膳に無言の答を與へる。)

常陸。愈よどん詰りの修羅の日だ。(以下一同の語調にも樣子にも、大きく深く抑へつけられた鬱憤の氣が漲る。)

眞村。四百年來、先祖から受け繼いで來た一切の願ひも夢も、今日で愈よフイになるのか。

平左衞門。しかも國内に敵が踏み込んで來てから、まだ十日とも經たずになあ。

昌直。そして、どうせ萬事に上樣と五十歩百歩の織田徳川が、いやさ、今は我々一同より遙かに劣る織田徳川が、したり顏して後を取るのか。

勝頼。(新たな奮激を覺え。)何？　彼奴等に取らせて堪るかッ！

内膳。(にッこり笑ひ)。所で上樣、あの貝の音や鬨の聲を、何とお聞きになりますかね？　敗殘の其方どもが如何にじたばたしやうとも、もう我々の娛みがてらの獲物だぞと、罵り笑ッて攻め上る音ではありませんか。

平左衞門。何？　(つかつかと進んで谷を見おろし、太刀の反りをりんと打たせ)フン、續くわい、續くわい、束にして蹴散らすには、誂へ向きの行列だ。(顧みて一同に)さ、皆樣。又の世で佛の性になる爲めに、慘忍性の有りッたけ、今日で使ッてしまひませうや。

(貝の音なほ高く、鬨の聲も聞え來る。)

眞村。生涯絕へず渦卷き返る愛憎の命の火を、今我々は此の一日で、何の遠慮も惜しみもなく、燃え盡さしてしまへるのだな。こんな愉快が又とあらうか。これは死の顎口のまん前に、一時に斯うして投げ出された我々だけの特權だ。

内膳。なあに、燃えても燃えても燃え盡きない業の烈火を燃やすのさ。今日は最後の修羅の日でない。最初のそれだ、その入口だ。して又もしも大安心の平和が果して我々にも得られる筈であるならば、それは極度に荒れ狂ふ修羅の渦中の外にはない。

(内膳は緩りと大股に歩いて行ッて、木の股に立てかけてあッた大身の槍の鞘を拂ひ、谷を見おろす。その穗先き

に、また平左衛門や昌恒等の槍や太刀の刃に、會ま日の光まぶしいまでにきらりと跳る。）

勝頼。　さやうさ。（折から丁度東の空の横雲が全く斷れ、血の樣な光を射放ちつゝ昇る太陽を指し）平和を齎らす大日輪の、あの燃えさかる戰鬪の姿はどうだ！　殊に今日はどういふ譯か、あんな眞赤な色をして、まるで、今日流される血の海に、先づ豫め醉ッてる樣な火の心！　おう！（と變に深く笑ふ。）

（貝の音愈よ近く、鬨の聲次第に高く、旗差物の先きも鮮かにちらちらと見えそめる。一同、身内より刻々に衝き出やうとする奮躍の氣を、尠からぬ努力で抑へてゐる。――幕靜かに靜かに下る。）（をはり）

リッケルトの歴史哲學

◇八版發賣◇四六版上製函入◇定價金四圓七拾錢◇送料金廿五錢◇

新獨逸の青年をして、眞に蘇生の思ひをなさしめたのは新理想主義哲學だ、ハイデルベルヒの彼の講座は新獨逸の青年のみならず實に世界の碩學が雲集しておる。彼の哲學を我が米田博士が懇切に解說されたのが本書だ。

文學博士
米田庄太郎著

現代 文化人の心理 【拾貳版】

百般の文化的事象、文化的概念を尤も平易に解說した快著、つまり現代文化を研究せんとする人の第一に手にすべき文化哲學の手引のやうな有益な著書だ

定價金貳圓七拾錢
書留送料金拾九錢

東京芝區愛宕下町一ノ一
◇改造社◇
振替東京八四〇二番

七月十日
發行

婦人公論

定價八拾錢
稅二錢五厘

夏季増刊

第二

全部婦人の手によつて書かれし雑誌
男子の有せざる婦人の特質を顯現す

『誇か恥か』號

我國現下の婦人文化の縮寫圖にして
又將來の發展の方向と多望を暗示す

親鸞の信仰表現の絶好書

□東京帝國大學教授 文學博士 高楠順次郎先生著

眞宗の信仰と戲曲「出家と其弟子」

倉田百三氏の戲曲「出家と其弟子」の宗教的内容を批評し、佛教ことに親鸞聖人の淨土眞宗の根本義より、その特殊性を闡明にしたものである。特に佛教が造物主を絶對に承認せざること及び眞宗の信仰に祈りのない事を指摘し、倉田氏がその反對を親鸞聖人に結びつけた不詮索を責めたもの、倉田氏の讀者たると否とに關せず、宗教に志す萬人の必讀書たる嚴正な著述。

四六判上製
定價八十錢
送料六錢

野依秀一著

定價五十錢 送料四錢 菊半截判 新意匠美本

宗教ことに眞宗と社會主義と資本主義

動搖せる思想界に對して、本書の出現は正に絶好の統一指針である。相敵視する社會主義者と宗教家との複雜な關係及二者に介在する資本主義者の立場等、著者は明快にこれを論斷した。即ち縺れを解くことは、その現情を究める必要がある。此意味に於て正に絶大の權威を有す。

□「眞宗の世界」主幹 實業之世界社々長 野依秀一著

定價三圓 送料十八錢

□四六判天金 □箱入上製 □五百八十頁

信仰生活 絶對の慈悲に浴して

人間苦になやむ眞の自己を知る體驗の信仰書

生死、運命を突破して到達せる著者の宗教的心境は、現代宗教界の驚異とされてゐる。本書はその入信の經路を詳述し、更に入信當時の獄中生活と、如來の慈悲を傳へ、人間の實相を痛感した記録書である。即ち著者は主觀的には自由の「生」に生き、これを客觀すれば因緣のまゝなる「生」に生きると告白してゐる。

東京市赤坂區溜池町二ノ十號 大日本眞宗宣傳協會 振替東京五九三二七

◉定價 金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾四錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓貳拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓四拾八錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊は各倍册に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾七圓六拾八錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

◉本號特價金一圓六拾錢　郵税金四錢

一誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十一年七月十四日印刷納本
大正十一年七月十五日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木國三

發行所　東京市本鄉區本鄉三丁目六番地
中央公論社
電話 國小石川一四四
電信略號 コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す